

福島県文化財調査報告書第109集

# 東北新幹線関連遺跡発掘調査報告 VI

御山千軒遺跡

昭和58年 3月

福島県教育委員会  
日本国有鉄道

# 東北新幹線関連遺跡発掘調査報告 VI

御山千軒遺跡

福島県教育委員会  
日本国有鉄道



湿地性遺物包含層出土木製品

1. 容 器 2. 形 代

## 序 文

東北新幹線建設に伴う埋蔵文化財の調査は、日本国有鉄道との覚書に基づき、昭和46年に着手し、発掘終了まで8年間、引き続き調査報告書作成に4年間の年月を要しました。このほど、第6巻の本書をもって、事業のすべてを終了するはこびとなりました。

本事業は白河市より国見町にいたる15市町村が関係する大事業であり、当初1km幅の想定路線内には、100ヶ所を超える遺跡が確認されました。協議の結果、文化遺産を残す方針に基づき、大部分の遺跡を計画路線からはずすことになりました。やむを得ず路線にかかる遺跡は29ヶ所となり、試掘調査の結果、21遺跡について発掘調査による記録保存の措置が図られました。

その後、新発見された3遺跡についても発掘調査に加え、このうち22遺跡について本報告書を作成することとなりました。ここに報告する「御山千軒遺跡」は、奈良時代から平安時代にかけての集落跡であり、湿地帯出土の大量の木製品は、中に祭祀関係の遺物を含み、全国的に注目を集めつつあります。

本書が記録保存資料のみでなく、文化財保護、学術研究の資料として、広く活用いただけるようお願いする次第であります。

最後に、本事業にご協力いただきました各関係機関、また調査に従事された各位に深く感謝の意を表するものであります。

昭和57年10月19日

福島県教育委員会

教育長 邊見 栄之助

## 例 言

1. 本報告書は日本国有鉄道の委託による東北新幹線関連遺跡発掘調査報告の一部である。
2. 本報告書は東北新幹線関連遺跡発掘調査報告書第6分冊として昭和52年度に発掘調査を行った御山千軒遺跡の報告書である。
3. 発掘調査は福島県教育庁文化課が担当した。
4. 発掘調査協力者、協力機関は調査要項の通りである。
5. 本報告書は事実記載を中心とし、原則として研究的論考は記載しないものとする。
6. 本報告書と東北新幹線関連遺跡調査略報との間に違いがある場合は、本報告書をもって正式のものとする。
7. 周辺地形図は国土地理院発行の5万分の1の地形図「福島」を用いた。
8. 周辺遺跡の番号については、全国遺跡地図《福島県》(1974)を用いた。
9. 航空写真は昭和44年国土地理院、昭和45年日本国有鉄道が撮影したものをを用いた。
10. 遺構・遺物の実測図・拓影は次の縮尺を基本とした。  
遺構： $\frac{1}{60}$  拓影： $\frac{1}{2}$  土器： $\frac{1}{2}$  石器・石製品・土製品・鉄製品： $\frac{1}{2}$  木製品：器種毎に統一
11. 本報告書に使用したスクリーントーンは凡例による。
12. 本報告書作成にあたっては文化課内で討議を行い、中心となった執筆者は分担の終わりに名前を記した。
13. 木製品の一部は奈良元興寺研究所において保存処理中であり、当該遺物の写真も同研究所にて撮影されたものである。
14. 赤外線写真は東北歴史資料館にて、赤外線テレビから撮影されたものである。
15. 遺物の整理・実測は各執筆者の指導のもと文化課分室で室員が行った。
16. 発掘調査、報告書作成には次のメンバーが担当者、調査員として参加した。  
鈴木 啓(専門文化財主査 46～49年) 渡辺 一雄(専門文化財主査 47～50年 56年～) 目黒 吉明(文化財主査 48～52年) 菅原 文也(専門文化財主査 51～54年) 横山 英介(文化財主事 47年) 生江 芳徳(文化財主査 51～53年) 木本 元治(文化財主査 48年～) 日下部善己(文化財主事 52～53年) 長尾 修(嘱託 48～49年) 佐藤まき子(嘱託 47～49年) 寺島 文隆(嘱託 48～53年) 野崎 準(嘱託 48～49年) 高倉 敏明(嘱託 48～53年) 佐藤 満夫(嘱託 48年) 大越 忠士(嘱託 48年) 八巻 一夫(嘱託 48～52年) 吉田 幸一(嘱託 49～50年) 大越 道正(嘱託 49～51年) 芦名 守道(嘱託 49～52年) 中山 晋(嘱託 49～50年) 志賀 豊徳(嘱託 49～51年) 木村 浩二(嘱託 49～53年) 篠原 信彦(嘱託 49～53年) 鈴木 實夫(嘱託 49～53年) 橋本 博幸(嘱託 49～53年) 渡辺由美子(嘱託 49年) 木庭 文子(嘱託 50～52年) 渡辺 昌宏(嘱託 51年) 根本 信孝(嘱託 51～52年) 今野 郁子(嘱託 53年) 高橋 信一(嘱託 54年) 鈴鹿八重子(嘱託 54年～) 高橋 典子(嘱託 54～55年) 菅野 順子(嘱託 55年) 鈴木 文雄(嘱託 55年) 長嶋 雄一(嘱託 55年) 石井 宏幸(嘱託 55年) 廣岡 敏(嘱託 56年) 氏家 浩子(嘱託 56年～) 穴戸美智子(嘱託 56年～) 佐藤 友之(嘱託 57年～) 森 幸彦(嘱託 57年～)

17. 遺物整理には次のメンバーが参加した。

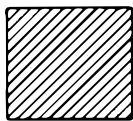
鈴木 美一	北館 和子	木村ヨネ子	渋川 裕子	佐々木直子	大橋 悦子	松田 幸子
橋本 智子	大内 静子	平栗 ノブ	大沢由紀子	菅野はつ子	菅野 順子	佐々木朝子
藤原由佳子	佐藤ゆみ子	二階堂寿子	永山きくよ	長野 ミイ	八城 敏子	渡辺 泰子
斎藤 幸子	明石 米子	鈴木 絹子	宮崎 宗子	久能 令子	有我志津子	嶋原 由恵
小原カツヨ	小原 幸子	永倉 静子	永倉美恵子	平野 ハル	近藤 芳子	桜井 富美
橋本 純子	大橋 圭子	叶 敦子	紺野 光枝	佐藤 恭子	渡辺 祥子	菅野 靖子
志賀 憲一	市川佐知子	阿部 孝子	小島 珠	紺野 朋子	安藤富美子	吉沢ふみ子
半沢 芳子	山家 立子	佐藤百合子	桜木 真理	斎藤 由江	橋本久美子	羽田 睦
石川登美子	伊藤 明美	清水 邦子	藪内 栄子	菅野真由美	児玉真知子	伊藤 登茂
福地真由美	芳賀 昌子	佐藤 康子	菅野美津枝	志賀 恵	渡辺 明子	鈴木美智子
鈴木 祐子	長谷部文子	山内 恵子	田村智恵子	工藤 貴行	佐藤 裕之	橋本 恭一
内藤 弘美	芳賀 修	安斎 智江	菅野 尚子	堺 厚子	高久 由美	亀岡 早苗
大河原正之	工藤 秀行	後藤 好子	早尾 公一	山本 衛	唯木 常晴	川口 逸子

18. 調査及び遺物の整理について次の方々協力と助言を得た。

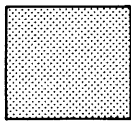
秋山 政一	足立 登	安藤 紫香	伊東 信雄	伊藤 玄三	梅宮 茂	大竹 憲治
小林 清二	佐々木長生	庄内 昭男	須藤 隆	成田 敏	平野高三郎	深沢 栄吾
山崎 秀二	渡辺 誠	今井二三夫	柴田陽二郎	島崎 東	小田野哲憲	長谷川善和

滋賀県守山市教育委員会 宮城県教育委員会 山形県教育委員会 岩手県盛岡市教育委員会 岩手県水沢市教育委員会 岡山県教育委員会 福島市教育委員会 田島町教育委員会 南郷村教育委員会 桜枝岐村教育委員会 山都町教育委員会 湯川村教育委員会 国立歴史民俗博物館 東京都青梅市郷土博物館 山形県立博物館 東北歴史資料館 宮城県多賀城跡調査研究所 会津民俗資料館 奥会津地方民俗資料館 福島市資料展示室 福島市民家園 (財)福島県文化センター歴史資料課・遺跡調査課

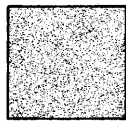
スクリーンパターン凡例



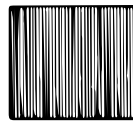
地 山



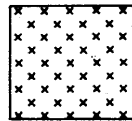
焼 土



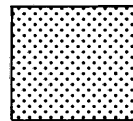
木 炭



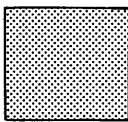
貼 り 床



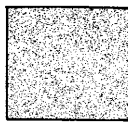
カマド断面図



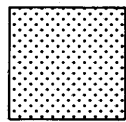
柱 痕



黒色処理



木製品焼痕



木製品漆塗

# 緒 言

## 調査に至る経過

- 昭和46年1月26日 国鉄盛岡工務局と東北新幹線工事に関する文化財保存について協議。
- 4月 遺跡分布図、遺跡カードを提出し保存を検討。  
史跡・重要遺跡の目録を提示し、予定路線から除外を要請。
- 6月1日 仙台新幹線工事局長より公文書で県教育委員会に調査協力要請。
- 6月15日 東北新幹線建設推進本部会議。
- 6月28日 福島・宮城・岩手3県東北新幹線遺跡対策打ち合わせ会。
- 9月28日 想定路線1km幅分布調査開始。
- 10月18日 関係市町村東北新幹線埋蔵文化財保存対策打ち合わせ会。
- 10月22日～11月27日 東北新幹線用地内埋蔵文化財所在調査。
- 12月8日～昭和47年2月17日 東北新幹線用地内埋蔵文化財試掘調査。
- 昭和47年2月1日 福島・宮城・岩手・青森4県東北新幹線遺跡対策打ち合わせ。
- 5月25日 東北4県東北新幹線遺跡対策打ち合わせ会要望事項に対し、仙台新幹線工務局より回答。
- 8月29日 仙台新幹線工務局福島工務事務所長より公文書で全区間の調査依頼。
- 昭和47年9月20日 昭和47年調査に関し委託契約を締結。

## 調査経過

### 昭和47年度

昭和47年10月30日～12月4日 徳定A遺跡発掘調査。

### 昭和48年度

- 昭和48年5月28日～6月3日 古屋敷遺跡第1次発掘調査，9月3日～9月21日 同第2次。
- 6月6日～7月6日 赤坂裏遺跡第1次発掘調査，9月3日～9月7日 同第2次。
- 7月3日～8月8日 道南遺跡第1次発掘調査。
- 8月1日～8月5日 御前遺跡発掘調査。
- 10月1日～10月24日 治部池横穴群第1次発掘調査，12月6日～12月26日 同第2次。
- 10月8日～11月15日 泉川遺跡発掘調査。
- 11月14日～12月5日 岩淵境遺跡第1次発掘調査，昭和49年1月28日～2月8日 同第2次。
- 11月19日～12月12日 皆屋敷遺跡第1次発掘調査。

#### 昭和49年度

- 昭和49年4月15日～5月10日 道場遺跡発掘調査。
- 昭和49年4月15日～5月31日 鳴神遺跡第1次発掘調査，6月10日～7月26日 同第2次，  
8月5日～9月27日 同第3次，10月14日～12月13日 同第2次。
- 6月10日～7月26日 道南遺跡第2次発掘調査。
- 8月19日～8月23日 原山遺跡発掘調査，見るべき遺構・遺物検出されず。
- 8月19日～8月30日 広谷原遺跡発掘調査，見るべき遺構・遺物検出されず。
- 9月9日～9月13日 三合谷地遺跡試掘調査。
- 9月9日～12月6日 徳定B遺跡第1次発掘調査。
- 11月11日～12月13日 矢ノ戸遺跡第1次発掘調査。

#### 昭和50年度

- 昭和50年4月9日～6月6日 鳴神遺跡第5次発掘調査。
- 4月9日～6月20日 徳定B遺跡第2次発掘調査。8月18日～12月19日 同第3次。
- 6月18日～10月9日 柿内戸遺跡第1次発掘調査。
- 6月23日～8月29日 皆屋敷遺跡第2次発掘調査。
- 9月22日～12月12日 梅沢館遺跡発掘調査。
- 10月20日～12月25日 矢ノ戸遺跡第2次発掘調査。

#### 昭和51年度

- 昭和51年4月12日～11月19日 矢ノ戸遺跡第3次発掘調査。
- 4月12日～6月18日 孫六橋遺跡発掘調査。
- 6月14日～10月15日 柿内戸遺跡第2次発掘調査。
- 6月23日～7月21日 三合谷地遺跡発掘調査。
- 11月24日～12月15日 道南遺跡第3次発掘調査。

#### 昭和52年度

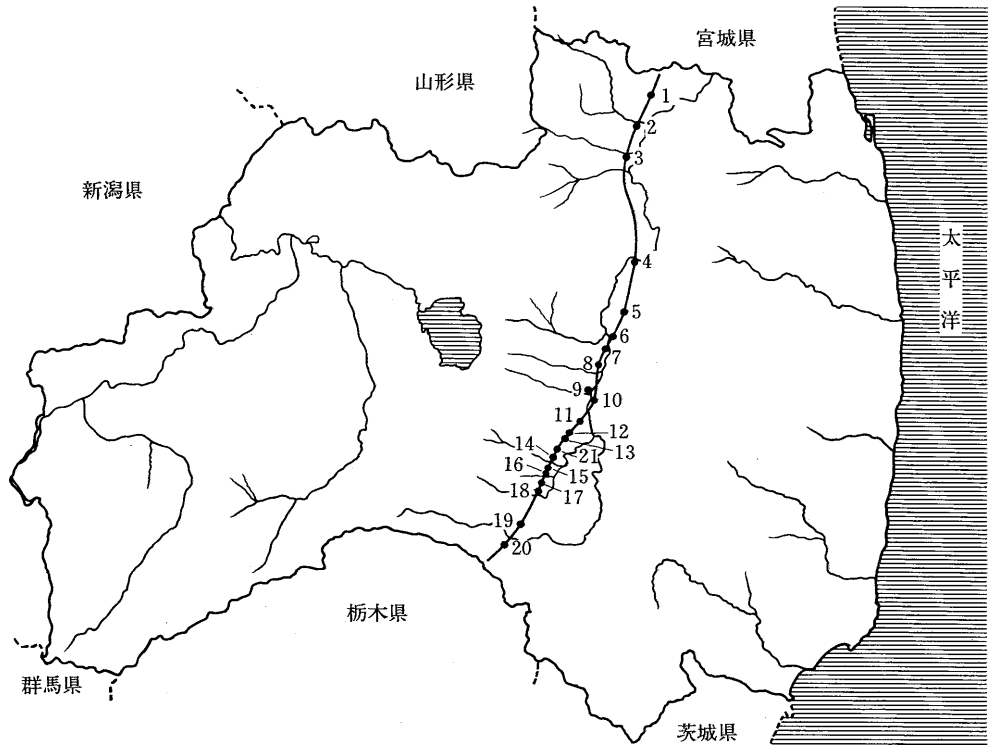
- 昭和52年4月18日～11月30日 柿内戸遺跡第3次発掘調査。
- 4月18日～12月23日 御山千軒遺跡発掘調査。

#### 昭和53年度

- 昭和53年4月17日～6月14日 初山遺跡発掘調査。御所館遺跡発掘調査。
- 4月17日～8月17日 二本木遺跡発掘調査。
- 6月15日～7月4日 里内遺跡発掘調査，見るべき遺構・遺物検出されず。

以上の経過で東北新幹線関係遺跡の発掘調査を行ったが，その位置の概要，周辺の地形は次の図で一括表示した。

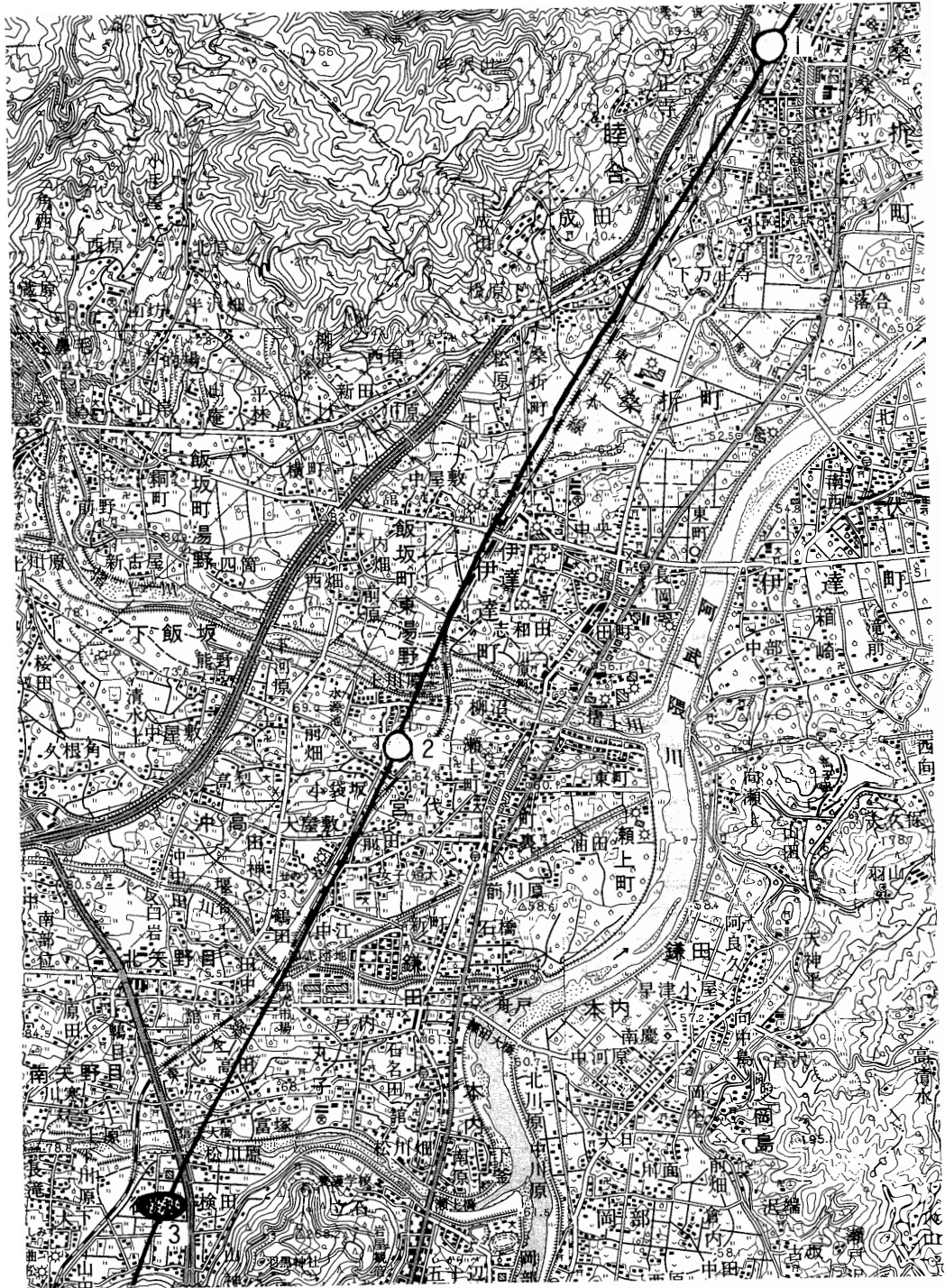




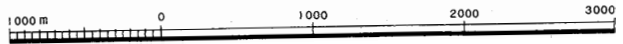
福島県内東北新幹線関連遺跡

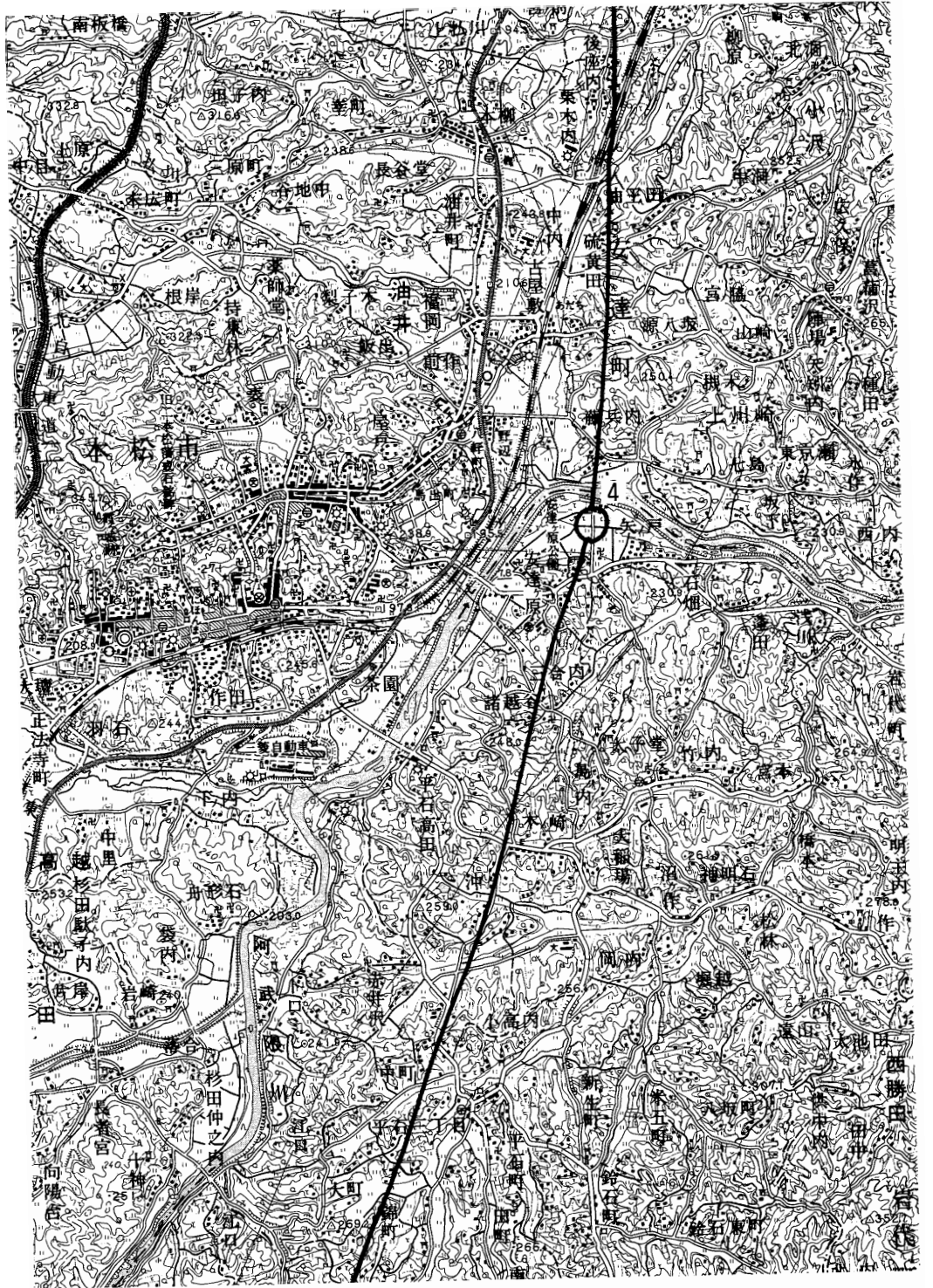
福島県内東北新幹線関連遺跡一覧表

番号	遺跡名	遺跡番号	巻・篇号	番号	遺跡名	遺跡番号	巻・篇号
1	二本木遺跡	2-40	2-8	12	御所館遺跡	30-484	2-1
2	孫六橋遺跡	7-40	2-7	13	靱山遺跡	30-62	2-1
3	御山千軒遺跡	7-232	6 (本巻)	14	岩淵境遺跡	30-329	1-7
4	矢ノ戸遺跡	13-47	4-1	15	古屋敷遺跡	30-351	1-6
5	御前遺跡	13-233	2-6	16	三合谷地遺跡		1-5
6	皆屋敷遺跡		2-5	17	芹沢遺跡	30-365	1-4
7	梅沢館跡		2-4	18	赤坂裏遺跡	30-369	1-3
8	鳴神・柿内戸遺跡	22-100・101	5	19	泉川遺跡	37-18	1-2
9	道場遺跡		2-3	20	道南遺跡	37-109	1-1
10	徳定遺跡		3	21	小屋館跡	30-485	4-2
11	治部池横穴群	30-44・45	1-8				



1. 二本木遺跡
2. 孫六橋遺跡
3. 御山千軒遺跡

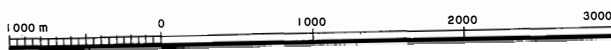


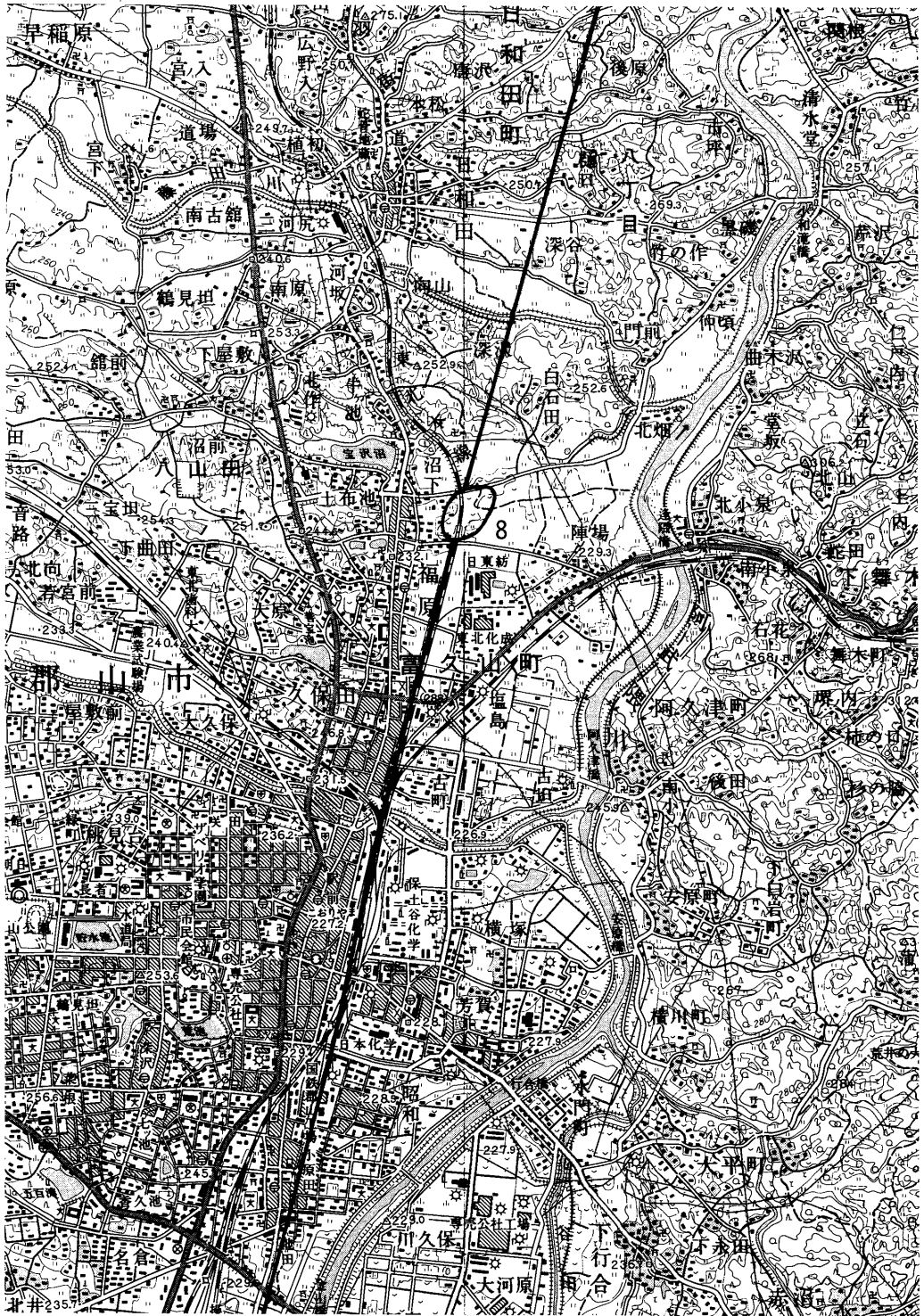


4. 矢の戸遺跡

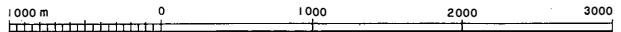


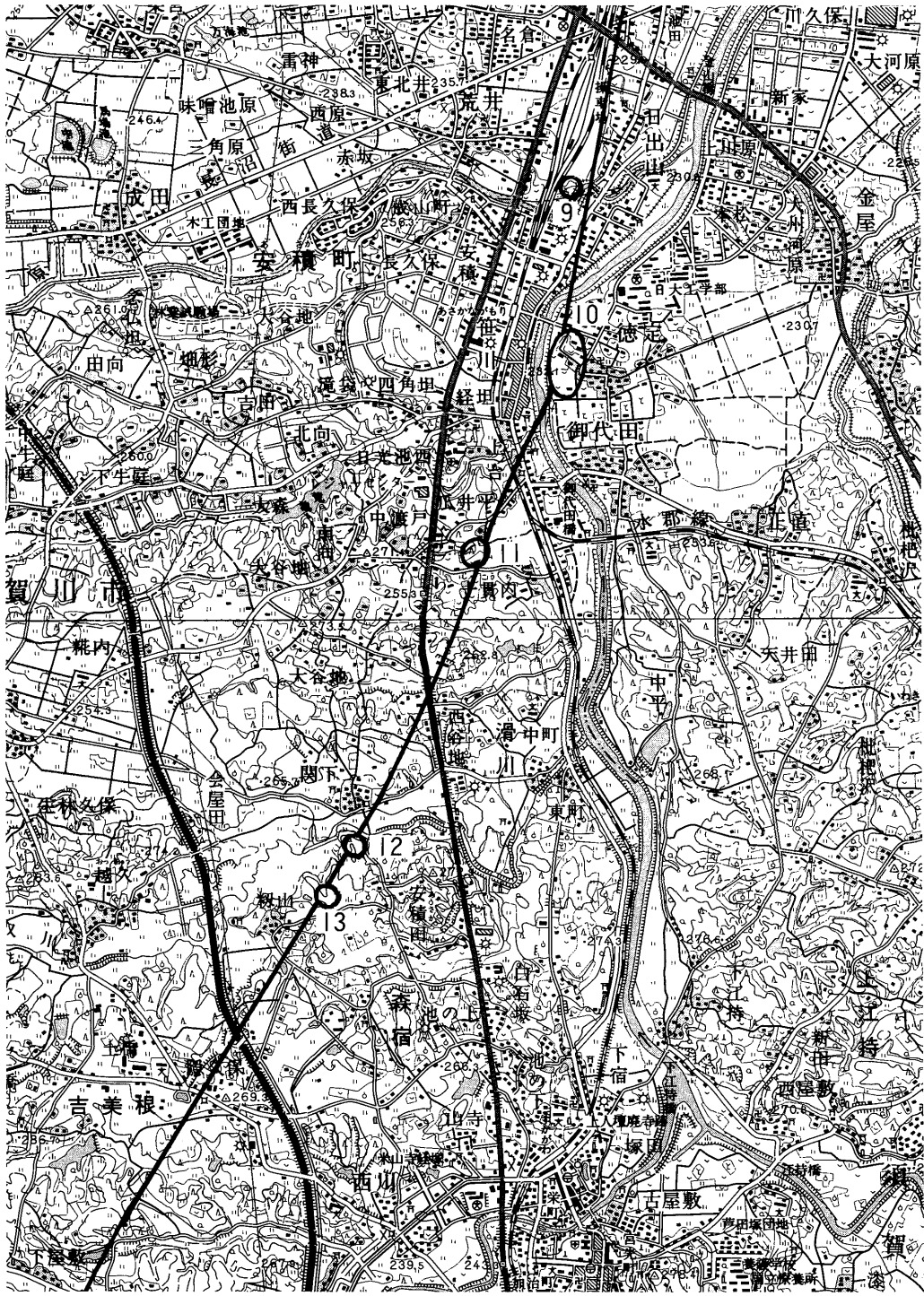
- 5. 御前遺跡
- 6. 皆屋敷遺跡
- 7. 梅沢館跡



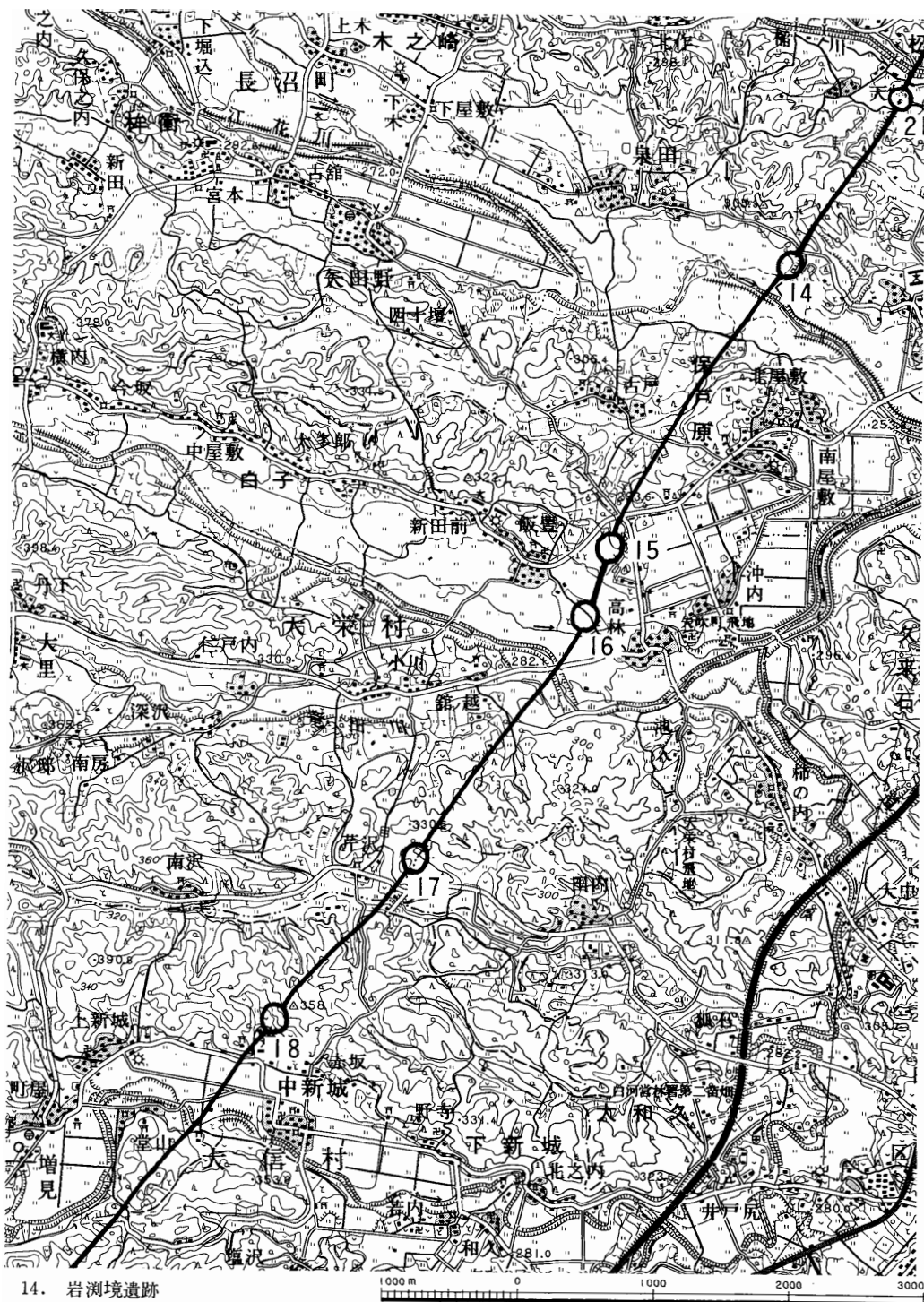


8. 鳴神・柿内戸遺跡





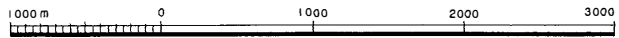
9. 道場遺跡 10. 徳定遺跡  
 11. 治部池横穴群 12. 御所館遺跡 13. 柶山遺跡



- 14. 岩瀨境遺跡
- 15. 古屋敷遺跡
- 16. 三合谷地遺跡
- 17. 芹沢遺跡
- 18. 赤坂裏遺跡
- 21. 小屋館遺跡



19. 泉川遺跡 20. 道南遺跡





# 目 次

第1章 遺跡と環境	1
第1節 自然的環境	1
第2節 歴史的環境	2
第2章 調査経過	7
第1節 調査に至る経過	7
第2節 調査日誌	7
第3節 出土土器分類基準	8
第3章 遺構と遺物	14
第1節 住居跡	14
第2節 掘立柱建物跡	94
第3節 ピット	100
第4節 溝跡	108
第5節 井戸	113
第6節 不明遺構	121
第7節 湿地性遺物包含層出土遺物	127
1. 土器	128
2. 石器	167
3. 木製品	167
4. 動物遺体	222
第8節 遺構外出土遺物	246
第4章 考察	260
第1節 土器	260
第2節 鉄斧について	276
第3節 住居跡	277
第4節 掘立柱建物跡	282
第5節 ピット	283
第6節 溝跡	284
第7節 井戸跡	285
第8節 木製品(曲物・紡織具・祭祀具)	289
第9節 まとめ	311

## 挿 図 目 次

- |        |                       |        |                    |
|--------|-----------------------|--------|--------------------|
| 第 1 図  | 御山千軒遺跡とその周辺地域の地質・地形図  | 第 43 図 | 第 13 号住居跡出土遺物      |
| 第 2 図  | 歴史的環境地図               | 第 44 図 | 第 13 号住居跡出土遺物      |
| 第 3 図  | 御山千軒遺跡グリット配置図         | 第 45 図 | 第 14 号住居跡          |
| 第 4 図  | 御山千軒遺跡遺構全測図           | 第 46 図 | 第 14 号住居跡カマド       |
| 第 5 図  | 御山千軒遺跡Ⅱ区Eライン西壁基本土層図   | 第 47 図 | 第 14 号住居跡出土遺物      |
| 第 6 図  | 非ロクロ杯分類               | 第 48 図 | 第 15 号住居跡          |
| 第 7 図  | 碗分類                   | 第 49 図 | 第 15 号住居跡カマド       |
| 第 8 図  | 鉢分類                   | 第 50 図 | 第 15 号住居跡出土遺物      |
| 第 9 図  | 甕・小形甕の器高と口径の比較        | 第 51 図 | 第 16 号住居跡          |
| 第 10 図 | 非ロクロ甕分類               | 第 52 図 | 第 16 号住居跡出土遺物      |
| 第 11 図 | 小形甕分類                 | 第 53 図 | 第 17 号住居跡内ピットセクション |
| 第 12 図 | ロクロ甕分類                | 第 54 図 | 第 17 号住居跡          |
| 第 13 図 | 第 1 号住居跡              | 第 55 図 | 第 17 号住居跡出土遺物      |
| 第 14 図 | 第 1 号住居跡出土遺物          | 第 56 図 | 第 17 号住居跡出土遺物      |
| 第 15 図 | 第 2 号住居跡平面図及びピットセクション | 第 57 図 | 第 18 号住居跡          |
| 第 16 図 | 第 2 a 号住居跡カマド         | 第 58 図 | 第 18 号住居跡出土遺物      |
| 第 17 図 | 第 2 b 号住居跡カマド         | 第 59 図 | 第 19 号住居跡          |
| 第 18 図 | 第 2 a 号住居跡出土遺物        | 第 60 図 | 第 19 号住居跡出土遺物      |
| 第 19 図 | 第 2 a 号住居跡出土遺物        | 第 61 図 | 第 21 号住居跡          |
| 第 20 図 | 第 2 b 号住居跡出土遺物        | 第 62 図 | 第 21 号住居跡カマド       |
| 第 21 図 | 第 2 b 号住居跡出土遺物        | 第 63 図 | 第 21 号住居跡出土遺物      |
| 第 22 図 | 第 3 号住居跡              | 第 64 図 | 第 22 号住居跡          |
| 第 23 図 | 第 3 号住居跡出土遺物          | 第 65 図 | 第 22 号住居跡出土遺物      |
| 第 24 図 | 第 4 号住居跡              | 第 66 図 | 第 24・30 号住居跡       |
| 第 25 図 | 第 5 号住居跡              | 第 67 図 | 第 25 号住居跡          |
| 第 26 図 | 第 5 号住居跡出土遺物          | 第 68 図 | 第 26 号住居跡          |
| 第 27 図 | 第 8 号住居跡              | 第 69 図 | 第 26 号住居跡出土遺物      |
| 第 28 図 | 第 8 号住居跡カマド           | 第 70 図 | 第 27 号住居跡          |
| 第 29 図 | 第 8 号住居跡出土遺物          | 第 71 図 | 第 27 号住居跡カマド       |
| 第 30 図 | 第 9 号住居跡              | 第 72 図 | 第 27 号住居跡カマド       |
| 第 31 図 | 第 9 号住居跡出土遺物          | 第 73 図 | 第 28 号住居跡          |
| 第 32 図 | 第 9 号住居跡出土遺物          | 第 74 図 | 第 28 号住居跡カマド       |
| 第 33 図 | 第 10 号住居跡             | 第 75 図 | 第 29 号住居跡          |
| 第 34 図 | 第 10 号住居跡カマド          | 第 76 図 | 第 30 号住居跡出土遺物      |
| 第 35 図 | 第 10 号住居跡出土遺物         | 第 77 図 | 第 1 号掘立柱建物跡        |
| 第 36 図 | 第 10 号住居跡出土遺物         | 第 78 図 | 第 2 号掘立柱建物跡        |
| 第 37 図 | 第 10 号住居跡出土遺物         | 第 79 図 | 第 3 号掘立柱建物跡        |
| 第 38 図 | 第 11 号住居跡             | 第 80 図 | 第 5・6 号掘立柱建物跡      |
| 第 39 図 | 第 11 号住居跡カマド          | 第 81 図 | 第 1 号ピット           |
| 第 40 図 | 第 11 号住居跡出土遺物         | 第 82 図 | 第 1 号ピット出土遺物       |
| 第 41 図 | 第 11 号住居跡出土遺物         | 第 83 図 | 第 6 号ピット           |
| 第 42 図 | 第 13 号住居跡             | 第 84 図 | 第 6 号ピット出土遺物       |
|        |                       | 第 85 図 | 第 27 号ピット          |
|        |                       | 第 86 図 | 第 29 号ピット          |

- 第 87 図 第 31 号ピット  
 第 88 図 第 31 号ピット出土遺物  
 第 89 図 第 35 号ピット  
 第 90 図 第 35 号ピット出土遺物  
 第 91 図 第 39 号ピット  
 第 92 図 第 39 号ピット出土遺物  
 第 93 図 第 47 号ピット  
 第 94 図 第 47 号ピット出土遺物  
 第 95 図 第 1・2・3・4 号溝跡  
 第 96 図 第 2 号溝跡出土遺物  
 第 97 図 第 5 号溝跡  
 第 98 図 第 6・7・8・9 号溝跡  
 第 99 図 第 5・6・7・8・9 号溝跡セクション  
 第 100 図 井戸跡  
 第 101 図 井戸枠板  
 第 102 図 井戸枠板・杭  
 第 103 図 井戸枠板・杭  
 第 104 図 井戸跡出土土器  
 第 105 図 第 1 号不明遺構  
 第 106 図 第 1 号不明遺構出土遺物  
 第 107 図 第 2 号不明遺構  
 第 108 図 第 2 号不明遺構出土遺物  
 第 109 図 第 2 号不明遺構出土遺物  
 第 110 図 第 3 号不明遺構  
 第 111 図 第 3 号不明遺構出土遺物  
 第 112 図 第 4 号不明遺構  
 第 113 図 第 5 号不明遺構  
 第 114 図 第 6 号不明遺構  
 第 115 図 湿地性遺物包含層セクション  
 第 116 図 杯計測部位一覧  
 第 117 図 湿地性遺物包含層 L-V 出土土器  
 第 118 図 湿地性遺物包含層 L-V 出土土器  
 第 119 図 湿地性遺物包含層 L-VI 出土土器  
 第 120 図 湿地性遺物包含層 L-VII 出土土器  
 第 121 図 湿地性遺物包含層 L-VII 出土土器  
 第 122 図 湿地性遺物包含層 L-VII 出土土器  
 第 123 図 湿地性遺物包含層 L-VII 出土土器  
 第 124 図 湿地性遺物包含層 L-VII 出土土器  
 第 125 図 湿地性遺物包含層 L-VIII 出土土器  
 第 126 図 湿地性遺物包含層 L-VIII 出土土器  
 第 127 図 湿地性遺物包含層 L-VIII 出土土器  
 第 128 図 湿地性遺物包含層 L-VIII 出土土器  
 第 129 図 湿地性遺物包含層 L-VIII 出土土器  
 第 130 図 湿地性遺物包含層 L-VIII 出土土器  
 第 131 図 湿地性遺物包含層 L-IX 出土土器  
 第 132 図 湿地性遺物包含層 L-IX 出土土器  
 第 133 図 湿地性遺物包含層 L-IX 出土土器  
 第 134 図 湿地性遺物包含層 L-IX 出土土器  
 第 135 図 湿地性遺物包含層 L-IX 出土土器  
 第 136 図 湿地性遺物包含層 L-X 出土土器  
 第 137 図 L-V~IX 出土ロクロ土師器杯  $b_a$  分布  
 第 138 図 L-V~IX 出土ロクロ土師器杯  $b_a$  分布  
 第 139 図 L-V~IX 出土ロクロ土師器杯  $\beta_a$  分布  
 第 140 図 L-V~IX 出土ロクロ土師器杯形態分布  
 第 141 図 L-V~IX 出土須恵器杯  $b_a$  分布  
 第 142 図 L-V~IX 出土須恵器杯  $b_a$  分布  
 第 143 図 L-V~IX 出土須恵器杯  $\beta_a$  分布  
 第 144 図 L-V~IX 出土須恵器杯形態分布  
 第 145 図 湿地性遺物包含層出土遺物  
 第 146 図 湿地性遺物包含層 L-VII~VIII 平面図  
 第 147 図 湿地性遺物包含層 L-VIII 平面図  
 第 148 図 湿地性遺物包含層 L-VIII~IX 平面図  
 第 149 図 湿地性遺物包含層 L-IX~X 平面図  
 第 150 図 木地椀木取法  
 第 151 図 椀・盤の底径・器高  
 第 152 図 湿地性遺物包含層出土木製品  
 第 153 図 湿地性遺物包含層出土木製品  
 第 154 図 湿地性遺物包含層出土木製品  
 第 155 図 湿地性遺物包含層出土木製品  
 第 156 図 湿地性遺物包含層出土木製品  
 第 157 図 曲物縫じ合わせ法  
 第 158 図 湿地性遺物包含層出土木製品  
 第 159 図 湿地性遺物包含層出土木製品  
 第 160 図 湿地性遺物包含層出土木製品  
 第 161 図 湿地性遺物包含層出土木製品  
 第 162 図 湿地性遺物包含層出土木製品  
 第 163 図 湿地性遺物包含層出土木製品  
 第 164 図 湿地性遺物包含層出土木製品  
 第 165 図 湿地性遺物包含層出土木製品  
 第 166 図 湿地性遺物包含層出土木製品  
 第 167 図 側板の「当たり」と「刻み」の有無の割合  
 第 168 図 木製錘の諸形態  
 第 169 図 湿地性遺物包含層出土木製品  
 第 170 図 縦斧装着法  
 第 171 図 湿地性遺物包含層出土木製品  
 第 172 図 たも  
 第 173 図 湿地性遺物包含層出土木製品  
 第 174 図 紡錘の復元  
 第 175 図 機織具の復元  
 第 176 図 湿地性遺物包含層出土木製品  
 第 177 図 櫛の断面形  
 第 178 図 湿地性遺物包含層出土木製品  
 第 179 図 湿地性遺物包含層出土木製品  
 第 180 図 他遺跡出土刀形類似木製品

- 第181 図 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第182 図 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第183 図 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第184 図 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第185 図 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第186 図 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第187 図 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第188 図 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第189 図 G-27, L-Ⅲ出土馬歯
- 第190 図 遺構外出土遺物
- 第191 図 遺構外出土遺物
- 第192 図 遺構外出土遺物
- 第193 図 遺構外出土遺物
- 第194 図 遺構外出土遺物
- 第195 図 層位別ロクロ土師器杯口径・底径分布
- 第196 図 類形別ロクロ土師器杯・口径・底径分布
- 第197 図 類形別ロクロ土師器杯 $b_a$ 分布
- 第198 図 類形別ロクロ土師器杯 $b_a$ 分布
- 第199 図 ロクロ土師器杯 $\beta/\alpha$ 分布
- 第200 図 ロクロ土師器杯 $b_a \cdot h_a$ 類形分布
- 第201 図 類形別須恵器杯 $b_a$ 分布

- 第202 図 類形別須恵器杯 $\beta/\alpha$ 分布
- 第203 図 須恵器杯 $\beta/\alpha$ 分布
- 第204 図 鉄斧参考例
- 第205 図 住居跡の床面積比較
- 第206 図 住居跡プラン規模の比較
- 第207 図 住居跡軸線方向
- 第208 図 時期別住居跡分布
- 第209 図 県内古代・中世井戸の大きさ一覧
- 第210 図 木材井戸枠模式図
- 第211 図 北田城跡出土曲物井戸
- 第212 図 曲物蓋・底板の底径と厚み
- 第213 図 曲物側板の厚み
- 第214 図 曲物側板の器高
- 第215 図 各遺跡出土木製紡錘
- 第216 図 各遺跡出土木製紡錘
- 第217 図 上野国勢多郡南橋村大字上細井稻荷山古墳出土の石製模造品
- 第218 図 各遺跡出土機織具
- 第219 図 各遺跡出土機織具
- 第220 図 機織具の復元
- 第221 図 馬形参考例

## 図 版 目 次

- 第 1 図版 御山千軒遺跡航空写真
- 第 2 図版 御山千軒遺跡航空写真
- 第 3 図版 御山千軒遺跡全景
- 第 4 図版 第1号住居跡 1.全景 2.掘り方  
3.遺物出土状態 4.1号ピット内遺物  
出土状態 5.18号ピット内遺物出土  
状態
- 第 5 図版 第2a・2b・9号住居跡 1.2a・2b号  
住居跡全景 2.2b号住居跡掘り方・9  
号住居跡全景
- 第 6 図版 第2号住居跡  
第2a号住居跡 1.2号カマド 2.掘り  
方内遺物出土状態 3.2号ピット内遺  
物出土状態  
第2b号住居跡 4.煙道
- 第 7 図版 第3号住居跡 1.全景 2.1号ピット  
セクション
- 第 8 図版 第4号住居跡 1.全景 2.西側セクション
- 第 9 図版 第5号住居跡 1.全景 2.5号ピット  
3.6号ピット 4.遺物出土状態 5.掘  
り方
- 第10 図版 第8号住居跡 1.全景 2.カマド

- 3.支柱出土状態 4.3号ピット
- 第11 図版 第10号住居跡 1.全景 2.1号ピット  
3.2号ピット 4.3号ピット 5.4号  
ピット
- 第12 図版 第10号住居跡 1.カマド 2.カマド付  
近の遺物出土状態
- 第13 図版 第11号住居跡 1.全景 2.カマド  
3.遺物出土状態 4.掘り方 5.カマド  
基底部
- 第14 図版 第13・14号住居跡  
第13号住居跡 1.全景  
第14号住居跡 2.全景 3.カマド  
4.3号ピット
- 第15 図版 第15号住居跡 1.全景 2.カマド  
3.支柱・遺物出土状況 4.3号ピット  
5.掘り方
- 第16 図版 第16号住居跡 1.全景 2.南側セクシ  
ョン
- 第17 図版 第17号住居跡 1.全景 2.木炭出土状  
態 3.5号ピット 4.9号ピット  
5.掘り方
- 第18 図版 第18号住居跡 1.全景 2.1号ピット

3. 5号ピット 4. 7号ピット 5. 掘り方セクション
- 第 19 図版 第19号住居跡 1. 全景 2. 遺物出土状態 3. 木炭出土状態 4. 土器出土状態 5. 1号ピットセクション
- 第 20 図版 第21号住居跡 1. 全景 2. カマド 3. 1号ピット出土遺物 4. 掘り方
- 第 21 図版 第22号住居跡 1. 全景 2. 遺物出土状態
- 第 22 図版 第24・25・26・27・30号住居跡 1. 24・30号住居跡全景 2. 25・26・27号住居跡全景
- 第 23 図版 第25・26号住居跡 1. 25号住居跡全景 2. 26号住居跡全景
- 第 24 図版 第26・27号住居跡 1. 26号住居跡完掘状態 2. 27号住居跡全景
- 第 25 図版 第27号住居跡 1. カマド全景 2. カマドセクション
- 第 26 図版 第28・29号住居跡  
第28号住居跡 1. 全景 2. カマド  
第29号住居跡 3. 全景
- 第 27 図版 1. 第1号掘立柱建物跡全景  
2. 第2号掘立柱建物跡全景
- 第 28 図版 第3号掘立柱建物跡 1. 全景 2. 完掘状態
- 第 29 図版 第3号掘立柱建物跡 1. 2号ピット  
2. 4号ピット
- 第 30 図版 1. 第5号掘立柱建物跡全景  
2. 第6号掘立柱建物跡全景
- 第 31 図版 第1・6・27・29・31・35・39・47号ピット
- 第 32 図版 第5・6・7・9号溝跡 1. 6号溝跡全景  
2. 7号溝跡全景 3. 5号溝跡セクション  
4. 6号溝跡セクション 5. 7号溝跡セクション  
6. 9号溝跡セクション
- 第 33 図版 第8・9号溝跡 1. 8号溝跡全景 2. 9号溝跡全景
- 第 34 図版 井戸跡 1. 井戸枳(南より) 2. 井戸枳(西より)
- 第 35 図版 井戸跡 1. 全景 2. 井戸枳板外側
- 第 36 図版 井戸跡 1. 2. 遺物出土状態
- 第 37 図版 第1号遺構 1. 全景 2. セクション
- 第 38 図版 1. 第3号遺構 2. 第4号遺構
- 第 39 図版 1. 第5号遺構 2. 第6号遺構
- 第 40 図版 湿地性遺物包含層 1. 2. 遺物出土状態
- 第 41 図版 湿地性遺物包含層 1. 2. 遺物出土状態
- 第 42 図版 湿地性遺物包含層木製品出土状態  
1. 北より 2. 東より
- 第 43 図版 湿地性遺物包含層木製品出土状態  
1. 全景(東より) 2. 3. 4. 曲物 5. 盤と木札状木製品
- 第 44 図版 湿地性遺物包含層馬歯出土状態 1. 遠景(北より) 2. 近景
- 第 45 図版 第1・2号住居跡出土遺物
- 第 46 図版 第5・8・9・10・11号住居跡出土遺物
- 第 47 図版 第11号住居跡出土遺物
- 第 48 図版 第11・13・14・15・17号住居跡出土遺物
- 第 49 図版 第17・18・19・21・22号住居跡出土遺物
- 第 50 図版 第1・6・47号ピット, 第2・3号遺構, 遺構外出土遺物
- 第 51 図版 遺構外出土遺物
- 第 52 図版 遺構外出土遺物
- 第 53 図版 井戸跡出土遺物 1. 1. 2. 井戸枳板  
3. 4. 杯
- 第 54 図版 井戸跡出土遺物 8. 9. 10. 井戸枳杭
- 第 55 図版 湿地性遺物包含層 L-V出土遺物
- 第 56 図版 湿地性遺物包含層 L-VI・VII出土遺物
- 第 57 図版 湿地性遺物包含層 L-VII出土遺物
- 第 58 図版 湿地性遺物包含層 L-VII・VIII出土遺物
- 第 59 図版 湿地性遺物包含層 L-VIII出土遺物
- 第 60 図版 湿地性遺物包含層 L-VIII出土遺物
- 第 61 図版 湿地性遺物包含層 L-VIII・V・IX出土遺物
- 第 62 図版 湿地性遺物包含層 L-VIII・IX出土遺物
- 第 63 図版 湿地性遺物包含層 L-IX出土遺物
- 第 64 図版 湿地性遺物包含層 L-IX出土遺物
- 第 65 図版 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第 66 図版 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第 67 図版 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第 68 図版 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第 69 図版 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第 70 図版 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第 71 図版 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第 72 図版 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第 73 図版 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第 74 図版 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第 75 図版 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第 76 図版 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第 77 図版 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第 78 図版 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第 79 図版 湿地性遺物包含層出土木製品
- 第 80 図版 湿地性遺物包含層出土木製品

第 81 図版	湿地性遺物包含層出土木製品
第 82 図版	湿地性遺物包含層出土木製品
第 83 図版	湿地性遺物包含層出土木製品
第 84 図版	湿地性遺物包含層出土木製品
第 85 図版	湿地性遺物包含層出土木製品

第 86 図版	湿地性遺物包含層出土木製品
第 87 図版	湿地性遺物包含層出土木製品
第 88 図版	湿地性遺物包含層出土木製品
第 89 図版	湿地性遺物包含層出土木製品

## 目 次

第 1 表	周辺遺跡一覧表	第 39 表	第 25 号住居跡ピット形態表
第 2 表	周辺遺跡一覧表(館跡)	第 40 表	第 26 号住居跡ピット形態表
第 3 表	非ロクロ杯分類	第 41 表	第 28 号住居跡ピット形態表
第 4 表	ロクロ調整杯形土器分類	第 42 表	第 29 号住居跡ピット形態表
第 5 表	埴分類	第 43 表	第 1 号掘立柱建物跡ピット形態表
第 6 表	鉢分類	第 44 表	第 2 号掘立柱建物跡ピット形態表
第 7 表	非ロクロ甕分類	第 45 表	第 3 号掘立柱建物跡ピット形態表
第 8 表	小形甕分類	第 46 表	第 5・6 号掘立柱建物跡ピット形態表
第 9 表	ロクロ甕分類	第 47 表	第 6 号ピット出土土器一覧表
第 10 表	第 1 号住居跡ピット形態表	第 48 表	ピット形態表
第 11 表	第 1 号住居跡出土土器一覧表	第 49 表	井戸枳板・杭
第 12 表	第 2 a 号住居跡ピット形態表	第 50 表	井戸跡出土土器一覧表
第 13 表	第 2 a・2 b 号住居跡出土土器一覧表	第 51 表	第 2 号不明遺構出土土器一覧表
第 14 表	第 3 号住居跡出土土器一覧表	第 52 表	第 5 号不明遺構ピット形態表
第 15 表	第 5 号住居跡ピット形態表	第 53 表	湿地性遺物包含層 L-V 出土土器一覧表
第 16 表	第 5 号住居跡出土土器一覧表	第 54 表	湿地性遺物包含層 L-VI 出土土器一覧表
第 17 表	第 8 号住居跡ピット形態表	第 55 表	L-VII 取上げ別杯分類表
第 18 表	第 8 号住居跡出土土器一覧表	第 56 表	湿地性遺物包含層 L-VII 出土土器一覧表
第 19 表	第 10 号住居跡ピット形態表	第 57 表	湿地性遺物包含層 L-VIII 出土土器一覧表
第 20 表	第 10 号住居跡出土土器一覧表	第 58 表	湿地性遺物包含層 L-IX 出土土器一覧表
第 21 表	第 11 号住居跡ピット形態表	第 59 表	湿地性遺物包含層 L-X 出土土器一覧表
第 22 表	第 11 号住居跡出土土器一覧表	第 60 表	曲物蓋・底板・側板の層位別出土数
第 23 表	第 13 号住居跡出土土器一覧表	第 61 表	有孔木札状木製品計測値
第 24 表	第 14 号住居跡ピット形態表	第 62 表	齒冠計測値
第 25 表	第 14 号住居跡出土土器一覧表	第 63 表	湿地性遺物包含層出土木製品
第 26 表	第 15 号住居跡ピット形態表	第 64 表	湿地性遺物包含層出土自然遺物
第 27 表	第 15 号住居跡出土土器一覧表	第 65 表	遺構外出土土器一覧表
第 28 表	第 16 号住居跡出土土器一覧表	第 66 表	御山千軒遺跡出土遺物総数
第 29 表	第 17 号住居跡ピット形態表	第 67 表	御山千軒遺跡住居跡出土遺物総数
第 30 表	第 17 号住居跡出土土器一覧表	第 68 表	御山千軒遺跡掘立柱建物跡出土遺物総数
第 31 表	第 18 号住居跡ピット形態表	第 69 表	御山千軒遺跡ピット出土遺物総数
第 32 表	第 18 号住居跡出土土器一覧表	第 70 表	御山千軒遺跡溝跡出土遺物総数
第 33 表	第 19 号住居跡ピット形態表	第 71 表	御山千軒遺跡井戸跡出土遺物総数
第 34 表	第 19 号住居跡出土土器一覧表	第 72 表	御山千軒遺跡不明遺構出土遺物総数
第 35 表	第 21 号住居跡ピット形態表	第 73 表	御山千軒遺跡湿地性遺物包含層出土土器総数
第 36 表	第 21 号住居跡出土土器一覧表	第 74 表	御山千軒遺跡遺構外出土遺物総数
第 37 表	第 22 号住居跡ピット形態表	第 75 表	御山千軒遺跡出土土器一覧表
第 38 表	第 22 号住居跡出土土器一覧表		

- |        |                              |         |                       |
|--------|------------------------------|---------|-----------------------|
| 第 76 表 | 御山千軒遺跡出土土器一覽表                | 第 91 表  | 御山千軒遺跡竪穴住居跡一覽表        |
| 第 77 表 | ロクロ土師器杯類形別個体数一覽表             | 第 92 表  | 御山千軒遺跡掘立柱建物跡一覽表       |
| 第 78 表 | 独立性検定理論度数                    | 第 93 表  | 県内古代・中世井戸集成           |
| 第 79 表 | ロクロ土師器杯層位別口径関連数値             | 第 94 表  | 県内古代・中世井戸分類表          |
| 第 80 表 | ロクロ土師器杯層位別 $b_a$ 関連数値        | 第 95 表  | 曲物蓋・底板の数と割合           |
| 第 81 表 | ロクロ土師器杯層位別 $b_a$ 関連数値        | 第 96 表  | 曲物蓋・底板の木取法            |
| 第 82 表 | ロクロ土師器杯 $b_a$ ・ $b_a$ 相関関係数値 | 第 97 表  | 県内の土製・石製・鉄製紡錘の出土例     |
| 第 83 表 | ロクロ土師器杯層位別 $\beta_a$ 関連数値    | 第 98 表  | 各遺跡出土木製紡錘一覽           |
| 第 84 表 | 独立性検定理論度数                    | 第 99 表  | 各遺跡出土機織具一覽            |
| 第 85 表 | L - V 出土杯形態数値一覽表             | 第 100 表 | 各遺跡出土木製馬形一覽           |
| 第 86 表 | L - VI 出土杯形態数値一覽表            | 第 101 表 | 御山千軒遺跡出土自然木樹種割合       |
| 第 87 表 | L - VII 出土杯形態数値一覽表           | 第 102 表 | 御山千軒遺跡出土木製品樹種割合       |
| 第 88 表 | L - VIII 出土杯形態数値一覽表          | 第 103 表 | 木製品分類別樹種気乾比重表         |
| 第 89 表 | L - IX 出土杯形態数値一覽表            | 第 104 表 | 御山千軒遺跡出土木製品及び自然木樹種一覽表 |
| 第 90 表 | 判読可能墨書一覽表                    |         |                       |

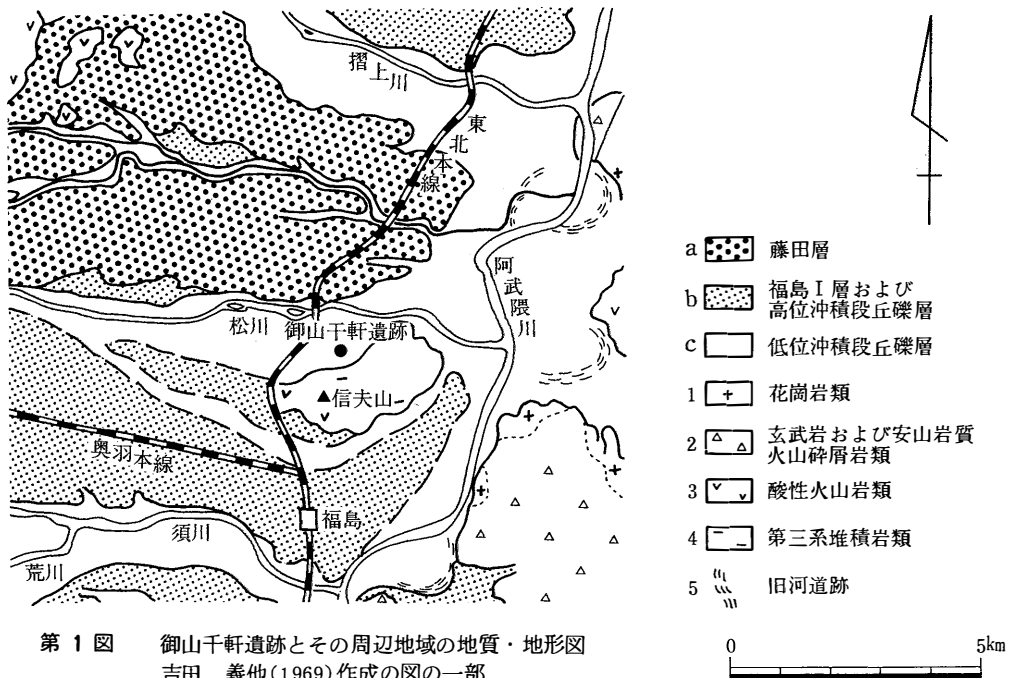
# 第1章 遺跡と環境

## 第1節 自然的環境

福島県のほぼ中央を北流する阿武隈川に沿った低地帯，いわゆる中通り地方の北端近くに福島盆地がある。福島盆地は北東～南西方向に細長くのびた構造盆地である。御山千軒遺跡は盆地の南西部の福島市の市街地に近い福島市御山字中屋敷にある。遺跡のすぐ南には盆地内に孤立してつきてきたような景観を呈する信夫山(標高268.2m)があり，北には阿武隈川の支流の松川が東流しており，遺跡は両者にはさまれた平坦面上(標高70m前後)にある。

吉田他<sup>註1</sup>(1969)によると，遺跡は地形的には沖積世後期に形成された低位沖積段丘面上にあるとされており(第1図)，その構成層は数mの砂・礫層である。このことは，仙台新幹線工事局福島工事事務所によって発行された東北新幹線地質図の資料によっても確認できる。この砂・礫層はおそらく松川のような阿武隈川の支流河川による運搬，堆積により形成されたものであろう。

ところで，現在遺跡の北方を流れている松川が奈良・平安時代にもそこを流れていたかどうかは疑わしい。現に，江戸中期までは松川が信夫山の南側を流れていたという資料(福島市史参照)<sup>註2</sup>が



第1図 御山千軒遺跡とその周辺地域の地質・地形図  
吉田 義他(1969)作成の図の一部



## 第1節 自然的環境

残っており、この川は歴史時代にもしばしば氾濫し、そのたびに流路を変えていたものと想像される。奈良・平安時代の松川あるいはそれに付随した河川の流路を現在の地形から推定することも、古流路の痕跡が残っておらず困難である。

御山千軒遺跡周辺は現在水田や住宅地として利用されているが、遺跡付近には泉とか清水とかの地名が示すように湧水が見られる。遺跡西方の松川上流の盆地の縁辺部には果樹栽培などに利用されている扇状地が発達しており、この湧水は松川の伏流水が湧いたものであると思われる。奈良・平安時代にもこの湧水は土地利用や生活にある程度影響を与えていたことであろう。（竹谷陽二郎）

## 第2節 歴史的環境

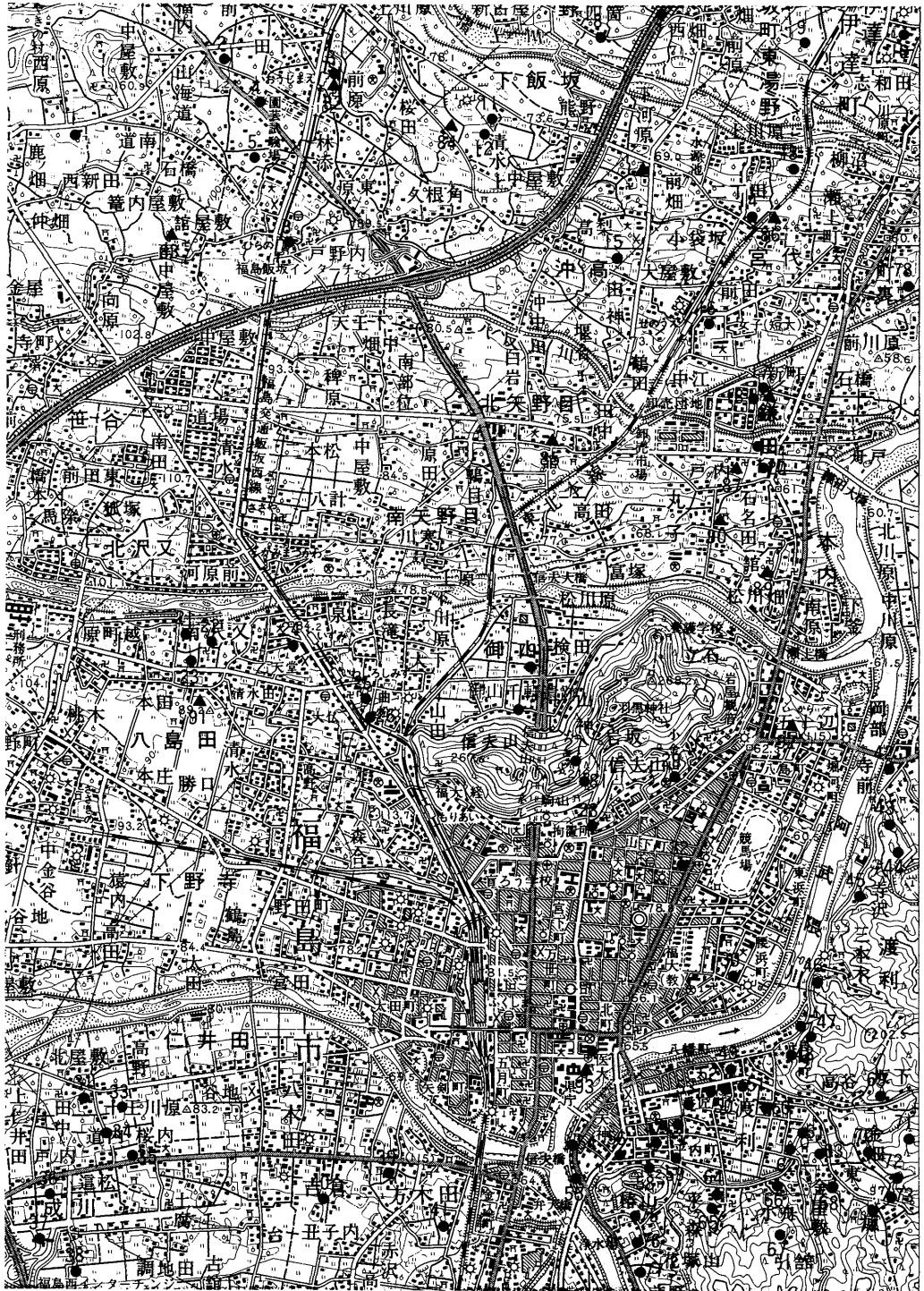
御山千軒遺跡の位置する福島盆地は中央を阿武隈川が流れる低地帯で、摺上川、松川、荒川およびその支流の形成する扇状地や河岸段丘上に遺跡が分布している。

福島市内には旧石器時代に属する遺跡はまだ検出されていない。摺上川の北岸の上岡遺跡で斜軸尖頭器が出土し、西側山麓佐倉地区の高萩遺跡などで剥片が確認されているのみである。

縄文時代早期・前期・中期の遺跡は分布が少ない。中期後半以後の遺跡のほとんどが阿武隈川の西側山麓付近に分布する。摺上川北岸に八景腰巻遺跡、その上流小川の段丘上に月崎遺跡が位置し、土器以外にも多くの土偶や石器の出土が知られている。後期以降になると阿武隈川流域や松川・荒川などの流路となった新旧の扇状地の接合した地帯に分布が見られる。後期の遺跡は渡利地区に多く大久保遺跡、稲場遺跡、八幡遺跡、烏帽子遺跡、岩崎遺跡などがある。また、後期から晩期にかけては県指定重要文化財「腕をくみ坐した土偶」を出土した上岡遺跡が有名である。信夫山の西麓の低湿地に土錘・石錘や弥生の石包丁など出土した道下遺跡が知られる。また、本遺跡の北方鎌田地区には天神平遺跡が位置している。

弥生時代の遺跡はきわめて少なく、弥生式土器を伴う遺跡は荒川の南側河岸段丘上に位置する八幡塚遺跡がある。この遺跡からは石包丁も出土している。また、その北方に有角石斧が出土している鎧塚遺跡がある。北部では阿武隈川と松川の合流点の北側の微高地に鎌田館遺跡が位置し、すぐ南には縄文後期の土器が出土した石名田遺跡がある。この遺跡からは腰浜系の瓦も出土している。摺上川流域においては南岸段丘上に縄文後期及び弥生式土器と見られる条痕文のある土器を出土する穴田遺跡が知られている。また、その東方には弥生時代中期の孫六橋遺跡が位置する。

古墳はほとんどが伏拝地区の丘陵を含めた阿武隈山系の裾状の丘陵地帯に分布し、奥羽山系西方の丘陵地帯には少ない。古墳のほとんどは円墳で、大規模なものとしては荒川の南、下鳥渡に八幡塚古墳、稲荷塚古墳がある。八幡塚古墳からは朝顔形円筒埴輪と人物埴輪片が出土している。阿武隈川流域東岸段丘上には町畑古墳群や鍛冶屋角古墳、その北方約4kmの岡部地区には横穴式



第2図 歴史的環境地図 ▲…館跡

第2節 歴史的環境

第1表 周辺遺跡一覧表(1)

番号	遺跡地図番号	遺跡名	所在地	種別	地形	時代・その他
1	7-10	釜清水遺跡	福島市飯坂町平野上谷地街道地	集落跡	扇状地	
2	7-11	井野目古墳群	福島市飯坂町平野字井野目	古墳群	扇状地	古墳
3	7-12	五郎兵衛館遺跡	福島市飯坂町平野平塚字五郎兵衛館	集落跡	河岸段丘	縄文
4	7-13	石堂古墳	福島市飯坂町平野字石堂	古墳	扇状地	
5	7-14	恵名持古墳	福島市飯坂町平野字恵名持	古墳	扇状地	古墳
6	7-15	明神脇遺跡	福島市飯坂町平野字明神脇	散布地	扇状地	縄文
7	7-34	中島古墳	福島市飯坂町湯野字中島	古墳(方円)	河岸段丘	
8	7-35	八景腰巻遺跡	福島市飯坂町東湯野字腰巻	集落跡	河岸段丘	縄文
9	7-36	増田糸理制遺構	福島市飯坂町東湯野増田南一帯	条里跡	河岸段丘	奈良～平安
10	7-37	館ノ内古墳	伊達郡伊達町長谷字館ノ内	古墳(円)	河岸段丘	古墳
11	7-38	下飯坂遺跡	福島市下飯坂字宮崎	散布地	河岸段丘	縄文
12	7-39	穴田遺跡	福島市飯坂町平野字穴田	集落跡	河岸段丘	縄文
13	7-40	孫六橋遺跡	福島市宮代字孫六橋	散布地	河岸段丘	縄文
14	7-41	宮代遺跡	福島市宮代字鍛畑	散布地	河岸段丘	縄文
15	7-42	柵ノ目遺跡	福島市沖高字柵ノ目	散布地	河岸段丘	
16	7-43	御仮屋古墳	福島市鎌田字御仮屋	古墳(方)	河岸段丘	古墳
17	7-44	石ガ森古墳	福島市鎌田字石ガ森	古墳(方)	河岸段丘	古墳
18	7-45	天神平遺跡	福島市鎌田字天神平	散布地	河岸段丘	古墳
19	7-46	鎌田館遺跡	福島市鎌田字古館	散布地	河岸段丘	縄文・弥生
20	7-47	石名田遺跡	福島市鎌田字石名田	散布地	河岸段丘	縄文器
21	7-59	西原前遺跡	福島市南沢又字西原前	集落地	河岸段丘	土師器
22	7-60	北屋敷遺跡	福島市南沢又字北屋敷	散布地	河岸段丘	土師器
23	7-61	西原遺跡	福島市南沢又字西原前	散布地	河岸段丘	土師器
24	7-62	柳清水遺跡	福島市泉字柳清水	散布地	河岸段丘	縄文
25	7-63	二斗蒔遺跡	福島市泉字二斗蒔	散布地	扇状地	
26	7-64	道下遺跡	福島市泉町字道下	散布地	扇状地	縄文
27	7-65	御山遺跡	福島市御山	散布地	丘陵	縄文
28	7-66	信夫山遺跡	福島市御山町	散布地	河岸段丘	奈良～平安
29	7-67	鶉頭森遺跡	福島市鶉頭森	散布地	河岸段丘	縄文
30	7-68	腰浜廃寺跡	福島市腰浜町・浜田町	寺院跡	河岸段丘	奈良～平安
31	7-91	前的場遺跡	福島市仁井田字前的場	散布地	河岸段丘	
32	7-92	北五老内遺跡	福島市北五老内	散布地	河岸段丘	奈良～平安
33	7-93	下鎌遺跡	福島市仁井田字下鎌	散布地	河岸段丘	
34	7-94	鎧塚古墳	福島市仁井田字鎧塚	古墳	河岸段丘	
35	7-95	鎧塚遺跡	福島市仁井田字鎧塚	散布地	河岸段丘	
36	7-96	寺北遺跡	福島市上鳥渡字寺北	散布地	河岸段丘	
37	7-97	樋の口古墳	福島市上鳥渡樋の口	古墳	河岸段丘	古墳
38	7-98	八幡塚古墳	福島市下鳥渡字八幡塚	古墳(円)	河岸段丘	古墳・弥生
39	7-107	稲荷塚古墳	福島市方木田字稲荷塚	古墳(円)	河岸段丘	古墳
40	7-108	大森遺跡	福島市大森字柳下	散布地	河岸段丘	土師器

(『全国遺跡地図 福島県』1974を参考)

第1表 周辺遺跡一覧表(2)

番号	遺跡地図番号	遺跡名	所在地	種別	地形	時代・その他
41	7-109	本方木田古墳	福島市方木田字本方木田	古墳	河岸段丘	古墳
42	7-160	上条古墳群	福島市上条	古墳群(方円・円)	河岸段丘	
43	7-161	日向古墳群	福島市岡部字日向	古墳群(方円・円)	丘陵	古墳
44	7-162	新田古墳	福島市岡部字新田	古墳	丘陵	古墳
45	7-163	八寺沢遺跡	福島市渡利字八寺沢	散布地	丘陵	古瓦
46	7-164	三本木遺跡	福島市渡利字三本木・三本木前	散布地	丘陵	奈良~平安(瓦窯)
47	7-165	菩提院跡	福島市渡利字仏根	寺院跡	丘陵	廃寺跡
48	7-166	岩崎遺跡	福島市渡利字岩崎町	散布地	丘陵	縄文
49	7-167	四方八幡遺跡	福島市渡利字八幡町・番匠町	寺院跡	河岸段丘	奈良~平安
50	7-168	八幡町遺跡	福島市渡利字八幡町・番匠町	散布地	河岸段丘	縄文・土師器
51	7-169	土橋遺跡	福島市渡利字番匠町	散布地	河岸段丘	石器
52	7-170	沖町遺跡	福島市渡利字沖町	散布地	河岸段丘	奈良~平安
53	7-171	竹ノ内東部遺跡	福島市渡利字沖町	散布地	河岸段丘	奈良~平安
54	7-172	丸滝遺跡	福島市渡利字丸滝	散布地	河岸段丘	奈良~平安
55	7-173	金山下遺跡	福島市渡利字金山下	散布地	河岸段丘	奈良~平安
56	7-174	山之下遺跡	福島市渡利字山之下	散布地	河岸段丘	縄文
57	7-175	竹ノ内西部遺跡	福島市渡利字馬場町	散布地	河岸段丘	縄文
58	7-176	柳小路遺跡	福島市渡利字柳小路	散布地	河岸段丘	奈良~平安
59	7-177	転石遺跡	福島市渡利字柳小路	散布地	河岸段丘	奈良~平安
60	7-178	町尻遺跡	福島市渡利字扇田町	散布地	河岸段丘	縄文
61	7-179	円福寺跡	福島市渡利字渡利町	寺院跡	河岸段丘	
62	7-180	中之内遺跡	福島市渡利字鳥谷下町	散布地	河岸段丘	縄文
63	7-181	矢之根畑遺跡	福島市渡利字館・館之町	散布地	丘陵	石器
64	7-182	平ヶ森遺跡	福島市渡利字平ヶ森	散布地	丘陵	縄文
65	7-183	小牛田遺跡	福島市渡利字小牛田山	散布地	丘陵	奈良~平安
66	7-184	平内遺跡	福島市渡利字平内町	散布地	丘陵	縄文
67	7-185	引館遺跡	福島市渡利字引館	散布地	丘陵	縄文
68	7-186	金屋敷遺跡	福島市渡利字金屋敷	散布地	丘陵	石器
69	7-187	茶屋遺跡	福島市渡利字茶屋	散布地	丘陵	
70	7-188	唐善寺遺跡	福島市渡利字唐善寺	散布地	丘陵	須恵器
71	7-189	下館古墳群	福島市渡利字下館	散布地	丘陵	
72	7-190	唐善寺跡	福島市渡利字唐善寺	寺院跡	丘陵	須恵器
73	7-191	原田遺跡	福島市渡利字原田	散布地	丘陵	
74	7-192	梅久保遺跡	福島市渡利字梅久保	散布地	丘陵	縄文
75	7-193	椿山遺跡	福島市小倉寺字椿山	散布地	丘陵	縄文
76	7-194	町畑古墳群	福島市小倉寺字町畑	古墳群	丘陵	古墳
77	7-195	鍛冶屋角古墳	福島市小倉寺字鍛冶屋	古墳	河岸段丘	古墳
78	7-229	矢野根塚古墳	福島市瀬上字青柳	古墳	河岸段丘	縄文
79	7-231	仲間遺跡	福島市仲間	散布地	河岸段丘	奈良~平安
80	7-233	信夫山遺跡B	福島市御山町	散布地	丘陵	

〔『全国遺跡地図 福島県』1974を参考〕

## 第2節 歴史的環境

第2表 周辺遺跡一覧表(館跡)

番号	遺跡地図番号	遺跡名	所在地	種別	地形	時代・その他
82	—	五郎兵衛館	福島市飯坂町字五郎兵衛館	館跡	河岸丘陵	空堀・土塁
83	—	古館	福島市飯坂町字平野字館屋敷	館跡	扇状地	
84	—	古館(平田館)	福島市飯坂町字平野字館屋敷	館跡	河岸丘陵	塁壕
85	—	北矢野目城	福島市北矢野目字館	館跡	河岸丘陵	塁壕
86	—	宮代城	福島市宮代字屋敷畑	館跡	河岸丘陵	土塁
87	—	鎌田館	福島市鎌田字古館	館跡	河岸丘陵	
88	—	夜盗館	福島市鎌田字石ヶ森	館跡	河岸丘陵	空堀・土塁
89	—	本内館	福島市本内字北古館	館跡	河岸丘陵	空堀・土塁
90	—	小森館	福島市丸子字上六反田	館跡	河岸丘陵	堀跡
91	—	南沢又城	福島市南沢又字西原	館跡	扇状地	塁壕
92	—	五十目館	福島市五十辺字館内	館跡	河岸丘陵	空堀・土塁
93	—	福島城	福島市杉妻町	館跡	河岸丘陵	

(『福島県の寺院跡・城館跡』1971を参考)

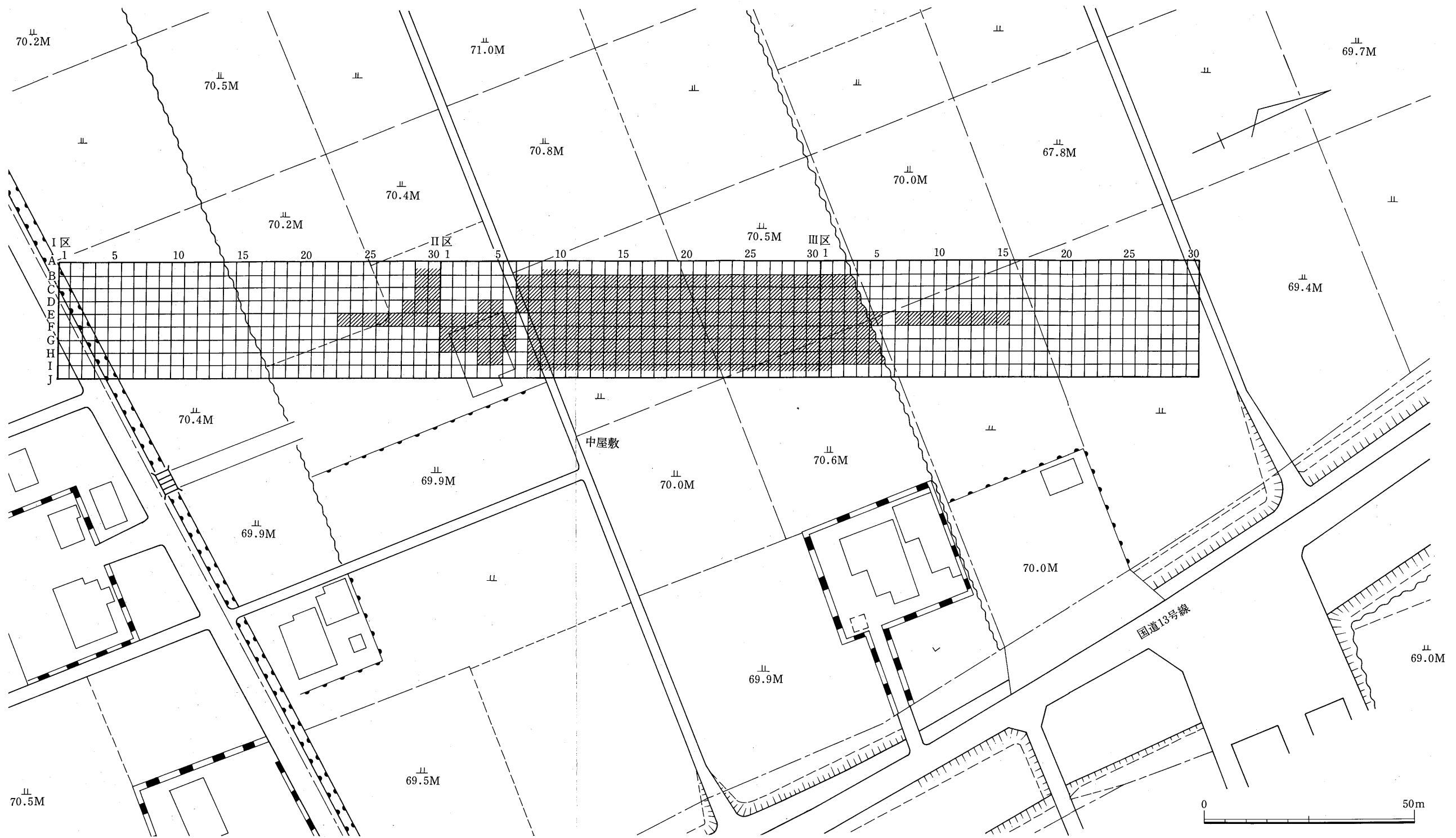
石室を持つ上条古墳が知られており前方後円墳と見られる。この古墳からは直刀が出土している。また阿武隈川と松川の合流点の北側微高地に御飯屋古墳、勾玉を出土した石が森古墳が位置する。

奈良・平安時代になると、南沢又・渡利地区に見られる様に、ますます河岸段丘上に遺跡が集中する。当時、福島市一帯は信夫郡下に置かれており、律令体制の基に集落は営まれていたと考えられる。しかし、今までの所大規模な集落は発掘されていない。本住居跡の南東約2kmの所に北五郎内遺跡があり、200×150m四方の範囲で多量の炭化米が出土している。この遺跡は信夫郡の郡家跡と推定されるものである。さらにその東約1kmの所、阿武隈川西岸の氾濫原には腰浜廃寺跡が位置し、多数の古瓦や鷗尾や花文の鬼板など出土している。そして、その対岸の丘陵上には腰浜系瓦を出土する三本木遺跡、入寺沢遺跡がある。また、窯跡としては阿武隈川東岸丘陵上には高畑遺跡、その北方岡島には宮沢瓦窯跡があり、7世紀末から8世紀の初期に位置づけられる県内でも古い窯跡である。

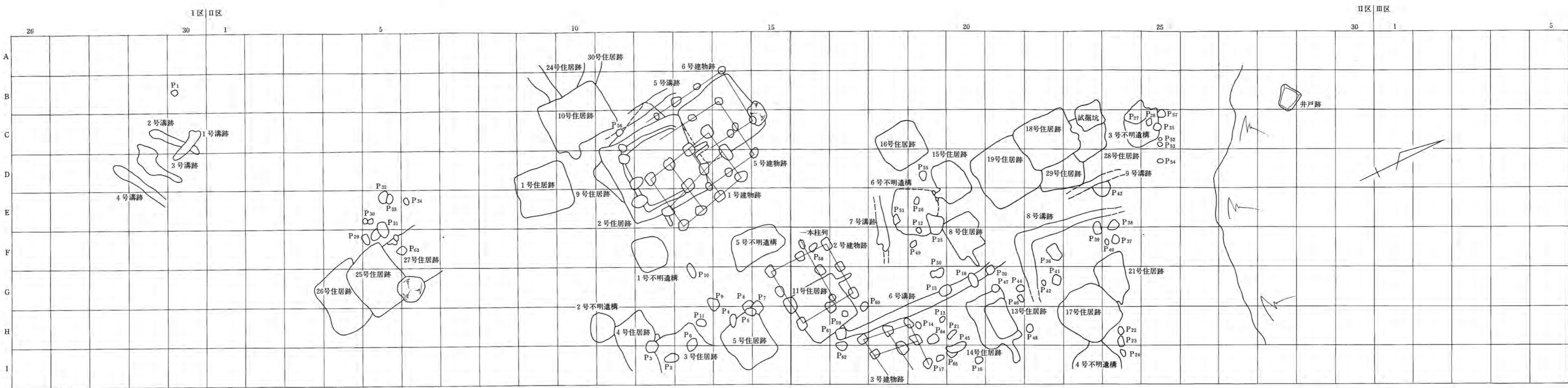
本遺跡の北東の丸子・鎌田・瀬上、余目地区及び北西の笹谷地区、また、摺上川北岸の東湯野から伊達町にかけて条里の跡が現存しており、かなり進んだ稲作経営が行われていたと思われる。以上のように本遺跡一帯は政治・経済・文化の中心を担っていたと考えられる。

平安時代末期には、福島一帯を佐藤庄司一族が勢力を握っており、その家臣の館跡が点在している。五郎兵衛館などがそれである。また、信夫山東麓の阿武隈川と松川の合流点の低地に位置する五十目館は伊賀良辺七郎高重の館跡である。平館で土塁・空堀が残っている。

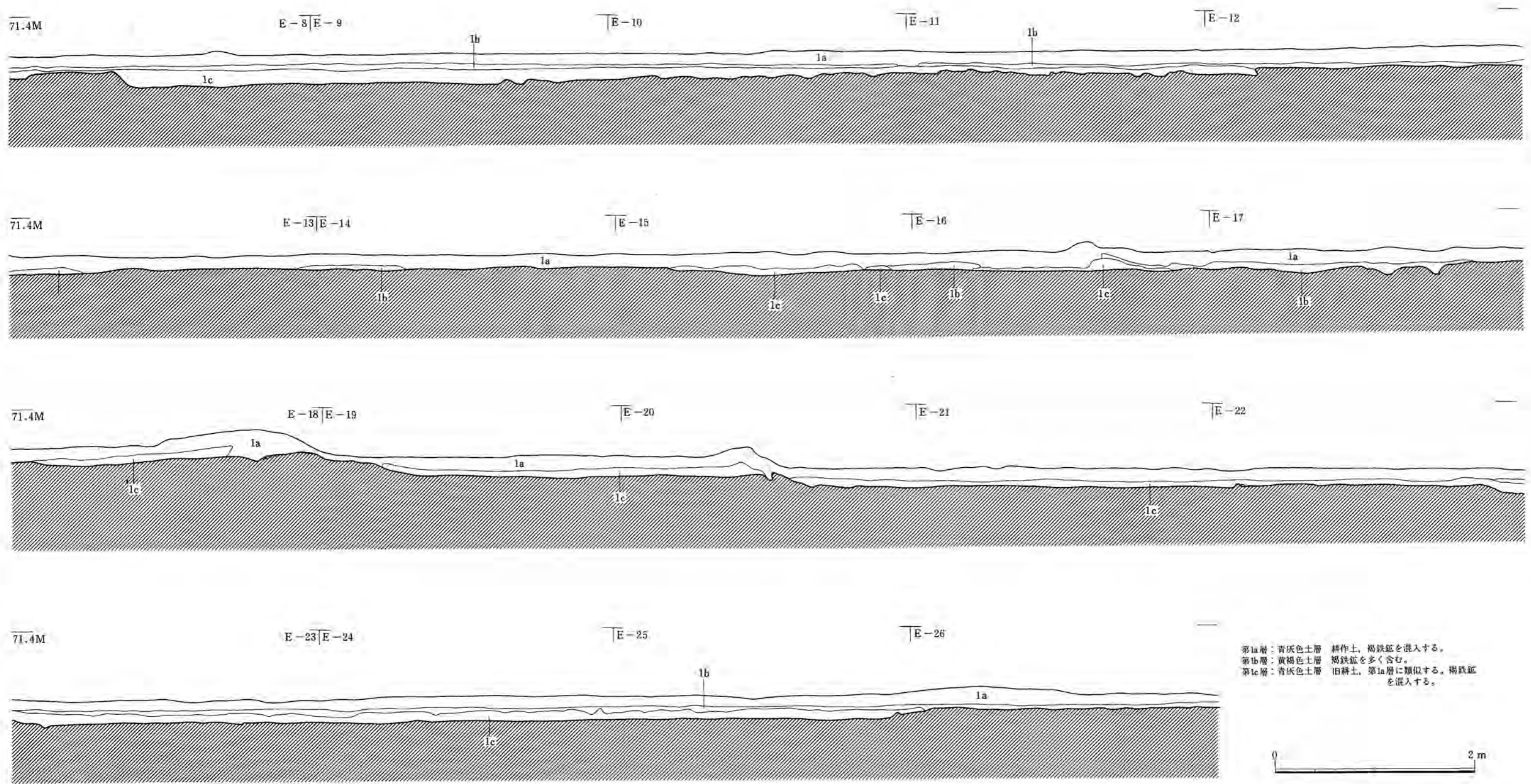
中世になると、信夫庄は佐藤氏の他に二階堂氏が下鳥渡一帯の地頭職を所持していた。南北朝動乱の後、信夫・伊達地方は伊達氏の本領となり、大森城を基点としていた。その後、応永20年頃に伊達持宗が福島城を築き、この2つの館が信夫庄の中心的な城となった。(氏家 浩子)



御山千軒遺跡グリッド配置図



第4圖 御山千軒遺跡遺構全測図



第1a層：青灰色土層 耕作土，褐鉄鉱を混入する。  
 第1b層：黄褐色土層 褐鉄鉱を多く含む。  
 第1c層：青灰色土層 旧耕土，第1a層に類似する，褐鉄鉱を混入する。



第5図 御山千軒遺跡Ⅱ区Eライン西壁基本土層図



## 第2章 調査経過

### 第1節 調査に至る経過

福島盆地内において、信夫山の北側一帯は館跡が1・2ヶ所知られているのみで、遺跡の分布の少ない地域であった。特に信夫山と松川にはさまれた東西に細長い部分からは、まったく遺跡は発見されていなかった。したがって本遺跡は「福島県遺跡地名表」(1962)・福島県史6「考古資料」の「補足福島県遺跡地名表」にも登載はされていない。

昭和46年の東北新幹線関連遺跡分布調査の時も、踏査の段階では遺跡付近一帯は水田となっており、地表面から遺物はまったく発見されず、遺跡の存在すら推定できなかった。遺跡の発見者である当時の県教育委員会埋文担当鈴木啓氏の談によれば、福島市教育委員会文化財担当の富田晴夫氏より、付近は伝説上の「御山千軒」という地名で呼ばれており、市内の別の所にも同様の地名があり町並の伝説があつて、そこは集落跡となっているという話があつた。そこで、該当地区の東北新幹線予定地内について試掘調査を実施したところ、奈良時代と考えられる竪穴住居跡よりなる集落を発見した、というのがいきさつである。

本調査の実施については国鉄新幹線工事事局との協議の席上、該当地区は信夫山トンネル・福島市街地区の工事との関連があるので、着工は50年度以降になるとの話があつた。そのため調査時期は全調査予定の後半にすることとし、昭和52年の4～12月に発掘調査を実施した。

### 第2節 調査日誌

4月18日 調査開始。基準杭・グリッド設定。グリッドは3m×3mとし、南北のセクションベルトはEライン、東西セクションベルトは15mごとに残し全面発掘を行うこととする。

4月19日～28日 II区9～27グリッドまで全面表土剥離。II区E-28～III区E-5グリッド掘り込み、遺跡の北限を探る作業を行う。

5月9日～27日 II区9～27区の遺構確認完了。II区28～III区3グリッドより湿地性遺物包含層検出。土器・木器・種子等多量に出土し始まる。

5月30日～7月29日 1・3号住居跡、1・2号建物跡、1・2号遺構等調査完了。湿地性遺物包含層L-VI～VIII掘り込み。III区E-5～15グリッド掘り込み。表土下10～15cmで薄い炭化物層、その下は砂層、礫混り層となり、遺構・遺物はまったく見られない。湿地性遺物包含層はII

## 第2節 調査に至る経過

区28～Ⅲ区3グリッドの間にもみ存在することが判明した。

8月1日～9月30日 4・6～9・11・13号住居跡，2・3号建物跡他の遺構調査。湿地性遺物包含層の調査継続。8月11日，第1回現地説明会。9月10日，NHKテレビ「けさの東北」で中継放送を行う。

10月3日～11月30日 14・15・16・17号住居跡他の遺構の調査。湿地性遺物包含層調査継続。Ⅰ～Ⅶの掘り込み。

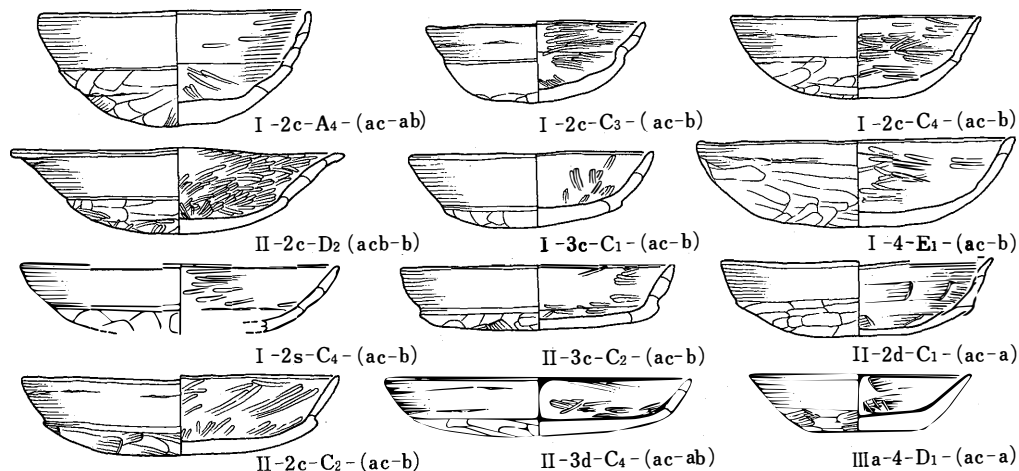
12月1日～23日 18～30号住居跡他の遺構調査。湿地性遺物包含層の部分ではⅠ～Ⅸ・Ⅹ掘り込み，井戸枠の取上げを行い，地山の礫混り層まで完掘し調査を終了する。（木本 元治）

## 第3節 出土土器分類基準

調査の結果，御山千軒遺跡から出土した土器は，底部，体部，段及び口縁部の形態上の違いによって，下記に示した出土土器分類基準に基づき，それぞれの分類を行う。また，分類の不可能な部分及び不明な部分は「※」で表わすこととする。（東北新幹線関連遺跡及びその周辺遺跡出土の遺物を資料として下記の分類基準を作成したものである。）

### 杯

杯はロクロ未使用の杯とロクロ使用の杯に分けることができる。ロクロ未使用の杯の形態は，底部の形からⅠ～Ⅲ，体部の立ち上がりがa～dに，段の位置で1～5，段の形でa～g，口縁部の形からA～Fに，更に体部内面の段の形により1～5に分類される。尚，調整はa～dの4種の技法に分け，その組み合わせにより（外面-内面）と表わし，その順序は表わした記号の順とした。ただし，丸底の杯の場合，体部立ち上がりは分類しないこととする。



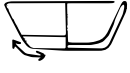
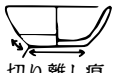
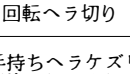

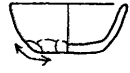
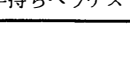

第6図 非ロクロ杯分類

第3表 非ロクロ杯分類

底 部	体 部			口 縁 部	内 面	調 整
	立ちあがり	段 の 位 置	段 の 形			
I 丸 底	a 内湾する	1 上 位	a 肩がはり出す	A 内湾する	1 段無	a ナデ
II 平底風丸底	b 外傾する	2 中 位	b 段がはりだす	B 内傾する	2 段有	b ミガキ
III 平 底	c 外反する	3 下 位	c 段をもつ	C 外傾する	3 くびれ	c ケズリ
	d 直立気味に立ち上がる	4 無段で内湾	d 角をもつ	D 外反する	4 段の痕跡	d ハケメ
		5 無段で強く内湾	e くびれる	E 直立気味に立ち上がる	5 稜線	
			f 沈線化した段	F 直立して外反する		
			g 稜線を有する			

ロクロ使用の土器は、底部の切り離しと再調整技法から1類～5類、切り離し技法からa類～c類に分けることができる。1類は体部下半から底部にかけて回転ヘラケズリを施したもの、2類は体部下半から底部にかけて手持ちヘラケズリを施したもの、3類は底部に切り離し痕を残し体部下半に回転ヘラケズリを施したもの、4類は底部に切り離し痕を残し体部下半に手持ちヘラケズリを施したもの、5類は底部に切り離し痕を残し再調整を施していないものに分けられる。更に切り離し技法により、a類が回転ヘラ切りによるもの、b類が回転糸切りによるもの、c類が静止糸切りによるものである。

第4表 ロクロ調整杯形土器分類

再 調 整	切り離し	類 別	再 調 整	切り離し	類 別	
回転ヘラケズリ (体下部+底部) 	不 明	1 類	回転ヘラケズリ (一部)  切り離し痕	回転ヘラ切り	3 a 類	
	回転ヘラ切り	1 a 類		回転糸切り	3 b 類	
	回転糸切り	1 b 類		静止糸切り	3 c 類	
回転ヘラ切り 	静止糸切り	1 c 類	手持ちヘラケズリ (一部)  切り離し痕	回転ヘラ切り	4 a 類	
	手持ちヘラケズリ (体下部+底部) 	不 明		2 類	回転糸切り	4 b 類
		回転ヘラ切り		2 a 類	静止糸切り	4 c 類
手持ちヘラケズリ 	回転糸切り	2 b 類	再調整なし  切り離し痕	回転ヘラ切り	5 a 類	
	静止糸切り	2 c 類		回転糸切り	5 b 類	
				静止糸切り	5 c 類	

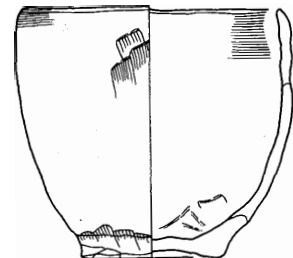
堦

堦は、杯に比べて器高が高く、底の深いものとした。堦の形態は、底部の形からI～III、体部立ち上がりから1～3、口縁部の形A～H、更に段の有無で2種に分類した。尚、調整はa～dの4種の技法に分け、その組み合わせにより(外面-内面)と表わし、その順序は表わした記号の順とした。

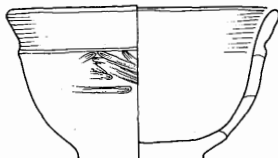
第3節 出土土器分類基準

第5表 碗分類

底部	体部	口縁部	調整
I 丸底	1 内湾する	A 強く外反する	1 段無 a ナデ
II 平底	2 外傾する	B 外反する	2 段有 b ミガキ
III 台付	3 直立気味に立ち上がる	C 外傾する	c ケズリ
		D 直立して外反する	d ハケメ
		E 直立して外傾する	
		F 直立する	
		G 内傾する	
		H 内湾する	



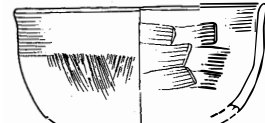
II-1-H<sub>1</sub>-(a-a)



II-1-C<sub>2</sub>-(a-a)



I-1-F<sub>1</sub>-(a-a)



\*-1-E<sub>1</sub>-(da-a)

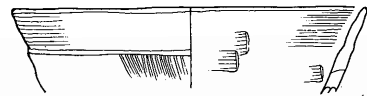
第7図 碗分類

鉢

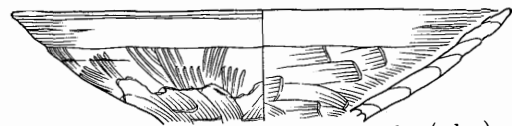
鉢は碗より大ぶりで、器高の割に口径が広いものとした。鉢の形態は底部と体部の形から1～3に、口縁部のからA～H、更に段の有無で2種に分類される。尚、調整はa～dの4種の技法に分け、その組み合わせにより(外面-内面)と表わし、その順序は表わした記号の順とした。

第6表 鉢分類

底部	体部	口縁部	調整
I 丸底	1 内湾する	A 強く外反する	1 段無 a ナデ
II 平底	2 外傾する	B 外反する	2 段有 b ミガキ
III 台付	3 外反する	C 外傾する	c スズリ
		D 直立して外反する	d ハケメ
		E 直立して外傾する	
		F 直立する	
		G 内傾する	
		H 内湾する	



\*-1-C<sub>2</sub>=(ad-a)



\*-1-C<sub>2</sub>-(ad-a)

第8図 鉢分類

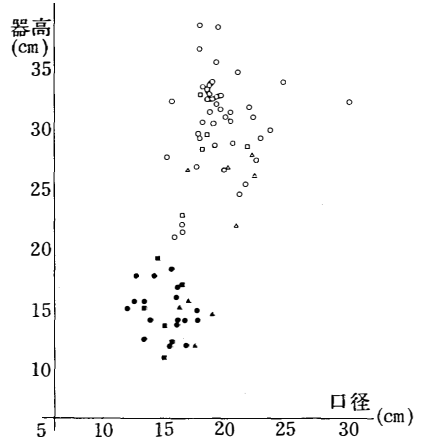
第7表 非ロクロ甕分類

底	部	体部	最大径	口縁部	調整
I 平底	a ナデ	1 球形	a 口縁部	A 強く外反する	1 段無 a ナデ
II 丸底風平底	b ケズリ	2 楕円形	b 体部上位	B 外反する	2 段有 b ミガキ
III 盤状貼り付	c ミガキ	3 長楕円形	c 体部中位	C 外傾する	c ケズリ
IV 環状貼り付	d 木葉痕	4 下ぶくれ	d 体部下位	D 直立して外反する	d ハケメ
	e あじろ痕	5 長胴形		E 直立する	
	f ゴザ目	6 菱形		F 外傾する短い口縁	
		7 逆台形		G 内傾する	
		8 肩が張る楕円形			

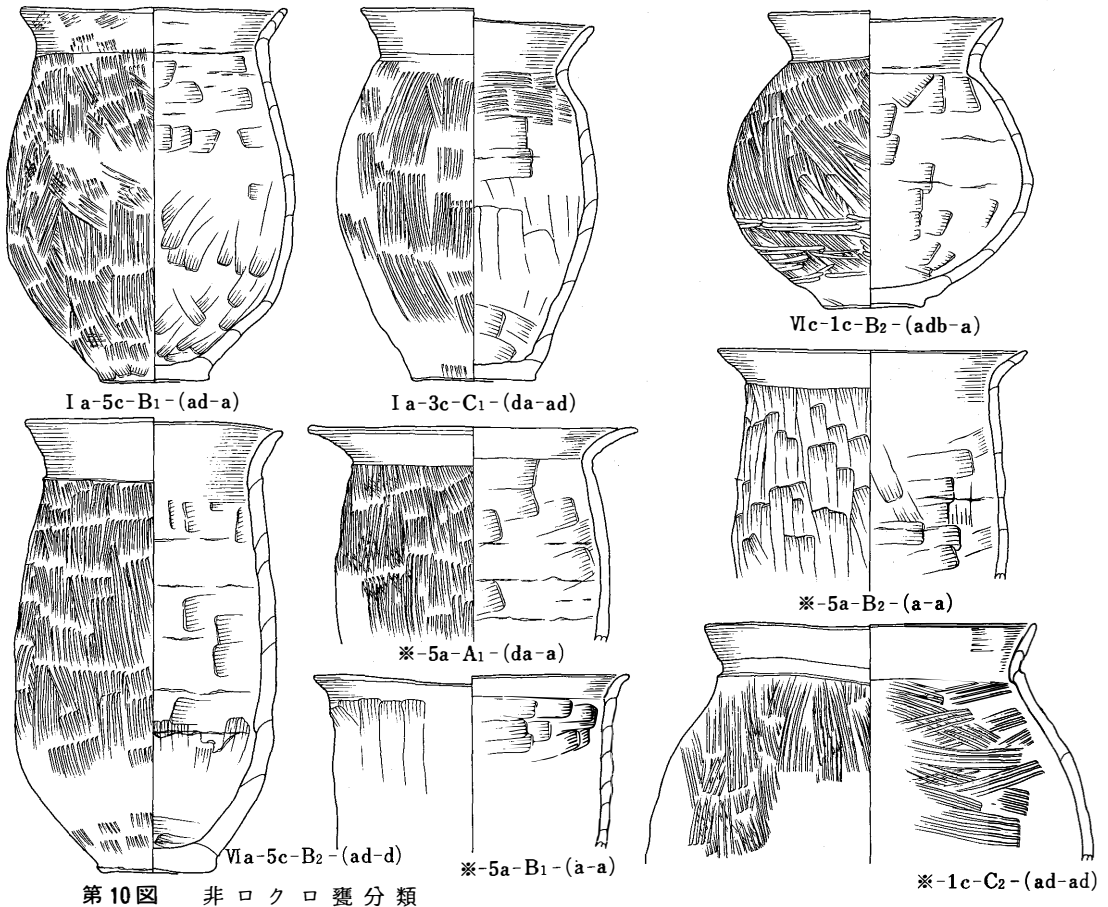
甕

甕はロクロ未使用の土器とロクロ使用の土器に分けることができる。ここでは底部、体部及び口縁部形態の違いによって分類した。

ロクロ未使用の甕の形態は、底部の形からI~IV, その調整をa~fに, 体部器形を1~8, 最大径の位置をa~d, 口縁部の形からA~Gに, 更に段の有無で2種に分類した。尚, 調整はa~dの4種に技法を分け, その組み合わせにより(外面-内面)と表わし, その順序は表わした記号の順とした。



第9図 甕・小形甕の器高と口径の比較



第10図 非ロクロ甕分類

第3節 出土土器分類基準

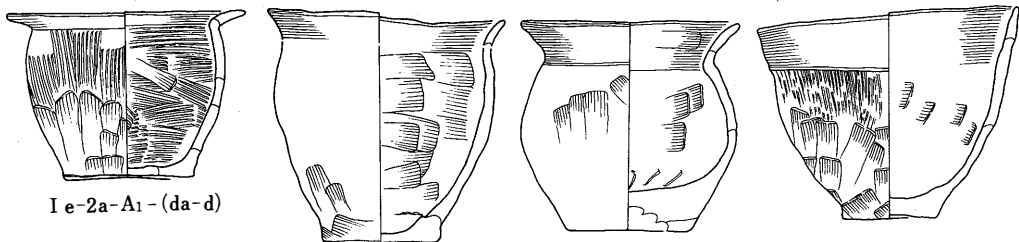
小形甕

ロクロ未使用の甕は、甕と小形甕に分けられるが、両者間を形態的に明確に区分することができない。そこで本分類基準の設定にあたり、徳定遺跡<sup>註3</sup>、舞台遺跡<sup>註4</sup>の出土土器の中で一般に甕と小形甕<sup>註5</sup>に分類している資料と矢ノ戸遺跡で甕と小形甕に分類している資料を使って、比較することにより便宜的な区分を行った。第9図は、3遺跡の甕及び小形甕の口径、器高をグラフに表わしたもので、これからも明らかであるように、18～22cmの間に境界を設けることができる。つまり22cm以上の器高を持つ土器を甕、18cm以下の器高を持つ土器を小形甕とした。

小形甕の形態は、底部の形からⅠ～Ⅳ、その調整をa～e、体部器形を1～4、最大径の位置をa～d、口縁部の形からA～Gに、更に段の有無で2種に分類した。尚、調整はa～dの4種に技法を分け、その組み合わせにより(外面-内面)を表わし、その順序は表わした記号の順とした。

第8表 小形甕分類

底 部		体 部		最大径	口 縁 部		調 整
Ⅰ	平底	a ナデ	1 体部最大径を上位に有してのまま立ち上がる	a 口縁部	A 強く外反する	1 段無	a ナデ
Ⅱ	丸底風平底	b ケズリ	2 体部最大径を上位に有しくびれる	b 体部上位	B 外反する	2 段有	b ミガキ
Ⅲ	盤状貼り付	c 木葉痕	3 体部最大径を中位に有しくびれる	c 体部中位	C 外傾する		c ケズリ
Ⅳ	環状貼り付	d あじろ痕	4 体部最大径を下位に有しくびれる	d 体部下位	D 直立して外反する		d イケメ
		e ゴザ目			E 直立する		
					F 外傾する短い口縁		
					G 内傾する		



第11図 小形甕分類 II-2a-B2-(a-a) III-3a-D2-(a-a) IIIb-1a-C2-(da-a)

ロクロ甕

ロクロ使用の甕の形態は、底部を形態からⅠ～Ⅲ、底部切り離しをa～fに、体部器形を1～4、最大径の位置をa～dに分け、口縁部の形はA～D、更に口唇部の形を1～7に分類した。尚、調整はa～fの6種に技法を分け、その組み合わせにより(外面-内面)と表わし、その順序は表わした記号順とした。

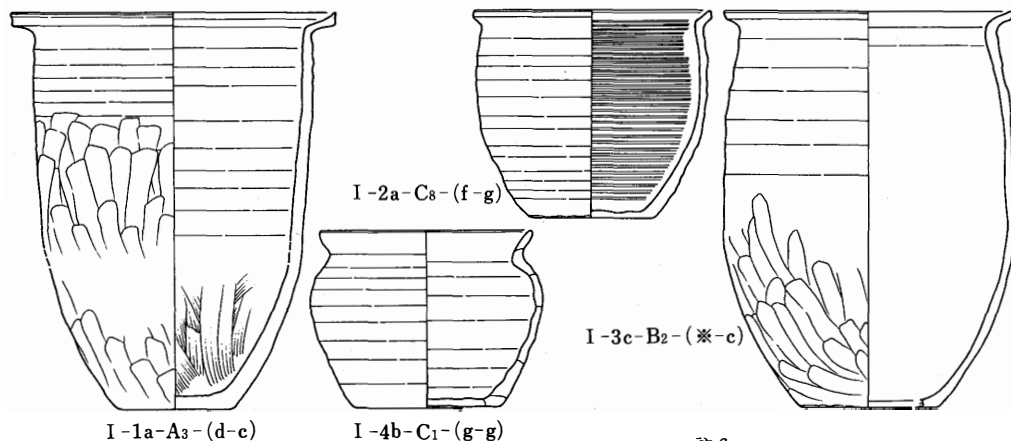
甗

甗には無底式、単孔式、多孔式があるが、甗形態は、非ロクロ甕、小形甕、埴及び鉢とはほぼ同形の形態を有するために、甗分類は非ロクロ甕、小形甕、埴及び鉢の分類基準に当てはめて分類を行うこととする。

第9表 ロクロ甕分類

底		部		体部		最大径		口縁部			調整			
I	平底	a	ナ デ	1	長胴形	a	口縁部	A	強く外反する	1	断面「つ」の字形	a	ナ デ	
II	丸底風平底	b	手持ヘラケズリ	2	逆台形	b	体部上位	B	外反する	2	断面「コ」の字形	b	ミガキ	
III	貼り付け状	c	回転ヘラケズリ	3	下ぶくれ	c	体部中位	C	外傾する	3	上端が立ちあがる	c	ケズリ	
		d	回転ヘラ切り	4	肩がはる	d	体部下位	D	外反した後直立する	4	下端が立ちあがる	d	ハケメ	
		e	回転糸切り								5	断面「T」の字形	e	回転ヘラケズリ
		f	静止糸切り								6	縁帯を持つ	f	回転ハケメ
										7	中央に窪みをもつ	g	タタキ	
												h	ロクロ目のみ	

口唇形態



第12図 ロクロ甕分類

註6  
宮城県白石市青木遺跡(1・2・4)福島県郡山市徳定遺跡(3)

赤焼き土器

ロクロ調整、酸化炎焼成の表面が白橙色～赤褐色を呈するもので、杯、小形杯、高台付き杯がまとまって確認されている。内外面共にミガキ・ケズリ等の再調整、黒色処理は加えられていない。器面はややザラついているが硬質で、土師器より高火度で焼成されたものと考えられる。このような赤焼き土器は杯・小形杯・高台付き杯にのみ用いることとする。

## 第3章 遺構と遺物

### 第1節 住居跡

#### 第1号住居跡(第13図・第4図版・第10表)

**検出状況** II区の遺構群が検出された地域の南端部のD・E-8~10グリッドに位置し、北2mには2・9・22号住居跡が重複し、南方7mに25・26・27号住居跡、西側0.8mに10・24・30号住居跡が検出されている。遺構確認面は地山上面である。

**プラン・規模・方向** 南辺は上層からやや削平されており、壁が凸凹しているが、東西約3.8m、南北約4.4mを測る隅丸方形を呈す。南壁と北壁の中央を通る軸線方向はN-10.5°-Eである。床面からは貯蔵穴と考えられるピットの他16個のピットが検出された。また、カマドは発見されなかった。

**覆土** 耕作による攪乱を受け、上面が大きく削平されている。南側が約10cmと厚く、北側が約3cmと浅い。砂質の青褐色土の1層からなり、褐鉄鉱を含んでいる。また、西側の一部の床面の上面に多量の焼土を含む黒褐色土と南西コーナー付近床面上には木炭の広がりが見られる。

**壁・床面** 壁高は北壁約10cm、南壁東寄り約3cm、西壁約5cm、東壁で約6cmを測り、残存状態は良好とは言えない。立ち上がり角度は約120°で緩やかに立ち上っている。

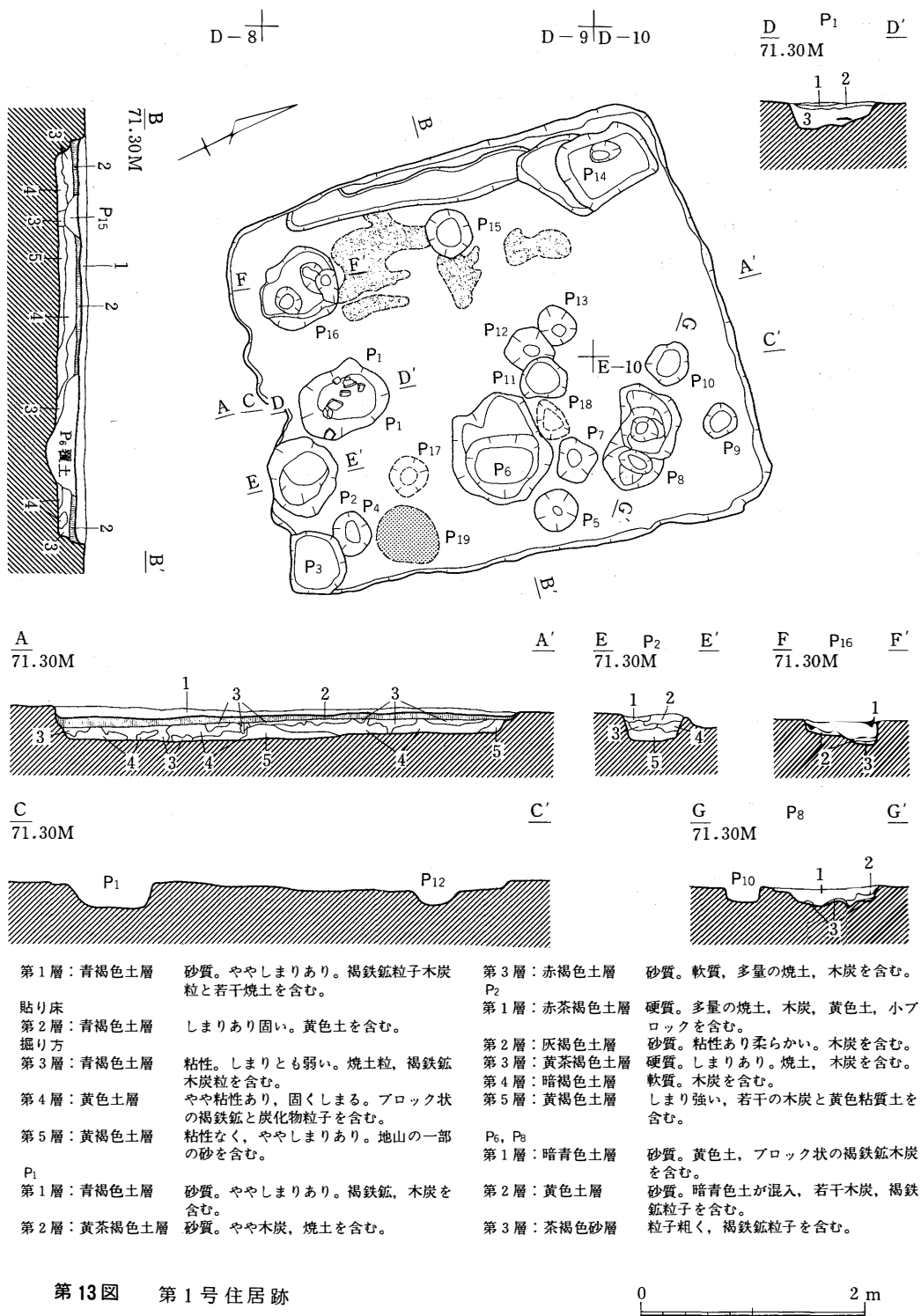
床面は貼り床されており、約15cmの深さの掘り方の上面に青褐色と黄色の土を貼っている。中央部及び西側はかなり固く貼っており、南西コーナー部分床面上に木炭がみられる。南側部分は黄色の固い面を持ち、焼土を含むピットが多く、北側は黄青色のやや固い面となる。床面はほぼ平坦で南から北にわずかに傾斜している。床面から17個のピット、床下から埋め土に焼土・木炭を含むピットが検出された。

**ピット** 床面からは17個のピットが検出された。

P<sub>1</sub>は旧貯蔵穴と考えられるもので、南北約80cm、東西約57cm、深さ24cmを測る楕円形のピットである。埋め土は砂質で多量の木炭や焼土を含み、遺物も多く出土している。第1層は住居跡内覆土、第2層は黄茶褐色土は貼り床と考えられ、第3層は赤褐色焼土層と3層から成る。このように貯蔵穴の上層に貼り床が見られることから、使用後に貼り床し、再度床面として使用したと思われる。

P<sub>2</sub>も上層に固い層が観察され、P<sub>1</sub>同様に埋め土に木炭や焼土を含む。P<sub>4</sub>、P<sub>8</sub>、P<sub>16</sub>はその位





第13図 第1号住居跡

## 第1節 住居跡

置関係から柱穴と考えられるが、深さは約15cm程度で、柱痕は検出されなかった。

P<sub>4</sub>・P<sub>16</sub>の埋め土は砂質の褐鉄鉱と黄色土と混合層で木炭を含んでおり、ほぼ水平に堆積し、本住居跡と同時に埋まったものと考えられる。また床下から焼土を含んだP<sub>17</sub>・P<sub>18</sub>が検出されている。周溝西壁に沿って南北に長さ約2.1cm、幅約35cm、深さ約7～10cmの溝状の落ち込みを検出した。この落ち込みはP<sub>15</sub>に切られている。埋め土は褐鉄鉱・木炭粒の含む青褐色土から成る。カマド検出されなかったが、南側に位置するP<sub>2</sub>は埋め土に焼土や木炭を含んでおり、P<sub>1</sub>は貯蔵穴と考えられ、遺物の出土も多い。このことから南壁中央部にカマドが構築されていた可能性が強い。

第10表 第1号住居跡ピット形態表

No	形状	計測値 (単位 cm)			柱痕 (単位 cm)		備考
		上面径	下面径	深さ	径	深さ	
P <sub>1</sub>	不整楕円形	81 × 59	52 × 39				貯蔵穴(?)
P <sub>2</sub>	不整形	73 × 60	40 × 30	24			
P <sub>3</sub>	不整形	56 × 50	46 × 40	6			
P <sub>4</sub>	不整楕円形	40 × 34	29 × 11				
P <sub>5</sub>	円形	37 × 37	10 × 6				
P <sub>6</sub>	不整形	100 × 90	52 × 34				
P <sub>7</sub>	不整形	42 × 38	16 × 13	12			
P <sub>8</sub>	不整形	92 × 53	13 × 11				
P <sub>9</sub>	不整円形	31 × 27	32 × 27	8			
P <sub>10</sub>	不整形	40 × 37	26 × 18				
P <sub>11</sub>	不整形	42 × 36	29 × 27	8			
P <sub>12</sub>	不整形	40 × 30	14 × 11	18			
P <sub>13</sub>	不整楕円形	36 × 30	11 × 10	19			
P <sub>14</sub>	不整形	128 × 73	65 × 42				
P <sub>15</sub>	楕円形	44 × 39	25 × 22				
P <sub>16</sub>	不整形	77 × 65	14 × 12				
P <sub>17</sub>	不整形	37 × 35	16 × 15	8			
P <sub>18</sub>	不整形	38 × 24	21 × 16	7			
P <sub>19</sub>	不整形	60 × 53					

掘り方 深さ約15cmほぼ方形の掘り方を持ち、焼土粒・褐鉄鉱粒子・木炭粒を含む青褐色土と黄色土から成る。床下からは焼土、ブロック状の木炭を含んだピット P<sub>17</sub>・P<sub>18</sub>が検出された。

遺物 実測可能な遺物は4点のみであるが、破片は土師器を中心に多く出土している。

遺構に伴う遺物(第14図2・3,第45図版-1,第11表)

土師器

杯(2) P<sub>1</sub>より出土したロクロ調整による内黒の杯で、底部から体部下半の約40%を残す。体部はやや内弯気味に立ち上がる器形を持ち、内外面とも摩滅が著しく、内面のミガキの単位も不明瞭である。底部切り離しは回転糸切りで再調整は見られず5b類に分類される。

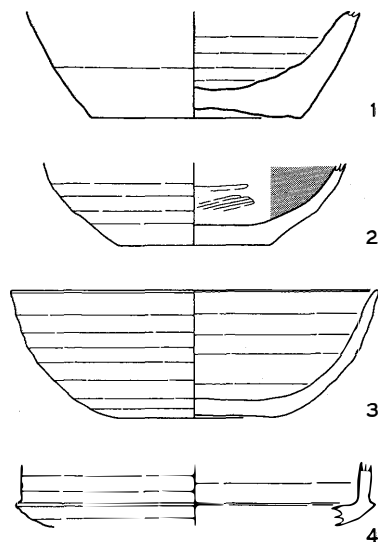
甕(1) 床面より出土したロクロ調整のもので底部から体部下半のみを残す。内面はロクロ目が顕著に見られ、底部はやや上げ底気味で切り離しは回転糸切り、再調整は施されておらず、Ie-※-※-(h-h)類に分類される。また胎土には小石を含み器面は大変粗くなっている。

須恵器

杯(3) P<sub>1</sub>より出土し、全体の約45%を残し、内弯気味に伸びる体部器形を持ち、口縁部は短かく、やや外傾する。底部は回転糸切りの切り離し痕を残し、再調整は見られず5b類に分類される。

覆土出土の遺物(第14図4,第11表)

須恵器(4) 床面直上層より出土し、体部の約10%の破片である底部は欠損するが丸底を呈す。



第14図 第1号住居跡出土遺物(1/3)

第11表 第1号住居跡出土土器一覧表

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
14	1		土師器	甕		床 面				8.2				
14	2		土師器	杯	1 ピット					6.1				内 黒
14	3	45-1	須恵器	杯	1 ピット		14.4			6.3	5.1			
14	4		須恵器	杯		床 直			13.9					

## 第1節 住居跡

残存部体部の器形はほぼ直立して立ち上がり、外面に段を持ち、残存部径は約13.9cmを測る。また、色調は内面が紫がかった茶色で外面が黒灰色である。

### 第2号住居跡(第15～17図・第5・6図版, 第12表)

**検出状況** II区の西側寄りC～E-11～13グリッドに検出された住居跡である。9号住居跡より新しく、北西部はわずかに22号住居跡を切っている。また、1・5号建物跡に切られており、建物跡より古い時期になる。南側約2mの所に1号住居跡、南西約1mに10号住居跡、西側約0.5mに5号溝、東側約1mに1号遺構が位置している。遺構検出面は地山上面である。

また床面精査後、本住居跡床面から北側部分を除き3辺に周溝が検出された。このことから本住居跡は拡張されたものであることが明らかとなった。そこで拡張後の住居跡を2a号、拡張前の住居跡を2b号住居跡とする。

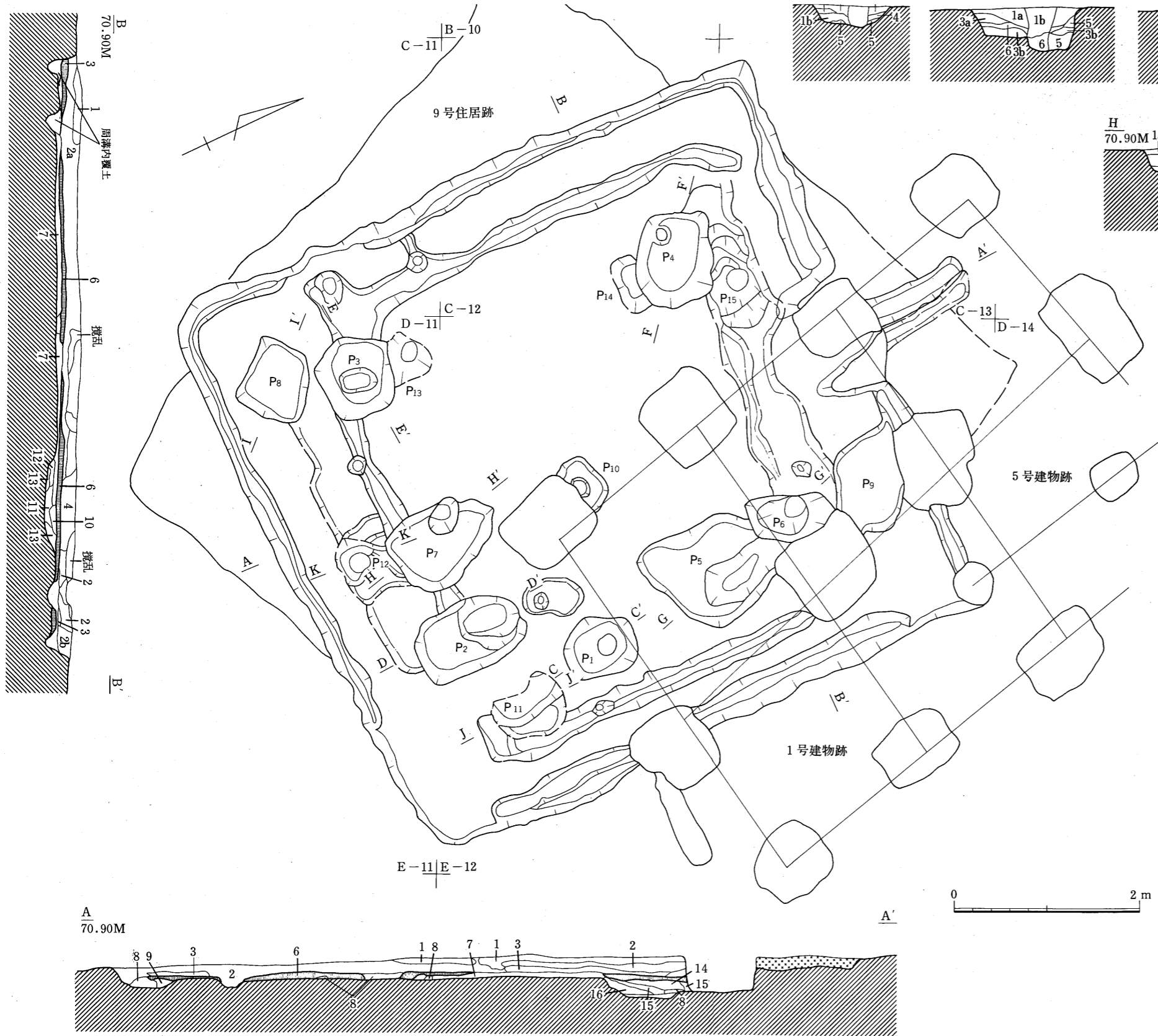
**プラン・規模・方向** 2a号住居跡は南北約6.8m、東西約6.6mの方形を呈し、総面積約44.9m<sup>2</sup>となり、本遺跡中プランの明らかな住居跡の中で一番規模の大きいものである。カマドは北壁中央に構築されており、新旧2基の煙道が検出された。また、周溝はほぼ全辺を回っている。北壁と南壁の中央を結ぶ軸線方向はN-1.5°-Eを向き、ほぼ真北を示している。

2b号住居跡は、壁面が2a号住居跡により完全に削平を受けているが、周溝の残存部分より東西約5.3m以上の大きさを持つ方形を呈する住居跡であったと考えられる。カマドは東壁南寄りに構築されていたことが、2a号住居跡東壁に壁によって切られた形で煙道が検出されたことにより知られる。

**覆土** 5層から成りほぼ水平な堆積を示しており自然堆積と考えられる。第1層は暗黄茶褐色土、第2層は青褐色土で2層とも木炭粒を含む固い層である。南側には青褐色の褐鉄鉱を含む第2層の分布が見られる。また第3層は暗茶褐色土、第4層は暗褐色土で砂を混入するしまりのない層である。第5層目が貼り床で、2b号住居跡周溝上層には貼り床が施されない部分もある。

**壁・床面** 2a号住居跡の壁は残存状態が良く四辺とも検出されたが、北壁と東壁の一部と北東コーナー部分を1・5号建物跡柱穴により壊されている。壁は地山を掘り込んで作られており、壁高は南壁が低く約10cm、北壁は高く約25cm、東西壁は約17cmを測る。また、立ち上がり角度は約105°～110°でやや外に開いている。2b号住居跡の壁はすでに削平されており不明である。

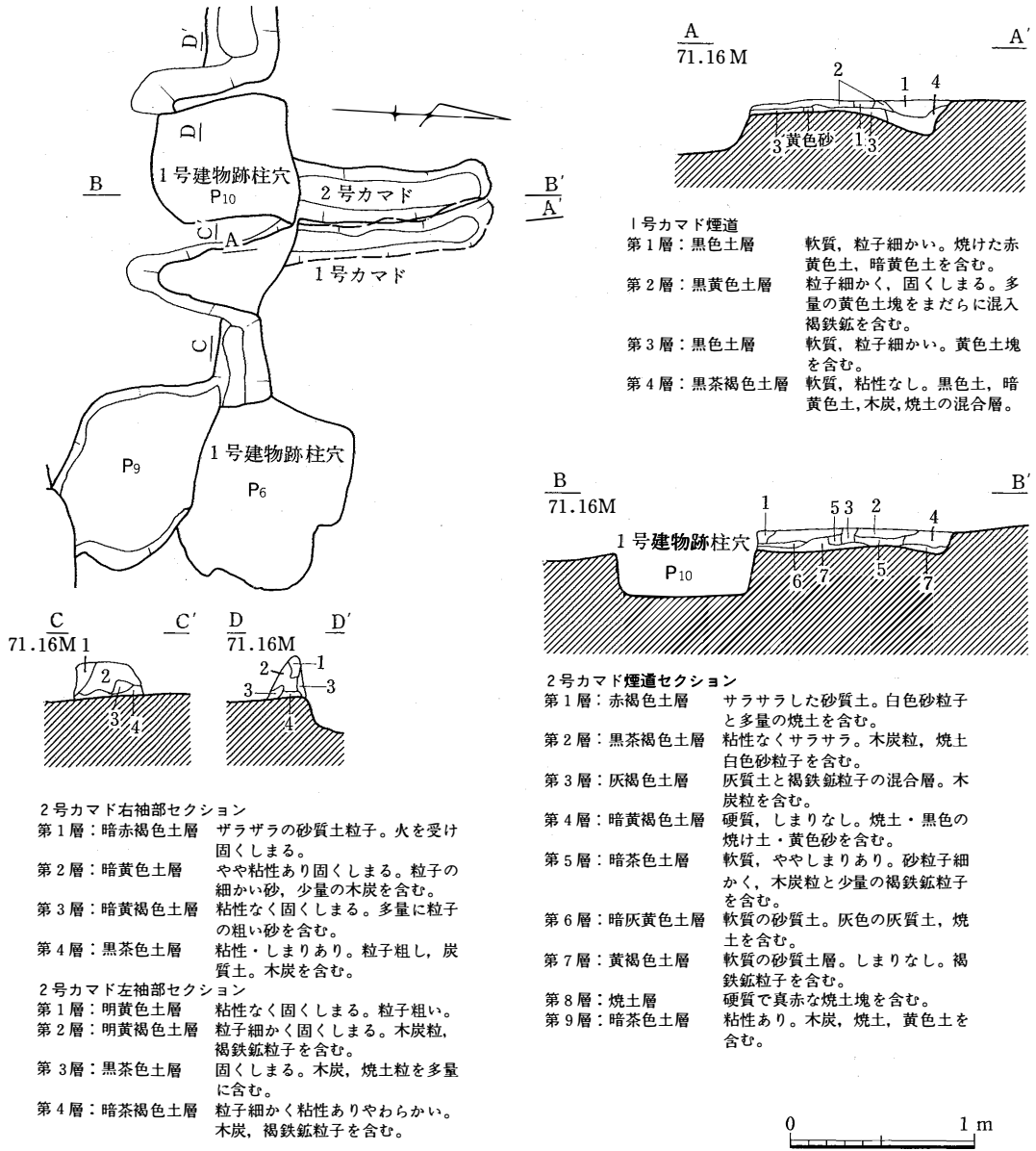
床面は厚さ約3～5cmの貼り床がほぼ全面に施されている。貼り床の主な部分は、固くしまりがあり、多量に黄色砂質土を混入する暗黄褐色土が占めている。いっぽう南側部分は黄色砂質土に褐鉄鉱を斑に含んだ層から成り木炭粒を混入している。床面は平坦で、一部1号建物跡柱穴により壊されている。2b号住居跡周溝上層には貼り床された部分と貼られていない部分が見られる。床面から8個のピットが検出された。



- 第1層：暗黄茶褐色土層 硬質。粘性なく砂粒子細かい。白色砂粒子，白黄土，木炭粒を含む。
- 第2a層：暗青褐色土層 暗青色砂質土と褐鉄鉱粒子の混合層。砂粒子粗く，木炭粒を含む。
- 第2c層：青褐色土層 軟質。多量の青褐色砂質土を含む。褐鉄鉱，木炭粒を含む。
- 第2b層：青灰色土層 硬質。粘性あり，木炭を含む。
- 第3層：暗茶褐色土層 砂質土。やや粘性あり，しまりなく，柔らかい。多量の粒子の細かい砂と木炭粒を含む。
- 第4層：暗褐色土層 しまりなく，粒子粗い。多量の青色砂質土と木炭を含む。
- 第6層：暗黄茶褐色土層 硬質。しまりあり。黄色砂質土を含む。
- 第7層：黄褐色土層 軟質。粘性なく，黄色砂質土，褐鉄鉱，木炭を含む。
- 第8層：灰黒色土層 粘性，しまり強い。黄色砂，木炭を含む。
- 第9層：黒灰茶褐色土層 砂質。粒子粗くやや粘性あり。わずかに木炭粒を混入。
- 第10層：暗黄茶褐色土層 硬質。粒子細かい。多量に木炭を混入。黄土を含む。
- 第11層：暗茶褐色土層 やや粘性あり，柔らかい。褐鉄鉱粒子，多量の木炭，焼土を含む。
- 第12層：暗黄色土層 砂質。やや粘性あり，柔らかい。木炭粒を含む。
- 第13層：明黄褐色土層 粒子粗く柔らかい。粘性強く，わずかに木炭を含む。
- 第14層：暗茶褐色土層 硬質。しまりあり。多量に黄色粘土を混入。褐鉄鉱を含む。
- 第15層：明茶褐色土層 硬質。粘性なく，砂質。粒子粗く，黄色粘質土を含む。
- 第16層：暗茶色土層 硬質。やや粘性あり。暗青色土，茶色砂質土を含む。
- P1-P8 砂質。硬質。多量の褐鉄鉱と，若干の青灰色土を含む。
- 第1a層：暗青灰色土層 やや粘性，しまりあり。多量の木炭，褐鉄鉱粒子と黄色砂質土を含む。
- 第2層：暗青灰色土層 やや粘性，しまりあり。粒子細かく，褐鉄鉱粒子を含む。
- 第3a層：暗黄褐色土層 粘性なく，多量の黄色砂粒子と木炭を含む。
- 第3b層：黄褐色土層 粘性あり，しまり強い。粒子粗く，黄色砂粒子と木炭を含む。
- 第4層：黒色土層 粘性強く，木炭・褐鉄鉱粒子を含む。
- 第5層：黄褐色砂層 粒子の粗いサラサラした砂質土層。
- 第6層：暗赤褐色土層 粘性強い。木炭と焼土の混合層。
- P11 第1層 赤黄茶褐色土層 硬質。しまり強い。粒子細かく木炭を含む。
- 第2層 黄茶色土層 粘性，しまりあり。やや固い。黄色の粘質土と木炭を含む。
- 第3層 赤茶色土層 粘性，しまりなし。茶色の灰質土に焼土を含む。
- 第4層 暗茶褐色土層 ややしまりあり。粒子細かくやわらかい。木炭を多量に含む。
- 第5層 暗青褐色土層 粘性，しまりあり。青色粘質土と褐鉄鉱の混合層。
- 第6層 暗黄色砂質土層 粘性なし。粒子の粗い砂，黄色粘質土塊を含む。
- 第7層 黄色土層 粘性，しまりともに強い。粒子粗い。
- P12 第1層 暗青黄色土層 やや粘性あり。しまりあり。青色粘質土と茶色砂質土の混合層。褐鉄鉱を含む。
- 第2層 暗茶色土層 硬質，しまりあり。黄色砂粒と若干の褐鉄鉱を含む。
- 第3層 黒茶色土層 やや粘性あり，しまりあり。粒子細かくやわらかい。木炭を含む。
- 第4層 黄茶色土層 粘性強くしまりあり。黄色粘質土を多く含む。
- 第5層 青褐色土層 粘性，しまりなし。褐鉄鉱を含む。

第15図 第2号住居跡平面図及びピットセクション

2a号住居跡床面と2b号住居跡周溝はほぼ同じレベルで一致しており、周溝内面の床面は部分的に2a号住居跡の床面として利用し、周溝外側部分に貼り床を施し拡張したものと考えられる。周溝 2a号住居跡周溝はカマド構築部分と東壁北側部分の約0.6mと南東コーナー、西壁南南寄りの一部0.9mを除いて検出された。幅は様でなく、北壁カマドの西側が最も広く約40cm,



第16図 第2a号住居跡カマド

## 第1節 住居跡

南側で約20cm, 東側で約30cmを測る。深さは北側で約18cm, 南側で約5cm, 東側で約7cmと浅くなっている。

2b号住居跡は北側を除く3辺で周溝が検出された。3辺とも2a号住居跡の壁とほぼ平行しており, 壁から南側が約115cm, 東壁が約50cm, 西側が約70cmの所に位置している。西側北端は緩く北東方向に曲がり北壁手前で止っている。東側は南でP<sub>11</sub>によって切られ, 北壁1.75m前で止る。また南側は所々ピットにより切断されている。

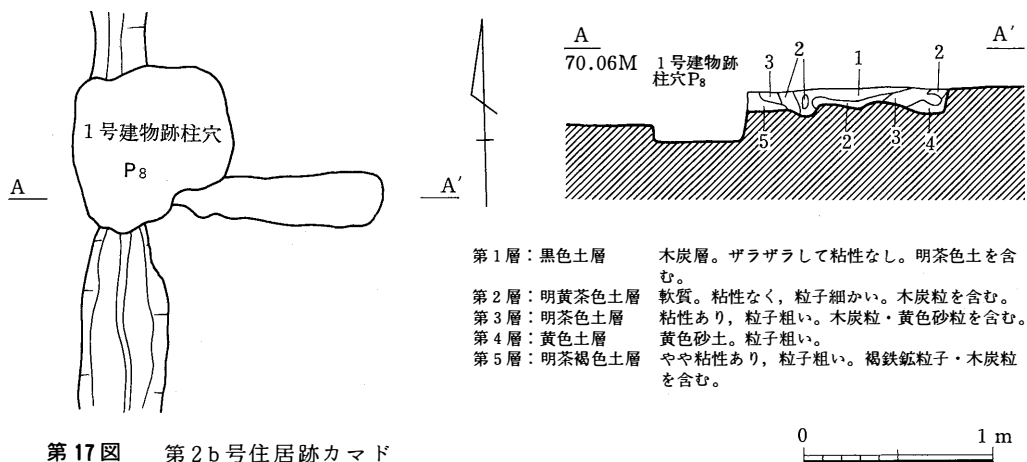
**ピット** ピットは床面から7個, 床下から8個の計15個が検出されている。このうち柱痕を持つピットはP<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>と床下のP<sub>12</sub>の7個ある。ピットの配置から主柱穴はP<sub>2</sub>～P<sub>5</sub>で柱間距離はP<sub>2</sub>～P<sub>3</sub>が2.9m, P<sub>3</sub>～P<sub>4</sub>が3.6m, P<sub>4</sub>～P<sub>5</sub>は2.9m, P<sub>5</sub>～P<sub>2</sub>が3.55mを測る。しかし, P<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>の間, P<sub>2</sub>から1.2mの所にP<sub>6</sub>が位置しており, 本住居跡の大きさから5本柱を持つ住居跡の可能性も考えられる。また掘り方埋め土は褐鉄鉱・木炭・黄色土を含む層から成る。

P<sub>9</sub>はカマドの東側約50cmの所に位置し貯蔵穴と考えられる。南北両端部を1号建物跡の柱穴により切られているが径約95cm, 深さ約10cmを測り, 底面は平坦である。遺物は土師器7片, 須恵器1片と非常に少ない。

P<sub>15</sub>は2b号住居跡の周溝内東側に位置し, 貼り床下から検出されており, 2b号住居跡に伴うピットと考えられる。長軸120cm, 短軸110cmを測る不整形を呈するピットで, 埋め土には多量の木炭と焼土を含み, 遺物の出土も多く, そのほとんどが土師器片である。P<sub>15</sub>の南側に2b号住居跡のカマド煙道があり, P<sub>15</sub>は貯蔵穴の性格を持つピットかもしれない。

**カマド** 2a号住居跡カマドは北壁中央部に構築されており, 新・旧2基の煙道が切り合った状態で検出され, 2期にわたって構築されたことがうかがわれる。ここでは旧煙道を有するカマドを1号カマド, 新煙道を持つものを2号カマドと呼ぶことにする。

1号カマドは煙道のみであるが, 2号カマド右袖部の東側に1号カマド袖部の基底部の高まり



第17図 第2b号住居跡カマド

が見られる。この煙道の長さは約108cm、幅約20～25cmを測り、先端部が脹らみ丸味を持つ。また先端部分は検出面から約20cm深さで落ち込み、第4層には木炭・焼土を含み、遺物の出土もみられる。また、上層の第1・2層も黒色を呈する焼土である。

2号カマドは両袖部とも地山を利用して作られており、焚き口部幅約85cm、右袖部の長さ約85cm、幅約40cm、高さ約18cm、左袖部の長さ約85cm、幅約25cm、高さ約23cmを測る。燃焼部から左袖部にかけては1号建物跡柱穴により破壊されており、詳細は不明であるが、右袖部内側及び焚き口部は真赤に焼けた面を持つ。特に右袖部内面はサラサラして立ち上がりも明確につかめないほど焼けていたことから、2号カマドは長期にわたって使用されたと考えられる。また、右袖部内壁添いに土師器杯3片が内面に重って出土している。煙道部は長さ約105cm、幅25～30cmを測り内側にやや内弯しながら伸びる。先端部は1号カマドほどではないがわずかに窪んでおり、上層に木炭・焼土を含む層が見られる。

第12表 第2号住居跡ピット形態表

No	形 状	計 測 値 (単位 cm)			柱 痕 (単位 cm)		備 考
		上 面 径	下 面 径	深 さ	径	深 さ	
P1	不 整 形	80 × 68	55 × 43	16			
P2	不 整 楕 円 形	119 × 75	47 × 26	57			
P3	不 整 形	88 × 77	28 × 16	61			
P4	不 整 形	101 × 85	79 × 50	50			
P5	不 整 形	150 × 118	70 × 11	25			
P6	不 整 形	95 × 49	26 × 21	74			
P7	不 整 形	118 × 82	97 × 60	22			
P8	不 整 形	80 × 66	63 × 53	46			貯 蔵 穴
P9	不 整 形	103 × 67	90 × 67	9			
P10	不 整 楕 円 形	65 × 35	57 × 30	1			
P11	不 整 形	61 × 28	48 × 22	4			
P12	不 整 形	77 × 51	64 × 22	79			
P13	不 整 形	77 × 55	23 × 19	13			
P14	不 整 形	54 × 43	22 × 17	23			
P15	不 整 形	61 × 21	35 × 13	23			貯 蔵 穴 ?



## 第1節 住居跡

2b号住居跡カマドは東壁南寄りに構築されており、煙道のみ2a号住居跡東壁に検出された。両袖部及び燃焼部は2a号住居跡と1号建物跡の柱穴により破壊されているため詳細は不明である。煙道部は周溝より0.6m東に離れた2a号住居跡東壁にほぼ垂直に取り付き、カマドが設置されたと見られる部分の床面は赤く焼けており焼土の散布が認められた。残存部煙道の長さは約120cm、幅約30cmを測り、先端部に向かって徐々に膨み丸味を持つ。先端は検出面から約13cmの深さで円形状に落ち込み、この5層に多量の木炭を含み、遺物も出土している。

**掘り方** 明確な掘り方は検出されなかった。地山に黄色砂質土・褐鉄鉱・木炭を含む黄褐色土を敷き、上層に貼り床を貼っている。また、北側と南側に溝状の落ち込みがあり、第10～16層まではこの溝状の落ち込みの埋め土である。下層には第8層の粘性としまりの強い灰黒色土が見られる。

**遺物** 810点と多量の遺物が出土している。そのほとんどが土師器片で実測可能なものは少ない。また床下から土玉1点、白玉2点が出土している。

2b号住居跡は周溝内と煙道先端より土師器数点が出土している。

### 遺構に伴う遺物〔第2a号住居跡〕(第18図, 第45図版2～7, 第13表)

#### 土師器

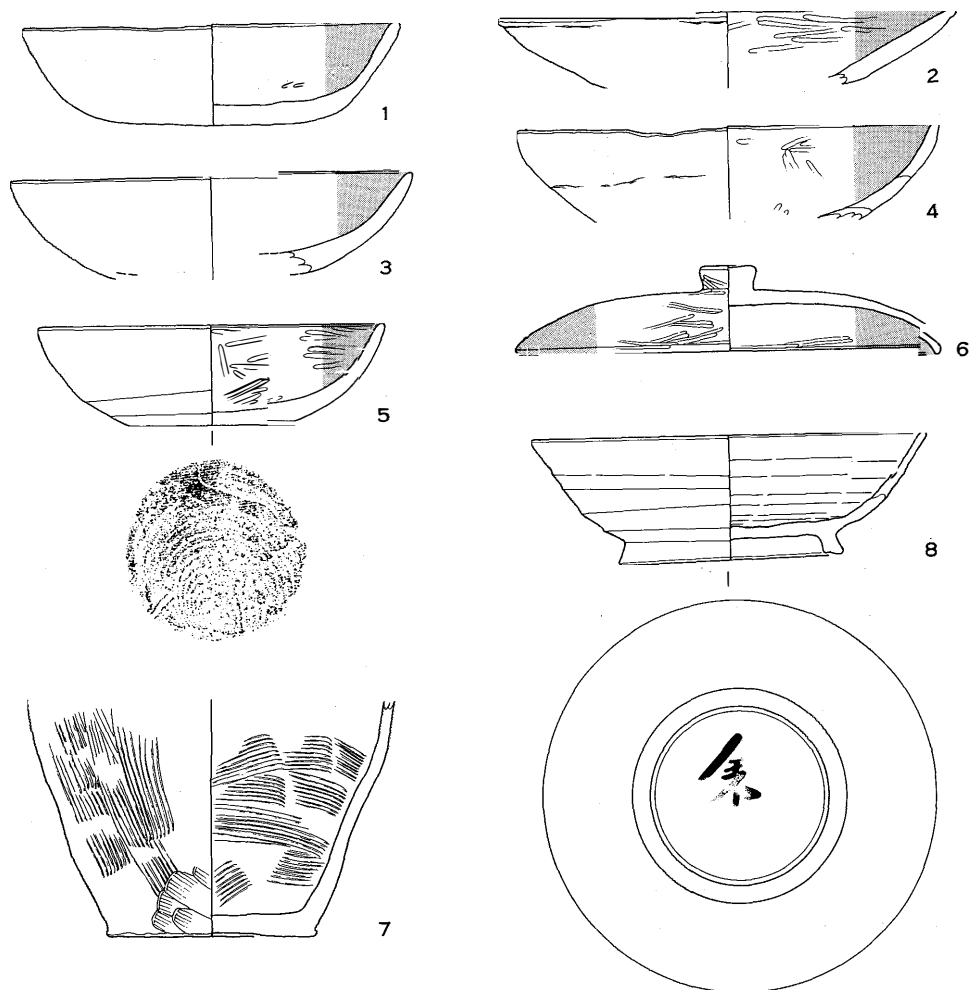
杯(1～5) 1・3はカマド, 2・5は床面, 4はP<sub>3</sub>より出土した内面黒色処理の杯で, 1は全体の約80%, 3・4は全体の約40%, 5は全体の約60%を残し, 2は口縁部のみの破片である。また, 5点とも摩滅が著しく器面が荒れている。

1は平底風丸底で底部から内弯気味に立ち上がり口縁部に至る。内外面とも再調整は不明であるが, 外面は底部から体部下半に手持ちヘラケズリが施されていると思われる。また内面もわずかにミガキの単位が観察されるのみである。口縁部は波状を呈しており, 摩滅したものは判断できないため図は平坦なものとして作図した。II a-4-C<sub>1</sub>-(※-b)類に分類される。

2～4は3点とも底部を欠損するが丸底の杯で, 3・4は平底風を呈すかもしれない。2は口縁部に向かって外反し, 口唇部は丸味を持つ。外面には沈線化した段がわずかに残り, 内面も段の痕跡が見られる。調整は内面が横方向のミガキが施され, 外面は不明で※-3f-D<sub>4</sub>-(※-b)類である。

3・4は残存部体部が内弯気味に立ち上がり口縁部に至るほぼ同じ器形を有すが, 4は口縁部でやや直立している。2点とも内外面に段を持たない。再調整は内面がミガキであるが単位・方向は不明で, 特に3は再酸化を受けており黒色処理がとび, 淡橙色となっている。また, 外面も摩滅が著しく不明で2点共分類は※-4-B<sub>1</sub>-(※-b)類である。

5は, ロクロ調整の平底の杯である。体部は内弯して伸び口縁部に至りやや外傾する。内面は



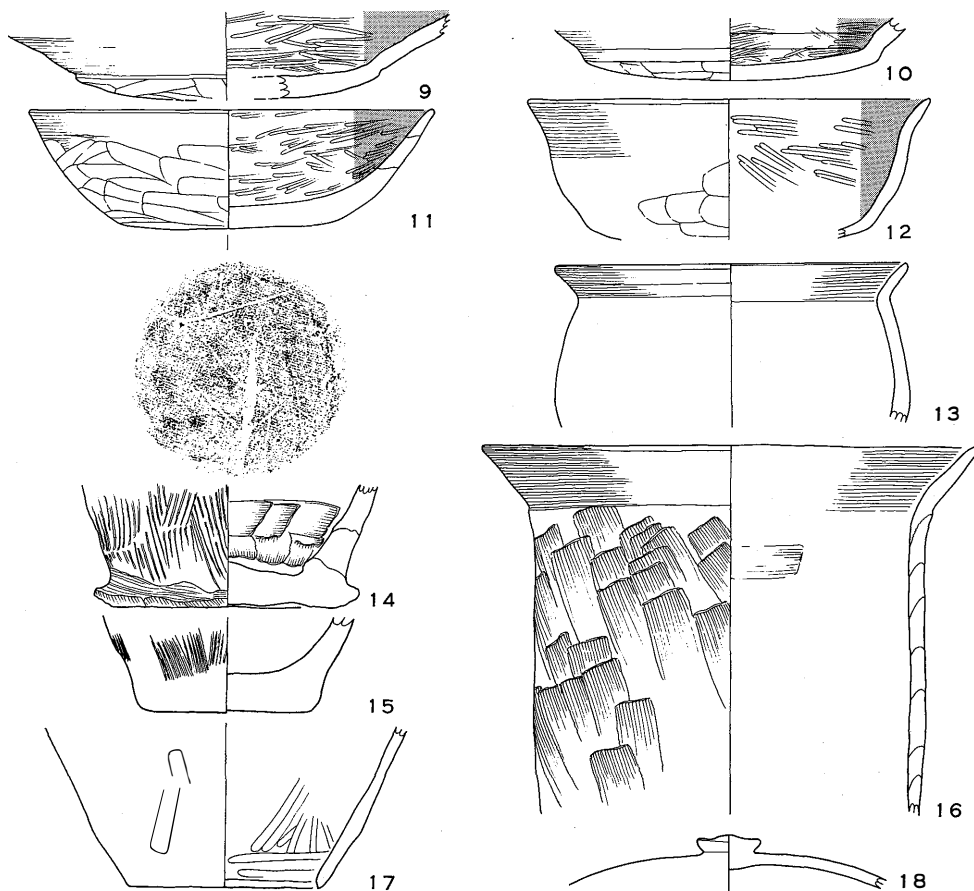
第18図 第2a号住居跡出土遺物 (1/3)

ミガキが見られ、底部切り離しは回転糸切りで、体部下半に回転ヘラケズリの再調整が施されており3b類に分類される。

甕(7) カマド内より出土し、底部から体部下半を残す非ロクロの甕である。底部外辺がわずかに張り出し、外傾しながら伸びる残存部器形を呈す。胎土に小石を含み器面は荒れているが、底部外面には木葉痕が残り、体部外面はハケメ、ナデ、内面にハケメの調整が施され、分類はI<sub>d</sub>-※-※-(da-d)類である。

蓋(6) P<sub>8</sub>より出土した内外面黒色処理の蓋で、全体の約50%を残す。天井部から内弯気味に広がって口縁部に至り、口唇部で短かく内傾し丸くおさめる。つまみはやや真中が窪む、扁平な擬宝珠様を呈している。調整は内外面にていねいなミガキが施されており、胎土・焼成とも良好である。

第1節 住居跡



第19図 第2a号住居跡出土遺物 (1/4)

須恵器

高台付杯(8) 床面より出土し、全体の約70%を残す。杯部器形は体部下端から外傾して開き口縁部に至り、器厚は2~4mmと薄手である。底部は回転糸切りの切り離し痕がわずかに残り、貼り付け高台を付けた際に外周にナデを施している。高台は器厚約7mmの断面が台形状を呈し、やや外に開いている。また、底部には墨書が見られるが判読は難しく「余」の文字かもしれない。胎土にわずかに砂を含むが焼成は良好である。

覆土出土の遺物(第2a号住居跡)(第19・20図, 第45図版8~12, 第13表)

土師器

杯(9~12) 9・10は第2層より, 11は第1層, 12はP<sub>15</sub>より出土した内面黒処理の非ロクロ杯で9・10・12全体の約20%ぐらいの破片で, 11は全体の約80%を残している。

9は底部が丸底で体部内外面に段を残し, 10は平底風丸底を呈し, 9同様内外面の体部下半に

段を持つ。2点とも口縁部は外反しており、口唇部形態は不明である。外面体部には手持ヘラケズリの再調整が施され、内面はミガキが見られる。特に9はていねいなミガキである。分類は9がI-3f-D<sub>2</sub>-(ca-b)類、10がIIa-3c-D<sub>2</sub>-(ca-b)類である。

11は内外面無段の平底の杯であるが、底部器厚が約9mmと厚めで底部外周がケズリによりやや丸味を帯びている。体部器形は外傾しながら立ち上がり口縁部に至る。底部には木葉痕が残り、外周から口縁部までヨコナデの後、手持ちヘラケズリの再調整が施されている。また、内面は定部に放射状、体部は横方向のミガキが見られる。分類はIIIb-4-C<sub>1</sub>-(ac-b)類である。

12は体部下半から内湾しながら立ち上がり、口縁部に至り外傾する器形を残す。底部は欠損しており不明であるが丸底風平底を呈すかもしれない。体部外面には手持ちヘラケズリ、内面には横方向のミガキの調整が施され、内面黒色処理である。分類は※<sub>a</sub>-4-C<sub>1</sub>-(c-b)類である。

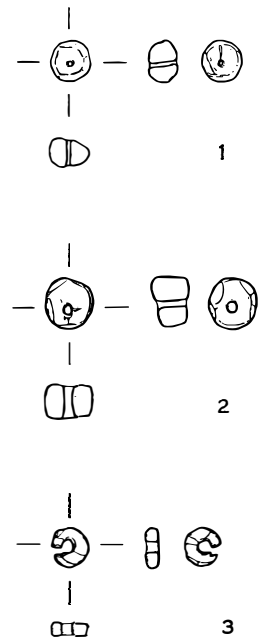
小形甕(13) P<sub>15</sub>より出土した非ロクロの小形甕で、口縁部及び体部上半の約40%を残す。残存部器形はやや内湾した体部を有し、頸部は無段で、口縁に至り外傾する。調整は摩滅がひどいため不明である。口縁部のみ内外面にナデが見られる。胎土には石英の小石を含み、再酸化を受けたと思われる、赤橙色に変色している。分類は※-3c-C<sub>1</sub>-(a-a)類である。

甕(14~16) 14はP<sub>15</sub>、15は南側の床下、16は第1層より出土した非ロクロの甕である。14・15は底部のみ、16は体部中位から口縁部にかけて約40%を残す。

14は底部外辺がやや張り出した後窪み、体部下半は外傾する残存部器形を呈する。調整は外面体部はハケメ、下端は横方向のナデである。また、底部外面に木葉痕が残り、内面はナデが施され、中央部が高まりを見せる。分類はId-※-※-(da-a)類である。15は平底の体部下半にかけて外傾する器形を残す。胎土が粗く、器面は荒れているが、体部外面はハケメ、内面ナデの調整が施されており、底部は木葉痕が残る。分類はId-※-※-(d-a)類である。16はほぼ直立して立ち上がる体部を有し、口縁部で外傾する。また、頸部にはわずかに段の痕跡を残す。調整は外面がナデ、内面は摩滅しているがハケメである。胎土には小石を多く含んでいる。分類は※-5a-C<sub>2</sub>-(a-ad)類である。

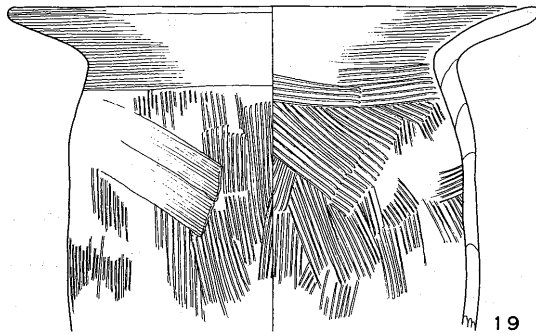
甗(17) 床下より出土した甗の器形を呈する甗で体部下半の約40%を残す。残存部体部は外傾して立ち上がる。器面は摩滅が著しく、外面にはわずかにケズリの単位が見られ、内面には太いミガキの調整が施されている。分類はI-※-※-(c-b)類である。

蓋(18) 第2層より出土した非ロクロの蓋で同一個体のものが2片出

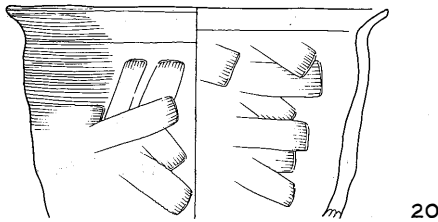


第20図 第2b号住居跡出土遺物 (1/2)

第1節 住居跡



土しており、1片は口縁部であるが接合は不可能である。天井部からやや内弯気味に伸び口縁部に至り、口唇部はわずかに直立して丸くおさめる。つまみは宝珠形を呈している。内外面は非常に摩滅が著しいため、再調整は不明であるが、内面にわずかに黒色処理の痕跡が見られるが、色調は灰褐色である。



土製品

土 玉(1) 床下より出土したもので、裏面は少し剝離している。径1.0cm、厚さ0.7cm、重さ0.8gを測り、径約0.1cmの孔が貫通している。色調は黒色を呈する。

第21図 第2b号住居跡出土遺物 (1/3)

石製品

白 玉(2・3) 2点とも床下より出土している。2は完形で、径1.3cm、重さ2.6gを測り、径0.2cmの孔が貫通している。3とは異なり、厚さは均一でなく0.6~0.9cmで断面は台形状を呈している。石質は珪質岩である。

3は径0.9cm、厚さ0.3cm、重さ0.5gを測り、薄いものである。中心に約0.3cmの径の孔が貫通している。石質は珪質岩である。

遺構に伴う遺物〔第2b号住居跡〕(第21図、第45図版13、第13表)

土師器

甕(19) カマド煙道の先端部より出土した非ロクロの甕である。体部上半から口縁部の約40%を残し、器形は体部がやや内弯気味に直立し、口縁部に至り強く外反する。胎土に小石を含み、器面はやや荒れており、黒茶褐色を呈しているが、体部外面にハケメの後ナデ、内面にハケメの調整が見られる。分類は※-5a-C<sub>2</sub>-(a-ad)類である。

小形甕(20) 1と同様カマド煙道部先端より出土した非ロクロの小形甕で、底部は欠損しており全体の約30%を残す。全体に歪みが激しく残存高約8.3cmを測る。器形は体部がやや外傾気味に立ち上がった後、口縁部で短かく外反する。調整は内外面ともナデが施されており※-1a-A<sub>1</sub>-(a-a)類に分類される。一部黒色を呈するところも見られる。(氏家 浩子)

第13表 第2a・2b号住居跡出土土器一覧表

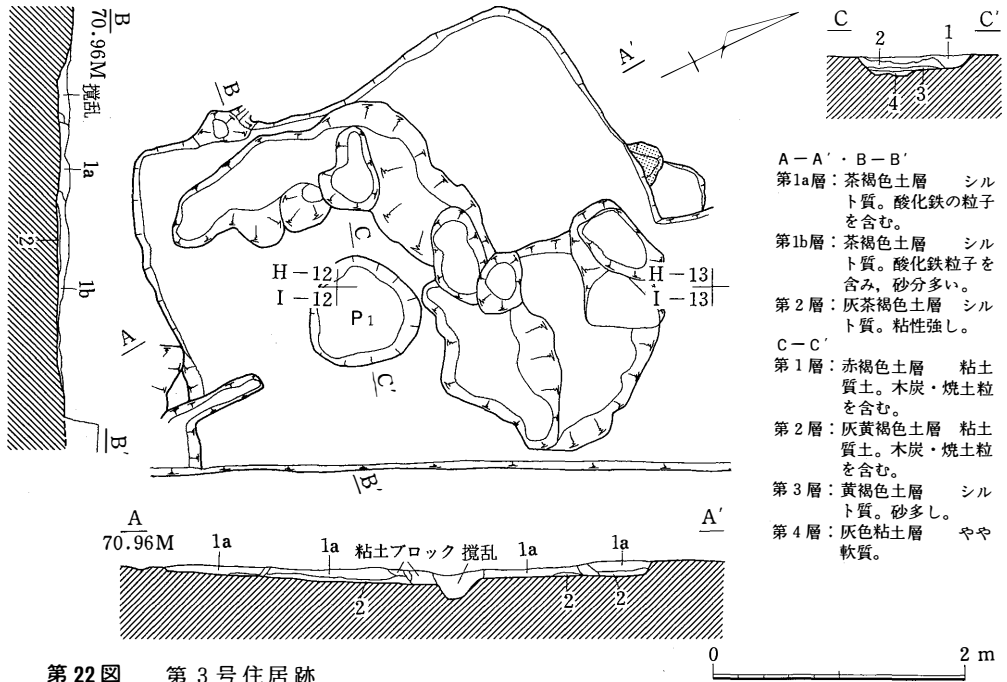
図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
18	1	45-2	土師器	杯	カマド		14.8				4.0			内黒
18	2		土師器	杯		床面	17.9							内黒
18	3	45-3	土師器	杯	カマド		15.8							内黒
18	4		土師器	杯	3号 ピット	床下	16.6							内黒
18	5	46-4	土師器	杯		床面	13.6			6.5	4.0			内黒
18	6	45-5	土師器	蓋	2号 ピット		16.5				つまみ 径3.2	つまみ 高0.9		内黒
18	7	45-7	土師器	甕	カマド					8.1				
18	8	45-6	須恵器	高台付杯		床面	15.6			8.2	5.0			墨書
19	9		土師器	杯		ℓ-2								内黒
19	10		土師器	杯		ℓ-2								内黒
19	11	45-8	土師器	杯		ℓ-1	16.2			8.5	4.7			内黒 木葉痕
19	12		土師器	杯		床下	15.4							内黒
19	13		土師器	甕	15号 ピット		14.0			14.1	6.5			
19	14		土師器	甕	15号 ピット					9.1	4.8			
19	15		土師器	甕		ℓ-1	19.6			15.5	14.7			
19	16		土師器	甕		ℓ-1				5.0				
19	17		土師器	甎		床下				7.5				
19	18		土師器	蓋		ℓ-2					つまみ 径2.5	つまみ 高0.8		
21	19		土師器	甕	煙道		23.2							
21	20		土師器	甕	煙道		14.3							

第3号住居跡 (第22図, 第7図版)

検出状況 II区のH・I-12・13グリッドより検出された竪穴住居跡で、覆土の一部を6号ピットに切られ、南辺部が4号住居跡・2・3号ピットを切っている。南西コーナー付近から、北東コーナーにかけて大きな攪乱が入り、北辺東半部は攪乱により検出されなかった。

プラン・規模・方向 東半分は攪乱、及び調査区外で不明であり、残った部分からは南北3.85m<sup>2</sup>の歪んだ隅丸方形のプランを有すると推定される。南北軸はほぼ真北に近く、北壁中央に接して焼土の入った浅いピットがありカマドの痕跡と推定される。

第1節 住居跡



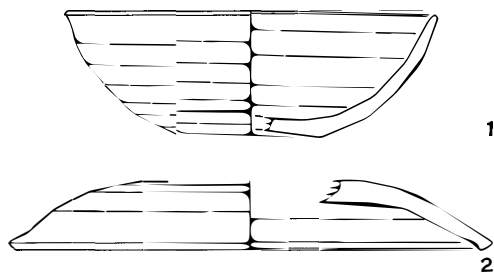
- A-A'・B-B'
- 第1a層：茶褐色土層 シルト質。酸化鉄の粒子を含む。
  - 第1b層：茶褐色土層 シルト質。酸化鉄粒子を含み、砂分多い。
  - 第2層：灰茶褐色土層 シルト質。粘性強し。
- C-C'
- 第1層：赤褐色土層 粘土質土。木炭・焼土粒を含む。
  - 第2層：灰黄褐色土層 粘土質土。木炭・焼土粒を含む。
  - 第3層：黄褐色土層 シルト質。砂多し。
  - 第4層：灰色粘土層 やや軟質。

**覆土** 床面までの深さが最大で12cmあり、覆土は褐鉄鉱粒を含んだ第1a・1b層と、床面上の堆積と考えられる薄い第2層が検出されている。これらはシルト質土であり、上半部の大部分が削平を受けているので自然堆積か人工堆積かは不明である。

**壁・床面** 上部が削平を受けたため壁の残りは悪く、北壁で最高12cm、西壁・南壁で2~7cm 南壁・北壁の東半分は攪乱を受けており検出されなかった。立ち上りは北壁で床面より115°を測る。

床面は地山を掘り込んだあまりしまりのよくないもので、プランの検出された西半分から中央部のみが検出された。南西コーナーから北東コーナー部にかけて大きく攪乱を受けている。

**ピット** 床面中央部から直径88cm、深さ16cmのやや歪んだ円形ピットが検出されており、覆土には木炭粒・焼土粒を含んでいる。



第23図 第3号住居跡出土遺物 (1/3)

- 周溝** 検出されなかった。
- カマド** 北壁中央部に接して30×40cm、深さ約2cmの焼土入りの浅いピットがあり、これがカマドの痕跡であるかもしれない。
- 掘り方** 検出されなかった。
- 遺物** 土師器甕の体部破片が出土しているが、復元・実測は不可能であった。

遺構に伴う遺物(第23図1, 第14表)

須 恵 器

杯(1) 床面より1点出土しており, 小さな底部と丸味を帯びた体部を有するもので, 底面に回転糸切り痕を残す5b類である。色調は明るい灰色を呈し, 胎土・焼成とも良好である。

覆土出土の遺物(第23図2, 第14表)

須 恵 器

蓋(2) 攪乱孔の底面より出土した須恵器の蓋の破片である。ツマミを欠損しており, 蓋の身は低いドーム状を呈する。肩部から上面にかけては回転ヘラケズリ調整が加えられており, 色調は明るい青灰色である。

第14表 第3号住居跡出土土器一覧表

図	番号	写 真	名 称	器 形	位 置	層 位	法 量 (単位 cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
23	1		須恵器	杯		床 面	14.5			5.6	5.0			
23	2		須恵器	蓋			18.3							

第4号住居跡(第24図, 第8図版)

検出状況 II区H・I-11・12グリッドより検出され, 覆土の一部を3号住居跡, 覆土・床面の一部を2・3号ピット, 南西コーナーを2号遺構に切られている。検出面は地山上面である。

プラン・規模・方向 北壁東半部が他の遺構に切られ, 東壁部は調査区外で正確なプランは不明である。残存部の調査部分は南北3.8m, 東西5.2m以上の長方形のプランになる。

方位は残存する西壁からN-10°-Wと推定される。

覆 土 厚さは中央部で8cm, 壁沿いの溝状部分で最大17cmを測る。堆積順序は, まず溝状の部分に第3・4層が堆積し, その後中央部に第1~3層が堆積している。しかし, 各層は間に多くブロックを含み, 細切れの状態では堆積しているため, 人工的堆積の可能性が高い。なお, 貼り床的部分は見られなかった。

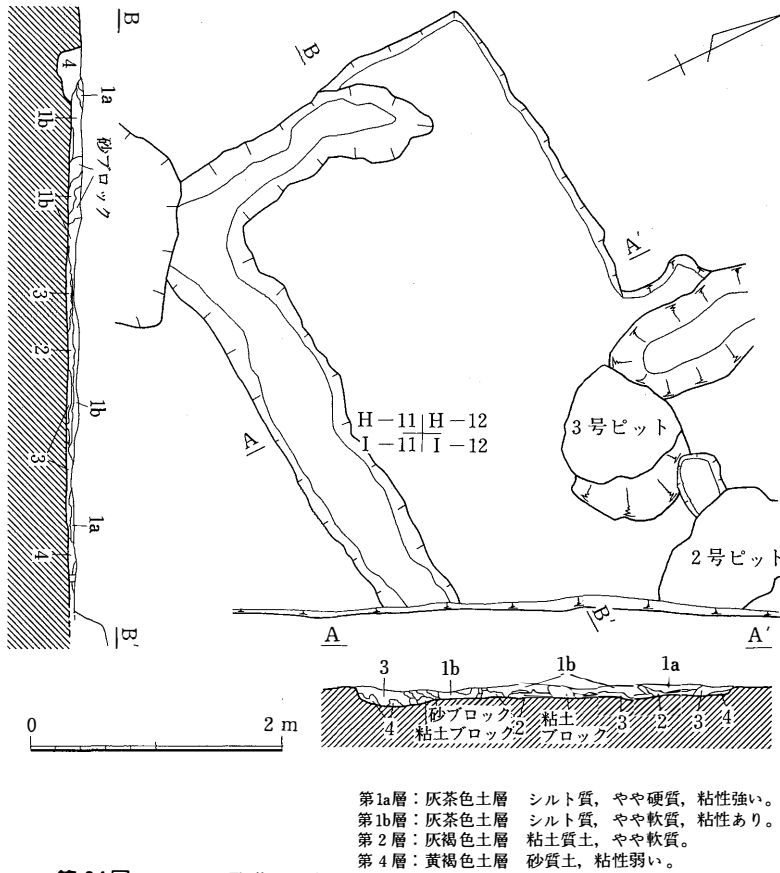
壁・床面 壁は北西コーナーから北辺にかけて深さ5~7cm, 床面より約120°で残っており, 西辺~南辺は溝状の掘り込みの壁となっている。これらは地山を掘り込んだのみのものである。

床面は地山を掘り込んだもので, 叩きしめられたような痕跡は見られず, やや軟弱である。

ピ ッ ト 検出されなかった。



第1節 住居跡



第24図 第4号住居跡

(表杉ノ入式の時期)を示すと考えられる。(木本 元治)

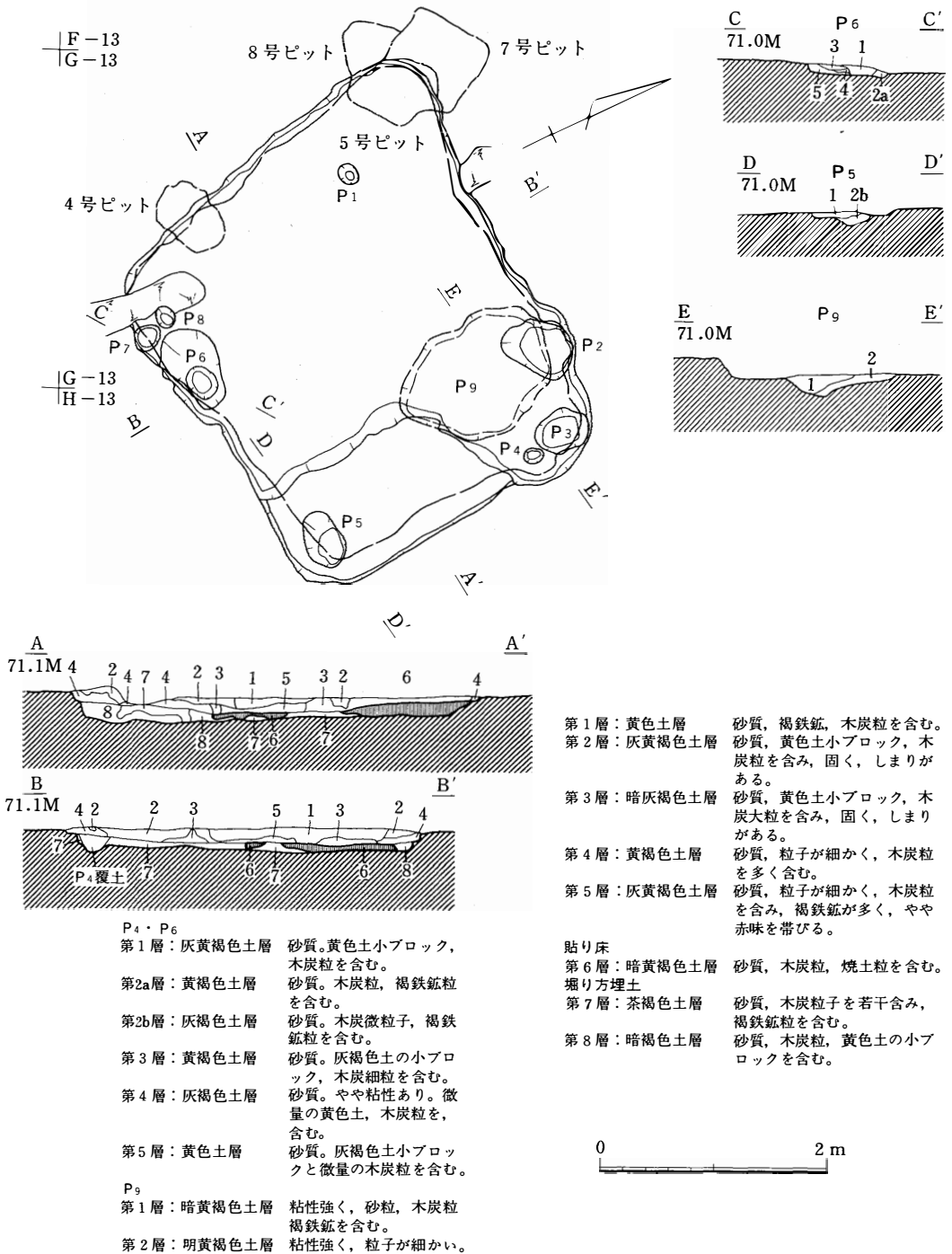
第5号住居跡(第25図, 第9図版, 第15表)

検出状況 II区のH・I-14・15グリッドで検出された住居跡である。遺構確認面は地山上面である。南側約1mには3号住居跡とこれを切る4号住居跡が検出され、北側約2mには11号住居跡とこれを切る2号建物跡が検出されている。本住居跡は4・5・7・8号ピットを切っている。また北西コーナーの一部は後世の溝跡により床面まで削平されている。

プラン・規模・方向 東西約3.9m, 南北約3mを測り, プランは東西に長い不整隅丸方形を呈し, とくに北西コーナーが外側に張り出している。南・北壁の中心を通る軸線はN-8°-Wを向く。住居跡の総面積は約12m<sup>2</sup>である。本住居跡より少し小さめの不整隅丸方形の掘り方をもつ。

覆土 覆土は5層から成る。全体的に砂質で, 黄褐色土と灰褐色土を基調としている。また全ての土層に木炭粒を含むが第3・4層は特に多く含まれる。第6層目が貼り床である。本住居

周溝 検出されなかった。  
 カマド 検出されなかった。  
 掘り方 以上の状況を総合すると, 竪穴住居の掘り方の上面が削平されたものと考えられる。  
 遺物 ロクロ調整の土師器甕, 内黒の土師器杯, 体部にハケメのある土師器甕の破片が少量出土しているが, 小片のため器形は不明である。これらは覆土出土であるが竪穴住居の掘り方であるため, 遺構の上限年代



第25図 第5号住居跡

## 第1節 住居跡

跡の堆積状態は壁際の第4層が斜位に堆積しているが、第2・3層がブロック状に入る部分も見られ、自然堆積かどうかは不明である。

**壁・床面** 壁は四壁とも検出されたが、耕作による削平のため壁高は検出面からわずかに4～10cm程である。比較的残存率のいい北壁の床面からの法面角度は約117°でゆるやかにちあがる。床面は中央部が低く、壁に近づくにつれて徐々に高くなっており、その差は8cm程度である。床面には部分的に貼り床が施されているが良好な状態ではなく、掘り方埋土より若干かたくなっているという程度である。ただし住居跡の中央部はかたくたたきしめられている。また南東コーナーには約1×1.8m程の長方形の土壇状になった部分が検出された。この土壇状になった部分は貼り床が他の床面よりも5cm程高くなっている。

**ピット** 床面からはP<sub>1</sub>～P<sub>8</sub>までの8個のピットが検出された。形状は円形、もしくは不整楕円形を呈し、深さは10cm程度といずれも浅く柱痕等が確認されないため、これらのピットが本住居跡の柱穴かどうかは不明である。また掘り方底面よりP<sub>9</sub>が検出された。P<sub>9</sub>の覆土は掘り方埋土、および他のピットの覆土とは異なり粘質であることから、本住居跡に伴うピットではないと考えられる。

**周溝** 検出されなかった。

**カマド** 検出されなかった。

**掘り方** 掘り方のプランは東西に約3.1m、南北に約2.8mを測り住居跡と同様に不整隅丸方形を呈し、住居跡よりも小さい。本住居跡の貼り床からの深さは3～5cm程である。掘り方底面

第15表 第5号住居跡ピット形態表

No.	形状	計測値 (単位 cm)			柱痕 (単位 cm)		備考
		上面径	下面径	深さ	径	深さ	
P <sub>1</sub>	楕円形	20×16	9×6	14			
P <sub>2</sub>	不整楕円形	65×46	48×34	19			
P <sub>3</sub>	不整方形	50×35	38×24	16			
P <sub>4</sub>	楕円形	18×14	12×7	4			
P <sub>5</sub>	不整楕円形	52×32	33×33	10			
P <sub>6</sub>	不整楕円形	69×23	29×13	28			
P <sub>7</sub>	不整楕円形	27×21	19×14	8			
P <sub>8</sub>	楕円形	21×16	13×7	11			
P <sub>9</sub>	不整楕円形	143×100	134×90	5			

からはP<sub>9</sub>が検出されている。掘り方の堆積状態は茶褐色土と暗褐色土をブロック状に堆積していることから、人為堆積と思われる。

遺物 覆土が削平されているため、遺物の出土点数は非常に少ない。破片数は第66表に示す。

遺構に伴う遺物 (第26図1, 第16表)

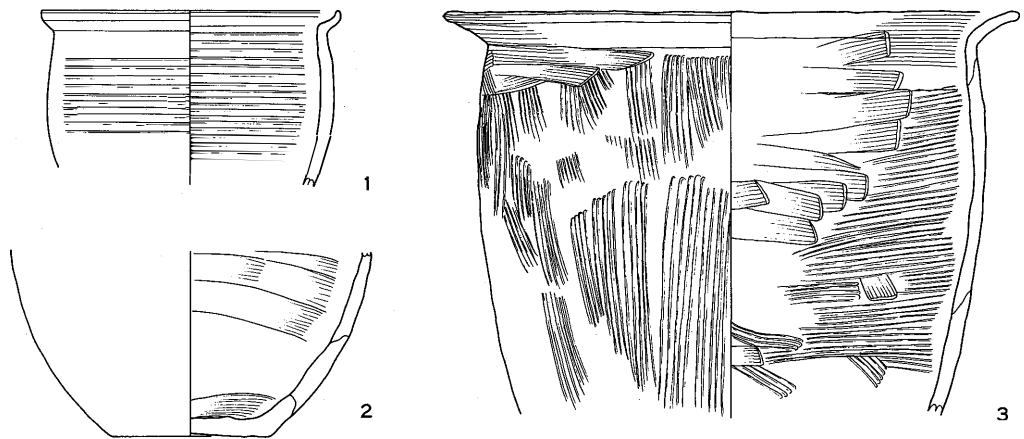
土師器

小形甕(1) 1は床面より出土したロクロ調整の小形甕で、口縁部から体部にかけての約40%を残す破片で、残存高は7cmを測る。底部は欠損しているため不明である。体部は内弯してたちあがり、やや丸味をもって頸部に至る。頸部には段がなく、口縁部は短く外傾してたちあがり口縁端部は上につまみだされるような形を呈する。最大径は口縁部にある。回転ハケメによる再調整が体部内外面に施されている。ロクロ調整の甕の分類を使用すると、※-2<sub>a</sub>-C<sub>3</sub>-(f-f)類に分類される。

覆土出土の遺物 (第26図2・3, 第16表)

土師器

甕(2・3) 2・3ともに第1層より出土した非ロクロの甕である。2は底部から体部下半にかけて破片である。内外面ともに摩滅が激しいが、内面にはわずかにヘラナデが観察される。色調は外面が赤茶褐色、内面が黄茶褐色を呈し、胎土は粗く径2~5mmの長石、石英の粒子を含む。3は口縁部から体部中位までの約40%を残す破片で、残存高は16.2cmである。体部下端が欠損しているため底部は不明である。体部は内弯しつつたちあがり、そのまま頸部に至る逆台形を呈し、



第26図 第5号住居跡出土遺物 (1/3)

## 第1節 住居跡

頸部には段をもたない。調整は外面には口縁部にヨコナデ、体部に縦方向のハケメが施され内面には横方向のハケメとヘラナデが施されている。色調は暗い茶褐色を呈し、胎土は密であるが径5mm大の小石を少し含む。※-7a-B<sub>1</sub>-(ad-ad)類に分類される。

第16表 第5号住居跡出土土器一覧表

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
26	1		土師器	甕	床 面		11.9	10.9	11.4					
26	2		土師器	甕		ℓ-1				6.3				
26	3		土師器	甕		ℓ-1	23.0	19.9	20.8					

## 第8号住居跡(第27・28図, 第10図版, 第17表)

**検出状況** II区のE~G-19~21グリッドにかけて検出された住居跡である。本住居跡は25号ピットを切り、25号ピットは6号不明遺構を切っている。本住居跡の東側約10cmには6号溝跡、同じく東側約2mには13・14号住居跡、また西側約1mには15号住居跡、北側約2mには19号住居跡が検出されている。遺構確認面は地山上面である。

**プラン・規模・方向** 本住居跡は東西に約3m、南北に約2.4mを測る。東西にやや長い隅丸長方形のプランを有する。北壁の西側寄りに東西約1.4m、南北約0.6mの張り出し部をもち、この張り出し部は床面よりも約5~8cm程高くなっている。本住居跡の南・北壁の中点を結ぶ軸線はN-4°-Wを向く。カマドは東壁の南側寄りに構築されている。本住居跡の床面の面積は約7.2m<sup>2</sup>、張り出し部の面積は約0.8m<sup>2</sup>で、総面積は約8m<sup>2</sup>である。

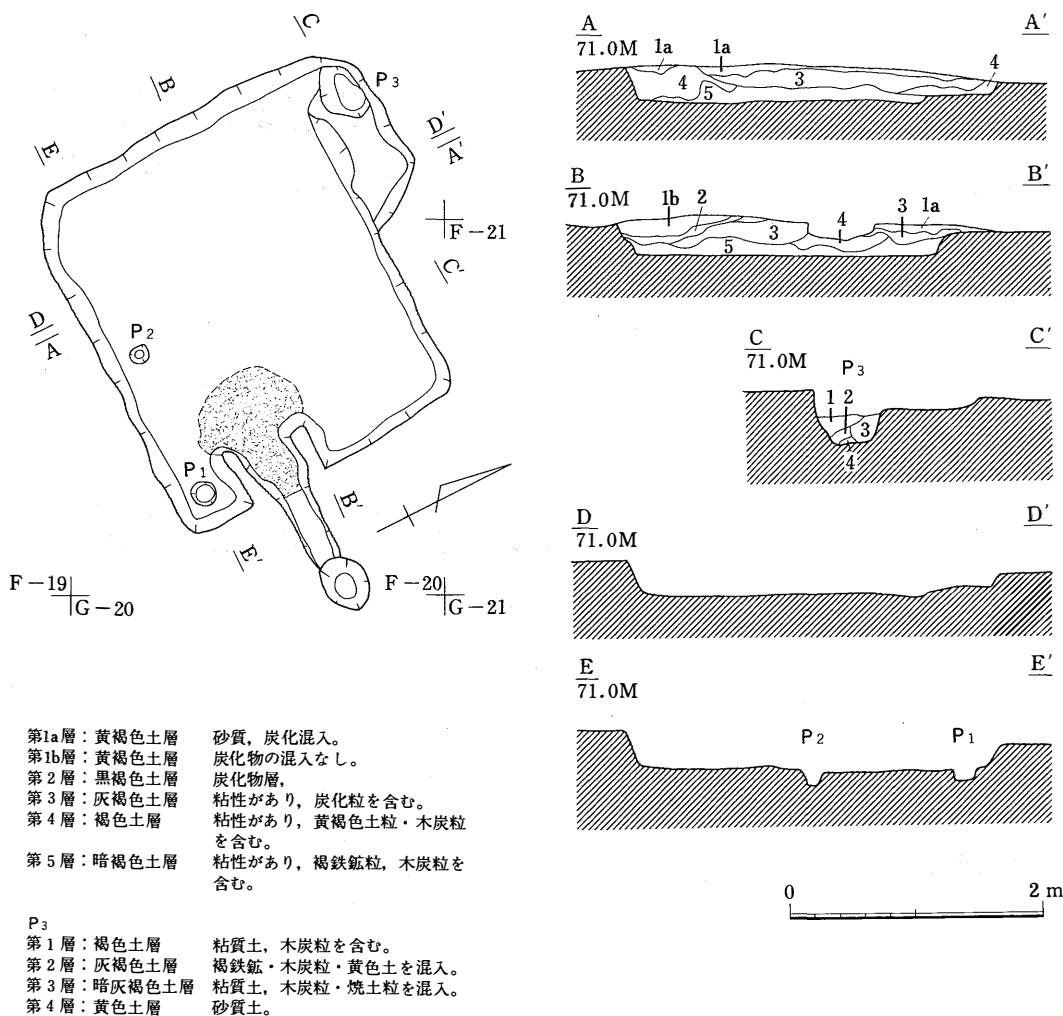
**覆 土** 本住居跡の覆土は5層に大別される。第1層が全く炭化物を混入しない層である。この第1層の下にある第2層は本住居跡の西側に広がる木炭層の落ち込みである。第2層は第3・4層を切り、壁に向かって斜位に堆積していることから、本住居跡の覆土を切る何らかの遺構があった可能性が高い。第3~6層は炭化物を混入しており第3層は砂質土層、第4~6層は粘性がある土層である。第3~6層はほぼレンズ状堆積を呈しており、覆土の堆積状態は自然堆積と考えられる。

**壁・床面** 壁は四壁ともほぼ良好な状態で検出された。壁高は検出面から約20~30cm、床面からの法面角度は約123°を測り、ほぼ直線的に外傾して立ち上がる。床面は地山をそのまま床面として使用しており、貼り床、掘り方をもたない。床面はほぼ平坦で、カマドの周辺部には木炭がひろがっている。また、張り出し部は床面より5~8cm高いが、貼り床等は検出されなかった。

ピット P<sub>1</sub>~P<sub>3</sub>までの合計3個のピットが検出された。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>は柱痕が無く小さく浅いピットでありその性格は不明である。P<sub>3</sub>は住居跡の北南コーナーにあり土層観察より柱痕も認められないことから性格は不明である。

周溝 検出されなかった。

カマド 東壁の南側寄りの地点に構築されており、残存状態は良好である。右袖部は55×28cm、高さ18cm、左袖部は50×32cm、高さ18cmを測る。第15層は地山を削り残した部分で、袖部の芯材として使用されている。両袖部の燃焼部側は熱を受けて赤変しているが、とくに第13・14層は顕著である。焚き口部は幅約40cm、燃焼部は幅約32cm、奥行は約65cmを測る。土層観察から天井部が落下して堆積したと推定される第3層は燃焼部内には認められないが、第4~

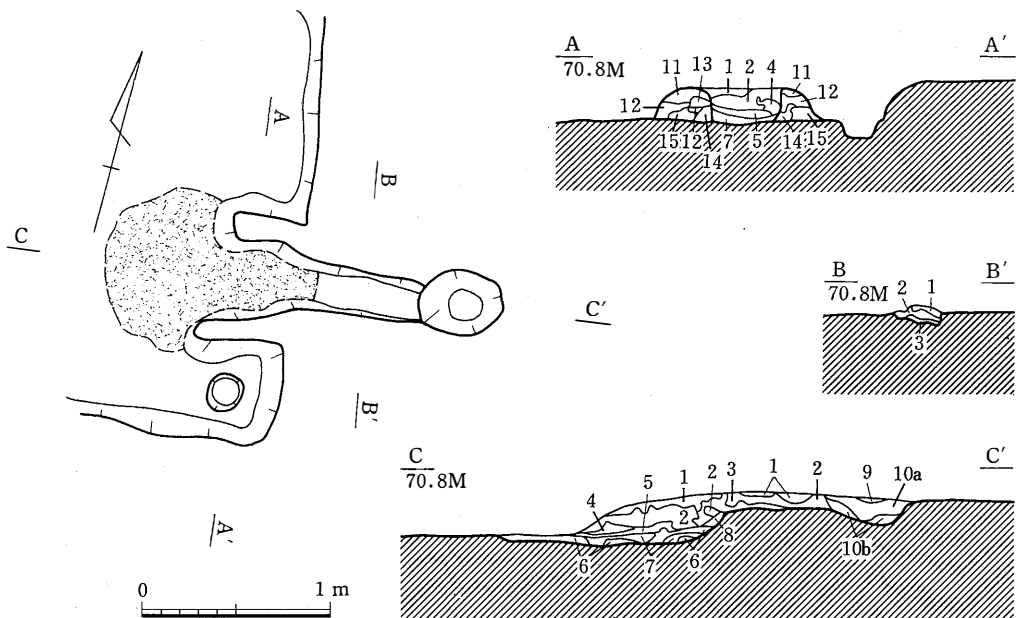


第27図 第8号住居跡

第1節 住居跡

6層がカマド内主要堆積土と考えられる。第8層はカマド内の木炭がかきだされたものと推定される。なお、燃焼部内の左袖部寄りの地点からは支柱と推定される自然石が1点検出されている。(第10図版3)。

燃焼部と煙道の境は急角度でたちあがり、煙道は幅約25cm、検出面から深さ8cm、長さ約96cmを測る。先端部からは径45×35cm、検出面からの深さ13cmを測る煙り出しピットが検出された。煙道はN-88.5°-Eを向き、東壁に対してほぼ直角にとりつけられている。煙道にはまたまった地山の堆積が認められず、粘土層の第3層が堆積していることから半地下方式の煙道と推定される。なお煙り出しピット内の堆積土はレンズ状堆積を呈し、わずかに木炭粒を含んでいる。



- 第1層：暗褐色土層 しまり、粘性なし。褐鉄鉱・木炭粒を含む。
- 第2層：褐色土層 粒子細かく、粘性あり。
- 黄褐色土層 木炭粒・焼土粒を含む。
- 第3層： 粘質土。木炭粒・褐鉄鉱を若干含む。
- 落天下井部
- 第4層：焼土層 木炭粒が混入する。
- カマド内堆積土
- 第5層：木炭層
- 第6層：黄褐色砂質土層 木炭粒・灰色土を含む。
- 第7層：灰褐色土層 粘性あり、木炭粒を含む。
- 第9層：木炭・焼土層 木炭と焼土の混合層。

- 煙り出しピット内堆積土
- 第9層：黄褐色土層 粘性あり、しまりなし。
- 第10a層：褐色土層 粘性あり、木炭粒を含む。
- 第10b層：褐色土層 粘質土。木炭粒・白色砂を含む。
- 袖部
- 第11層：黄褐色砂質土層 粒子が細かく、しまりなし。木炭粒・焼土粒を若干含む。
- 第12層：褐色土層 木炭粒・焼土粒を含む。
- 第13層：焼土層
- 第14層：木炭・焼土層 木炭と焼土の混合層。
- 第15層：黄褐色砂質土層 混入物を含まない。

第28図 第8号住居跡カマド

掘り方 検出されなかった。

遺物 カマド内より須恵器の杯の他に20点以上の土師器片が出土したが、いずれも細片であるため図示できたのは1点のみであった。また、第2層の木炭層中よりも土師器片、須恵器片あわせて50点以上が検出されたが、いずれも細片であり図示できたのは1点のみであった。破片数は第66表に示す。

第17表 第8号住居跡ピット形態表

No.	形状	計測値 (単位 cm)			柱痕 (単位 cm)		備考
		上面径	下面径	深さ	径	深さ	
P <sub>1</sub>	円形	21 × 21	15 × 15	10			
P <sub>2</sub>	不整円形	16 × 14	8 × 8	12			
P <sub>3</sub>	不整楕円形	51 × 30	33 × 15	27			

遺構に伴う遺物

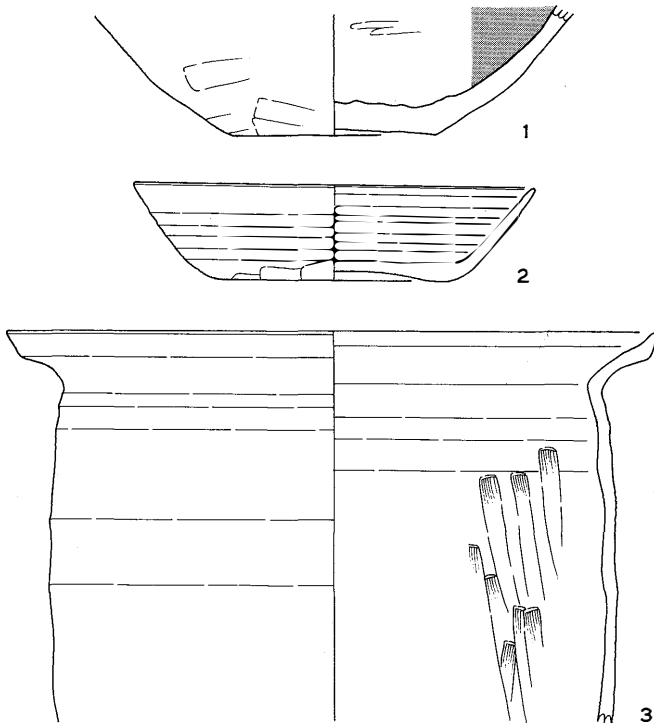
(第29図1・3,第18表)

土師器

鉢(1) カマドの燃焼部より出土し、底部と体部下半部を残す破片であるが、底部から体部への立ちあがりなどから鉢と推定される。底部から体部下端にかけて横位のヘラケズリ調整が施されている。内面にはわずかに横位のミガキが認められ、内面には黒色処理されていたと推定されるが、再酸化のため消失している。器厚は約1cmを測り、厚手である。色調はやや暗い茶褐色を呈し、I-3-※-(c-b)類に分類される。

須恵器

杯(2) 全体の約70%を残す破



第29図 第8号住居跡出土遺物 (1/3)



## 第1節 住居跡

片で、左袖部上面からカマド内へ落ち込むような形で検出された。磨滅が激しいため切り離し痕は不明であるが、体部下端には手持ちヘラケズリによる再調整が施されていることから2類か4類に分類される。体部は底部から外反気味に立ち上り、そのまま口縁部に至る。器厚は全体的に薄い、底部周縁部のみ環状に肥厚している。色調は暗い黄茶褐色を呈しており再酸化を受けたと考えられる。

### 覆土出土の遺物(第29図2,第46図版2,第18表)

#### 土師器

甕(2) 口縁部の約10%を残す破片で第2層の木炭層中より出土したロクロ調整の甕である。底部が欠損しているため切り離し痕は不明であるが、胴部は長胴形を呈すると思われる。口縁部は強く外反し、口唇上端部はつまみ出されたようにたちあがる。内面にはヘラナデによる縦方向の再調整が施されており、※-1a-A<sub>3</sub>-(g-a)類に分類される。色調は赤褐色を呈するが、外面には黒褐色の付着物が認められる。胎土は密であるが径1~3mm大の長石、石英の粒子を含む。

(穴戸美智子)

第18表 第8号住居跡出土土器一覧表

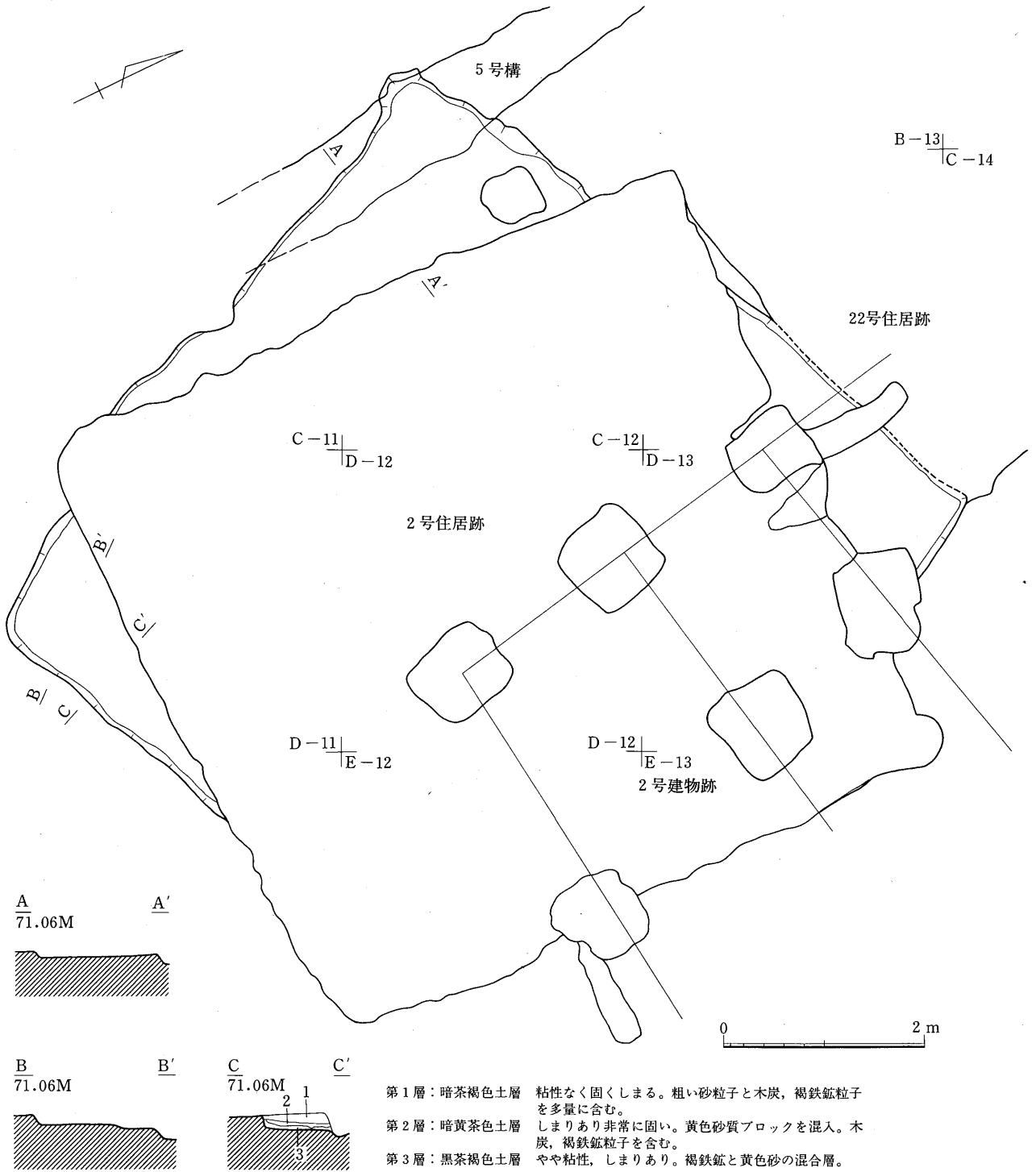
図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)						備考
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径	
29	1		土師器	鉢	カマド				8.2				
29	2	46-2	土師器	甕		ℓ-2	25.9		22.5				
29	3		須恵器	杯	左袖部		15.9		9.0	3.8			

### 第9号住居跡(第30図,第5図版)

検出状況 II区の西寄りB~E-10~14グリッドに位置し、2号住居跡にほとんど壊されており北東部分、北西、南西コーナーのみが検出された。北西コーナーは5号溝により上層を削平され、6号建物跡柱穴に掘り込まれている。北東部は22号住居跡と1号建物跡に切られているため明確なコーナーは確認されなかった。西側約1mには10・24・30号住居跡、南側約2mに1号住居跡がある。また、遺構検出面は地山上面である。

プラン・規模・方向 北壁、東壁と南壁が完全に検出されていないため、明確なプランはつかめないが、東西7m、南北6.9mを測る隅丸方形と考えられる。しかし、南東コーナー部分が2号住居跡の外部に検出されず、南東コーナーは歪んでいるものと思われる。なお、カマドは検出されなかった。

覆土 本住居跡覆土は2号住居跡により切られており不明であるが、わずかに南西コーナー



- 第1層：暗茶褐色土層 粘性なく固くしまる。粗い砂粒子と木炭，褐鉄鉱粒子を多量に含む。
- 第2層：暗黄茶色土層 しまりあり非常に固い。黄色砂質ブロックを混入。木炭，褐鉄鉱粒子を含む。
- 第3層：黒茶褐色土層 やや粘性，しまりあり。褐鉄鉱と黄色砂の混合層。

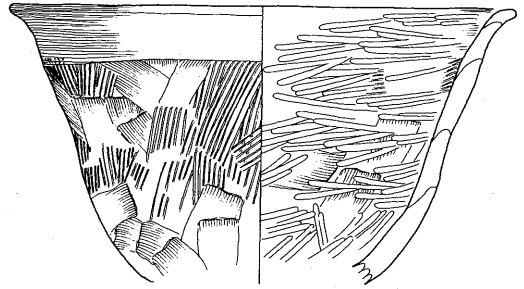
第30図 第9号住居跡

部分が残存している。残存部分覆土は水平に3層堆積しており、第1層暗茶褐色土、第2層暗茶褐色土、第3層黒茶褐色土から成るが、残りが長さ85cmしかないため、この層序が本住居跡の全体的なものかどうかは明らかではない。第1・2層には木炭と褐鉄鉱を含み、しまりがあり固くなっている。

**壁・床面** 壁は遺存状態が悪く、正確な壁高やその状態などの観察できず、不明であるが、壁高は南側残存部は約5cm、西側は5号溝と重複しているため約5cm位で、北壁の一部で約20cmを測る。立ち上がり角度は120°～125°でゆるやかに立ち上っている。

床面はほぼ平坦で、第2層目の黄色砂質土、暗黄茶色土はしまりが強く、固く叩きしめられており、貼り床となる可能性もあるが、セクションがあまりに一部分なので不明である。また、第3層目は木炭粒が含まれていない。

ピット 検出されなかった。  
 周溝 検出されなかった。  
 カマド 検出されなかった。  
 掘り方 検出されなかった。  
 遺物 出土数が少なく実測可能なものは1点のみである。また南西コーナー付近の第1層から土玉4点が出土している。



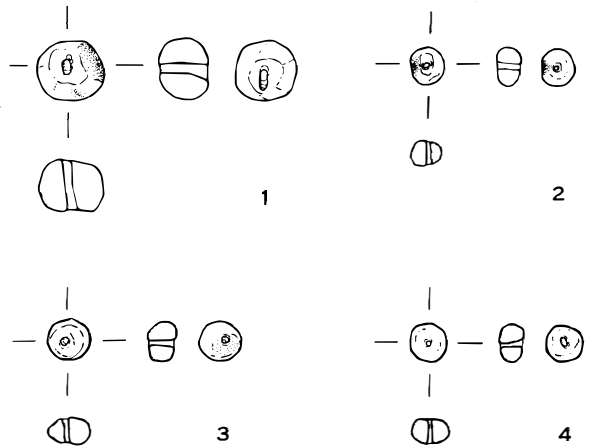
第31図 第9号住居跡出土遺物 (1/3)

覆土出土の遺物

(第31・32図1~4, 第46図版4~7)

土師器

甕(1) 北西コーナー付近の第1層より出土した非ロクロの鉢形のもので全体の約45%を残す。底部は欠損しており不明であるが、わずかな残存部分から平底風丸底を呈する単孔式の可能性が考えられる。体部下半は内弯気味に立ち上がり体部中位で外傾し、口縁部の先端で短く外反する。外面はハケメの後ナデの調整が見られ、単位は不明であるがそれ以前に



第32図 第9号住居跡出土遺物 (1/2)

ケズリが施されていると思われる。また、内面調整はナデの後ミガキが施されており、体部下半は黒色に変色している。分類はI-2-B1-(cda-ab)類で、法量は口径19.8cm、残存高10.8cmを測る。

## 第1節 住居跡

### 土製品

土 玉(1~4) 南西コーナー付近の第1層より4点出土している。

1は他の3点に比べ大形で径1.7cm、厚さ1.4cm、重さ4gを測り、約0.2~0.3cmの楕円形の孔が貫通している。2~4はほぼ類似した大きさ、形状を呈している。径は2が0.9cm、3が1.1cm、4が1.0cm、厚さが3点共0.7cm、重さは2が0.6g、3が0.8g、4が0.7gでわずかに3が大きい。また、径0.1cmの孔が貫通している。色調は4点共黒色であるが、4はやや光沢を持つ。

### 第10号住居跡(第33・34図、第11・12図版、第19表)

検出状況 II区の西側B~D-9~11グリッドより検出された住居跡である。西壁は24・30号住居跡を切っている。南東0.8mに1号住居跡が位置し、北東約1mには2号、9号住居跡と1号建物跡が位置している。遺構検出面は地山上層である。

プラン・規模・方向 南北4.87m、東西3.88mの長方形を呈した住居跡で南壁寄りにカマドが作られている。また、床面からは6個のピットが検出され、形態及び位置関係から4本の支柱穴を持った住居跡であると考えられる。北壁と南壁の中央を結ぶ軸線方向はN-1.5°-Wで、住居面積約18.9m<sup>2</sup>を有す。

覆土 ほぼ水平に堆積しており自然堆積と考えられる。非常に固くしまりがあり、すべての層に褐鉄鉱を含んでいる。第2層には焼土が含まれ所々に暗黄褐色土がブロック状に混入している。また、壁に沿って幅約10cmの床面に達する第5層の暗灰青色の粘質土が見られ、これが最初の堆積と考えられる。

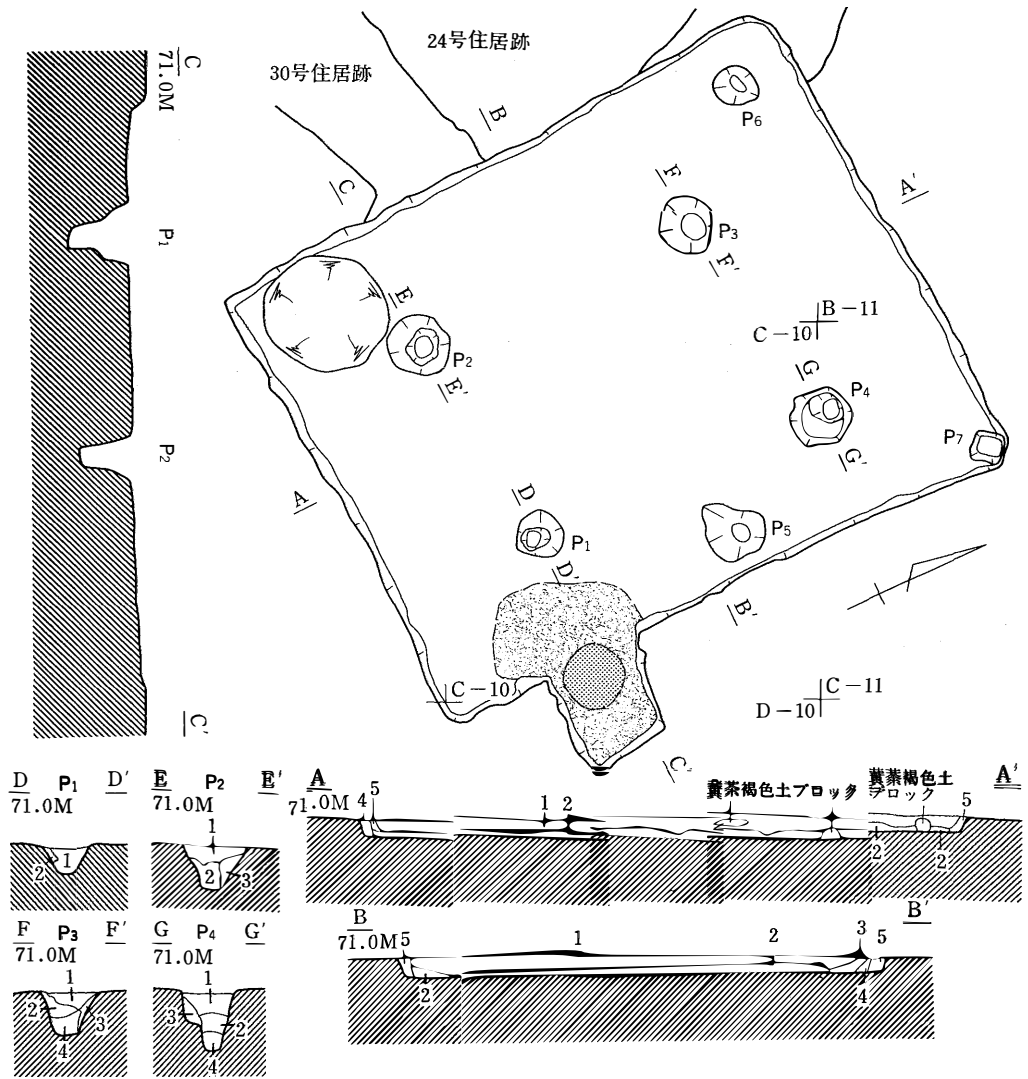
壁・床面 壁・床面の遺存状態は良好である。壁は立ち上がり角度が西壁で約127°、北・東南壁で約110°を測り、外側にやや傾斜している。壁高は約15cmを測る。

床面にはほぼ平坦で地山を叩きしめて作られており、比較的固く、特にカマド付近の床は固くなっている。南西コーナー付近で100×90cmの円形の攪乱を受けている。

ピット 床面からは7個のピットが検出されたが、柱穴と考えられるピットは位置関係と埋め土からP<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>である。明確な掘り方は持たず、埋め土は非常にしまりがあり固い。柱痕の第2・3層には炭化物と褐鉄鉱を混入し、第3・4層は黄色ロームを含む。柱間距離はP<sub>1</sub>~P<sub>2</sub>が17.5m、P<sub>2</sub>~P<sub>3</sub>が23.5m、P<sub>3</sub>~P<sub>4</sub>が1.85m、P<sub>4</sub>~P<sub>1</sub>が25.5mを測る。

周溝 検出されなかった。

カマド 東壁、南寄りに住居跡よりに長さ約85cm、幅約73cmで方形に張り出した部分がカマドと考えられる。深さは約7cm位で壁は外方へゆるやかに立ち上がる。覆土には焼土、炭化物を含み、底面の第2層には灰が堆積している。底面中央部は50×50cmの範囲で熱を強く受けて



- 第1層：暗灰褐色土層 粘質土。非常にしまりあり固く、粘性強い。炭化物・黄色砂質ロームを混入。一部褐鉄鉱を比較的多く含み赤味を帯びる。
- 第2層：暗灰青色土層 粘質土。非常にしまりあり固く粘性強い。わずかに褐鉄鉱・焼土・炭化物を含む。
- 第3層：暗黄褐色土層 非常にしまりあり固く、粘性強い。多量の炭化物を混入。わずかに褐鉄鉱・焼土を含む。
- 第4層：暗黄褐色土層 シルト質。非常にしまりあり固く、粘性あり、わずかに褐鉄鉱・焼土・炭化物含む。
- 第5層：暗灰青色土層 粘質土。非常にしまりあり固く、粘性強い。多量の褐鉄鉱を混入。わずかに焼土・炭化物を含む。
- P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>
- 第1層：暗灰褐色土層 粘質土。非常にしまりあり固く粘性強い。若干炭化物を含む。部分的に褐鉄鉱粒子を含み茶味を帯びている。
- 第2層：暗青灰色土層 粘質土。非常にしまりあり固く粘性強い。若干炭化物を含む。部分的に褐鉄鉱粒子を含み茶味を帯びている。
- 第3層：暗黄灰色土層 粘質土。非常にしまりあり固く粘性強い。若干炭化物・黄色ロームを含む。
- 第4層：暗黄褐色土層 粘質土。非常にしまりあり固く粘性強い。若干炭化物・褐鉄鉱・黄色ロームを含む。

0 2 m

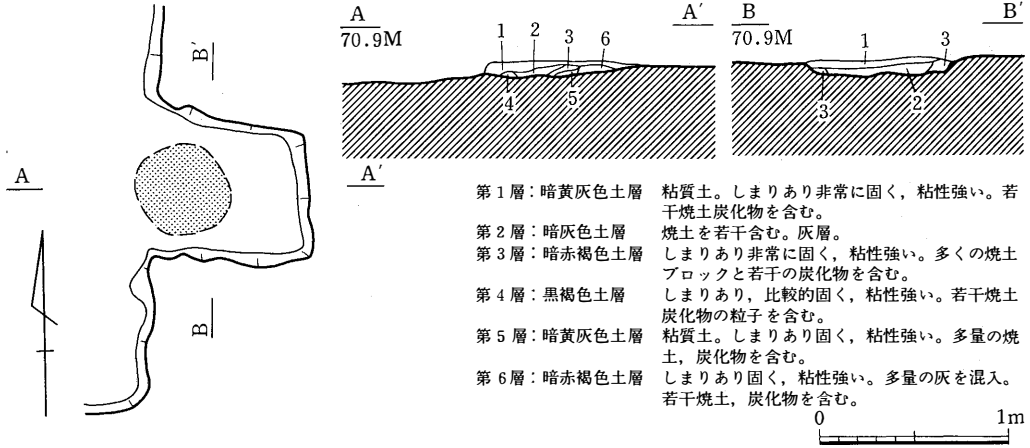
第33図 第10号住居跡

第1節 住居跡

赤く変色している。また、カマド手前の部分 70 × 120 cm の範囲には多量の炭化物のひろがりが見られ、土師器の甕 2 個体分が出土している。カマド両袖部は検出されなかった。

掘り方 検出されなかった。

遺物 207 片出土している。南壁に沿って土師器 2 点出土している。



第34図 第10号住居跡カマド

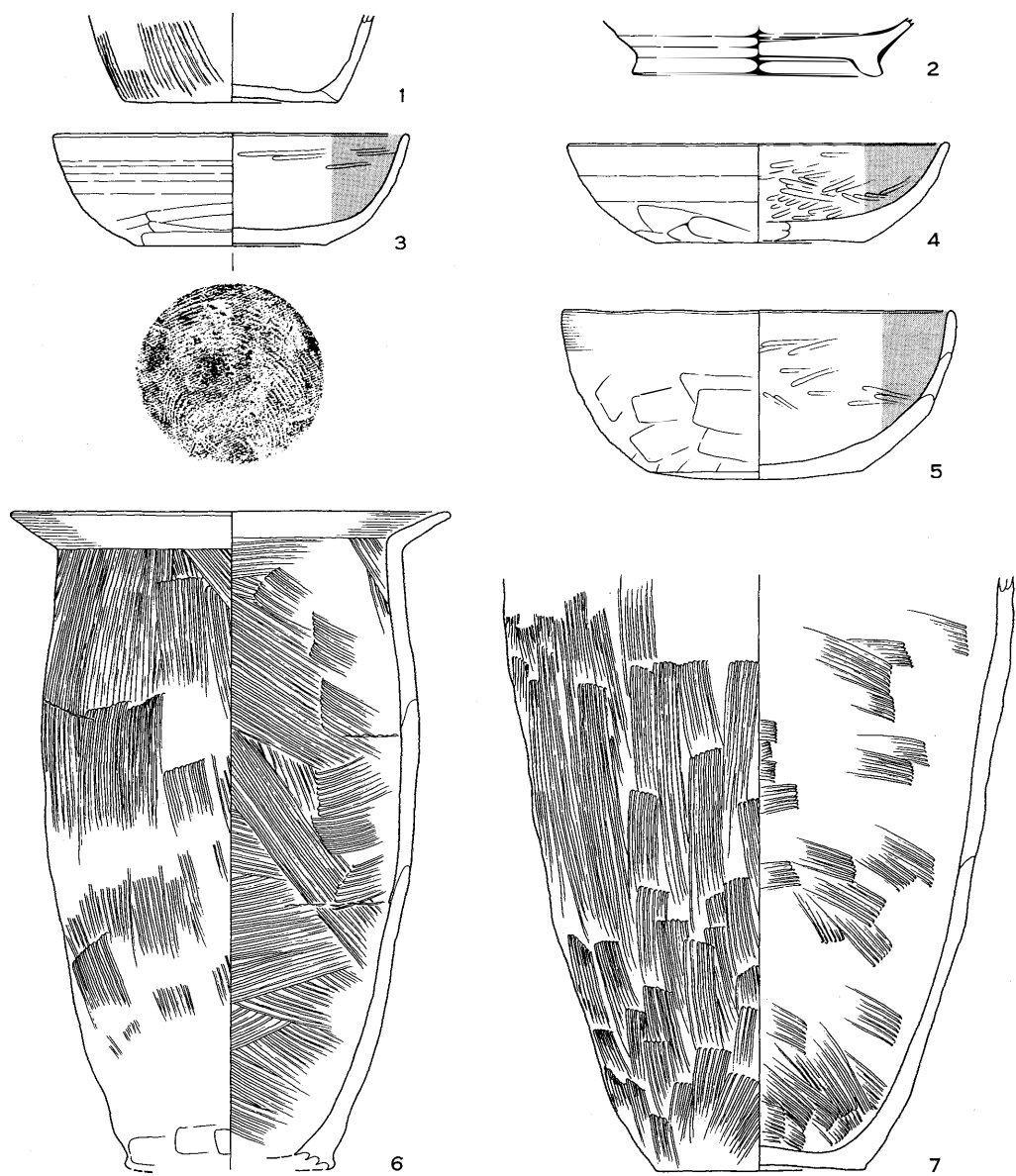
第19表 第10号住居跡ピット形態表

No	形状	計測値 (単位 cm)			柱痕 (単位 cm)		備考
		上面径	下面径	深さ	径	深さ	
P <sub>1</sub>	不整円形	38 × 38	23 × 14	39	10 × 10	20	
P <sub>2</sub>	不整円形	51 × 51	23 × 16	47	15 × 14	35	
P <sub>3</sub>	不整円形	49 × 49	21 × 21	33	20 × 20	34	
P <sub>4</sub>	不整円形	50 × 50	16 × 16	45	21 × 10	45	
P <sub>5</sub>	不整円形	55 × 42	16 × 13	20			
P <sub>6</sub>	不整円形	37 × 37	15 × 8				
P <sub>7</sub>	不整方形	29 × 29	20 × 13				

遺構に伴う遺物 (第35図1・2, 第20表)

土師器

甕(1) カマド内より出土し、底部から体部下端部のみを残す非ロクロの甕である。残存部器形はやや上げ底気味の底部から緩やかに外傾して伸びている。器厚は約 5 mm ほどで薄く、器面は摩滅が著しく非常に脆く火を受けたためか赤橙色を呈している。底部外面には木葉痕が残り、体



第35図 第10号住居跡出土遺物 (1/3)

部外面はハケメ，内面は底部から体部下半にかけてヘラナデの調整が施されている。分類は I-d-※-※-(d-※)類である。

須恵器

高台付杯(2) カマド内出土で杯部下半と脚部を残す。回転糸切りの切り離しののち、高さ0.7cm、厚さ0.9cmを測る貼り付け高台が付けられている。断面は方形状を呈し、外に開いている。また、内面はロクロ目が顕著である。

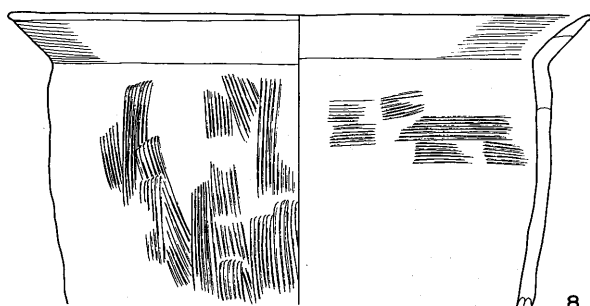
覆土出土の遺物(第35図3~7, 36・37図, 第46図版7~10・12, 第20表)

土師器

杯(3・4) 2点とも床面直上層より出土した内面黒色処理のロクロ調整の杯で, 3が全体の約30%, 4が全体の約60%ほど残す。

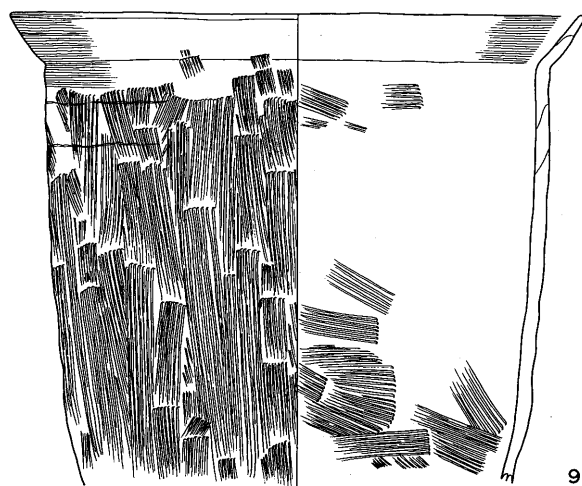
3・4は体部器形が内弯気味に立ち上がった後, 口縁部に至りやや外傾する。4は3に比べ底径が大きく器高が低い。2点とも底部から体部下外面に手持ちヘラケズリの再調整が施されており, 3は回転糸切り痕が底部全面に残り, 4b類に分類される。4は切り離しが不明で2類, 内面は3が横方向のミガキが見られるが, 4は摩滅により単位は不明である。

碗(5) 床面直上層より出土した非ロクロの内面黒色処理の碗で, 全体の約80%を残す。丸底風平底の底部から丸味を持って立ち上がる体部を有し, 口縁部でやや直立する。粘土紐の積み上げ痕が体部外面に残り, 底部及び体部下半には手持ちヘラケズリの再調整が施されている。内面はやや摩滅しているが, 横方向のミガキが見られ, II-1-F<sub>1</sub>-(ac-b)類に分類される。



甕(6~9) 5点とも床面直上層より出土した非ロクロの甕である。6が全体の約50%, 7が口縁部及び体部上半がなく全体の約30%, 8・9が口縁部及び体部の約20%, 10が同じく約50%を残す。

6は底部を欠損するが, 器形は残存部底部の外縁がわずかに張り出した後, 内弯気味に直立する長胴形を呈し, 口縁部は無段で外反する。体部外面にハケメの後, 体部下端に横方向の手持ちヘラケズリ, 内面はハケメが施されており, ※-5a-B<sub>1</sub>-(dca-da)類に分類される。



7はやや上げ底気味の底部からふくらみを持って立ち上がる体部形を有す。底部外面には木葉痕が残り, 内外面共ハケメの調整が施されている。分類はId-5※-※-(d-d)類である。

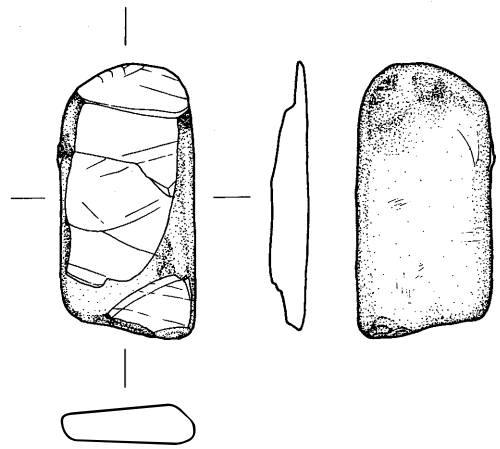
第36図 第10号住居跡出土遺物(1/3)



8・9は体部がほぼ直立して立ち上っており長胴形を呈すると思われる。頸部はわずかにくびれ、その後口縁は外傾する器形を有する。内外面ともハケメの再調整が見られ、※-5a-B<sub>1</sub>-(d-d)類に分類される。

石製品

砥石 第1層より出土したもので、下端は欠損し表面は剝離しているが、裏面及び両側面は研磨によって滑らかになっている。法量は長さ約7.1cm、幅約3.5cm、厚さ約1.0cm、重さ45.3gである。



第37図 第10号住居跡出土遺物(1/2)

第20表 第10号住居跡出土土器一覧表

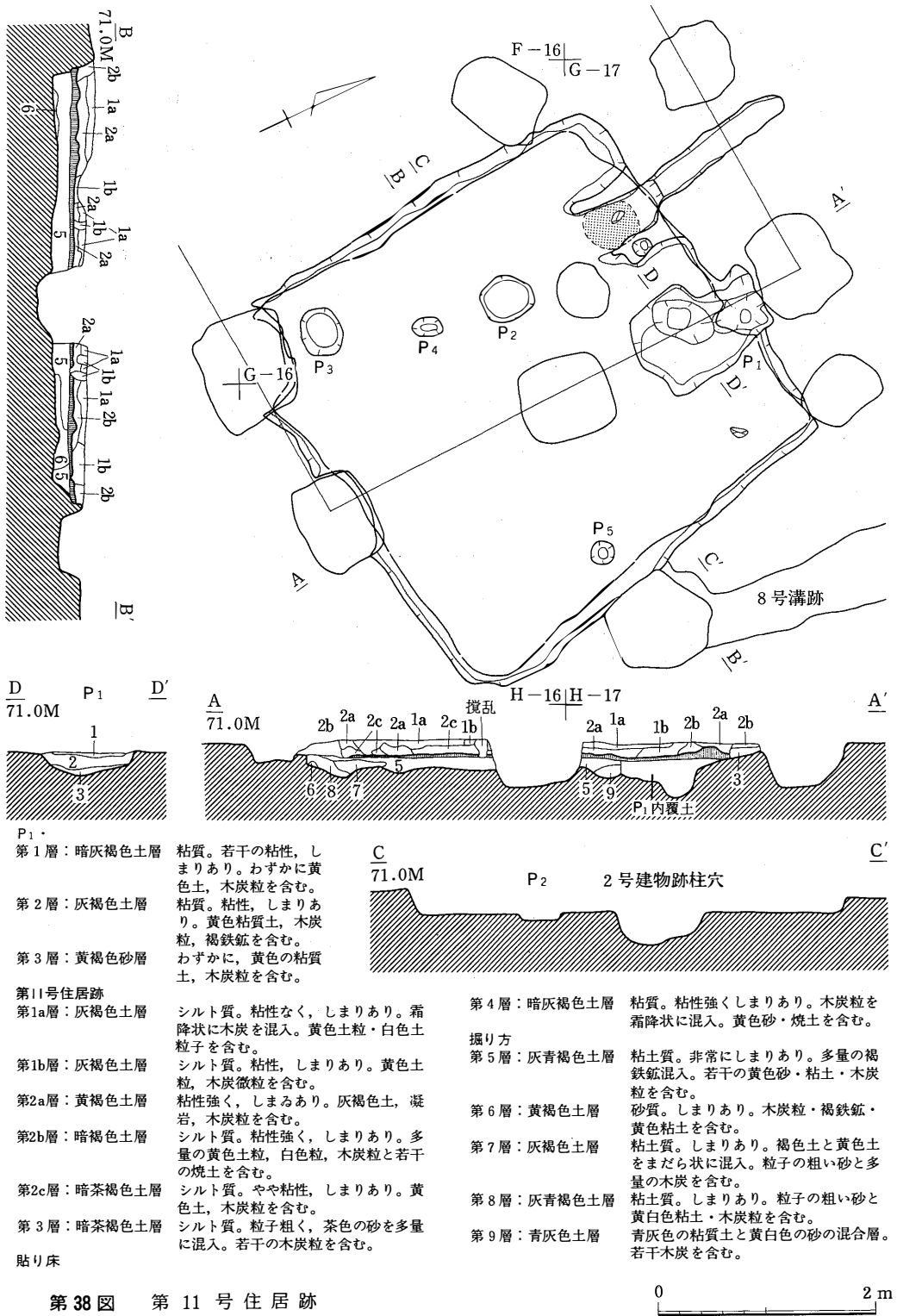
図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法量 (単位 cm)						備考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
35	1		土師器	甕	カマド				8.8					木葉痕
35	2		須恵器	高台付杯	カマド						9.8	0.7		
35	3	46-8	土師器	杯		床直	14.2			7.6	4.5			内黒
35	4		土師器	杯		床直	14.9			8.4	4.0			内黒
35	5	46-7	土師器	碗		床直	15.3			8.5	6.8			内黒
35	6	46-9	土師器	甕		床直	17.3	13.8	15.1	7.6	26.3			
35	7	46-10	土師器	甕		床直				8.3				木葉痕
36	8		土師器	甕		床直	23.0	19.8	20.0					
36	9	46-12	土師器	甕		床直	22.8	20.0						

第11号住居跡(第38・39図, 第13図版, 第21表)

検出状況 II区のはぼ中央東側寄り, G・H-16・17グリッドより検出された住居跡である。8号溝跡を切り, 2号建物跡に切られている。南側約3mに5号住居跡, 西側約3.5mに5号遺構, 3号建物跡が位置する。また, 遺構検出面は地山上面である。

プラン・規模・方向 南西コーナー, 南壁中央部, 西壁北寄りを2号建物跡の柱穴P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>12</sub>と一本柱列の柱穴で壊されているが, 北壁約3.67m, 東壁約4.1mを測る隅丸方形を呈する住居跡

第1節 住居跡



P<sub>1</sub> -  
 第1層：暗灰褐色土層 粘質。若干の粘性，し  
 まりあり。わずかに黄  
 色土，木炭粒を含む。  
 第2層：灰褐色土層 粘質。粘性，しまりあり  
 。黄色粘質土，木炭  
 粒，褐鉄鉱を含む。  
 第3層：黄褐色砂層 わずかに，黄色の粘質  
 土，木炭粒を含む。

第11号住居跡  
 第1a層：灰褐色土層 シルト質。粘性なく，しまりあり。霜  
 降状に木炭を混入。黄色土粒・白色土  
 粒子を含む。  
 第1b層：灰褐色土層 シルト質。粘性，しまりあり。黄色土  
 粒，木炭微粒を含む。  
 第2a層：黄褐色土層 粘性強く，しまるあり。灰褐色土，凝  
 岩，木炭粒を含む。  
 第2b層：暗褐色土層 シルト質。粘性強く，しまりあり。多  
 量の黄色土粒，白色粒，木炭粒と若干  
 の焼土を含む。  
 第2c層：暗茶褐色土層 シルト質。やや粘性，しまりあり。黄  
 色土，木炭粒を含む。  
 第3層：暗茶褐色土層 シルト質。粒子粗く，茶色の砂を多量  
 に混入。若干の木炭粒を含む。

貼り床

第4層：暗灰褐色土層 粘質。粘性強くしまりあり。木炭粒を  
 霜降状に混入。黄色砂・焼土を含む。

掘り方  
 第5層：灰青褐色土層 粘土質。非常にしまりあり。多量の褐  
 鉄鉱混入。若干の黄色砂・粘土・木炭  
 粒を含む。  
 第6層：黄褐色土層 砂質。しまりあり。木炭粒・褐鉄鉱・  
 黄色粘土を含む。  
 第7層：灰褐色土層 粘土質。しまりあり。褐色土と黄色土  
 をまだら状に混入。粒子の粗い砂と多  
 量の木炭を含む。  
 第8層：灰青褐色土層 粘土質。しまりあり。粒子の粗い砂と  
 黄白色粘土・木炭粒を含む。  
 第9層：青灰色土層 青灰色の粘質土と黄白色の砂の混合層。  
 若干木炭を含む。

第38図 第11号住居跡



である。

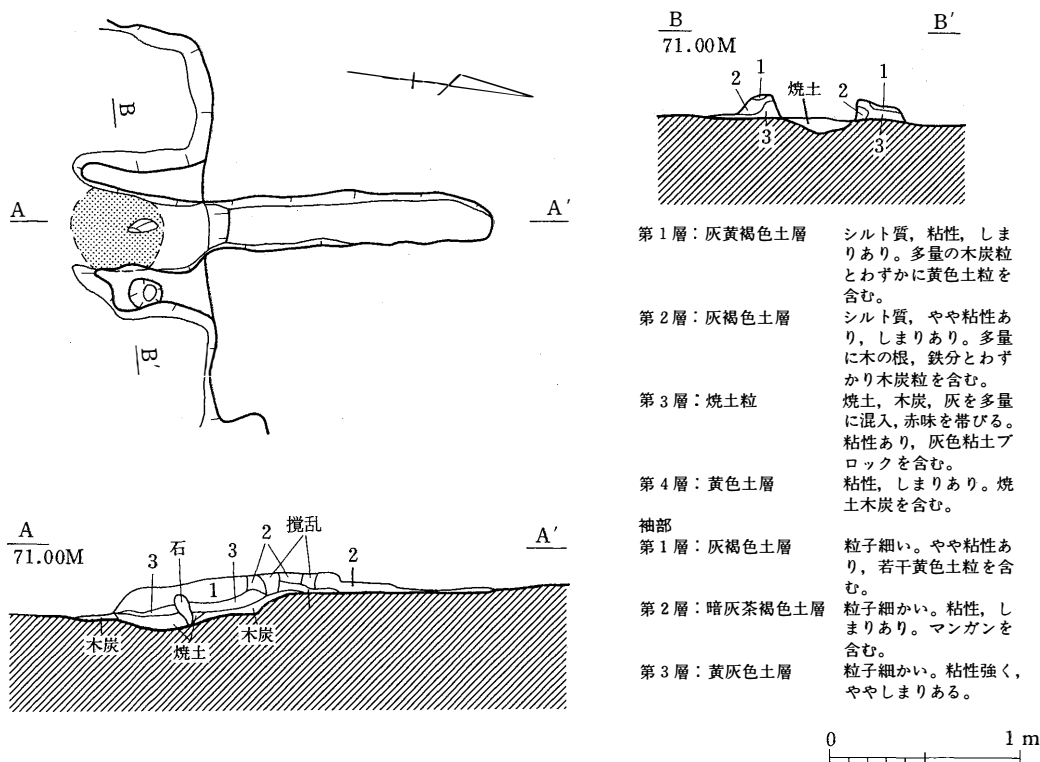
本住居跡は掘り方を持ち、その上層に貼り床が施されている。また、北壁にはカマドが構築されている。南壁の中央と考えられる点と北壁中央部を通る主軸線方向はN-9.5°-Wを向く。

**覆土** 上部が削平されており、覆土は約15cm程度残している。6層から成るシルト質土で全体に木炭粒・黄色土粒子を含んでいる。第4層は貼り床であり、第5層目からは埋り方埋土である。

**壁・床面** 四壁とも2号建物跡と一本柱列の柱穴により破壊されている部分を除いては、残存状態が良好である。壁面は地山を埋り込んだもので叩いている様子は見られない。壁高は北壁8~15cm, 南壁10~15cm, 東壁15~17cm, 西壁20~25cmを測る。立ち上がり角度は約110°~120°で外に向かって開き気味であるが、西壁北寄りではほぼ垂直して立ち上っている。

床面は貼り床が全面に施されているが、一部2号建物跡柱穴が掘り込まれており壊されている。貼り床は木炭粒・黄色砂・焼土を混入する暗灰褐色の粘質土から成り、非常に固くしまっている。しかし、壁付近は中央部に比べ軟らかくなる。床面からは5個のピットが検出され、P<sub>1</sub>は貯蔵穴と考えられる。

**ピット** 5個のピットが床面から検出された。P<sub>1</sub>はカマドの右袖部から約30cm東側に位置



第39図 第11号住居跡カマド

## 第1節 住居跡

し、北壁から幅約60cm、長さ約30cmに張り出しており貯蔵穴と考えられ、大きさは南北129cm、東西90cm、深さ20cmを測り、不整形を呈している。埋め土は粘性の強い灰褐色土から成り、木炭粒、褐鉄鉱、黄色粘土を含み、下層には黄褐色砂層が見られる。遺物は土師器片が3片出土している。また、P<sub>1</sub> 検出面の直上層及びその周辺より数点の実測可能な土師器が出土している。

P<sub>2</sub>～P<sub>5</sub> のピットはその形態や配置から柱穴とは考えられない。

周 溝 検出されなかった。

カ マ ド 北壁西寄りに構築されている。遺存状態は良好で、火床中央部に長さ約17cm、幅約6cmの河原石が支柱状に斜めに突き立てられた状態で検出された。埋め土は下層が焼土と灰の混合層に上層が多量の木炭を含む層ではほぼ水平に堆積している。また、下層の上部、燃焼部の周壁に焼土の層が観察される。

袖部は右袖部内側がやや崩れた状態で検出され、右袖部内壁には赤く焼けた部分が見られる。また、袖部は粒子の細かいしまりのある土で構築されている。法量は右袖部長さ約70cm、幅約27cm、高さ約11cm、左袖部は長さ約70cm、幅約30cm、高さ約13cmを測る。

カマド床面は焚き口部が幅約45cmで、径40×47cm、深さ約10cmのピットに焼土が詰っており、上面は焼けている。煙道部近くはあまり火を受けた様子は見られない。

煙道は一部上層から削平を受けているが、幅約25cm、長さ150cmではほぼ直角に北壁から北にほとんど同じ幅で伸び、先端部は丸味を持ち棒状を呈している。また、煙道入口部分はやや傾斜しその比高は約5cmである。煙道軸線方向はN-10.5°-Wを向く。

掘り方 住居跡とほぼ同じ大きさで東西3.7m、南北3.75mの方形である。凹凸が著しく部分的に不整に落ち込む。埋め土は灰青褐色の粘質土と黄褐色の砂質土から成る。

遺物 遺物は144点のうち須恵器片は1片のみで、ほとんどが土師器である。また、カマド、P<sub>1</sub> の貯蔵穴付近の床面直上層から多く出土し、床面出土遺物は細片で時期決定は難しい。

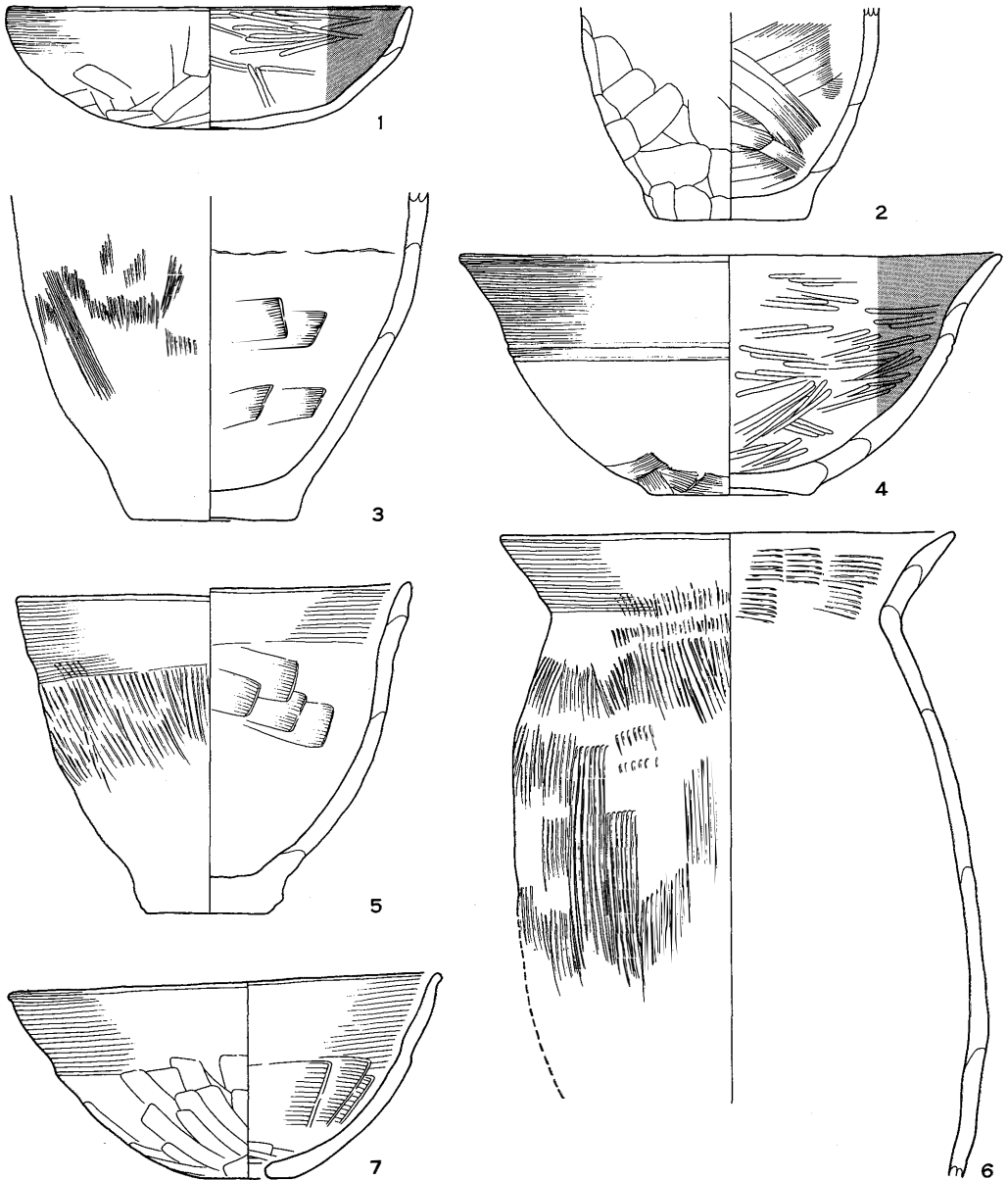
第21表 第11号住居跡ピット形態表

No	形 状	計 測 値 (単位 cm)			柱 痕 (単位 cm)		備 考
		上 面 径	下 面 径	深 さ	径	深 さ	
P <sub>1</sub>	不 整 方 形	133 × 90	96 × 60	21			貯 蔵 穴
P <sub>2</sub>	不 整 円 形	52 × 52	41 × 41	7			
P <sub>3</sub>	不 整 円 形	46 × 39	32 × 26	18			
P <sub>4</sub>	不 整 楕 円 形	27 × 16	15 × 6	14			
P <sub>5</sub>	円 形	22 × 22	10 × 7				

覆土出土の遺物(第40・41図, 46図版11, 47・48図版1, 第22表)

土師器

杯(1) カマド右袖部の右側の床面直上層より出土した非ロクロの内黒丸底杯で全体の約80%を残す。器形は丸底で器厚が薄い部分から内弯しながら立ち上がり口縁部に至り、やや直立する。



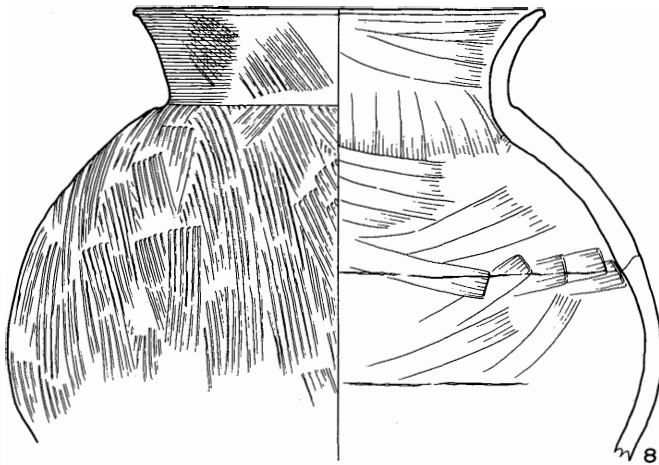
第40図 第11号住居跡出土遺物(1/3)

第1節 住居跡

外面底部は小さいケズリののち長いケズリが施され、内面はやや荒れているが、横方向のミガキが見られる。分類はI-4-E<sub>1</sub>-(ac-b)類である。

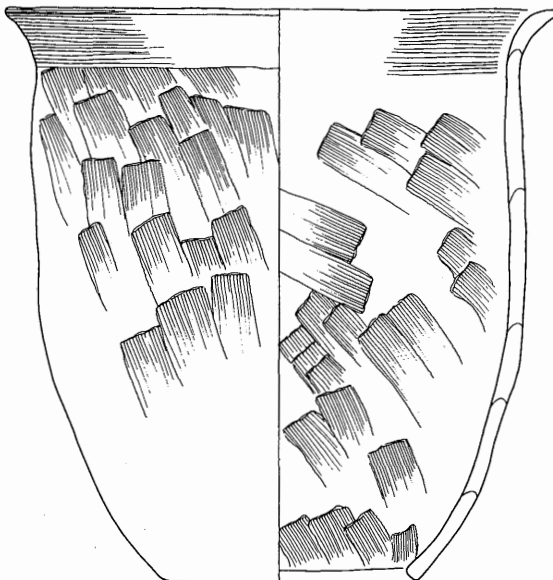
鉢(4) 第1層より出土した内面黒色処理の非ロクロの鉢で、全体の約30%程を残す。上底気味の小さ目の底部から内弯気味に立ち上がり、口縁部は外反する。体部と口縁部の境にはヨコナデが沈線化して残っている。器面は摩滅しているが、ハケメの痕跡がみられ、体部下端はハケメ上にナデが加えられている。内面は横方向のミガキが見られII-1-C<sub>1</sub>-(da-b)類に分類される。

小形甕(2・5) 2は床面直上層、5は第1層より出土した非ロクロの小形甕で、2は底部から体部、5は全体の約80%程度を残す。



2は凹凸の底部から内弯しながら伸びる体部を残す、胎土に2mm程度の小石を多量に含んでおり、器面は荒れている。外面は底部及び体部がケズリであるが上端にわずかにハケメが見られる。内面はナデでIII<sub>b</sub>-※-(dc-a)類に分類される。

5はやや丸味をもった不安定な底部から内弯気味に立ち上った後、口縁部に至りやや外傾する。底部には木葉痕が残り、器面は荒れているが、体部外面はハケメ、内面はナデの再調整が見られIII<sub>c</sub>-1<sub>a</sub>-C<sub>2</sub>-(da-a)類に分類される。



甕(3・6・8) 3はカマド右袖部の右側、6はP<sub>1</sub>、8は一本柱列のP<sub>14</sub>東側の床面直上層より出土した非ロクロの甕で、3は底部から体部下半、6・8は口縁部及び体部を残す。

3は底部から内弯して立ち上

第41図 第11号住居跡出土遺物(1/3)

がり、残存部上半はほぼ直立する。胎土に小石を含み、摩滅が著しいが、底部外面がケズリ、体部外面がハケメ、内面がナデの調整が見られ、I<sub>b</sub>-※-※-(b-a)類に分類される。

6は体部の歪みが激しいが、内穹気味に立ち上がる長胴形を呈し、口縁部は無段で外傾する。外面はハケメ、内面は摩滅しており単位は不明であるが、ナデと思われる。また、口縁部にはハケメが施されており、※-5<sub>a</sub>-C<sub>1</sub>-(da-ad)類に分類される。

8は体部が球形で、口縁部に段を持ち、外傾する器形を呈す。外面は口縁部はハケメの後ヨコナデ、体部がハケメ、内面は長い単位のナデの調整が見られ、※-1<sub>c</sub>-C<sub>2</sub>-(da-a)類である。

甑(7・9) 7はカマド右袖部右側の第1層、9は北コーナー床面直上層より出土した非ロクロの甑で、7は全体の約60%、9は全体の約80%を残す。

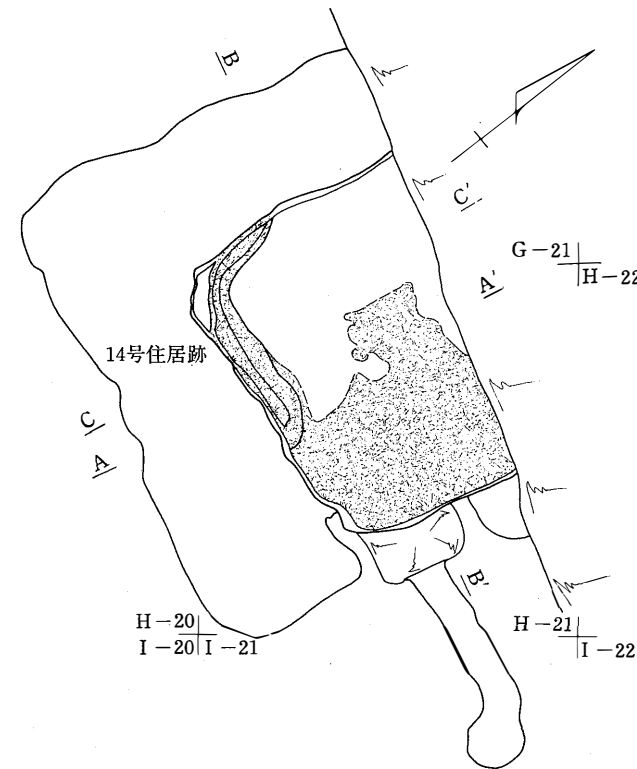
7は単孔式の甑である。歪みが激しく、径約2.5cmの孔も底部中心からずれている。器形は鉢形で、外傾しながら口縁部に至り、口唇部で丸味を持つ。体部及び底部外面はケズリ、内面ハケメの再調整がみられII-1-C<sub>1</sub>-(c-d)類に分類される。

9は甕を再利用したものと考えられる。体部は下半から内穹気味に立ち上がり、上半部分はほぼ直立する長胴形を呈す。口縁部は無段で短かく外傾する。外面には粘土紐痕が何段も見られ、その上にナデの調整を施している。内面はナデで※-5<sub>a</sub>-F<sub>1</sub>-(a-a)類に分類される。(氏家 浩子)

第22表 第11号住居跡出土土器一覧表

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
40	1	46-11	土師器	杯		床直	16.3				4.9			内黒
40	2		土師器	小形甕		床直			12.1	6.6				
40	3	47-1	土師器	甕		床直				6.7				
40	4		土師器	鉢		ℓ-1	21.7			5.9	9.7			内黒
40	5	47-2	土師器	小形甕		ℓ-1	16.0			4.8				木葉痕
40	6	47-4	土師器	甕		床直	18.2	14.2	18.5					
40	7	47-3	土師器	甑		ℓ-1	17.6				7.9			
41	8	47-5	土師器	甕		床直	16.3	13.6	26.1					
41	9	48-1	土師器	甑		床直	21.8		19.3					

第1節 住居跡



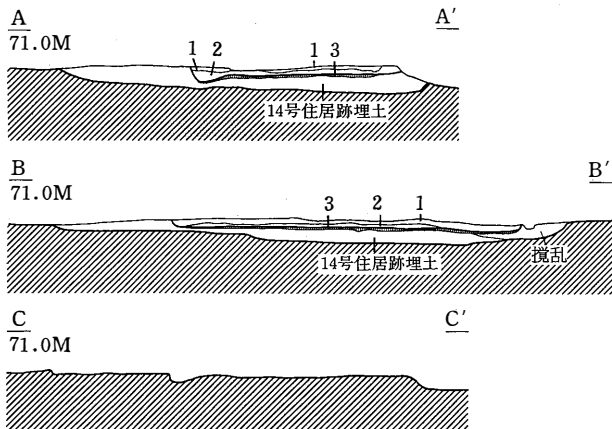
第13号住居跡(第42図, 第14図版)

検出状況 II区のG・H-20・21グリッドより検出された住居跡であるが、耕作による攪乱のため住居跡の北側の半分が削平されている。14号住居跡の覆土を切って構築されており、遺構確認面は14号住居跡の覆土上面である。西側約1mには6号溝跡と8号住居跡が近接して検出され、北側約3mには8号溝跡と17・21号住居跡、4号不明遺構が検出されている。

プラン・規模・方向 北側半分が削平されているが、プランは残された南壁より一辺が2.5m前後の隅丸方形を呈すると推定される。北壁が削平されているため南・北壁の midpoint を通る軸線方向は不明であるが、残存する西壁からはほぼN-3.5°-Wを向くと推定される。

覆土 覆土は非常に浅く、5~7cm程度であるが2層に分かれている。第1・2層とも褐鉄鉱粒、木炭粒を含むがとくに第2層目は木炭を多量に含んでいる。第3層目が貼り床である。覆土は非常に浅く、第1・2層はほぼ水平に堆積しているが、堆積状態は自然堆積であると推定される。

壁・床面 壁は東壁・西壁の約1/2と南壁が検出されたが、14号住居跡



- 第1層：暗灰褐色土層 粘性なく、しまりあり。炭化物、褐鉄鉱、黒褐色土を含む。
- 第2層：灰褐色土層 粘性なく、しまりあり。黒褐色土、褐鉄鉱と、多量の炭化物を含む。
- 貼り床
- 第3層：暗黄褐色土層 黄褐色土と黒褐色土の混合層で、一部焼土、木炭を含む。



第42図 第13号住居跡



の覆土を掘り込んで構築されているため非常にやわらかい。壁はゆるやかにたちあがっている。壁高は検出面からの深さ5～10cmを測るが、上面が削平されているためたちあがりが出されたのみである。床面には黒色土と黄褐色土の混合土をたたきしめた貼り床が全面的に施されている。床面の中央部から東側にかけては一面に木炭粒、及び炭化材が検出された。

ピット 検出されなかった。

周溝 南西コーナーから南壁沿いに検出されたが、全周していない。長さ約2m、上端幅15～30cm、下端幅3～12cm、床面からの深さは約6cmを測る。断面は上端幅の広い「U」字形を呈しており、覆土には木炭が多量に含まれている。

カマド 検出されなかった。

掘り方 検出されなかった。

遺物 床面より3点の土師器甕が検出されたがいずれも細片であり、図示できなかった。床面直上層より回転糸切り痕の痕跡を残す土師器杯の底部が1点検出されたが、摩滅が激しいため再調整は観察できなかった。破片数は第66表に示す。

#### 覆土出土の遺物(第43・44図, 第48図版2～4, 第23表)

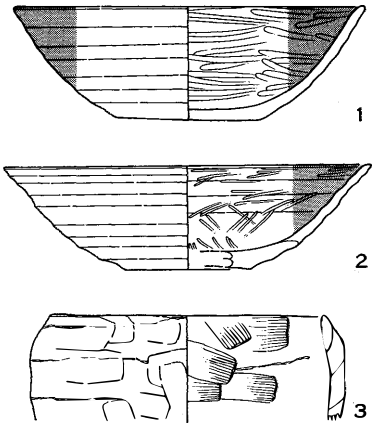
##### 土師器

杯(1・2) 1・2ともロクロ調整の杯である。1は全体の約90%を残すが、本住居跡の第2層から出土した破片と湿地性遺物包含層のL-VIIIより出土した破片が接合している。底部には回転糸切り痕が観察され、底部、体部ともに再調整が施されていない5b類である。内外面ともに黒色処理が施されている。2は第1層より出土した全体の約30%を残す破片である。底部がほとんど欠損しているため切り離し痕は不明であるが、体部下端にも再調整が観察されないことから5類に分類される。内面には黒色処理が施されている。胎土には径2mm大の小礫を含むが、焼成は良好である。

筒形土器(3) 第1層より出土した口縁部の約20%を残す破片で、残存高は3.8cmを測る。粘土紐の巻き上げ痕が明瞭に観察される。残存する体部上半部がやや内弯し、口縁端部は強く内傾している。体部下半部を欠損しているが、筒形土器であると推定される。外面にはケズリ、内面にはナデの調整が施されている。色調は灰褐色を呈し、胎土は密である。

##### 石製品

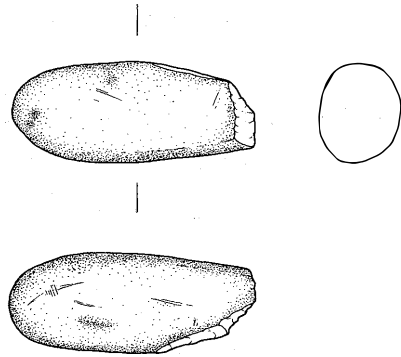
不明石製品 第2層より出土した用途不明の石製品で



第43図 第13号住居跡出土遺物(1/3)

第1節 住居跡

ある。残存長6.4cm, 径2.6cm×2.3cm, 重さ52.7gを測る。石質は砂質泥岩である。欠損しているため全形は不明であるが, 17号住居跡のP<sub>2</sub>出土の不明石製品に類似すると推定される。一見磨石のような自然石であるが中央部を打ちかいた痕跡が認められる。



第44図 第13号住居跡出土遺物 (1/3)

第23表 第13号住居跡出土土器一覧表

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
43	1	48-2	土師器	杯		ℓ-2	13.8			5.7	4.5			内外黒
43	2	48-4	土師器	杯		ℓ-1	14.4			5.0	4.1			内黒
43	3		土師器	筒形土器		ℓ-1	11.0							

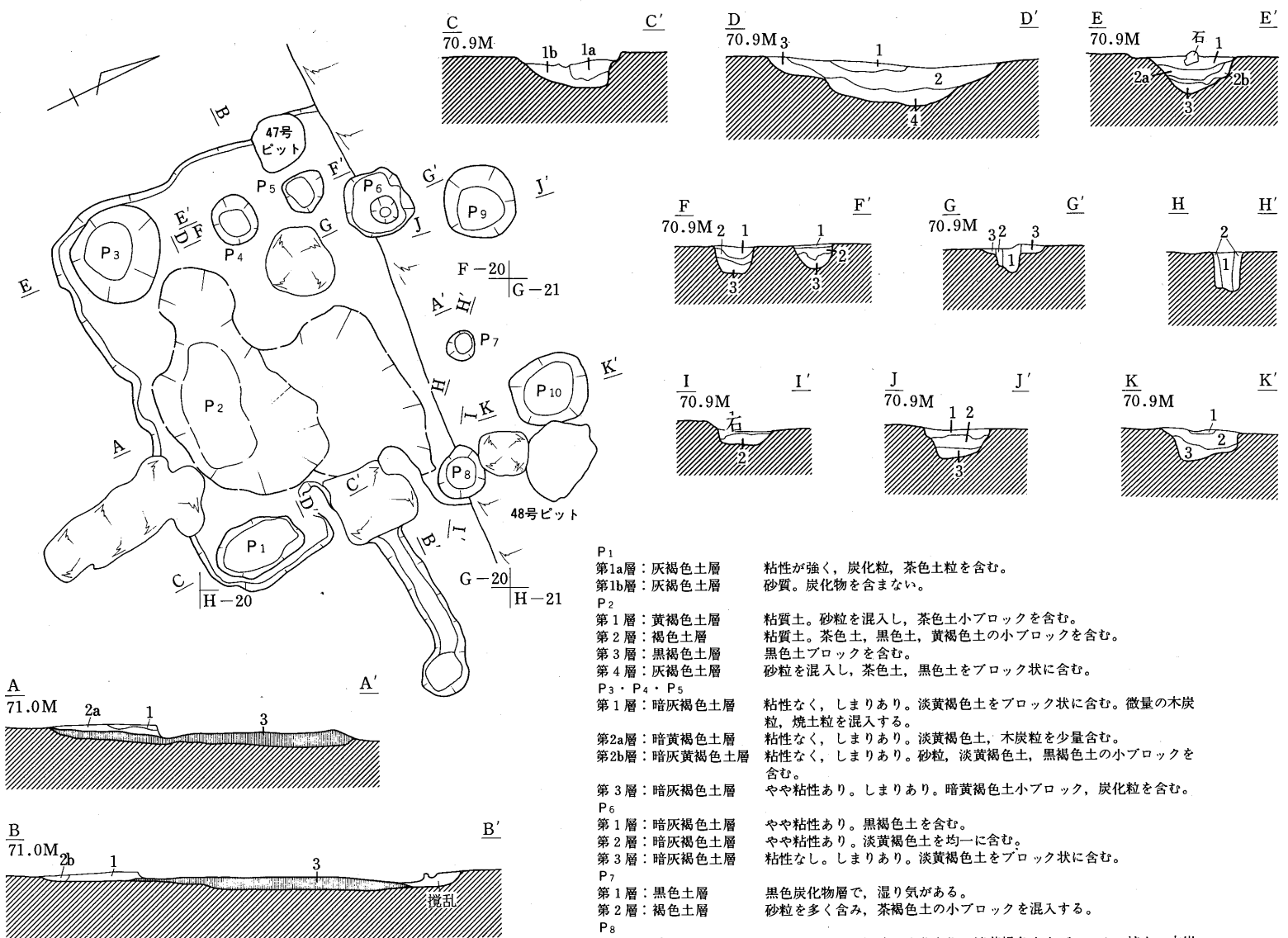
第14号住居跡(第45・46図, 第14図版, 第24表)

検出状況 II区のG~I-20・21グリッドより検出された住居跡で, 北側約1/3が耕作による攪乱のため削平されている。遺構確認面は地山上面である。本住居跡は13号住居跡により中央部の覆土の大半を切られている。西側約1mには6号溝跡と8号住居跡が近接して検出され, 北側約3mには17・21号住居跡, 4号不明遺構が重複して検出された。

プラン・規模・方向 耕作による攪乱のため住居跡の北側約1/3が削平されているが, 残存する南壁よりプランは一辺が約3.7m前後の隅丸方形を呈すると推定される。南・北壁の中点を通る軸線は北壁が削平されているため不明であるが, 残存する西壁の傾きと大差ないと考えられることからN-1°-Wを向くと推定される。

覆 土 住居跡の中央部の覆土は13号住居跡によって削平されているため検出されなかったが, 周辺部の覆土が残存している部分は3層に大別される。いずれも黄褐色土を基調とし, 第3層は炭化物を含む。第4層目が貼り床である。堆積状態は覆土が浅く上に中央部が削平されているため不明である。

壁・床面 壁は西壁の一部と南壁が検出された。壁高は検出面からわずかに5cm程で, たちあがり確認されたのみである。床面の中央部から南壁際にかけては浅い落ち込みが確認され, そ



- P<sub>1</sub>  
 第1a層：灰褐色土層 粘性が強く、炭化粒、茶色土粒を含む。  
 第1b層：灰褐色土層 砂質。炭化物を含まない。
- P<sub>2</sub>  
 第1層：黄褐色土層 粘質土。砂粒を混入し、茶色土小ブロックを含む。  
 第2層：褐色土層 粘質土。茶色土、黒色土、黄褐色土の小ブロックを含む。  
 第3層：黒褐色土層 黒色土ブロックを含む。  
 第4層：灰褐色土層 砂粒を混入し、茶色土、黒色土をブロック状に含む。
- P<sub>3</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>  
 第1層：暗灰褐色土層 粘性なく、しまりあり。淡黄褐色土をブロック状に含む。微量の木炭粒、焼土粒を混入する。  
 第2a層：暗黄褐色土層 粘性なく、しまりあり。淡黄褐色土、木炭粒を少量含む。  
 第2b層：暗灰黄褐色土層 粘性なく、しまりあり。砂粒、淡黄褐色土、黒褐色土の小ブロックを含む。  
 第3層：暗灰褐色土層 やや粘性あり。しまりあり。暗黄褐色土小ブロック、炭化粒を含む。
- P<sub>6</sub>  
 第1層：暗灰褐色土層 やや粘性あり。黒褐色土を含む。  
 第2層：暗灰褐色土層 やや粘性あり。淡黄褐色土を均一に含む。  
 第3層：暗灰褐色土層 粘性なし。しまりあり。淡黄褐色土をブロック状に含む。
- P<sub>7</sub>  
 第1層：黒色土層 黒色炭化物層で、湿り気がある。  
 第2層：褐色土層 砂粒を多く含み、茶褐色土の小ブロックを混入する。
- P<sub>8</sub>  
 第1層：暗灰褐色土層 やや粘性あり。固くしまりあり。淡黄褐色土小ブロック、焼土、木炭を含む。  
 第2層：黒茶褐色土層 粘性あり。しまりなし。淡黄褐色土ブロック、焼土、木炭を多量に含む。
- P<sub>9</sub>  
 第1層：暗灰褐色土層 粘性なし、しまりあり。淡黄褐色土小ブロックを含む。  
 第2層：黄灰褐色土層 粘性なし、しまりあり。暗灰褐色土と淡黄褐色土の混合層。  
 第3層：灰褐色土層 粘性なし、しまりあり。黄褐色砂質土と黄褐色粘質土のブロックを、少量混入する。
- P<sub>10</sub>  
 第1層：黒褐色土層 粘性なし、しまりあり。炭化物を多量に含む。  
 第2層：暗灰褐色土層 粘性なし、しまりあり。淡黄色土、灰白色土をまだら状に含み、炭化粒を微量混入する。  
 第3層：暗灰褐色土層 粘性なし、しまりあり。黄褐色土、黄灰褐色土を含む。

0 2 m

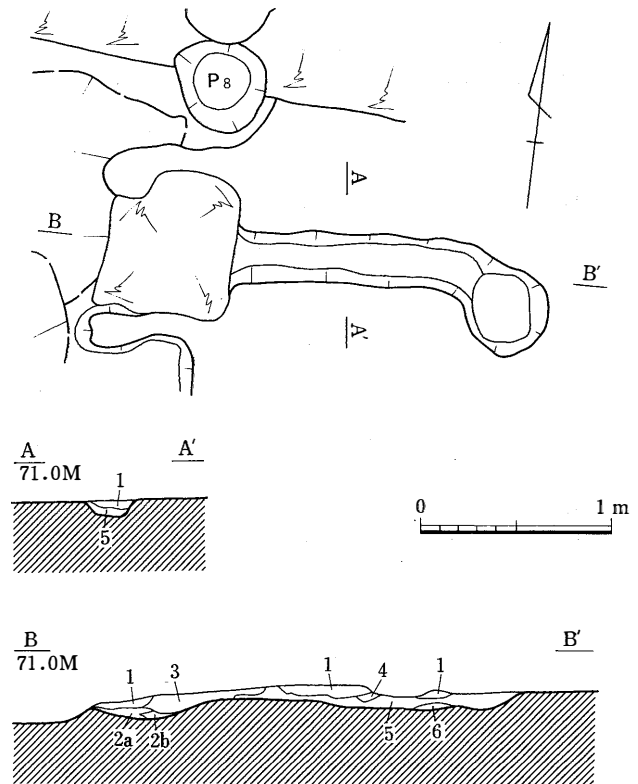
第45図 第14号住居跡

の部分埋めるように貼り床が施されている。貼り床は淡黄褐色土ブロックを多量に含む暗灰褐色土層である。西壁付近には貼り床が施されておらず、地山をそのまま床面として使用していたと推定される。

**ピット** P<sub>1</sub>～P<sub>10</sub>まで合計10個のピットが検出された。このうちP<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>～P<sub>8</sub>は本住居跡に伴うピットと推定される。P<sub>8</sub>はカマドに隣接しており、覆土に多量の焼土・木炭がブロック状に認められることから本住居跡の貯蔵穴と推定される。P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>は柱痕が認められるので本住居跡の柱穴であると推定されるが、他に柱痕が認められるピットが検出されていないため柱間距離は不明である。P<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>は北壁が削平されているため本住居跡に伴うものかは不明であり、覆土より推測することも困難な状態である。しかし南壁の長さより本住居跡の規模を推定した場合P<sub>9</sub>・P<sub>10</sub>が本住居跡に伴う可能性を否定することはできない。P<sub>2</sub>は浅い落ち込みの底面より検出されたピットであるが、ピット内覆土が粘質土で他のピット内覆土と異なることから本住居跡より古いものと考えられる。P<sub>1</sub>とP<sub>3</sub>はともに住居跡のコーナーで検出されたピットである。土器片が多く検出され、土層観察より覆土中に少量の木炭粒が認められるが、炭化物、焼土がほとんど検出されていないことから性格は不明である。P<sub>4</sub>・P<sub>5</sub>はピットの上面に貼り床が施されており、柱痕等も認められないことから性格は不明である。

**周溝** 検出されなかった。

**カマド** カマドは東壁中央部に構築されているが、後世の攪乱により燃焼部と両袖部の燃焼部側がこわされている。このため燃焼部内の堆



- |            |                    |
|------------|--------------------|
| 第1層：灰色土層   | やや粘性あり。砂質土を多く混入する。 |
| 第2a層：黒褐色土層 | 粘質土。               |
| 第2b層：黒褐色土層 | 砂質土。木炭を含む。         |
| 第3層：赤褐色土層  | 焼土ブロックを多量に含む。      |
| 第4層：褐色土層   | 粘質土。砂粒を少量混入する。     |
| 第5層：黒褐色土層  | 粘質土。砂粒を少量混入させる。    |
| 第6層：灰黄褐色土層 | 砂粒を多量に含む。          |

第46図 第14号住居跡カマド

## 第1節 住居跡

積状態は不明である。煙道は上面が耕作による攪乱のため削平されているが、長さ約166cm、幅25～28cm、検出面からの深さ5～10cmを測る。先端部は曲っているが、煙出ピットが検出された。煙道は東壁にほぼ直角にとりつけられ、N-108°-Eを向く。

**掘り方** 本住居跡の中央部から南壁にかけて浅い落ち込みが検出されたが、貼り床の土層で埋めてあり、明確な掘り方ではない。本住居跡は掘り方を持たないものと考えられる。

**遺物** ピット内より多くの土器片が出土している。また本住居跡の床面より外面にはタタキメ、内面にはロクロナデが施されている須恵器の甕の破片が検出されたが、体部であるため図示できなかった。破片数は第66表に示す。

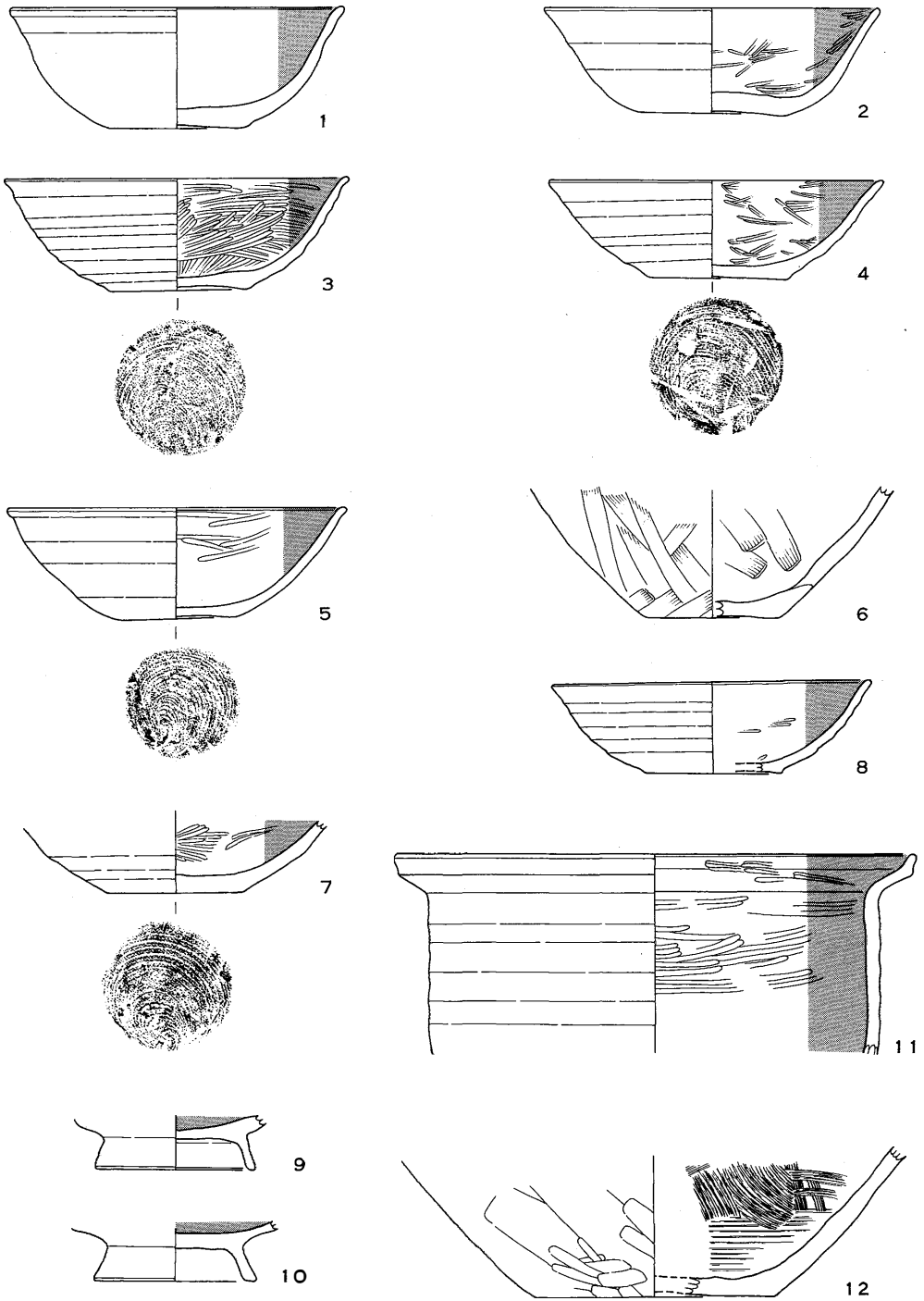
第24表 第14号住居跡ピット形態表

No	形状	計測値 (単位 cm)			柱痕 (単位 cm)		備考
		上面径	下面径	深さ	径	深さ	
P <sub>1</sub>	不整楕円形	88 × 50	76 × 39	26			
P <sub>2</sub>	不整形	238 × 115	123 × 53	37			
P <sub>3</sub>	不整円形	93 × 87	56 × 48	36			
P <sub>4</sub>	不整円形	48 × 42	32 × 25	25			
P <sub>5</sub>	不整円形	43 × 43	29 × 20	22			
P <sub>6</sub>	不整円形	70 × 70	27 × 25	26	25 × 9	26	柱穴?
P <sub>7</sub>	不整円形	30 × 30	19 × 16	12	18 × 9	38	柱穴?
P <sub>8</sub>	不整円形	51 × 45	30 × 26	13			貯蔵穴
P <sub>9</sub>	不整円形	72 × 68	46 × 42	26			
P <sub>10</sub>	不整円形	79 × 65	58 × 44	31			

### 遺構に伴う遺物(第47図1～7,第48図版5～9,第25表)

#### 土師器

**杯(1～5)** 1～5は全てロクロ調整の杯である。1は全体の約30%, 2～4は全体の約80%, 5は約70%を残す破片である。1はカマドの左袖部の上から検出された。摩滅が激しく器面があれいるため切り離し痕, 及び再調整は観察できない。2・3はP<sub>1</sub>の覆土中より検出された。2は摩滅が激しいため再調整は観察できないが, わずかに回転糸切りによる切り離し痕が認められる。3は再調整が施されておらず, 底部に回転糸切りによる切り離し痕が観察される。4・5はP<sub>2</sub>の覆土中より検出された。ともに再調整は認められず, 回転糸切りによる切り離し痕が観察さ



第47図 第14号住居跡出土遺物 (1/3)

## 第1節 住居跡

れる。よって1・2は分類できないが、3～5は5b類である。1～5は全て器形が底部から内弯してたちあがり、そのまま口縁部に至るが、3～5は口縁端部が強く外反している。色調は1・2・4は黄茶褐色、3・5は赤茶褐色を呈し、内面には全て黒色処理が施されている。

甕(6) カマド内から検出された底部～体部下半の約20%を残す非ロクロの破片で、体部のたちあがりから甕であろうと推定される。底部の調整は摩滅のため不明であるが、体部内外面に縦方向のヘラナデによる調整が施される。色調は赤茶褐色を呈し、胎土には径1～4mm大の小礫を含む。

### 覆土出土の遺物(第47図8～12,第48図版10,第25表)

#### 土師器

杯(7・8) 7・8はともにロクロ調整の杯で、7は全体の約30%を、8は底部から体部下半部を残している。7は本住居跡に伴う可能性のあるP<sub>9</sub>から、8は第1層から出土している。7は底部の大部分が欠損し摩滅しているため切り離し痕、再調整は不明である。8は底部に回転糸切り痕が観察される。ともに体部には再調整が施されておらず、内面には黒色処理が施されている。よって7は5類、8は5b類に分類される。7・8ともに胎土は密で、焼成は良好である。7は比較的肥厚した底部をもつ。

高台付杯(9・10) 9・10はともに床面直上層より出土した高台付杯の高台部である。2点とも摩滅が激しく杯部の切り離し痕、再調整は観察できないが、高台をつけるための調整痕が観察されるため付け高台と推定される。9・10はともに内面に黒色処理が施されている。10は9より底部、高台の器厚があり、高台が広く開いている。

甕(11) 本住居内の攪乱ピットより出土した、口縁部の約20%を残すロクロ調整の甕であるが、器面がややあれている。口縁部は外反してたちあがり口縁端部は上につまみ出された形をしている。頸部には段がなく垂直にたちあがっていることから、体部は長胴形を呈すると推定される。外面には再調整が認められないが、内面には横位のミガキが施され黒色処理が観察される。※-1a-B<sub>3</sub>-(h-b)類に分類される。

#### 須恵器

甕(12) 床面直上層より出土した底部から体部下半にかけての破片である。底部は摩滅が激しいが、わずかに手持ちヘラケズリによる再調整が観察される。体部は底部より外傾してたちあがる。体部外面には縦方向と横方向のヘラケズリによる再調整が認められる。この再調整は器面がやや乾いてから施されたため、同じ工具を使用しているもヘラケズリの一単位の幅がひろいものとせまいものが観察される。内面には底部から体部下端にかけては回転ハケメ、体部には斜位のハケメによる再調整が施されている。胎土は密であるが、径2～4mm大の粗い粒子を含む。土師器

のロクロ甕分類のIb-※-※-(c-df)に分類される。

第25表 第14号住居跡出土土器一覧表

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
47	1	48-5	土師器	杯	左袖部		14.1			5.7	5.2			内黒
47	2	48-6	土師器	杯	P <sub>1</sub>		14.5			6.1	4.5			内黒
47	3	48-7	土師器	杯	P <sub>1</sub>		14.6			6.0	4.95			内黒
47	4	48-8	土師器	杯	P <sub>2</sub>		14.5			5.8	4.2			内黒
47	5	48-9	土師器	杯	P <sub>2</sub>		14.4			5.0	4.8			内黒
47	6		土師器	小形甕	カマド内					5.7				
47	7		土師器	杯	P <sub>9</sub>		13.5			5.8	3.9			内黒
47	8		土師器	杯		ℓ-1				7.0				内黒
47	9		土師器	高台付杯		床直						6.8	1.4	内黒
47	10		土師器	高台付杯		床直						6.8	1.5	内黒
47	11	48-10	土師器	甕		ℓ-1	22.1							内黒
47	12		須恵器	甕		床直				10.2				

第15号住居跡(第48・49図, 第15図版, 第26表)

検出状況 II区D・E-19・20グリッドより検出された住居跡で、遺構確認面は地山上面である。本住居跡の煙道が19号ピットを、煙出しピットが6号不明遺構を切っている。本住居跡の西側約1mでは16号住居跡、東側約1mでは8号住居跡が検出されている。また本住居跡の北側約50cmに19号住居跡が近接している。

プラン・規模・方向 本住居跡は東西約3m、南北に約2.5mを測る。北西・南西コーナーはゆるやかな曲線を描き、西壁は外側にふくらんでいる。北東・南東コーナーはほぼ直角に曲っている。本住居跡のプランは東西にやや長い隅丸方形と考えられる。南・北壁の midpoint を結ぶ軸線はN-1°-Wを向き、ほぼ真北をさす。カマドは南壁の東側寄りに構築されており、ピットは6個検出されている。本住居跡の総面積は約7.5m<sup>2</sup>である。

覆土 覆土は3層に分かれる。第1層は褐色土層、第2層は灰褐色土層とともに木炭小粒を含み、第2層は灰色粘質土を含む。第3層は床面上に部分的に観察される木炭と焼土の混合層であるが、粘土を全く含まないことからカマド内堆積土が流出したものと推定される。覆土の堆積



## 第1節 住居跡

状態はレンズ状を呈しており、自然堆積と考えられる。第4層目が貼り床である。

**壁・床面** 壁は四壁ともほぼ良好な状態で検出された。壁高は検出面から7～20cmを測る。東壁の床面からの法面角度は約114°でゆるやかに外傾してたちあがり、他の三壁もほぼ同様である。床面は中央部よりも東壁沿いが若干高く、逆に南壁沿いは中央部より低くなっている。なおこの褐色土層の貼り床はピットの上面では検出されていない。床面の下には住居跡よりわずかに小さい掘り方がある。

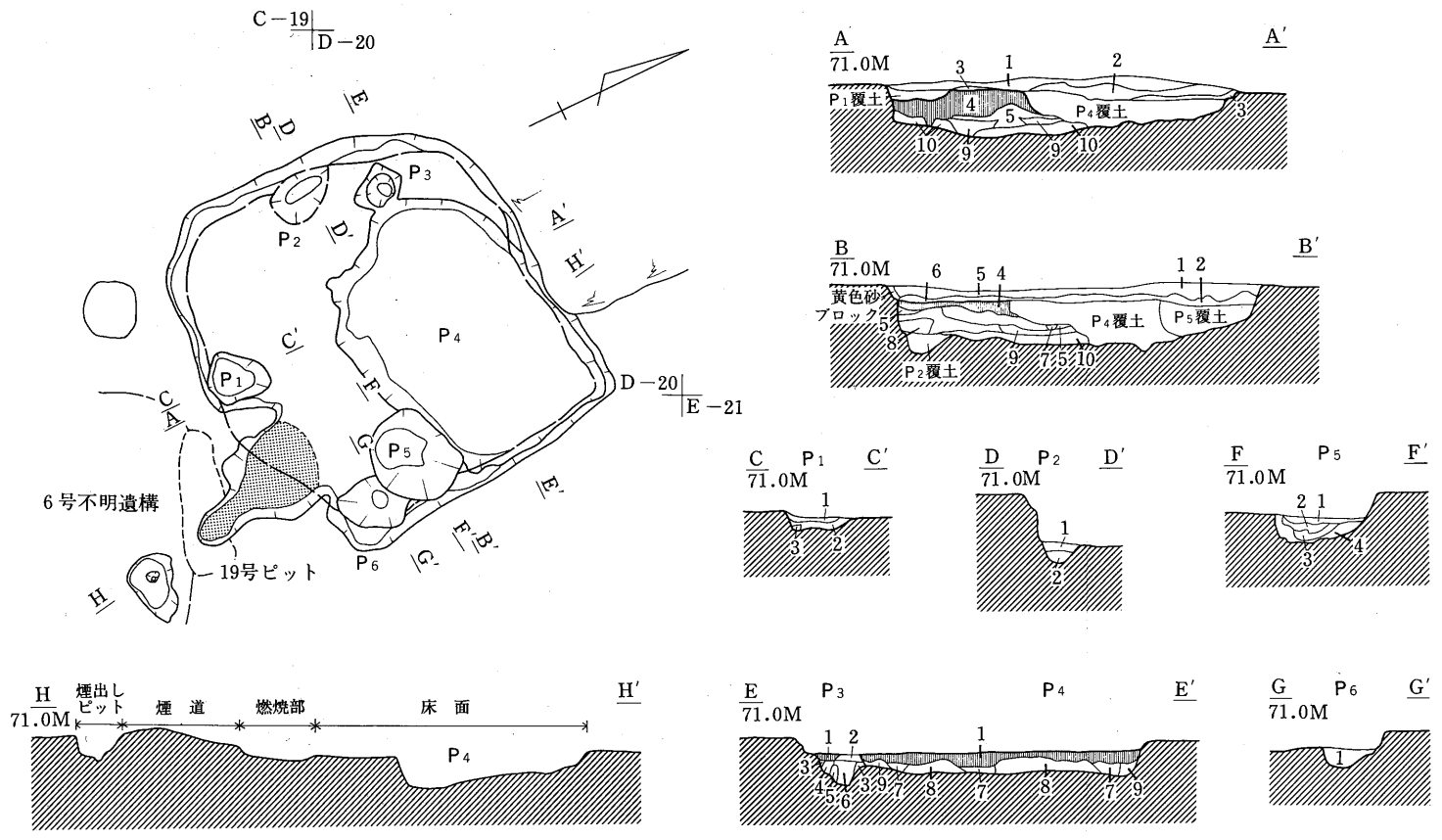
**ピット** P<sub>1</sub>～P<sub>6</sub>まで合計6個のピットが検出された。このうち柱痕が観察されたのはP<sub>3</sub>のみで、他に柱痕が観察されるピットは認められなかった。P<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>～P<sub>6</sub>からは覆土中に多量の木炭粒・焼土が検出されており、P<sub>1</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>はほぼレンズ状の堆積状態を呈している。このP<sub>1</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>はカマドに隣接していることから本住居跡の貯蔵穴と推定される。このうちP<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>はピットの最上層が貼り床と同質の土で人為的に埋められており、P<sub>5</sub>がP<sub>6</sub>を切っていることからP<sub>6</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>1</sub>の順に使用され、P<sub>1</sub>が最も新しい貯蔵穴と考えられる。なおP<sub>4</sub>は上面を貼り床と近似する土層で人為的に埋めており、下層の木炭粒、焼土粒が多量に検出される。下層はブロック状の堆積状態を呈している。また規模も床面の約1/3を占める大きさであるため、このピットの性格は不明である。また、P<sub>2</sub>は本住居跡の掘り方底面から検出されたピットで本住居跡に伴うかは不明である。

**周溝** 検出されなかった。

**カマド** カマドは南壁の東側寄りの地点に構築されている。上面が耕作による攪乱のため削平されているが、ほぼ良好な状態で検出された。左袖部は45×20cm、高さ10cm、右袖部は40×25cm、高さ7cmを残している。左袖部の延長部分が住居跡外に構築されている。燃焼部は窪んだ底面を有する。焚き口部幅約63.4cm、燃焼部幅約57cm、奥行63cmを計る。燃焼部内の土層観察によると、天井部崩落層にあたる粘土層は検出されなかったが、第2・3層が焼土と木炭と灰を

第26表 第15号住居跡ピット形態表

No	形状	計測値 (単位 cm)			柱痕 (単位 cm)		備考
		上面径	下面径	深さ	径	深さ	
P <sub>1</sub>	不整円形	51×41	33×18	11			貯蔵穴
P <sub>2</sub>	不整楕円形	56×36	34×11	16			
P <sub>3</sub>	不整方形	42×31	32×22	25	17×9	25	
P <sub>4</sub>	不整方形	230×155	219×135	17			
P <sub>5</sub>	不整円形	76×63	42×30	21			貯蔵穴
P <sub>6</sub>	不整円形	59×42	15×12	15			貯蔵穴



- |            |                                |                  |                               |               |                                  |
|------------|--------------------------------|------------------|-------------------------------|---------------|----------------------------------|
| 第1層：褐色土層   | 砂質。かたくしりあり。炭化粒を含む。             | P1 第1層：灰褐色土層     | しりりあり、木炭、焼土を含む。               | 第5層：灰褐色土層     | 粘性、しりりあり。木炭粒を微量含む。               |
| 第2層：灰褐色土層  | 灰色粘質土、炭化粒と少量の焼土を含む。            | 第2層：木炭・焼土層       | 木炭と焼土の混合層。軟らかく、しりりがある。        | 第6層：暗灰褐色土層    | 粘性、しりりあり。褐鉄鉱、焼土ブロック、黄色土粒、木炭粒を含む。 |
| 第3層：木炭焼土層  | 木炭と焼土の混合層。                     | 第3層：黄色土層         | 粘性があり、木炭を微量含む。                | 第7層：暗青灰色土層    | 粘性、しりりあり。木炭粒、黄色シルトを含む。           |
| 第4層：褐色土層   | 粘性、しりりあり。褐鉄鉱、黄色土、木炭粒を含む。       | P2 第1層：黄褐色土層     | 粘性、しりりあり。黒色土ブロック、黄色土粒、木炭粒を含む。 | 第8層：暗茶褐色土層    | 粘性、しりりあり。木炭粒、黄色土、褐鉄鉱を含む。         |
| 掘り方埋土      |                                | 第2層：黄色砂質土層       | しりりあり。木炭粒を微量含む。               | 第9層：黄色土層      | シルト質。灰褐色土、木炭粒を含む。                |
| 第5層：黄色土層   | 粘性、しりりあり。褐色土、木炭粒を含む。           | P3・P4 第1層：暗灰褐色土層 | 粘性、しりりあり。黄色土、木炭粒を含む。          | P5 第1層：灰褐色土層  | 粘性、しりりあり。木炭、焼土粒が混入。              |
| 第6層：灰青褐色土層 | 粘性が強く、しりりあり、微量の黄色土、黒色土、木炭粒を含む。 | 第2層：黄色土層         | (貼り床)シルト質で、焼土、木炭粒を含む。         | 第2層：木炭・焼土層    | 粘性あり。木炭、焼土を多量に含む。                |
| 第7層：茶色土層   | 褐鉄鉱の沈澱層。                       | 第3層：灰黄色土層        | 粘性あり。木炭微粒、黄色土を含む。             | 第3層：暗灰褐色土層    | 微量の木炭粒を含む。                       |
| 第8層：暗黄褐色土層 | 粘質土でしりりあり。黒色粘質土、黄色土を含む。        | 第4層：暗青灰色土層       | 粘性、しりりあり。黄色土粒を微量含む。           | 第4層：灰褐色土層     | 軟層。粘性あり。焼土、木炭粒を多量に混入。            |
| 第9層：黒褐色土層  | 粘性強く、しりりあり。黄色土粒をわずかに含む。        |                  |                               | P6 第1層：暗灰褐色土層 | しりりあり。多量の焼土粒、焼土ブロック、大粒の木炭粒を含む。   |
| 第10層：黄色土層  | 砂質。微細粒で褐色土、木炭粒を微量含む。           |                  |                               |               |                                  |

第48図 第15号住居跡



基調とする土層であることから、カマド内堆積土と推定される。また燃焼部の中央からは河原石の支柱が1個検出された。この支柱に被さるような状態で完形の土師器の杯が1点出土している。煙道は南壁にはほぼ直角に構築されており、N-173°-Eを向く。長さは1.3m、上端部の幅は約25~28cmを計り、ゆるやかに傾斜してたちあがっている。煙道の先端から約50cm離れてピットが検出されたが、71.0M 上面が削平されていることを考えると、このピットは煙出しピットと考えられる。上面にまとまった地山の堆積が認められないことから半地下式の煙道と推定される。

**掘り方** 掘り方は本住居跡よりひとまわり小さく、東西約2.8m、南北約2.2m、床面からの深さは15~40cmを測る。掘り方底面からP<sub>2</sub>が1個検出されたが、本住居跡に伴うものは不明である。土層観察によると、黄色土等がブロック状に堆積している。

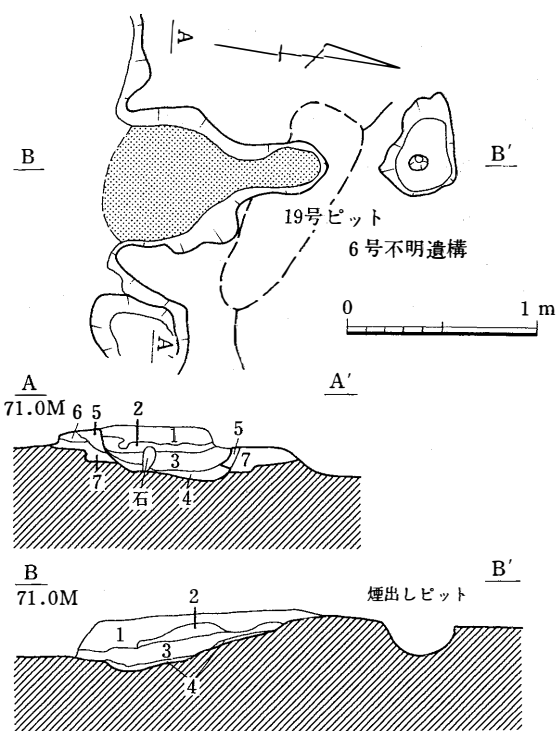
**遺物** 覆土中より100点以上の土師器片が出土したが、いずれも細片であるため図示できなかった。破片数は第66表に表わす。

遺構に伴う遺物(第50図1,第48図版11,第27表)

### 土師器

**杯(1)** カマド内の支柱におおいかぶさった状態で出土した完形のロクロ調整の杯である。器面の摩滅が激しく表面が剥離しているため切り離し痕、再調整は観察できないが、底部外面に「十」字形の線刻がわずかに認められる。器形は底部から内弯してたちあがり口縁部に至るが、口縁端部はわずかに外反している。内面には黒色処理が施されている。器厚は厚手である。色調は赤味がかかった黄褐色を呈し、胎土には径1~2mm大の長石・石英の粒子が含まれる。

覆土出土の遺物(第50図2・第27表)



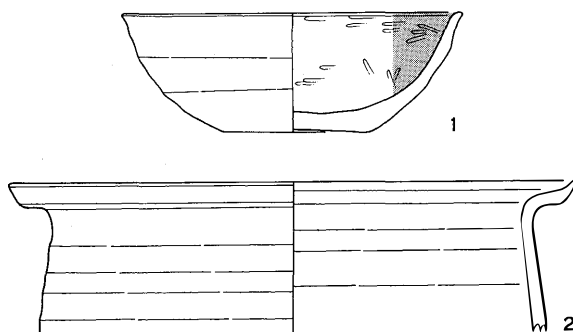
- |           |                            |
|-----------|----------------------------|
| 第1層：褐色土層  | 固く、部分的に焼土、木炭を含む。           |
| カマド内堆積土   |                            |
| 第2層：焼土層   | 粘性があり、やわらかい。               |
| 第3層：焼土・灰層 | 多量の焼土と灰、木炭の混合層で、やわらかい。     |
| 第4層：黄褐色土層 | シルト質でしまりがある。少量の木炭粒を含む。     |
| 袖部        |                            |
| 第5層：赤黄色土層 | 焼土層で、木炭を混入する。              |
| 第6層：黄褐色土層 | シルト質でしまりあり。わずかに焼土粒、木炭粒を含む。 |
| 第7層：灰褐色土層 | 粘性、しまりあり。黄色土粒、木炭粒を含む。      |

第49図 第15号住居跡カマド

第1節 住居跡

甕(2) P<sub>4</sub>より出土した口縁部の約10%を残すロクロ調整の甕の破片である。口縁部は強く外反してたちあがり、口縁下部は上端につまみだされている。体部下半が欠損しているために、器形および底部は不明である。内外面ともに再調整は施されておらず、ロクロ目が顕著である。

※-※- A<sub>3</sub>-(h-h)類に分類される。



(穴戸美智子) 第50図 第15号住居跡出土遺物(1/3)

第27表 第15号住居跡出土土器一覧表

図	番号	写真	名称	器形	位置	属位	法 量 (単位 cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
50	1	48-11	土師器	杯	カマド		13.4			5.8	4.7			内 黒
50	2		土師器	甕		β-2	22.6	19.3						

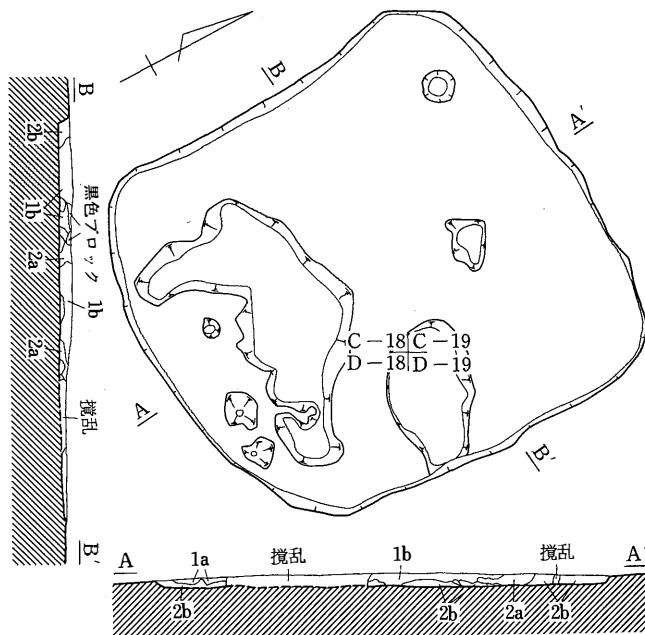
第16号住居跡

(第51図, 第16図版)

検出状況 II区 C・D-18・19  
グリッドより検出されている。確認面は地山の上面であり、一部が攪乱により切られている。

プラン・規模・方向 やや歪んだ隅丸方形のプランを有し、東西・南北の壁の midpoint でそれぞれ 3.35 m, 3.62 m を測る。方向は南・北壁 midpoint を結ぶ線ではほぼ真北を示す。

覆 土 中央部で厚さ 10 cm を測り、やや乱れた状態で灰褐色から白茶褐色のシルト質及び粘土質の第1・2層が堆積している。全体として薄いため、自然堆積か人工堆積かは不明である。



第1a層：灰褐色土層 シルト質土。粘性あり。黒色小ブロックを含む。  
 第1b層：暗灰褐色土層 シルト質土。粘性あり。砂分多し。  
 第2a層：灰褐色土層 粘土質土。やや硬質。  
 第2b層：白茶褐色土層 粘土質土。やや軟質。

第51図 第16号住居跡



壁・床面 東壁は丸味を持ち、深さ約5cm、西壁は床面から約140°の緩い傾斜で深さ約5cm、北壁は床面より117°で深さ約10cmを測る。南壁はほとんど痕跡的に残るのみであり、各壁とも地山を掘り込んだものである。

床面は緩く波打つような浅い凹凸が見られ、床面となっている地山上面はかなり硬質であるが、叩きしめられたような痕跡は見られない。

ピット 北西コーナー付近の床面から上面径24cm、底面径16cm、深さ19.6cmの円形ピットが検出されている。

周溝 検出されなかった。

カマド 検出されなかった。

掘り方 検出されなかった。

遺物 遺構に伴う遺物は検出されなかった。

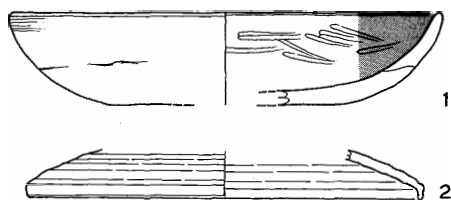
### 覆土出土の遺物(第52図1・2,第28表)

#### 土師器

杯(1) 非ロクロの平底、内黒の杯である。外面は荒れて調整は不明であるが、口縁上半には横ナデの痕跡が見られる。Ⅲa-4-A1-(※-b)類である。この他にロクロ調整甕の口縁部破片、体部にハケメのある甕の破片が出土しているが、小破片のため図示は不可能であった。

#### 須恵器

蓋(2) 直線的に中央部が高くなる蓋で、下端部はほぼ直立するような形で下方に折れ曲っている。内外面ともロクロ目が明瞭で胎土・焼成は良好である。



(木本 元治)

第28表 第16号住居跡出土土器一覧表

第52図 第16号住居跡出土遺物(1/3)

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法量 (単位cm)						備考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
52	1		土師器	杯		ℓ-1	17.0							
52	2		須恵器	蓋		ℓ-1	15.5							

### 第17号住居跡(第53・54図, 第17図版, 第29表)

検出状況 II区のG・H-22~24グリッドより検出された住居跡である。耕作による攪乱のため、壁、及び覆土の大部分が削平されており、遺構確認面である地山上面が本住居跡の床面と同

## 第1節 住居跡

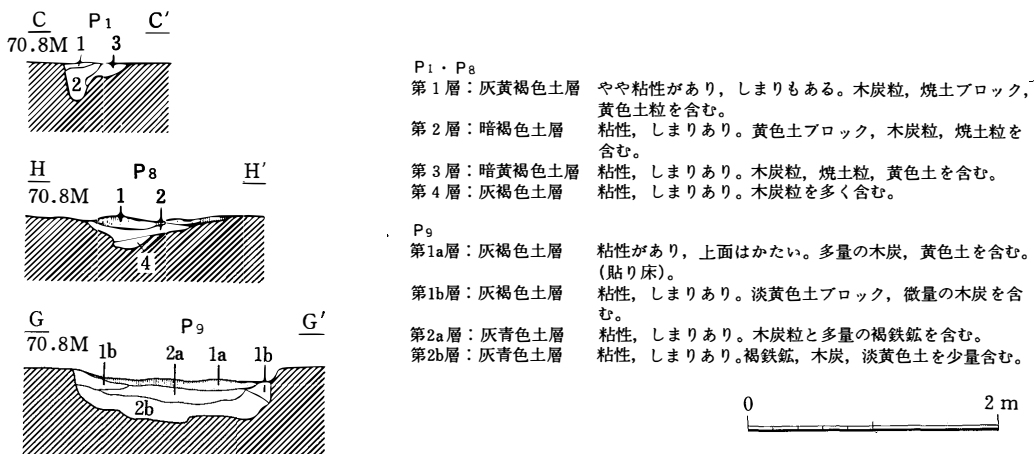
レベルである。本住居跡は4号不明遺構と、21号住居跡を切っている。また本住居跡の西側約1.5mには8号溝跡、南側約3mには13・14号住居跡が検出されている。

**プラン・規模・方向** 本住居跡は貼り床が施してある床面において確認されたもので、攪乱が激しいため、壁はまったく検出されなかった。本住居跡の貼り床は部分的に確認されたものであり、また掘り方も不整形を呈していることから、本住居跡の明確なプラン・規模・方向は不明である。しかし遺存する貼り床から本住居跡のプランは1辺が4m以上の方形を呈するであろうと考えられる。

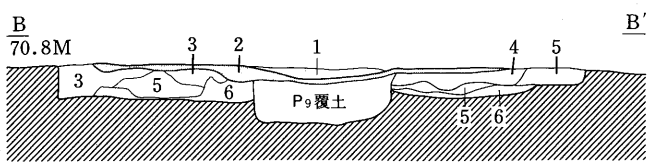
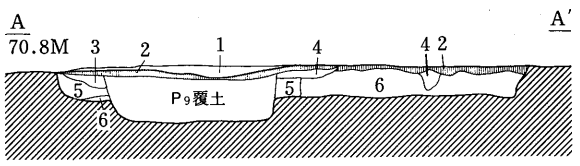
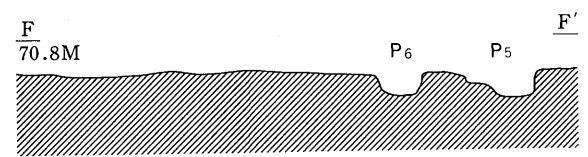
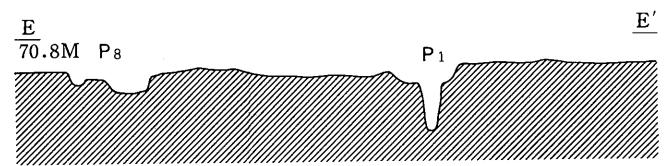
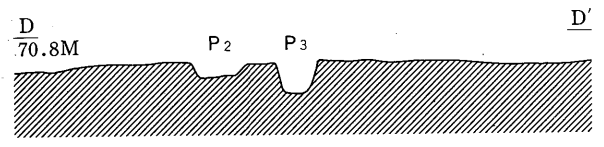
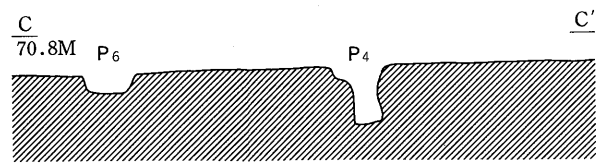
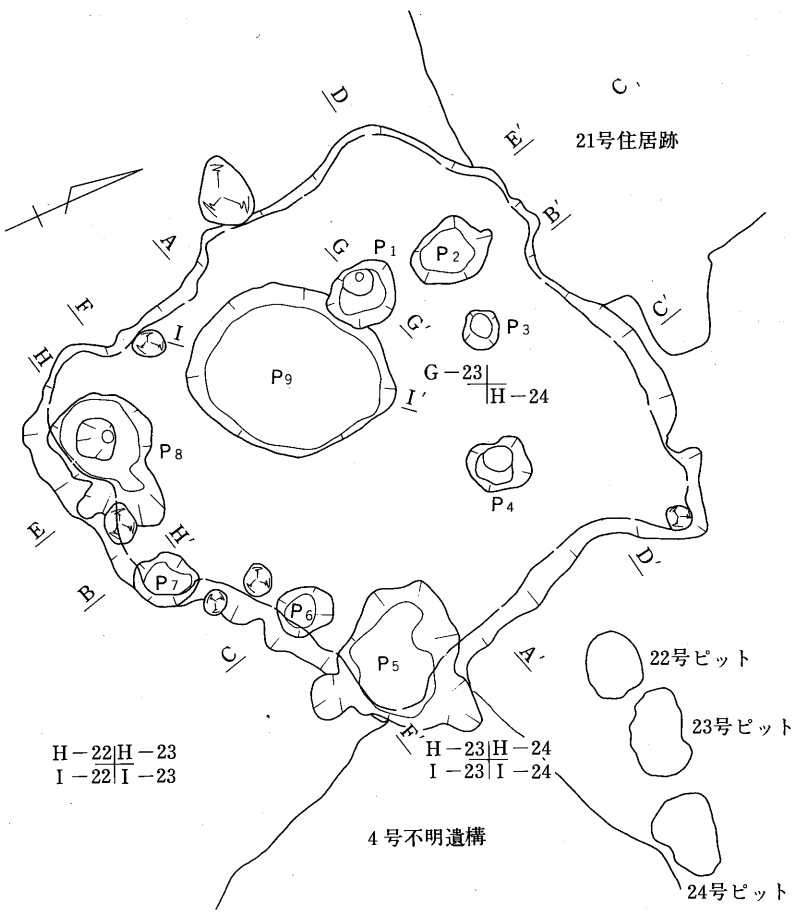
**覆土** 住居跡中央部のわずかに窪んでいる部分から、薄い覆土が検出された。覆土は検出面からの深さ約6～8cmを測り、黄色土ブロック・焼土ブロック・木炭を多量に含む灰黄褐色土の単一層である。堆積状態は覆土が浅いため不明である。

**壁・床面** 耕作による攪乱のため四壁は全て削平されており、たちあがりも不明である。床面には貼り床が施されている。貼り床は褐鉄鉱を多量に含む黄灰褐色土層で、部分的に補強した痕跡が認められる。

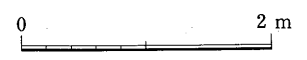
**ピット** P<sub>1</sub>～P<sub>9</sub>まで合計9個のピットが検出された。このうちP<sub>1</sub>・P<sub>4</sub>・P<sub>9</sub>は掘り方よりも深いピットである。位置および断面形から柱穴と推定されるピットはP<sub>4</sub>・P<sub>1</sub>であるが、南壁沿にはこれと対応するピットは確認されなかった。P<sub>8</sub>は覆土中に焼土及び木炭粒が多量に観察され、土器片の出土数も多いことから貯蔵穴であると推定される。P<sub>9</sub>は住居跡の中央部にあり覆土中には焼土・木炭粒をあまり含まない。上面には貼り床が施され、掘り方底面より深く掘り込まれている。掘り方の埋土を切っていることから本住居跡に伴うピットであると考えられるが、性格は不明である。なおピット内の覆土からは、21号住居跡の床面から出土している須恵器の杯に接合する破片が検出されている。その他のピットはいずれも浅く性格は不明である。



第53図 第17号住居跡内ピットセクション



- 第1層：灰褐色土層 シルト質でやや粘性があり、しまっている。かたい黄色土をブロック状に含む。焼土粒・木炭細粒を多量に含む。
- 貼り床
- 第2層：黄灰褐色土層 かたくしまっている。褐鉄鉱を多量に含む。部分的にかたい黄色土・焼土粒・木炭粒を含む。
- 掘り方埋土
- 第3層：暗黄褐色土層 しまりがあり、やや粘性がある。黄色粘質土、褐鉄鉱・茶色砂灰青褐色土小ブロックを斑点状に含む。部分的に微量の木炭粒、焼土粒を混入する。
- 第4層：灰青褐色土層 かたくしまっている。淡黄褐色土、褐鉄鉱を斑点状に含む。木炭粒を少量含む。
- 第5層：黄褐色土層 粒子が非常に細かく、若干粘性があり、かたくしまっている。黄色砂・褐色土を含み、わずかに木炭粒を混入する。
- 第6層：暗黄褐色土層 粘質土。粘性が非常に強く、しまっている。黒色粘質土、黄色粘質土・淡黄色土・褐色土の小ブロックを斑点状に多量に含む。微量の木炭粒を含む。



第54図 第17号住居跡

周 溝 検出されなかった。

カ マ ド 検出されなかった。

掘 り 方 本住居跡よりもひとまわり小さい不整形の掘り方をもつ。本住居跡の床面から深さ15～25cmを測る。掘り方底面は比較的平坦でピット等は検出されなかった。掘り方埋土は暗黄褐色土、灰青褐色土、黄褐色土、暗灰黄褐色土がほぼブロック状に堆積している。

遺 物 非常に浅い覆土から多数の土器細片が出土した。またピット中よりも多くの土師器片が出土している。なお貼り床の下にあるP<sub>9</sub>より出土した須恵器の杯片は、本住居跡に切られている21号住居跡床面出土の破片と接合したため21号住居跡に伴う遺物であると考えられる。破片数は第66表に示す。

第29表 第17号住居跡ピット形態表

No	形 状	計 測 値 (単位 cm)			柱 痕 (単位 cm)		備 考
		上 面 径	下 面 径	深 さ	径	深 さ	
P <sub>1</sub>	不 整 円 形	59 × 50	40 × 32	52			柱穴?
P <sub>2</sub>	不 整 形	69 × 49	43 × 32	14			
P <sub>3</sub>	不 整 円 形	34 × 28	21 × 15	26			
P <sub>4</sub>	不 整 形	53 × 37	33 × 19	46			柱穴?
P <sub>5</sub>	不 整 形	137 × 124	94 × 60	25			
P <sub>6</sub>	不 整 楕 円 形	46 × 37	29 × 22	18			
P <sub>7</sub>	不 整 円 形	52 × 45	39 × 22	15			
P <sub>8</sub>	不 整 形	118 × 75	35 × 33	32			
P <sub>9</sub>	不 整 円 形	166 × 134	141 × 110	45			

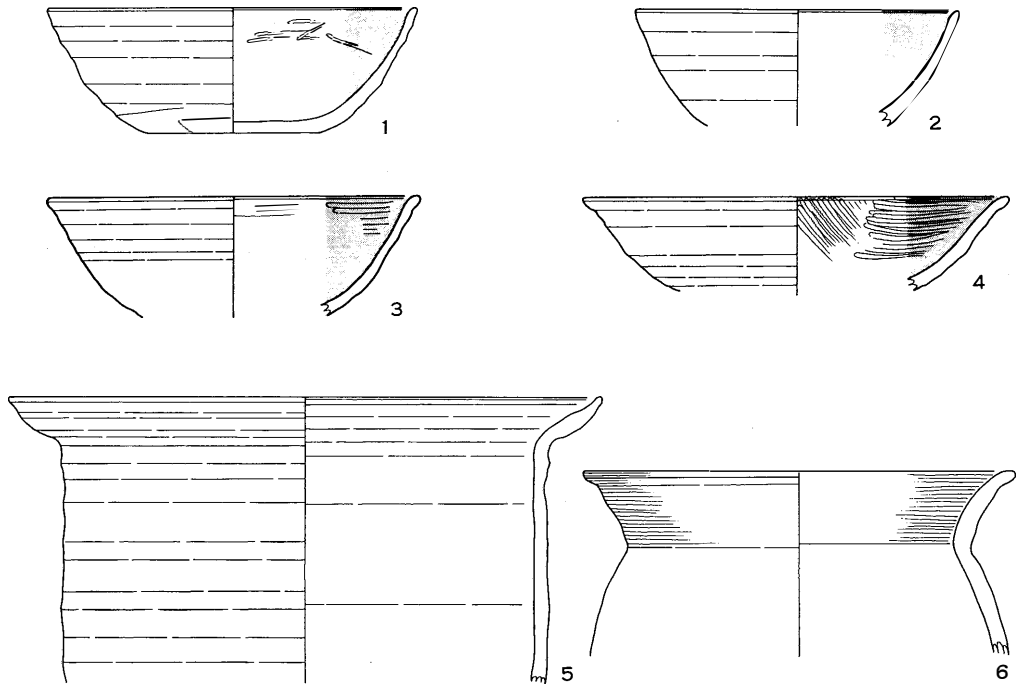
遺構に伴う遺物(第55図1～5, 第56図, 第48図版12, 第49図版1, 第30表)

#### 土 師 器

杯(1～4) 1～4は全てロクロ調整の杯で、1はP<sub>2</sub>, 2はP<sub>8</sub>, 3・4はP<sub>9</sub>から出土している。1は全体の約50%を残す破片で底部周縁部、及び体部下位に手持ちヘラケズリによる再調整が施されているが、回転糸切りによる切り離し痕がわずかに観察される2b類である。2～4は摩滅が激しく、口縁部の約30%を残す破片である。また底部を欠損しているため切り離し痕、及び再調整は不明である。1～4は全て体部が内弯してたちあがり1・2はそのまま口縁端部に至るが、3・4は口縁端部が外反している。1～4は全て胎土が密で内面に黒色処理が施されている。外



第1節 住居跡

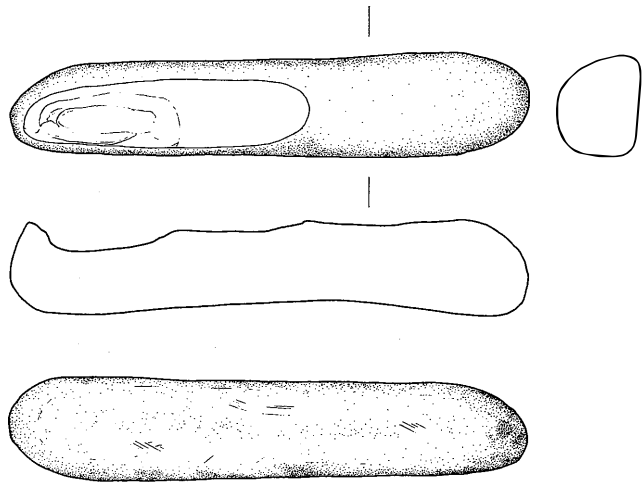


第55図 第17号住居跡出土遺物 (1/3)

面は、1が淡茶褐色、2が黄茶褐色、3が赤茶褐色を呈し、4には黒い付着物が観察される。  
 甕(5) P<sub>2</sub>から出土した口縁部の約20%を残すロクロ調整の甕である。口縁部は外傾してたちあがり外面が丸く肥厚している。口縁端部は、上につまみ出されたようにたちあがる。体部は長胴形を呈すると推定され、最大径の位置は口縁部にある。底部が欠損しているため切り離し痕、再調整は不明である。外面体部には黒い付着物が観察され、胎土には砂粒が多くふくまれる。※-1a-C<sub>3</sub>-(h-h)類に分類される。

石製品

不明石製品 P<sub>2</sub>より出土した用途不明の石製品である。長さは13.9cm、径は2.6×2.1cm、重さは138gを測る。石質は泥岩である。上面には打ち欠いた痕跡が認められ、下面は平坦に磨かれている。部分的に方向が不明な擦痕が観察される。



第56図 第17号住居跡出土遺物 (1/3)

覆土出土の遺物(第55図6, 第30表)

土 師 器

小形甕(6) 床面直上層より出土した非ロクロ調整の小形甕で、口縁部の約 $\frac{1}{4}$ を残す破片であり、摩滅が激しい。口縁部は外傾してちあがり、口縁端部は外側につまみ出されたように外反している。口縁部と体部との境には段をもたない。体部下半及び底部は欠損しているが、丸味をもった体部をもつと推定される。色調は暗い黄茶褐色を呈し、胎土には粒子の荒い砂粒が多量に含まれる。※-3a-B<sub>1</sub>-(a-a)類に分類される。

第30表 第17号住居跡出土土器一覧表

図	番号	写 真	名 称	器 形	位 置	層 位	法 量 (単位 cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
55	1	48-12	土師器	杯	P <sub>2</sub>		14.6			7.0	5.0			内 黒
55	2		土師器	杯	P <sub>8</sub>		12.8							内 黒
55	3		土師器	杯	P <sub>9</sub>	ℓ-1	14.8							内 黒
55	4		土師器	杯	P <sub>9</sub>	ℓ-1	16.7							内 黒
55	5		土師器	甕	P <sub>2</sub>		23.6	19.4	19.6					
55	6		土師器	小形甕		床 直	16.2	13.0						

第18号住居跡(第57図, 第18図版, 第31表)

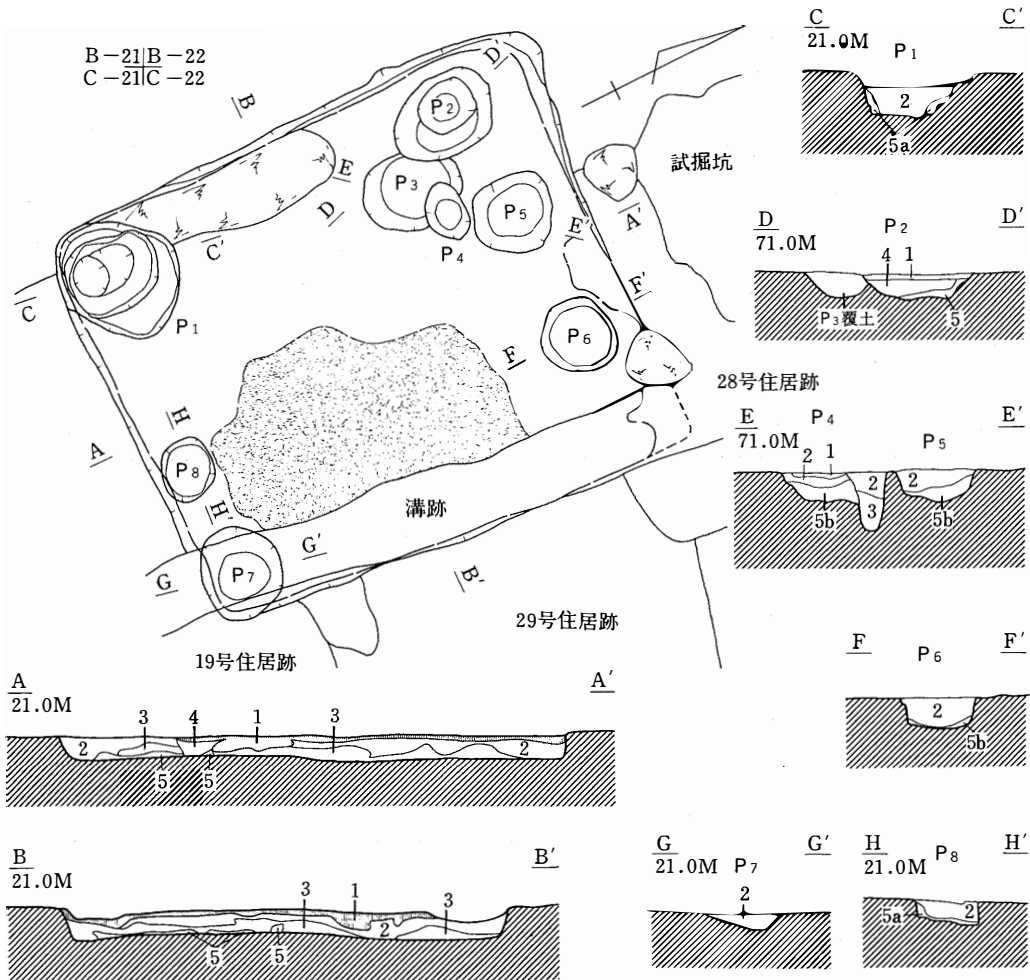
検出状況 II区のB~D-21~23グリッドにかけて検出された住居跡である。耕作による攪乱で壁がすべて削平されているが、貼り床と掘り方が検出されている。遺構確認面は地山上面である。本住居跡は19・28・29号住居跡を切り、この4軒の住居跡のなかでは最も新して住居跡である。本住居跡の西側の一部と東側は後世の溝状の攪乱により床面まで削平されている。

プラン・規模・方向 本住居跡の壁は検出されなかったが、貼り床及び掘り方から東西約3.3m、南北約4.1mの南北に長い隅丸長方形のプランを呈すると推定される。南・北壁の中点を通る軸線はN-3°-Eを向き、貼り床が施された部分の面積は約13.5m<sup>2</sup>である。

覆 土 覆土は耕作による攪乱のため削平されており検出されなかった。しかし住居跡中央から南東コーナーにかけての床面のややくぼんだ部分において、炭化物を多量に含む灰褐色土層が薄く堆積しているのが認められた。

壁・床面 耕作による攪乱が激しく、壁はちあがりさえも確認できなかった。床面の一部に

第1節 住居跡



貼り床  
 第1層：黄褐色土層 灰褐色土ブロックを混入する。  
 掘り方埋土  
 第2層：灰褐色土層 シルト質で粘性，しまりあり。炭化粒，砂粒，黄褐色土を含む。  
 第3層：暗灰褐色土層 粘性の強い微粒子状の暗褐色土で砂粒，炭化粒を含む。  
 第4層：暗灰褐色土層 粘性が強く，炭化粒を多く含む。  
 第5層：黄白色土層 砂質

ピット  
 第1層：黄灰色土層 微細粒状で黄色土と灰褐色土の混合層。炭化粒を若干含む。  
 第2層：暗灰褐色土層 微細粒状の粘質土で，黄色砂，炭化粒を含む。  
 第3層：青灰色土層 微細粒状の粘質土でしまりがある。炭化粒を若干含む。  
 第4層：黒黄褐色土層 粘性が強く，しまりあり。炭化粒，黄色砂質土，焼土粒を多く含む。  
 第5a層：白黄色土層 砂質。褐鉄鉱を含む。  
 第5b層：灰黄褐色土層 灰褐色土と黄白色砂の混合層で，炭化粒を含む。



第57図 第18号住居跡

は後世の溝状の攪乱が認められるが、床面はほぼ良好な状態で検出された。床面には全面的に、黄褐色土を非常にかたくたたきしめた貼り床が施されている。

ピット P<sub>1</sub>～P<sub>8</sub>の合計8個のピットが検出されたが、明確な柱痕をもつピットは1個も検出されなかった。しかし住居跡内の位置と大きさからP<sub>1</sub>・P<sub>5</sub>・P<sub>6</sub>・P<sub>7</sub>が本住居跡の柱穴の可能性もあるが、覆土が全く残存していないため攪乱ピットである可能性もあり、明確ではない。またP<sub>2</sub>とP<sub>3</sub>はピットの上面に貼り床が施されているが、掘り方、埋め土を掘り込んでいることから本住居跡に伴うピットと考えられるが、その性格は不明である。P<sub>8</sub>は覆土中よりロクロ土師器が検出されており、攪乱である可能性が高く、本住居跡に伴うピットではないと考えられる。

周溝 検出されなかった。

カマド 検出されなかった。

掘り方 本住居跡とほぼ同じ大きさで、東西3.2m、南北3.9m、床面からの深さ20cmを測る。北東コーナー部は不整形で、28号住居跡の床面を部分的にそのまま残している。埋め土は4層に分れるが、暗灰褐色土が基調で炭化粒をほぼ全面的に含んでいる。

遺物 覆土中より出土した遺物の量よりも、各ピット中より出土した遺物の量が多いが、いずれも細片であるため実測は不可能であった。破片数は第66表に示す。

第31表 第18号住居跡ピット形態表

No	形状	計測値 (単位 cm)			柱痕 (単位 cm)		備考
		上面径	下面径	深さ	径	深さ	
P <sub>1</sub>	不整円形	107×85	75×61	37			
P <sub>2</sub>	不整楕円形	87×64	46×38	20			
P <sub>3</sub>	不整楕円形	80×62	55×49	47			
P <sub>4</sub>	不整楕円形	46×32	24×19	22			
P <sub>5</sub>	不整円形	70×60	49×38	25			
P <sub>6</sub>	不整円形	63×63	50×45	24			
P <sub>7</sub>	不整円形	74×64	41×36	12			
P <sub>8</sub>	不整円形	52×40	42×34	18			攪乱ピット

## 第1節 住居跡

### 遺構に伴う遺物(第58図1, 第32表)

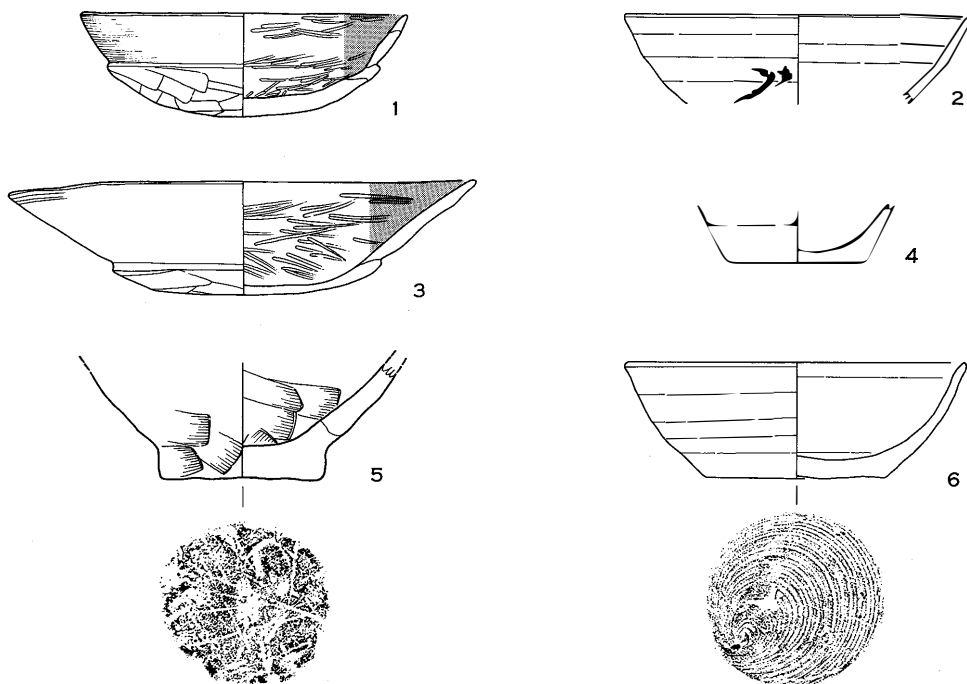
#### 土師器

杯(1) 1は床面から出土した全体の約30%を残す製作にロクロを使用していない杯の破片である。底部は丸底を呈し、外面中位にはりだした段をもち内面にも段をもつ。口縁部は外傾してたちあがりそのまま口縁端部に至る。胎土は密で外面の色調は赤茶褐色を呈し、内面には黒色処理が施されている。なお底部の70%を欠損しているが、底部外面に幅1mmの細い線刻が観察される。おそらく「×」形であろうと推測される。I-2b-C<sub>2</sub>-(ac-b)類に分類される。

### 覆土出土の遺物(第58図2~6, 第49図版2・3, 第32表)

#### 土師器

杯(2・3) 2は本住居跡に伴わないP<sub>8</sub>の第2層より出土したロクロ調整の杯で、口縁部の約20%を残す破片である。摩滅が激しいため再調整は観察できない。胎土は密であるが、砂粒を多く含み口縁部の約20%を残す破片である。摩滅が激しいため再調整は観察できない。胎土は密であるが、砂粒を多く含み色調は黄茶褐色を呈する。なお墨書が観察されるが、欠損しているため判別できない。2は掘り方から出土した全体の約80%を残す非ロクロの杯である。底部は丸底



第58図 第18号住居跡出土遺物(1/2)

を呈し外面下位に段をもつ。口縁部は強く外反し、そのまま端部に至るが、ゆがみがはげしい。内面には段の痕跡を残す部分と残していない部分があり、黒色処理が施されている。胎土は密で焼成は良好である。I-3c-D<sub>4</sub>-(ca-b)類に分類される。

小形甕(4) 第1層から出土した底部から体部下半にかけての破片である。底部には回転糸切り痕が認められるが、摩滅が激しいため再調整は観察されない。底部の大きさや体部の立ちあがりなどから、小形甕の底部であろうと推定される。色調は赤褐色を呈し、胎土には径1~2mm大の砂粒を多量に含む。

甕(5) 掘り方から出土した甕の底部で、盤状貼り付が施されており木葉痕が観察される。内外面ともヘラナデによる調整が観察され、内面には黒色処理が施されている。胎土は径5mm以上の小石を含むが焼成は良好である。Ic-※-※-(a-a)類に分類される。

須恵器

杯(6) 遺構確認面より出土した全体の約60%を残す比較的器厚のある杯で、底部には回転糸切り痕が観察される。体部は内弯してたちあがり、口縁端部は外反している。体部には再調整は施されていない5b類である。色調は内外面とも淡灰色を呈しているが、外面口縁部は幅1.5cm程の帯状に黄色がかった黒灰色を呈している。

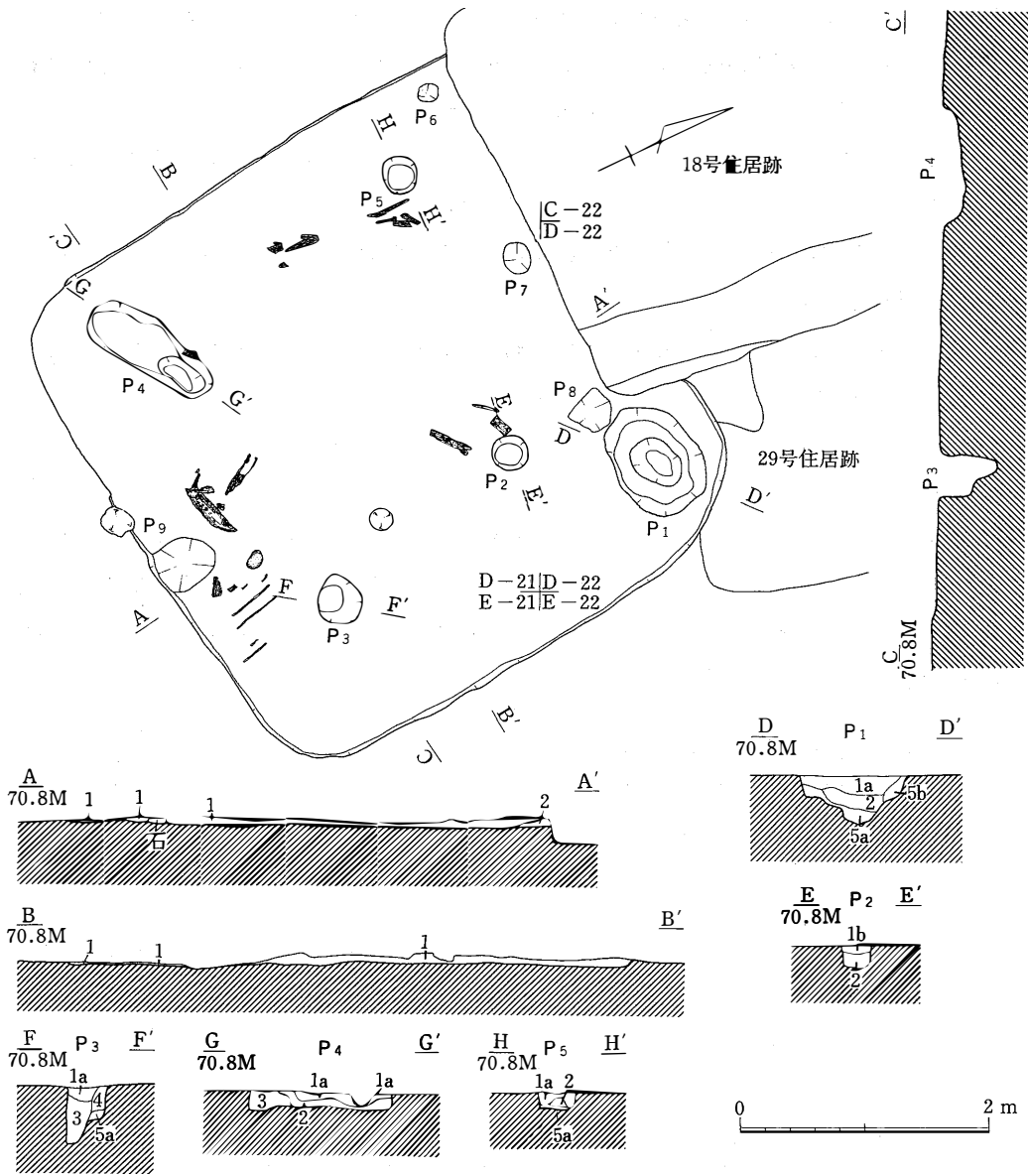
第32表 第18号住居跡出土土器一覧表

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
58	1		土師器	杯		床面	13.0				4.1			内黒
58	2		土師器	杯	P <sub>8</sub>	ℓ-1	13.7							墨書あり
58	3	49-2	土師器	杯		ℓ-1	18.4				4.5			内黒
58	4		土師器	小形甕		ℓ-1				5.6				
58	5		土師器	甕		ℓ-1				6.3				木葉痕
58	6	49-3	須恵器	杯		ℓ-1	13.6			7.2	4.6			

第19号住居跡(第59図, 第19図版, 第33表)

検出状況 本住居跡は、II区のC~D-20~22グリッドにかけて検出された。遺構確認面は地山上面である。本住居跡は北東コーナーが29号住居跡を切り、北壁が18号住居跡に切られている。なお18号住居跡は28・29号住居跡を切っている。また本住居跡の南側約50cmに15号住居跡が近接している。耕作により上面が削平されているため、全般的に覆土が非常に浅く、覆土

第1節 住居跡



第1層：灰褐色土層 若干粘性があり，褐鉄鉱，炭化粒を多量に含む。  
 第2層：焼土層 固く，灰褐色土を若干含む。

ピット

第1a層：灰褐色土層 粘性，しまりあり。褐鉄鉱，炭化粒，黄色砂を多く含む。  
 第1b層：青灰褐色土層 粘性，しまりあり。黄色砂，灰白色砂，炭化粒を含む。  
 第2層：灰黄褐色土層 やや軟質で，若干の木炭粒，黄色砂を含む。  
 第3層：暗灰褐色土層 粘性，しまりはあるが，砂質土を多く含む。少量の炭化粒を含む。  
 第4層：暗褐色土層 粘性，しまりあり。少量の黄色土，炭化粒を含む。  
 第5a層：暗黄褐色土層 黄褐色土と暗褐色土の混合層。  
 第5b層：暗黄褐色土層 黄褐色土と暗褐色土の混合層。炭化粒を多く含む。

第59図 第19号住居跡

が全く無い箇所もあった。

**プラン・規模・方向** 北壁は不明であるが、東西約4.55m、南北約4.5mの隅丸正方形のプランを呈し、南・北壁の中点を通る軸線はN-8°-Wを向くと推定される。本住居跡の面積は約20.5m<sup>2</sup>であろうと考えられる。なおカマドは検出されなかったが、北壁の一部に焼土が観察されることから、北壁に構築されていた可能性が考えられる。

**覆土** 耕作による削平のため覆土は非常に浅く、最も厚く残っている箇所でも10cm前後で、大部分は4~5cm程の深さである。覆土は黄色土の小ブロックと褐鉄鉱粒と多量の木炭を含む灰褐色土の単一層である。北壁沿いには焼土を多量に含む第2層が検出されているが、これはカマドの痕跡であると推定される。

**壁・床面** 壁の残存状態は非常に悪く、検出面からの壁高は約1~5cm程で、たちあがりが出されたのみである。床面は地山をそのままたたきしめて使用している。中央部周辺はかたくたたきしめられているが、壁沿いはやわらかく、あまりたたきしめられていない。

**ピット** P<sub>1</sub>~P<sub>9</sub>のピットが検出された。明確な柱痕をもつピットはP<sub>3</sub>のみであるが、P<sub>2</sub>・P<sub>4</sub>もその位置より柱穴である可能性が高く、P<sub>2</sub>~P<sub>5</sub>が本住居跡の柱穴であろうと推定される。柱間距離はP<sub>2</sub>~P<sub>3</sub>が1.9m、P<sub>3</sub>~P<sub>4</sub>が2.1m、P<sub>4</sub>~P<sub>5</sub>が2.4m、P<sub>5</sub>~P<sub>2</sub>が2.4mである。また全ての柱穴の覆土から炭化粒が検出されている。P<sub>1</sub>はカマドがあったと推定される壁際であり、下層には多量の炭化粒を含む層が検出されていることから貯蔵穴と推定されるが、土器片の出土量は少なかった。P<sub>6</sub>~P<sub>9</sub>については焼土、柱痕、遺物等が検出されず、性格は不明である。

第33表 第19号住居跡ピット形態表

No	形状	計測値 (単位cm)			柱痕 (単位cm)		備考
		上面径	下面径	深さ	径	深さ	
P <sub>1</sub>	不整楕円形	94 × 67	45 × 31	39			
P <sub>2</sub>	円形	29 × 28	22 × 16	18			
P <sub>3</sub>	不整円形	42 × 35	31 × 20	44	24 × 8	44	
P <sub>4</sub>	不整形	113 × 45	105 × 36	15			
P <sub>5</sub>	不整円形	30 × 27	21 × 21	14			
P <sub>6</sub>	円形	18 × 15	14 × 13	22			
P <sub>7</sub>	円形	25 × 22	12 × 11	13			
P <sub>8</sub>	不整円形	38 × 36	30 × 25	5			
P <sub>9</sub>	楕円形	50 × 39	38 × 22	14			



## 第1節 住居跡

周溝 検出されなかった。

カマド 検出されなかったが、18号住居跡によって切られている北壁中央部付近よりまとまった量の焼土が検出されることから、北壁にカマドが構築されていた可能性が強い。

掘り方 検出されなかった。

遺物 床面、もしくは床面直上層より多くの炭化材と川原石が検出されたが、火災住居と考えられるほど多量ではない。破片数は第66表に示す。

### 遺構に伴う遺物(第60図1・2,第34表)

#### 土師器

甕(1・2) 1と2は、P<sub>3</sub>の北側の床面から出土した非ロクロの甕である。1は底部を欠損しているが、全体の約70%を残している。2は底部から体部下半にかけての破片である。1は口縁部が外反してたちあがり、端部は丸くおさまっている。胴部と口縁部との境には、かすかな段をもつが段をもたない箇所もある。体部はやや太目の長胴形になると考えられる。最大径は口縁部にあり、※-7a-B<sub>2</sub>-(ad-a)類に分類される。色調は赤味がかかった黄茶褐色、ないしは黒茶褐色を呈し、胎土には径2~5mm大の長石、または石英の小礫を含む。2は底部に盤状の貼り付けをもち木葉痕が観察されるが、摩滅が激しい。体部はたちあがりから長楕円形を呈すると考えられる。体部外面は縦方向のハケメが施されているが、内面は摩滅のため不明である。Ⅲc-※-※-(d-※)類に分類される。色調は暗い灰茶褐色を呈し、胎土には径2~3mm大の粒子を含む。

### 覆土出土の遺物(第60図3~6,第49図版6,第34表)

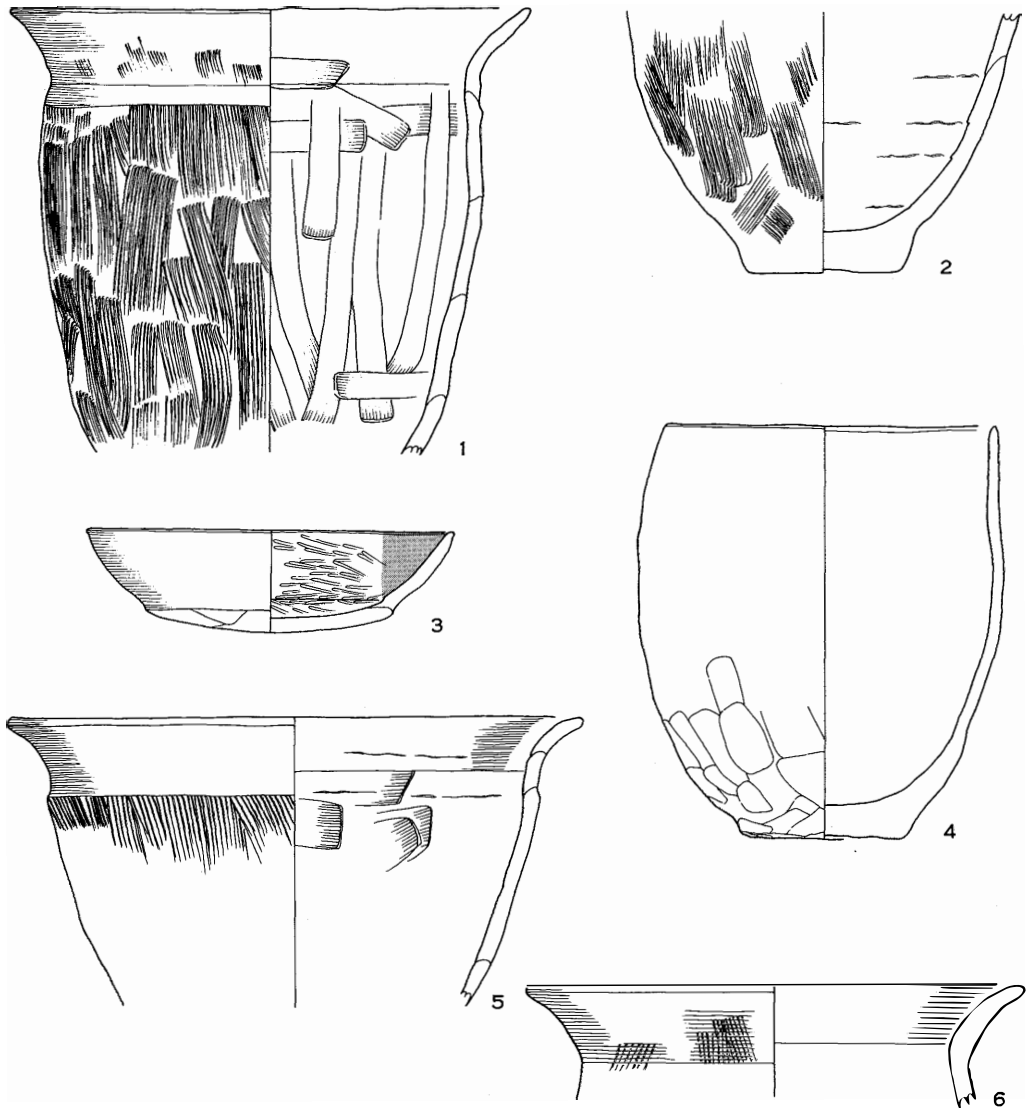
#### 土師器

杯(3) 3はP<sub>3</sub>の西側から、床面より少し浮いた状態で出土した全体の約70%を残す非ロクロの杯である。底部は丸底を呈し、外面下位に段をもち内面にも段を有する。口縁部は外傾してたちあがり口縁端部に至るが、口縁端部はわずかに外反している。調整は外面の底部にはヘラケズリ、口縁部にはヨコナデが施され、内面には黒色処理が観察される。I-3c-C<sub>2</sub>-(ca-b)類に分類される。

小形甕(4) 床面直上層より出土した口縁部の一部を欠くほぼ完形の小形甕である。底部には薄く粘土が貼りつけてあり、はみだした部分は体部に押しつけられている。体部は内弯気味にたちあがった後、段をもたずに、そのまま直立して口縁端部に至る器形を呈する。摩滅が激しいため調整は外面体部下半の縦方向のケズリが観察されたのみである。最大径を体部上位にもつI-1b-E<sub>1</sub>-(c-※)類に分類される。色調は内外面ともに赤茶褐色を呈し、胎土には径1mm大の砂粒が多くふくまれる。

鉢(5) 第1層より出土した口縁部から体部にかけての約30%を残す破片であるが、立ちあがりと器形より鉢であろうと推定される。底部は欠損しているため不明であるが、体部は外傾してたちあがり、体部と口縁部との境に段をもつ。口縁部は直立気味にたちあがった後外反し、端部は丸くおさまっている。調整は外面はハケメの後口縁部にナデが施され、内面にはヘラナデが観察される。色調は黄茶褐色を呈し、胎土は密である。※-2-D<sub>2</sub>-(da-a)類に分類される。

甕(6) 床面直上層より出土した口縁部の約30%を残す破片である。口縁部は外反してたちあがり、端部は丸くおさまっている。体部との境には段をもたない。外面にはハケメの後ヨコナデ、



第60図 第19号住居跡出土遺物 (1/3)

第1節 住居跡

内面にはヨコナデの調整が施されている。体部から底部にかけては欠損しているため不明であるが、※-2※-D<sub>2</sub>-(da-a)類に分類される。

第34表 第19号住居跡出土土器一覧表

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)						備考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
60	1		土師器	甕		床面	20.6	17.1	17.7					
60	2		土師器	甕		床面				5.6				
60	3		土師器	杯		床直	14.4				4.1			内黒
60	4	49-6	土師器	小形甕		床直	13.1		14.5	5.9	16.4			
60	5		土師器	鉢		ℓ-1	22.3	19.5						
60	6		土師器	甕		床直	19.6	15.3						

第21号住居跡(第61・62図, 第20図版, 第35表)

**検出状況** II区のG・H-23・24グリッドより検出された住居跡である。本住居跡の北側約1/3は耕地整理のため削平されている。本住居跡は南東コーナーを17号住居跡に切られており、この17号住居跡は4号不明遺構を切っている。また、本住居跡の西側約3mには8号溝跡が検出されている。遺構確認面は地山上面である。

**プラン・規模・方向** 本住居跡は北側約1/3が削平され、南西コーナーも17号住居跡に切られているため全形は不明であるが、残存する南東・東西コーナーよりプランは東西が約3mの隅丸方形を呈すると推定される。南・北壁の midpoint を結ぶ軸線は遺存する西壁の傾き N-0.5°-W とほぼ同じと推定される。カマドは東壁の南西コーナー寄りに構築されており、床面には4個のピットが検出された。また本住居跡の床下からはひと回り小さい掘り方が検出されている。

**覆土** 覆土は6層から成る。灰褐色土と暗褐色土を基調とし、第1～3層には黄色土、第2～6層には木炭粒が含まれる。第4層は焼土・灰・木炭粒を多量に含むことからカマド内堆積土が流出したものと推定される。第7層目が貼り床である。覆土はほぼレンズ状堆積を呈していることから堆積状態は自然堆積と推定される。

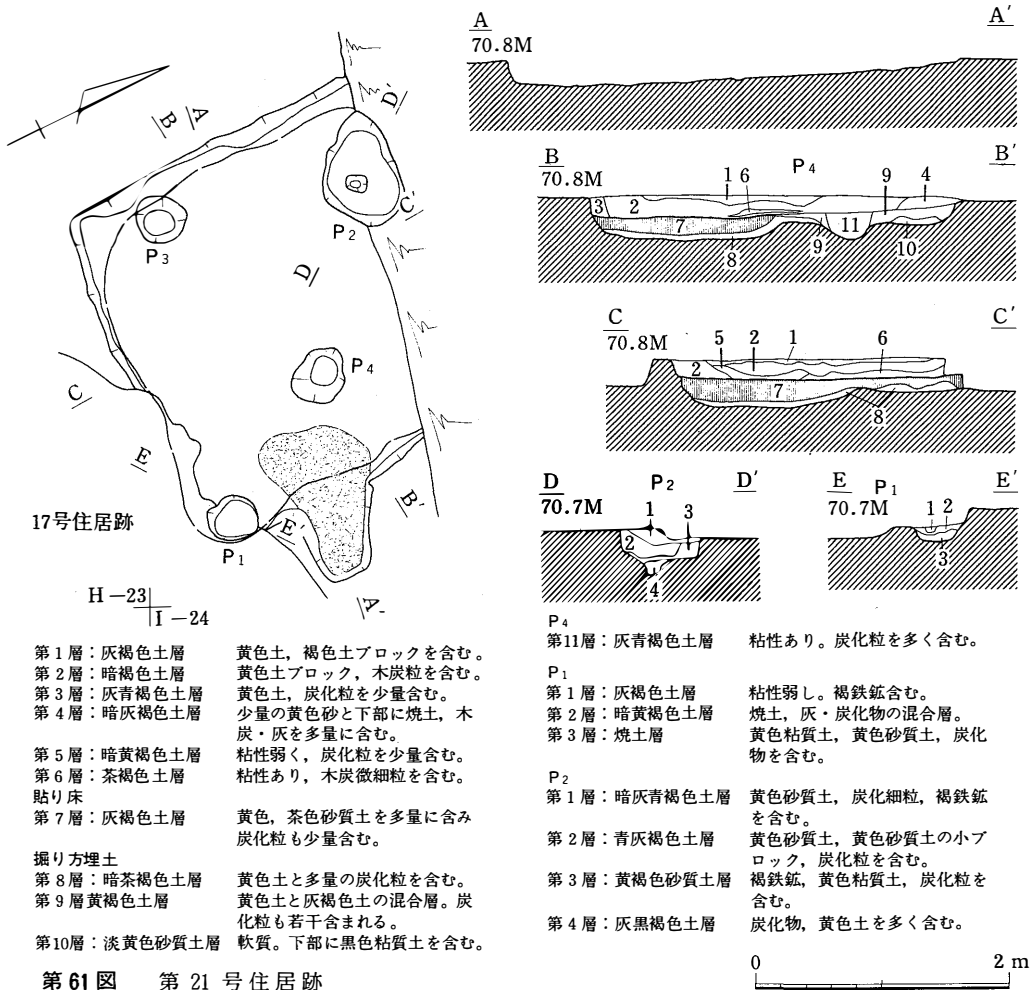
**壁・床面** 壁は東壁、西壁、南壁が残存するが部分的に検出されたのみで、壁の残存状態は良好とは言えない。残存する壁の壁高は検出面から約5cmである。西壁と南壁の床面からの法面角度は約105°で丸味をもってたちあがるが、東壁のみは非常にゆるやかな傾斜をもってたちあがる。床面はほぼ平坦であるが壁の縁辺部は中央部よりやや高くなっている。またカマドの前面では木

炭や焼土が検出されるが、これはカマド内から流出したものと推定される。また、床面には南西コーナーを除いて貼り床が施されている。貼り床は灰褐色土でよくしまっているが、あまり硬いものではない。

ピット P<sub>1</sub>～P<sub>4</sub>まで合計4個のピットが検出された。このうちP<sub>1</sub>は上面が17号住居跡に削平されているが、覆土中に木炭、焼土が多量に認められ、カマドに隣接することから本住居跡の貯蔵穴と推定される。P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>については明確な柱痕が認められていないので、柱穴とは断言できないが位置や深さから本住居跡の柱穴である可能性が考えられる。

周溝 検出されなかった。

カマド 東壁の南東コーナー寄りに構築されており上面は耕作により削平されている。焚き口部から東側の先端部にかけて、非常にゆるやかな傾斜でたちあがっている。カマドの底面には火を受けた痕跡が認められるが、かたく焼けている部分は検出されなかった。本住居跡のカマド



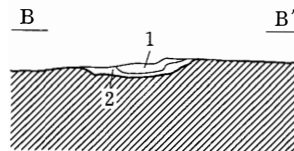
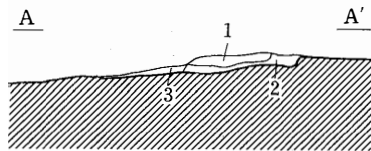
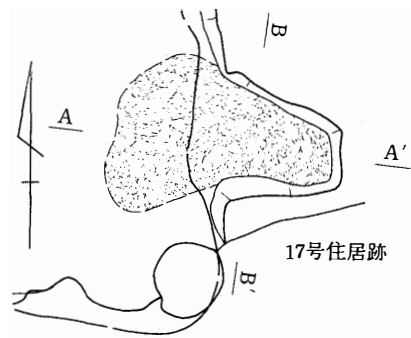
第61図 第21号住居跡

第1節 住居跡

は焚き口部幅約55cm, 燃焼部幅約35cm, 奥行約65cmを測る。焼土, 木炭, 灰を多く含む第1a, 1b層がカマド内主要堆積土と推定される。なお本住居跡のカマドでは両袖部が検出されず, 基底部の痕跡も確認されていないことからいわゆる“袖部”は構築されなかったと推定される。煙道も検出されなかったが, 上面が削平されていることから破壊された可能性が考えられる。

掘り方 掘り方も北側約1/3は削平されているため不明であるが, 南東コーナーでは17号住居跡の下に確認された。東西の長さは約2.6mを測り, 床面からの深さは約10~20cmである。底面は比較的平坦だが, 南西コーナー付近がピット状に落ち込んでいる。貼り床である第7層が厚く堆積しているが, その下層には地山に近い土質の第9・10層が薄く堆積している。またカマド付近に検出された第8層は多量の木炭粒を含んでいる。

遺物 カマド内より土師器が4片出土しているが, いずれも細片であるため図示できなかった。またP<sub>2</sub>の北側の床面から非ロクロの土師器が検出された。ゆがみが大きい口縁部から体部にかけて小破片であったが図示できなかった。器種は小形甕であろうと推定される。この小形甕の器形は口縁部が強く外反しており, 体部との境にかすかな段の痕跡が観察される。体部外面には縦方向のハケメ, 内面には横方向のナデが施されている。破片数は第66表に示す。



- 第1層：焼土層 焼土と灰の混合層。炭化物も、含む。
- 第2層：焼土層 焼土と多量の木炭の混合層。淡黄色砂質土を含む。
- 第3層：木炭層 焼土と黄色土を含む。



第62図 第21号住居跡カマド

第35表 第21号住居跡ピット形態表

No	形状	計測値 (単位 cm)			柱痕 (単位 cm)		備考
		上面径	下面径	深さ	径	深さ	
P <sub>1</sub>	不整円形	42 × 35	35 × 28	8			貯蔵穴
P <sub>2</sub>	不整楕円形	92 × 63	71 × 50	18			
P <sub>3</sub>	不整円形	39 × 39	24 × 18	36			
P <sub>4</sub>	不整円形	50 × 38	24 × 19	23			

遺構に伴う遺物(第63図1・2, 第49図版7, 第36表)

土師器

杯(1) P<sub>1</sub>より出土した全体の約30%を残すロクロ調整の杯である。底部に回転糸切りによる切り離し痕が観察される。また体部下端から中位にかけては手持ちヘラケズリによる再調整が施されており4b類に分類される。なお底部は肥厚し体部は内弯してたちあがるが、口縁端部は若干外傾している。内面には黒色処理が施され、外面は暗い黄茶褐色を呈する。胎土は密である。

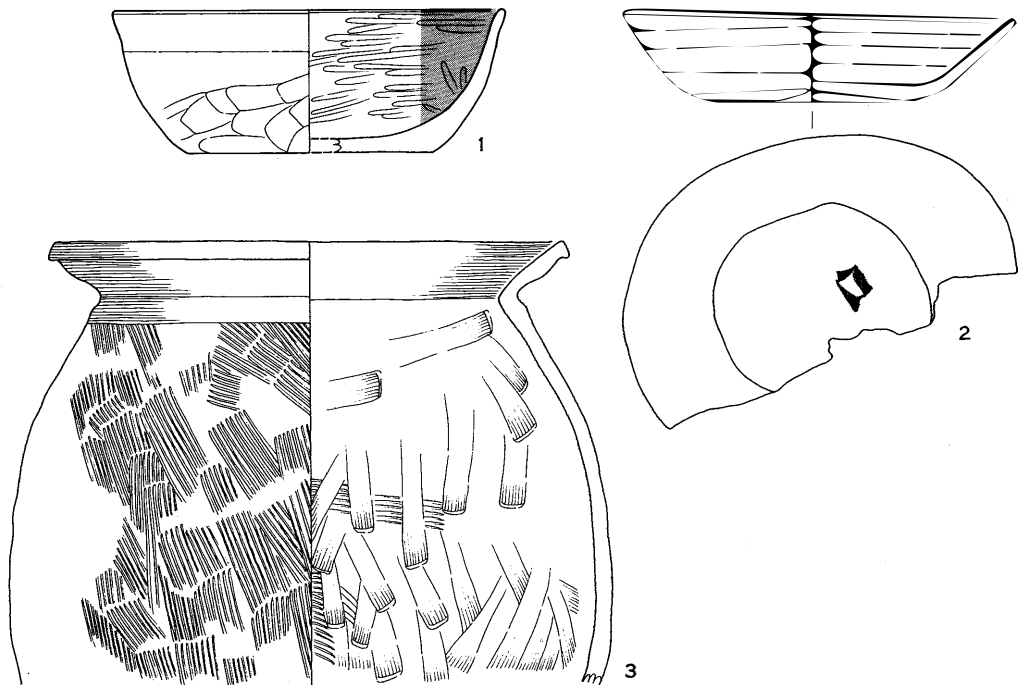
須恵器

杯(2) 床面より出土した全体の約70%を残す須恵器の杯で、17号住居跡P<sub>9</sub>。出土の破片と接合する。器形はゆがみが激しく底部、口縁部ともに隋円形を呈している。底部には静止糸切り痕が観察され、体部下端には手持ちヘラケズリによる再調整が施されている。よって4c類に分類される。胎土は密で色調は黄灰褐色を呈する。底部外面に墨書が観察されるが判読できない。

覆土出土の遺物(第63図3, 第36表)

土師器

甕(3) 床面直上層より出土した口縁部の約20%を残す甕の破片で、口縁部にのみロクロ調整



第63図 第21号住居跡出土遺物(1/3)

## 第1節 住居跡

が施されている。口縁部は「く」の字状に外反してたちあがり、口縁部外面は丸味をもって肥厚している。口縁端部は下方につまみだされている。口縁部と体部との境いに段をもたないが、頸部の下方がわずかに肥厚している。体部は球形を呈すると推定され、最大径は体部中位にある。体部外面には縦方向のハケメ、内面には横方向のヘラナデが施されている。胎土には径3～5mm大の小礫が含まれ、色調は明茶褐色を呈する。(穴戸美智子)

第36表 第21号住居跡出土土器一覧表

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
63	1		土師器	杯	P <sub>1</sub>		15.4			5.7	9.8			内 黒
63	2	49-7	須恵器	杯		床 面	15.3			8.1	3.5			墨 書
63	3		土師器	甕		床 直	20.1	16.5	24.0					

## 第22号住居跡(第64図, 第21図版, 第37表)

**検出状況** II区のほぼ中央西側C・D-13～15グリッドに位置し、2号住居跡と1・5・6号建物跡に切られている。北東コーナーは攪乱ピットにより壊されている。また南東コーナー部分には本住居跡の覆土の下に9号住居跡の覆土が見られるため、9号住居跡を切っていると考えられる。しかし、本住居跡の壁が検出できなかったため、明確な範囲はつめなかった。遺構検出面は地山上面である。

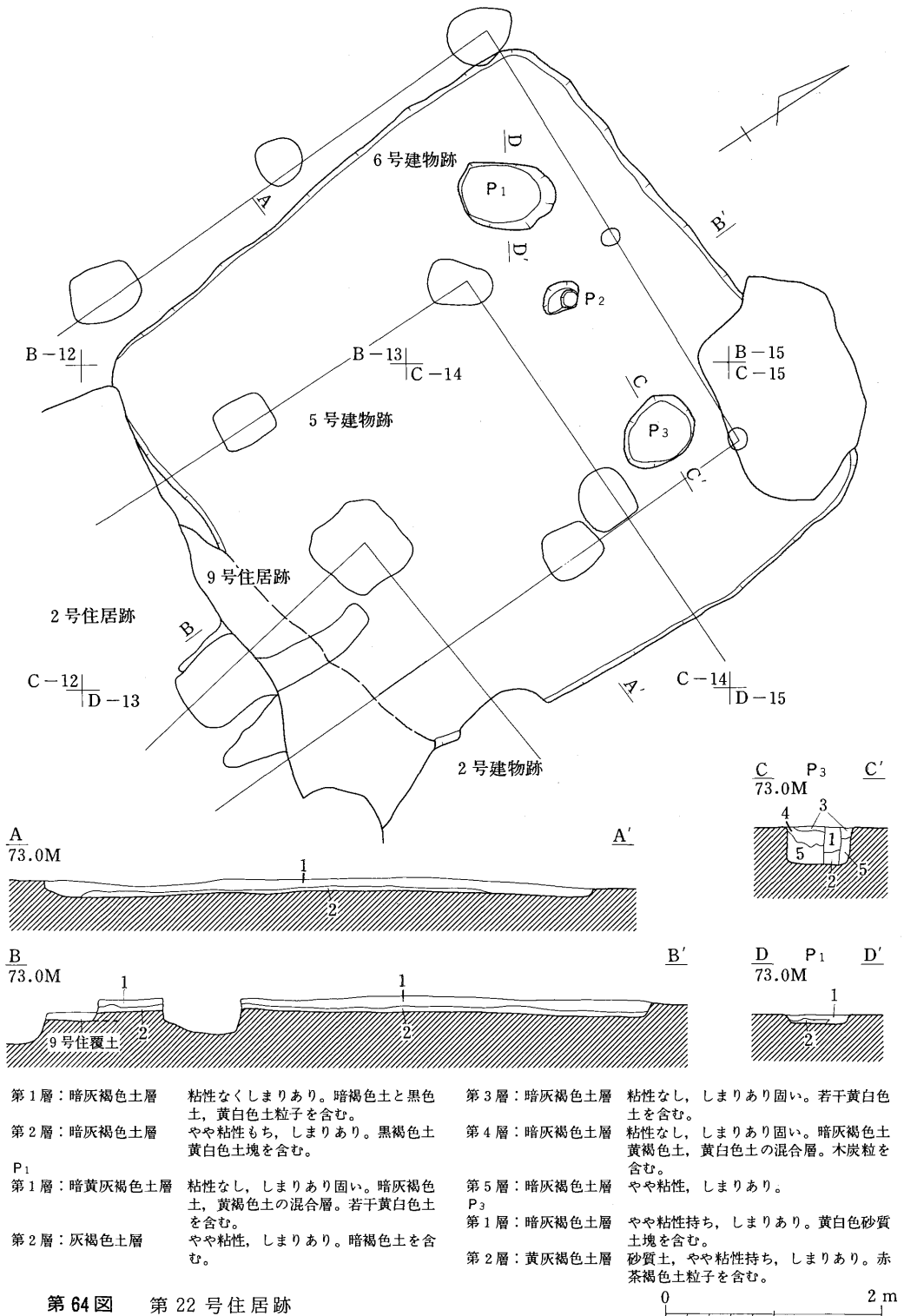
**プラン・規模・方向** 東西5.26m、南北5.16mを測る隅丸方形を呈する住居跡で、カマドは不明である。また、床面からは4個のピットが検出された。南壁と北壁を結ぶ軸線方向はN-6.5°-Wである。

**覆 土** 水平に暗灰褐色が2層堆積しており、上部が削平を受けているため厚さは10～14cm程で、自然堆積と考えられる。全体的にしまりを持ち、暗褐色土と黄白色土及び黒色土を含む土層である。南側には本住居跡覆土の下と考えられる部分に9号住居跡覆土が見られる。

**壁・床面** 遺存状態は良好ではなく、東壁はわずかに約5cm位しか残さず、南東コーナー部分は壁が検出できなかった。壁高は西壁が約9cm、北壁が約1.2cmを測る。また、北東コーナーは楕円形の攪乱のピットにより壁が壊されている。壁の立ち上がり角度は約120°である。

床面は地山を利用しており、貼り床は見られず、ほぼ平坦である。部分的に1・5・6号建物跡柱穴により破壊されている。床面から3個のピットが検出された。

**ピ ッ ト** P<sub>3</sub>は径90×50cm、深さ34cmの掘り方を持ち柱痕が検出された。掘り方埋め土



第64図 第22号住居跡



## 第1節 住居跡

は暗灰褐色土から成りしまりがあって固く、第4層には木炭粒を含んでいる。その他のP<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>には柱痕が見られず柱穴とは考えられない。また貯蔵穴になるピットも検出されなかった。

周溝 検出されなかった。

カマド 検出されなかった。

掘り方 検出されなかった。

遺物 遺物は土師器のみで、南東コーナー付近に甕2点の壺1点がまとまって出土している。

また、ミニチュア土器も1点出土している。

第37表 第22号住居跡ピット形態表

No	形状	計測値 (単位 cm)			柱痕 (単位 cm)		備考
		上面径	下面径	深さ	径	深さ	
P <sub>1</sub>	不整楕円形	75 × 56	62 × 50	7			
P <sub>2</sub>	不整円形	38 × 25	14 × 14	16			
P <sub>3</sub>	不整円形	90 × 50	72 × 52	34	15 × 14	34	

## 覆土出土の遺物 (第65図1～5, 第49図版8～10, 第38表)

### 土師器

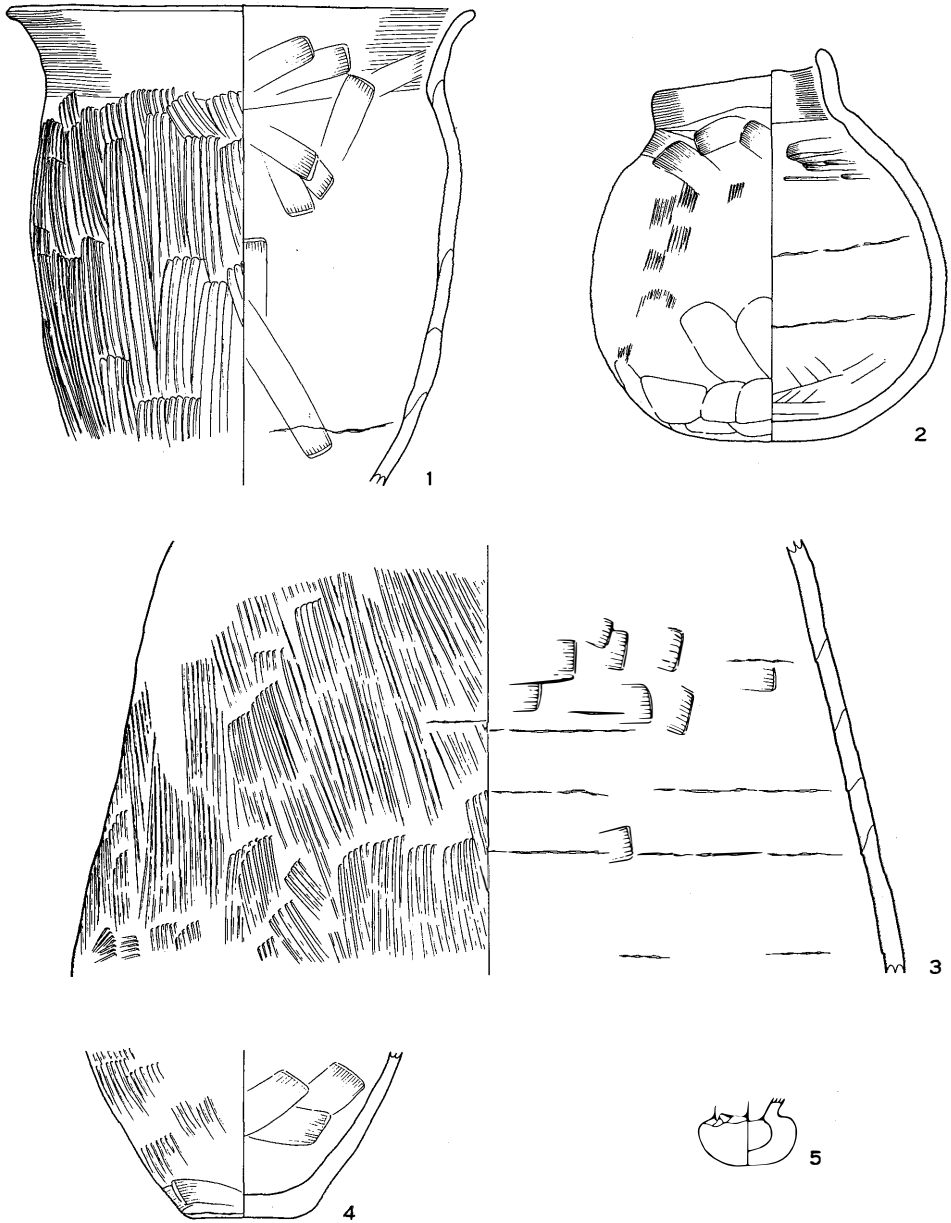
甕(1・3) 2点共南東コーナーの床面直上層より出土した非ロクロの甕である。

1は全体の約80%を残し、体部は内穹気味に立ち上がり、頸部は無段で口縁が外反する器形を呈す。胎土に小石を含み、器面は摩滅が著しいが、外面はハケメ、内面はナデの再調整が施されており、分類は※-5a-C<sub>1</sub>-(d-a)類である。

3は体部上半部で内傾して伸びる器形を残し、残存胴部最大径は約33cmを測る。外面はハケメ、内面ナデの調整が見られる。

小形甕(4) 1・3同様、南東コーナーの床面直上層より出土し、底径から小形甕になると考える。残存部分は体部下端から外傾して伸びる。器面は荒れているが、わずかに底部及び体部下端の外面がナデ、体部下半がハケメ、内面はナデが見られ、分類はIa-※-※-(da-a)類である。

壺(2) 1・3といっしょに南東コーナー付近床面直上層より出土しているほぼ完形の非ロクロの壺である。底部は平底風丸底で、ほぼ球状の体部を有す。口縁部は歪みのためやや内穹気味に直立しており、また、摩滅が激しく欠損していると思われる部分もあり、波状を呈している。胎土には小石を含み器面は荒れているが、外面底部から体部下半がケズリ、中位がハケメ、上位か



第65図 第22号住居跡出土遺物(1/3)

ら口縁部にナデが見られ、内面はナデが施されている。また、全体1/3は火を受けたと考えられ、黒色を呈している。

ミニチュア土器(5) 北西コーナー付近の第1層より出土した手捏ねの土器で壺形を呈す。平底風丸底の底部から内弯して立ち上がり、肩部は指で押さえて作られており、やや張った形を持つ。胎土には小石を含み、全体の約半分は黒色を呈し、熱を受けたものとも考えられる。器面も脆く

第1節 住居跡

なっている。

第38表 第22号住居跡出土土器一覧表

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)						備考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
65	1	49-8	土師器	甕		床直	18.5		16.9					
65	2	49-9	土師器	壺		床直	6.8		14.1	2.4	14.7			
65	3		土師器	甕		床直								
65	4		土師器	小形甕		床直				4.3				
65	5	49-10	土師器	ミニチュア土器		ℓ-1			3.8		2.7			

第24号住居跡(第66図, 第22図版)

**検出状況** II区の西側, A・B-9・10グリッドより検出された。本住居跡10号住居跡に切られており, 30号住居跡よりは新しい。また, 南方5mに1号住居跡, 北東に5mの所に2・7・9・22号住居跡が重複している。西半分は調査区外のために未調査である。遺構検出面は地山上面である。

**プラン・規模・方向** 西側が調査区外となっているため, 東西は不明であるが2.25m以上, 南北約3.2m以上を測る隅丸方形を呈すると思われる。床面よりP<sub>1</sub>が検出されたほか, カマド等も検出されなかった。

**覆土** 3層から成るレンズ状の堆積を示しており, 自然堆積と考えられる。全体的に粒子が細く, しまりのある固い層で, 焼土・炭化物を含んでいる。また, 第3層目には褐鉄鉱が混入される。第6層はP<sub>1</sub>の埋め土である。

**壁・床面** 壁の状態はほぼ良好で壁高約15cmを測り, 立ち上がり角度は約110°で外側にひろがり気味である。床面には貼り床は認められず, 地山を比較的固く叩きしめて床面として使用しており, 壁付近は中央部に比べ柔らかくなる。面全体はほぼ平坦であるが, 北に向かって若干傾斜している。

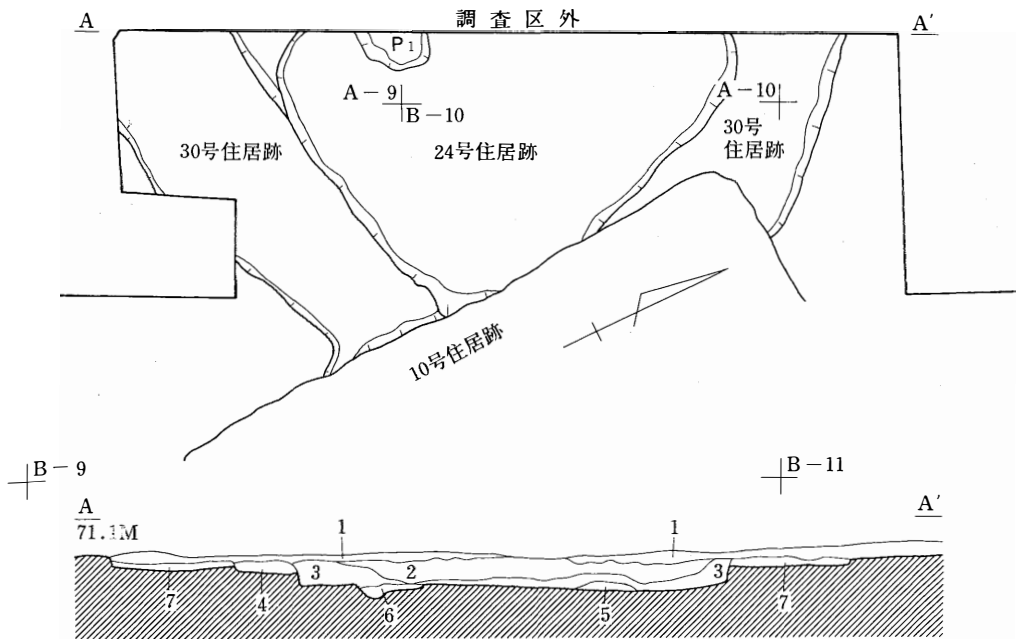
**ピット** 第6層の埋め土を持つP<sub>1</sub>以外検出されなかった。その性格は不明である。

**周溝** 検出されなかった。

**カマド** 検出されなかった。

**遺物** 土師器・須恵器の細片が約60片が第1層より出土しているのみである。

(氏家 浩子)



24号住居跡

第1層：耕作土

第2層：暗黄茶褐色土層

第3層：暗青灰色土層

第4層：暗黄褐色土層

第5層：暗黄褐色土層

第6層：暗黄褐色土層

粒子細い。粘性強くしまりあり固い。若干の焼土、炭化物と霜降状にロームを含む。

粘質土。粒子細い。粘性強く、しまりあり固い。多量の焼土・炭化物を混入。褐鉄鉱を含み、やや茶色味を帯びる。

粒子細く、粘性強く、しまりあり固い。多量のローム粒と焼土・炭化物・褐鉄鉱粒子を含む。

粒子細く、粘性強く、しまりあり固い。多量のロームを含む。

粒子細く、粘性強く、しまりあり固い。焼土・炭化物・褐鉄鉱粒子を含む。

30号住居跡

第7層：暗黄白灰色土層

粘質土、粒子細く、しまりあり固い。粘性強く、焼土・炭化物・褐鉄鉱粒子を含む。

第66図 第24・30号住居跡



第25号住居跡(第67図, 第22・23図版, 第39表)

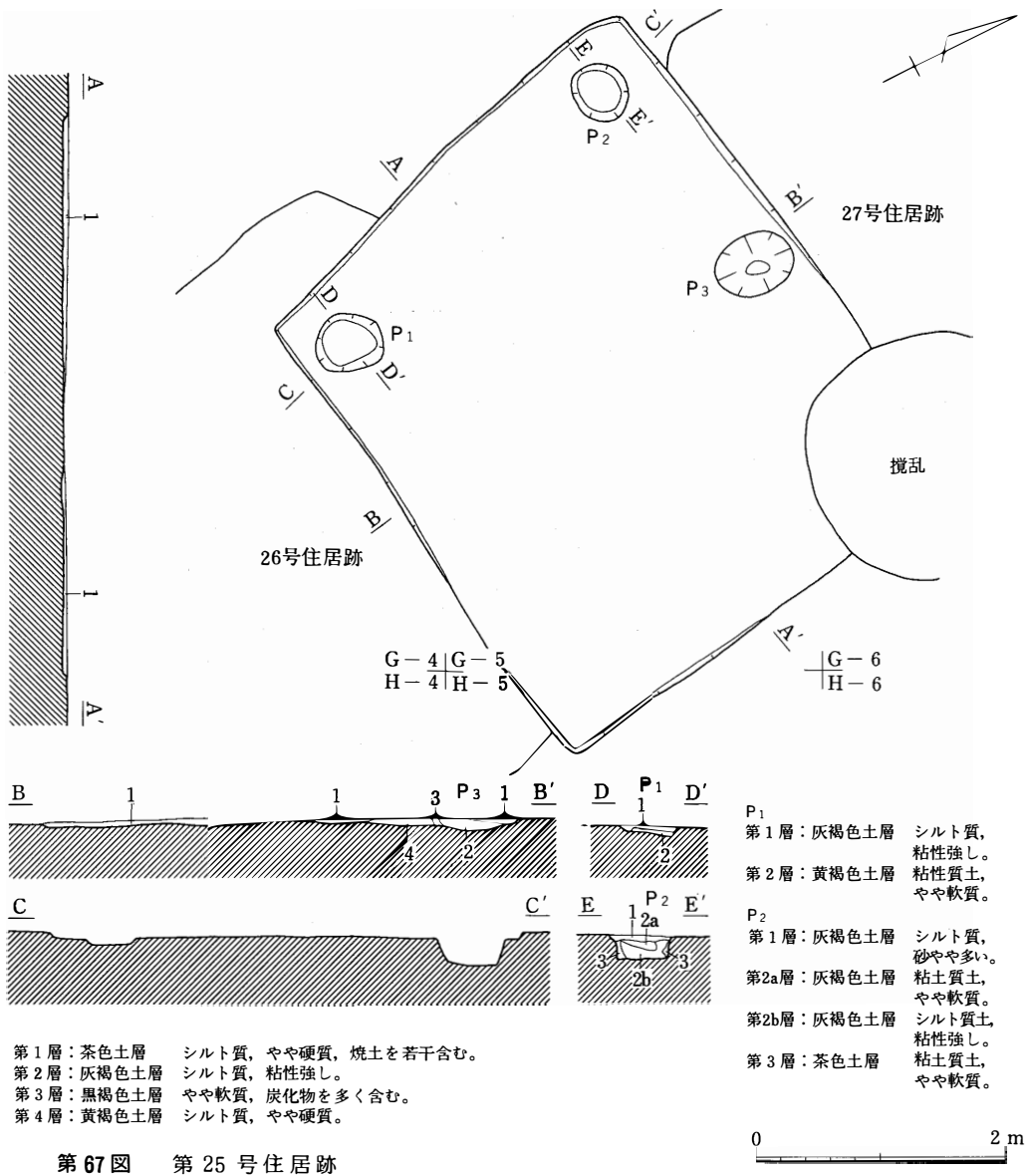
検出状況 II区の南端F～H-4～6グリッドより検出されている。確認面は地山上面で26・27号住居跡を切っている。上面はかなり削平を受け、ほとんど床面を残すのみであった。

プラン・規模・方向 やや歪んだ方形プランを有し、東西・南北の壁の midpoint間 で東西 4.5 m、南北 3.85 mを測る。壁の midpoint間の線 で南北軸は N-6°-Wとなっている。

覆土 東半部の一番厚い部分で5 cm、一番浅い中央部では検出面がほぼ床面となっている。第1～4層とも粘性のあるシルト質土でP<sub>3</sub>の覆土2層が第3層を切り、その上を第1層が埋めるように堆積している。覆土の上面が硬くなっており、第1～4層全体が貼り床層の可能性が有る。

壁・床面 東壁と北壁の一部で3～4 cmを残す他は、ほとんどが痕跡的に残るのみである。

第1節 住居跡



第67図 第25号住居跡

床面は軽くうねるような浅い凹凸があり，砂味かかったシルト質土を掘り込んだものでやや軟弱である。

ピット 南西コーナー部にP<sub>1</sub>，北西コーナー部にP<sub>2</sub>，北壁中央近くにP<sub>3</sub>がある。P<sub>1</sub>・P<sub>2</sub>とも床面から掘り込まれており，P<sub>1</sub>は浅く，底面に粘土質土の貼り付いたもの，P<sub>2</sub>は円筒形のピットでP<sub>1</sub>よりは深いものである。P<sub>3</sub>は皿状のピットで3層に掘り込まれその上を第1層が覆っている。

周溝 検出されなかった。

カマド 検出されなかった。

掘り方 検出されなかった。

遺物 遺構・覆土ともに遺物は検出されなかった。

第39表 第25号住居跡ピット形態表

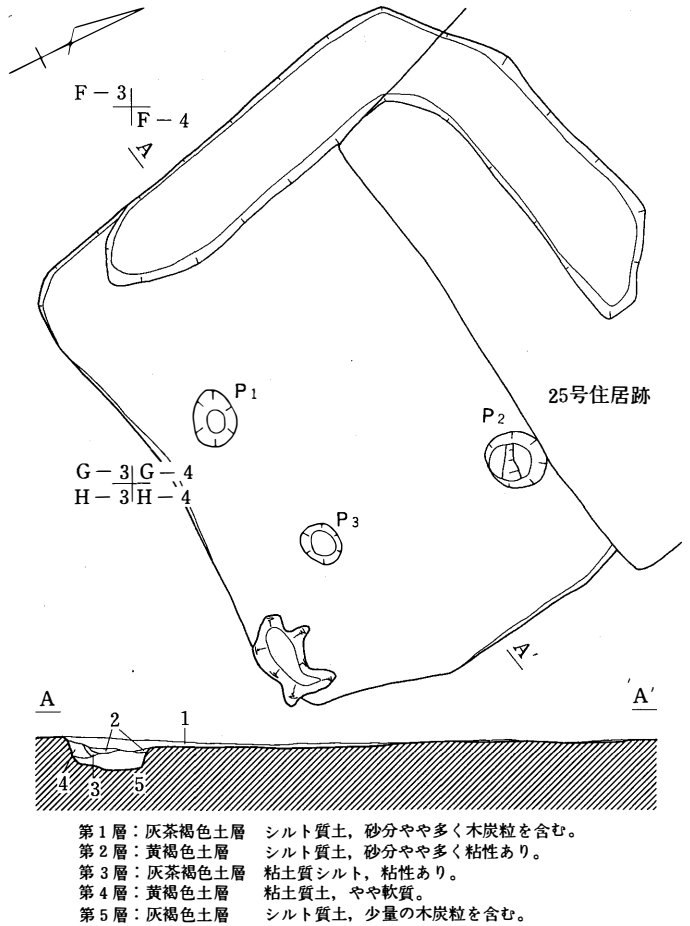
No	形状	計測値 (単位 cm)			柱痕 (単位 cm)		備考
		上面径	下面径	深さ	径	深さ	
P <sub>1</sub>	不整楕円形	55 × 48	40 × 35	7			
P <sub>2</sub>	楕円形	49 × 44	37 × 30	18			
P <sub>3</sub>	楕円形	65 × 49	20 × 11	8			

第26号住居跡(第68図, 第22～24図版, 第40表)

検出状況 II区の南端F～H-3～5グリッドより検出された堅穴住居跡で、北側約1/3は25号住居跡に切られている。上部は25・27号住居跡同様後世にかなり削平を受け、辛うじて床面が残る程度である。検出面は地山上面であった。

プラン・規模・方向 壁面がまったく残っておらず、床面の範囲や周溝状落ち込みでプラン・範囲を確認したため不正確な部分もあるが、各壁の中央部間で東西4.65m、南北4.35mの歪んだ隅丸方形になるものと推定される。方向は壁中央間の南北軸がN-18°-Wになる。

覆土 覆土は全体として粘性のあるシルト質土であ



第68図 第26号住居跡

## 第1節 住居跡

る。床面上には木炭粒を含む第1層が薄く残るのみである。幅の広い周溝状の落ち込みにはシルト質と粘土質の第2～5層が堆積している。

**壁・床面** 壁は部分的に基底部を1～2 cm残すのみで、立ち上りの角度等は不明である。

**ピット** 床面よりP<sub>1</sub>～P<sub>3</sub>の3個が検出されている。P<sub>2</sub>は底面に段を有するものであるが、柱痕は検出されず、位置的にも柱穴とは考えられない。P<sub>1</sub>・P<sub>3</sub>は浅いもので、これも柱穴とは考えることはできない。

**周溝** 幅約70 cm、床面よりの深さ約20 cmの幅広い周溝状落ち込みが、西壁から北壁中央にかけて検出されている。東壁に当る部分は床まで25号住居跡に切られているが、この落ち込みは上部を切られているのみで25号住居跡の覆土の下より検出された。覆土はシルト質と粘土質の第2～5層で、自然堆積の可能性がある。

**カマド** 検出されなかった。

**掘り方** 検出されなかった。

**遺物** 覆土中より100片以上の土師器片が検出されたが、いずれも細片であるため図示できたのは1点のみであった。

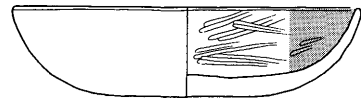
第40表 第26号住居跡ピット形態表

No	形状	計測値 (単位 cm)			柱痕 (単位 cm)		備考
		上面径	下面径	深さ	径	深さ	
P <sub>1</sub>	楕円形	45 × 34	18 × 13	7			
P <sub>2</sub>	不整円形	45 × 45	33 × 29	38			底面に段あり
P <sub>3</sub>	楕円形	35 × 29	22 × 17	9			

## 覆土出土の遺物(第69図)

### 土師器

**杯** 覆土中より出土した非ロクロの底部から口縁部までの破片で、全体の約40%を残す。底部は比較的厚く平底を呈し、



体部は内弯してたちあがりそのまま口縁端部に至る。口径は13.7 cm、底径は5.5 cm、器高は3.5 cmを測る。外面は摩滅が激しいため調整は観察できないが、内面には黒色処理が施されている。胎土は密で、径1 mmの暗赤褐色の粒子を含む。Ⅲa-4-A<sub>1</sub>-(※-b)類に分類される。

第69図 第26号住居跡出土遺物(1/3)

第27号住居跡

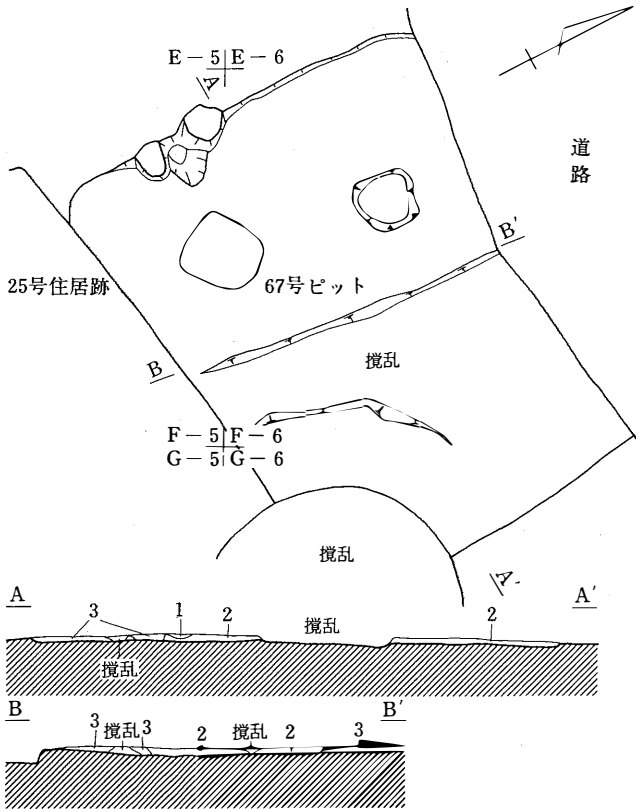
(第70~72図, 第22~24図版)

検出状況 II区のエ~G-5・6グリッドより検出された堅穴住居跡で、南壁を25号住居跡、カマド前方を67号ピット、南東コーナーを後世の攪乱に切られている。

なお、北辺部は現在使用中の道路の下となっているため調査はできなかった。

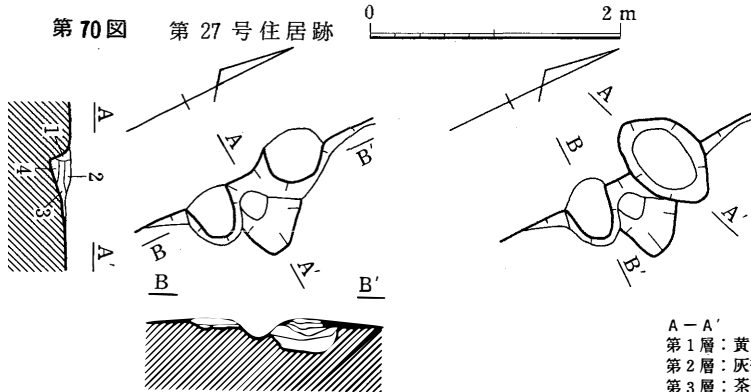
プラン・規模・方向 正確なプランは不明であるが、残った部分より推定すると東西3.95m、南北3.2m以上の方形プランになるものと考えられる。西壁から推定すると南北軸はN-1.5°-Wを示す。カマドは西壁南半部に作られている。

覆土 一番厚みのある部分で



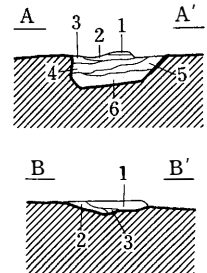
- 第1層：黄色土層 砂質土、粘性少ない。
- 第2層：灰褐色土層 シルト質土、やや硬質。
- 第3層：暗茶褐色土層 シルト質土、焼土粒を含む。

第70図 第27号住居跡



- 第1層：赤褐色土層 軟質、焼土を多く含む。
- 第2層：茶褐色土層 焼土、木炭粒子を含む。
- 第3層：茶色土層 若干焼土、木炭粒を含む。
- 第4層：黄色土層 シルト質、焼土を含む。

第71図 第27号住居跡カマド



- A-A'
- 第1層：黄色土層 シルト質土、やや硬質。
- 第2層：灰褐色土層 粘土質土、やや硬質。
- 第3層：茶褐色土層 シルト質土、やや硬質。
- 第4層：茶褐色土層 焼土を含む。やや軟質。
- 第5層：黄色土層 焼土を含む。軟質。
- 第6層：黄褐色土層 粘土質土、焼土を含む。
- B-B'
- 第1層：黄色土層 シルト質土、砂分多し。
- 第2層：黄色土層 シルト質土、焼土を含む。
- 第3層：黄色土層 粘土質土、焼土を含む。

第72図 第27号住居跡カマド



第1節 住居跡

5 cmと薄い覆土で第1層は部分的で他は全面にあり、表土や攪乱の茶褐色軟質土・粘土ブロック混り砂質土とは異なっている。覆土が薄いため自然堆積か人工堆積かは不明である。

壁・床面 部分的に残っている東壁・西壁とも1～3 cmの深さで痕跡的に確認できたものである。立ち上りの角度等は不明である。床面はほぼ平坦で、叩きしめられた痕跡はあるがやや軟弱である。中央部が67号ピット・攪乱により切られている。

ピット 検出されなかった。

周溝 検出されなかった。

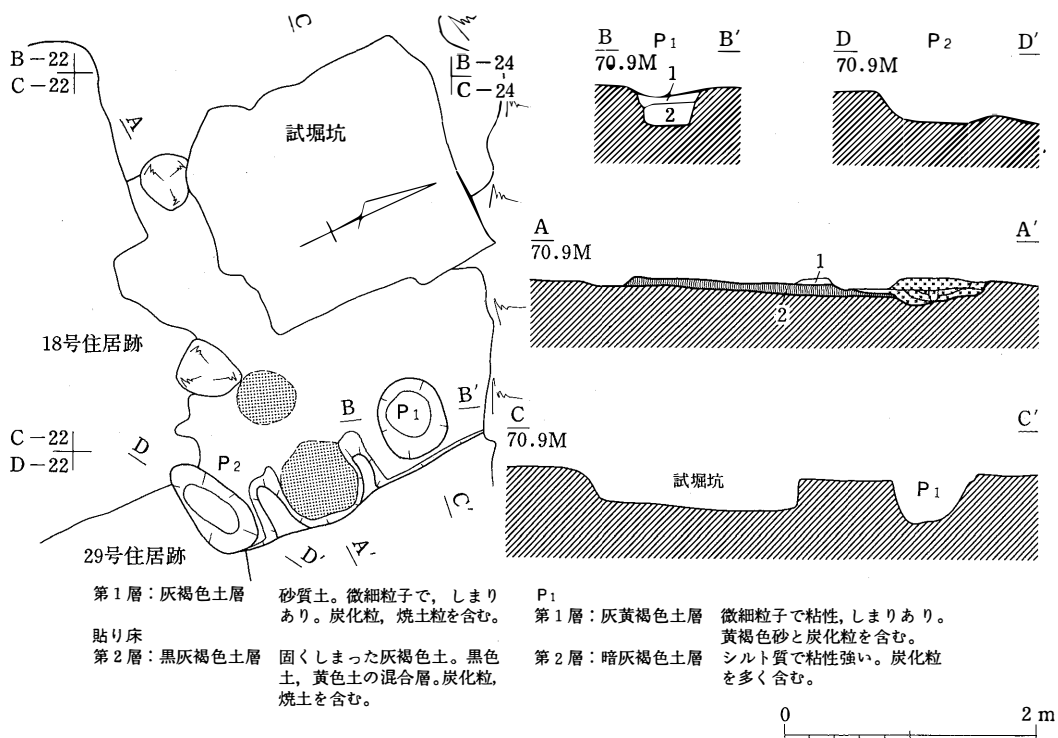
カマド 西壁南半部に作られており、右袖は長さ25 cm、幅13 cm、高さ2 cm、左袖は長さ27 cm、幅30 cm、高さ3.5 cmを測る。残存は良くない。燃烧部の床は6 cmほど窪み、ピット状となっている。また、右袖の下は焼土混り土で埋められたピットになっている。煙道は検出されなかった。

掘り方 検出されなかった。

遺物 遺構・覆土ともに遺物は検出されなかった。 (木本 元治)

第28号住居跡(第73・74図, 第26図版, 第41表)

検出状況 II区のC・D-23・24グリッドより検出された住居跡である。耕作による攪乱の



第73図 第28号住居跡

ため壁・覆土は全て削平されているが、カマドと貼り床を施した床面が検出されている。遺構確認面である地山上面と本住居跡の床面は同レベルである。本住居跡は29号住居跡を切り、18号住居跡に切られている。北西コーナーは試掘坑により破壊されているため不明である。また、本住居跡の北側約1.5mには3号不明遺構が近接している。

**プラン・規模・方向** 本住居跡は遺存率が悪いため明確なプラン・規模・方向は不明である。しかし、南・北壁の midpoint を結ぶ軸線は残存する東壁より  $N - 0.5^\circ - W$  を向き、ほぼ真北をさすと推定される。

**覆土** 耕作による削平のため覆土は確認されなかった。なお、住居跡中央部の焼土層は床面で確認されているが、本住居跡に伴うかどうかは不明である。

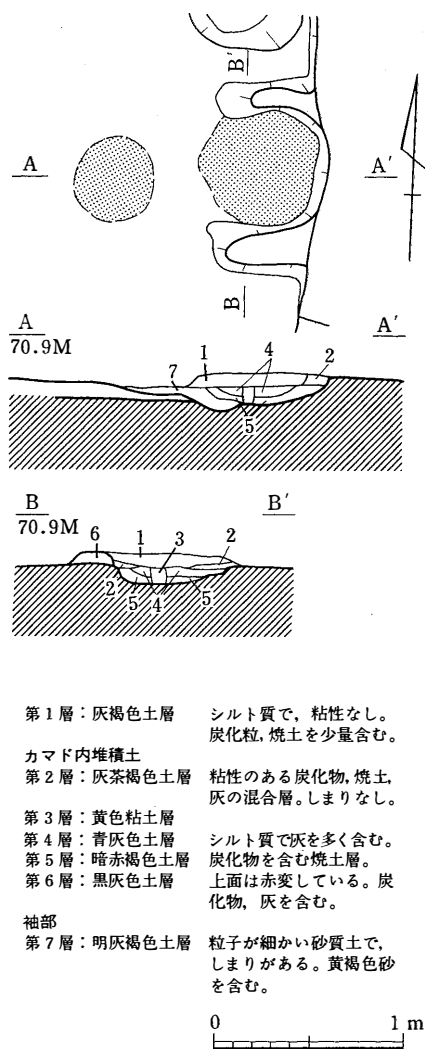
**壁・床面** 壁は耕作による削平のため全く確認されなかった。

床面は貼り床が施されている部分において検出されたのみである。よって本住居跡はさらに西へ広がる可能性が高い。貼り床の厚さは15cm前後で、細別すると2層に分かれている。下層はかたい灰褐色土層、上層はかたくたたきしめられた灰褐色土と黄褐色土の混合層である。上層と下層の間には非常に薄い炭化物の層が認められる。しかし、上層は残存する床面のほぼ全面に認められるが、下層はカマドから住居跡の中央部にかけての一部のみである。このことから本住居跡の貼り床の上層と下層の差違は貼り床に用いた土のちがいが、あるいは補強のために追加されたものと推定される。よって上層と下層の間には大きな時期的な差はないと考えられる。

**ピット** カマドに近接して、 $P_1$ と $P_2$ の2個のピットが検出された。このうち $P_1$ は覆土中に炭化物を多く含むことから貯蔵穴である可能性が高いが、焼土及び土器片是一片も検出されていない。 $P_2$ は床下から検出されたピットで、本住居跡よりも古いものと推定される。

**周溝** 検出されなかった。

**カマド** 東壁の南側寄りに構築されている。耕作による削平のため、煙道は全く検出されず、



- 第1層：灰褐色土層 シルト質で、粘性なし。炭化粒、焼土を少量含む。
- カマド内堆積土
- 第2層：灰茶褐色土層 粘性のある炭化物、焼土、灰の混合層。しまりなし。
- 第3層：黄色粘土層
- 第4層：青灰色土層 シルト質で灰を多く含む。
- 第5層：暗赤褐色土層 炭化物を含む焼土層。上面は赤変している。
- 第6層：黒灰色土層 炭化物、灰を含む。
- 袖部
- 第7層：明灰褐色土層 粒子が細かい砂質土で、しまりがある。黄褐色砂を含む。

第74図 第28号住居跡カマド

## 第1節 住居跡

袖部も床面から7～8 cmを残すのみである。袖部は明灰色土をかたくたたきしめて構築しており、右袖部は50×27 cm、高さは6 cm、左袖部は52×18 cm、高さは4 cmを測る。燃焼部の土層断面によると、第4・5層がカマド内の主要堆積土と推定され、燃焼部の底面は窪んでいる。焚口部は幅約56 cm、燃焼部は幅約62 cm、奥部は約62 cmを測る。また、第3層の粘土ブロックは円柱状を呈していることから、支柱と同様の性格をもつものと推測される。

掘り方 検出されなかった。

遺物 出土遺物は非常に少ないが、床面中より土師器片が数点検出された。しかし、いずれも細片であったため図示できなかった。破片数は第66表に示す。

第41表 第28号住居跡ピット形態表

No.	形状	計測値 (単位 cm)			柱痕 (単位 cm)		備考
		上面径	下面径	深さ	径	深さ	
P1	不整楕円形	62×51	37×34	25			貯蔵穴
P2	不整形	86×40	53×21	16			

## 第29号住居跡(第75図, 第26図版, 第42表)

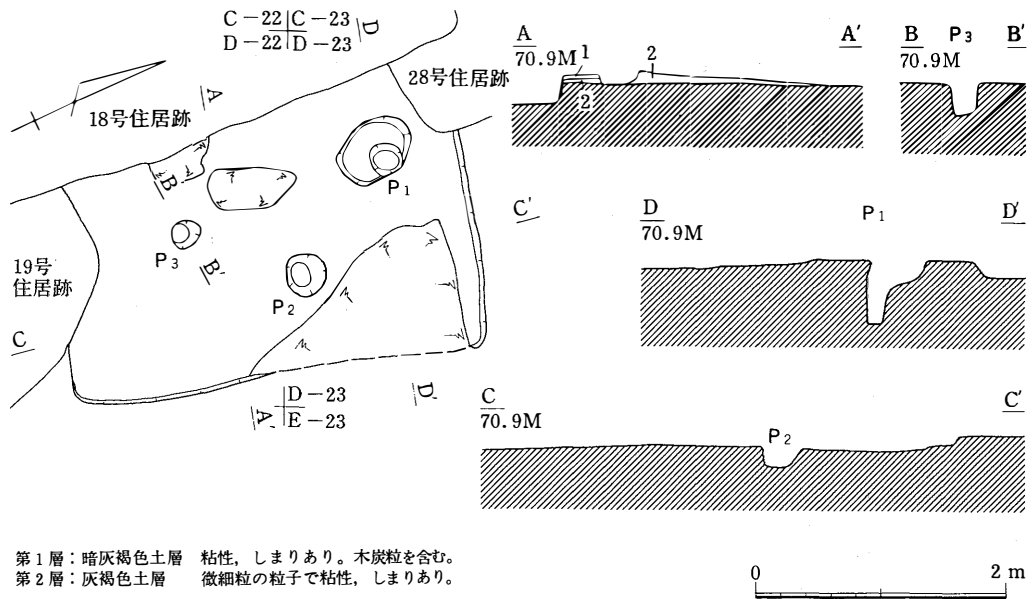
検出状況 II区のD-22・23グリッドより検出された住居跡で、遺構確認面は地山上面である。本住居跡は18・19・28号住居跡に切られており、この4軒の住居跡の重複関係のなかでは最も古い住居跡である。3軒の住居跡に切られている上に、耕作による削平が床面にまで及んでいるため本住居跡の遺存率は極めて悪い。なお本住居跡の東側約10 cmに9号溝跡が近接している。

プラン・規模・方向 重複する3軒の住居跡に切られているため正確なプラン・規模・方向は不明であるが、残存する東壁から一辺が約3.3 m程度の方形を呈すると推定される。また南・北壁の中点を結ぶ軸線方向は、残存する東壁の傾きよりN-16°-Eを向くと推定される。

覆土 残存する覆土は非常に浅いが2層にわけられる。第1・2層とも灰褐色土が基調で、第1層には炭化物の粒子が多く含まれる。堆積状態については、覆土上面が削平されているため不明である。

壁・床面 壁の遺存度は非常に悪く、残っているのは東壁の一部のみである。東壁も検出面からの深さは約2～3 cm程で、ゆるやかにたちあがるたちあがり検出されたのみである。床面は東側の約½が残存するが、耕作による攪乱を大きく受けている。残存する床面の面積は約5 m<sup>2</sup>であり、地山をそのまま床面として使用していたと推定される。

ピット P1～P3の3個のピットが検出された。このうちP1は断面と位置から柱穴であると



第75図 第29号住居跡

推定されるが、P<sub>2</sub>・P<sub>3</sub>は大きさやその位置から柱穴ではないと考えられ、その性格は不明である。

周溝 検出されなかった。

カマド 検出されなかった。

遺物 3軒の住居跡に切られており、覆土が非常に浅いため遺物は第1層より土師器細片が1点検出されたのみである。本住居跡に伴う遺物は検出されなかった。破片数は第66表に示す。

(穴戸美智子)

第42表 第29号住居跡ピット形態表

No	形状	計測値 (単位 cm)			柱痕 (単位 cm)		備考
		上面径	下面径	深さ	径	深さ	
P <sub>1</sub>	不整楕円形	64 × 45	26 × 24	51			
P <sub>2</sub>	不整円形	33 × 33	19 × 14	16			
P <sub>3</sub>	不整円形	24 × 21	15 × 13	25			

第30号住居跡(第66図, 第22図版)

検出状況 II区西側, A・B-9~11 グリッドに検出された住居跡である。10・24号住に切られており、東側3.5mに5号溝, 2・7・9号住居跡がある。西側は調査区外である。遺構検出

## 第1節 住居跡

面は地山上面である。

プラン・規模・方向 西側半分は調査区外となり、東側は10号住居跡に切られ、プラン・規模・方向は不明であるが、残存部は南壁約2.65m、東壁約1.7mを測る。

覆土 残存する南側・東側では暗黄白灰色粘土質の第1層(第66図の第7層の土層)から成り、粒子が細く、しまりがあり固く、24号住居跡覆土に近似している。しかし、覆土のほとんどは24号住居跡により切られているため全体的な土層については不明である。

壁・床面 上面は耕作により削平されており、壁は検出面から床面までは約5cmを測る。立ち上がり角度は南壁が約110°である。

床は地山を掘り込んで作られており、比較的固く叩きしめられており、ほぼ平坦であるが、壁に向かってややせり上っている。

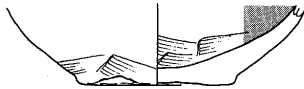
ピット 検出されなかった。

周溝 検出されなかった。

カマド 検出されなかった。

掘り方 検出されなかった。

遺物 遺物の出土は少なく第7層から土師器片6片と、床面から甕の底部が1個体のみである。



遺構に伴う遺物(第76図)

### 土師器

第76図 第30号住居跡  
出土遺物(1/2)

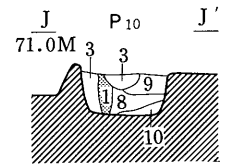
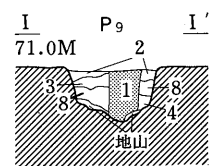
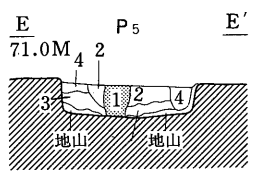
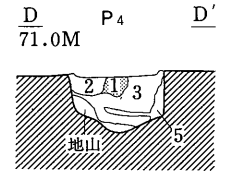
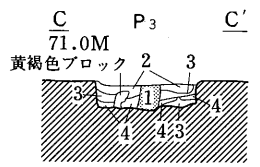
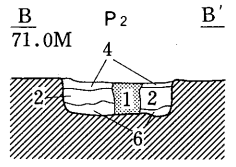
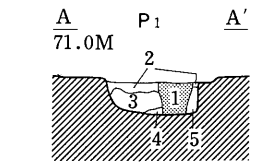
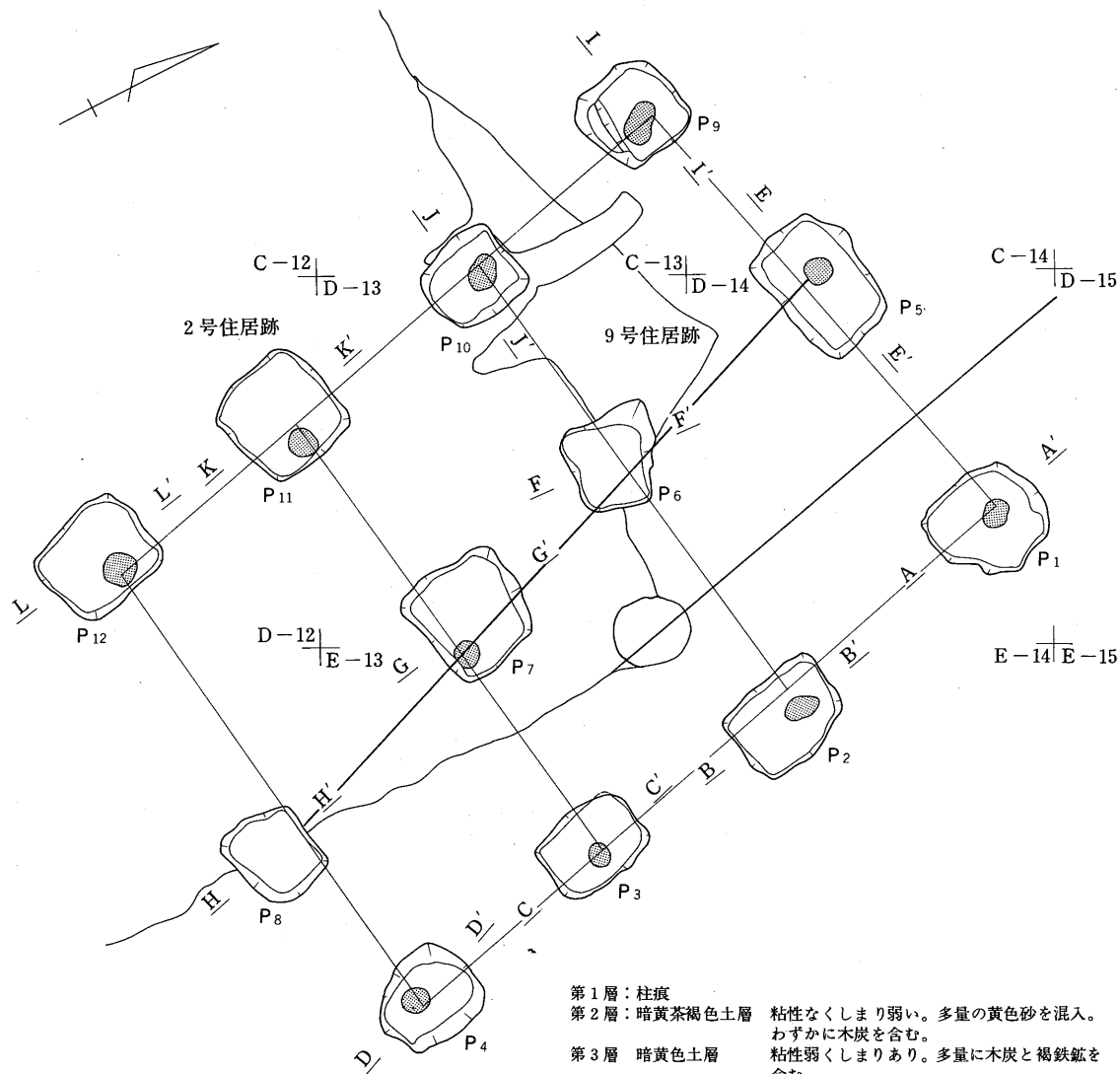
甕(1) 床面より出土した非ロクロの甕で、底部から体部下端を残す。胎土に小石を多く含み、器面は荒いが内外面にナデの調整が見られ、内面に黒色処理が施されている。また、底部に木葉痕が残る。分類はId-※-※-(a-a)類である。また、法量は径6.0cm、残存部器高3.2cmを測る。  
(氏家 浩子)

## 第2節 掘立柱建物跡

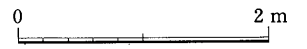
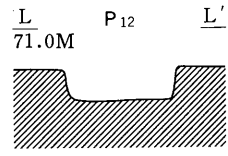
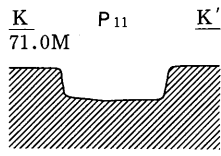
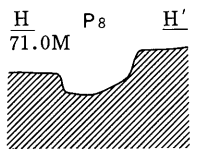
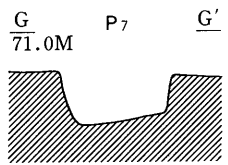
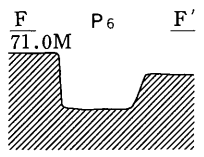
### 第1号掘立柱建物跡(第77図, 第27図版1, 第43表)

Ⅱ区の中ほどC~F-12~14グリッドに位置し、2・22号住居跡を切っている。また、北側で5・6号建物跡と重複しているが、柱穴の切り合い関係がないため新旧関係は不明である。遺構検出面は地山上面である。

本建物跡は桁行3間、梁行2間で南北棟の総柱である。東側柱列の軸線はN-14°-Wを向く。



- 第1層：柱痕
- 第2層：暗黄茶褐色土層 粘性なくしまり弱い。多量の黄色砂を混入。わずかに木炭を含む。
- 第3層：暗黄色土層 粘性弱くしまりあり。多量に木炭と褐鉄鉱を含む。
- 第4層：黄色土層 砂質。柔らかく粘性弱い。褐鉄鉱、木炭を含む。
- 第5層：黄褐色土層 硬質。粒子細くわずかに木炭を含む。
- 第6層：暗青色土層 硬質。粘性弱くしまりあり。褐鉄鉱、木炭粒を含む。
- 第7層：黄褐色土層 粘質土。しまり強く木炭を含む。
- 第8層：暗青褐色土層 粘性弱くしまりあり。多量に褐鉄鉱を含む。
- 第9層：明茶色土層 粘性しまりあり。柔らかく焼土、木炭を含む。
- 第10層：明茶褐色土層 粘性強く粒子細く多量に焼土を含む。



第77図 第1号掘立柱建物跡

柱間距離は検出された柱痕より東側北から2.2+2.0+1.9mで6.1m、西側柱列の北から1.8+2.0+1.8mで5.6m、北側柱列の東から2.4+1.9mで4.3m、南側柱列はP<sub>8</sub>に柱痕が検出されなかったが東から1.7+2.6mで4.3mを測り、間尺は6~8尺である。また、P<sub>2</sub>~P<sub>6</sub>が2.2m、P<sub>6</sub>~P<sub>10</sub>が2.1m、P<sub>3</sub>~P<sub>7</sub>が1.9m、P<sub>7</sub>~P<sub>11</sub>が2.15mの柱間距離をもつ。

掘り方はP<sub>1</sub>・P<sub>6</sub>の不整形を除きほぼ隅丸方形を呈しており、長軸が75~110cm、短軸が60~90cmの大きさを持つ。埋め土は全体的に褐鉄鉱・木炭粒を含み、粘性弱く、大よそ3層に水平な堆積を示している。また、P<sub>10</sub>は2号住居跡カマドの燃焼部に掘り込まれており、底部にベタベタした焼土を多く含む層が観察された。柱痕はP<sub>6</sub>・P<sub>8</sub>以外は検出されている。径17~28cmの円形を呈し、暗茶褐色の固くしまった埋め土を持つ。建てかえや抜き取り痕は見られない。

第43表 第1号掘立柱建物跡ピット形態表

No	掘り方 (単位 cm)				柱痕 (単位 cm)		備考
	形状	上面径	底面径	深さ	径	深さ	
P <sub>1</sub>	不整形	103×90	95×75	27	17	25	
P <sub>2</sub>	隅丸長方形	90×72	83×61	30	20	25	
P <sub>3</sub>	隅丸長方形	85×65	78×55	27	16	20	
P <sub>4</sub>	不整形	81×74	72×47	43	20		
P <sub>5</sub>	隅丸長方形	110×74	94×60	26	10	25	
P <sub>6</sub>	不整形	97×81	80×70	35			
P <sub>7</sub>	不整形	90×86	84×70	33	20		
P <sub>8</sub>	不整形	75×62	64×50	24			
P <sub>9</sub>	不整形	77×75	68×65	30	20	40	
P <sub>10</sub>	不整形	75×70	65×52	31	22	32	
P <sub>11</sub>	隅丸方形	91×87	83×79	22	25		
P <sub>12</sub>	隅丸長方形	89×75	80×68	23	28		

第2号掘立柱建物跡(第78図, 第27図版2, 第44表)

Ⅱ区の中央F~G-14~16グリッドに位置し、11号住居跡を切っている。東側には6号溝が走っており、その東に3号建物跡がある。また、本建物跡周辺からは8個の柱穴と考えられるピットが検出された。遺構検出面は地山上面である。

本建物跡は南北2間、東西2間の中ヌキの建物であるが、南側が3間となっておりここに出入

## 第2節 掘立柱建物跡

口を持つとも考えられる。また、東側柱列の軸線はN-1°-Wとはほぼ真北を示している。柱間距離は検出された柱痕より東側柱列の北から2.35+2.4mで4.75m、西側柱列の北から2.3+2.3mで4.6m、北側柱列東から2.15+2.1mで4.25m、南側柱列はP<sub>6</sub>に柱痕が検出されなかったが、東から1.5+1.15、1.5mで4.15mを測り、やや南側・北側が短い長方形を呈している。間尺は東西柱列は8尺、北側柱列は7尺、南側柱列が5尺+4尺+5尺である。

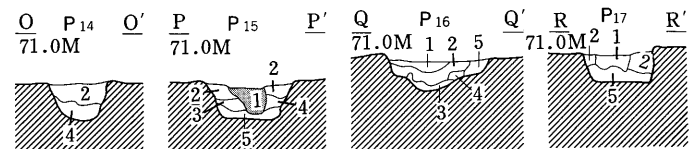
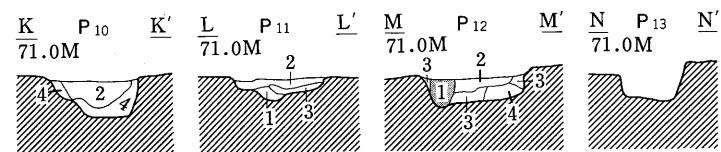
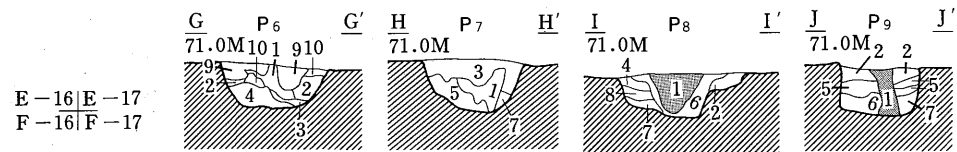
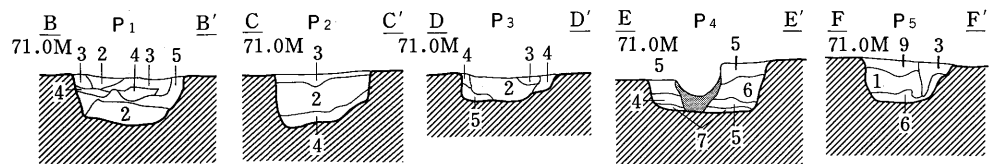
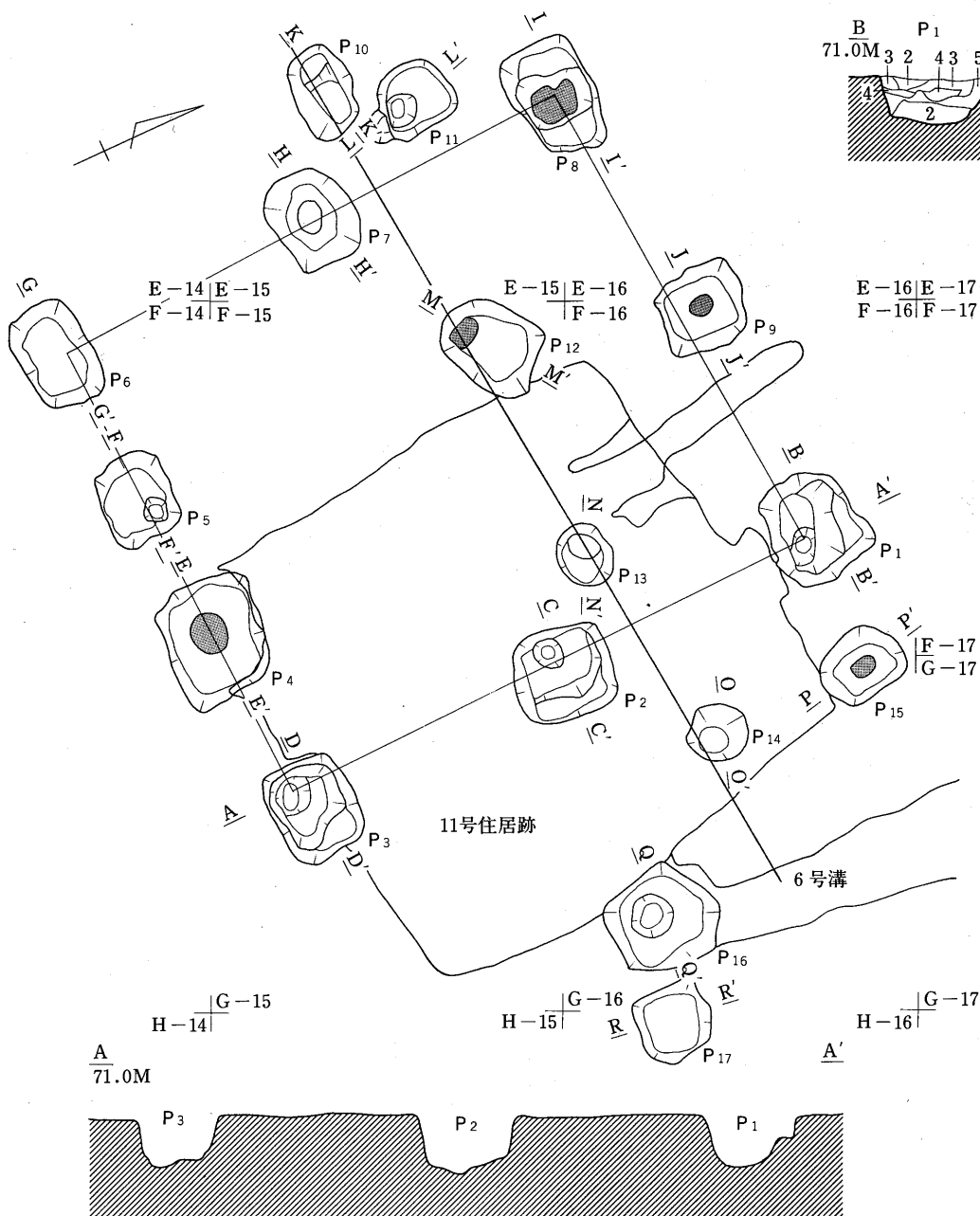
柱穴の掘り方は不整な方形を呈し、長軸が70~99cm、短軸が44~88cmと大きさにはばらつきが見られる。埋め土は粘性・しまりのあるシルト質の灰褐色と砂質の茶褐色土層から成り、下層には黄褐色の砂質土が見られる。また、柱痕はP<sub>6</sub>を除いて検出されており、径が17~27cmの円形で、多量の褐鉄鉱粒とわずかに灰褐色土よりなる。建てかえや抜き取り痕は見られない。

(氏家 浩子)

第44表 第2号掘立柱建物跡ピット形態表

No	掘り方 (単位 cm)				柱痕 (単位 cm)		備考
	形状	上面径	底面径	深さ	径	深さ	
P <sub>1</sub>	不整形	90×75	60×30	40	23		
P <sub>2</sub>	隅丸方形	85×77	63×63	34	23		
P <sub>3</sub>	隅丸長方形	84×70	50×42	32	27		
P <sub>4</sub>	不整長方形	99×82	88×65	32			
P <sub>5</sub>	不整長方形	74×62	60×55	35	20		
P <sub>6</sub>	隅丸長方形	90×59	64×38	38			
P <sub>7</sub>	隅丸長方形	81×69	58×42	44	20		
P <sub>8</sub>	不整方形	98×64	44×53	25	25		
P <sub>9</sub>	不整方形	71×71	56×45	37	17	35	
P <sub>10</sub>	楕円形	76×52	60×27	28			
P <sub>11</sub>	不整形	79×58	56×47	17	25		
P <sub>12</sub>	不整形	85×68	52×45	22	19	22	
P <sub>13</sub>	円形	53×44	43×33	25	20		
P <sub>14</sub>	円形	51×48	25×21	27	21		
P <sub>15</sub>	楕円形	71×55	48×33	28	15	20	
P <sub>16</sub>	不整円形	91×88	38×35	22			
P <sub>17</sub>	不整円形	63×50	25×23	23			





第1層：灰褐色土層

シルト質。やや粘性、しまりあり。多量に褐鉄鉱を混入。わずかに木炭粒を含む。

第2層：灰褐色土層

シルト質。粘性、しまりあり。多量に黄色土を混入。褐鉄鉱、木炭粒を含む。

第3層：灰褐色土層

シルト質。やや粘性あり、しまっている。黄色土、木炭粒を含む。

第4層：茶褐色土層

砂質。やや粘性あり、しまっている。多量の褐鉄鉱と黄色土を含む。

第5層：暗灰褐色土層

シルト質。粘性、しまりあり。大粒の木炭粒と砂を混入。わずかに褐鉄鉱を含む。

第6層：灰褐色土層

粘質。粘性、しまりあり。黄色土、木炭粒、砂を含む。

第7層：黄褐色土層

砂質。しまりあり。黄色土、木炭粒を含む。

第8層：灰褐色土層

粘土。砂、木炭粒を含む。

第9層：黄色土層

砂層。やわらかく、わずかに木炭粒を含む。

P10～P16

第1層：灰褐色土層

シルト質。しまりあり。黄色土粒子、木炭粒を混入。下部に砂を含む。

第2層：黄褐色土層

シルト質。しまりあり。木炭粒、黄色土を含む。

第3層：灰褐色土層

粒子の粗い砂を多量に混入。わずかに木炭粒を含む。

第4層：明灰褐色土層

粘質。しまりあり。黄色粘質土とわずかに木炭粒を含む。

第5層：黄褐色土層

砂質。ややしまりあり。灰褐色土、木炭粒を含む。

0 2 m

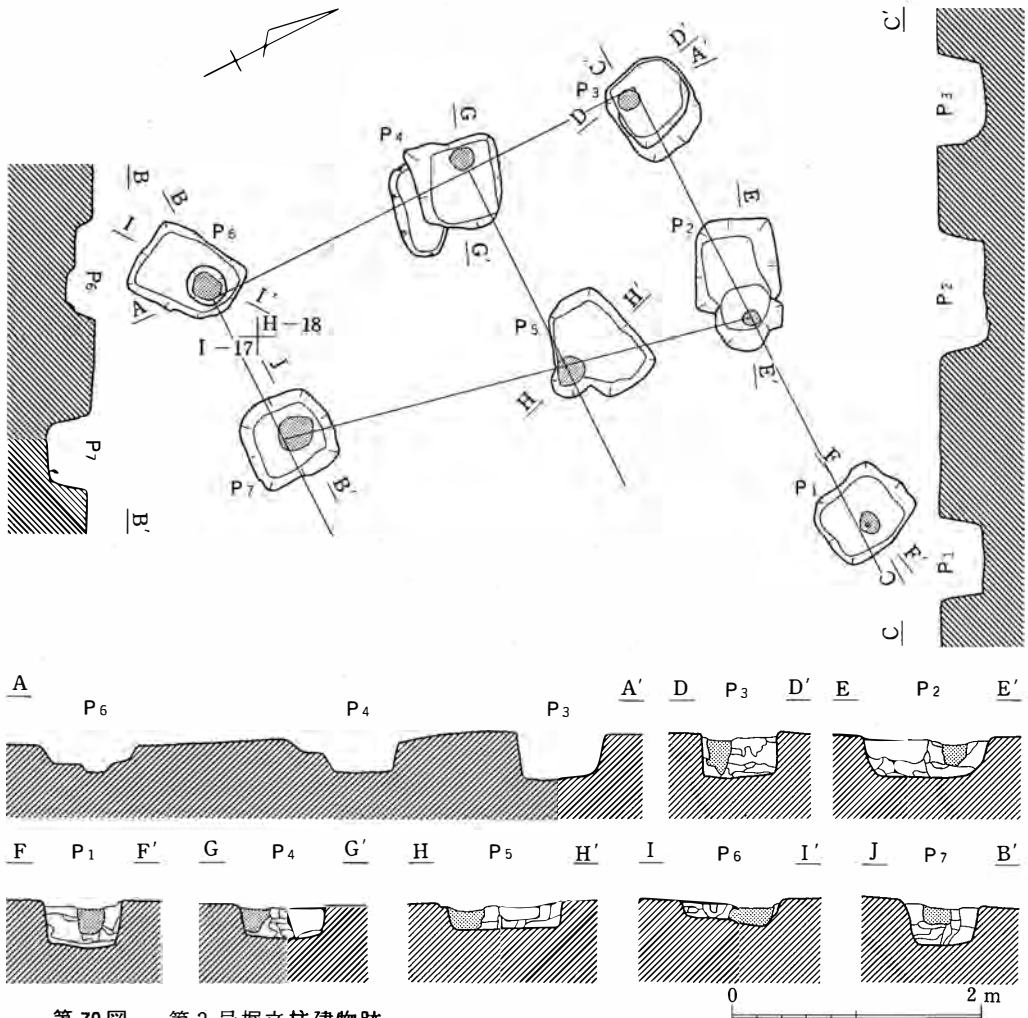
第78図 第2号掘立柱建物跡

第3号掘立柱建物跡(第79図, 第28・29図版, 第45表)

Ⅱ区のH・I-17~19グリッドより検出された建物跡で, 南北2間, 東西2間またはそれ以上になる総柱の建物である。確認面は地山上面であり, 東側は発掘区外で調査できなかった。

柱穴の掘り方は1辺50~90cmの方形, または長方形を呈し, 一部にはP<sub>2</sub>・P<sub>5</sub>のように柱位置がずれたため掘り直しをしているものも見られる。

柱間隔は柱痕の中心間でP<sub>1</sub>~P<sub>2</sub>~P<sub>3</sub>が2m+1.88m, P<sub>6</sub>~P<sub>7</sub>が1.4m, P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>~P<sub>6</sub>が1.4m+2.3mとなっている。これを柱痕の範囲内で柱位置を調節すると, P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>~P<sub>6</sub>の南北柱筋がN-2°-Wを取り, 東西の柱筋がそれに直交する建物を考えることができる。この場合P<sub>1</sub>~P<sub>2</sub>~P<sub>3</sub>は7尺+6尺, P<sub>1</sub>~P<sub>4</sub>~P<sub>6</sub>が5尺+7.5尺, P<sub>6</sub>~P<sub>7</sub>が4尺, P<sub>4</sub>~P<sub>5</sub>が6尺



第79図 第3号掘立柱建物跡

## 第2節 掘立柱建物跡

となり、P<sub>5</sub>はP<sub>7</sub>とP<sub>2</sub>を結ぶ線上に位置するようになる。全体として間尺は不統一である。

柱穴の埋土からはクワ調整土師器片が若干出土しており、9世紀以降のものと考えられる。

(木本 元治)

第45表 第3号掘立柱建物跡ピット形態表

No.	掘り方 (単位 cm)				柱痕 (単位 cm)		備考
	形状	上面径	底面径	深さ	径	深さ	
1	長方形	73 × 65	51 × 56	35	19 × 16	28	
2	長方形	105 × 70	76 × 48	33	20	24	掘り直しあり
3	長方形	62 × 75	52 × 56	37	22 × 18	28	
4	不整形	75 × 74	60 × 52	25	19	21	
5	不整形長方形	90 × 78	72 × 65	22	28	22	掘り直しあり
6	長方形	83 × 65	75 × 50	13	32 × 30	22	
7	方形	70 × 72	50 × 53	36	26 × 30	23	

### 第5号掘立柱建物跡(第80図, 第30図版1, 第46表)

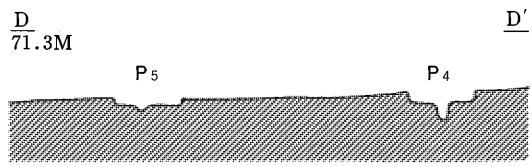
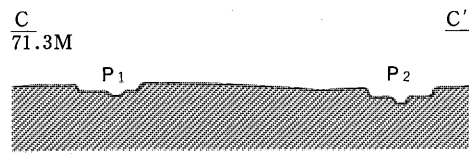
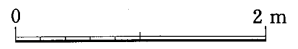
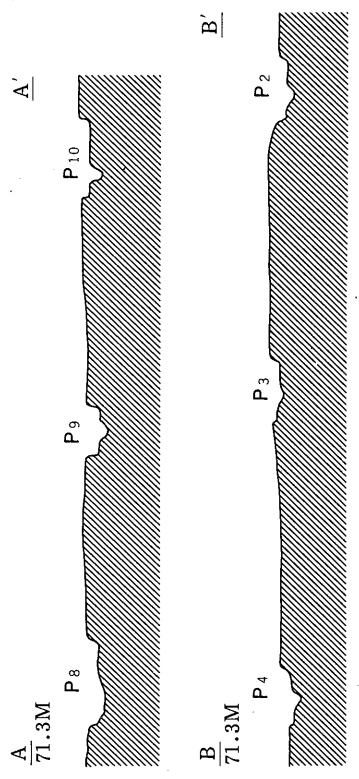
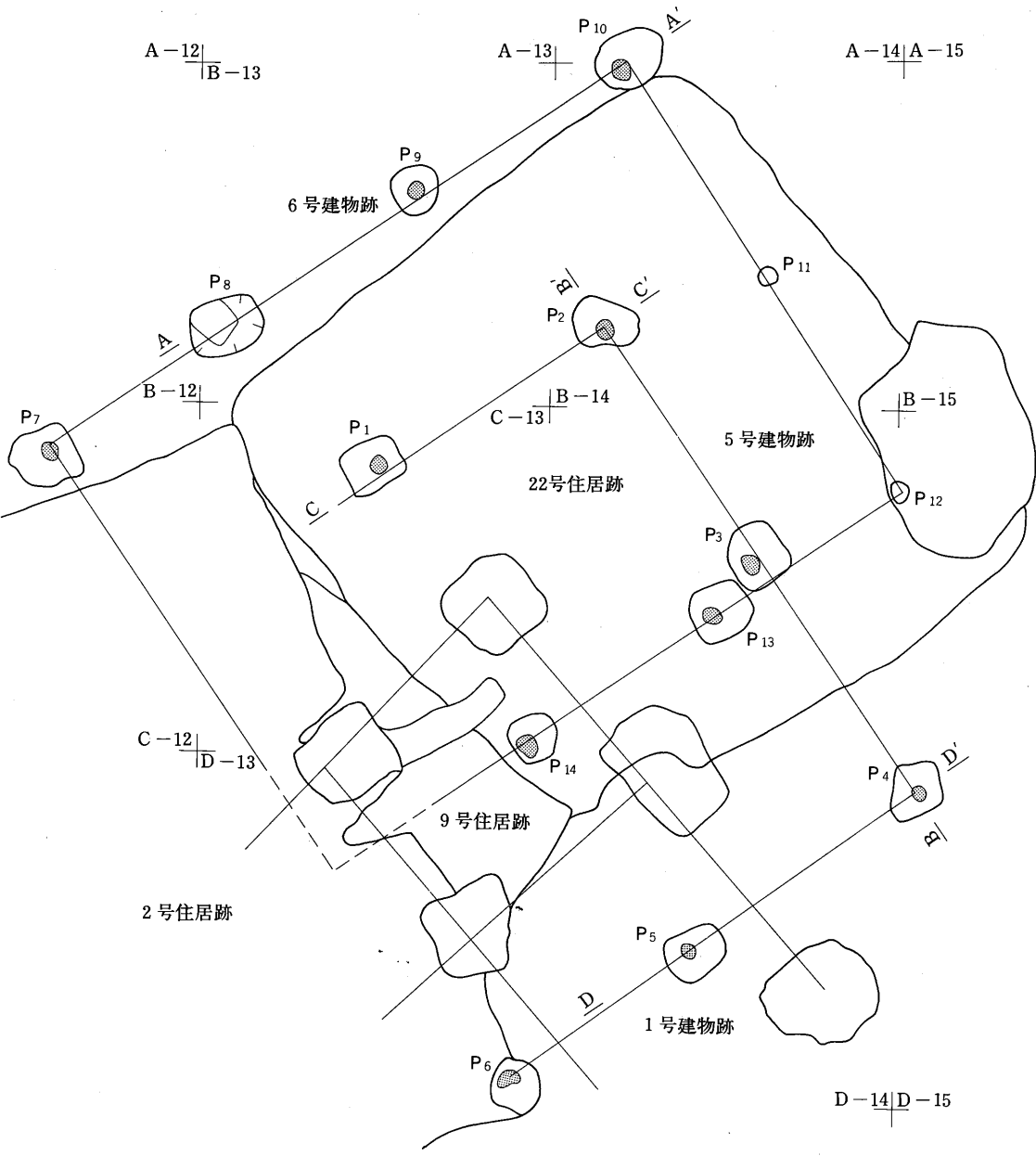
Ⅱ区のほぼ中央西側寄りのA～C-13～15グリッドに位置し、22号住居跡より新しく、2・9号住居跡を切って伸びると考えられるが、南側は削平されて不明である。また、この建物の北西側には6号建物跡、東側には1号建物跡が一部重複している。しかし、柱穴の切り合いがないため新旧関係は不明である。遺構検出面は地山上面である。

確認されたプランは東側柱列2間、北側柱列2間で、東西2間、南北2間又はそれ以上の中ヌキの建物と考えられる。柱間距離は西側柱列が2.35m、北側柱列東から2.4+2.4m、東側柱列北から2.4+1.85mで4.25mを測る。間尺は8尺で一部6尺となる。また、東側柱列の軸線方向はN-8°-Wを向く。

柱穴は40×50mぐらいの方形または隅丸方形を呈し、ほぼ垂直に立ち上がる壁を持つ掘り方である。上層からかなり削平を受けており、深さは不明であるが残存部分は約5cmと浅く、埋め土は暗褐色土と暗茶褐色土から成る。すべての柱穴からは径約15～20cmの円形の柱痕が検出された。また、抜き取り痕や建てかえしは見られない。

### 第6号掘立柱建物跡(第80図, 第30図版2, 第46表)

Ⅱ区のほぼ中央西側寄りのA～C-12～15グリッドで検出され、9・22号住居跡を切っており5号建物同様、東側が2号住居跡を切って南に伸びるものと考えられるが、南部は削平を受けて



第 80 图 第 5 · 6 号掘立柱建物跡

おり不明である。また、東側は5号建物跡と重複しているが柱穴の切り合がないため、新旧関係は不明である。遺構検出面は地山上面である。

確認されたプランは西側柱列3間、北側柱列2間の建物で、東西2間、南北3間又はそれ以上の南北棟の中ヌキの建物と考えられる。柱間距離は西側柱列南1.8+2.05+2.1mで5.95m、北側柱列西から2.1+2.1mで4.2m、東側柱列北から1.95+1.95mで3.9mを測る。間尺は桁行が南から6尺+7尺+7尺、梁行は7尺等間隔である。また東側柱列の軸線はN-9°-Wを向く。

8個の柱穴のうち北側列東2個は柱痕のみで掘り方は削られて確認されなかった。その他6個の柱穴は径40～60cmぐらいで、壁がほぼ直立する掘り方を持つ。深さは上層から削平を受けており、正確な数値は不明であるが約5～10cmを残し、埋め土は暗褐色土・暗茶褐色土から成る。また、柱痕はP<sub>6</sub>・P<sub>8</sub>・P<sub>9</sub>・P<sub>11</sub>・P<sub>12</sub>より柱痕が検出され、径約15cmの円形状を呈す。抜き取り痕や建てかえしは見られない。

第46表 第5・6号掘立柱建物跡ピット形態表

No	掘り方 (単位 cm)				柱痕 (単位 cm)		備考
	形状	上面径	底面径	深さ	径	深さ	
P <sub>1</sub>	隅丸長方形	51×42	45×35	5	18×16	4	
P <sub>2</sub>	不整楕円形	58×39	50×46	5	18×17	6	
P <sub>3</sub>	隅丸方形	53×49	50×38	4	20×18	3	
P <sub>4</sub>	不整方形	55×50	43×42	9	18×17	12	
P <sub>5</sub>	隅丸方形	52×42	47×35	5	15×16	5	
P <sub>6</sub>	不整円形	49×42	21×14		13		
P <sub>7</sub>	不整方形	65×49	34×32		15		
P <sub>8</sub>	不整楕円形	62×49	60×44	5			
P <sub>9</sub>	不整円形	42×41	37×35	10	15	17	
P <sub>10</sub>	楕円形	63×49	57×40	7	14	12	
P <sub>13</sub>	隅丸方形	52×47	16×16	11	14	10	
P <sub>14</sub>	円形	44×37	33×29		15		

### 一本柱列(第78図)

2号建物跡からP<sub>10</sub>～P<sub>17</sub>の7個のピットから検出され、7個のうちP<sub>11</sub>・P<sub>12</sub>・P<sub>13</sub>・P<sub>14</sub>・P<sub>15</sub>に柱痕が見られる。P<sub>10</sub>・P<sub>12</sub>・P<sub>13</sub>・P<sub>14</sub>は1線に並ぶか、どの方向に伸びるかはいっさい不明で

## 第2節 掘立柱建物跡

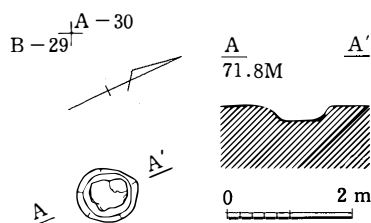
ある。掘り方の大きさにもばらつきがあり、 $P_{13} \cdot P_{14}$  は円形の小さいものである。柱痕を基準とした柱間距離は  $P_{10} \sim P_{12}$  が 2.4 cm,  $P_{12} \sim P_{13}$  が 2.1 cm,  $P_{13} \sim P_{14}$  が 1.9 cm を測る。

その他  $P_{11} \cdot P_{15} \cdot P_{17}$  から柱痕が確認されているが建物となるかどうかは不明である。

埋め土は2号建物跡柱穴と近似しており、シルト質で木炭を含む。黄褐色土と灰褐色土から成り、柱痕は黄色土と木炭を含む灰褐色土である。 (氏家 浩子)

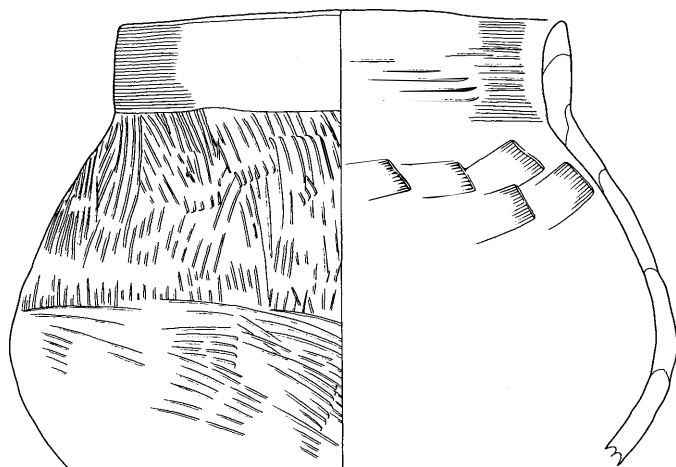
## 第3節 ピット

### 第1号ピット(第81図, 第31図版)



第81図 第1号ピット

I区B-30グリッドより検出され2号溝西側に位置する。検出面は地山上面である。平面形はほぼ円形で長軸 50 cm, 短軸 44 cm を測る。検出面から底部までの深さは 6 cm を測り、断面は「U」字状を呈する。堆積状態は不明である。ピット内の出土遺物は土師器の甕が1点出土している。



第82図 第1号ピット出土遺物 (1/3)

### 覆土出土の遺物 (第82図, 第50図版1)

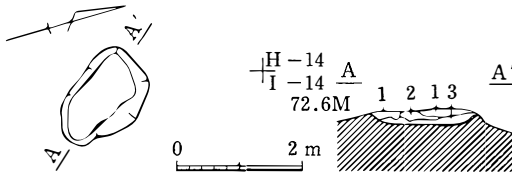
#### 土師器

甕 1号ピット内より出土した非ロクロの甕で全体の約30%程度の破片である。器形は体部中位に最大径を有する菱形に近い形で、口縁部は直立気味に立ち上がり口唇部に至る。調整は内面ハケメのちヨコナデ、外面ヨコナデ、ハケメが施されている※-6c-E1

- (da-da)類である。胎土は密で焼成は良好である。

### 第6号ピット(第83図, 第31図版)

II区H・I-Bグリッドの3号住居址北東部内で検出された。検出面は3号住居覆土上面であ



第83図 第6号ピット

- 第1層：灰茶褐色シルト質層  
酸化鉄粒，木炭粒を含む。
- 第2層：茶褐色シルト質層  
木炭粒，灰黄色砂質土を含む。
- 第3層：灰褐色シルト質層  
木炭粒，茶褐色砂，黄白色質土を含む。

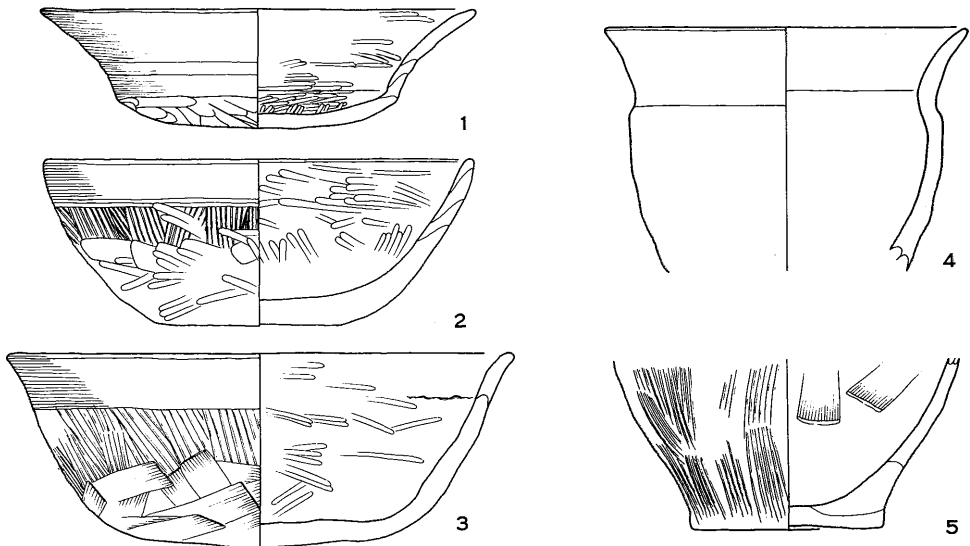
る。平面形は長軸 80 cm，短軸 53 cm を測り形状は不整楕円形を呈す。長軸の方向はN-22.5°-W を向く。検出面から底部までの深さは 13 cm で断面は皿状を呈する。堆積土は 3 層に大別される。全体的に灰褐色を呈する土層で比較的多数の木炭粒を含みブロック状の堆積をしている。ピット内の出土物は土師器の杯 1 点と，土師器の鉢 2 点，土師器の甕 2 点が出土し他に土師器の破片が 29 片出土している。

覆土出土の遺物 (第84図1~5, 第50図版2~4, 第47表)

土 師 器

杯(1) 6号ピット内より出土した非ロクロの杯で，全体の約 20% 程度の破片である。器形は平底風丸底の杯で体部中位には段を有し，底部から体部にかけて外反しながら口縁部に至る。外面調整は口縁部がヨコナデ，底部がケズリである。内面はミガキで黒色処理が施されているⅡa-2c-D<sub>2</sub>-(ac-b)類である。底部中央には「十」字の線刻が観察される。

鉢(2・3) 6号ピット内より出土した非ロクロの鉢である。2は全体の約 70% 程度の破片である。器形は平底の底部から口縁部にかけて内弯しながら立ち上がり口縁部に至る。外面調整は



第84図 第6号ピット出土遺物 (1/3)

第3節 ピット

口縁部が横ナデ，体部がハケメの後ケズリとミガキ，底部がヘラケズリである。内面はミガキが施されている。II-1-G<sub>1</sub>-(adcb-b)類である。3は全体の約40%程度の破片である。器形は丸底の底部から口縁部にかけて内弯し，口縁端部がわずかに外反している。外面調整は口縁部が横ナデ，体部がハケメの後ケズリ，底部がケズリであり内面はミガキが施されている。I-1-C<sub>1</sub>-(da-b)類である。2・3とも胎土は密で焼成は良好である。

小形甕(4) 6号ピット内より出土した非ロクロの小形甕で全体の約20%程度の破片である。器形は体部下半より頸部にかけて内弯して立ち上がり，口縁部はゆるやかに外反し頸部には段が観察できる。調整は内・外面とも摩滅が著しく不明で※-3a-B<sub>1</sub>-(※-※)類である。胎土はやや密で焼成は良好である。

甕(5) 6号ピット内より出土した非ロクロの甕で，全体の約30%程度の底部から体部にかけての破片である。器形は底部から体部下半にかけて外傾気味に立ち上がり体部中位に至る。調整は外面ハケメ，内面ナデが施されている。底部外面には木葉痕が観察できる。Id-3※-※-(d-a)類である。胎土はやや密で焼成は良好である。

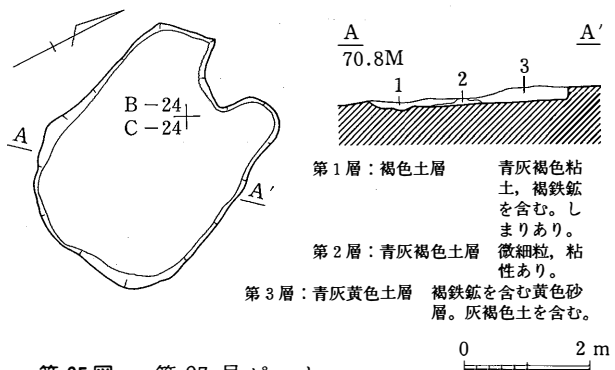
第47表 第6号ピット出土土器一覧表

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)				備 考		
							口径	頸部径	胴径	底径		高さ	高台径
84	1	50-2	土師器	杯		ℓ-1	17.3		26.5	18.1			
84	2	50-3	土師器	鉢		ℓ-1	16.9			6.5	4.7		
84	3	50-4	土師器	鉢		ℓ-1	20.0				6.6		
84	4		土師器	小形甕		ℓ-1	14.2				7.7		
84	5		土師器	甕		ℓ-1					7.6		

第27号ピット

(第85図, 第31図版)

Ⅱ区B-C-24・25グリッドにおいて3号遺構西壁を切る状態で検出された。上面形は不整形を呈し，長軸211cm，短軸160cmを測る。長軸方向はN-58°-Wを向く。検出面から底面までの深さは18cmを測り断面は皿状を呈する。堆積土はほ



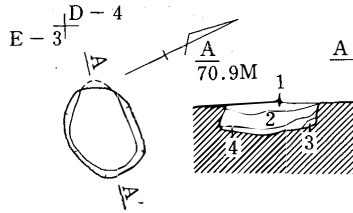


ば3層に大別される。全体的に赤褐色を呈する微細な粒子がほぼ水平な堆積状態を示している。ピット内の出土遺物は土師器の破片37片，須恵器の破片2片が出土している。

### 第29号ピット

(第86図，第31図版)

Ⅱ区F-5グリッドの25号住居跡北東端部付近に位する。検出面は地山上面である。平面形は楕円形を呈し，長軸75



- 第1層：黄褐色土層 粘土質。炭化物，焼土粒を含む。
- 第2層：灰褐色土層 粘土質。木炭・焼土粒を含む。
- 第3層：明灰褐色土層 砂を多量含み，サラサラしている。
- 第4層：暗灰褐色土層 粘土質，しめりあり。



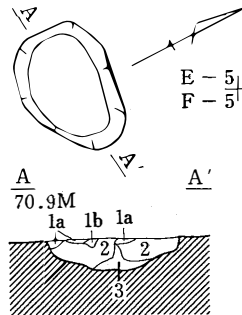
第86図 第29号ピット

cm，短軸55cmを測る。長軸の方向はN-96°-Wを向く。検出面から底部までの深さは26cmを測り西側壁面はオーバーハングし，東側壁面は直立気味に立ち上がる「U」字状を呈している。堆積土は4層に大別される。全体的に褐色を呈する粘土質で若干の焼土と木炭を含むレンズ状の堆積を示し，自然堆積と考えられる。ピット内の出土遺物は，土師器の破片が45片と須恵器の破片1片が出土している。

### 第31号ピット

(第87図，第31図)

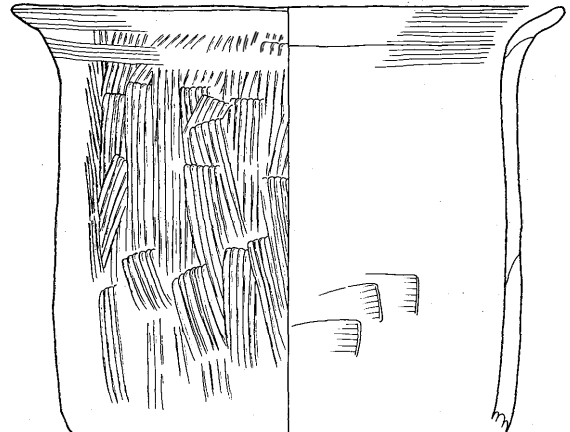
Ⅱ区E・F-5グリッドの27号住居址西側端部近くに位置する。検出面は地山上面である。平面形は楕円形で長軸105cm，短軸65cmを測る。長軸の方向はN-95°-Wを向く。検出面から底部までの深さは26cmを測り，底部は中央に向かって近くなる皿状を呈する。壁面は東西の壁ともゆるやかに外傾する。堆積土は3層に大別される。全体的に褐色を呈する粘土質からなり，比較的多くの焼土を含むブロック状の堆積をしている。ピット内の出土遺物は土師器の甕1点と土師器の破片15片，須恵器の破片2片が出土している。



- 第1a層：黄褐色土層 粘土質。砂を少量含む。
- 第1b層：暗黄褐色土層 粘土質。木炭粒を含む。
- 第2層：黒褐色土層 粘土質。木炭・焼土粒を含む。
- 第3層：明黒褐色土層 粘土質。木炭・焼土を含む。



第87図 第31号ピット

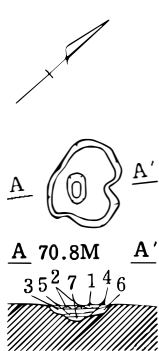


第88図 第31号ピット出土遺物 (1/2)

覆土出土の遺物(第88図)

土師器

甕 底面より出土した非ロクロの甕で全体の約10%程度の口縁部から体部にかけての破片である。器形は体部から頸部にかけて直線的に立ち上がり、口縁部は強く外反している。調整は体部外面に、ハケメ、ヨコナデ、体部内面は、ナデ、ヨコナデが施され※-5a-A<sub>1</sub>-(da-a)類である。胎土はやや密で焼成は良好である。



C-25<sup>B-26</sup>

第35号ピット

(第89図, 第31図版)

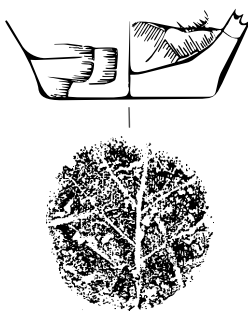
- 第1層：赤褐色土層 焼土層。灰黄褐色，酸化鉄が若干混入。
- 第2層：灰褐色土層 焼土若干，酸化鉄を微量含む。しまりあり。
- 第3層：茶褐色土層 茶褐色粘質土。焼土を若干，酸化鉄を含む。
- 第4層：赤灰色土層 朱色焼土混入。灰茶色土を含む。若干しまりあり。
- 第5層：暗赤褐色土層 暗赤色の焼土混入。灰黄色砂を含む。若干しまりあり。
- 第6層：暗灰赤色土層 木炭の層。多量の焼土を含む。
- 第7層：灰黒褐色土層 微細砂。若干酸化鉄を含む。

II区C-25グリッド

ドにおいて3号遺構東壁を切る状態で検出された。検出面は3号遺構覆土上面である。



第89図 第35号ピット



上面形は不整楕円形を呈し長軸69cm，短軸49cmを測る。長軸方向はN-70°-Wを向く。検出面から底部までの深さは15cmを測り，断面は開口部が広く壁はゆるやかに内弯し，丸味を持った底部に至る。堆積土は7層に大別される。全体的に焼土を含む褐色土がレンズ状に堆積している。ピット内の出土遺物は土師器の甕底部1点と土師器の破片が4片出土している。

覆土出土の遺物(第90図)

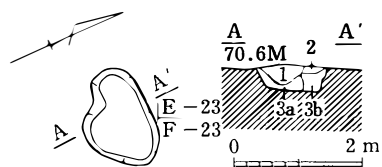
第90図 第35号ピット出土遺物(1/3) 土師器

甕 床面より出土した非ロクロの甕底部で全体の約10%程度の底部から体部にかけての破片である。器形は底部から体部にかけて外傾する。調整は内・外面にヘラナデが施され，底部外面には木葉痕が観察できる。Id-※-※-(a-a)類である。

第39号ピット(第91図, 第31図版)

II区EF-23グリッドの8号溝北東に位置する。検出面は地山上面である。平面形は不整楕円形を呈し長軸の方向はN-48°-Wを向く。検出面から底部までの深さは27cmを測る。断面は西側壁面がゆるやかに外傾し，東側壁面は直立気味に立ち上がる逆台形状を呈している。堆積土は

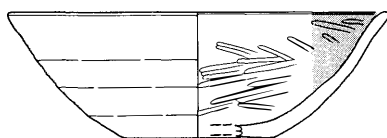
3層に大別される。全体的に灰褐色を呈する硬くしまった粘性のある土質で、ブロック状の堆積をしている。ピット内の出土遺物は3層上面より土師器の杯が出土している。



- 第1層：灰褐色土層 微細な灰褐色土。粘性若干あり。
- 第2層：茶褐色土層 白っぽい黄色砂。灰褐色土混入。
- 第3a層：暗灰褐色土層 粘性。べとべとしている。灰褐色土に灰が混入。
- 第3b層：暗灰茶褐色土層 粘性。べとべとしている。灰褐色土に灰が混入。

覆土出土の遺物(第92図)

**土師器**  
杯 覆土中層より出土したロクロ調整の杯で全体の約30%程度で破片で



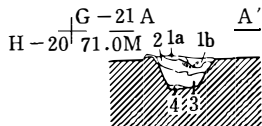
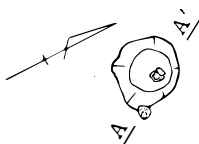
第92図 第39号ピット出土遺物(1/3) 第91図 第39号ピット

ある。器形は底部より口縁部にかけてややふくらみを持って開く形を呈す。底部の切り離しは不明で、調整は内面ミガキで黒色処理が施されており、5類である。

第47号ピット

(第93図, 第31図版)

Ⅱ区G-21グリッドで14号住居跡北東壁際を切る状態で検出された。上面形は長軸52cm, 短軸44cmを測り形状はほぼ円形状を



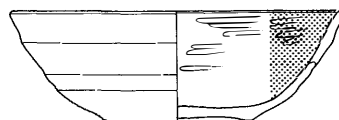
第93図 第47号ピット

- 第1a層：黒褐色土層 粘性なし。固くしまっている。炭を多量に含む。
- 第1b層：黒斑暗灰褐色土層 粘性なし。黄白色土を斑点状に含む。
- 第2層：黄斑暗灰褐色土層 粘性なし。固くしまっている。炭を少量含む。灰褐色土と黄白色土の混合層。
- 第3層：黄斑暗灰褐色土層 やや粘性あり。固くしまっている。黄白色土・淡黄色土を斑点状に含む。
- 第4層：暗黄褐色土層 粘性あり。しまっている。暗灰褐色土と淡黄色土の混合層。

呈す。長軸方向はN-39°-Wを向く。検出面から底部までの深さは27cmを測り、断面は東西の壁が外傾気味に立ち上がる逆台形状を呈している。堆積土は4層に大別される。全体的に褐色を呈する硬くしまった土質でレンズ状の堆積を示し、自然堆積と考えられる。ピット内の出土遺物は土師器の杯が1点出土している。

覆土出土の遺物(第94図,第50図版)

**土師器**  
杯 床面より出土したロクロ調整の杯で、全体の約50%程度の破片である。器形は底部より口縁部にかけてゆるやかに内弯する。底部の切り離しは回転糸切りによって行われ、再調整は施されていない。内面はミガ



第94図 第47号ピット出土遺物(1/3)

第3節 ピット

キで黒色処理が施されている5b類である。内・外面とも摩滅している。(佐藤 友之)

第48表 ピット形態表(1)

No	区	グリッド	形 状	計 測 値 (cm)			長軸方向	備 考
			上 面 形	上面長軸	上面短軸	深 さ		
1	I	B-30	円 形	50	44	6	N-17°-E	
2	II	I-12・13	不整楕円形	132	84	26	N-53°-W	
3	II	H・I-12	不整円形	92	85	27	N-17.5°-W	
4	II	H-14	不整楕円形	68	41	47	N-105.5°-W	
5	II	H-14・15	不整楕円形	85	50	51	N-155°-W	
6	II	H・I-13	不整楕円形	80	53	13	N-22.5°-W	
7	II	G・H-14・15	方 形	78	78	46	N-58°-E	
8	II	G・H-14・15						
9	II	G・H-13・14	不整楕円形	117	90	51	N-125°-W	
10	II	F・G-13	不整楕円形	93	63	42	N-102°-W	
11	II	H-13	隅丸方形	45	35	19	N-37°-W	
12	II	F-19	方 形	37	32	36	N-24°-W	
13	II	H-19	楕 円 形	58	42	38	N-44.5°-E	
14	II	H-19	不整楕円形	80	52	40	N-100°-W	
15	II	G-19・20	不整円形	90	74	42	N-43°-W	
16	II	I-20	不整円形	95	45	28	N-6°-E	
17	II	I-19	円 形	60	43	40	N-1°-E	
18	II	G-20	不整円形	86	68	27	N-104°-E	
19	II	E-19	長 方 形	119	38	31	N-68.5°-W	
20	II	G-21	円 形	50	48	49	N-62°-W	
21	II	H-20	楕 円 形	116	45	18	N-20.5°-W	
22	II	H-24	円 形	48	45	36	N-89.5°-W	
23	II	H・I-24	楕 円 形	70	41	45	N-63°-W	
24	II	H-24	不整楕円形	67	41	30	N-88°-W	
25	II	E・F-19	不整方形	173	125	30	N-102°-W	
26	II	E-19	不整楕円形	92	73	25	N-50°-W	

第48表 ピット形態表(2)

No	区	グリッド	形状	計測値 (cm)			長軸方向	備考
			上面形	上面長軸	上面短軸	深さ		
27	II	B・C-24・25	不整形	211	160	18	N-58°-W	土師 38 須恵 2
28	II	C-25	不整形	51	43	19	N-30°-W	土師 2
29	II	E-4	楕円形	75	55	26	N-96°-W	土師 45 須恵 1
30	II	D-5	円形	51	47	90	N-35°-W	
31	II	D・E-5	楕円形	105	65	26	N-95°-W	
32	II	E-4	方形	65	55	70	N-113°-W	
33	II	E-4	楕円形	68	52	16	N-95°-W	
34	II	E-5	方形	40	37	23	N-23°-W	
35	II	C-25	不整楕円形	69	49	15	N-71°-W	
36	II	F-22	方形	129	98	39	N-62°-W	
37	II	F-24	不整形	67	53	14	N-49°-W	
38	II	E・F-24	不整楕円形	77	60	15	N-48°-W	
39	II	E・F-23	不整楕円形	82	54	21	N-84°-W	
40	II	F-24	円形	23	21	50	N-169°-W	
41	II	G-22	不整形	80	55	27	N-103.5°-W	
42	II	G-22	円形	44	39	19	N-143°-W	
43	II	D・E-23・24	不整形	140	123	18	N-5.5°-W	
44	II	G-21	円形	62	54	50	N-23°-W	
45	II	H・I-20	不整楕円形	212	43	35	N-22°-W	
46	II	G-21・22	楕円形	78	66	28	N-101°-W	
47	II	G-21	円形	60	52	27	N-39°-W	
48	II	H-22	楕円形	77	61	30	N-28°-W	
49	II	F-19	円形	38	37	39	N-15°-W	
50	II	G-19	不整形	109	37	16	N-12°-W	
51	II	E-18	楕円形	90	48	34	N-77°-W	
52	II	C-25	円形	25	25	8	N-156°-W	
53	II	C-25	楕円形	29	20	5	N-14°-W	
54	II	D-25	円形	33	30	5	N-64°-W	

### 第3節 ピット

第48表 ピット形態表(3)

No	区	グリッド	形状	計測値 (cm)			長軸方向	備考
				上面長軸	上面短軸	深さ		
55	Ⅱ	D-19	円形	46	42	17	N-73°-W	
56	Ⅱ	C-11	円形	50	43	34	N-23°-W	
57	Ⅱ	C-25	楕円形	67	50	23	N-117°-W	
58	Ⅱ	F-16	長方形	87	66	33	N-15°-W	第78図 P <sub>11</sub> と同じ
59	Ⅱ	H-17	楕円形	72	54	33	N-11.5°-W	一本柱列 P <sub>14</sub> と同じ
60	Ⅱ	G・H-17	不整円形	55	46	30.5	N-97°-W	第78図 P <sub>15</sub> と同じ
61	Ⅱ	H-17	不整方形	96	84	28	N-56°-W	第78図 P <sub>16</sub> と同じ
62	Ⅱ	H・I-17	不整方形	62	60	30	N-10.5°-E	第78図 P <sub>17</sub> と同じ
63	Ⅱ	F-6	不整円形	124	84	25	N-45°-E	
64	Ⅱ	H-19	不整円形	75	86	28	N-40°-W	
65	Ⅱ	I-20	不整円形	172	83	25	N-17°-E	

### 第4節 溝跡

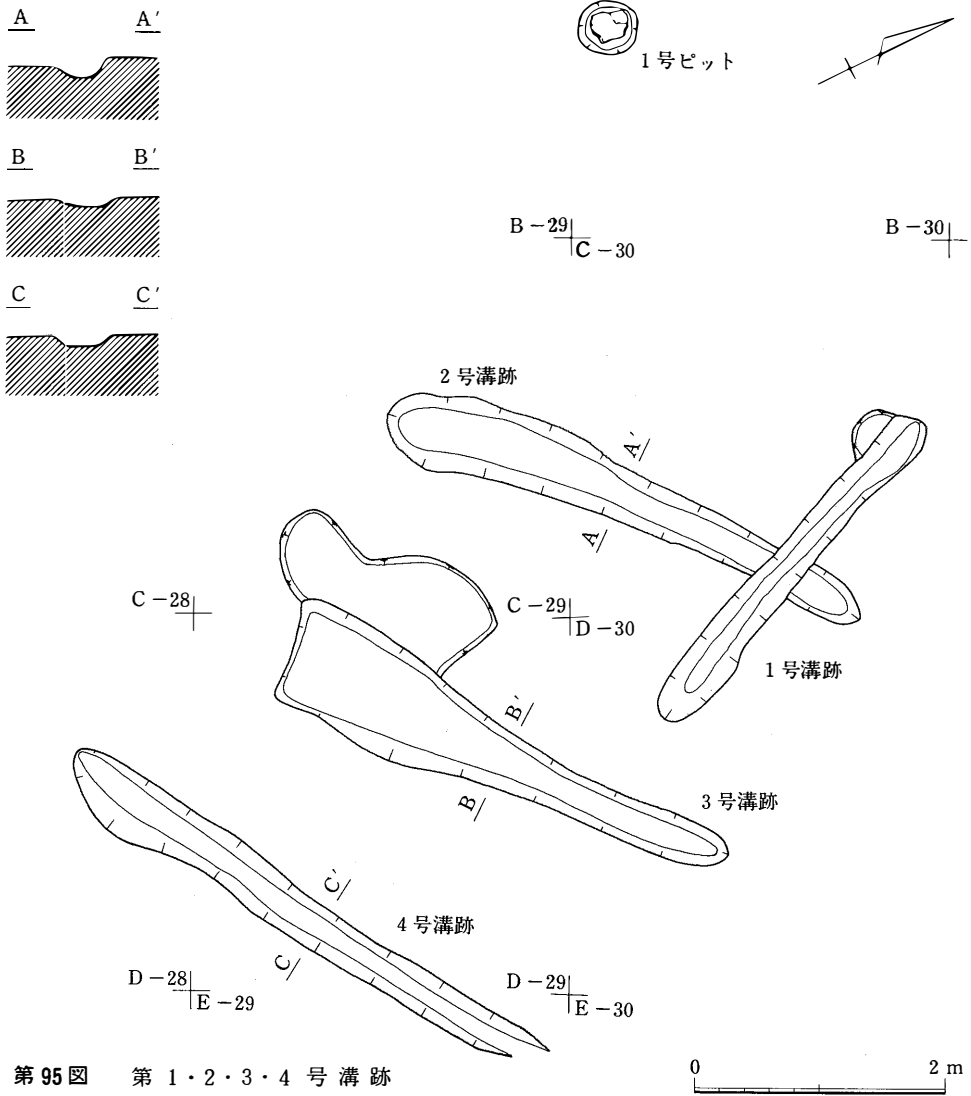
本遺跡において溝跡は、Ⅰ区で4条、Ⅱ区で11条、合計15条検出されている。しかしⅡ区で検出された11条の溝跡のうち6条は土層観察、及び出土遺物より近代以後のものと断定されるため遺構説明その他を省略することとした。したがって、本報告書において報告する溝跡はⅠ区第1～4号溝跡とⅡ区第5～9号溝跡の計9条である。

#### 第1号溝跡(第95図)

Ⅰ区C・D-30グリッドより検出された溝跡で、斜行するような形で2号溝跡を切っている。幅28～40cm、長さ3.0m、深さ15～22cmを測る。覆土は暗灰褐色粘土質土で、地山のシルト質土の粒子を含む。

#### 第2号溝跡(第95図)

Ⅰ区C-29・30グリッドより検出された溝跡で、1号溝跡に切られている。幅は30～60cm、長さ4.1m、深さ7～16cmを測る。覆土は黒褐色粘土質土で、炭化物粒・褐鉄鉱粒を含む。覆土中からは土師器杯の破片が1点出土している。

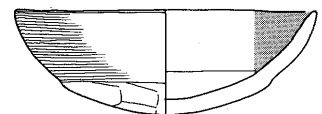


第95図 第1・2・3・4号溝跡

覆土出土の遺物(第96図)

土師器

杯 全体の約20%を残す丸底、内黒の杯である。内外両面に段を有し、口縁部が内弯する。内面はミガキが施されていたと考えられるが、荒れているため単位は不明である。外面の調整は底部がケズリ、口縁部がヨコナデのI-3c-A<sub>2</sub>-(ac-※)類に分類される。



第96図 第2号溝跡出土遺物(1/3)

第 3 号 溝 跡(第 95 図)

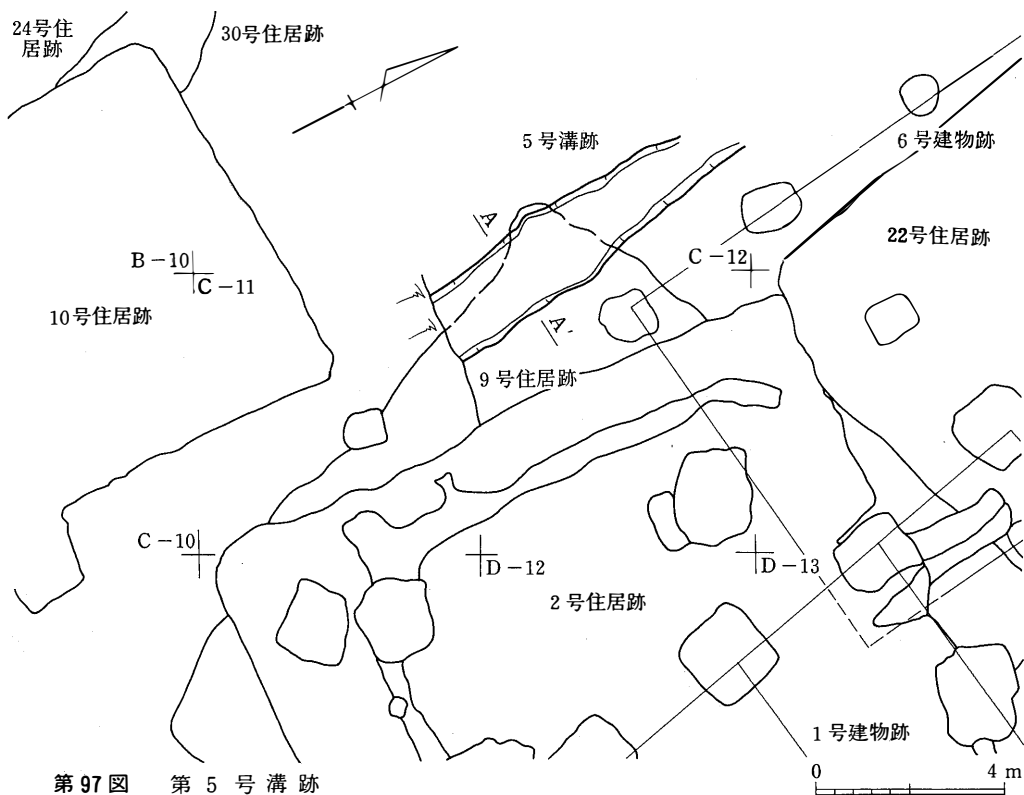
I 区 C-29・30, D-30 グリッドより検出された溝跡で, 2 号溝跡の東南 1.3~1.9 m に位置し, 2 号溝跡にほぼ平行するように走っている。幅 33~85 cm, 長さ 1.8 m, 深さ 5~9 cm を測る。覆土は 2 号溝跡と同じものである。

第 4 号 溝 跡(第 95 図)

I 区 D-28・29, E-29 グリッドより検出された溝跡で, 2 号溝跡の 3.3~4.0 m 東南を 2・3 号溝跡にほぼ平行するように走っている。溝の東端部は削平され不明であるが, 残った部分だけで幅 31~52 cm, 長さ 4.45 m, 深さ 7 cm を測る。覆土は 2 号溝跡と同じである。(木本 元治)

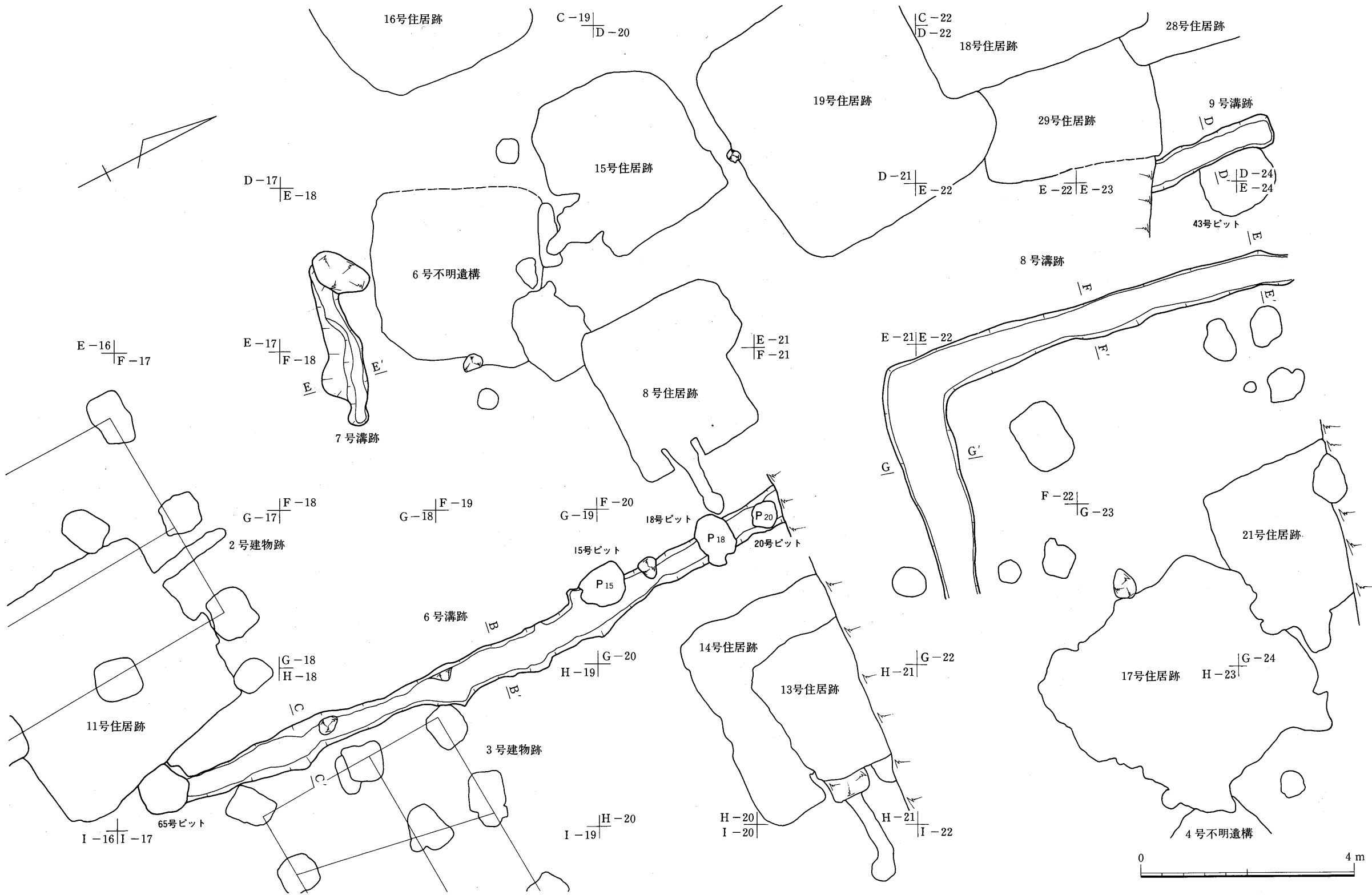
第 5 号 溝 跡(第 97・99 図, 第 32 図版)

II 区の B・C-11・12 グリッドより検出された南北に走る溝跡で, 遺構確認面は地山上面である。本溝跡は 9 号住居跡の北西コーナーの覆土を削平している。本溝跡の約 2 m 東側には 9 号住居跡を切る 2 号住居跡が検出されている。北側約 1 m には 22 号住居跡と 6 号建物跡が, 南側 1 m



第 97 図 第 5 号 溝 跡





第98図 第6・7・8・9号溝跡

には10号住居跡が検出されている。本溝跡の南端は耕作による削平のため不明である。本溝跡は残存長約4m、上端幅は60～90cm、下端幅は40～90cm、検出面からの深さは約18cmを測る。底面は平坦で、壁は直線的に外傾してたちあがる。断面形は角ばった皿形を呈する。本溝跡の方向はほぼN-7.5°-Wを向き、南端と北端における底面のレベル差はない。堆積土は3層に大別されるが、全体として暗褐色土を基調とし、木炭粒、黄色砂を含む。遺物は土師器の細片が6片検出されたのみである。

#### 第6号溝跡(第98・99図, 第32図版)

Ⅱ区のF～H-17～21グリッドにかけて検出された南北にはしる溝跡で、遺構確認面は地山上面である。本溝跡は11号住居跡、15・18・20・65号ピットに切られ、東壁が第3号建物跡にかすかに切られている。本溝跡の南端は11号住居跡及び65号ピットに切られているが、その延長から西へ約90度曲ると推定される。一方北端は削平のため不明である。溝の走る方向はN-1°-Eでほぼ真北をさす。残存長13.5m、上端幅34～108cm、下端幅24～84cm、検出面からの深さ20～32cmを測る。底面は平坦で、壁は外傾してたちあがり、断面形は角ばった「U」字状を呈する。堆積土は中央部で8層、南側で4層に別かれる。全体的に灰褐色土が基調で、ほとんどの土層に木炭細粒と黄色砂が含まれる。中央部の最下層は水平堆積を示すが、他は斜位に堆積しており、南側ではレンズ状堆積を示す。底面の両端にほとんど標高差がなく中央部が一番深くなっている。遺物はほとんど出土せず、土師器の細片が5点検出されたのみである。

#### 第7号溝跡(第98・99図, 第32図版)

Ⅱ区のE・F-17グリッドにおいて検出された東西に走る溝跡で、遺構検出面は地山上面である。第6号不明遺構の南側に近接しているが、他の遺構との重複はなくN-79°-Wを向く。溝跡の西端は攪乱を受けている。残存する長さは約3m、上端の幅は26～86cm、下端の幅16～22cm、検出面からの深さは約44cmを測る。底面は平坦で、壁は直線的に外傾してたちあがるが南側上端のみは広くひらいている。断面形は角ばった「U」字形を呈している。底面の東端と西端との高低の差はほとんど認められなかった。遺物はまったく検出されなかった。

#### 第8号溝跡(第98・99図, 第32・33図版)

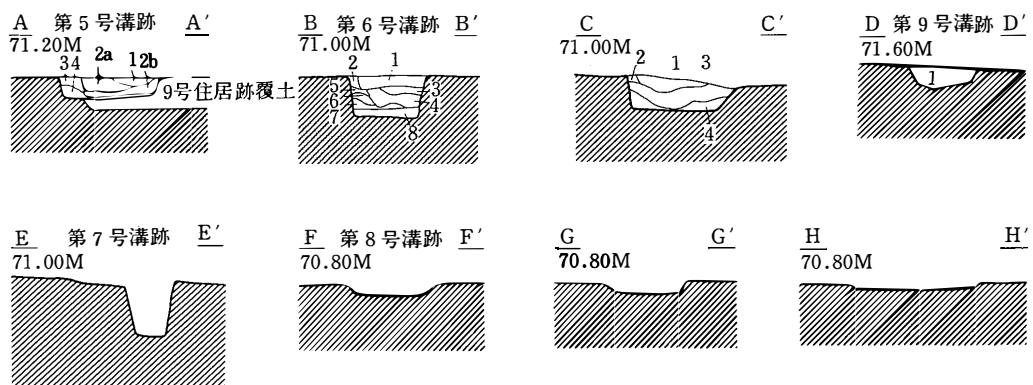
Ⅱ区E～G-21～24グリッドにかけて検出された溝跡で、遺構確認面は地山上面である。重複する遺構はないが、周辺にピットが多数検出された。本溝跡はG～F-22グリッドにかけては東西にはしるが、F-21グリッドで北へほぼ直角に曲って、11号溝と平行に南北にはしる。溝跡の規模は長さ11.4m、上端の幅58～103cm、下端の幅44～92cmを測る。検出面からの深さは

#### 第4節 溝 跡

2～10 cmと浅く上面がかなり削平されている。底面は平坦で壁はゆるやかにたちあがり、断面形は浅い皿状を呈する。底面レベルは東から西に向って低くなり、曲がって低くなっている。本遺跡で検出された9条の溝跡のなかでは最も多い26点の土師器片が検出されたが、いずれも細片であるため図示できなかった。

#### 第9号溝跡(第98・99図, 第32・33図版)

Ⅱ区D・E-23・24グリッドから検出された溝跡で、遺構確認面は地山上面である。43号ピットを切り、西側約10 cmに29号住居跡が近接している。南北にはしる溝跡だが、南側は削平されており不明である。残存する溝跡の長さは2.4 m, 上端幅は48～64 cm, 下端幅は20～44 cm, 検出面からの深さは18 cmである。本溝跡はN-45°-Eを向く。底面は内弯しており、壁はそのままたちあがっている。断面形は浅く、底面の広い「U」字形を呈する。底面は南から北へ低くなっているが、堆積土は単一層で、灰褐色を呈する。水の流れた痕跡は認められなかった。遺物はほとんど検出されなかったが、土師器の細片が9点出土している。(穴戸美智子)



#### 第5号溝跡 A-A'

- 第1層：暗黄褐色土層 黄色砂粒・木炭粒を含む。
- 第2a層：暗青褐色土層 青褐色粘質土・褐鉄鉱・木炭を含む。
- 第2b層：暗青褐色土層 黄色砂質土を含む。
- 第3層：暗黄褐色土層 黄色砂質土・木炭粒を含む。

#### 第6号溝跡 B-B'

- 第1層：灰褐色土層 黄色土・木炭粒を多く含み、褐鉄鉱を少量含む。
- 第2層：茶褐色土層 黄色土・褐鉄鉱、木炭粒を含む。
- 第3層：灰黄色土層 灰白色土をブロック状に含む。
- 第4層：灰褐色土層 灰白色土・木炭粒を少量含む。
- 第5層：灰白色土層 少量の灰褐色土・木炭粒を含む。
- 第6層：灰褐色土層 微量の灰白色土・木炭粒を含む。

#### 第7層：黄白色土層

- 第8層：灰褐色土層 灰褐色土・木炭粒を含む。
- 茶色砂と灰白色シルトの混合層。
- 黑色粘質土、黄色土を含む。

#### C-C'

- 第1層：灰褐色土層 黄色土・木炭粒を多量に含む。
- 第2層：褐色土層 木炭細粒・茶色砂を含む。
- 第3層：茶褐色土層 木炭粒・黄色砂・黄白色のシルトを含む。
- 第4層：灰黄色土層 シルトと砂の混合層、木炭を含む。

#### 第9号溝跡 D-D'

- 第1層：暗灰褐色土層 微細粒子で粘性・しまりあり。黄色砂・木炭粒・酸化鉄を含む。



第99図 第5・6・7・8・9号溝跡セクション

## 第5節 井戸跡

### 検出状況(第100図, 第34～36図版)

Ⅱ区の北東端にあたる湿地帯の南縁辺の傾斜面に井戸が1基検出された。この湿地南縁から10mほど離れて性格不明の3号遺構があり、その付近には多くの住居跡が存在する。井戸周辺の湿地は多量の遺物を包含しており、青い粘土層のL-VIIからは、土師器片・木片・木の実などが多く検出された。このL-VIIのレベルで、板材を組み合わせた井戸枠があらわれた。井戸枠を組み合わせるためには、当然大きな掘り方があるはずであるが、検出に努めたにもかかわらず確認できなかった。

井戸は4枚の板材を井桁状に組み合わせてある形をとるが、きちんとした形ではない。井戸枠の内外面には木杭を打ち込んで側板をとめてある。木杭の頭は井戸枠レベルとほぼ同じか、やや低いのが多いが、北辺外側の杭頭は井戸枠板上縁よりもいずれも高くなっている。この点を考慮すると、L-VIIから検出される井戸跡はL-VIあるいはL-Vから始まる可能性もあるが、掘り方も不明である点とあわせて一応L-VIIと考えたい。ただ湿地の中には井戸枠板と同形状の板材もあるので、可能性として現在の上にも井戸枠はあったと見ることも否定できない。

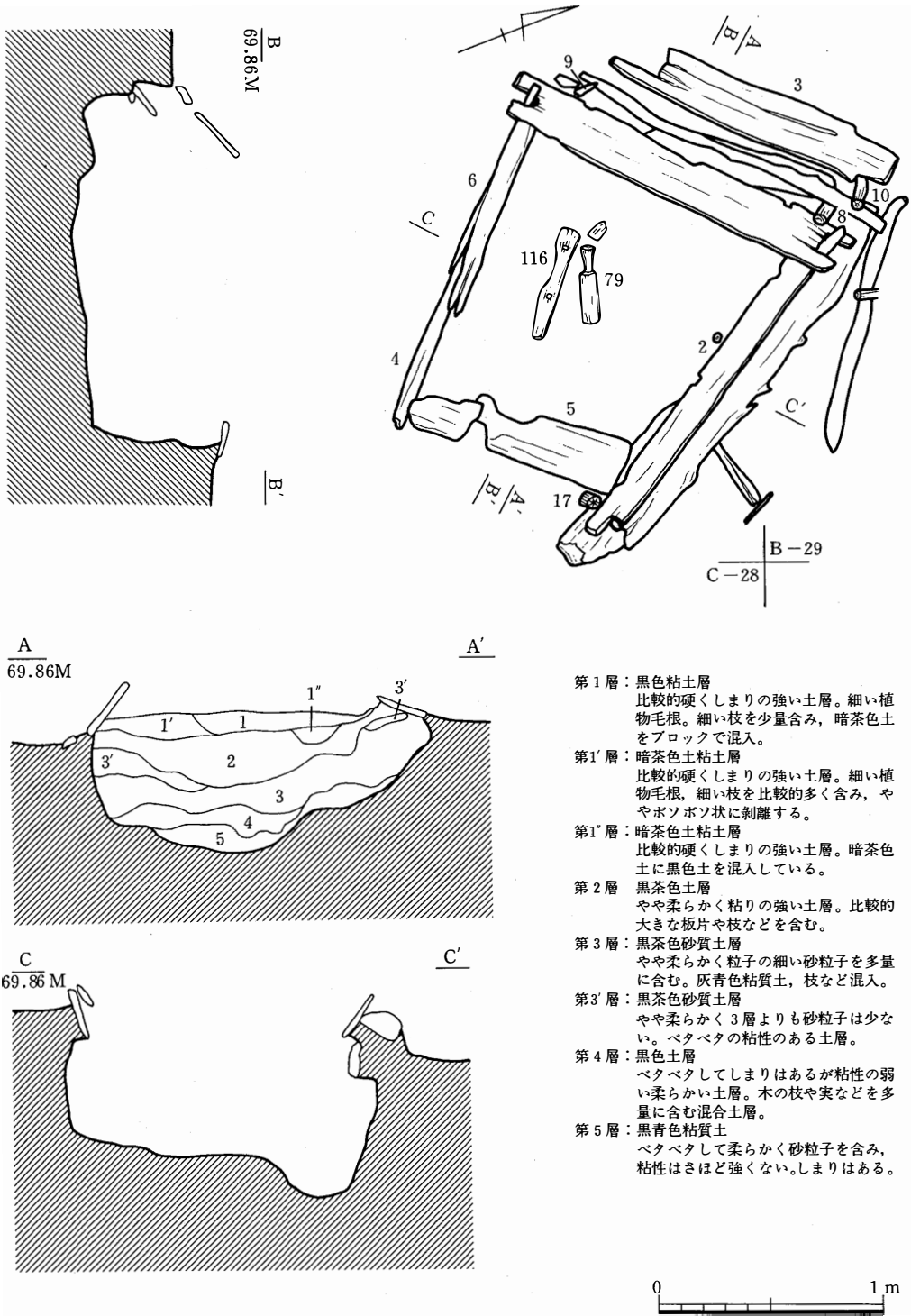
井戸内からは各種の遺物が検出された。モモ・ドングリ・クルミ・トチノミのような木の実等は第1層から第3層にかけて多く含まれていた。井戸内の層位は5層にわけられるので、上半部の層に多いということが言える。土師器はすべて破片であるが、第1層から第3層まで各層にわたり200片以上の出土をみた。とくに第2層から第3層が多く、全体の¾を占める。器形としては、杯が圧倒的に多く次いで甕があり、甌片も1点ながら第4層より出土している。須恵器は第2層から1片、第3層から5片出土したがすべて小片である。他に下駄・櫛・ヨコヅチ・建築材等も出土しているが、すべて第3層からの検出であった。出土した木製品については第3章・第7節で述べる。井戸の深さは70～90cmで、底面には井戸掘り込み前の木根が横たわっていた。

### 井戸枠板(第101図1～4, 第102図5～7, 第53図版, 第49表)

井桁状の井戸枠の長さは、北辺176cm・西辺170cm・南辺167cm・東辺100cmを測る。内法は北辺155cm・西辺145cm・南辺145cm・東辺100cmほどであって、東辺のみが狭くなっている。

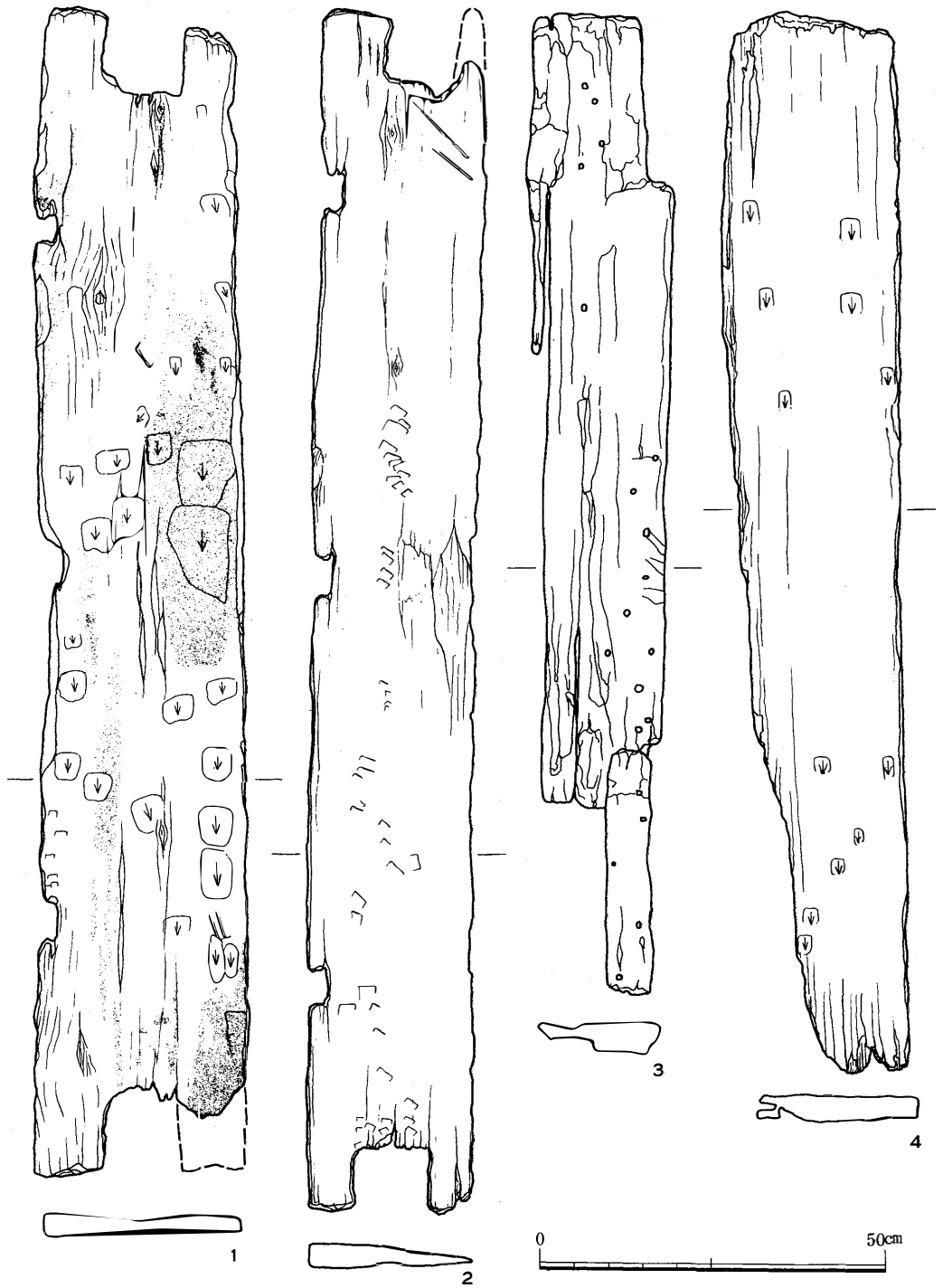
枠板は第101図1・2で明らかなように幅30cm・厚さ4cm・長さ170cm程度の板材が一番多い。板の両端はいずれも中央部を約10cm四方削りとして、2本の突起部が残るようになっている。西と北の角端はこの同じ形の板材を井桁状に組み合わせてある。西南角端も同じような組

第5節 井戸跡



- 第1層：黒色粘土層  
比較的硬くしまりの強い土層。細い植物毛根。細い枝を少量含み、暗茶色土をブロックで混入。
- 第1'層：暗茶色土粘土層  
比較的硬くしまりの強い土層。細い植物毛根、細い枝を比較的多く含み、ややボソボソ状に剝離する。
- 第1''層：暗茶色土粘土層  
比較的硬くしまりの強い土層。暗茶色土に黒色土を混入している。
- 第2層 黒茶色土層  
やや柔らかく粘りの強い土層。比較的大きな板片や枝などを含む。
- 第3層：黒茶色砂質土層  
やや柔らかく粒子の細い砂粒子を多量に含む。灰青色粘質土、枝など混入。
- 第3'層：黒茶色砂質土層  
やや柔らかく3層よりも砂粒子は少ない。ベタベタの粘性のある土層。
- 第4層：黒色土層  
ベタベタしてしまりはあるが粘性の弱い柔らかい土層。木の枝や実などを多量に含む混合土層。
- 第5層：黒青色粘質土  
ベタベタして柔らかく砂粒子を含み、粘性はさほど強くない。しまりはある。

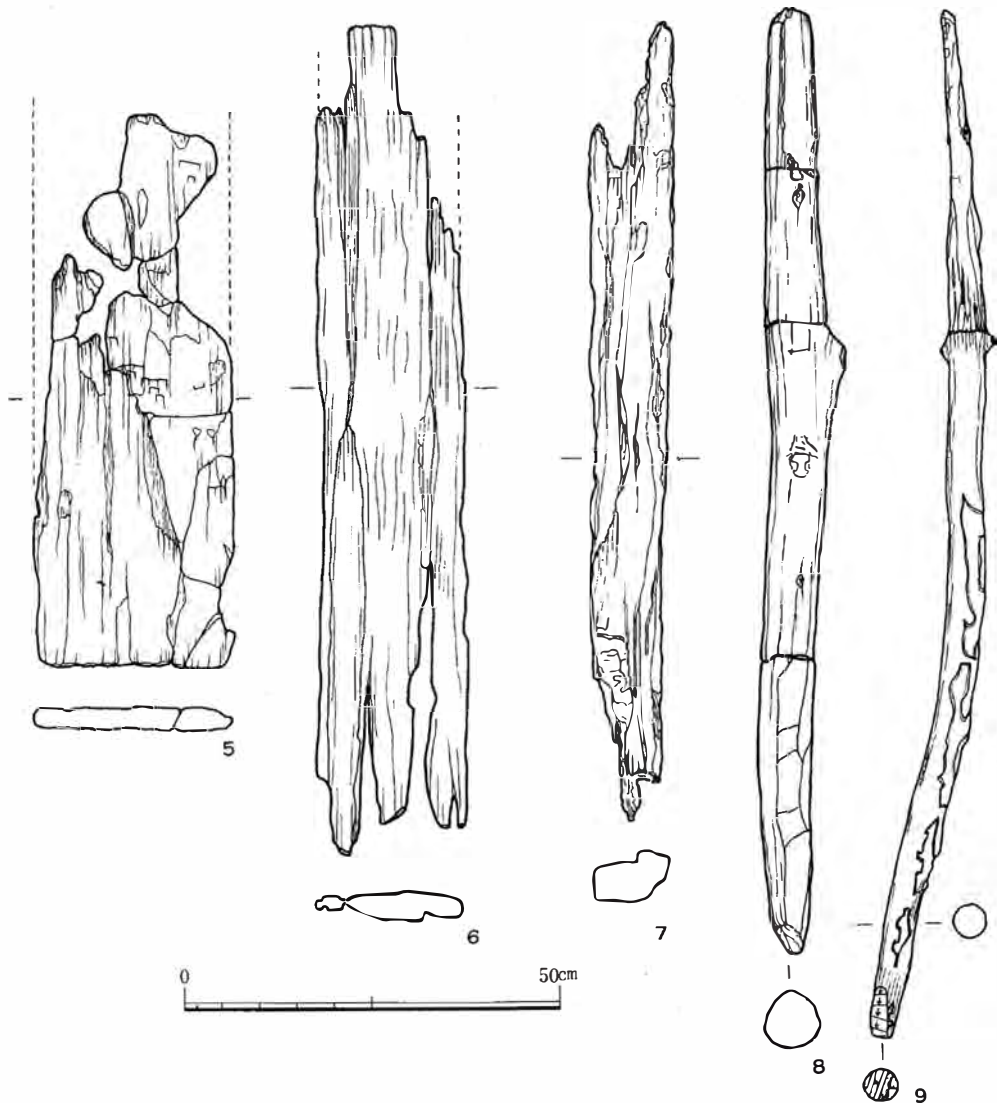
第100図 井戸跡



第101図 井戸梓板

## 第5節 井戸跡

み合わせではあるが、南端の板材第102図6は、1と異なり中央部のみが突出している形で、これを組み合わせてある。東側の板材5はこのような組み合わせでなく、単にくっつけてあるだけである。第101図1や2の板の一边には、間隔をおいて3ヶ所に幅6cm・深さ3cmほどの台形の切り込みがみられる。このような切り込みは、湿地出土の板材にもしばしばみられる。このようないくつかの加工は井戸枠としては不必要なものである。第102図5にも台形状の大きな切り込みがある。これらも井戸枠材としては不必要な加工である。このような点を考慮すると、井戸枠板は第1次の使用ではなく、何らかの部材の転用材を利用したものと思われる。南側の板を2枚



第102図 井戸枠板・杭



第103図 井戸梓板・杭



第 5 節 井 戸 跡

第 49 表 井戸枳板・杭(1)

図	番号	写 真	遺物 番号	名 称 遺 存 度 (%)	位 置	層位	樹 種	木取法	手 法	法 量 (cm)	特 徴
101	1	53	356	井戸枳板	Ⅱ 区 井戸跡 西 端 部		ク リ?	板 目	板 物	長さ 170.0 幅 30.0 厚さ 3.6	両端は中央部に凹 柄。一方の長縁3 ヶ所には間隔をお いて切込みあり
101	2	53	355	井戸枳板	Ⅱ 区 井戸跡 北 端 部		ク リ	板 目	板 物	長さ 175.8 幅 23.4 厚さ 3.2	同上
101	3	53	370	井戸枳板	Ⅱ 区 井戸跡 西上端部		マ ツ	板 目	板 物	長さ 146.0 幅 17.4 厚さ 4.0	釘穴あり
101	4	53	365	井戸枳板	Ⅱ 区 井戸跡 南 部		ク リ	板 目	板 物	長さ 156.0 幅 23.0 厚さ 3.5	遺物番号366と接 合
102	5	53	100	井戸枳板	Ⅱ 区 井戸跡 東上端部		ケ ヤ キ	板 目	板 物	長さ 100.0 幅 34.0 厚さ 4.2	遺物番号101~104 と接合
102	6	53	369	井戸枳板	Ⅱ 区 井戸跡 西上端部		ス ギ	板 目	板 物	長さ 110.0 幅 19.6 厚さ 3.6	
102	7	53	352	井戸枳板	Ⅱ 区 井戸跡 西 部		ク リ	板 目	板 物	長さ 104.8 幅 9.6 厚さ 5.0	
102	8	54	389	井戸杭	Ⅱ 区 井戸跡		マ ツ	芯 持	丸 物	長さ 125.8 径 7.2	
102	9	54	373	井戸杭	Ⅱ 区 井戸跡		モ ミ?	芯 持	丸 物	長さ 133.4 径 4.2	
103	10	54	357	井戸杭	Ⅱ 区 井戸跡 端 部		マ ツ	芯 持	丸 物	長さ 94.0 径 4.1	
103	11	54	353	井戸杭	Ⅱ 区 井戸跡		モ ミ	芯 持	丸 物	長さ 91.8 径 3.2	
103	12	54	403	井戸杭	Ⅱ 区 井戸跡		マ ツ	芯 持	丸 物	長さ 88.8 径 4.4	
103	13	54	420	井戸杭	Ⅱ 区 井戸跡		サクラ類	芯 持	丸 物	長さ 92.7 径 2.8	
103	14	54	406	井戸杭	Ⅱ 区 井戸跡		カ ヤ	芯 持	丸 物	長さ 68.8 径 3.1	
103	15	54	405	井戸杭	Ⅱ 区 井戸跡		カ ヤ	芯 持	丸 物	長さ 80.0 径 4.0	
103	16	54	364	井戸杭	Ⅱ 区 井戸跡		ク リ	芯 持	丸 物	長さ 91.8 径 3.2	

第49表 井戸枿・杭(2)

図	番号	写真	遺物 番号	名称 遺存度(%)	位置	層位	樹種	木取法	手法	法量 (cm)	特徴
103	17		408	井戸杭	Ⅱ区 井戸跡		シデ類	芯持	丸物	長さ(112.4) 径 6.6	
			359	井戸枿板	Ⅱ区 井戸跡 北部		トネリコ類	板目	板物	長さ(135.0) 幅 (22.5) 厚さ(12.6)	厚い板材
			378	井戸枿板	Ⅱ区 井戸跡		アオダモ?	板目	板物	長さ 68.8 幅 23.6 厚さ 7.4	
			390	井戸枿板	Ⅱ区 井戸枿		ケヤキ	板目	板物	長さ 120.4 幅 36.4 厚さ 8.0	
			394	井戸杭 (井戸跡丸太)	Ⅱ区 井戸跡		クリ	芯持	丸物	長さ 190 径 15.7	片端部は工具による 切断痕 樹皮が残る

ダブらせていることや、北側の半截丸太材を後からあててある点などをみても、このような想定は妥当である。

板の材質も一定せず、クリ・マツ・ケヤキ・スギ・トネリコ類等種類は多い。

#### 井戸枿杭(第102図8・9, 第103図10～17, 第54図版10～18, 第49表)

井戸枿を補強する目的と思われる木の丸杭は、主として井戸枿の四つ角の組み合わせ部に打ち込んであり、現存するものは10本であるが、当初は他にもまだあったと思われる。杭は径7cm前後の丸杭で、現存する長さは120～170cm程度で、先端を尖らせてある。杭の材質はマツが多いが、他にシデ・クリ・カヤ・モミなどがある。

#### 土器(第104図1～5, 第53図版3・4, 第50表)

井戸内より出土した土器はすべて破片で、土師器杯180片、土師器甕29片、須恵器杯6片を数える。そのうち図示し得るような土器は、土師器杯4点・須恵器杯1点を数えるにすぎない。

#### 土師器

杯(1～4) 完形に復元できたのは2個である。第104図1・2とも井戸内第3層より出土している。3・4は井戸西北隅よりの出土であるが、層位は明らかでない。

1は遺存度30%の内黒杯で、底部から口縁部にいたる部分が残っている。ロクロ調整で底部切り離しは回転系切り技法による。外面再調整はなく内面は横位にミガキを加えている。胎土・焼成とも良好である。

2は遺存度20%で口縁から体部にかけての破片で底部を欠いている。外面はロクロ調整で内面

第5節 井戸跡

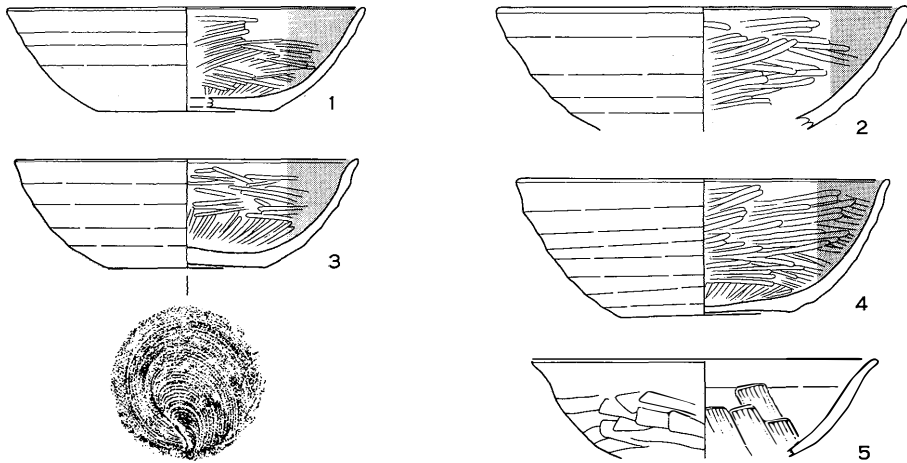
はミガキを横位に施した内黒杯片である。外面暗茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。やや厚みのある杯で、特に口縁部に厚みがある。

3は遺存度60%の内黒杯で、ロクロ調整で底部切り離しは回転糸切りである。外面にはロクロ痕を残し内面は上部が横位・下部が斜位のミガキ痕が残る。外面暗灰茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

4は遺存度70%で口縁から底部まで比較的良く残っている。ロクロ調整で調整痕が明瞭に外面に残る。底部は回転糸切り技法によって切り離してある。内面は横位にミガキを加えてあるが、底面は放射状ミガキがみられる。内黒で外面は暗茶褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。

須恵器

杯(5) 底部を欠き、口縁から体部にかけて20%の遺存率を示す須恵器杯片である。粘土紐の巻き上げにより成形し、口縁部は外反し内外面にヨコナデを施す。体部中央はやや厚みを増し、外面は横のケズリを、内面には斜めにナデを施している。内外とも淡橙褐色を呈し、胎土・焼成とも良好である。井戸内第3層よりの出土である。 (渡邊 一雄)



第104図 井戸跡出土土器 (1/3)

第50表 井戸跡出土土器一覽表

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
104	1		土師器	杯	Ⅱ区井戸跡	Ⅱ-3	14.0			7.0	4.1			
104	2		土師器	杯	Ⅱ区井戸跡	Ⅱ-3	15.9							
104	3	53-4	土師器	杯	Ⅱ区井戸跡西北隅		13.5			6.2	4.3			
104	4	53-3	土師器	杯	Ⅱ区井戸跡西北隅		14.5			6.8	5.4			
104	5		須恵器	杯	Ⅱ区井戸跡	Ⅱ-3	13.5							

## 第6節 不明遺構

### 第1号不明遺構(第105図, 第37図版)

Ⅱ区のF・G-11・12グリッドより検出された大形のピット状遺構である。掘り込み面は地山の上面である。

プランはやや歪んだ隅丸方形を呈し、壁中央間で東西2.6m, 南北2.6mを測る。方向はA-A'ではほぼ真北を通る。

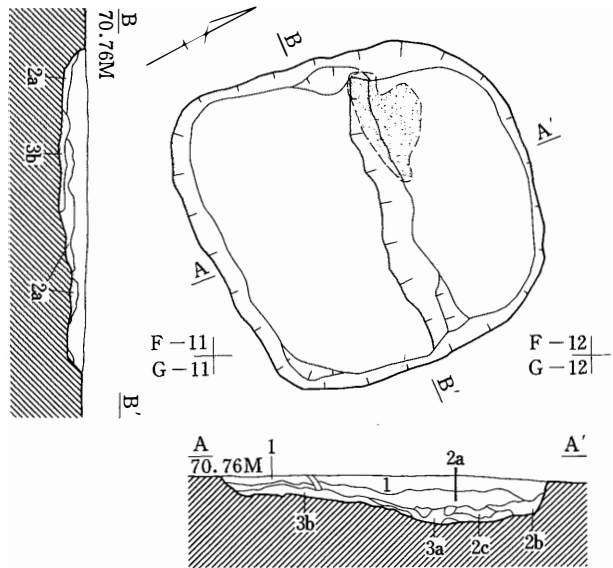
覆土は一番深い部分で22cmあり、暗茶褐色～茶色シルト質の第1～3b層が堆積しており、第2a・3a・3b層には木炭粒を含んでいる。

壁は南側の残り部分で15cm, 床よりの立ち上り角140°, 北側の深い部分で28cm, 105°を測る。この壁は地山を掘り込んだままのものである。床は中央に段があり、北半分が深くなっている。この段の西側から中央の段に向かってやや深くなっている。段の西半分にかかる部分では、床面に木炭が敷詰められたように分布している。また、覆土中より土師器の内黒の杯の破片, および体部にハケメ, 底面に木葉痕のある甕の破片が出土しているが、復元・実測はできなかった。

### 覆土出土の遺物(第106図)

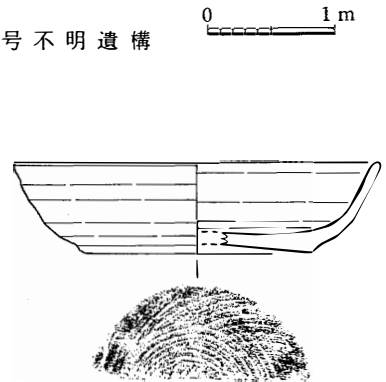
#### 須恵器

杯 底部が大きく, 体部にやや丸味の見られる平底の杯で, 底面回転糸切り痕の5b類である。



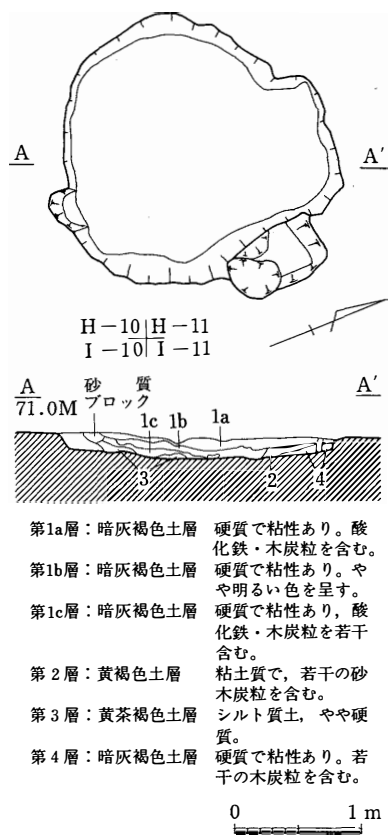
- |             |                       |
|-------------|-----------------------|
| 第1層：暗茶褐色土層  | シルト質土, 砂質でやや紫色がかかる。   |
| 第2a層：暗茶褐色土層 | シルト質土, 砂分多く木炭粒子を含む。   |
| 第2b層：暗茶褐色土層 | シルト質土, 2a層より砂多くやや明るい。 |
| 第2c層：暗茶褐色土層 | シルト質土, 白色粒子, 酸化鉄粒を含む。 |
| 第3a層：茶色土層   | シルト質土, 砂質で若干の木炭粒を含む。  |
| 第3b層：茶色土層   | シルト質土, 砂質で木炭粒を多く含む。   |

第105図 第1号不明遺構



第106図 第1号不明遺構出土遺物(1/2)

第2号不明遺構(第107図)



H-10 | H-11  
I-10 | I-11

A 砂質ブロック lc lb la A'

71.0M

第1a層：暗灰褐色土層 硬質で粘性あり。酸化鉄・木炭粒を含む。  
 第1b層：暗灰褐色土層 硬質で粘性あり。やや明るい色を呈す。  
 第1c層：暗灰褐色土層 硬質で粘性あり。酸化鉄・木炭粒を若干含む。  
 第2層：黄褐色土層 粘土質で、若干の砂木炭粒を含む。  
 第3層：黄茶褐色土層 シルト質土、やや硬質。  
 第4層：暗灰褐色土層 硬質で粘性あり。若干の木炭粒を含む。

0 1 m

Ⅱ区のH-10・11グリッドより検出した堅穴状の遺構である。プランは東西1.95m、南北2.2mの不整形を呈している。深さは中央部で18cmを測る。覆土は木炭粒を含み、粘性のある第1a～4層が自然堆積と考えられる状態で堆積している。壁は北壁で深さ12cm、120°で立ち上り、南壁では深さ7cmでほぼ直角に立ち上っている。床は壁面下より中央に向かって皿状に浅く窪んでいる。

覆土出土の遺物(第108・109図,第50図版7・9,第51表)

土師器

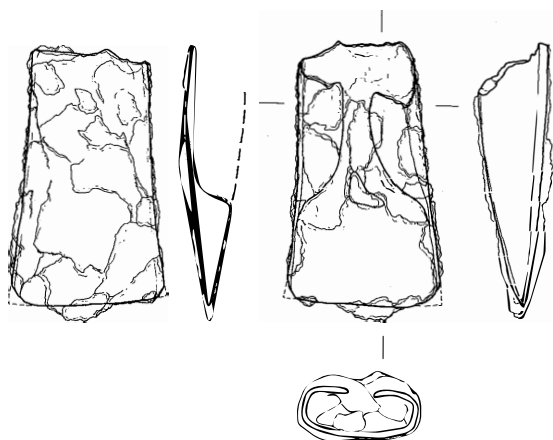
杯(1) 第1a層出土の非ロクロ、内黒の丸底杯で内外面ともに段は無い。外面はケズリ、内面はミガキが施されたIa-4-C1-(c-b)類である。

須恵器

高台付杯(2) 第1a層出土のもので、ほぼ直線的に開く体部を有している。底面は平底で回転ヘラケズリが加えられ、底部に「ハ」形に開く低い高台が貼り付けられている。

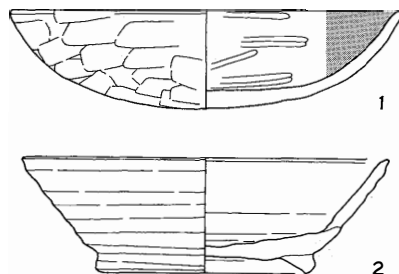
鉄製品

第107図 第2号不明遺構 鉄 斧 第1a層出土の短冊形、袋状のもので、袋部裏



第108図 第2号不明遺構出土遺物 (1/3)

面には合せ目が見られる。刃部と袋部の一部が欠損し、現存長さ11.1cm、刃部幅6.1cm、袋部幅4.9cm、厚さ2.85cmを測る。(木本 元治)



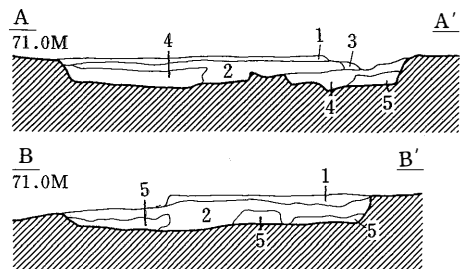
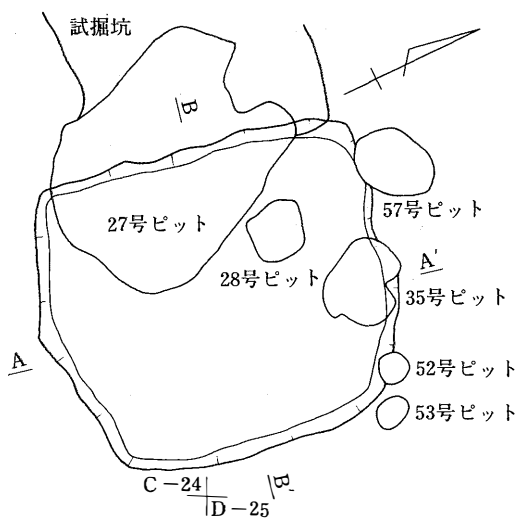
第109図 第2号不明遺構出土遺物 (1/3)

第51表 第2号不明遺構出土土器一覧表

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
109	1		土師器	杯		ℓ-1	15.5				3.9			
109	2		須恵器	高台付杯		ℓ-1	14.3				4.6	8.7	0.8	

第3号不明遺構(第110図, 第38図版)

Ⅱ区のC-24・25グリッドより検出された性格不明の遺構で、27・28・35・52・51号ピットに切られている。このうち27・28・35号ピットは浅く、本遺構の底面までは達していない。南側約2mに28号住居跡が近接している。遺構確認面は地山上面である。プランは隅丸正方形を呈し、東西は約2.5m、南北は約2.8m、検出面からの深さは約30cmを測る。南・北壁の midpoint を結んだ軸線方向はN-12°-Eを向く。覆土は5層に大別され、灰褐色土が基調をなしており、全体に少量の木炭粒・黄色砂を含む。堆積状態は上層では自然なレンズ状堆積を呈するが、下層ではブロック状堆積を呈しており、人為堆積の可能性が考えられる。壁は東壁が内弯しているが、他の三壁は直線的に外傾してたちあがり、底面から法面角度は約130°である。底面は軟かく、凸凹が激しい。出土遺物については覆土より土師器が10数点検出されたが、図示できたのは1点のみであった。また本遺構に伴う遺物は検出されなかった。

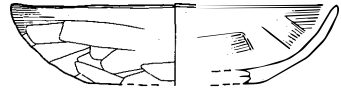


- 第1層：灰茶褐色土層 茶褐色土と灰褐色粘質土の混合層。褐鉄鉱，炭粒，黄色砂を若干混入する。
- 第2層：灰褐色土層 黄色砂を斑点状に混入。炭粒，褐鉄鉱白色粒子をわずかに含む。
- 第3層：暗灰褐色土層 炭・焼土粒を含み，黒褐色土，黄色砂，褐鉄鉱をわずかに含む。
- 第4層：灰褐色土層 黄色砂を混入し，炭粒，褐鉄鉱を混入する。
- 第5層：黄白色土層 微細粒子。灰褐色土を若干混入する。

0 2 m

第110図 第3号不明遺構

覆土出土の遺物(第111図,第50図版8)



土師器

杯 第2層より出土した,全体の約30%を残す非ロクロの杯の破片である。底部はほとんど残っていないが,明

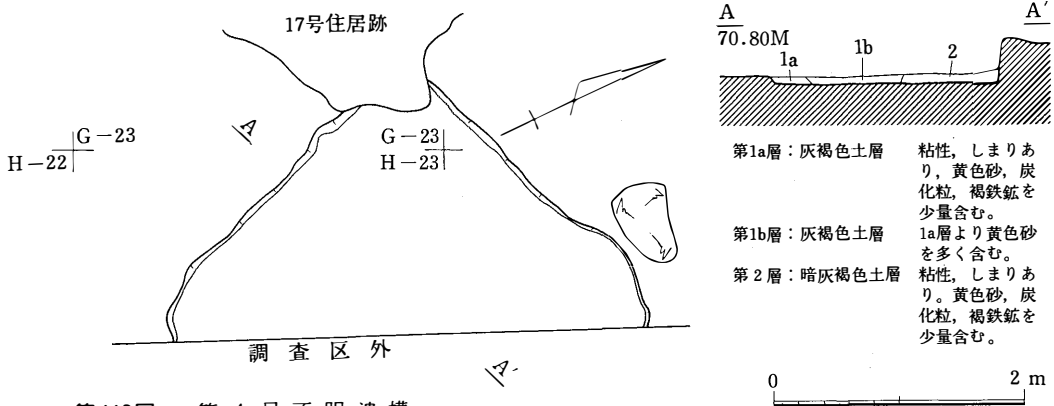
第111図 第3号不明遺構  
出土遺物 (1/3)

確な体部との境をもつことから,平底を呈するものと推定される。体部は外傾気味にたち上りそのまま口縁端部に至る。内外面ともに段はもたず外面にはヘラケズリ,内面にはヘラナデによる調整が施されている。色調は赤味があった黄茶褐色を呈し,胎土には細かい砂粒子が含まれる。Ⅲb-4-F<sub>1</sub>-(ac-a)類に分類される。

第4号不明遺構(第112図,第38図版)

Ⅱ区のⅠ-23・24グリッドから検出された性格不明遺構である。北西コーナー付近を17号住居跡に切られている。東側が調査区外へ延びているため全形は不明であるが残された北・西壁より一辺が約3m弱の隅丸正方形のプランを呈すると推定される。残存する西壁はN-17.5°-Wを向き,南・北壁の中点を結ぶ軸線方向とほとんど差はないと推定される。覆土は灰褐色土を基調とし,全体に少量の黄色砂と褐鉄鉱が含まれる。堆積状態については覆土が非常に浅いため不明である。壁高は検出面から約10cmを測り,壁はゆるやかにたちあがっている。底面はほぼ平坦である。本遺構に伴うピットその他は検出されなかった。出土遺物は覆土中より土師器の細片が2点検出されたが,図示できなかった。

(穴戸美智子)

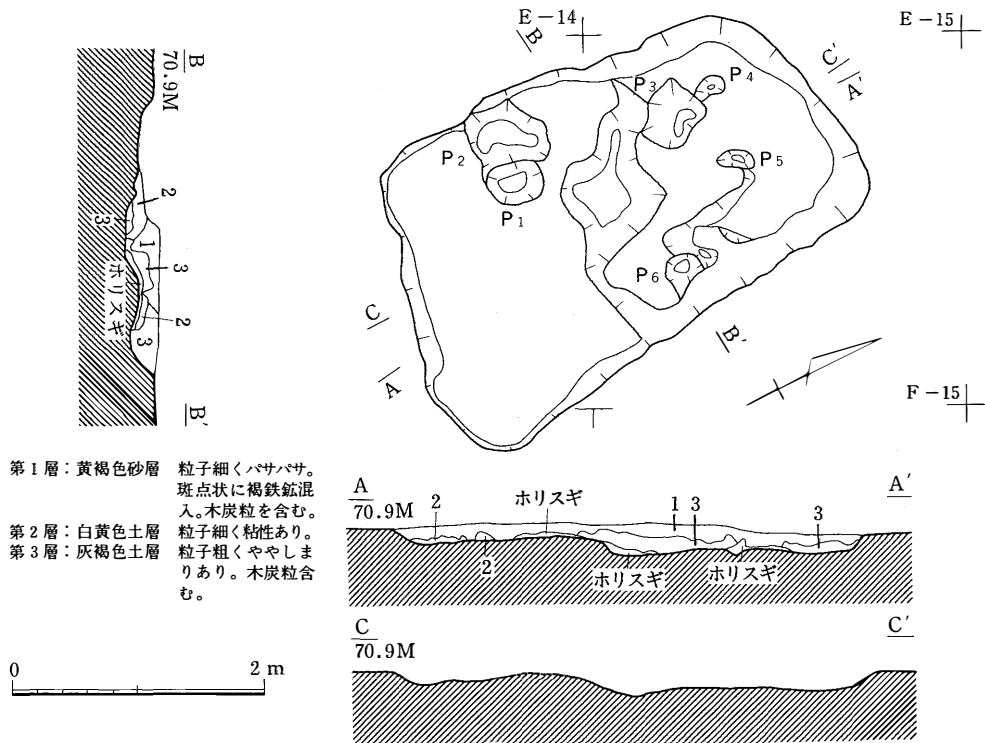


第112図 第4号不明遺構

第5号不明遺構(第113図,第39図版,第52表)

Ⅱ区のほぼ真中E・G-14~15グリッドに検出された遺構で,西边上層は後世の溝より幅約1.1

mに削平されている。東約3.8mに11号住居跡と2号建物跡，西約4.5mに2・7・9・22号住居跡と1号建物跡が位置する。遺構検出面は地山上面である。プランは南北3.65m，東西2.3mの大きさを測り，北辺の短い台形状で，南北壁中央を通る軸線方向はN-4°-Wを向く。覆土は3層から成り，レンズ状の自然堆積である。上層は黄褐色砂質で，褐鉄鉱，木炭粒子を含み，下層が粒子の粗い灰褐色で，所々に粘質の白黄色土が見られる。



第113図 第5号不明遺構

第52表 第5号不明遺構ピット形態表

No	形状	計測値 (単位 cm)			柱痕 (単位 cm)		備考
		上面径	下面径	深さ	径	深さ	
P <sub>1</sub>	不整円形	45	23	10			
P <sub>2</sub>	不整形	70	48	8			
P <sub>3</sub>	不整方形	56	24	5			
P <sub>4</sub>	不整楕円形	25	4	5			
P <sub>5</sub>	不整楕円形	30	6				
P <sub>6</sub>	不整形	35	12	3			



第6節 不明遺構

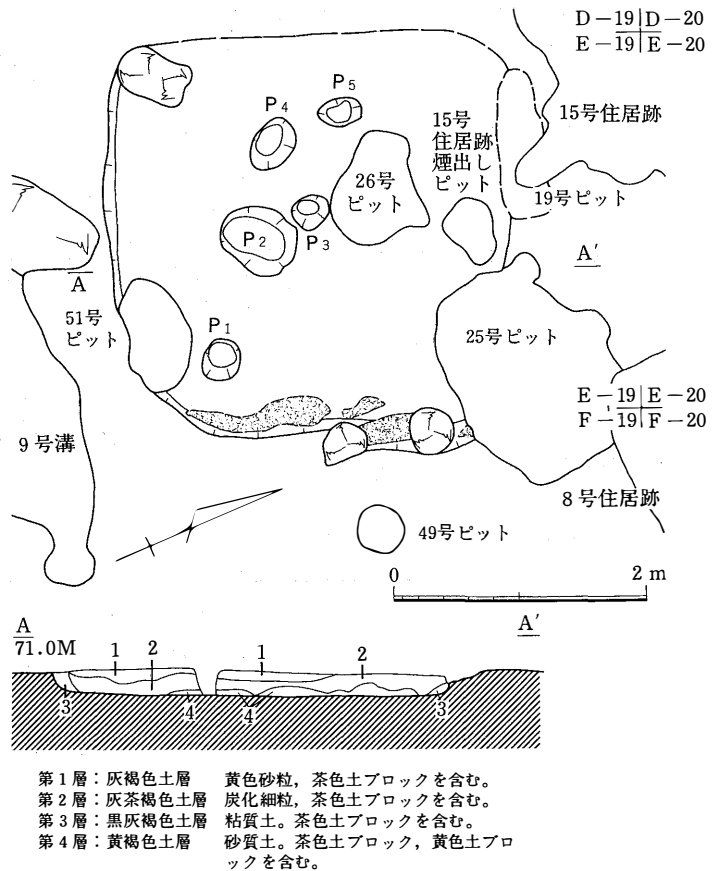
壁は床面上り約130°~140°で立ち上がり、底面は凹凸が激しく、北半分は約1.5~20cmの深さで落ち込んでおり、固く叩きしめた様子や焼土などは観察されなかった。またカマドの構築も認められなかった。また底面から6個のピットが検出された。このため、当初住居跡として検出されたが住居跡になる要素はみられず、性格の不明な遺構として取り扱った。

遺物は土師器49点、須恵器5点が出土している。 (氏家 浩子)

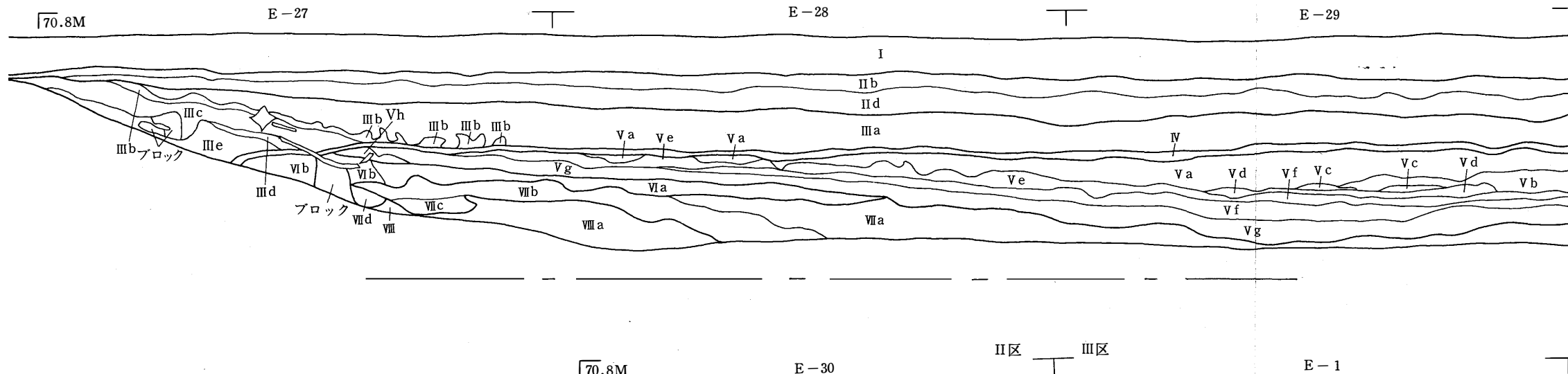
第6号不明遺構(第114図, 第39図版)

Ⅱ区のE・F-18・19グリッドにおいて検出された性格不明の遺構である。概報によると20号住居跡として記載されているがプランが不明確であり、カマド、貼り床等の住居跡としての施設も認められなかったことから6号不明遺構とした。遺構確認面は地山上面である。本遺構は15号住居跡の煙出しピットと19・25・26・51号ピットに切られている。このうち19号ピットは15号住居跡, 25号ピットは8号住居跡に切られている。この他に本遺構内より合計5個のピットが検出されたが、遺構に伴うかは不明である。西壁は確認されず、北壁は一部が確認されたのみであるが残存する南・東壁よりプランは一辺が約2.5m前後の隅丸正方形を呈すると推定される。南・北壁の中点を結ぶ軸線方向は不明である。本遺構の総面積は約6m<sup>2</sup>と推定される。覆土は4層に別れるが、全体的に砂質で灰褐色土を基調とする。堆積状態はレンズ状を呈し、自然堆積と思われる。壁は検出面から深さ約20cmを測り、ゆるやかにたちあがっている。遺物は覆土より土師器の細片が一方出土したのみで本遺構に伴う遺物は検出されなかった。

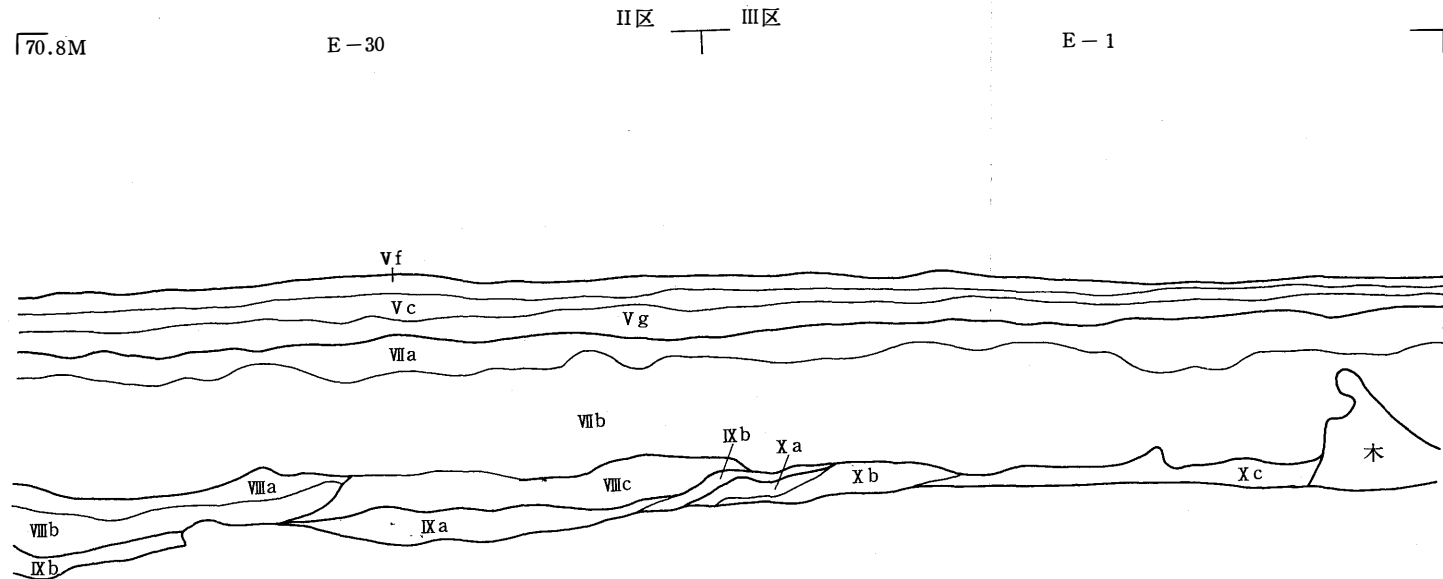
(宋戸美智子)



第114図 第6号不明遺構



- 第1層：灰褐色土層 現耕作土。褐鉄鉱粒を含む。
- 第2a層：黄色粘土層 粘性，しまりあり。褐鉄鉱を含む。
- 第2b層：黄褐色粘土層 2a層に類似するが2a層ほど黄色粘土を含まない。褐鉄鉱を含む。
- 第3a層：灰褐色土層 堅くしまりあり粘性は弱い。若干砂を含み，褐鉄鉱を混入する。
- 第3b層：黒褐色土層 粒子細かく，粘性なし。堅くしまりあり。
- 第3c層：灰黒褐色土層 砂質で，木炭。遺物を含む。
- 第3d層：灰黒褐色土層 3c層に類似する。土器片を少量含む。
- 第3e層：灰黒褐色土層 3d層より灰色を呈し，焼土を若干含む。
- 第4層：褐鉄鉱層
- 第5a層：灰褐色粘土層 粘性あり，木炭含む。
- 第5b層：灰褐色粘土層 5a層より白色を帯び粘土で軟らかく，湿りあり。木炭粒を含む。
- 第5c層：灰白色粘土層 5b層に類似するが5b層より軟らかく，若干木炭粒を含む。
- 第5d層：黒白灰色粘土層 5cに類似する木炭粒を含み，白色粘土を斑点状に含む。
- 第5e層：黒色土層 炭化した植物繊維を含む。白色粘土ブロックを混入する。
- 第5f層：セピア色土層 植物繊維，木炭粒を含む泥炭層。粘性，しめり強し。
- 第5g層：セピア色土層 5f層に類似するが，しめり強く，粘性あり。
- 第5h層：セピア色土層 5g層に類似する。木炭粒子を含む。
- 第6a層：灰褐色粘土層 木炭粒を含む。軟らかく，粘性あり。
- 第6b層：黒灰褐色粘土層 6a層に類似するが，黒味強い。木炭粒，焼土粒を含む。
- 第7a層：淡緑色粘土層 軟らかく，粘性あり。植物繊維を含む。
- 第7b層：淡緑色砂質土層 7a層に類似する。木炭，木片を多く含む。土器を含む。
- 第7c層：淡緑色砂質土層 7b層より黒味を帯びる。
- 第7d層：淡緑色砂質土層 7c層に類似するが，粘土を含み，砂も混入する。
- 第8a層：黒灰色土層 粘土層。黒色土，黒灰色土を混入。しまりあり，繊維物を含む。
- 第8b層：黒緑色土層 ベタベタした粘土層。上層と類似する。
- 第8c層：暗灰白色土層 荒い砂質土を含む。粘性あり。0.5~1cm大の木炭を多量に含む。小礫も含む。
- 第9a層：暗茶色土層 ベタベタした粘土層。流木などを含む層で砂粒子を含み，しまりを持つ。繊維物混入。
- 第9b層：黒緑色土層 ほぼ上層と類似する。やや砂質で木炭片を多く含む。繊維物混入。
- 第10a層：黒茶褐色土層 砂粒子を含み，粘性を持つ。やや軟らかく，しまりあり。木炭片を少量含む。
- 第10b層：灰茶色土層 灰色の砂質土を含み，やや粘性強く，繊維物を多く含む。
- 第10c層：灰青色土層 粘性があるがやや砂質がかった層で，灰色の砂質土，粘性ある茶色土を混入。木片を多量に含む。



第 115 図 湿地性遺物包含層セクション

## 第7節 湿地性遺物包含層出土遺物

Ⅱ区のA～H-28～30, Ⅲ区のA～H-1～3グリッドにかけて検出された, 表土下0.7m～2mの深さの遺物包含層である。Ⅲ区のA～H-2・3グリッドの一部は, 現在も使用中の用水路と畦畔の斜面になっており調査できなかった。Ⅲ区の4グリッド以北は調査時点で, 遺構の検出されたⅡ区の面より約1m程低い面となっており; Ⅲ区のE-4～15グリッドを発掘したところ, 表土下10～15cmで若干の小礫混りの砂質土層, その下約30cmで薄い黄色粘土層, その下は砂利混り層となり, 遺構・遺物の包含層は見られず, Ⅲ区の4グリッドより北に湿地性遺物包含層は続いているものと判断した。なお, 図のセクションは調査中壁が崩壊したため同一面ではなく, L-I～VIIはⅡ区E-27～29, L-Vf・L-VIII～XはⅡ区E-30, Ⅲ区E-1の東壁を用いた。

湿地性遺物包含層は, 一番上のL-Iaが茶褐色の現在の耕作土, その下のL-Ibが灰褐色の水田床土がくる。その下に黄色・黄褐色の粘土層, L-IIb・II dがくる。その下に灰褐色～黒褐色のL-III a～III aがきており, L-II d・III a～III eはこの部分にのみ見られる層位である。地元の話では, 湿地性遺物包含層のある部分は遺構のある部分に比べ一段低い湿地になっていて, 昭和12年のほ場整備の時, 約30cm程他の土で埋めて, その上に粘土を貼って水田にしたということである。実見をしてもらったところ, L-II・IIIがそれらしいとの話であった。しかもL-IIIは遺物がほとんど出土せず, 付近に見られない土である。また, その下に浅く水分が停滞して褐鉄鉱が沈殿したらしいL-IVが見られ, 当時の湿地の上面らしいと考えられるため, L-II・IIIをこの昭和12年のほ場整備時の整地によるものと判断した。

L-VはL-Va～Vhに分けられる灰褐色の葎の焼けたような炭化物を含む軟質の粘土質土層で, 特にL-Ve・Vfは炭化物が多く黒色～セピア色を呈する。L-Vhはごく一部にのみ見られる。

L-VIIはVIa・VIb層に分けられる灰褐色の軟質粘土質土層で, 炭化物粘土を含む, VIbには焼土粒も若干含んでいる。

L-VIIIはL-VIIa～VII dに分けられる淡緑色の軟らかいシルト質土で, L-VIIaは粘土分が強く粘性があり, 植物の繊維を含む。L-VIIbは砂分が強く, 炭化物を含んでいる。L-VIIc・VII dは部分的なものである。

L-VIIIはL-VIII a～VIII cに分けられる黒褐色土で, 炭化物粒を含み軟質のベタベタした層であり, L-VIII cは部分的に見られるのみである。

L-IXはL-IX a・IX bに分けられる黒褐色土で, 軟質の粘性がある層で, L-IXaは砂分を多く含み, L-IXbではそれに小礫も含んでいる。

L-Xは包含層北半分に部分的に見られる灰褐色土層で, 粘性があり砂・小礫を多く含む。

第 7 節 湿地性遺物包含層

これら各層の状況を見るとL-I~IVは前述の通りであり、L-V~VIIはほぼ水平に近い堆積状況で、土質の変化も漸移的であり、L-Ve・Vfに炭化物の集中が見られ湿地に繁茂した葎が焼けたような様子が見られるが、堆積が停滞したような状況は確認されなかった。L-VIII・IXは浅い窪地状になった部分に流れ込んだような堆積状況が見られる。L-XはII区の29~30グリッド付近が一番低くなる東西に長く浅い窪地状の部分に、南北両側より流れ込んだような状況で堆積しており、その上が一部削られ、そこにL-VIII・IXが堆積したものと考えられる。L-IXとL-Xではあきらかに土質も異なっており、堆積の断絶が考えられる。L-VIIとL-VIIIの間でも若干の土質の相異が見られ、この部分にも一時的な堆積の断絶があったかも知れない。

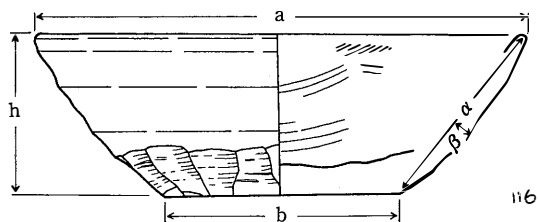
花粉分析の結果でもL-V~VII, L-VIII・IX, L-Xという形で異なった植物相を示しており、堆積状況の変化と花粉相の変化も一致している。花粉分析ではL-X針広混林→L-VIII・IX落葉広葉樹林→L-V~VII水の影響を受けた草地となっているが、L-VIII~Xも水の影響を受けた堆積土と考えられるものであり、森林が発達していたとは考えにくい。むしろ包含層の周辺にそのような森林があったと考えた方が良くと思われる。

1. 土 器

(第116・137~144図 第40・41図版)

L-V (第117・118図 第55・61図版)

土 師 器



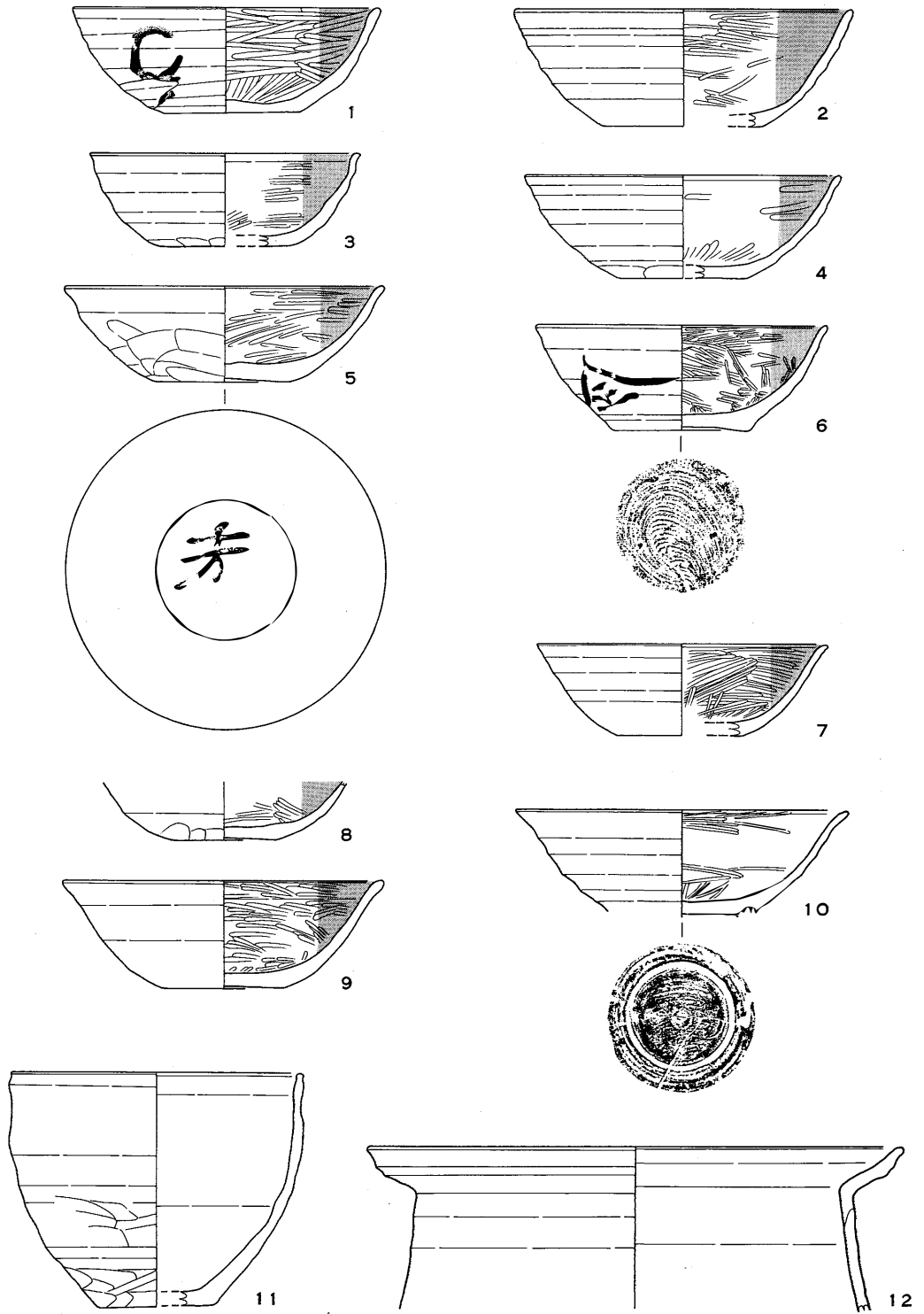
第116図 杯計測部位一覽

L-Vの遺物でL-Va~VdのものはL-Vとして一括して取り上げられ、それ以下はL-Vf・Vgより若干出土している。単にL-Vとしたもので分類できたもの(図示可能3点, 不可能破片27点)は1類2個体, 2類(2b類を含む)10個体, 4b類8個体, 5b類10個体である。L-Vfは2b・5b類各1点(5・6), Vgは1・2類各1点(1・4)でL-Vf・Vgのものは単なるL-Vとして取り上げたものに構成要素の一部として含まれ、層位としてもL-V全体がL-IV・VIからは明確に分離できる層であるので、これらをL-V出土として一括して扱う。

杯(1~9) 実測可能遺物・底部破片から識別できたのはロクロ調整のもの35個体, 非ロクロ有段丸底のもの2個体で、ロクロ調整のもの9個体が図示できた。識別できたロクロ調整のものを切り離し・調整技法別に分類すると、1類3点(1・2), 2類12点(3~5・8)この内3点は2b類(5・8), 4b類8点, 5b類12点(6)であった。

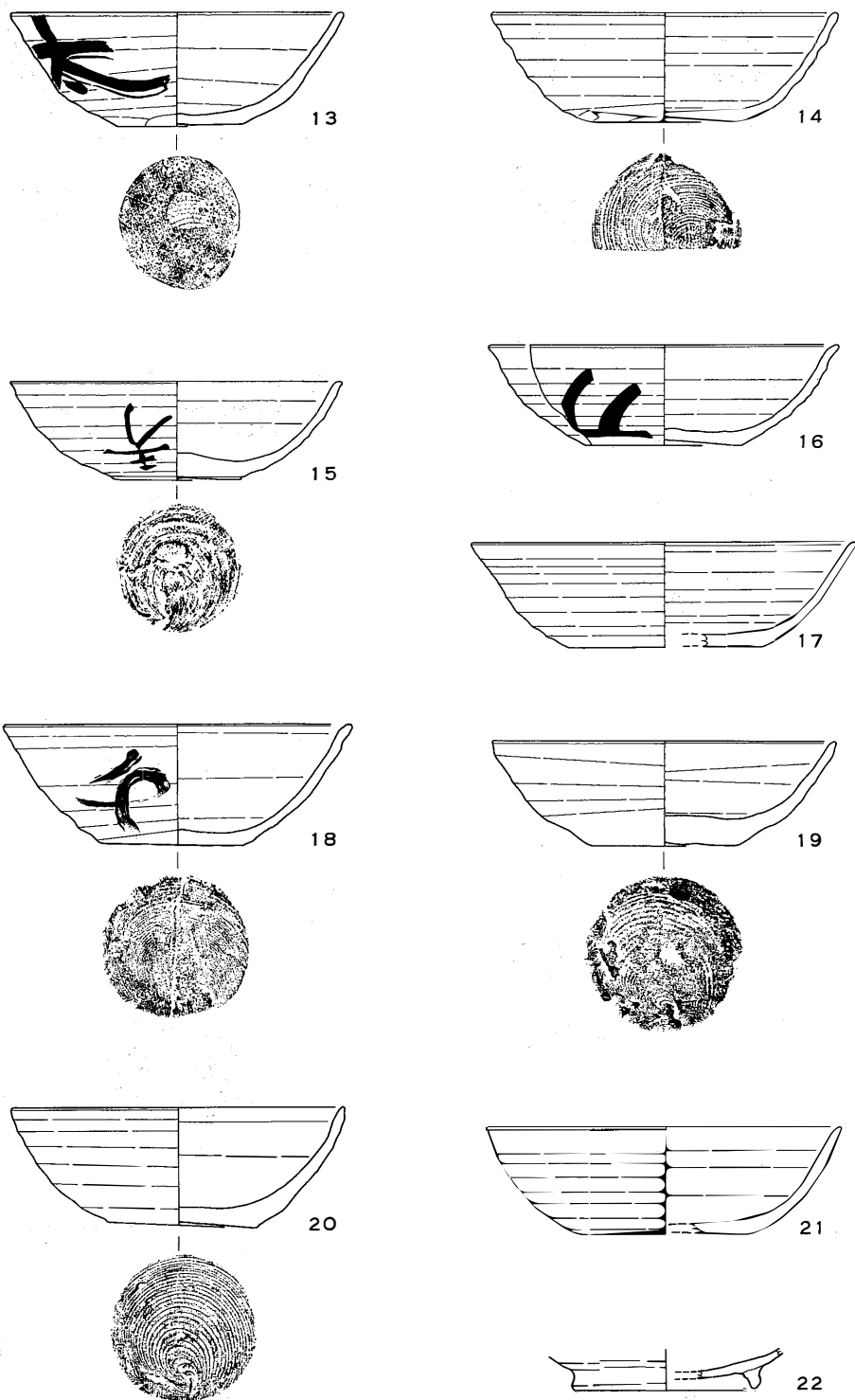
これらは口径が13.2~15.2 cmあり, 13.0~14.2 cmに多く分布が見られ, 土師器杯全体として見れば小形のグループとなっている。また, 5・9のように口縁が外反するものも含んでいる。

$\frac{b}{a}$ は0.38~0.47,  $\frac{h}{a}$ は0.30~0.37で計測個体数は少ないが, L-VIII~IX出土土器の分布範囲



第117図 湿地性遺物包含層L-V出土土器 (1/3)

第 7 節 湿地性遺物包含層



第 118 圖 湿地性遺物包含層 L - V 出土土器 (1/3)

でこれらの層の数値が集中する部分にL-Vの分布も見られる(第140図)。 $\beta_{\%}$ は0.09～0.14でやはりL-VⅦ～Ⅸの分布範囲に含まれる(第139図)。

墨書は1の体部に不明のもの、5の底部に「秀」、6の体部に「全」が見られた。

高台付杯(10) 出土したのはこの1点のみで、高台の部分は欠損している。杯底面は回転糸切り痕を残し、その上に高台が貼り付けられている。杯部外面はクワ痕が明瞭で、やや丸味を持つ

第53表 湿地性遺物包含層L-V出土土器一覧表

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
117	1	55-1	土師器	杯	I-29	L-V	13.6			6.0	4.8			不明墨書
117	2		土師器	杯	I-28	L-V	15.2			7.2	5.3			
117	3		土師器	杯	E-27	L-V	12.2			5.6	4.5			
117	4		土師器	杯	I-28	L-V	14.1			5.8	4.7			
117	5	55-2	土師器	杯	I-28	L-V	14.2			6.2	4.3			「秀」墨書
117	6	55-3	土師器	杯	I-28	L-V	13.2			6.0	4.7			「全」墨書
117	7		土師器	杯	I-29	L-V	13.0			5.6	4.1			
117	8		土師器	杯	C-27	L-V				4.6				
117	9	55-4	土師器	杯	B-27	L-V	14.2			5.4	4.9			
117	10	55-5	土師器	高台付杯	I-29	L-V	14.8							
117	11		土師器	鉢	I-28	L-V	13.0			5.3	10.5			
118	12		土師器	甕	E-27	L-V	23.7	19.5						
118	13	55-6	須恵器	杯	B-27	L-V	13.9			5.3	4.8			「太」墨書
118	14		須恵器	杯	F-27	L-V	14.4			6.2	5.0			
118	15	55-7	須恵器	杯	I-29	L-V	13.7			5.4	4.2			「秀」墨書
118	16	55-8	須恵器	杯	井戸跡 周	L-V	14.5			6.6	4.2			「刀」墨書
118	17		須恵器	杯	I-28	L-V	15.9			8.0	4.4			
118	18	55-10	須恵器	杯	I-28-29	L-V	14.7			6.2	5.1			「千」墨書
118	19	55-9	須恵器	杯	I-28	L-V	14.2			6.0	4.4			
118	20		須恵器	杯	井戸跡 周	L-V	13.8			5.6	4.9			
118	21		須恵器	杯	I-29	L-V	14.7			6.2	4.6			
118	22		陶器	台付皿	G-27	L-V						5.4	1.0	灰釉陶器

## 第7節 湿地性遺物包含層

て開き、口縁は外反している。内面にはミガキ痕が見られ、内黒であったと考えられる。

鉢(11) ロクロ調整の小形の鉢である。体部下半は逆「ハ」形に開き、上半部はほぼ直立している。体部下端から底面にかけては手持ちヘラケズリが加えられている。

甕(12) 実測できたのは1点のみで、他の体部の破片があるが小片のため個体判別・図示はできなかった。ロクロ調整の甕(12)で体部肩付近より上の部分のみである。体部は頸部に向って緩やかにすぼみ、頸部は強く屈曲し、口縁部は直線的に開き、口唇部は直線的に開き、口唇部は「く」状に立ち上がる。

### 須 恵 器

実測可能なものは杯9点のみであった。なお、その他に高台付杯1点、タタキメのある甕の破片が若干出土している。

杯(13～21) 切り離し・再調整技法から見ると2b類1点(13)、4b類1点(14)、5b類7点(15～21)を識別できた。

口径は13.7～15.9 cmのものがあり、特に13.7～14.7 cmの間に多く分布しており、他の層とほぼ同じような傾向を示している。 $\frac{b}{a}$ は0.38～0.50、 $\frac{b}{4a}$ は0.28～0.36でこれも他の層、特にL-VII・VIIIと同じような傾向を示している(第141・142図)。 $\frac{b}{4a}$ は0.10～0.13に分布し、0.10が4点とやや多いが、全体数が少ないので傾向は不明である(第143)。

墨書は13の体部に「太」、15の体部に「𠄎」、16の体部に「刀」、18の体部に「千」が見られる。

### 陶 器

高台付皿(22) 高台付皿の破片1点が出土している。底部の破片で、内面の上半部は刷毛塗りの灰釉が見られる。

L-VI (第119図 第56図版 第54表)

### 土 師 器

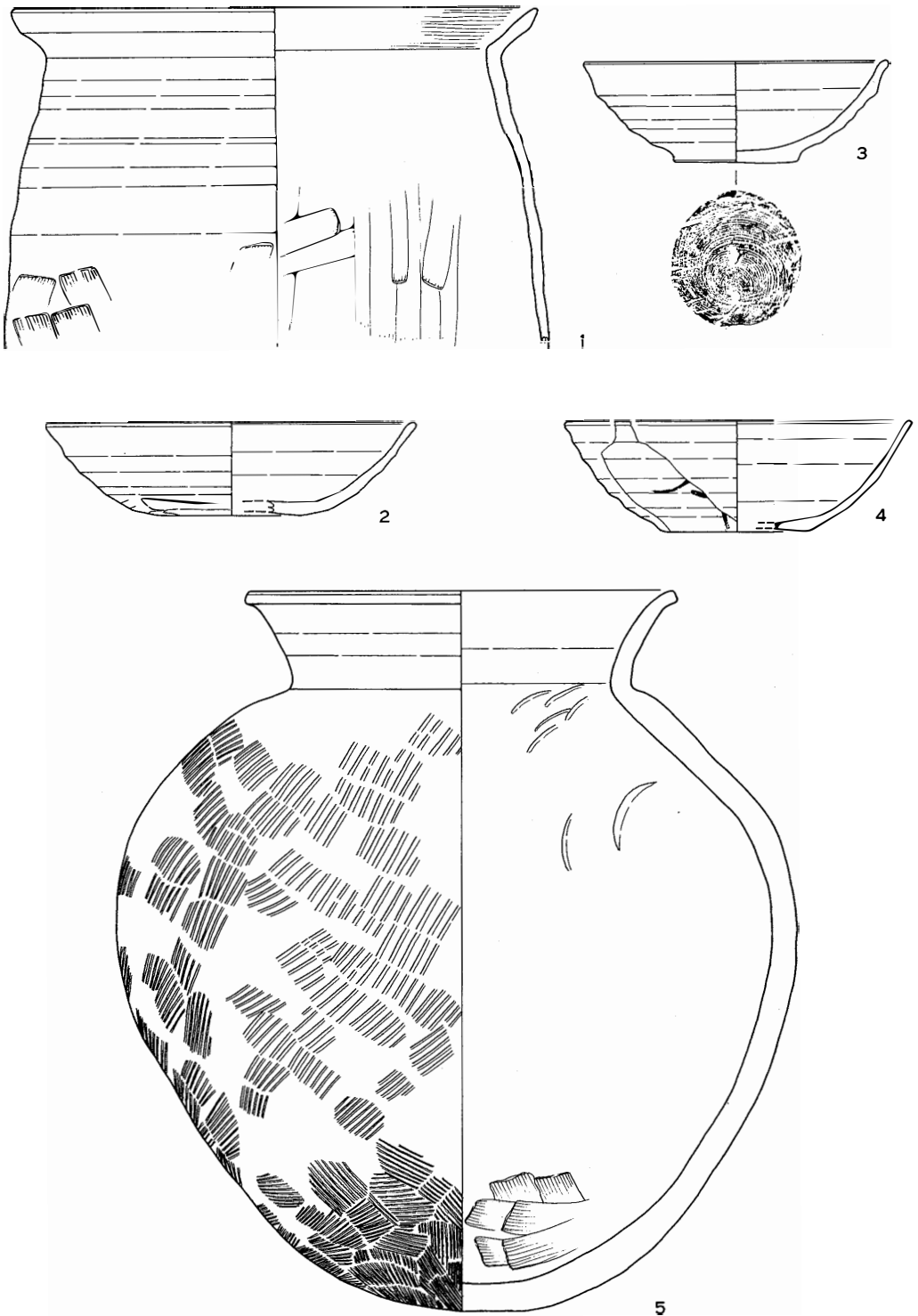
底部破片で21個体が識別できた。これらはすべてロクロ調整・内黒である。その内訳は2類6点、2b類2点、4b類6点、5b類7点である。

高台付杯 高台部の破片が1点あるが、小破片のため実測できなかった。やや外に開く。低い高台になると考えられるものである。

甕(1) ロクロ調整の甕で、最大径を体部中位に有し、頸部は「く」形に屈曲し、口唇部は「コ」形に立ち上がる。内外面とも下半部にはロクロ調整の後、縦方向のナデが加えられている。※-1c-B<sub>2</sub>-(a-a)類である。

他にも接合・実測不可能な破片が若干出土している。外面にケズリのあるもので同一個体かは不明である。





第119図 湿地性遺物包含層L-VI出土土器 (1/3)

第7節 湿地性遺物包含層

須 惠 器

杯(2~4) 実測可能なもの及び底部破片で4個体を識別した。それらの内訳は2類が1点(2)5b類が3点(3・4)である。その内2は口径16.4 cm, 高さ4.1 cmで他の層出土のものに比べやや大形で $\frac{h}{d}$ も0.25と低く, やや浅い形を呈している(第142図)。 $\frac{h}{d}$ は0.11が2点, 0.13が1点で他の層のもの分布範囲に含まれている(第143図)。

甕(5) 高さ32.0 cm, 最大径31.0 cmで, 高さ・最大径がほぼ等しい小形の甕である。丸底で体部外面はタタキメ, 内面はナデ痕があり外面はやや荒れている。頸部・口縁部は内外面ともにロクロ痕が明瞭である。この他に内外面ともタタキメのある破片が数点あり, 別の個体と考えられるが小片のためそれ以上のことは不明である。

第54表 湿地性遺物包含層L-VI出土土器一覧表

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
119	1		土師器	甕	E-27	L-VI	23.3	20.3	23.7					
119	2		須惠器	杯	F-27	L-VI	16.4			6.3	4.1			
119	3	56-1	須惠器	杯	E-27	L-VI	13.6			5.9	4.5			
119	4		須惠器	杯	E-27	L-VI	15.3			6.4	5.0			
119	5	56-2	須惠器	甕	E-27	L-VI	19.0	15.1	31.0		32.0			丸底

L-VII (第120~124図 第56~58図版 第55・56表)

L-VIIの遺物は最初単にL-VIIとして取り上げられており, その後調査の進行によりL-VIIa・VIIbに分けて取り上げられている。単にL-VIIとしたものはL-VIIaに一部L-VIIbのものが混じたものであるが土師器杯の技法を見た場合, 第55表(実測可能土器・実測不可能破片を含む)のようになり, 単にL-VIIとしたものにはL-VIIa・VIIbとしたものに若干見られる1類はないが, 各層とも5b類が多く, それに4b類を加えると底部に回転糸切り痕を残すものが約 $\frac{2}{3}$ を占める。それに2類と, 場合により1類を伴う形となっている。また, 須惠器杯でも各層とも5b類が主体となり, 2・4b類が少量伴う形となる。以上のことからL-VII・VIIa・VIIbとも類似した技法によっていることが考えられる。また, L-VIIa~VIIdは土質・色調の共通性から他の層と分離できるものであるから, 単にL-

第55表 L-VII 取上げ別杯分類表

	層位	分類				計
		1類	2(2b)類	4b類	5b類	
土 師 器	L-VI		13(8)	16	18	47
	L-VIIa	2	4(4)	5	9	20
	L-VIIb	1	9	4	12	26
須 惠 器	L-VI		1(1)	1	5	7
	L-VIIa		1		7	8
	L-VIIb			1	4	5

ⅦとしたものとL-Ⅶa～Ⅶbとした土器を一活して扱うこととしたい。

### 土 師 器

杯(1～29) ロクロを用いない丸底の杯は、内外とも段を有するもの4個体、無段丸底のもの1個体を識別できた。これらはすべて内黒のものである。実測できたのは1点(1)のみで、外面は「角」状の段、内面には痕跡的な段を残し、口縁は外傾する。

ロクロ調整の土師器は底部資料で93個体が識別できたが、その内実測できたのは28個体であった。識別できた93個体を切り離し・再調整技法別に見ると1類3個体、2類14個体(2～4)、2b類13個体(5・6)、4b類24個体(8～13)、5b類39個体(15～28)となる。約82%に回転糸切り痕があり、2類にも回転糸切り痕のある可能性を考えると、ほとんどが切り離しは回転糸切りによると考えられる。

土器の大きさでは、計測可能なものが2類(2b類も含む)5点、4b類5点、5b類14点と数に差があるため厳密なことはいえないが、口径は2類13.0～14.8cm、4b類13.3～15.3cm、5b類13.2～14.8cmとなり、2類と5b類はほぼ同じ大きさになると考えられる。4b類は1点のみ15.3cmのものがあるが、他は13.3～14.1cmであり、2・5b類と近い傾向を示すと考えられる。全体的には口径が13.2～14.8cmの部分に集中して見られ、L-Vのものよりやや大形となる。さらに器形の特徴としては、 $\frac{1}{2}$ が0.33～0.53、 $\frac{1}{4}$ が0.28～0.39とかなりばらつきを持っている(第137・138図)。また、8・16の $\frac{1}{8}$ が0.17、0.16となっており、他の土師器杯に比べるとこの2点は体部に強く丸味を持っているといえよう。他は0.08～0.14でL-Ⅷのものとはほぼ同じである。

墨書土器は「秀」が3点(7・8・28)があり、7・8は体部と底部に2ヶ所ある。「六」または「兵」(4)、「罌」(5)、「甗」(6)、「甲」(25)、「罎」(26)、「冡」(27)があり、6は体部2ヶ所に有る。「甗」は則天文字で「天」に当るものである。26は体部と底部に2ヶ所ある。その他9・29にも部分的で不明なものがある。

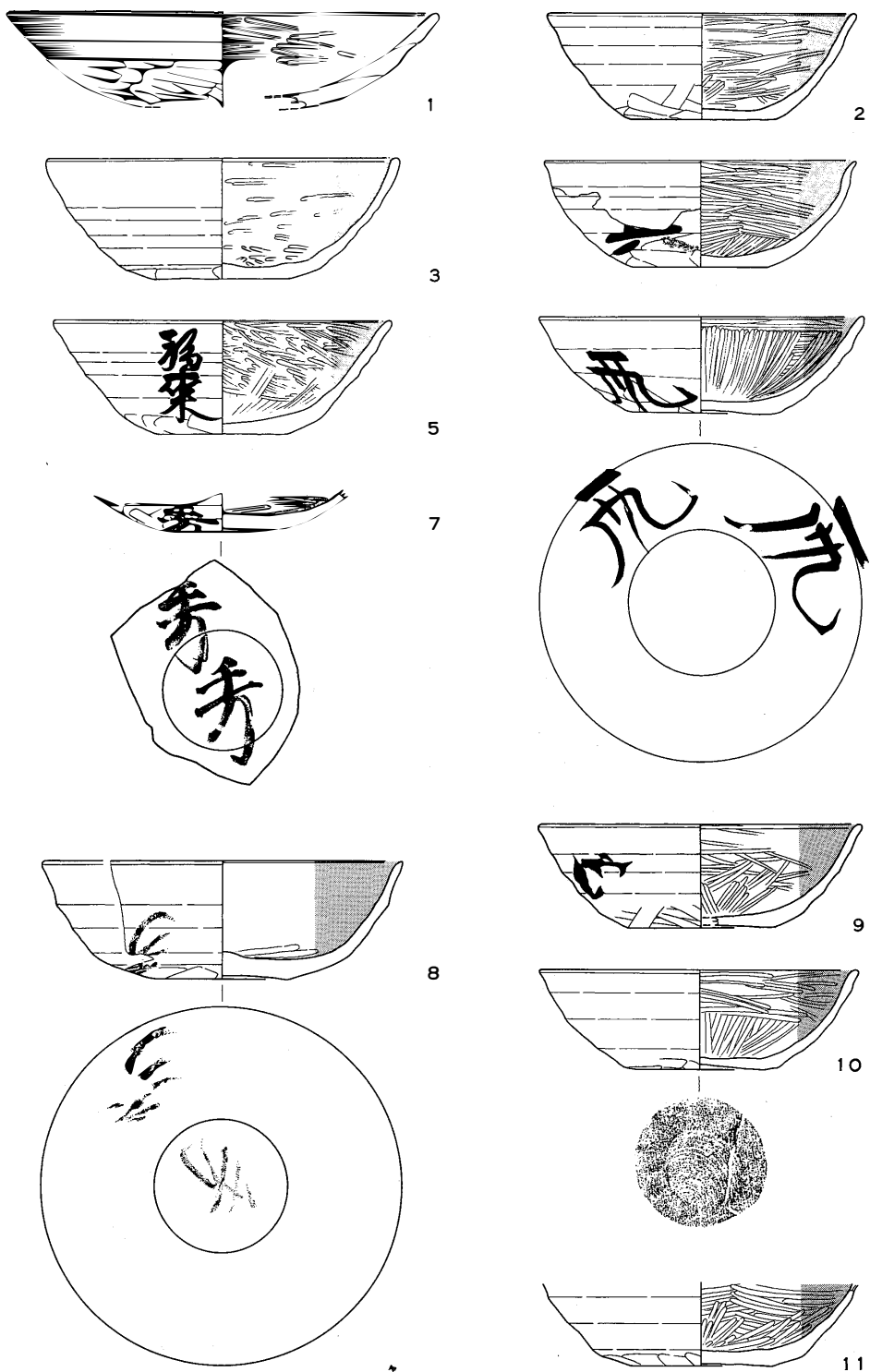
線刻は3の底面に「\*」、25の体部に「秀」がある。25は同一個体に墨書の「甲」と線刻の「秀」の両方が描かれている。

甕(30) 下半部のみのもので1点(30)とロクロ調整の外面にケズリのある体部破片が数点出土している。30は平底でやや丸味を持ち体部最大径に向かって立ち上がる。内外面ともナデの調整が施され、特に内側底部には強いナデが加えられている。分類はI-5c-※-(a-a)類である。

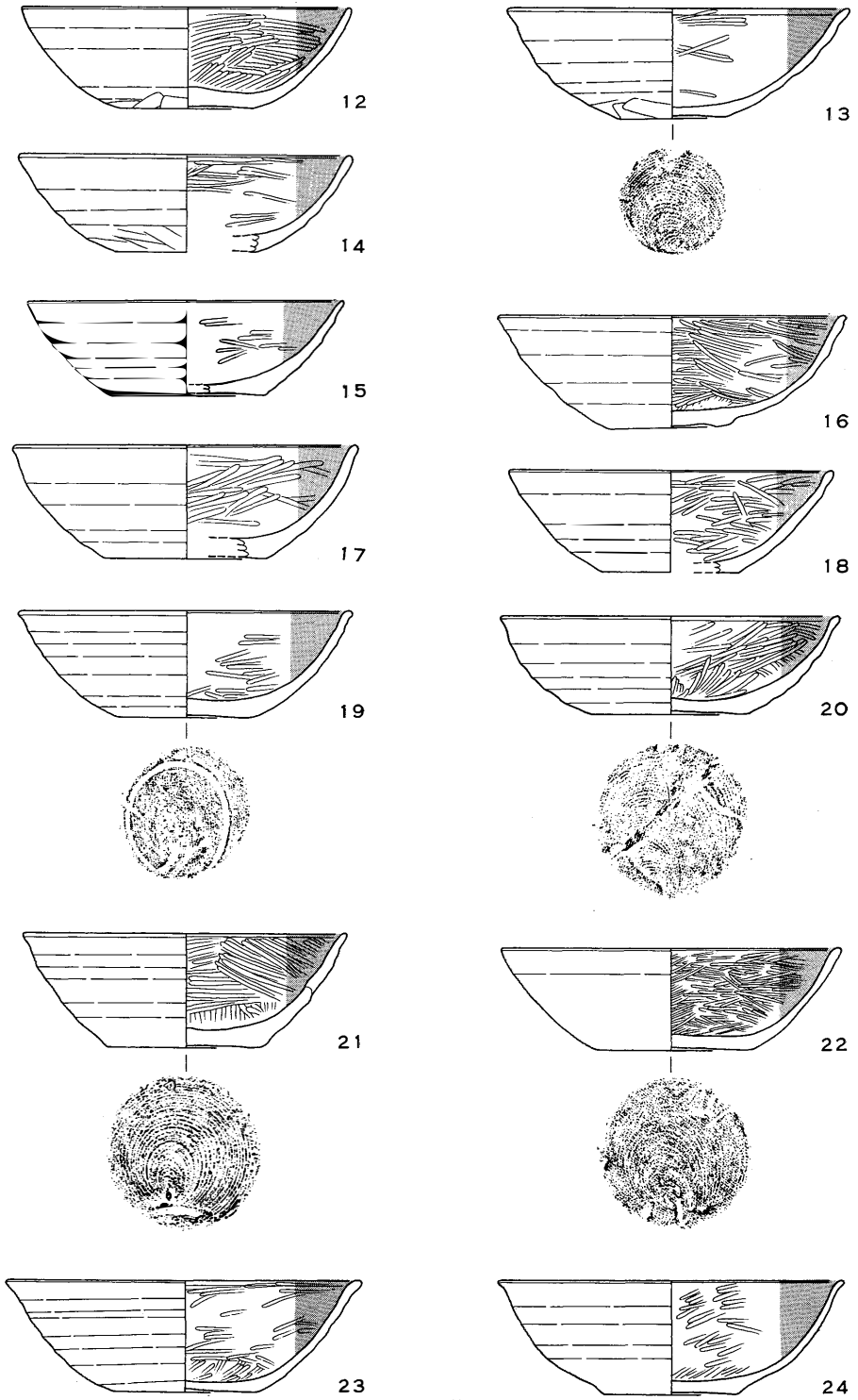
甗(31) 底部のみ破片が1点(31)出土している。貼り付けた底部が剥離した多孔式のものである。外面の底面近くには一部ハケメの痕跡が見られるが、他は荒れて不明である。内面にはやや粗いナデが加えられ、その後内側から外に向かって孔が穿たれている。

手捏ね土器(30) 平底のもので、外面体部～口縁・内面に指の跡が著しい。底面はほぼ平らで、何か台のようなものに押し付けて成形し、その後取り外して軽くナデを加えたと考えられる。

第 7 節 湿地性遺物包含量

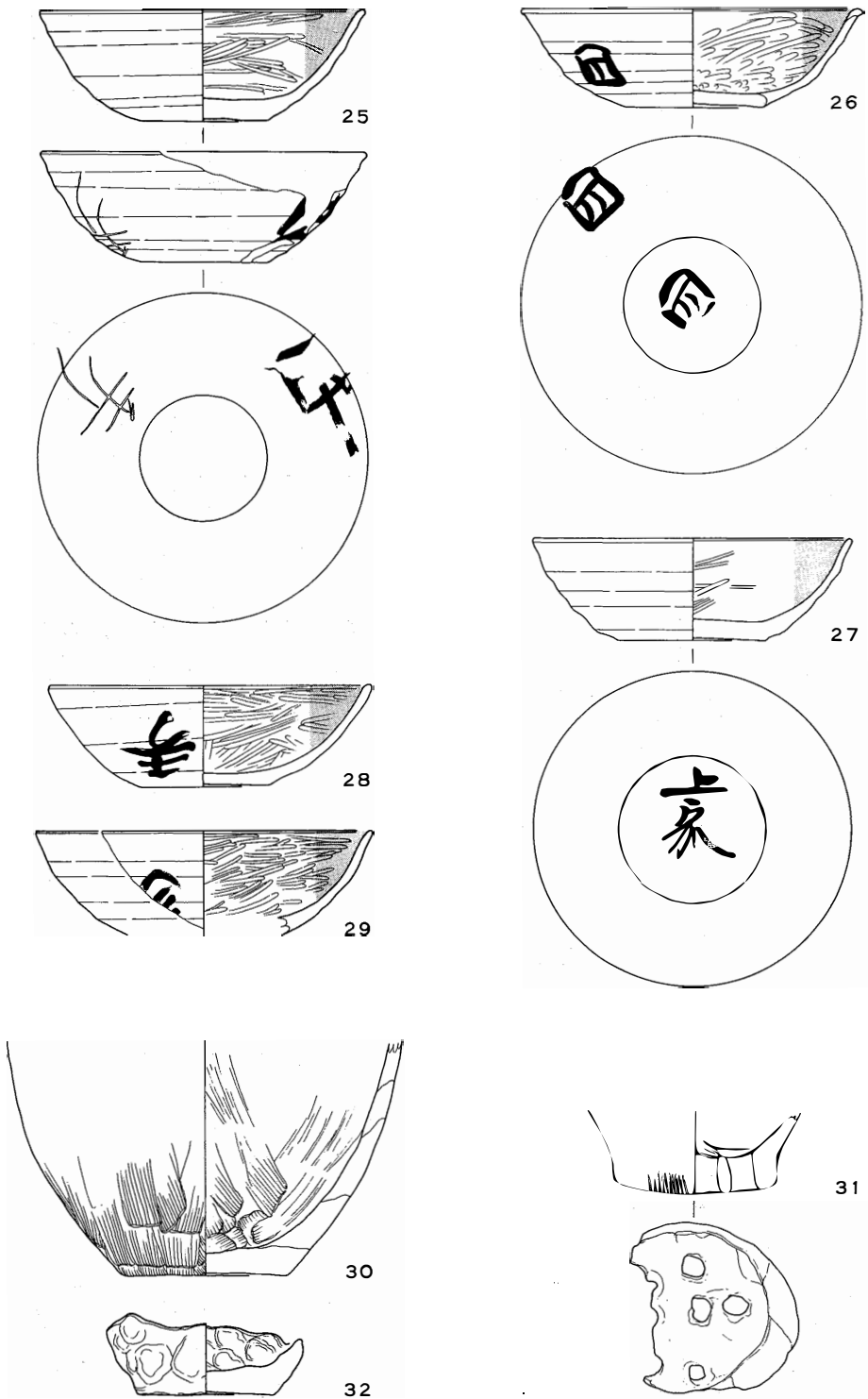


第 120 圖 湿地性遺物包含層 L - VII 出土土器 (1/3)

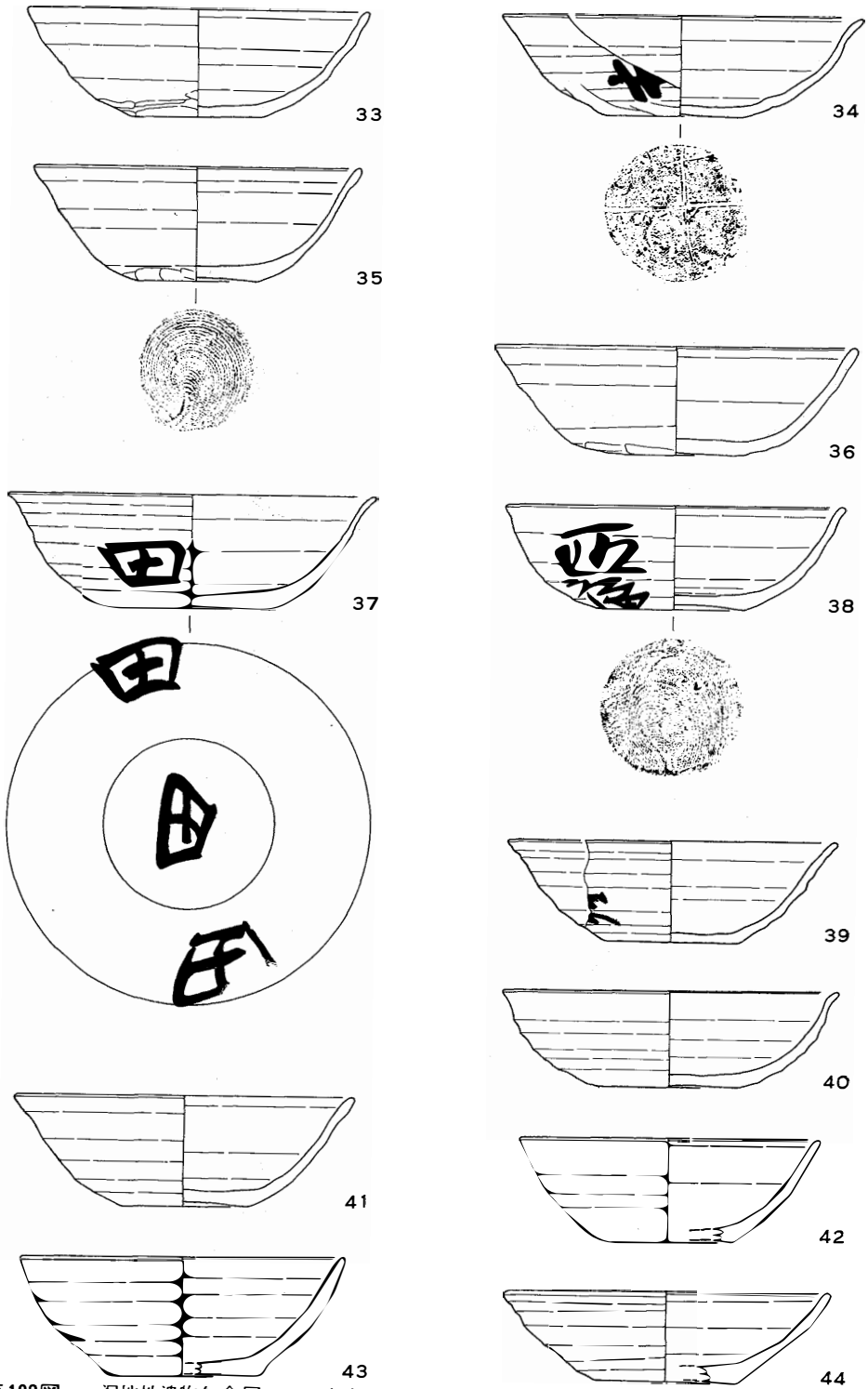


第121図 湿地性遺物包含層L-VII出土土器 (1/3)

第 7 節 湿地性遺物包含層

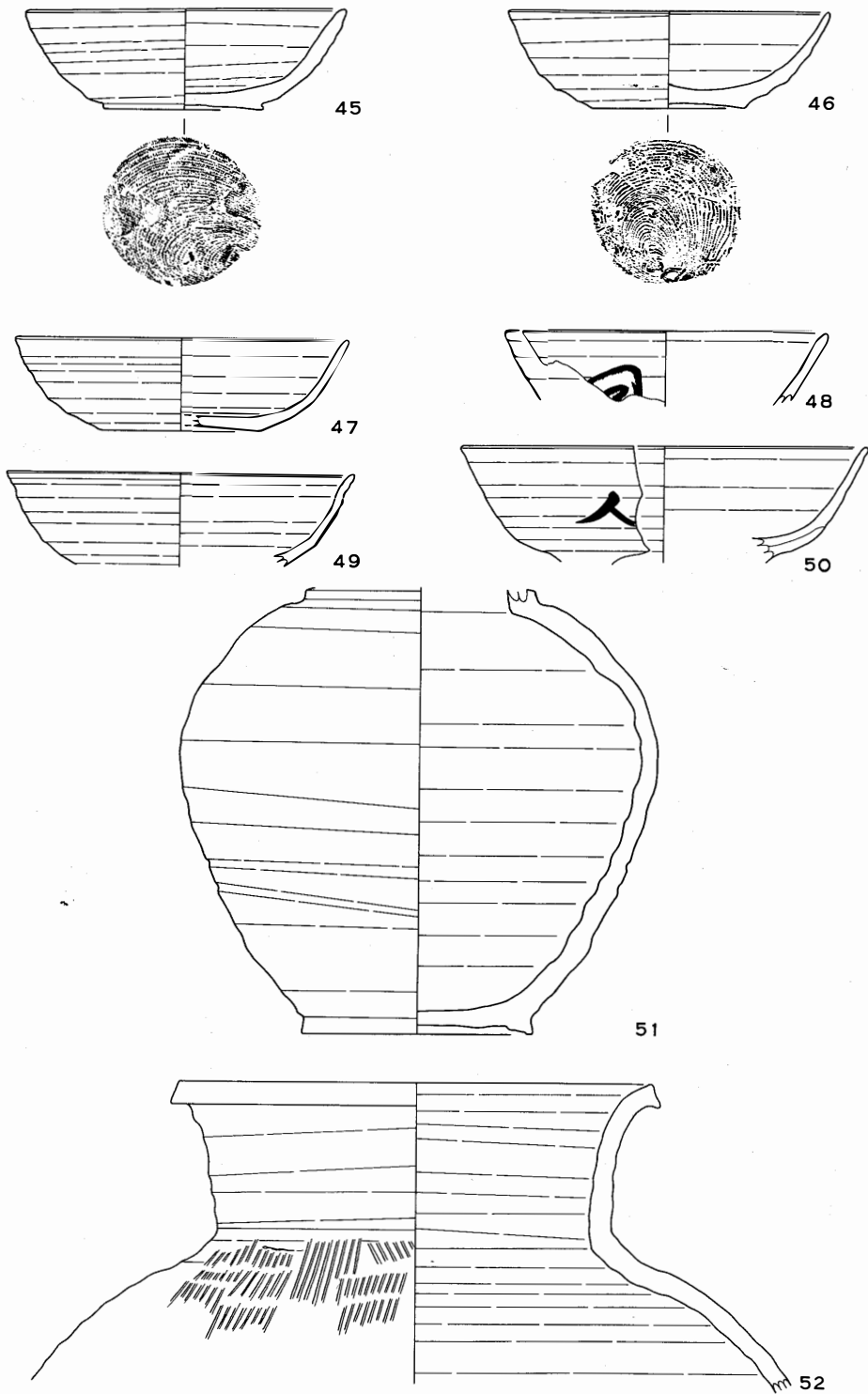


第 122 圖 湿地性遺物包含層 L - VII 出土土器 (1/3)



第123図 湿地性遺物包含層L-VII出土土器 (1/3)

第 7 節 湿地性遺物包含量



第 124 圖 湿地性遺物包含層 L - VII 出土土器 (1/3)



## 須恵器

杯(33～49) 実測可能なもの17点, 実測できない破片では底部資料6個体, 口縁部資料19個体を識別できた。実測可能なもののうち底部まで残り, 全体の形態及び切り離し・再調整の分るのが15点ある。これらと底部の破片を合せ, 切り離し・再調整技法により分類すると2類・2b類各1個体(33・34), 4b類2個体(35・36), 5b類17個体(37～47)となり, 5b類が多く見られ, 切り離しは回転糸切りによるものと考えられることができる。

口径は12.6～15.4 cmのものがあり, 13.4～15.2 cmの間に集中しておりL-VIIIよりやや大形になるようである。 $\frac{b}{a}$ ・ $\frac{b}{c}$ は0.36～0.50, 0.28～0.48で大きなばらつきを示す(第141・142図)。須恵器杯の比較的多いL-VIIIと比較した場合(第144図)L-VIIの約 $\frac{2}{3}$ はL-VIIIの形態分布と重複しており, 類似した器形が多く見られる。 $\frac{b}{c}$ は0.08～0.15でL-VIIIに比べやや大きくなっており, 集中する数値も異なっているが数が少なく, 厳密なことはいえない(第143図)。

墨書は「田」(37), 「霽」(38), 不明(34・39・48)があるが, 37の「田」体部2ヶ所, 底部1ヶ所の計3ヶ所に見られる。

なお, 34は内面全体に墨痕があり, 内面底部には墨を擦った痕と考えられる磨滅痕があり, 転用碗として用いられていたものと思われる。

高台付杯(50) 杯部の破片である。底部以下は欠損してないが, 高台との接合部が若干残っている。口径は18.0cmあり大形のものである。体部外面に「人」の墨書が見られる。

壺(51) 頸部以上を欠損する長頸壺である。底部には低い貼り付け高台を有し, 体部は中位よりやや上の最大径に向かって緩やかに開き, 肩から最大径の部分までは丸味を持っている。頸部と体部の接合部外面にはリング状の凸帯が見られる。

甕(52) 肩より上の部分を残す甕である。肩の部分は丸味を持って下方に大きく開き, 外面にはタタキメ・内面はロクロ目が見られる。頸部はほぼ垂直に立ち上がり, 上半部で外反, 口縁に至る。口唇部は両端が肥厚するが, 特に外側が著しい。

第56表 湿地性遺物包含層L-VII出土土器一覧表

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位cm)						備考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
120	1		土師器	杯	I-30	L-VII	18.4							
120	2		土師器	杯	I-30	L-VII	13.0			6.2	4.6			
120	3	56-3	土師器	杯	A-28	L-VII	14.8			5.8	5.4			「水」線刻
120	4	56-4	土師器	杯	B-27	L-VII	13.3			5.8	4.6			「六か兵」墨書
120	5	56-5	土師器	杯	F-28	L-VII	14.3			5.6	4.9			「葉」墨書

第7節 湿地性遺物包含量

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
120	6	56-6	土師器	杯	E-28	L-VII	13.9			6.2	4.2			「丸」墨書2ヶ所
120	7		土師器	杯	I-29	L-VII				5.2				「秀」墨書2ヶ所
120	8		土師器	杯	H-28	L-VII	15.3			5.6	5.1			「秀」墨書2ヶ所
120	9	56-7	土師器	杯	B-27	L-VII	13.6			6.2	4.5			不明墨書
120	10	56-8	土師器	杯	D-27	L-VII	13.3			5.4	4.3			
120	11		土師器	杯	B-27	L-VII				6.0				
121	12	56-9	土師器	杯	I-28	L-VII	13.8			5.6	4.3			
121	13		土師器	杯	B-29	L-VII	14.1			4.5	4.7			
121	14		土師器	杯	E-28	L-VII	14.0			6.0	4.1			
121	15		土師器	杯	A-28	L-VII	13.3			6.8	4.0			
121	16	56-10	土師器	杯	E-28	L-VII	14.4			4.4	4.7			
121	17		土師器	杯	H-28	L-VII	14.7			7.2	4.8			
121	18		土師器	杯	B-27	L-VII	13.4			5.8	4.3			
121	19		土師器	杯	E-27	L-VII	13.8			5.4	4.5			
121	20	56-11	土師器	杯	I-29	L-VII	14.1			6.6	4.2			
121	21	56-12	土師器	杯	I-29	L-VII	13.9			6.4	4.6			
121	22	57-1	土師器	杯	D-2	L-VII	14.0			6.5	4.3			
121	23	57-2	土師器	杯	E-28	L-VII	14.8			5.9	4.7			
121	24	57-3	土師器	杯	G-27	L-VII	14.3			5.6	4.8			
122	25	57-4	土師器	杯	H-29	L-VII	13.6			5.3	4.7			「甲」墨書,「秀」線刻
122	26	57-5	土師器	杯	I-30	L-VII	14.1			5.8	4.2			「因」墨所2ヶ所
122	27		土師器	杯	A-28	L-VII	13.2			6.6	4.2			「家」墨書
122	28	57-6	土師器	杯	I-1	L-VII	13.5			5.4	4.2			「秀」墨書
122	29		土師器	杯	I-29	L-VII	14.2							不明墨書
122	30		土師器	壺	A-28	L-VII				6.8				
122	31		土師器	甌	B-27	L-VII				6.7				多孔式
122	32		土師器	手捏ね	G-27	L-VII	8.2			5.6	3.0			
123	33	57-7	須恵器	杯	E-27	L-VII	14.4			5.6	4.6			
123	34	57-8	須恵器	杯	I-29	L-VII	15.2			5.7	4.3			転用硯 不明墨書

図	番号	写 真	名 称	器 形	位 置	層 位	法 量 (単位 cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
123	35	57-9	須恵器	杯	C-27	L-VII	14.0			5.0	4.9			
123	36	57-10	須恵器	杯	H-28	L-VII	15.2			5.8	4.7			
123	37	57-11	須恵器	杯	I-28	L-VII	15.4			7.2	4.8			「田」墨書
123	38	57-13	須恵器	杯	B-27	L-VII	14.2			6.2	4.4			「霽」墨書
123	39		須恵器	杯	G-30	L-VII	14.5			6.0	4.3			不明墨書
123	40	57-12	須恵器	杯	B-27	L-VII	14.0			5.8	4.1			
123	41	58-1	須恵器	杯	F-27	L-VII	14.0			5.4	4.7			
123	42		須恵器	杯	H-28	L-VII	12.4			5.6	4.4			
123	43		須恵器	杯	F-27	L-VII	13.5			6.4	5.1			
123	44	58-2	須恵器	杯	E-28	L-VII	13.4			6.0	3.9			
124	45	58-3	須恵器	杯	B・C-27	L-VII	13.4			6.7	4.3			
124	46	58-4	須恵器	杯	H-28	L-VII	13.8			6.6	4.1			
124	47		須恵器	杯	I-29	L-VII	14.0			6.8	3.9			
124	48		須恵器	杯	B-28	L-VII	13.6							不明墨書
124	49		須恵器	杯	I-29	L-VII	14.7							
124	50		須恵器	高台付杯	B-29	L-VII	17.2							「人」墨書
124	51		須恵器	壺	G-27	L-VII		9.8	20.2	9.6				
124	52		須恵器	壺	F-27	L-VII	20.0	16.8						

## L-VIII (第125～130図, 第58～62図版, 第57表)

## 土 師 器

杯(1～44) 実測可能なものと底部破片を合わせてロクロを用いないもの12個体, ロクロ調整のもの78個体を識別できた。これらはすべて内黒である。

ロクロを用いないものは有段丸底(1～3), 有段平底(4), 内面にのみ段のあるもの(5), 平底(6・7)のものがある。1・3は内外とも段を有し口縁が内弯するI-3c-A<sub>2</sub>-(ac-b)類であるが, 3の方が浅い器形を呈する。2は口縁が外傾するI-2c-B<sub>2</sub>-(ac-b)類, 4は口縁が内弯する有段平底のIII-3c-A<sub>2</sub>-(ac-b)類である。5は口縁が外反し, 内面にのみ段を有するIa-4-D<sub>2</sub>-(ac-b)類, 6・7は平底のIIIa-4-A<sub>1</sub>-(ac-b)類である。この他に破片では内外とも有段丸底のもの3点, 無段丸底のもの1点, 有段丸底で内面調整がナゲのものが1点ある。

## 第7節 湿地性遺物包含層

ロクロ調整のものは、実測可能なものと底部資料で78個体あり、切り離し・再調整別に見ると1類2個体、2類18個体(8~11)、2b類6個体(12~16)、4b類24個体(17~31)、5b類28個体(32~42)となり、回転糸切りによるものが約74%あり、2類の中にも回転糸切りのものがあることを考慮すると、L-VII出土のロクロ調整土師器杯はほとんどが切り離しは回転糸切りによるものと考えられる。

器形的に見ると、口径のわかるもの36点、底径のわかるもの34点、全器形のわかるもの30点がある。口径は12.4~17.1 cmあり、13.0~16.0 cmから16.5 cm付近に集中しており、L-VIIよりもばらつきが大きく、L-VIIより大形のものが多い。また、 $\frac{H}{D}$ は0.33~0.53、 $\frac{H}{d}$ は0.28~0.39とかなりばらつきを持っており、色々のプロポーションを含んでいる。これを切り離し・再調整技法的に見ると、4b類は5b類に比べて口径に対し器高・底径とも小さいもの、つまり浅い器形がやや多い傾向が見られる(第137・138図)。 $\frac{H}{D}$ は0.07~0.14であるが0.11~0.13に集中し、その次は0.09が多くなっている(第139図)。これは、L-VIIの特別な2点を除けばほぼL-VIIと類似しているといえる(第140図)。

墨書は「秀」(10)、「罌」(16)、「福」(18)、「裔」(20)、「井」(34)、「具」(35)、不明6点(18・28・36・39・43・44)がある。25は底面に「×」の線刻がある。

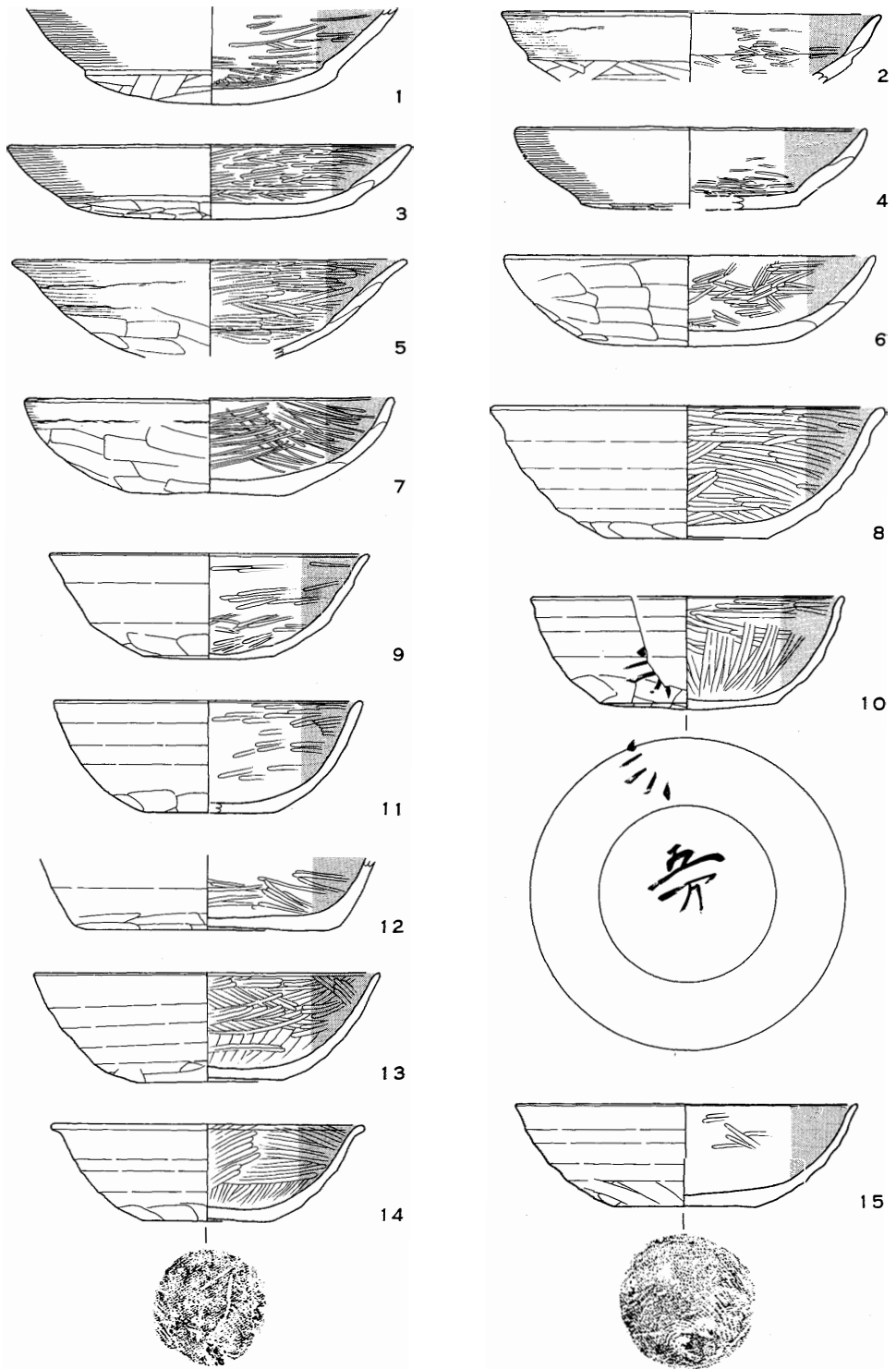
高台付杯(45・46) 実測可能なもの2点、実測不可能な破片2点の計4個体分を識別した。これらはすべて杯底部から脚部にかけての破片である。45・46ともロクロ調整の内黒のもので、脚部は比較的低く「ハ」形に開くものである。

甕(47~51・53) 実測できたものは小形のもの6点で、他は体部及び口縁部の小破片が数点であった。これらの内、ロクロを用いないもの5点(47~51)、ロクロ調整のものは1点(53)である。

48は底の大きな長胴形の甕で、最大径は口縁部にある。底面は木葉痕、体部はハケメ、口縁部はナデ、内面は全面にナデが加えられたId-5a-C<sub>1</sub>-(ad-a)類である。49は球形の体部を有し、底面は木葉痕の上に粘土が環状に貼り付けてある。頸部から口縁部にかけては「く」形にくびれて外傾し、内側には明瞭な段を有する。体部は荒れているがハケメ痕、頸部・口縁部・内面はナデが加えられているIVd-1c-C<sub>1</sub>-(ad-a)類である。50は体部最大径が頸部近くにあり、底部に向ってすぼまるもので、口縁部は外反する。体部は荒れているが、下半部にケズリ痕が観察できる。頸部・口縁部・内面にはナデが加えられているId-8a-B<sub>2</sub>-(ac-a)類である。49・51は体部下半~底部のみで全器形は不明であるが、51は長胴形又は球形の体部になる可能性がある。

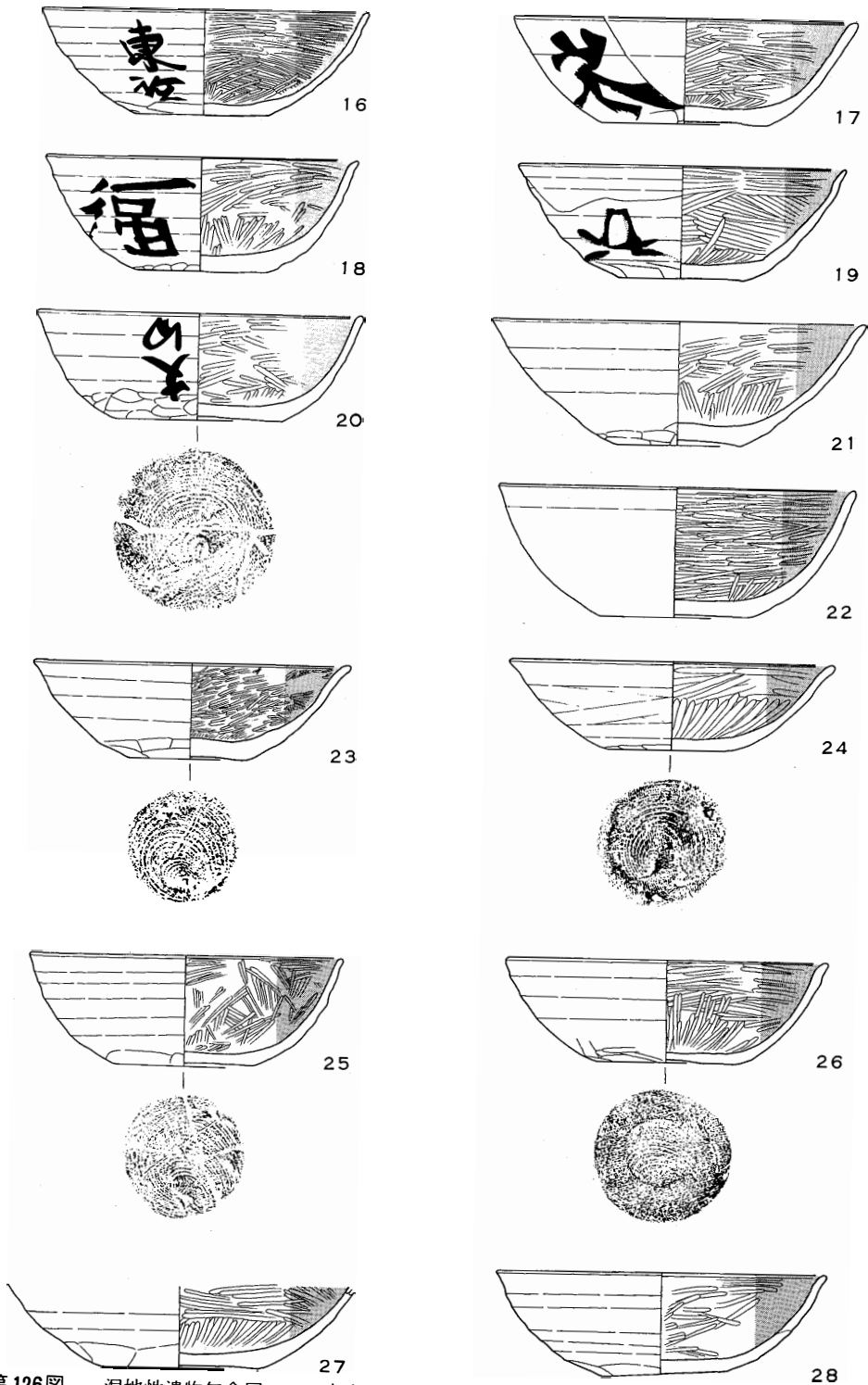
甌(52) 多孔式の底部のみの破片である。底部は内面にナデ、外面にケズリが加えられたところに、内面から外面に向って直径6~7 mmの孔が穿たれている。体部外面にはハケメ痕が見られる。

円筒形土器(54) 口縁部から体部にかけての破片。茶褐色を呈する薄手のもので、全体に粘土紐痕が著しい。外面には指痕、内面にはナデが全体にわたって見られる。胎土には細い砂を含む。

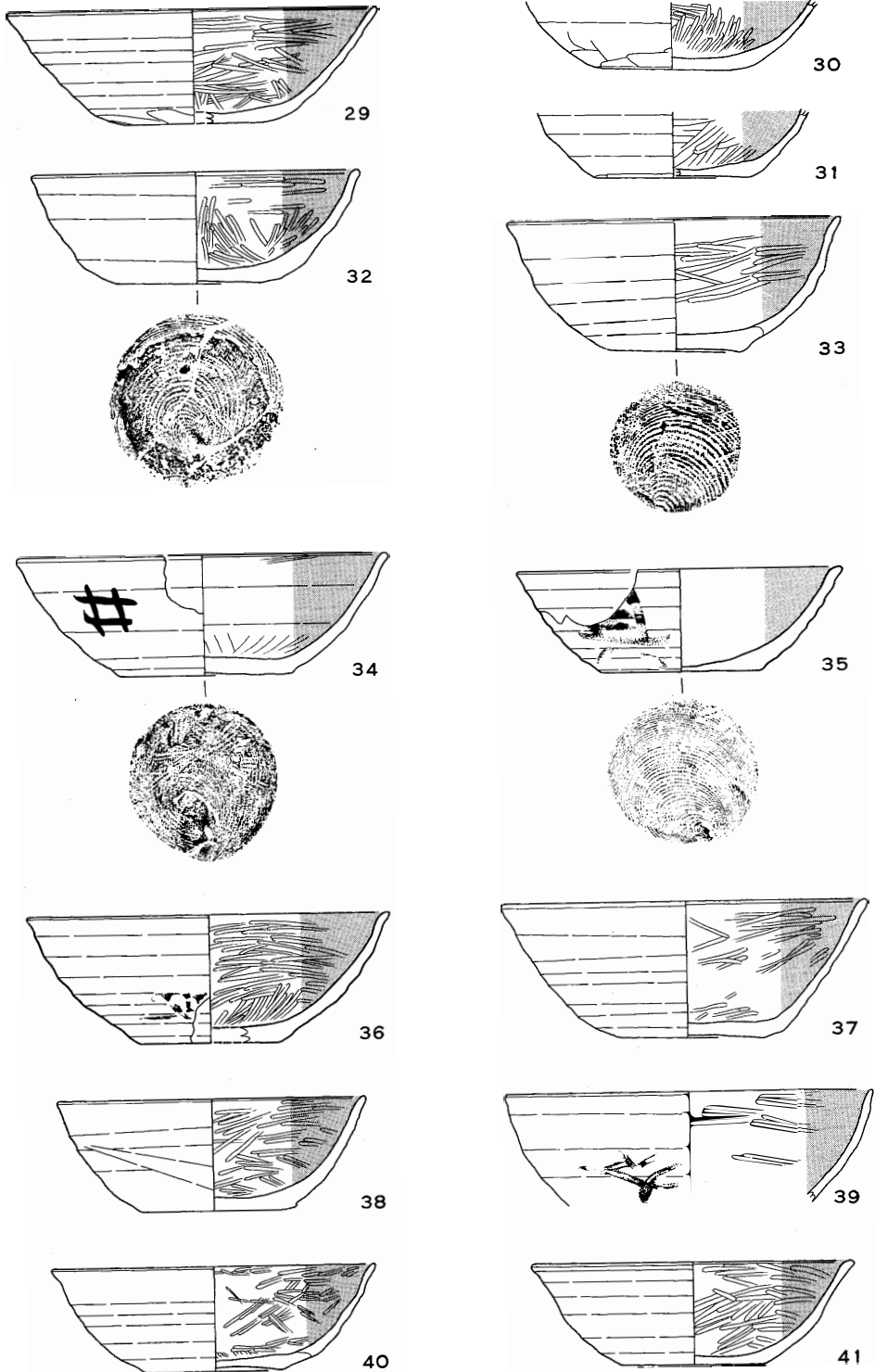


第125図 湿地性遺物包含層L-VIII出土土器 (1/3)

第7節 湿地性遺物包含層

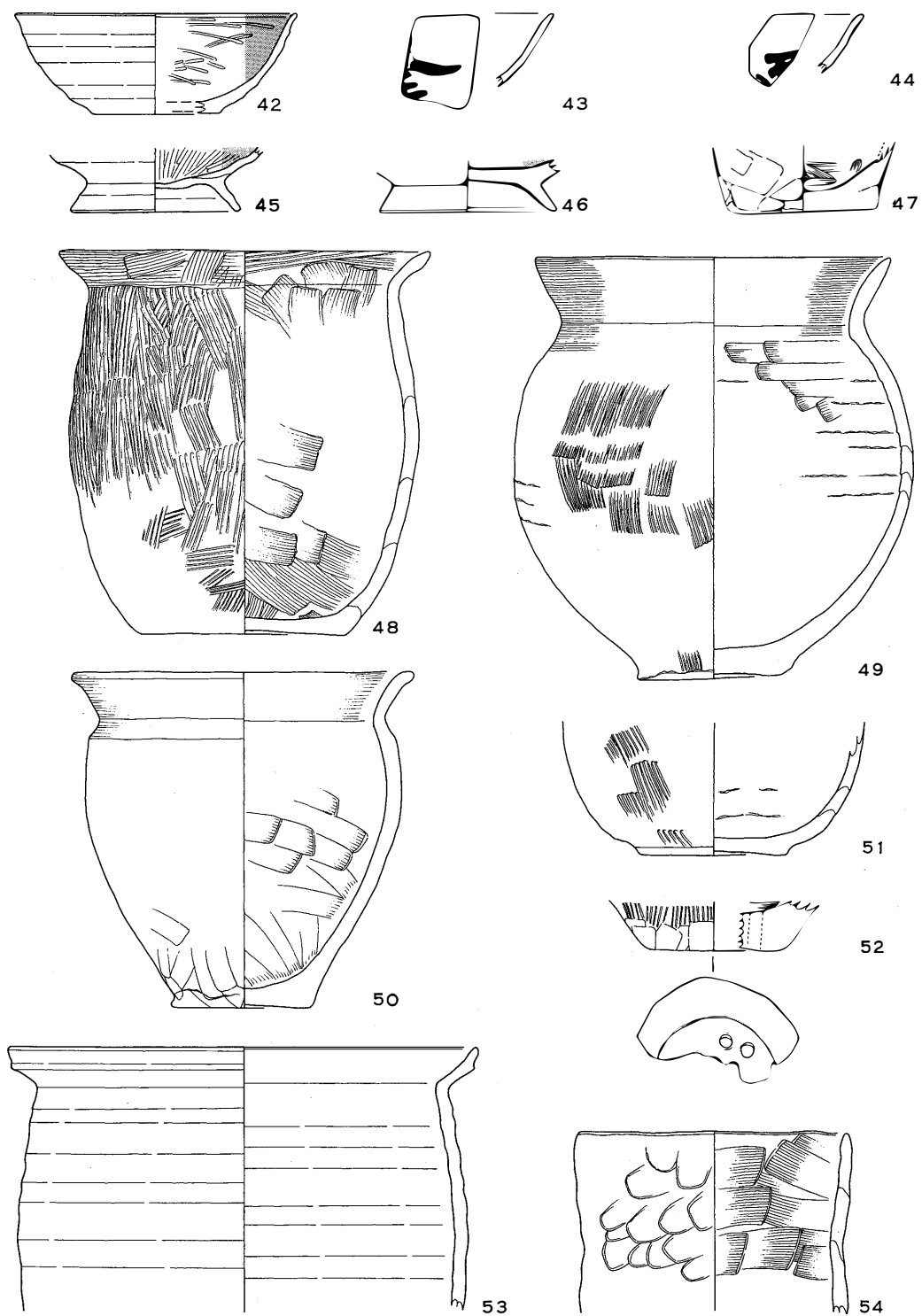


第126圖 湿地性遺物包含層L-VIII出土土器 (1/3)



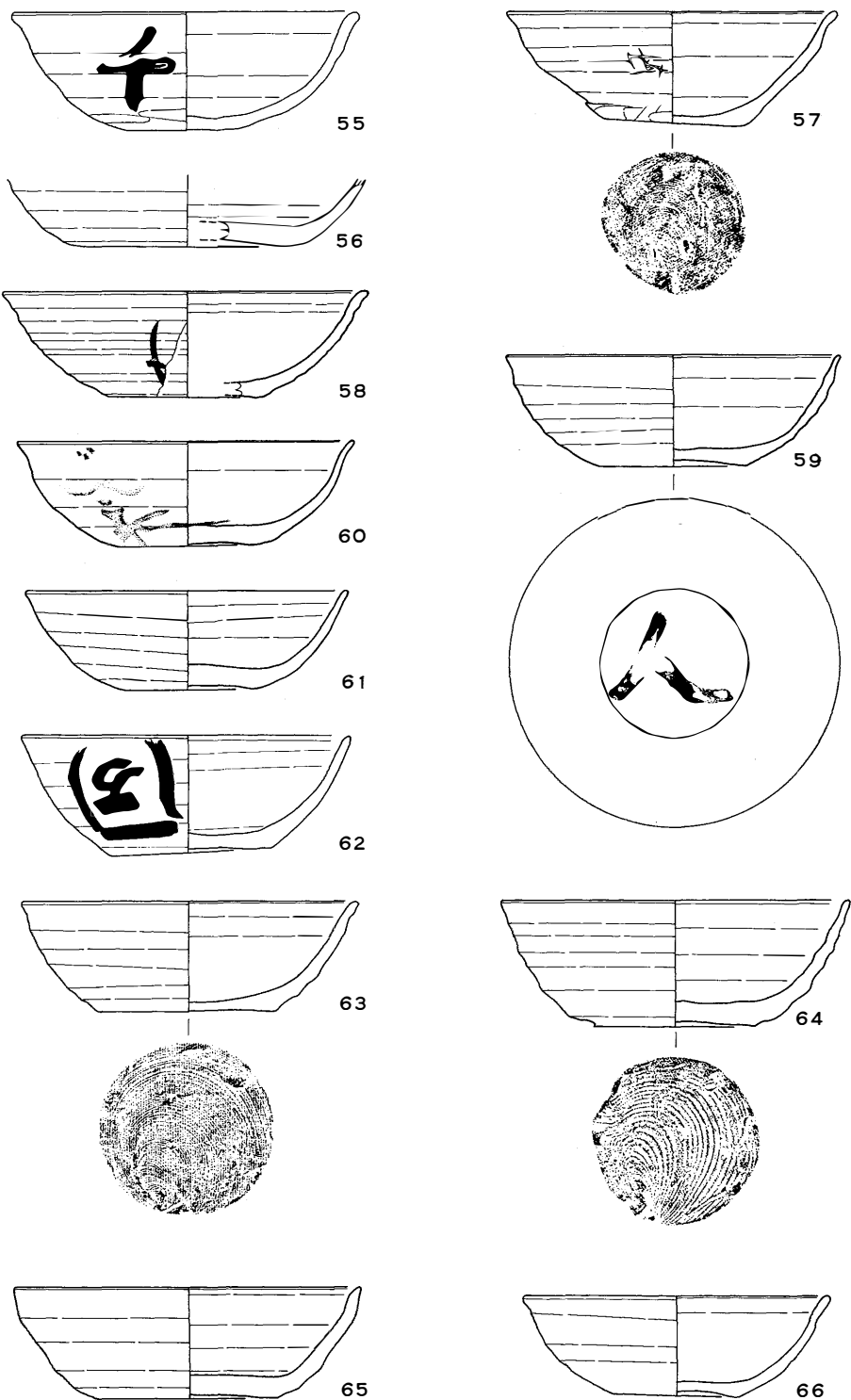
第127图 湿地性遺物包含層L-VII出土土器 (1/3)

第7節 湿地性遺物包含層



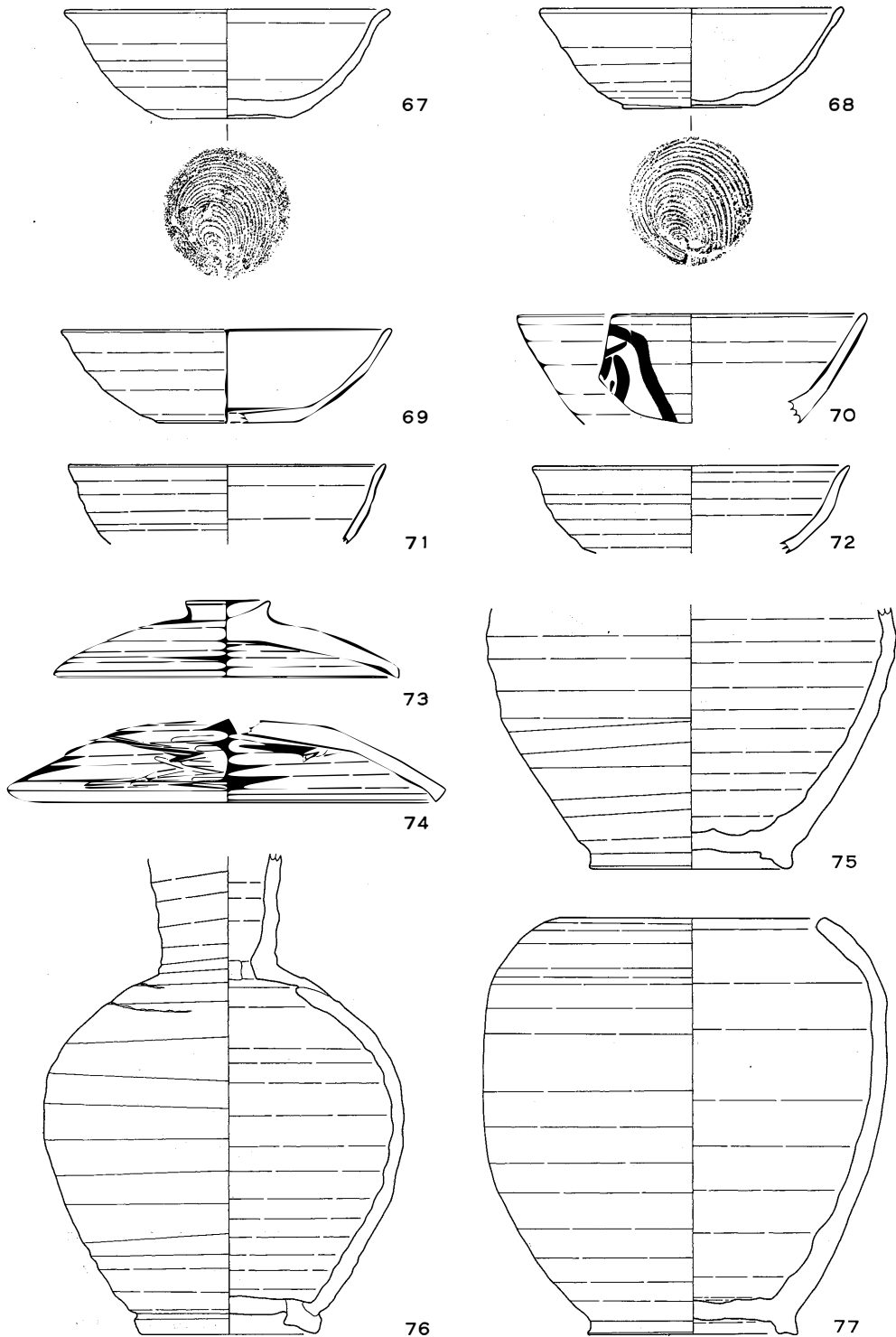
第128圖 湿地性遺物包含層L-VII出土土器 (1/3)





第129図 湿地性遺物包含層L-VIII出土土器 (1/3)

第7節 湿地性遺物包含層



第130圖 湿地性遺物包含層L-VIII出土土器 (1/3)

第57表 湿地性遺物包含層L-VII出土土器一覽表

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
125	1		土師器	杯	L-29	L-VII								
125	2		土師器	杯	B-28	L-VII	16.1							
125	3		土師器	杯	I-29-30	L-VII	17.1				3.2			
125	4		土師器	杯	I-29-30	L-VII	14.8							
125	5		土師器	杯	I-29-30	L-VII	16.7							
125	6		土師器	杯	E-27	L-VII	15.6				4.1			
125	7		土師器	杯	D-28	L-VII	15.8				3.9			
125	8		土師器	杯	E-29	L-VII	16.5			6.5	5.7			
125	9		土師器	杯	C-29	L-VII	13.6			5.6	4.5			
125	10		土師器	杯	C-28	L-VII	13.4			7.2	4.7			「秀」墨書
125	11		土師器	杯	C-27	L-VII	13.0			6.2	4.9			
125	12		土師器	杯	B-28	L-VII				10.4				
125	13		土師器	杯	G-29	L-VII				6.2				
125	14		土師器	杯	E-28	L-VII	13.2			5.0	4.2			
125	15	59-3	土師器	杯	F-28	L-VII	14.4			6.1	4.4			
126	16	59-2	土師器	杯	D-28	L-VII	13.8			5.7	4.5			「襷」墨書
126	17		土師器	杯	D-28	L-VII	14.6			7.0	4.5			「太」墨書
126	18		土師器	杯	D-29	L-VII	13.2			5.6	4.9			「福」墨書
126	19		土師器	杯	C-29	L-VII	14.0			5.3	4.9			不明墨書
126	20	59-1	土師器	杯	B-28	L-VII	13.7			7.0	4.6			「斎」墨書
126	21	59-4	土師器	杯	H-29	L-VII	15.8			5.2	5.3			
126	22	59-10	土師器	杯	B-28	L-VII	15.0			6.2	5.6			
126	23	59-5	土師器	杯	D-28	L-VII	13.5			5.0	4.1			
126	24	59-6	土師器	杯	D-27	L-VII	13.7			4.9	3.8			
126	25	59-7	土師器	杯	C-28	L-VII	13.4			5.4	4.7			「×」線刻
126	26	59-8	土師器	杯	C-28	L-VII	13.6			5.9	4.2			
126	27		土師器	杯	E-29	L-VII				6.6				
126	28	59-9	土師器	杯	F-28	L-VII	13.9			5.2	4.4			不明墨書
127	29		土師器	杯	B-29	L-VII	15.8			6.4	4.9			

第7節 湿地性遺物包含層

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)							備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径	高台高		
127	30		土師器	杯	C - 28	L - VII				6.1					
127	31		土師器	杯	C - 28	L - VII				6.6					
127	32	60 - 1	土師器	杯	C - 28	L - VII	14.1			6.7	4.8				
127	33		土師器	杯	D - 28	L - VII	14.2			5.6	5.6				
127	34	60 - 2	土師器	杯	L - 28	L - VII	15.7			7.5	5.1				「井」墨書
127	35	60 - 3	土師器	杯	C - 28	L - VII	13.8			6.8	4.4				「具」墨書
127	36		土師器	杯	C - 28	L - VII	15.4			6.0	5.5				不明墨書
127	37	60 - 4	土師器	杯	C - 28	L - VII	15.7			6.0	5.8				
127	38	60 - 5	土師器	杯	B - 28	L - VII	13.1			6.6	4.8				
127	39		土師器	杯	C - 28	L - VII	15.7								不明墨書
127	40	60 - 6	土師器	杯	B - 29	L - VII	13.9			5.8	4.5				
127	41		土師器	杯	B - 28	L - VII	13.6			6.0	4.4				
128	42		土師器	杯	I - 30	L - VII	12.4			5.6	4.5				
128	43		土師器	杯	I - 29	L - VII									破不明片 墨書
128	44		土師器	杯	C - 28	L - VII									破不明片 墨書
128	45		土師器	高台付杯	E - 28	L - VII						7.2	1.4		
128	46		土師器	高台付杯	F - 27	L - VII						7.8	1.2		
128	47		土師器	甕	F-27・28	L - VII				6.8					
128	48	60 - 7	土師器	甕	B - 28	L - VII	16.5	13.8	15.6	9.1	17.3				木葉痕
128	49	60 - 8	土師器	壺	I-29・30	L - VII	15.7	13.6	17.8	6.3	19.0				木葉痕
128	50	60 - 9	土師器	甕	B - 28	L - VII	14.9	12.8	14.1	6.0	15.1				
128	51		土師器	甕	B - 28	L - VII				6.5					
128	52		土師器	甕	G - 29	L - VII				(5.9)					多孔式
128	53	60 - 10	土師器	甕	D - 28	L - VII	20.7	18.4							
128	54	61 - 1	土師器	筒形	D - 28	L - VII	11.9								
129	55	61 - 2	須恵器	杯	G - 30	L - VII	14.6			5.4	5.0				「千」墨書
129	56		須恵器	杯	G - 30					8.8					
129	57	61 - 3	須恵器	杯	C - 28	L - VII	13.7			5.9	4.9				不明線刻
129	58		須恵器	杯	E - 29	L - VII	15.3			6.5	4.4				不明墨書

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
129	59	61-4	須恵器	杯	C-28	L-VII	14.0			6.2	4.7			「人」墨書
129	60	61-5	須恵器	杯	B-27	L-VII	14.1			6.0	4.5			不明墨書
129	61	61-6	須恵器	杯	C-28	L-VII	13.4			5.4	4.2			
129	62	61-7	須恵器	杯	C-28-29	L-VII	13.8			6.7	4.9			「因」墨書
129	63	61-8	須恵器	杯	D-28	L-VII	14.0			7.4	4.7			
129	64	61-9	須恵器	杯	B-28	L-VII	14.4			6.8	5.3			
129	65		須恵器	杯	B-28	L-VII	14.5			7.3	4.7			
129	66	61-10	須恵器	杯	E-28	L-VII	12.6			5.3	4.2			
130	67		須恵器	杯	D-28	L-VII	14.1			5.6	4.8			
130	68	61-11	須恵器	杯	D-28	L-VII	13.2			5.9	4.4			
130	69		須恵器	杯	B-28	L-VII	14.5			6.2	4.1			
130	70		須恵器	杯	F-27-28	L-VII	15.3							「因」墨書
130	71		須恵器	杯	F-28	L-VII	14.0							
130	72		須恵器	杯	F-27-28	L-VII	13.9							
130	73	61-12	須恵器	蓋	B-27	L-VII	15.1			3.5	つまみ径3.6	つまみ高0.9		
130	74		須恵器	蓋	F-28	L-VII	18.3							「+」墨書
130	75		須恵器	壺	D-27	L-VII			18.0	8.6				
130	76	62-1	須恵器	長頸壺	B-28	L-VII		5.0	15.8	7.8				
130	77	62-2	須恵器	無頸壺	B-28	L-VII	11.6		17.5	9.0	18.3			

### 須 恵 器

杯(55~72) 実測できたもの18個体, 実測不可能な破片は口縁部のみで16個体分を識別できた。

実測できたものを切り離し・再調整技法別に見ると2類・3b類・4b類各1点(55・56・57), 5b類12点(58~69)となり, 5b類が大部分を占め, 切り離しは2類の1点(不明)を除けばすべて回転糸切りである。

口径は12.6~15.3 cmの間にあり13.2~14.6 cmに多く分布し, 大きさはL-VIIよりやや小さな数値を示している。器形について $\beta_a$ ・ $\beta_b$ の数値を見ると $\beta_a$ は0.37~0.53,  $\beta_b$ は0.29~0.37の間にあり, 須恵器杯の多いL-VIIと比べると64が $\beta_a$ 0.53・ $\beta_b$ 0.34でL-VIIの分布範囲からはずれる以外ほとんどL-VIIの分布範囲内にあり, その分布からほぼ同じ器形を呈すると考えられる。 $\beta_a$ は2類(55)が0.14, 4b類(57)が0.07と他層の同類とは異なった数値を示すが, 5b類は0.09~

## 第7節 湿地性遺物包含層

0.14の間に分布しL-VII・IXとほぼ同じ傾向を示す(第141～144図)。

墨書は「千」(55),「人」(59),「冂」(59),「冂?」,不明(58・60)の6点があり,59は底部に有し,他はすべて体部に有する。線刻は57の体部に意味不明のものがある。

蓋(73・74) 2点確認され73はほぼ完形であった。つまみはリング状を呈し,体部は低いドーム状をなし,末端はほぼ垂直に下を向くようになっているが,内面はわずかに屈曲しているのみである。調整は全面ロクロによる。74はつまみと体部の一部を欠損するものである。やや深い形を呈し,上面は平たくなり末端は内側に折れ曲るような形になっている。内外面ともロクロ調整の後,ていねいなミガキが加えられ光沢を有している。

壺(75～77) 3点確認され,他に長頸壺の口縁部小破片が数点あるが,どの個体のものかは不明である。75は底面高台を有するもので,体部下半部には回転ヘラケズリ再調整が加えられている。76は丸味のある体部を有する長頸壺で,頸部上半～口縁部は欠損している。底部には厚味のある高台が付けられている。体部中位から肩の部分には回転ヘラケズリ再調整が加えられているが,肩の上部外面には頸部を貼り付けた痕跡が見られる。77は底部に高台と長めの体部を有する無頸壺である。体部中位はほぼ円筒状で肩の部分は丸味を持って口縁部に至る。口縁部の上面には軽いケズリ痕が見られる。

### L-IX (第131～135図 第61～64図版 第58表)

#### 土 師 器

杯(1～19) ロクロを用いないものは12個体識別でき,その内7点が実測できた。有段丸底のものは11個体あり,6点(1～6)が実測できた。1・2は丸底で段が中位にあり,口縁の外傾するI-2c-C<sub>2</sub>-(ca-b)類であるが,2は段の位置が若干低く,口縁が長いこと異なった形となっている。3は同じく丸底で,段は中位にあり口縁の内湾するI-2c-A<sub>2</sub>-(ac-a)類で,この特徴は内面がナデとなっている点である。4～6は丸底で段が下位にあり,口縁の内湾するI-3c-A<sub>1</sub>-(ac-b)類である。4は口唇が外に屈曲している。6はケズリが底面のみでなく口縁部にも加えられたものである。7は無段で丸底と考えられるもので,口縁は内湾し,外面にケズリ,内面にナデの加えられた※-4-E<sub>1</sub>-(c-a)類である。

ロクロ調整のものは22個体識別でき,12点が実測できた。識別できたものの内訳は1類1個体,2類4個体(8・9),2b類2個体(10・11),4b類6個体(12～15),5b類9個体(16～19)で,これらはすべて内面はミガキと内黒である。切り離し技法でみると,回転糸切りによる2b・4b・5b類合わせて17個体で77%,2類にもある可能性を考えると80%以上は回転糸切りによると考えられる。再調整は1類の1個体が回転ヘラケズリによる以外は,他の再調整のある12個体すべて手持ちヘラケズリである。

器形的に見ると口径が13.3～20.1 cmに分布し、他の層のように、ある範囲に集中するような傾向は少なく、まばらに分布している。L-IXではL-VII・VIIIに1点づつしか見られなかった口径17 cm以上のものが5点あり、20 cmを越すものも見られ、口径が大きいものの比率が高くなっている。底径について見ると5.7～8.3 cmに分布し、特に6.0～7.2 cmに集中しており、この範囲はL-VIIIの範囲と重複している。したがって、口径と底径を個別に見ると口径が大きいものが多い割に、底径は大きくなっていないように見える。また、口径と底径の比である $\frac{口径}{底径}$ を見ると、0.38～0.53にあり、半分以上が0.45以上となり、全体として底径の大きな器形が多くなっている(第137・138図)。 $\frac{口径}{底径}$ は0.08～0.14の範囲で、0.11・0.12に集中している(第139図)。これらについてはL-VII・VIIIとほぼ同じと考えられる。

墨書は「丈」「秀?」(11)、「真」(12)、「勢」(13)、不明2点(16・17)がある。

高杯(20) 杯部底面と脚部の破片である。脚外面は背の低いほぼ円筒形で、内側は中空であり、「ハ」形になっている。裾部は「ハ」形に開き、末端は下面で水平に近くなっている。調整は脚外面がケズリ、内面がナデ、杯内面が内黒・ミガキとなっている。

鉢(21) ロクロを用いない丸底で内黒の鉢である。ほぼ球を半截したような形を呈しており、口唇部内面は斜に成形されている。調整は外面がケズリの後ミガキ、内面はミガキとなっている。分類はI-1-F<sub>1</sub>-(cb-b)類である。

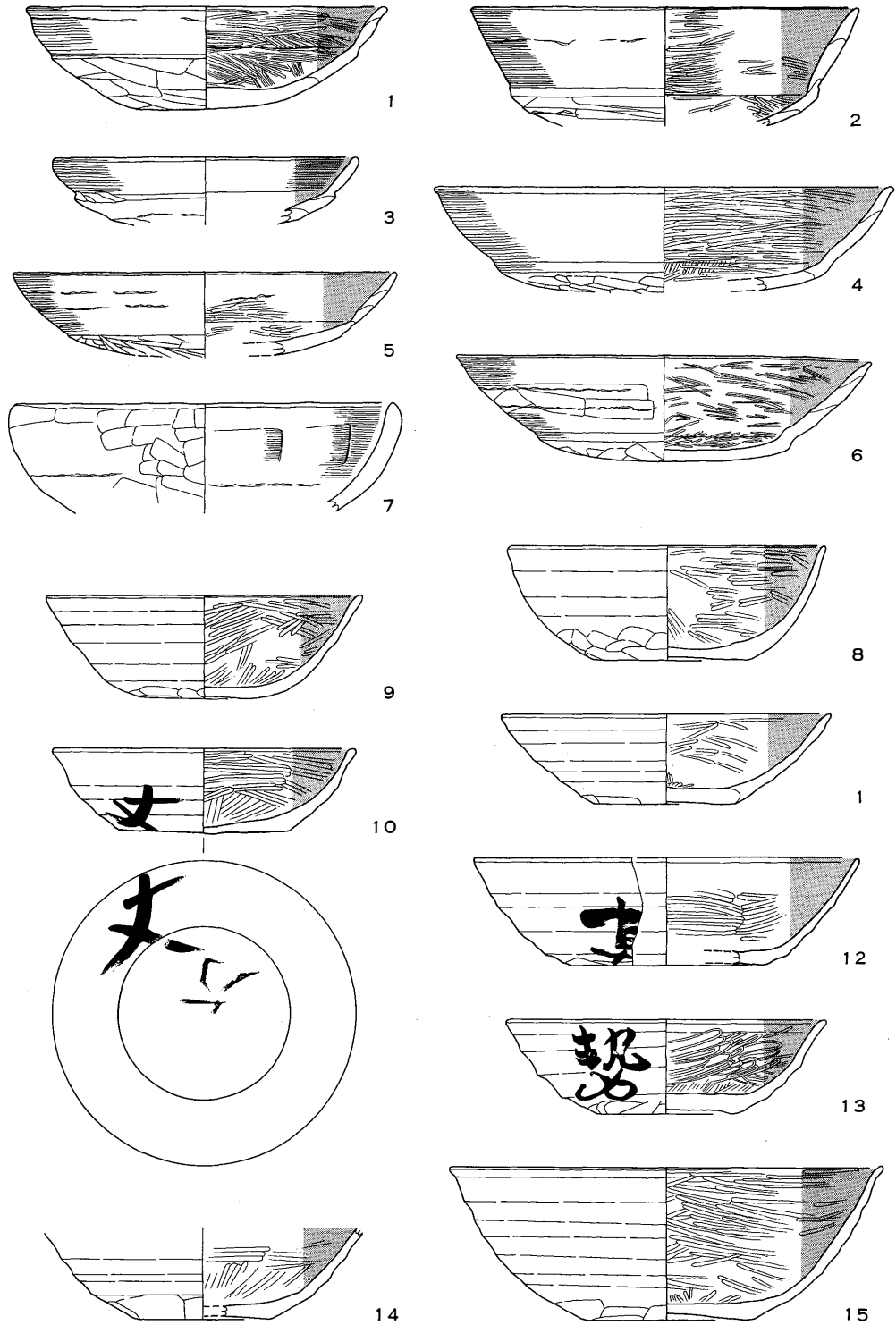
甕(22～24) 実測できたもの3点の他、外面にハケメのある破片数点が出土している。22は体部下半～底部のもので、底面は粗いケズリにより平底に作られ、中央がやや窪んでいる。体部外面は縦方向、底部近くは横方向のケズリが加えられているが、内面は荒れており不明である。23は口唇部～体部中位の破片である。体部は長胴形を呈すると考えられ、頸部を持たず「く」形に外反する。体部外面はハケメ、口縁部はヨコナデ、体部内面はヨコナデ、口縁部は横方向のハケメが加えられている※-5a-B<sub>1</sub>-(ad-ad)類である。24は体部上部より底部までのもので、底部は木葉痕のある円板状で、体部は中位に最大径のある長胴形を呈する。調整は内外面とも粗いナデ痕が見られるIIIc-5-※-(a-a)類である。

甑(28) 頸部に段を有し、体部が砲弾形を呈する甕形の無底式の甑である。口縁は直立して外反し、体部調整は外面がハケメの後ケズリ、内面はミガキ、口縁部は内外ともナデである。分類はI-5a-D<sub>2</sub>-(dca-ab)類である。

筒形土器(25・26) 25は口縁から体部に向かってややすぼまり、26はやや開く形を呈する。両方とも粘土紐痕が明瞭である。25の内面はハケメとナデ、外面は所々に指の痕跡があるが荒れて不明な部分が多い。26は内外面ともナデ痕が見られる。

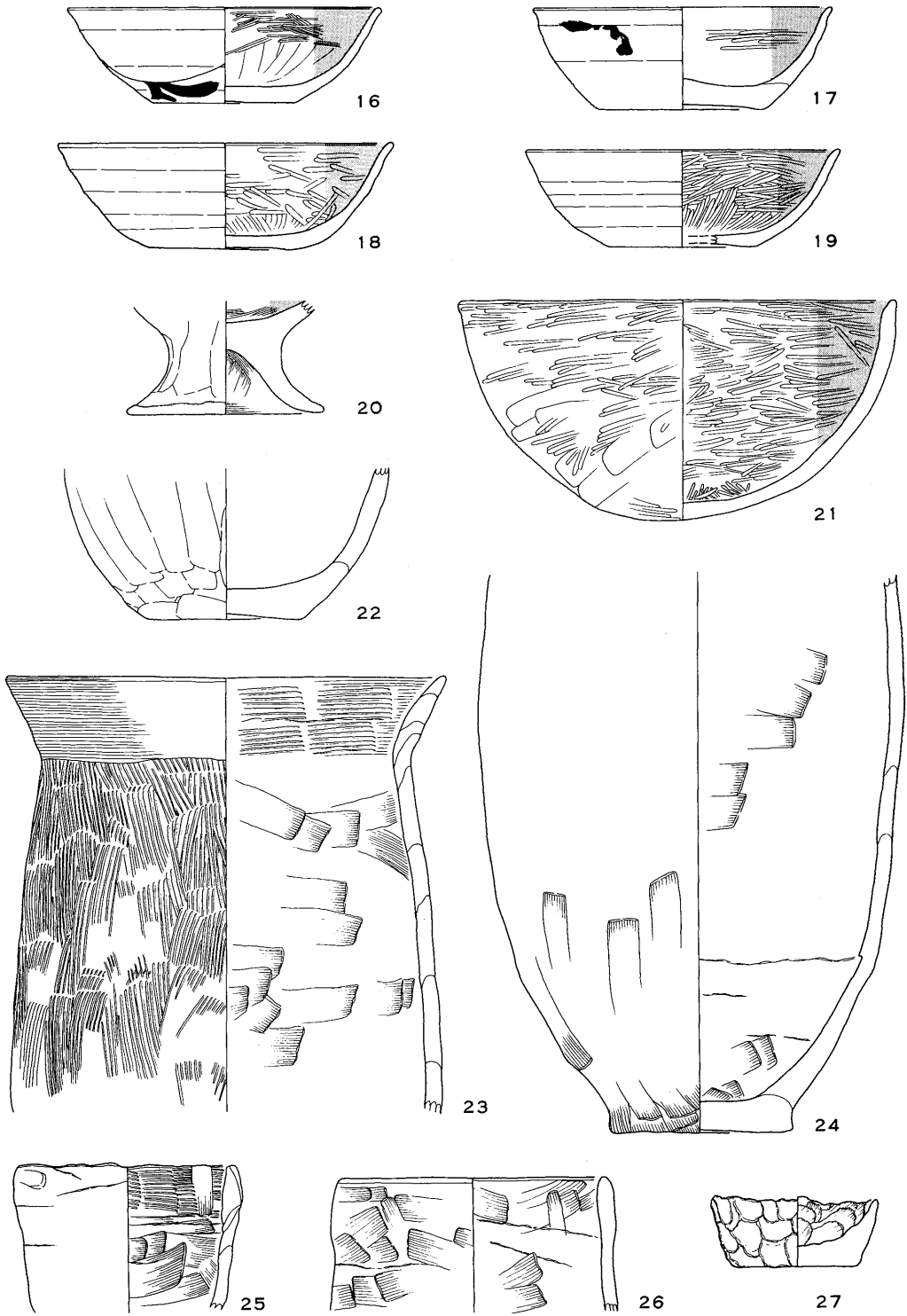
手捏ね土器(27) 小さな鉢状のものである。内外面とも指の痕跡が著しく、底面は何か平らな台に押し付けて作ったように整っている。

第7節 湿地性遺物包含層



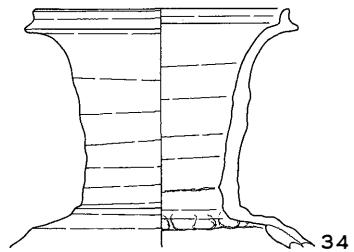
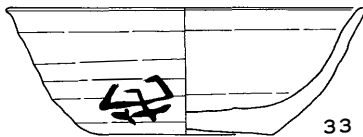
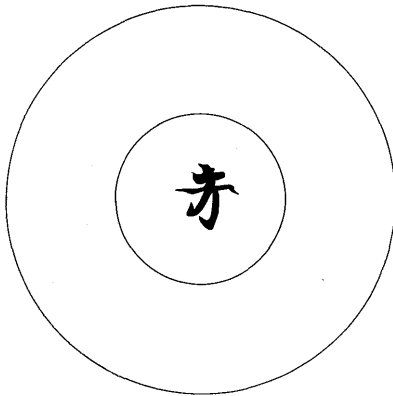
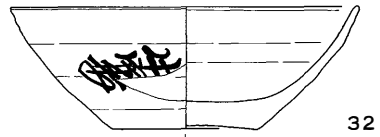
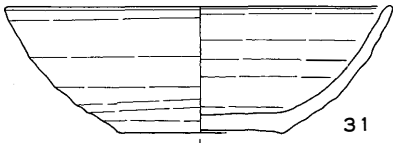
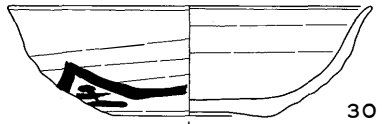
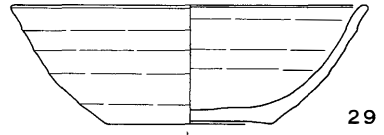
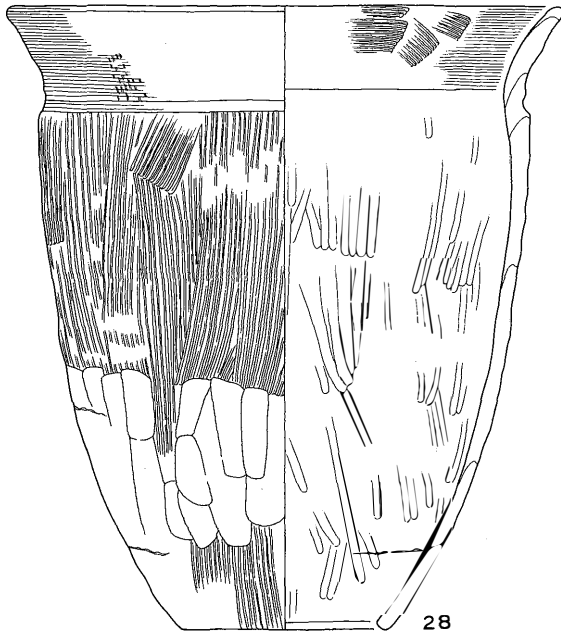
第131圖 湿地性遺物包含層L-IX出土土器 (1/3)



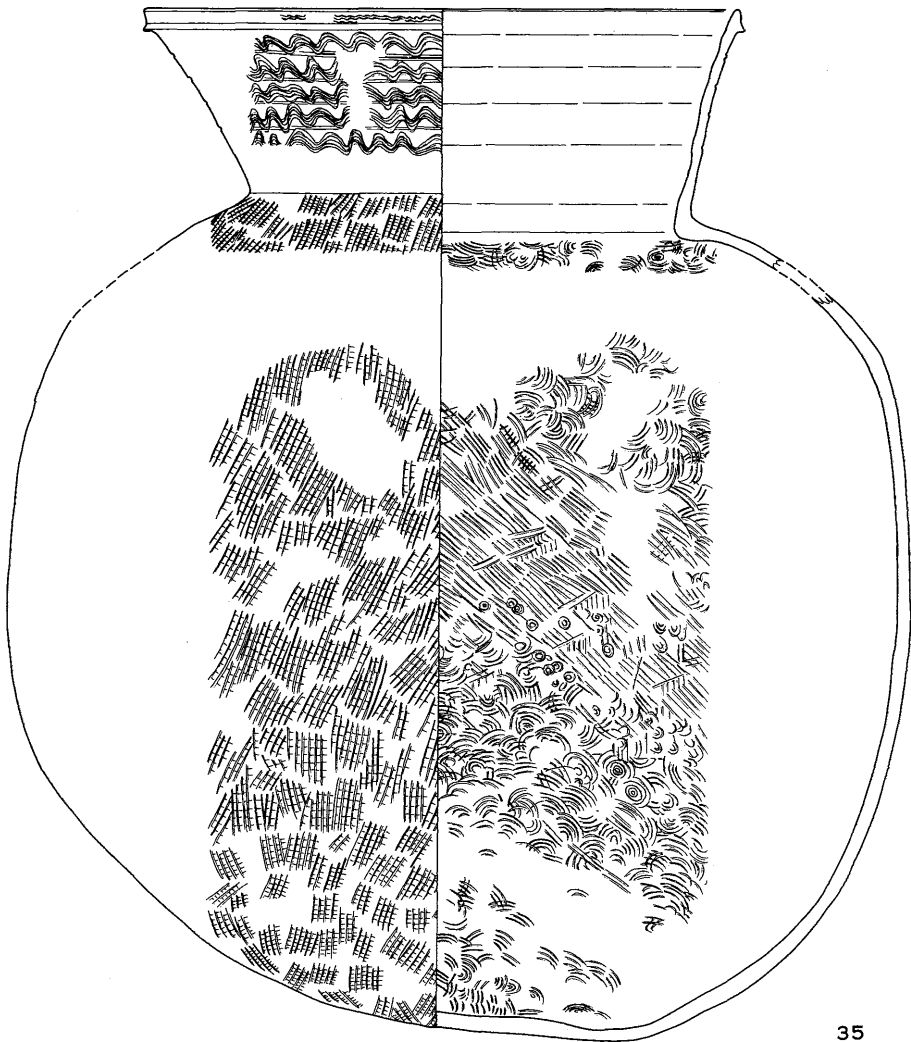


第132図 湿地性遺物包含層L-IX出土土器 (1/3)

第7節 湿地性遺物包含層



第133圖 湿地性遺物包含層L-IX出土土器 (1/3)



35

第134図 湿地性遺物包含層L-IX出土土器 (1/6)

須恵器

杯(29~33) 7個体識別でき、その内実測できたのは5点であった。識別できたものの内訳は、底部全面に回転糸切り痕のある5b類6個体(29~33)、丸底になると考えられる破片1点である。

器形は口径が13.4~15.2 cm、底径が6.0~6.8 cmでL-V・VII・VIIIの各分布範囲内に収まる。 $\frac{1}{4}$ 、 $\frac{1}{2}$ も0.43~0.48、0.30~0.37でL-VII・VIIIと同一形態を有すると考えられる(第144図)。

墨書は「全」(29)、「秀」(31)、「中冨?」(32)、不明(33)がある。なお、32の底面には「ナ」の線刻がある。

壺(34) 長頸壺の肩より上の部分である。全体にロクロ目が明瞭であり、肩と頸部の間には低い凸帯が見られる。頸部下半はほぼ直立し、その上はやや外傾気味に立ち上がり、口縁部で外反し

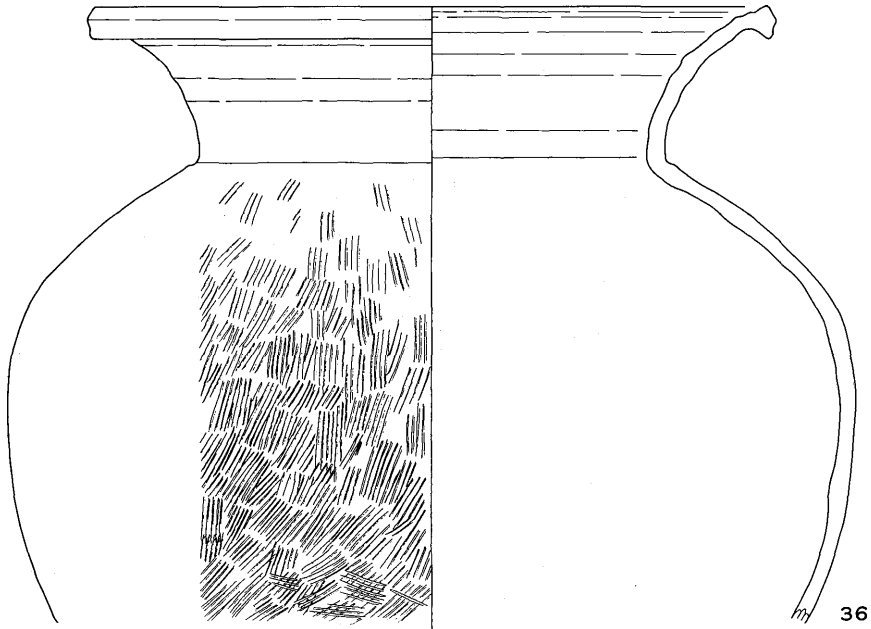
第7節 湿地性遺物包含層

末端は水平近くなっている。口唇上端は著しく立ち上がり、断面が「T」形に近くなっている。

大 甕(35・36) ある程度形がまとまり、実測できたのは2点である。

35はほぼ全体の様相を知ることができるものであるが、肩部の一部が欠損しており、体部と肩より上の部分は直接はつながらない。大きさは体部直径約72cm、高さ約81cm、口径約47cm、頸部径約35cmの丸底になるもので、体部、口縁部ともゆがんでいる。体部外面は格子状タタキメ、内面は同心円と短い線状のタタキメ、頸部に5段の波状文が見られる。色は全体に青灰色を呈する。

36は体部より上のみを残すもので、体部最大径67.4cm、口径53.2cm、頸部径37cmを測る。最大径は体部上位にありやや肩が張っている。体部外面には短い線状のタタキメがあり赤褐色を呈する。



第135図 湿地性遺物包含層L-IX出土土器 (1/6)

第58表 湿地性遺物包含層L-IX出土土器一覧表

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
131	1	61-13	土師器	杯	B-28	L-IX	15.9				4.5			
131	2		土師器	杯	G-30	L-IX	17.0							
131	3		土師器	杯	F-28	L-IX	13.5							
131	4	62-3	土師器	杯	G-30	L-IX	20.1							
131	5		土師器	杯	H-28	L-IX	17.0							

第3章 遺構と遺物

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
131	6	62-4	土師器	杯	E-27	L-IX	18.4				4.7			
131	7		土師器	杯	B-28	L-IX	17.3							
131	8	62-6	土師器	杯	C-28	L-IX	14.9			6.9	5.1			
131	9		土師器	杯	D-29	L-IX	14.2			6.0	4.6			
131	10		土師器	杯	B-28	L-IX	14.4			6.2	4.2			
131	11	62-7	土師器	杯	C-28	L-IX	13.3			7.0	3.7			「丈」,「手」,「芳」墨書
131	12		土師器	杯	B-28・29	L-IX	16.9			8.3	4.8			「真」墨書
131	13	62-8	土師器	杯	C-28	L-IX	14.1			6.0	4.2			「勢」墨書
131	14		土師器	杯	E-28	L-IX				5.7				
131	15	62-9	土師器	杯	C-28	L-IX	19.2			7.2	6.8			
132	16	62-10	土師器	杯	B-29	L-IX	14.1			6.4	4.3			
132	17	62-11	土師器	杯	D-28	L-IX	13.3			7.0	4.6			
132	18		土師器	杯	C-29	L-IX	14.8			6.2	4.8			
132	19		土師器	杯	D-29	L-IX	14.0			6.6	4.4			
132	20	62-12	土師器	高 杯	G-27	L-IX					8.8	3.0		
132	21	63-1	土師器	鉢	B-29	L-IX	19.5			9.9				丸 底
132	22		土師器	甕	G-27	L-IX			6.8					
13	23		土師器	甕	F-30	L-IX	19.7	16.6	19.4					
132	24	63-3	土師器	甕	E-24	L-IX			18.5	7.7				木 葉 痕
132	25		土師器	筒 形	D-28	L-IX	9.9							
132	26	63-4	土師器	筒 形	D-28	L-IX	11.6							
132	27	63-2	土師器	手捏ね	B-28	L-IX	7.2			5.3	3.1			
133	28	63-6	土師器	甕	D-27	L-IX	21.6	18.8						
133	29	63-5	須恵器	杯	D-28	L-IX	14.0			6.5	4.8			
133	30	63-7	須恵器	杯	C-29	L-IX	14.1			6.0	4.3			「全」墨書
133	31	63-10	須恵器	杯	E-28	L-IX	15.2			6.5	5.0			「手」,「芳」墨書
133	32	63-8	須恵器	杯	B-27	L-IX	13.6			6.0	4.9			「岩?」墨書
133	33	63-9	須恵器	杯	B・C-28・29	L-IX	14.3			6.8	5.0			不明墨書
133	34		須恵器	長頸壺	B-28・29	L-IX	10.1	6.0						

第7節 湿地性遺物包含層

L-X (第136図, 第59表)

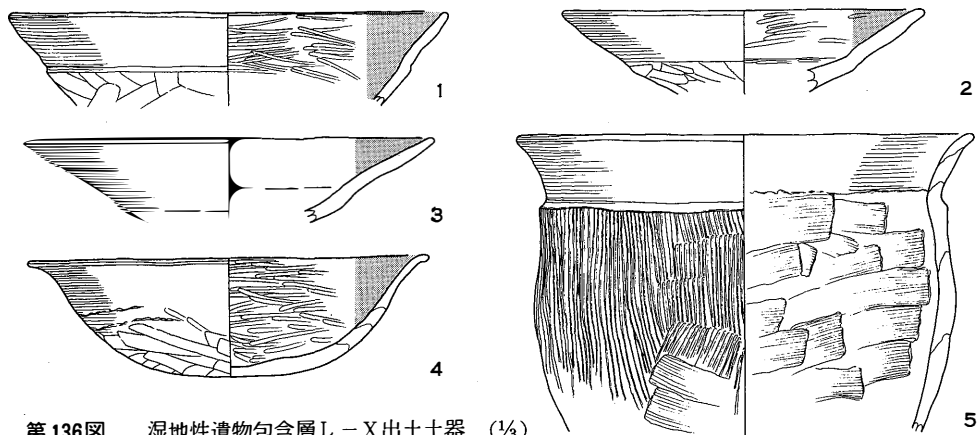
土 師 器

杯(1~4) L-X出土の土師器杯はロクロを用いない丸底のもののみで, 有段丸底のもの5個体無段丸底のもの1個体が識別でき, 有段のもの3点(1~3), 無段のもの1点(4)が実測できた。

1~3とも内面の段の部分で大きく屈曲し, 外反する形を呈する。1~3とも底面はケズリ, 口縁はヨコナデ, 内面はミガキ・内黒のもので, 1・2は段が中位にあり, I-2c-C<sub>2</sub>-(ac-b) 3は段が下位にありI-3c-C<sub>2</sub>-(ac-b)であるが, 3は段の屈曲が大きく緩やかなため, 特異な形を呈する。4は無段丸底で口縁が外反する。外面は底部(器高の約下半分)がケズリ, 口縁がヨコナデ, 内面はミガキ・内黒のIb-4-D<sub>1</sub>-(ac-b)類である。

甕(5) やや太めの長胴形の体部を有し, 頸部に段を有する口縁の外反するものである。外面は体部がハケメとナデ, 口縁部はヨコナデ, 内面にはナデの加えられた※-5a-B<sub>2</sub>-(ad-a)類である。

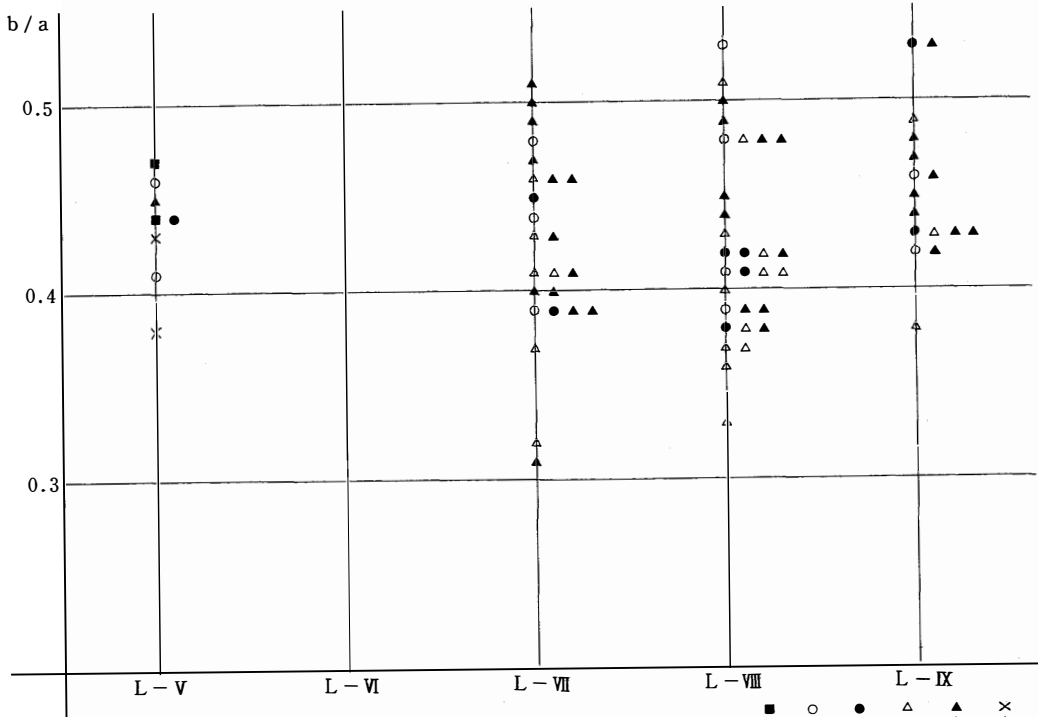
この他に須恵器杯と思われる破片が1点出土しているが器形等は不明である。(木本 元治)



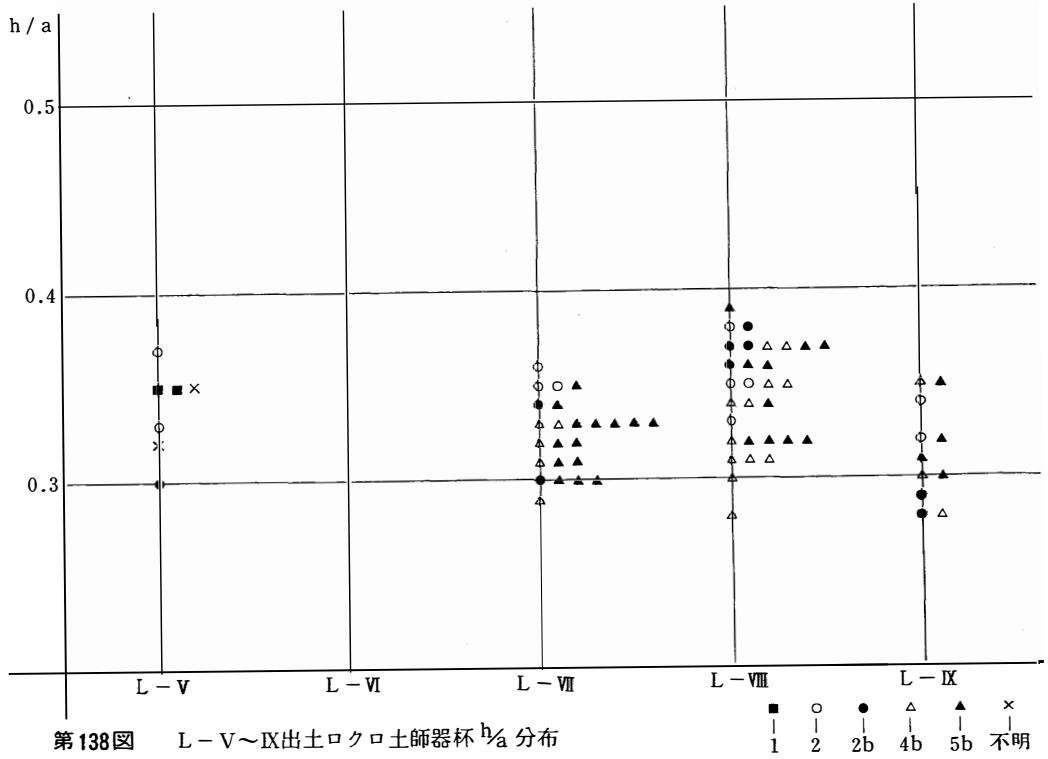
第136図 湿地性遺物包含層L-X出土土器 (1/2)

第59表 湿地性遺物包含層L-X出土土器一覧表

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
136	1		土師器	杯	F-28	L-X	17.3							
136	2		土師器	杯	E-28・29	L-X	14.1							
136	3		土師器	杯	E-28・29	L-X	16.2							
136	4		土師器	杯	F-28	L-X	16.0				4.7			
136	5		土師器	甕	D-28	L-X	18.0	15.7	16.8					

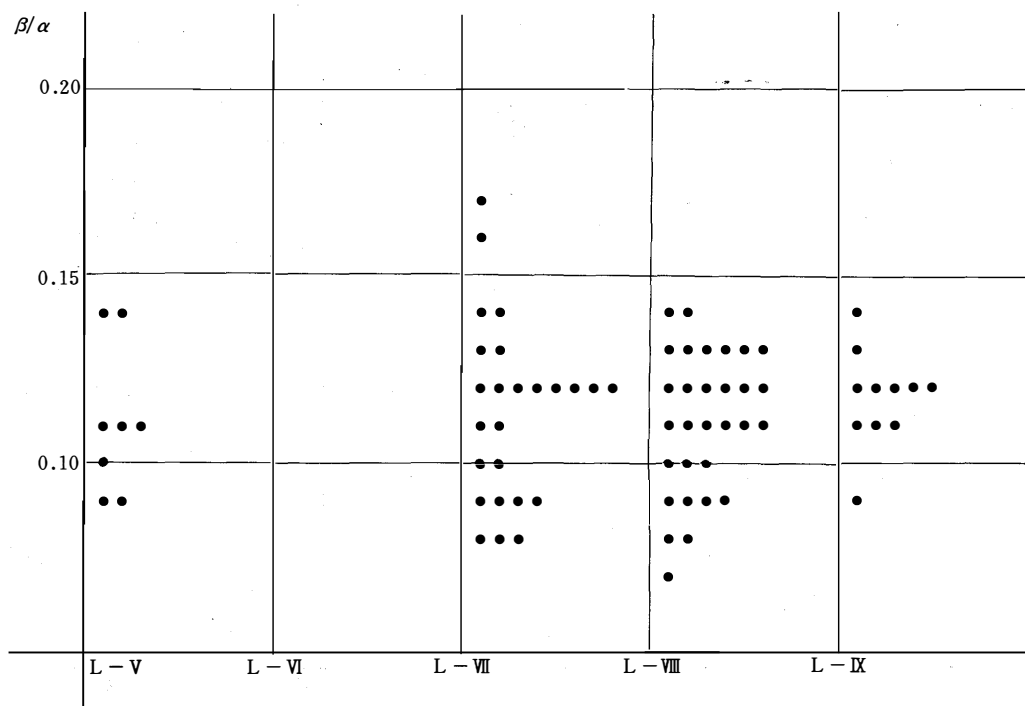


第137図 L-V~IX出土クロ土師器杯  $b/a$  分布

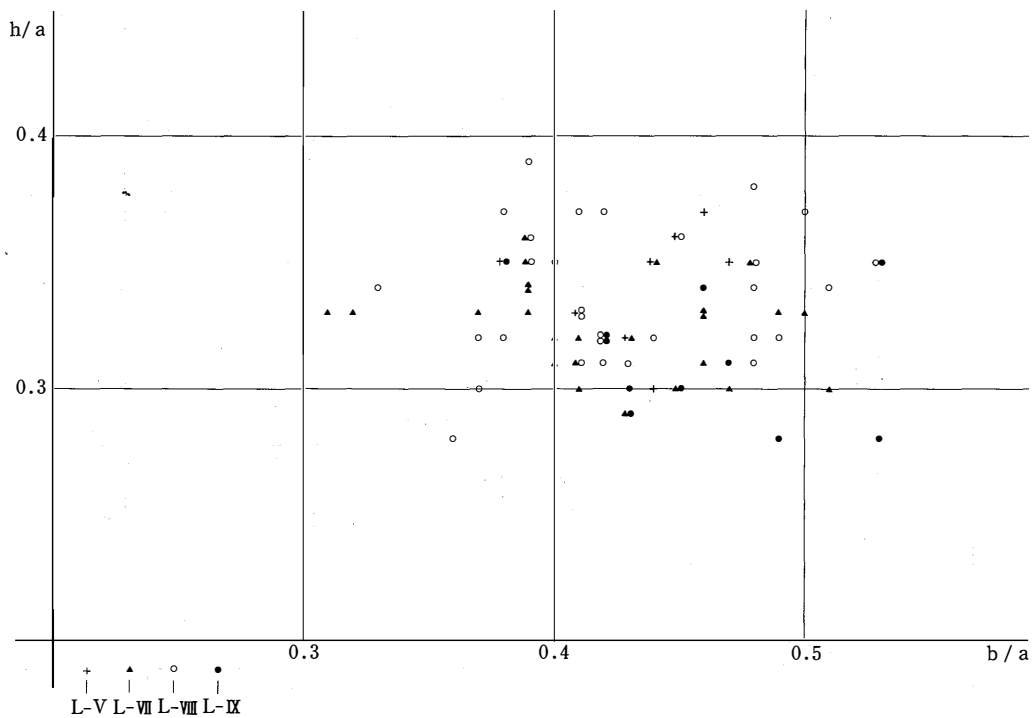


第138図 L-V~IX出土クロ土師器杯  $h/a$  分布

第7節 湿地性遺物包含層

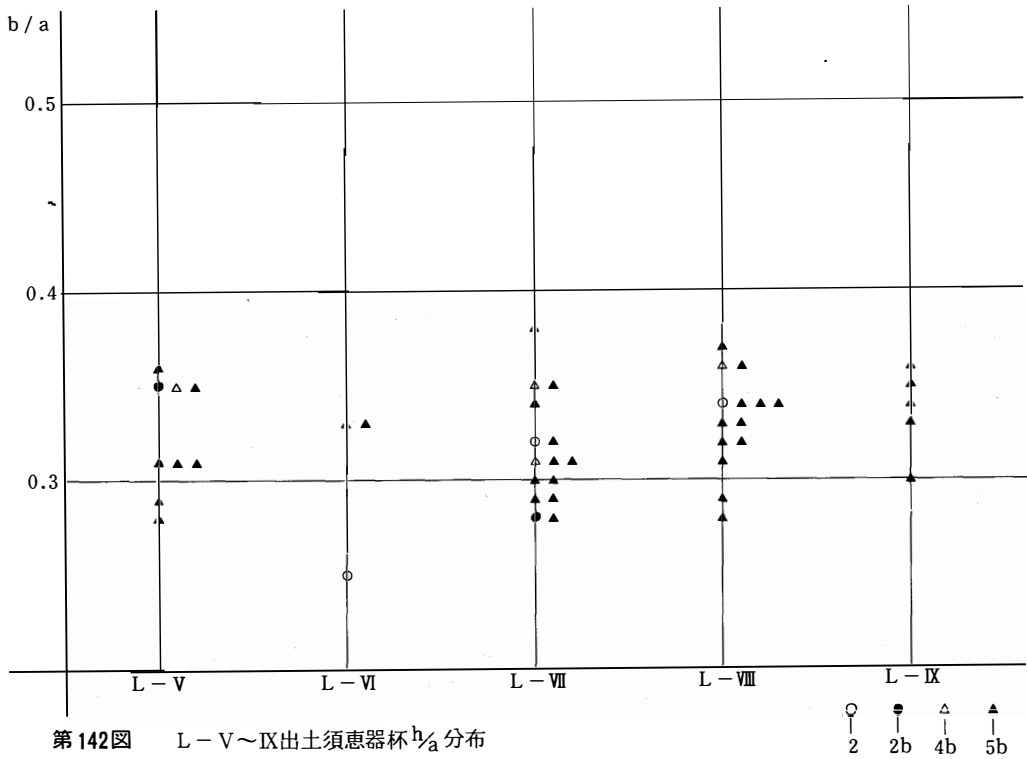
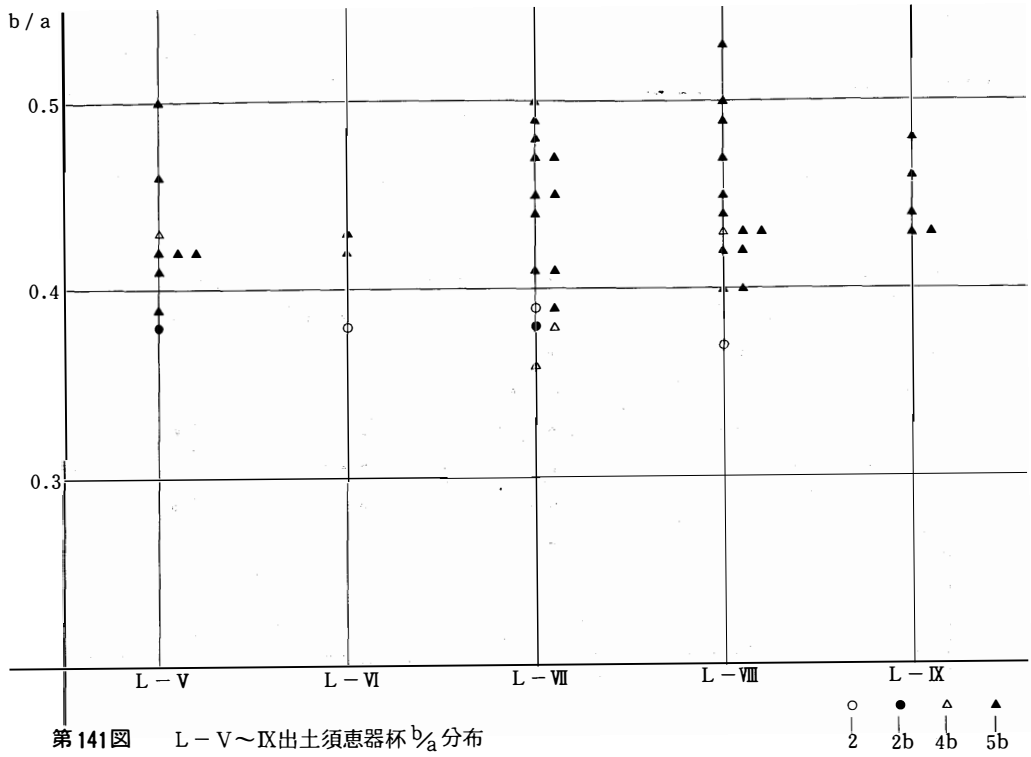


第139図 L-V~IX出土クロロ土師器杯  $\beta/\alpha$  分布

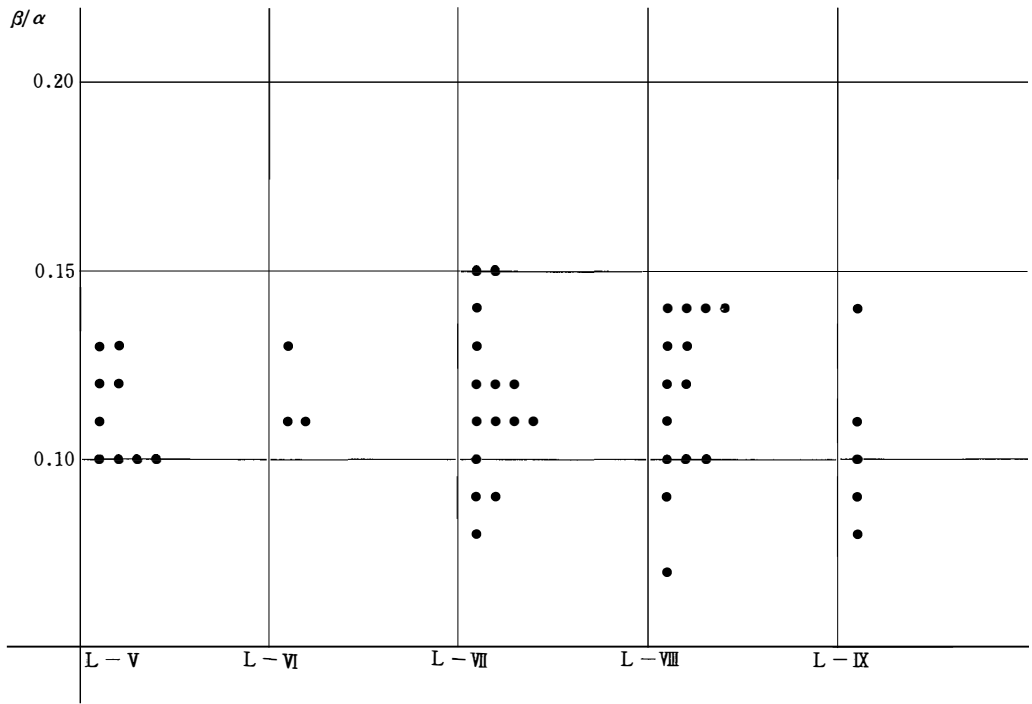


第140図 L-V~IX出土クロロ土師器形態分布

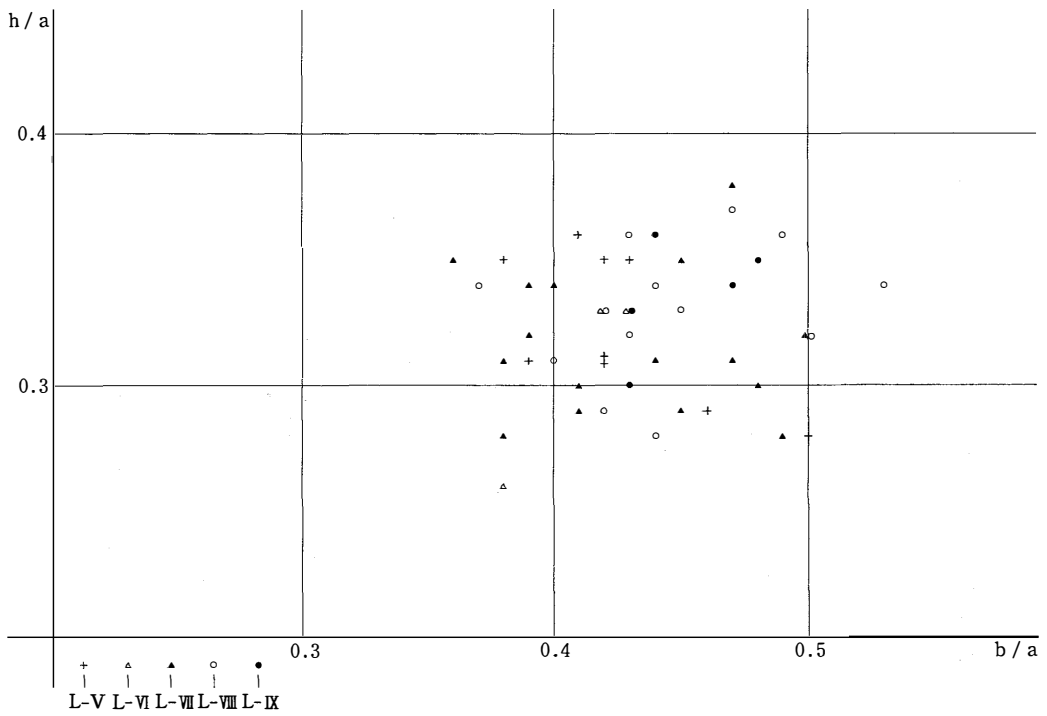




第7節 湿地性遺物包含層



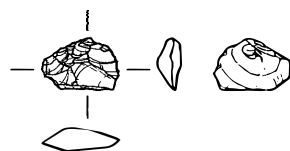
第143図 L-V~IX出土須恵器杯 $\beta/\alpha$ 分布



第144図 L-V~IX出土須恵器杯形態分布

## 2. 石 器 (第145図)

L-VIIIより頁岩製の小剥片が1点出土している。幅1.87cm、長さ1.60cm、厚さ0.52cmを測る。表面は下と横方向から1回の剥離、それを切るように上方向から6~7回の小さな剥離が加えられ、表面を調整している。打面はこの上からの剥離面を切るように側面から2~3回剥離を加えて形成されている。裏面は一面が剥離面となっており、上端部にはポジバルブがある。(木本 元治)



第145図 湿地性遺物包含層出土遺物 (1/2)

## 3. 木 製 品

II区第27グリッドラインの北側はIII区第1グリッドライン付近に至るまで深さ80cmほどの落ち込みが続いており、この落ち込みを湿地性遺物包含層としてII区第27グリッド以南と区別した。この湿性に富む包含層は木質遺物保存の好条件を備えていたため、各層(L-V~L-X)から土師器・須恵器と共に多量の木製品、自然木、植物遺体が出土した。このうち人為的加工の痕跡を有するものを木製品とし、自然遺物と区別してここで扱った。なお、湿地性遺物包含層内からは、B-28グリッドに井戸跡が検出され、井戸枠板と杭が21点、井戸跡内から木製品が4点出土している。

湿地性遺物包含層内出土の木製品と自然木の総数は430点である。このうち井戸枠板と杭の21点は第49表(第3章第5節)に記載したが、井戸跡内出土の4点を含む木製品278点は第63表に、自然木・木片123点とひょうたん3点・竹2点の計128点は第64表に示し、樹皮3点については表示しなかった。第63表の木製品278点のうち人為的加工の痕跡が明瞭で遺存度が大きい150点については以下に図示及び個別説明を加える。

木製品はその性質上、脆弱なものが多く、出土時点ですでに原形をとどめなかったものや、取り上げ時に損壊したもの、また遺憾にも長期保存中に損なったものもあり完形に復し得るものはごくわずかであった。このことは、これら木製品の多くが他の製品と組み合わせられてその機能を果たし得るという特性と合わせて、機能、用途の推定に著しい障害となったが、他遺跡例や民俗例などを参考に、ここでは出来得る限りの分類を試みた。しかし多種多様であるが故に整然と律し得なかったことは否めない。

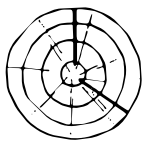
また、調査時の遺物取り上げの際、それぞれに番号を付したが(旧番号)、遺物の移動に伴い番号を失った遺物もあり、混乱をきたしたため整理時に新たに番号を与えなおした(新番号)。よって出土位置、層位が不明確となってしまった遺物もあり、遺物全体の平面的広がり及び層位的把握はなし得なかった。

## 第 7 節 湿地性遺物包含層

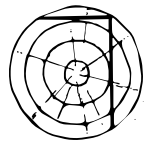
以下、木製品に関する凡例を記す。

1. 本文中の遺物個々の番号は表番号、挿図番号、写真図版番号のいずれにも一致する。
2. 破損が著しく写真撮影が困難なため写真図版に掲載しなかったものもある。
3. 接合困難なため実測図と写真図版とが若干異なる形状を呈する場合がある。
4. 本文中の上下左右表裏の位置関係はすべて実測図に準拠したものである。
5. 表中の「遺物番号」は整理時に与えた新番号である。
6. 出土位置、層位の不明確な遺物は表中該当欄を空欄とし、本文中では湿地性遺物包含層の出土としたが、この記載は L-V~L-X のいずれかから出土したことを示すものである。
7. 樹種は、関西外国語大学教授、嶋倉巳三郎氏の同定結果によるものである。
8. 表中「法量」は最大値を記載し、完形ではないと判断したものについては現存長を( )で示した。
9. 木取法及び手法については下記に従った。

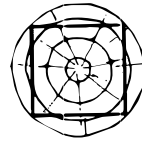
木取法 木取法は、下記に示したように木目の方向によって判断した。



証目



板目

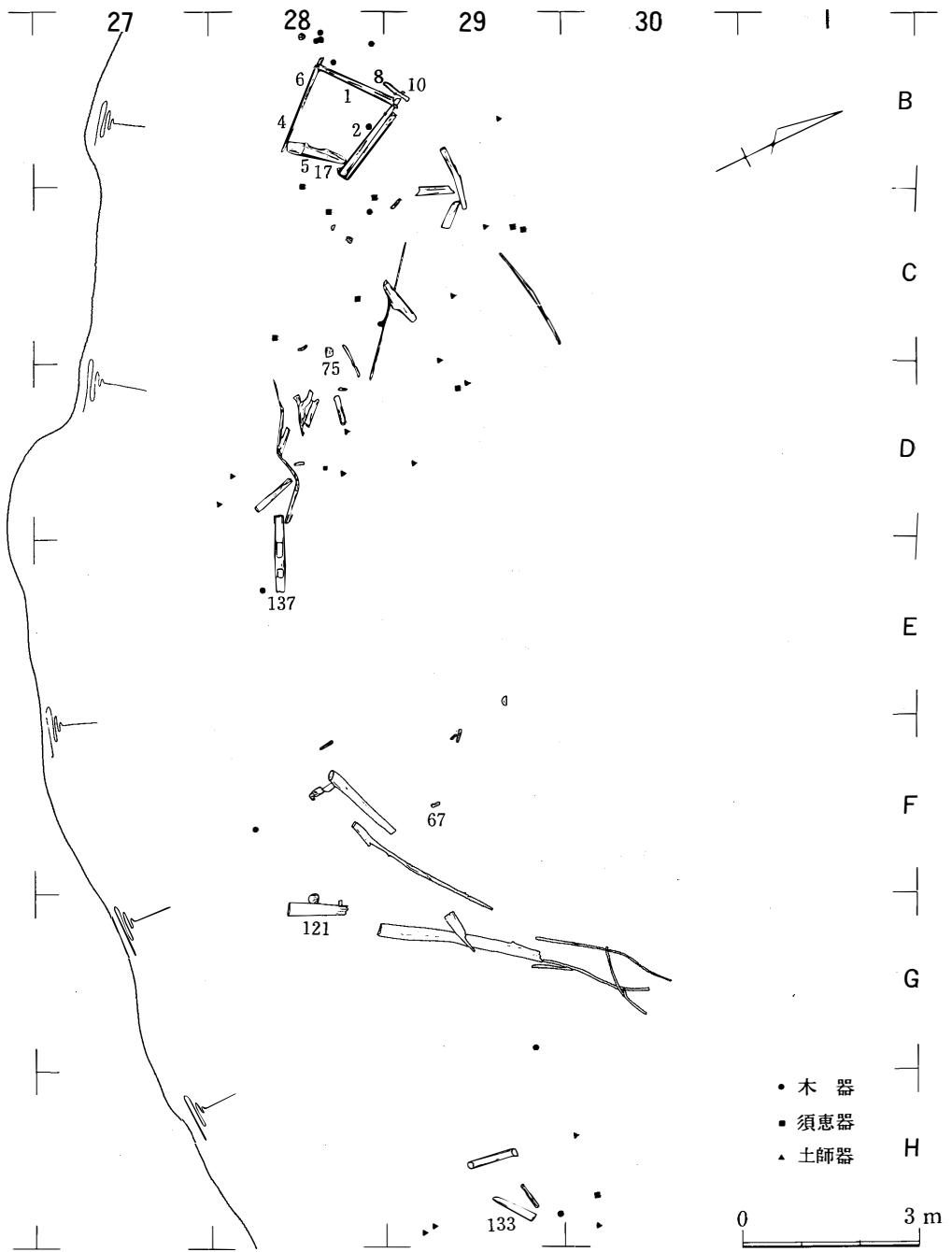


芯持

### — 手 法 —

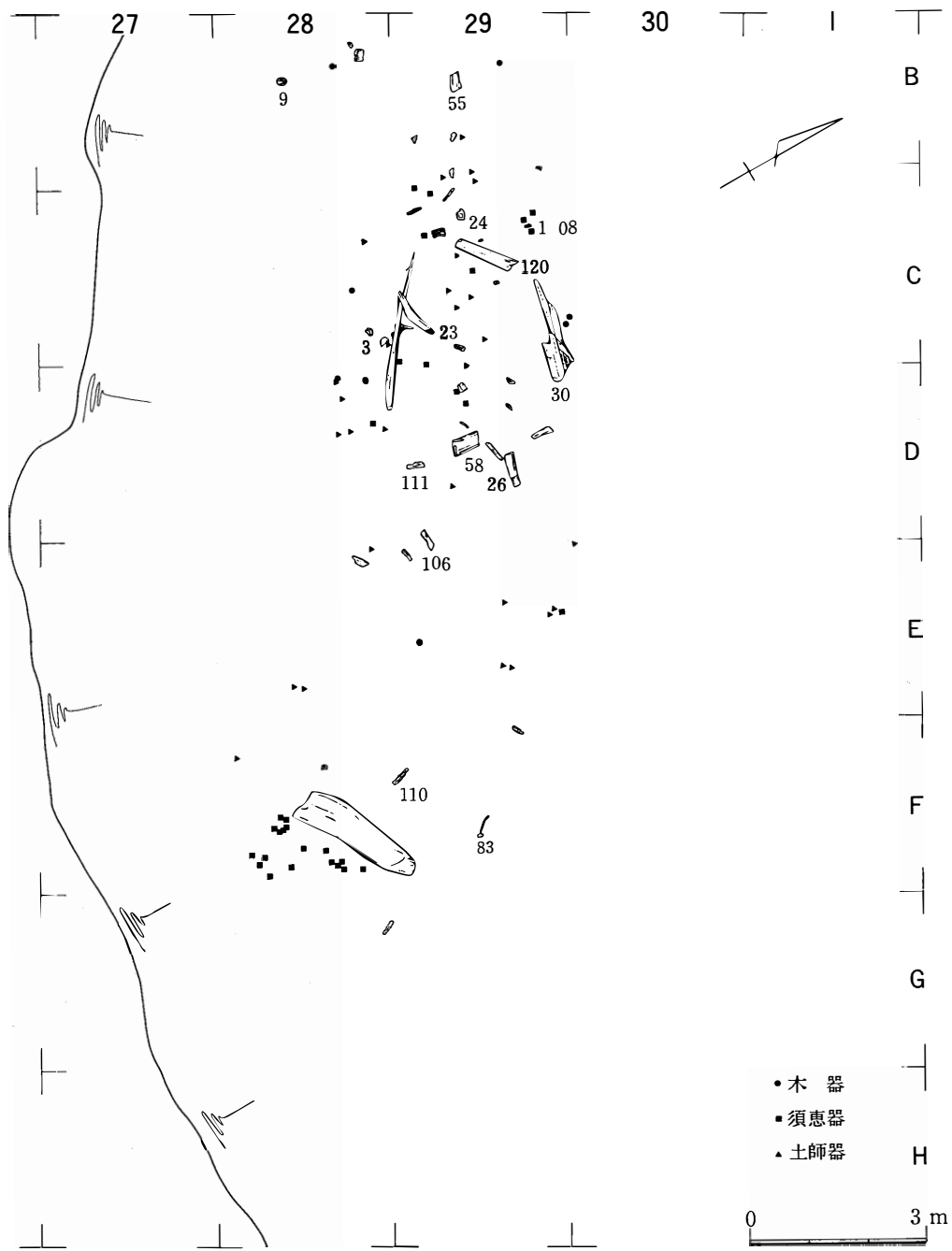
手法については、①丸物、②板物、③面取り、④容器に分け、④容器についてはさらに、a 挽物、b 剝物、c 曲物に細別した。

- ① 丸物は、横断面の年輪が一巡する程度に加工されているものとした。
- ② 板物は、横断面の年輪が一巡せず表面、裏面が平坦なものとした。
- ③ 面取りは、框あるいは板物の四方の面を除去したものとし、棒状の形態を示すものもこれに含めた。
- ④ a 挽物は、横挽きロクロの使用した痕跡を示すもので、体部にロクロによる刃物痕や、底部にロクロ爪痕を残すものとした。  
b 剝物は、横挽きロクロを使用しないで、削り込んでいるものとした。  
c 曲物は、薄い板材を筒形に曲げて側板とし、円形、長円形、隅丸方形などの厚板に取り付けたもので、綴じ合わせに桜皮を使用している。

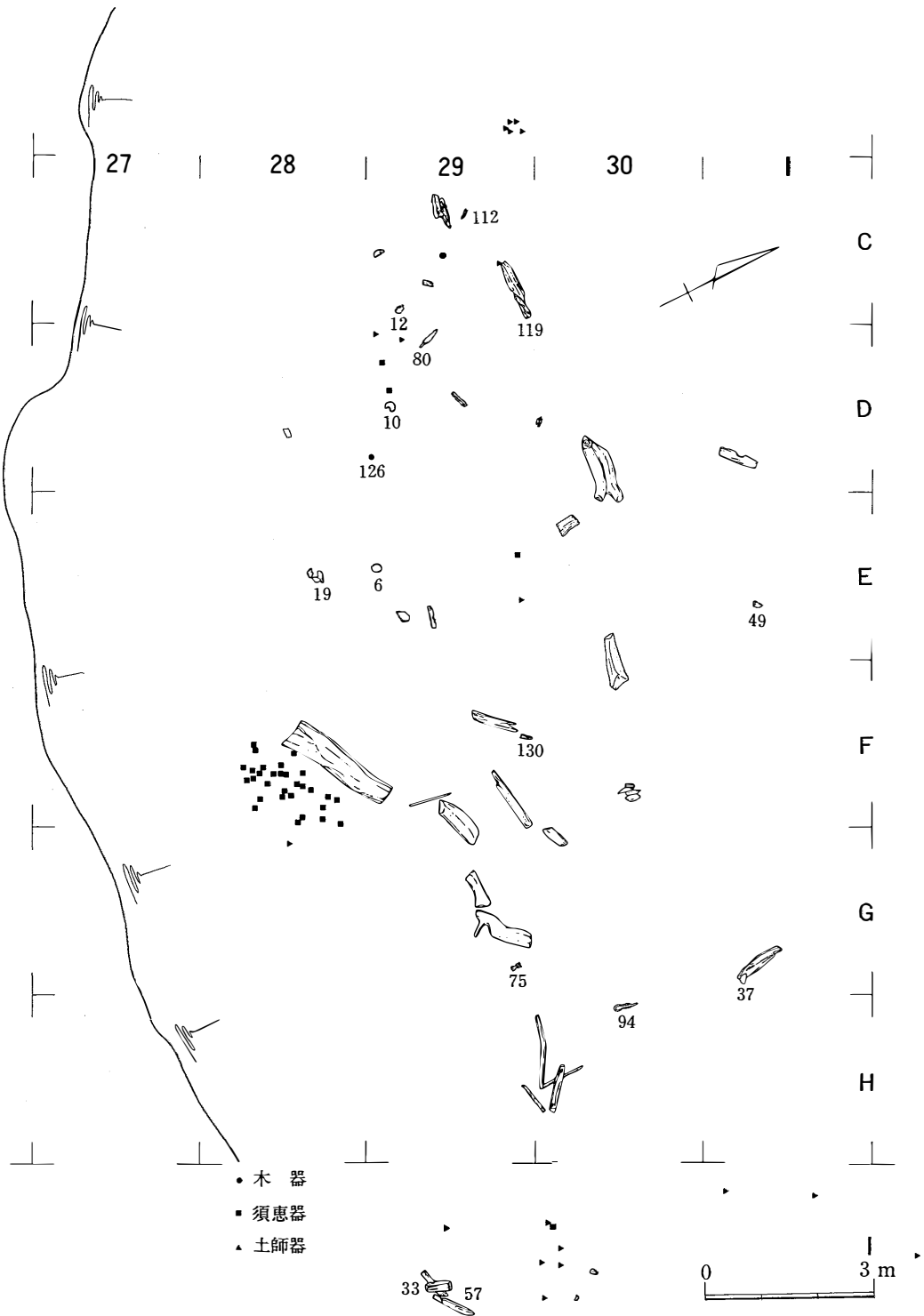


第146図 湿地性遺物包含層L-VII~VIII平面図

第 7 節 湿地性遺物包含層

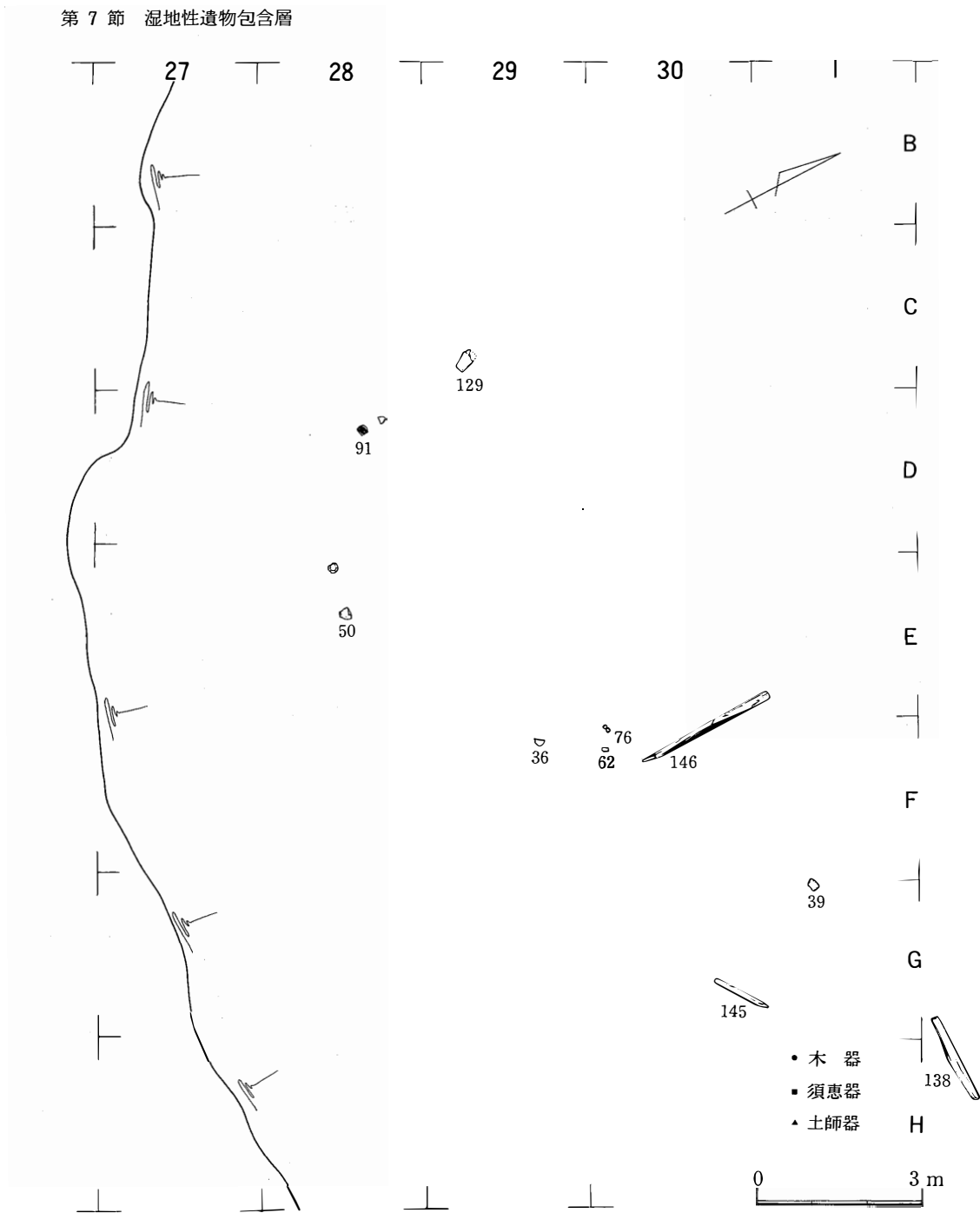


第 147 图 湿地性遺物包含層 L - VII 平面图



第148図 湿地性遺物包含層L-VIII~IX平面図

第 7 節 湿地性遺物包含層



第 149 圖 湿地性遺物包含層 L-IX~X 平面図



容 器

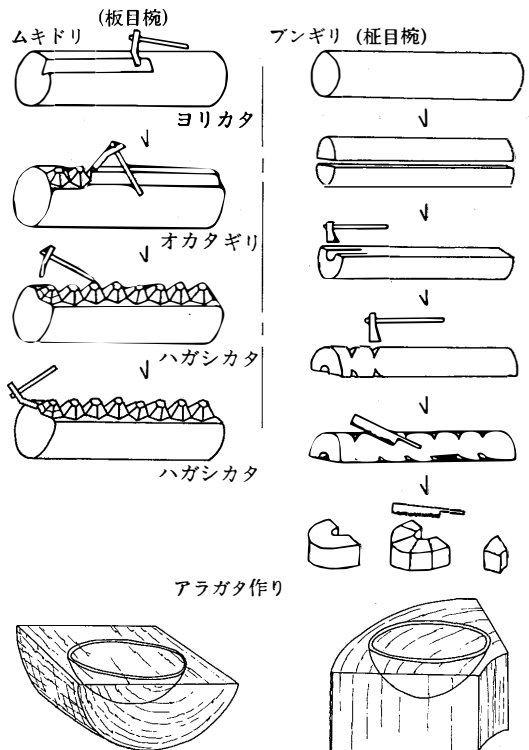
挽物、刳物、曲物の三種類がある。挽物は椀・盤、刳物は鉢・槽に器種を分類したが、曲物の一部と考えられるほぼ円形を呈する厚板は、平城宮発掘調査報告(IV, VI, VII, IX)の分類に従い、身と蓋を区別したが、器種の分別はできなかった。しかし、円形を呈さない楕円形及び隅丸方形の厚板は折敷底板として、器種分別が可能であった。曲物側板は出土時の状態(第43図版2~4)では、厚板と接合した完全なものがあつたが、長期の保管中に厚板と側板とを接合できるものは第160図52と53、第163図58と第164図59a・bの2点である。厚板との接合法で側板も身と蓋の区別が可能なようであつたが、折敷底板と円形蓋板との側板接合法は、共に周縁に切りかきがある板との接合痕がある点と、共に側板が高くないことの2点から、蓋側板か折敷側板かの区別はできなかった。また、挽物と刳物は細片から同一個体の復元が可能であつたが、曲物側板は、数百の細片に分かれており、出土時にセットしてとりあげられ保管されたものを中心に個体同定を行った。しかし、民俗例では側板は一重より二重・三重のものが多く、厚板の円周から側板の長さを決めることは容易ではなかつた。また、厚さが均一ではないことや、横折れによって高さも変化していることから、個体数を出すことはできなかつた。

1. 挽 物(第152・153図, 第65~69図版)

横挽きロクロを使用した痕跡を示すもので体部にロクロによる刃物痕や、底部にロクロ爪痕を残すものを挽物とした。

全部で27点出土しているが、図示したものは24点、表組みは27点である。そのうち第152図6のように刳物であるが、この直後に挽物になるであろう未製品が1点含まれる。

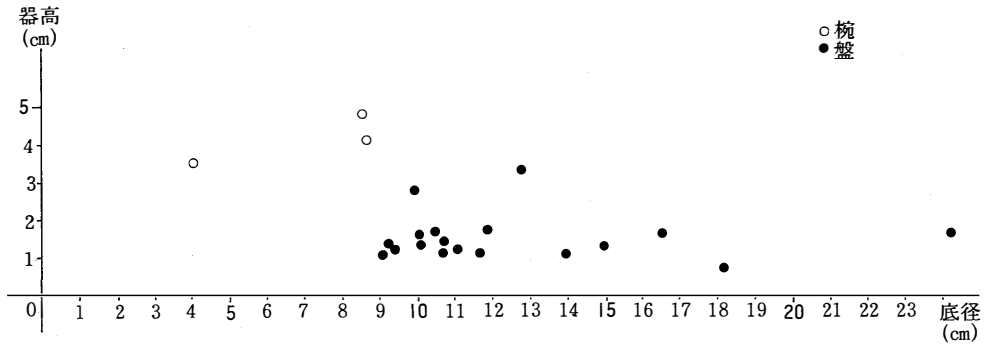
挽物はその製作工程の中で、アラガタ作りとロクロ挽きに分かれるが、アラガタ工程の中で外側を削ってゆく作業をカタブチ、中を掘る作業をナカギリと言ひ、6はまさにカタブチとナカギリの進行状態のものと考えられる。挽物は椀と盤に器種を分別したが、第151図のように椀は底径が9cm以下で器高が3cm以上のもの、盤は底径が9cm以上で器高が3cm以下のものに見られる傾向がでている。



第150図 木地椀木取法

アラガタ作りの図は奥会津地方の山村生産用具〔1〕より

第7節 湿地性遺物包含層



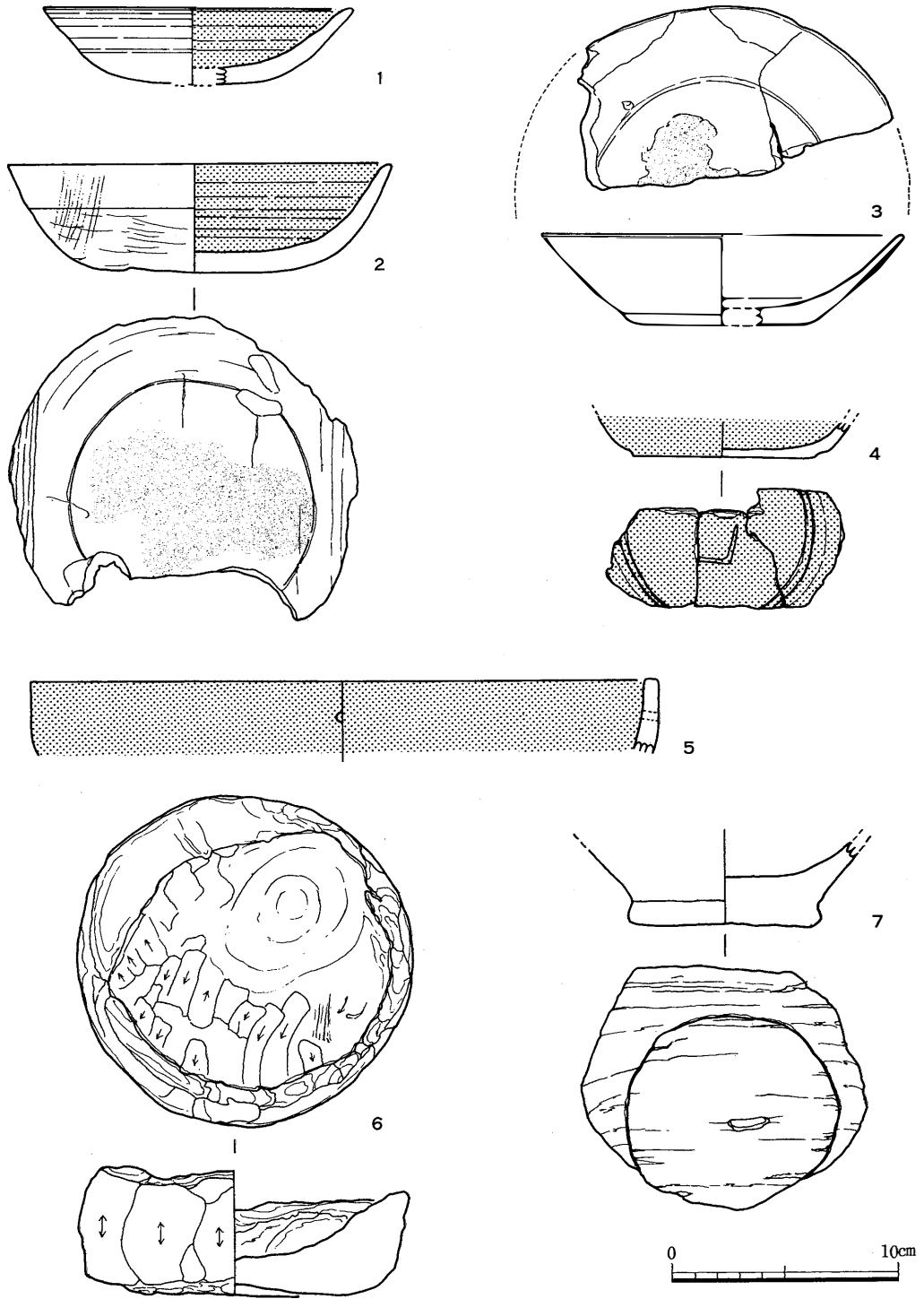
第151図 碗・盤の底径・器高

碗 (第152図1~7, 第65図版2~4, 6・7)

7点図示したが、6・7は未製品と思われる。2と7の2点が出土グリッドと層位が不明である。1・2は平底風丸底を呈し、内外共にロクロ痕が観察されるが、底部にロクロ爪痕は残っていない。2の底部に焼痕がみられるが、製作時のものかどうかは不明である。1・2は内面に漆塗りされている。3・4・7は削り出しによる低い台を持ち、底部にロクロ爪痕をわずかに残している。3はわずかにふくらんだ体部から、ゆるやかに口縁部が外反し、全体的に薄く仕上げられている。内面中央に焼痕がみられる。4は口縁部が不明であるが、体部の立ち上がりから、3のように口縁が広がらない小ぶりの碗であろう。内外面共に漆塗りである。7は全体的に厚めで、体部の内外にロクロ痕が顕著ではなく、底部のロクロ爪痕が始末されていないことから、3・4に至る碗の未製品と思われる。5は口縁部のみを残す内外漆塗りの碗であるが、遺存部分が少ない。口縁の立ち上がり状態からは、口径約28cmを示す大型の碗になるであろう。口唇部は平坦で口縁に1個円孔が残存している。6は内外共に削り痕が明瞭で、底部にロクロ爪痕がみられないことから、7と同様未製品としたが、6は7より以前の状態であろう。

盤 (第153図8~24, 第66~69図版8~24)

削り出しによって底部が台付風になっているもの(8~15, 22~24)と、底部と体部の境が不明瞭なもの(16~18, 20~21)に分けられる。台付風になっているものでも、底部外面の内周を軽く削り、削り高台風にしていないもの(12・14・15, 22~24)がみられる。19は、底部と体部の境が明瞭であるが、底部の削り出しは見られない。台付風になっているものの中でも、体部の立ち上がりがなく、内面が平坦なもの(8~11)と、わずかに体部が立ち上がるもの(12~14)と、体部の立ち上がりが明瞭で容積の大きくなるもの(15・22~24)がある。また、底部と体部の境が不明瞭なものの中にも体部の立ち上がりがなく、内面が平坦なもの(16)と、わずかに体部の立ち上がりがあるもの(17・18)、体部の立ち上がりが明瞭なもの(19~21)がある。8・10・16・22~24には、底



第152図 湿地性遺物包含層出土木製品

## 第7節 湿地性遺物包含層

部外面にロクロ爪痕が観察される。ロクロ爪痕は、その遺存の状態からロクロからはずされた後、手斧のような工具で削られたものであろう。22・23は、その痕跡が明瞭である。

### 2. 剝物(第154～156図, 第70・71図版)

横挽きロクロを使用しないで、削り込んでいるものを剝物とした。

全部で7点出土しているが、図示したものは6点である。器種は鉢と槽に分けられる。その他第152図6のような椀で、ロクロ挽きする以前のものではなく、完形品であれば剝物に入れられるが、今回の調査では剝物の椀は1点も出土していない。

#### 鉢(第154図25, 第70図版25)

Ⅱ区A-28グリッドL-VII出土である。大型の鉢であるが、遺存が悪く細片になっている。内外面共に削り痕が明瞭で、外面の口縁上端に把手が残存している(第70図版25の右下)。しかし、細片を接合しての確認であるため図示できなかった。口縁部は体部に比べて若干薄くなり、口唇部は平坦になっている。つまみは口縁部をL字状に削り残している。<sup>註12</sup>

#### 槽(第155図29・30, 第156図31～33, 第71図版29・31～33)

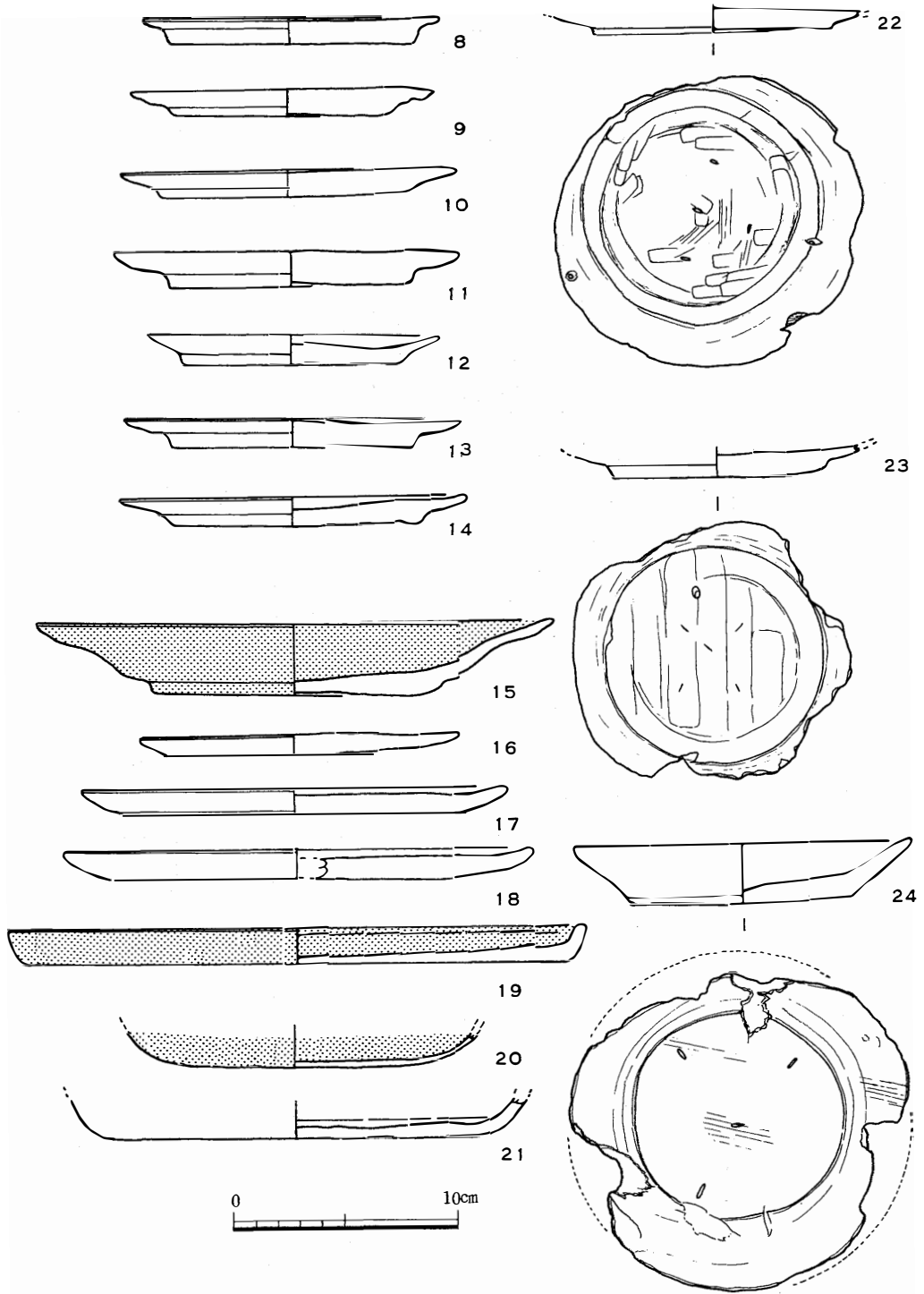
全部で6点出土しているが、図示したものは5点である。29～31はL-VIII, 33はL-V出土である。完全な形のものではなく、ほぼ半分を残すものが多い。5点共、板目の木材を使用し、内面には削り痕が明瞭であるが、器形によって2つに分類された。平面形が矩形を呈し、底部からの立ち上がりが明瞭で外傾するもの(29・31・33)と、平面形が長方形を呈し、底部からの立ち上がりがゆるく内湾気味のもの(30・32)に分かれる。29は長軸方向の口唇部中央に一对の削りが認められ、30は長軸方向の口縁部外面の中央に口唇部をつまみ出した様な形が観察され、把手と思われる。32・33は他の3点と比べて小型である。削り抜きのための工具の方向は統一性がない。

### 3. 曲物(第158～166図, 第72～77図版)

薄い板材を筒形に曲げて側板とし、円形、長円形、隅丸方形などの厚板に取り付けたもので、綴じ合わせに桜皮を使用している。

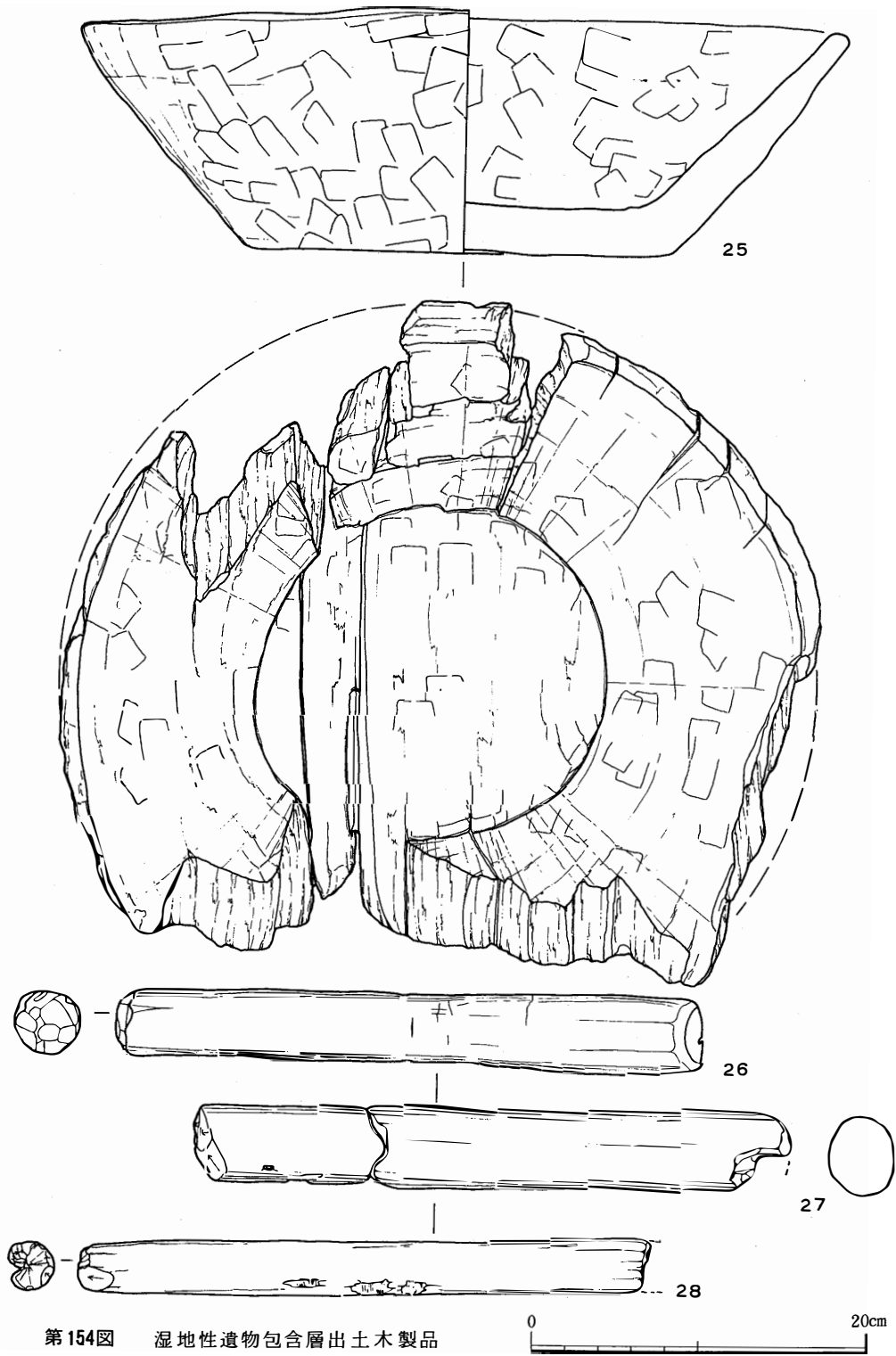
出土時点で完形のもの3点しかなく(第43図版2～4)、ほとんどが側板と厚板がバラバラの状態<sup>註14</sup>で出土している。したがって、器形の復元が困難なため、完形品が多く出土している平城宮及び飛鳥・藤原宮の曲物分類を参考にして論を進めたい(第157図)。曲物のうち、長円形または隅丸方形の厚板を持ち、側板が高くないものは折敷として器種が区別できた(第74図版)。しかし、大半をしめる円形の厚板をもつ曲物については、古代の絵巻にもあるように幾多の使用<sup>註15</sup>方法があり、器種も多様であるために器種の区別は不可能にちかく、容器の蓋か身かの分類に留まった。

飛鳥・藤原宮発掘調査報告Ⅱによると、曲物容器の蓋は製作技法によって二種類に分けられる(第157図1)。即ち、Aは蓋板の下面周縁を一段低くかきとり、側板を接合するもの、Bはこのかきとりを省略し、側板を置く位置に目印となる円刻線を描き、これにそって側板を接合するもの<sup>註16</sup>

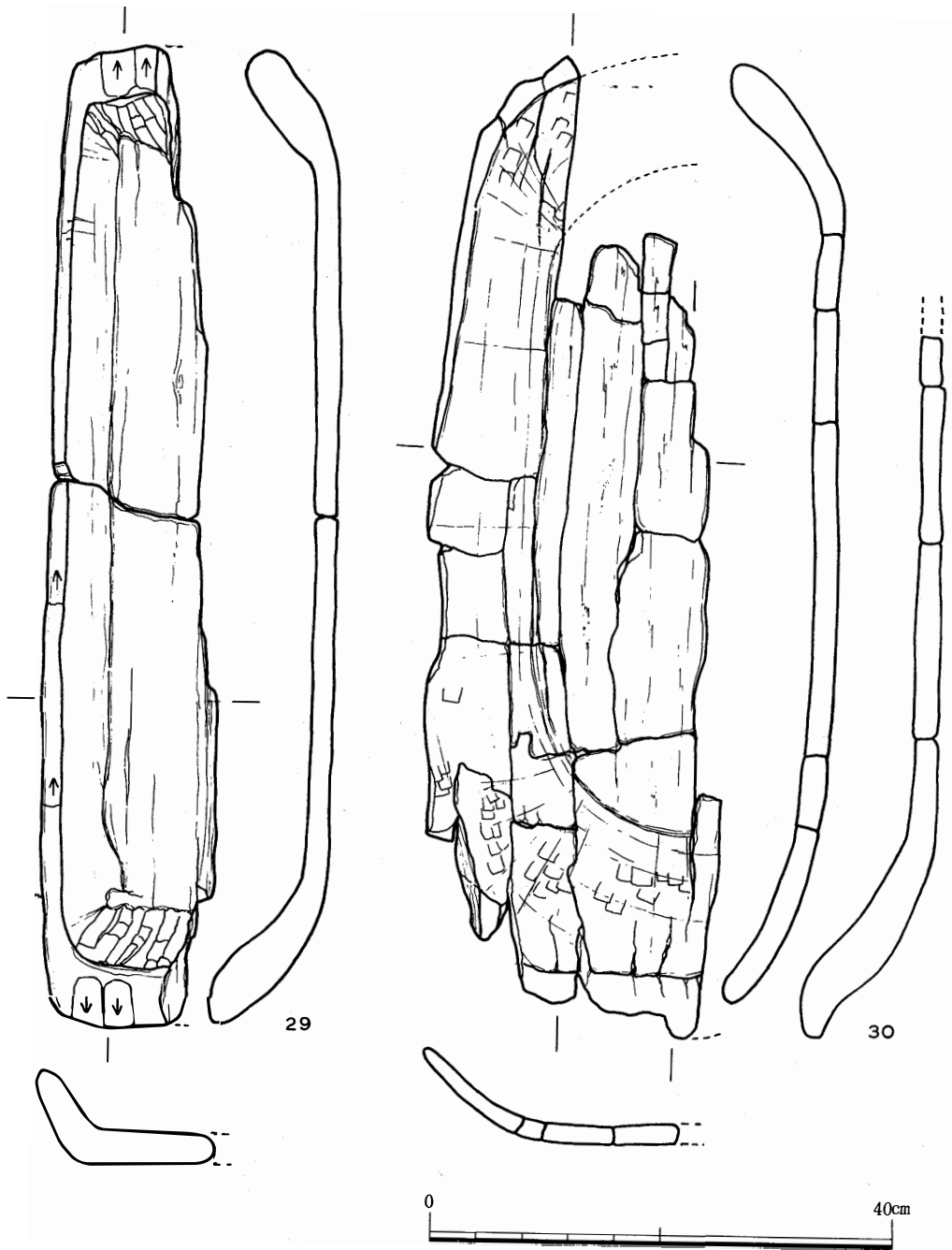


第153図 湿地性遺物包含層出土木製品

第 7 節 湿地性遺物包含層

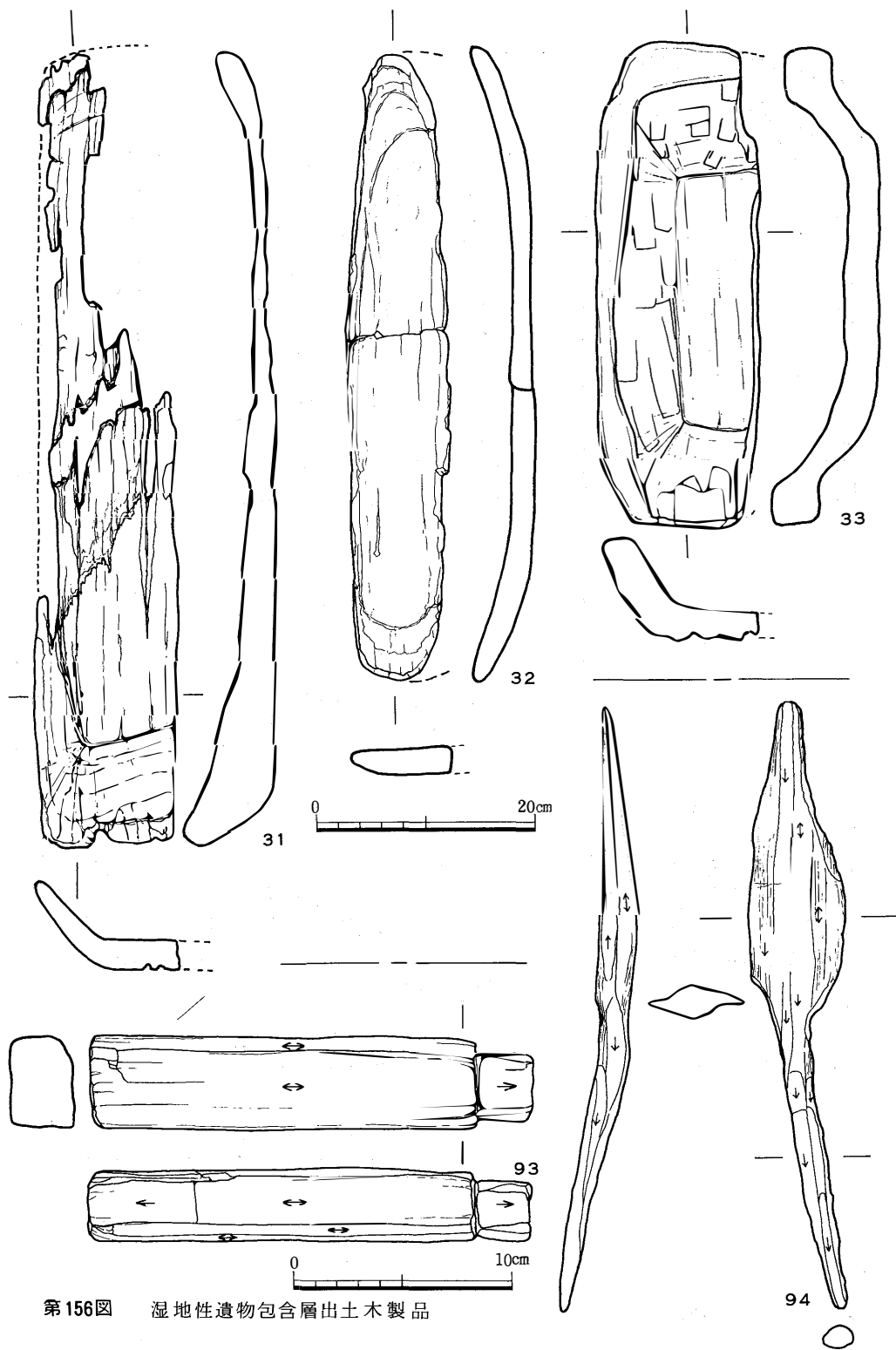


第154図 湿地性遺物包含層出土木製品



第155図 湿地性遺物包含層出土木製品

第 7 節 湿地性遺物包含層



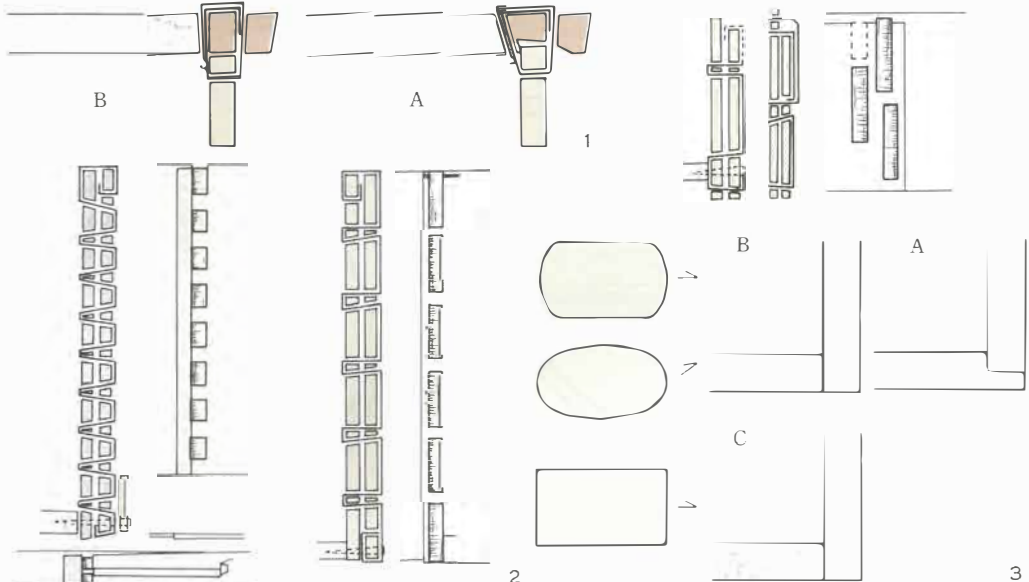
第156圖 湿地性遺物包含層出土木製品



である。この分類は、平城宮発掘調査報告Ⅳ・Ⅵ・Ⅶ・Ⅸでも使用されており、これに<sup>註17</sup>曲物容器身に円形の底板を固定するために側面に側板固定のための木釘を使用する方法を分類基準に加えて<sup>註18</sup>曲物円板の蓋と身を分類している。また、折敷も製作技法で、3種類に分かれる(第157図3)。<sup>註18</sup>  
 Aは底板上面周縁を一段低くかきとり、この部分に薄い剥板を曲げて作った側板を接合するもの、Bは底板上面に切り欠きせずに、直接底板周縁に側板を接合するもの、CはBと底板の形が違うが、Bの方法で取り付けるものである。A・Bは長円形あるいは隅丸方形の底板で、Cは方形の底板である。このように、円形曲物の蓋と身の分類は、円板の製作技法と側板の取り付け方で区別されるが、折敷は身だけでありながら円形曲物の蓋と身の両者の側板の取り付け方を持つ。従って、円形曲物の円板だけではその製作技法で蓋と身の区別ができるものの、それに取り付く浅い側板に関しては、円形曲物の蓋側板か折敷側板かの区別はできなかった。すべてⅡ区の湿地性遺物包含層Ⅰ-V以下出土のものであるが、層位ごとの出土数は第60表に示す。

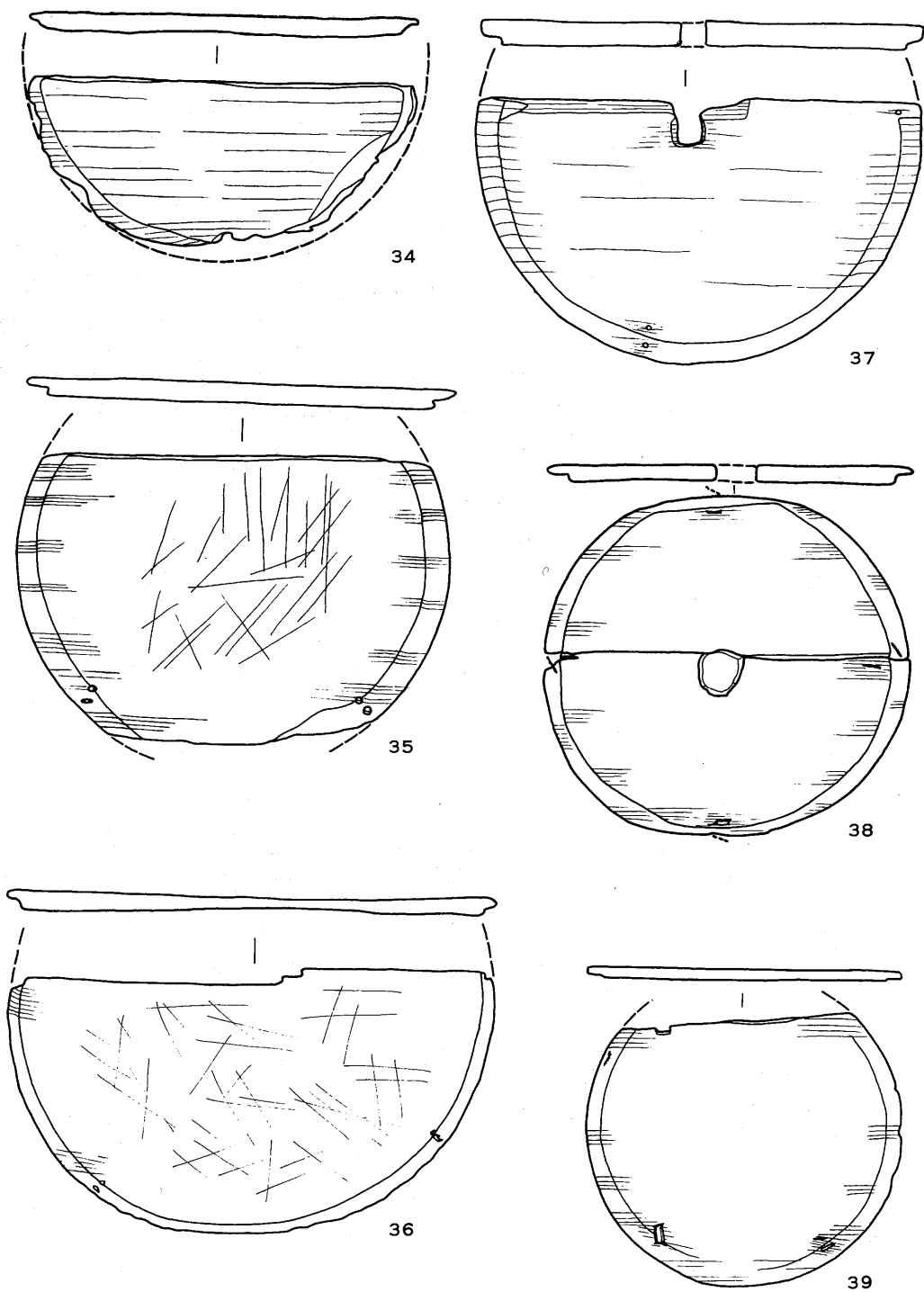
蓋(第158図34~39, 第159図40~45, 第72図版34~41, 第73図版42~44)

34~45は円形曲物蓋板である。蓋板の中でも34~39は内面の周縁が一段高くなっている特殊なものがある。また、蓋板に側板をとりつける方法としては、34~37・45のように2個1対の円孔を穿ち、<sup>註19</sup>縦じ紐のようなもので固定するもの、38~44のように桜皮で縦じた痕跡を残すものがある。35・36・41・42などは、内外面に不定方向の傷が見られる。伊場遺跡では切り<sup>註20</sup>きずの多いものは「カキイレゾコ」すなわちA類に多く、<sup>註21</sup>狙として利用された時の包丁の痕として<sup>註20</sup>いるが、35・36はA類、41・42はB類で、その傾向をうかがえない。37・38は中央に円孔を穿つ。これは「甌」に転用したものと思われる。

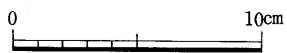


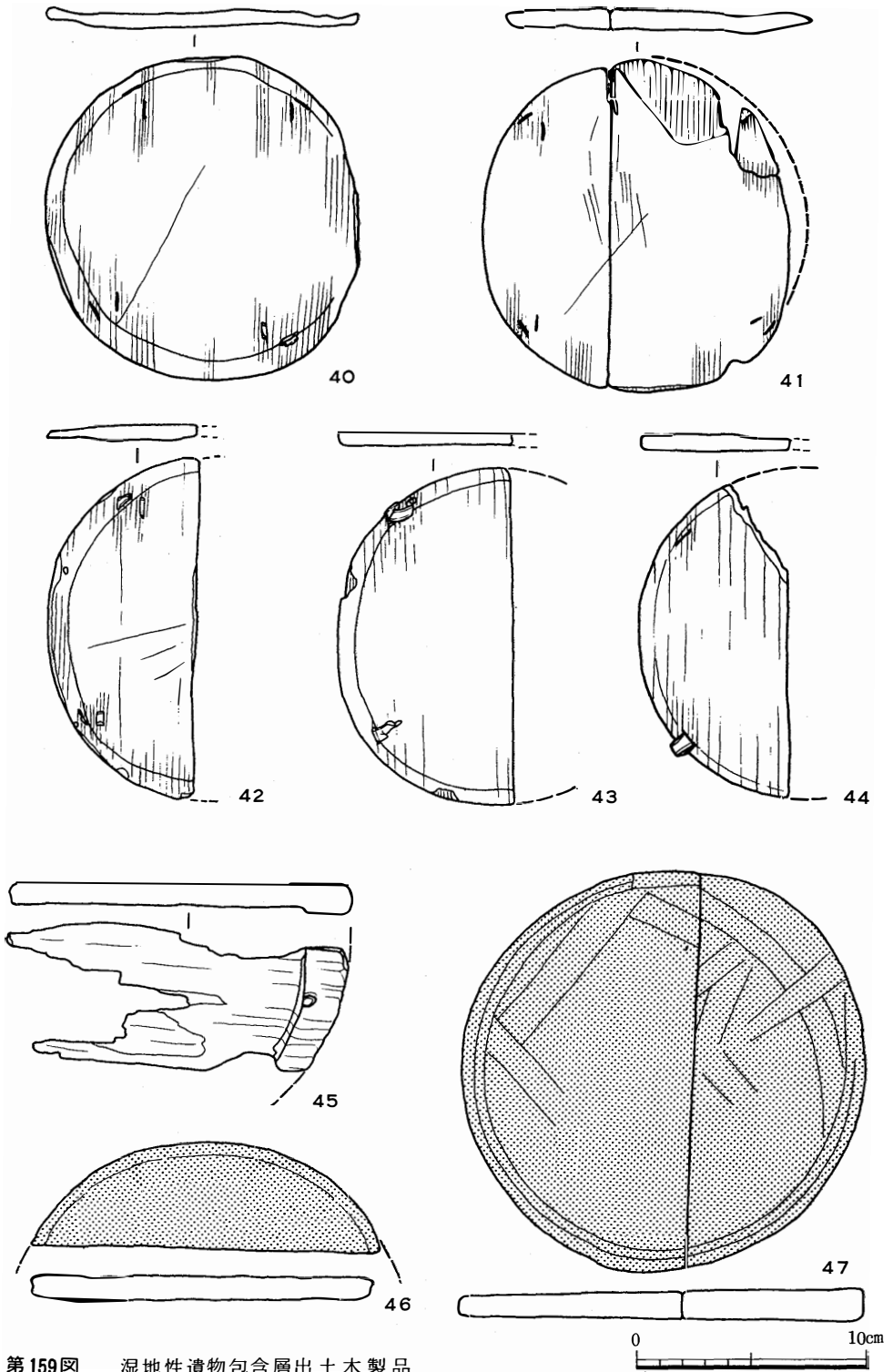
第157図 曲物縦じ合わせ法 (1.蓋 2.身 3.折敷) 「飛鳥・藤原宮発掘調査報告」Ⅱ  
 「平城宮発掘調査報告」Ⅳより

第 7 節 湿地性遺物包含層



第 158 圖 湿地性遺物包含層出土木製品





第159図 湿地性遺物包含層出土木製品

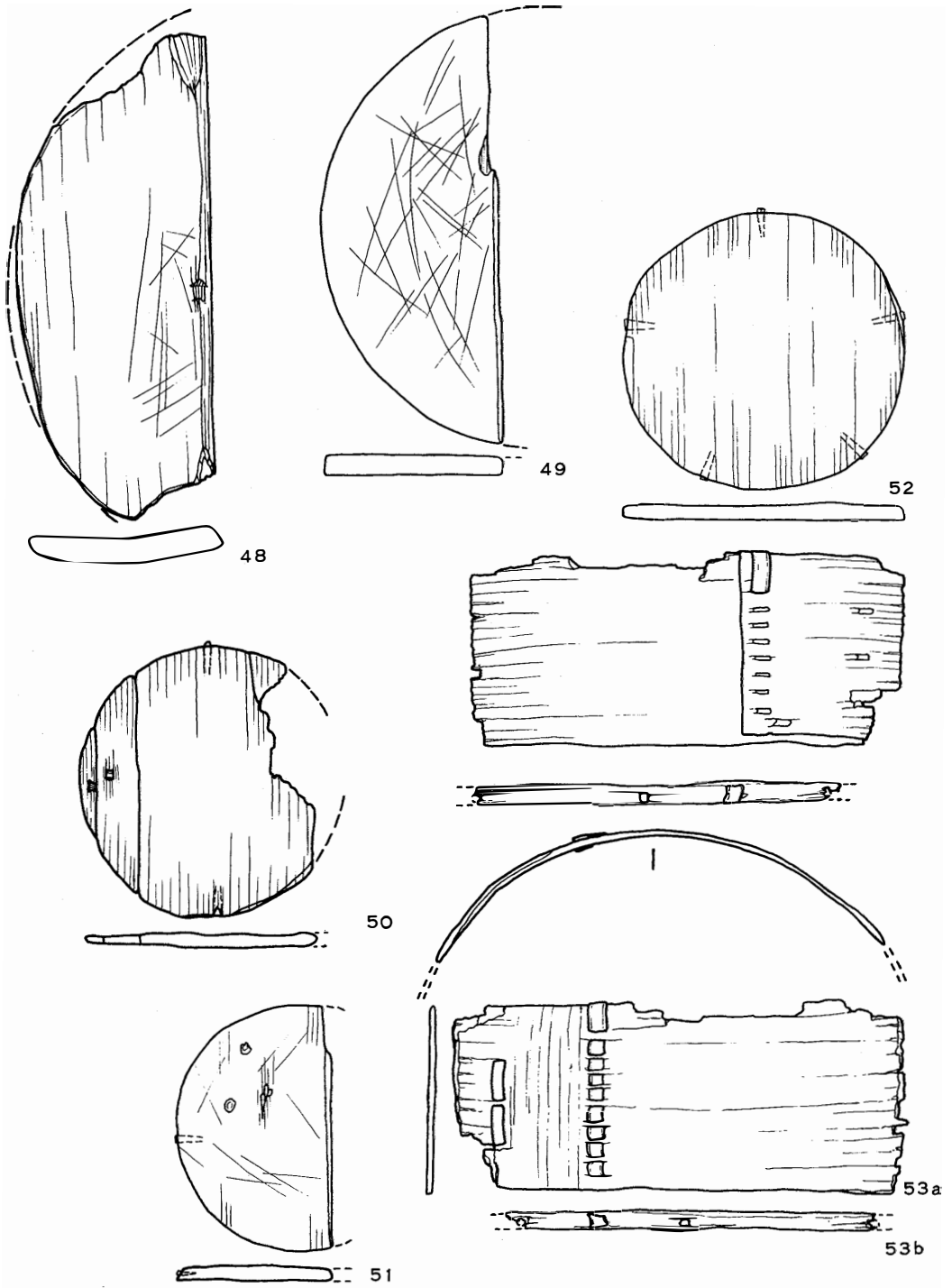
第 7 節 湿地性遺物包含層

身(第 159 図 46・47, 第 160 図 48~52, 第 161 図 54, 第 73 図版 46~52)

底板は 46・47 のように内面に目印の円刻線があるものの、内面漆塗りで厚手の円板であることから底板としたものである。48・49 は蓋に見られたように中央付近に不定方向の切りきずがみられる他は特徴がない円板である。50~52 は円板の隅に桜皮で綴じた補修孔が認められる。51 にも切りきずが認められる。52, 53a・53b は同一個体のものである。54 は細片を接合したものであるが、径約 32.6cm と大きな曲物底板で、円周に沿って直径約 4mm 前後の円孔が 12 個並んでいる。また、その内側にも 2 個の円孔が 12 個のうちの 2 個と向き合っている。54 の遺存が良ければ、円周を 2 周する孔を確認できたかもしれないが、今のところ、内側にある 2 個の円孔に続くものは確認できない。

第 60 表 曲物蓋・底板・側板の層位別出土数

層位	蓋			底 板			側 板			層位	蓋			底 板			側 板		
	内径 (cm)	厚さ (cm)	円周 (cm)	径 (cm)	厚さ (cm)	円周 (cm)	長さ (cm)	厚さ (cm)	幅 (cm)		内径 (cm)	厚さ (cm)	円周 (cm)	径 (cm)	厚さ (cm)	円周 (cm)	長さ (cm)	厚さ (cm)	幅 (cm)
V	12.6	0.5	(44.6)	12.2	0.7	38.3	( 4.9)	0.1	1.7		15.4	0.2	(54.0)	18.3	0.5	57.5	(12.5)	0.7	4.1
計10点	12.0	(0.6)	(42.7)				(11.9)	0.1	2.8		11.4	0.4	(46.5)				( 5.6)	0.3	4.0
							(11.2)	0.1	5.7								(11.9)	0.3	3.7
							( 7.2)	0.1	( 3.7)								(17.4)	0.1	(2.2)
							(11.3)	0.2	(11.1)								(12.4)	0.5	(4.3)
							( 5.1)	0.3	1.3								(22.0)	0.7	(9.3)
							( 8.1)	0.4	4.3								( 8.8)	0.6	(8.2)
	2			1			7										(14.2)	0.4	3.3
VI							(6.6)	0.2	3.0								( 7.3)	0.3	1.9
計1点	0			0			1										(12.0)	0.7	1.7
VII	13.6	(1.4)	(62.8)	12.4	0.8	38.9	(24.0)	0.2	(8.5)								(16.3)	0.4	2.1
計24点	24.8	1.2	(100.5)	14.6	0.4	(47.2)	(17.9)	0.2	(0.5)								(10.0)	0.6	3.7
	14.6	0.6	(57.8)	11.4	0.5	(35.8)	(35.8)	0.3	(5.2)								( 5.4)	0.6	2.8
	12.2	0.7	(43.9)	9.4	0.9	(29.5)	(23.5)	0.3	(5.1)										
	13.2	0.4	(54.6)				(44.7)	0.4	(8.3)										
							(13.7)	0.3	(9.9)										
							(20.6)	0.5	(3.8)										
							(31.5)	0.4	(3.2)										
							(27.0)	0.4	3.9										
							(13.9)	0.5	4.3										
							( 6.6)	0.2	2.0										
							(11.4)	0.2	1.6										
							(20.7)	0.2	3.8										
							( 8.0)	0.6	2.6										
							(15.3)	0.3	1.5										
	5			4			15												
VIII	12.8	0.7	(44.0)	17.5	1.3	(55.0)	(7.4)	(0.4)	(2.5)								(11.2)	0.4	(3.8)
計28点	12.6	0.7	(48.0)	17.6	1.0	55.3	(17.3)	0.3	(5.3)								( 7.5)	0.4	(2.5)
	11.6	0.6	46.5	27.0	1.1	(84.8)	(35.3)	0.3	(8.8)								(21.6)	0.2	(3.0)
	12.6	0.8	46.2	10.9	0.6	34.2	(23.4)	0.5	(3.3)								( 9.2)	0.8	(28.9)
							( 8.0)	0.6	2.6								( 9.2)	0.8	(28.9)
							(15.3)	0.3	1.5								(12.6)	0.6	(39.6)
																	(12.6)	0.6	(39.6)
																	(15.2)	1.0	(43.0)
																	(20.3)	0.4	3.0
																	( 7.5)	0.4	2.5
	1			6			7												
合 計	19			17			48												



第160図 湿地性遺物包含層出土木製品

第 7 節 湿地性遺物包含層

折 敷 (第 161 図 55, 第 162 図 56, 57, 第 163 図 58, 第 74 図版 55～58)

折敷底板は 55 のみ証目で, 56～58 は板目の木取りである。55 は遺存が少なく, 残された周縁の曲線から長円形の板を想定し, 折敷とした。板の端に桜皮が付着しており, 底板を大きくするためか, 割れたための補修孔であろう。56 も長円形, 57・58 は隅丸方形の底板である。55～57 の製作技法は, 折敷の A 類であるが, 58 は A・B・C 類のどれにも入らない。これは, かきとりのない底板の上に側板を取り付け, 桜皮で固定したものである。側板の取り付けは 4 点共桜皮で数ヶ所綴じている。55 のように 56・57 も長軸に沿って中央付近に円孔が並んでいる。これは, 大きい板を作る時に, あらかじめ 2 枚を合せて 1 枚になるように作っていたのか, 又は, 使用中の補修孔であるかは不明である。58 の内外面中央付近には, 円形曲物のように不定方向の切り傷が多数見られる。

曲物側板 (第 160 図 53a・b, 第 164～166 図 59～74, 第 75～77 図版, 59・61～72)

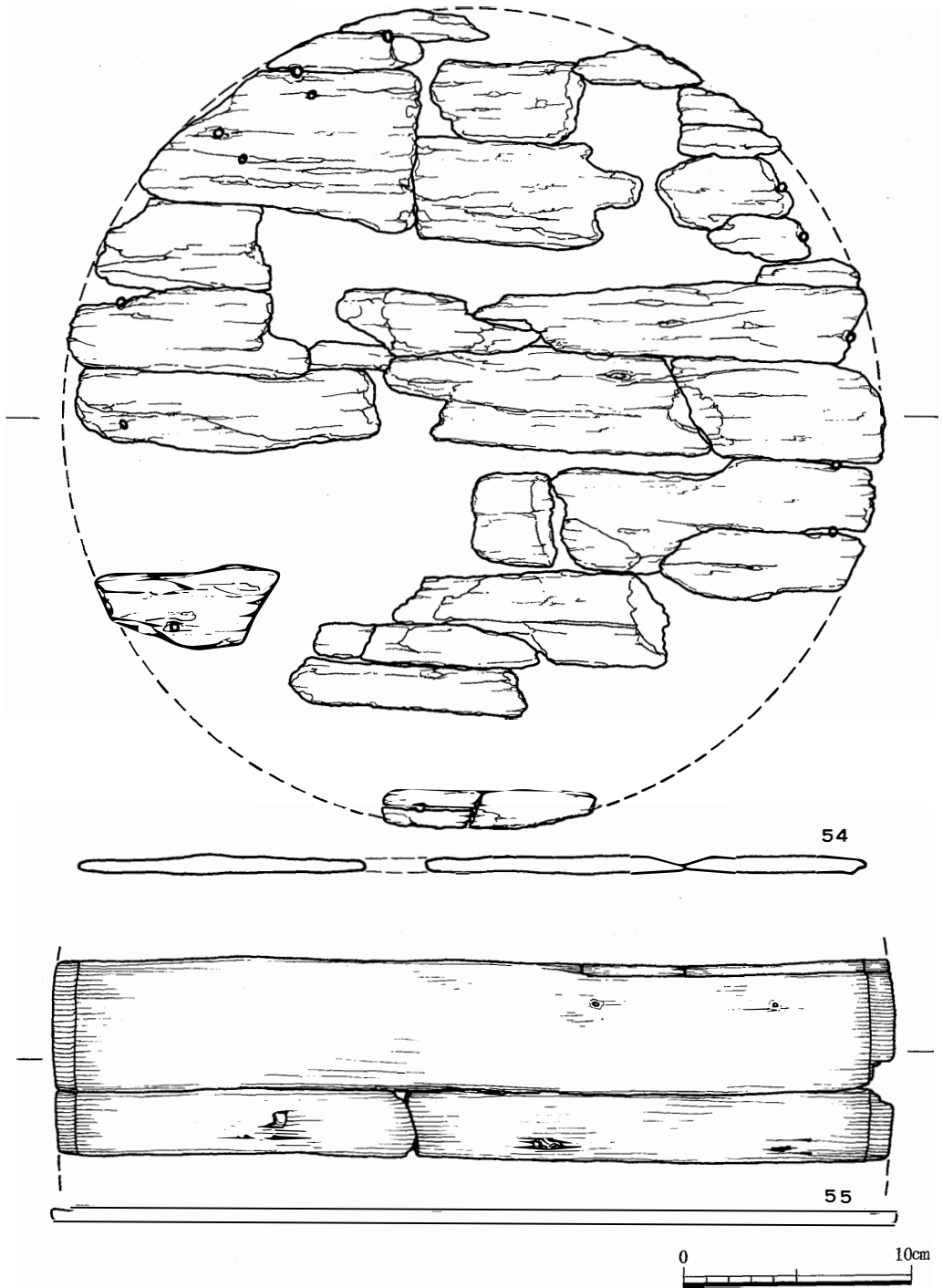
曲物側板はすべて破損しており, 接合によって数点復元されるのみで個体数は不明である。側板は, 薄い板材を曲げて厚板に固定するもので, 曲げる際縦の刻み目を入れるものと無いものがある。また, それが接合する厚板の製作技法と密接な関係がある。即ち, 第 157 図にみるように厚板の製作技法は, 円形曲物と折敷を合わせて大きく 3 種あるため, 側板の接合法も 3 種になる。

1. 周縁に削り込みのある厚板に接合する側板で, 側板内側の下半部に「当たり」があり, 桜皮または綴じ紐で接合された痕跡を残す。円形曲物の蓋板が折敷の底板と接合する。
2. 厚板の側面に直接接合する側板で, 側板内側の下半部に「当たり」があり, 桜皮または綴じ紐, 釘で接合された痕跡を残す。円形曲物身の底板とのみ接合する。
3. 厚板の上面にのせて接合する側板で, 側板内側に「当たり」がなく, 桜皮または綴じ紐で接合された痕跡を残す。蓋板と接合する形であるが, 御山千軒遺跡出土の第 163 図 58 のように折敷の底板に接合することもある。

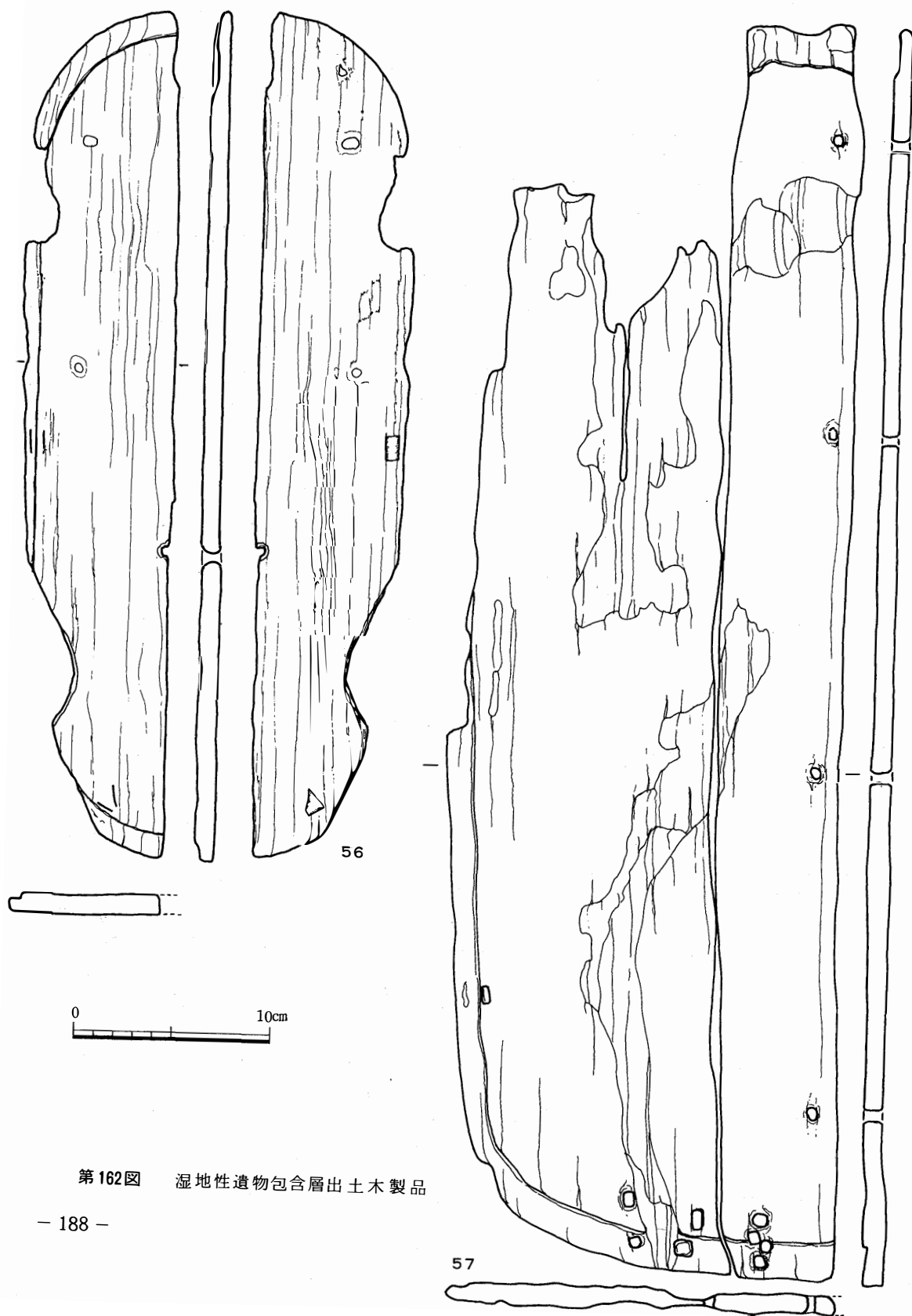
これらのことから口縁部が破損しているものに関しては, 接合法及び本来の形態を推定するのは困難であるが, 高さのある側板については円形の底板と接合する。即ち身の側板であろう。また幅の狭い側板については<sup>註 25</sup>円形の板と接合する容器の蓋側板か, 長円形または隅丸方形の底板と接合する折敷の側板かは不明である。

側板の特徴はまとめると次のように分けられる。

	}	桜皮綴じ痕 (59ab・64・66・70・71)
内面に縦の刻み目(けびき)があるもの (63～74)		釘 孔 痕 (62～66)
内面に縦の刻み目(けびき)が無いもの (59～62)		当 たり 痕 (60・61・64・66～72)
		漆 塗 り (60・61・64・66・67)
		そ の 他 (73・74)

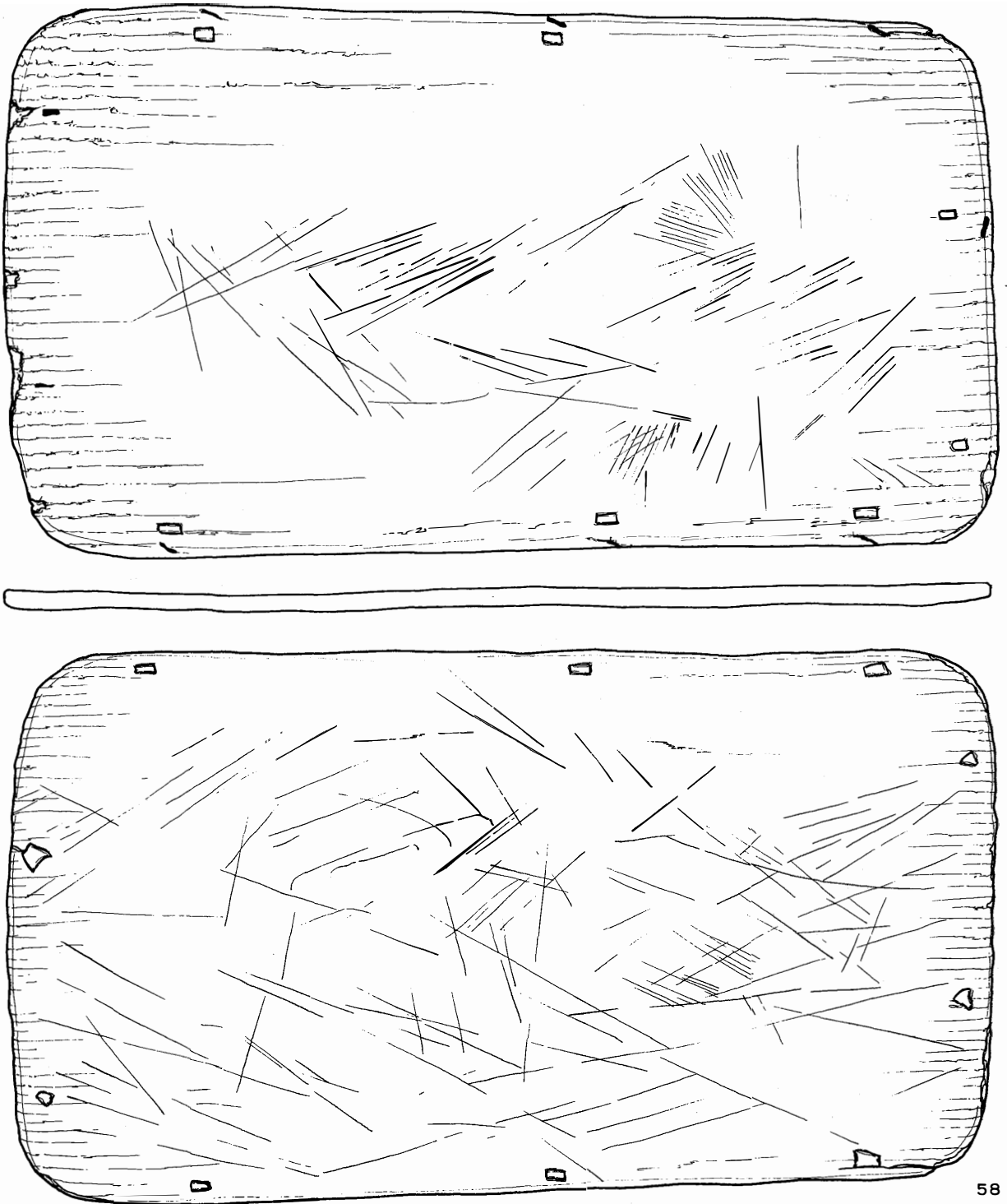


第161図 湿地性遺物包含層出土木製品



第 162 図 湿地性遺物包含層出土木製品

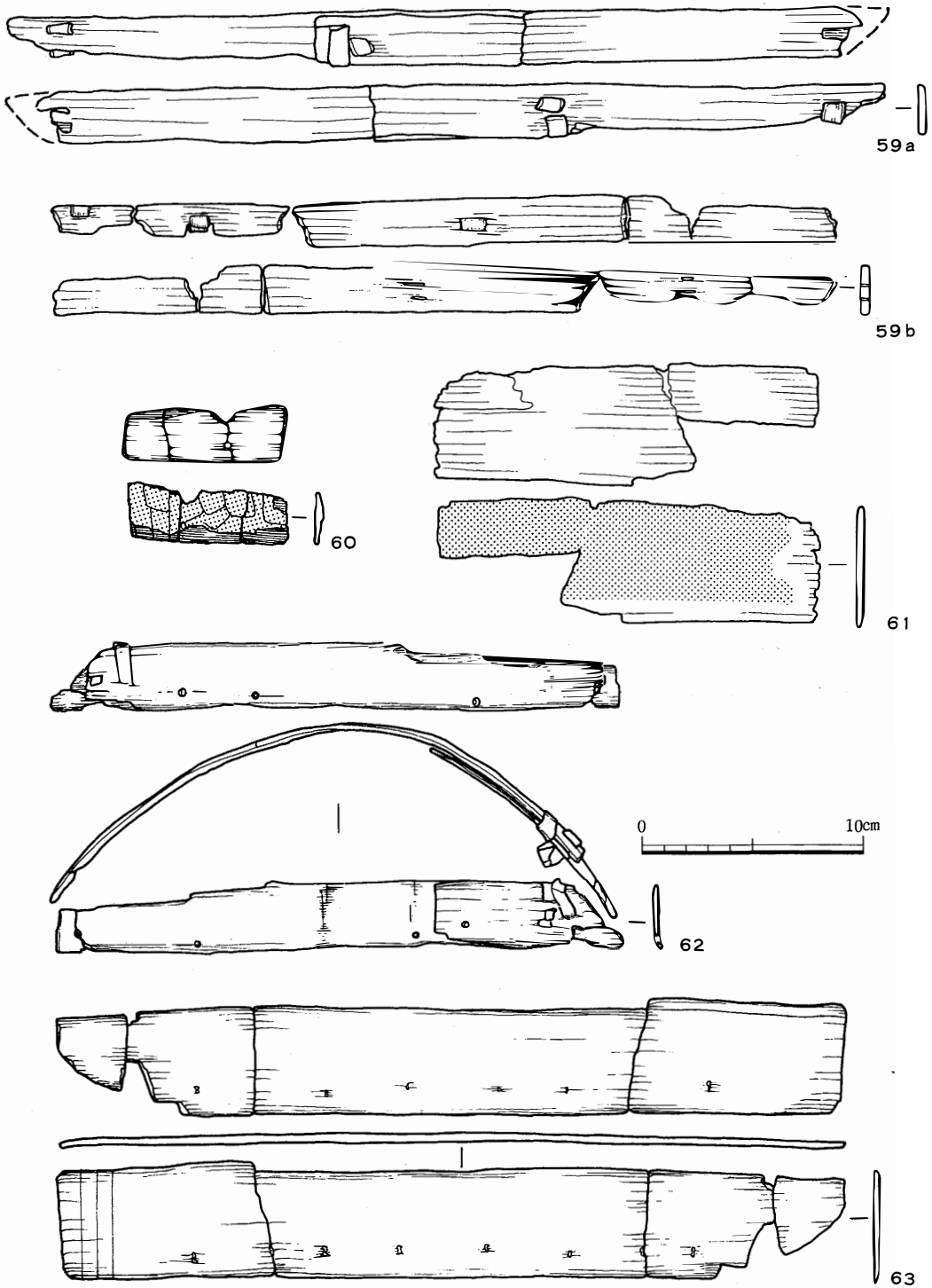




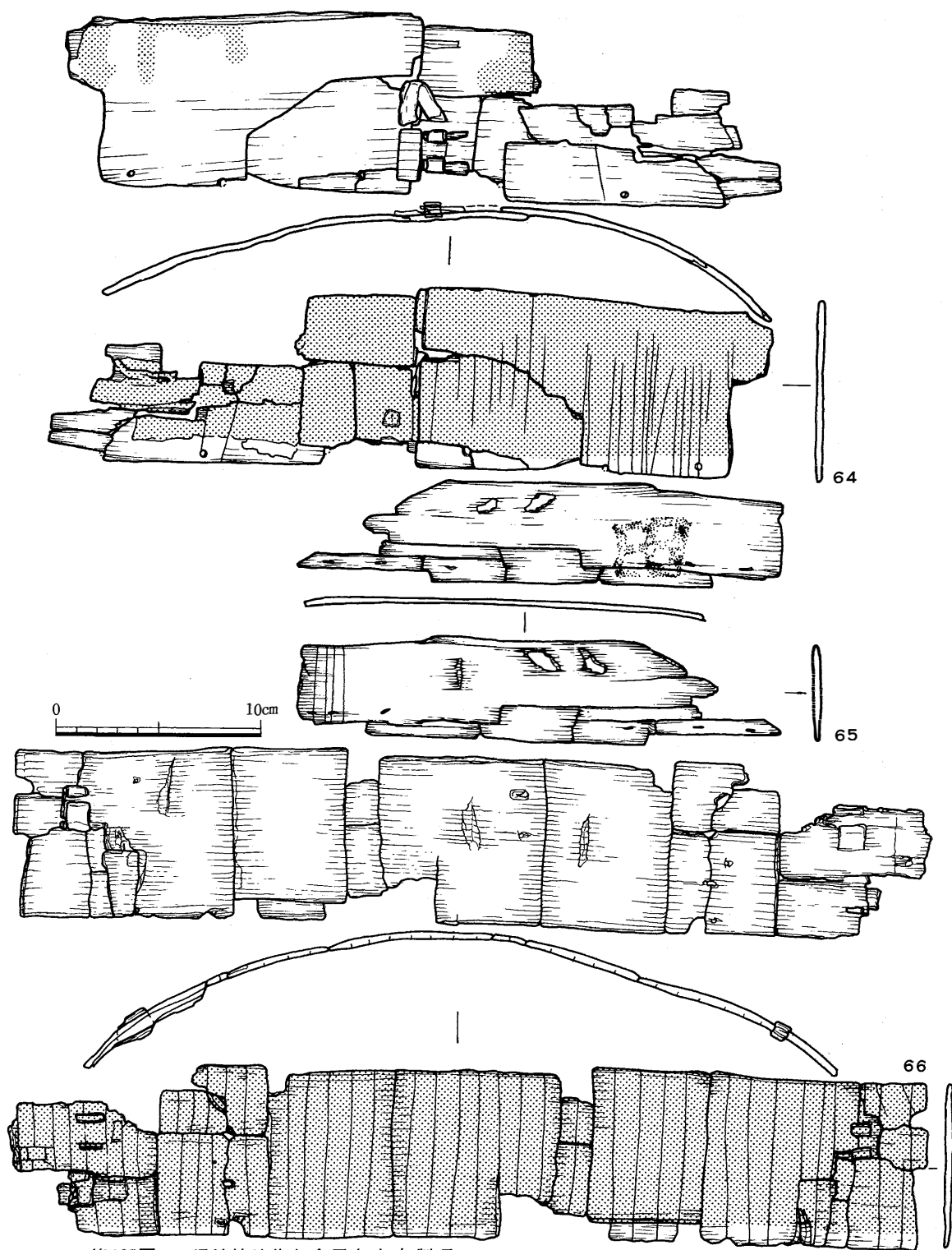
第163図 湿地性遺物包含層出土木製品

58

第 7 節 湿地性遺物包含層

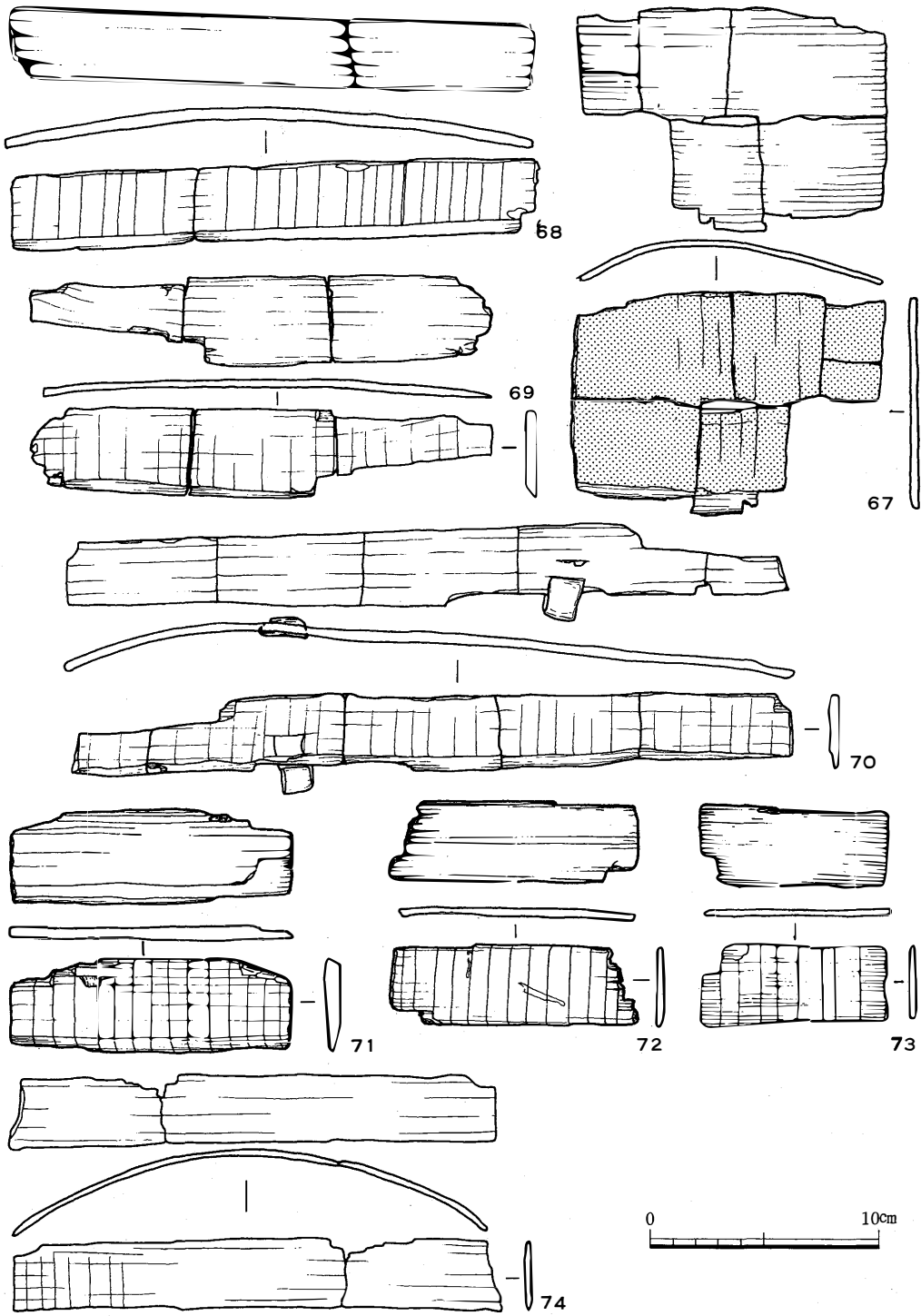


第164圖 湿地性遺物包含層出土木製品



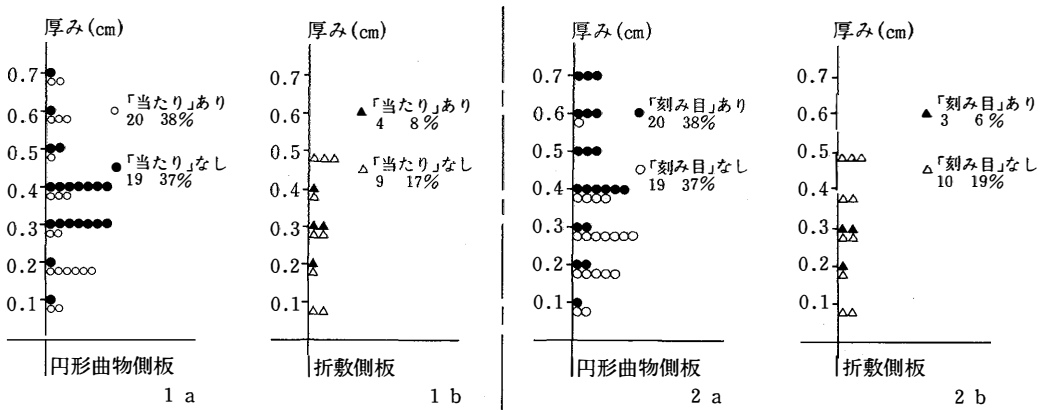
第165図 湿地性遺物包含層出土木製品

第 7 節 湿地性遺物包含層



第 166 圖 湿地性遺物包含層出土木製品

内面に縦の刻み目のあるものは出土量が多いが、その中でも側板全体に平均して刻み目のあるものと、部分的にあるものがある。これは、折敷側板のように側板を曲げる位置が部分的なものと円形曲物側板のように全体を曲げるものとの違いによるものかもしれない。また、刻み目があるか無いかに関しては、側板を曲げやすくすることが考えられ、側板の厚みと関係があるように思われる(第167図)。



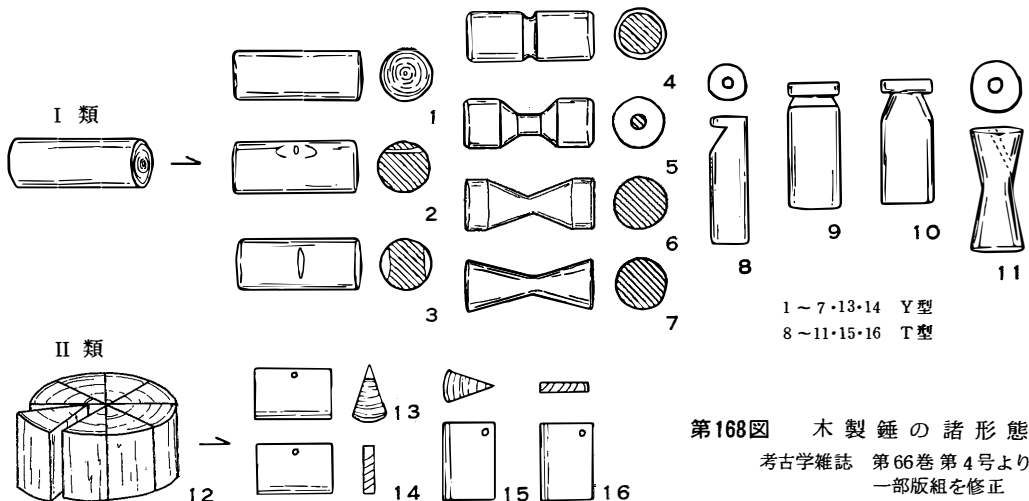
第167図 側板の「当たり」と「刻み目」の有無の割合 (1. 「当たり」 2. 「刻み目」)  
a. 円形、曲物 b. 折敷

### 労働用具

#### 1. 農具・工具(第169・171図, 第78・79図版)

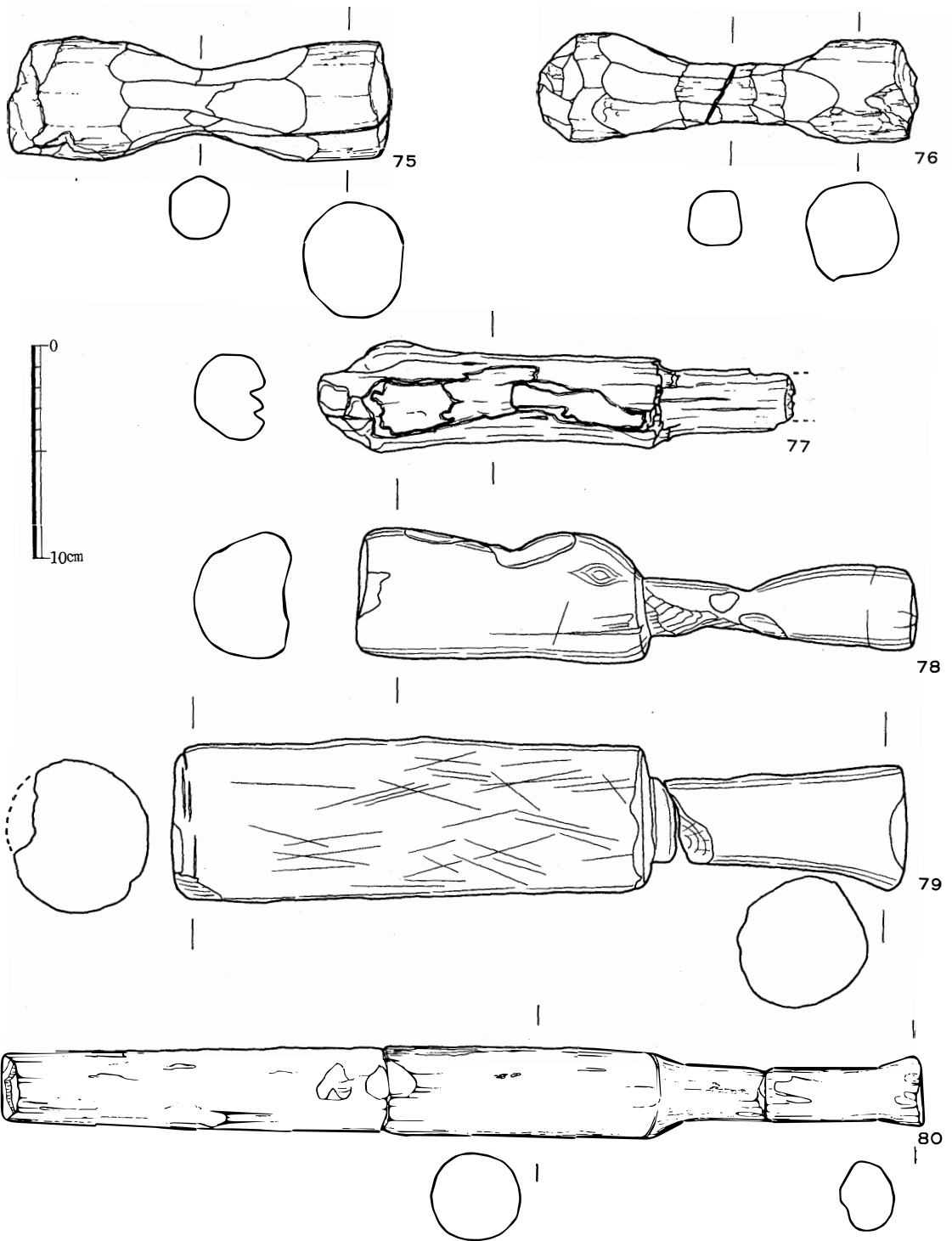
##### ツチノコ(第169図75・76, 第78図版75・76)

2点出土しているが、沼の中ということだけで、明確な出土地点は不明である。2点共同じ形態で、短い棒状の中央を削って細くし、両端に旧丸太の形態を残す鼓形である。渡辺誠氏の分



第168図 木製錘の諸形態  
考古学雑誌 第66巻 第4号より  
一部版組を修正

第 7 節 湿地性遺物包含層



第 169 圖 湿地性遺物包含層出土木製品

註26  
類では、ツチノコは丸太ないし鼓形を呈す(I類)と、丸太をミカン割りにした(II類)に大別され、その中にヨコ型(Y)とタテ型(T)がある(第168図)。渡辺氏分類に従えば、IYf型にあたるものである。両側面に面取りの加工痕が明瞭にあり、細い丸太を切断した面を調整したものであろう。遺存度は良いが76は中央から折れている。ツチノコは蓆などを編む時の錘で菰槌とも呼ばれている。

#### ヨコツチ(第169図77~80, 第78図版77~80)

4点共細い丸太材の樹皮を剥いだ程度で、そのまま芯を利用して頭部とし、下半分を細く削って柄にしたものである。77は頭部に樹皮をわずかに残しているが、他の3点は頭部中央に使用痕と思われる凹面や傷がある。また、77は柄の末端を欠損しているが、他の3点は柄を完全な形で残しており、柄と頭部の長さが異っている。柄と頭部の長さの比は、78が1:1, 79が1:1.5, 80が1:2となっており、この3点の中では、頭部の長い方が全体に細身になっている。

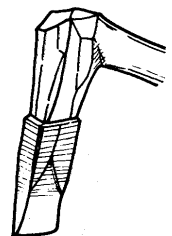
渡辺誠氏によると、民俗例からヨコツチには5種類<sup>註27</sup>の使用方法が考えられている。

1. わら打具
2. 豆打具
3. 砧
4. 工具
5. 人形の首

これらは使用方法に従ってヨコツチの形態が異なり、また、使用する人の違いによっても重さが異なる。御山千軒遺跡出土の4点のヨコツチは、4点共形態が異なる事から使用目的を異にするヨコツチ1セットと考えられる。

#### 柄(第171図81~84, 第79図版81~84)

81と82は四面に削り調整痕が明瞭な細長い棒で、横断面形がやや扁平な角丸方形である。81の上端中央には挟み込み部と思われる縦の割れ口がわずかに観察され、鎌のようなものを挟み込んで取り付ける柄と思われる。82は形態が81と類似しているため柄としたが、2点共、手擦れの痕跡があまりみられない。83は幹と枝の股部を利用した縦斧柄<sup>註28,29</sup>である。台部は幹を使用し、台頭部は切断面が残っている。固定部は側面を左右から削り、台の上面は、鶴髯形、台の側面は長方形に整形している。有袋鉄斧の着装に適した形態である。握り部は枝を使用し、磨きをかけたようになめらかである。柄尻は突出せず、円錐状に削り込んでいる。84は柄尻にL字形の突出部を持つ握り部で、柄先部を失っている。全面をていねいに削り、横断面は楕円形になっている。柄尻に突起を持つ形態は鎌柄と思われる。



「歴史公論」  
第六巻5号より

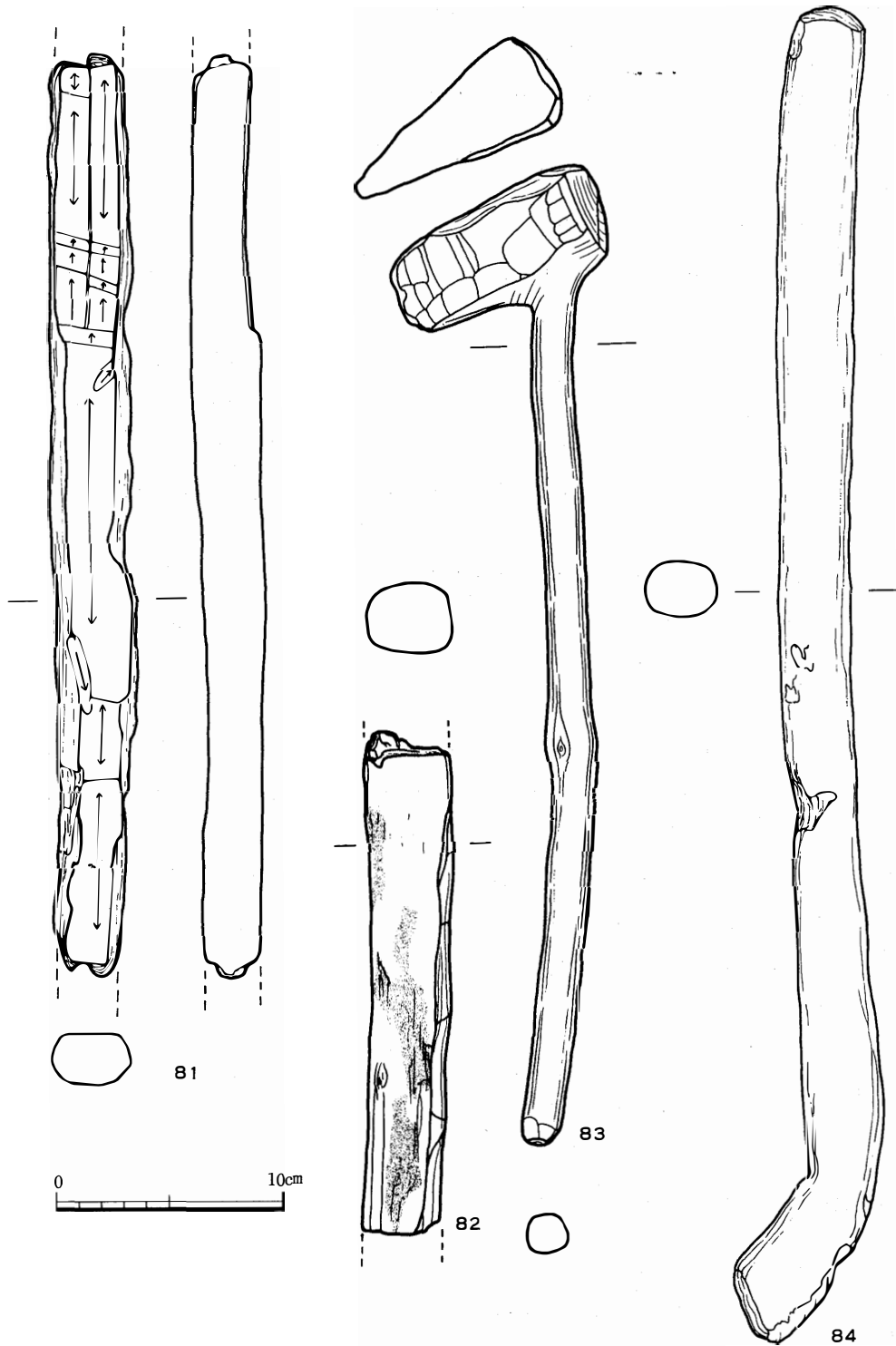
第170図  
縦斧装着法

#### 2. 狩猟・漁撈具(第173図, 第79図版)

##### 弓(第173図85~87, 第79図版85・87)

2点出土している。85はF-30, 86はH-28, L-VII出土である。

85は、丸木の直弓<sup>註30</sup>だが、弓身の中ほどで折損しており、現存長36.1cmに過ぎず、現存部最大径



第 171 圖 湿地性遺物包含層出土木製品



は1.9cm、端部径は1.3cmを測る。数ヶ所の小枝をはらった後に入念な面取りを全面に施し、端部は2方向から削り出して長さ1.6cmの扁平な<sup>ゆばず</sup>弮を作り出している。<sup>にきり</sup>弮部分が残存していないことより、<sup>うらばず</sup>末弮か<sup>もとはず</sup>本弮<sup>註31</sup>かも認め得ない。少なくとも $\frac{1}{2}$ 以上は欠損していると思われ、太さから推して全長は100cmを越すものであろう。

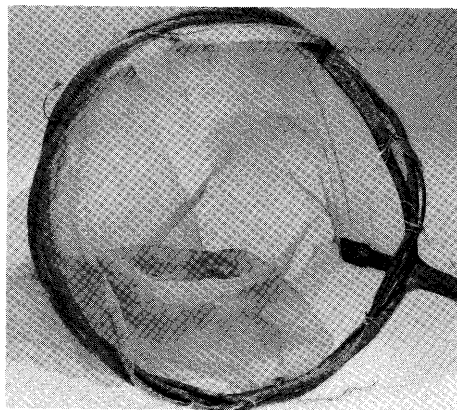
86は、弓身の一部で、87は同遺物の弮と思われるが接合せず、間に欠損部があるものと思われる。86は丸木の枝を落とし、ていねいに削りを施した後、桜皮を巻きつけている。断面は長楕円形を呈する。桜皮は部分的にしか残存していないため、全面に巻かれていたかどうかは判然としないが、図に示した桜皮の位置より下方にはわずかに擦痕が観察され、上方にはこれが認められないことより、部分的にのみ巻いたものと推測する。87は断面が丸味を帯びた三角形状で先端に削りを施して細く尖がらせ、先端から1.5cmの部分に桜皮を重ね巻きにして太くしている。弦をかけるための装着と思われる、よってこれを弮として間違いなからう。

た も(第173図88・89、第79図版88・89)

2点あり、88はF-28、L-IX、89はE-1、L-IXの出土である。2点共細身の木を利用し、適当な二股に分岐する枝のみを残して他の枝は全て落とし、幹も枝上部で切断して、幹で柄、二股の枝で細棒を作っている。全面入念に削りを施している。

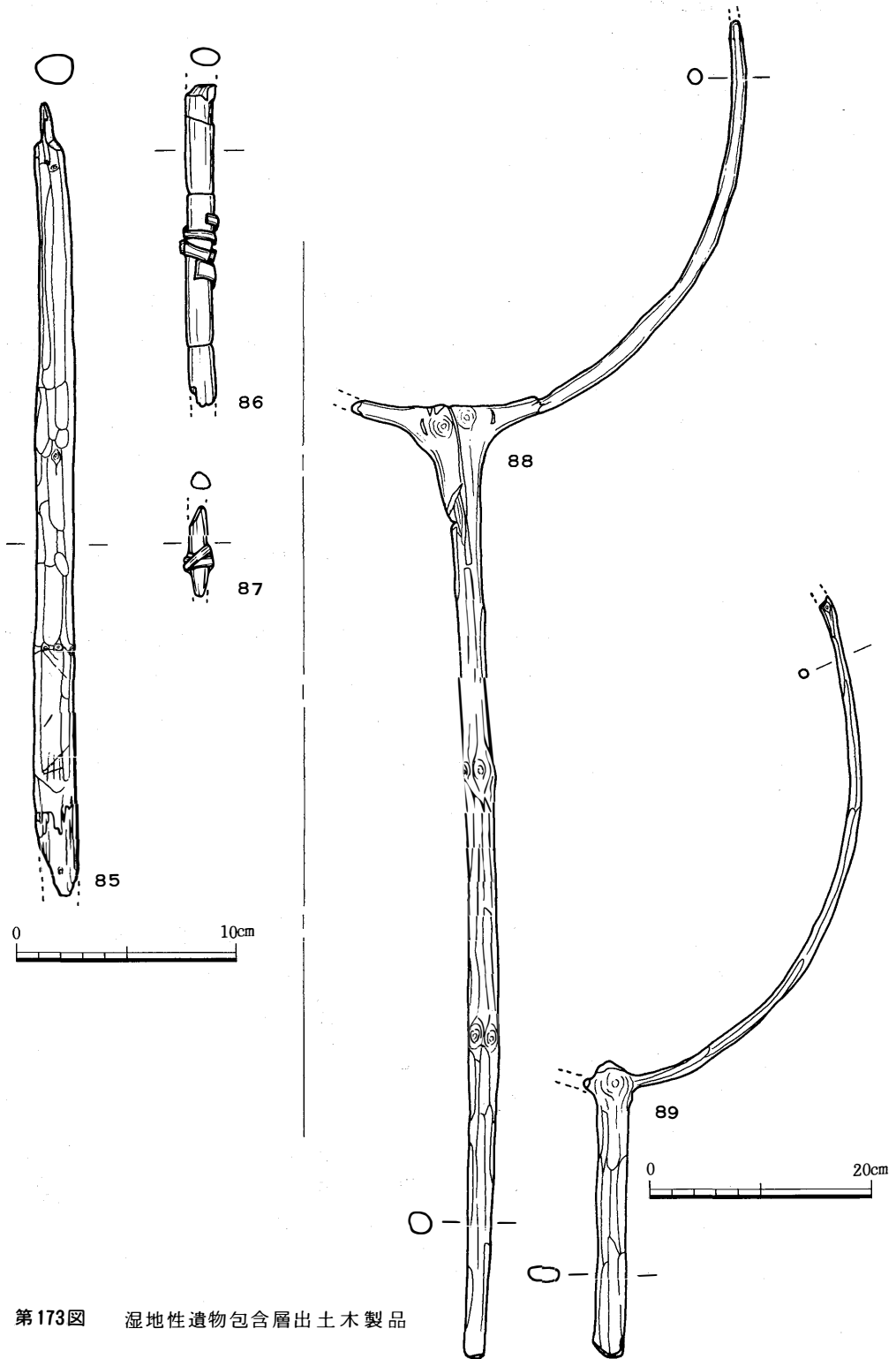
88は、柄部が完存し長さは84.6cmを測る。断面は円形を呈し上部は径2.2cmだが基部は握りやすくするためか径1.8cmとやや細くなっている。杵部はほぼ $\frac{3}{4}$ を欠損しているが、残存部から推してその径はおよそ54cmほどであろう。89は、柄部が長さ24.0cmで下方を折損しており、杵部の一方の枝は股から折損し、他方も杵全周の $\frac{1}{2}$ ほどしか残存していない。柄部断面は扁平な長円形を呈し径2.8cmで88よりやや太い。これに反して杵部の太さは88より若干細く、杵全周も88より小さめと思われ、径40~50cmほどであろうと考えられる。2点共かやの木を使用している。

網杵は2本の枝を合わせて円形に構成するのであるが、その接合方法には大阪府和泉市池上遺跡例にみられるように「樹皮を剥いだ樹枝の両端を数cmにわたって斜めに削ぎ落とし、互いに重ね合わせその上に幅0.4cmの带状の樹皮を丁寧に巻きつけて固定する」<sup>註32</sup>方法がある。また、現代にみる真野川流域で使用されているたも(第172図)は、枝を切断せず細い弦状の先端を相互に絡み合わせて接合している。相対的にいって前者は加工が非常にていねいで後者は粗い作りである。本遺跡出土のたもの網杵の接合方法は不明である。



第172図 現代のたも

第 7 節 湿地性遺物包含層



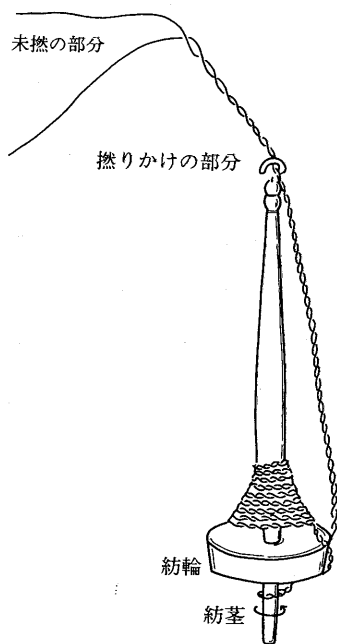
第173図 湿地性遺物包含層出土木製品

3. 紡織具(第176・178図)

紡 錘<sup>註33</sup>(第178図92, 第80図版92)

Ⅱ区C-27グリッドのL-V出土である。紡錘はこの1点のみで、紡輪に紡茎の一部を残している。紡輪は柾目板を使用した小円板で、断面形は下方がわずかに凸状の曲線を持ち、上方は、ほぼ扁平な形で最大厚は中心部の0.6cmである。中央に径0.5cmの孔を穿っている。この中央の孔には軽孔0.5×0.4cm軸頭部径0.8×0.5cmを測り、乳頭状に突出した頭部を持つ紡<sup>註34</sup>茎が、長さ約1.7cm程残存している。紡茎は頭部と軸部共に削りによる面取りが施されており、横断面形は特に頭部が円形ではなく、楕円形に近くなっている。

従来の紡輪はおおむね上方を狭くした台形で図示されている。しかし、紡輪はその機能上、狭い面は繊維を掛けるだけの目的のため下方になり、撚った糸を巻きつけていくのは上方の広い面になっている。この事から、この木製紡錘の天地は乳頭状の短い先端を持つわずかに曲線になる面が下方で、平坦な面が上方になり、軸の上方が欠損していることになる。



「ホビーラホビーレニュース」第5号

第174図 紡錘の復元

機織具部品(第176図102~106, 第82図版)

5点共Ⅱ区出土であるが、102は層位不明、103はL-Xで当遺跡の最下層、104はL-VII, 105と106はL-VIII出土である。

古代の機織具の出土例は、代表的なものとして静岡県登呂遺跡<sup>註35</sup>、同山木遺跡<sup>註36</sup>、同じく伊場遺跡<sup>註37</sup>が知られるが、東北においても山形県嶋遺跡<sup>註38</sup>、秋田県胡桃館<sup>註39</sup>などが知られている。登呂遺跡の様な弥生時代の遺物にも機織具が存在していた事はよく知られるところであるが、奈良・平安時代にいたっては各地の出土木器の中にいくつか報告例が増加してきている。

機織具には、その機能によって表わされる名称がある。<sup>註40</sup>

1. 経巻具(膝・チキリ・緒巻)

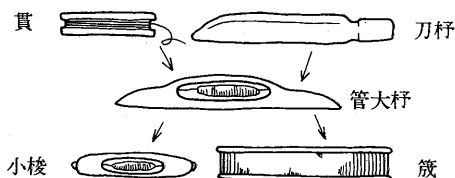
経糸をかけておく。

2. 布巻具(榎・チマキ・千巻)

できた布を巻く。

3. 開口具(綜・カサリ)

経糸を上下に二分し、綜統と共に経糸を合開交差するもの(中筒と綾棒からなり、後に綜統となる)。



太田英藏 1948年

## 第7節 湿地性遺物包含層

### 4. 緯越具(梭・杼・匕)

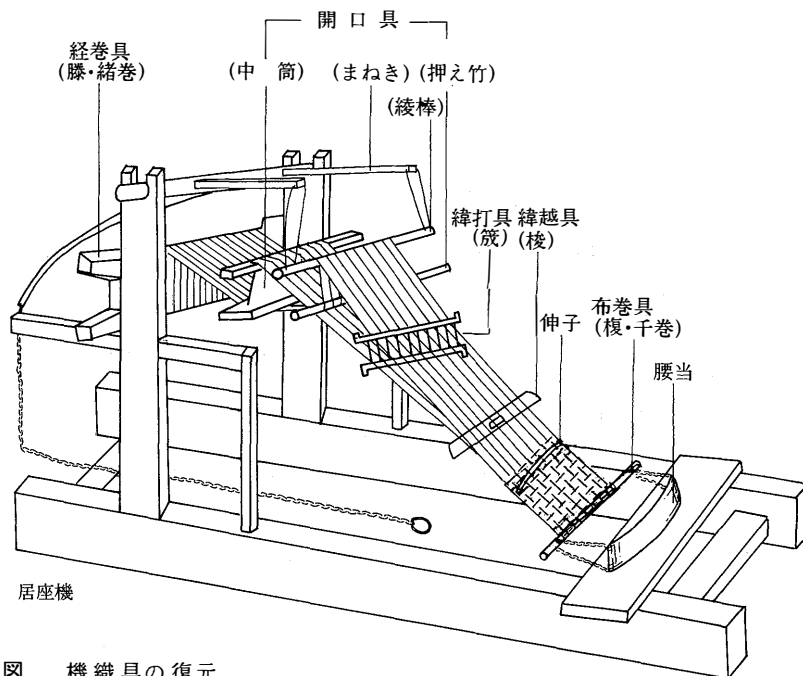
緯糸を通す(弥生時代の遺物は貫と呼ぶ)。

### 5. 緯打具(箴・オサ)

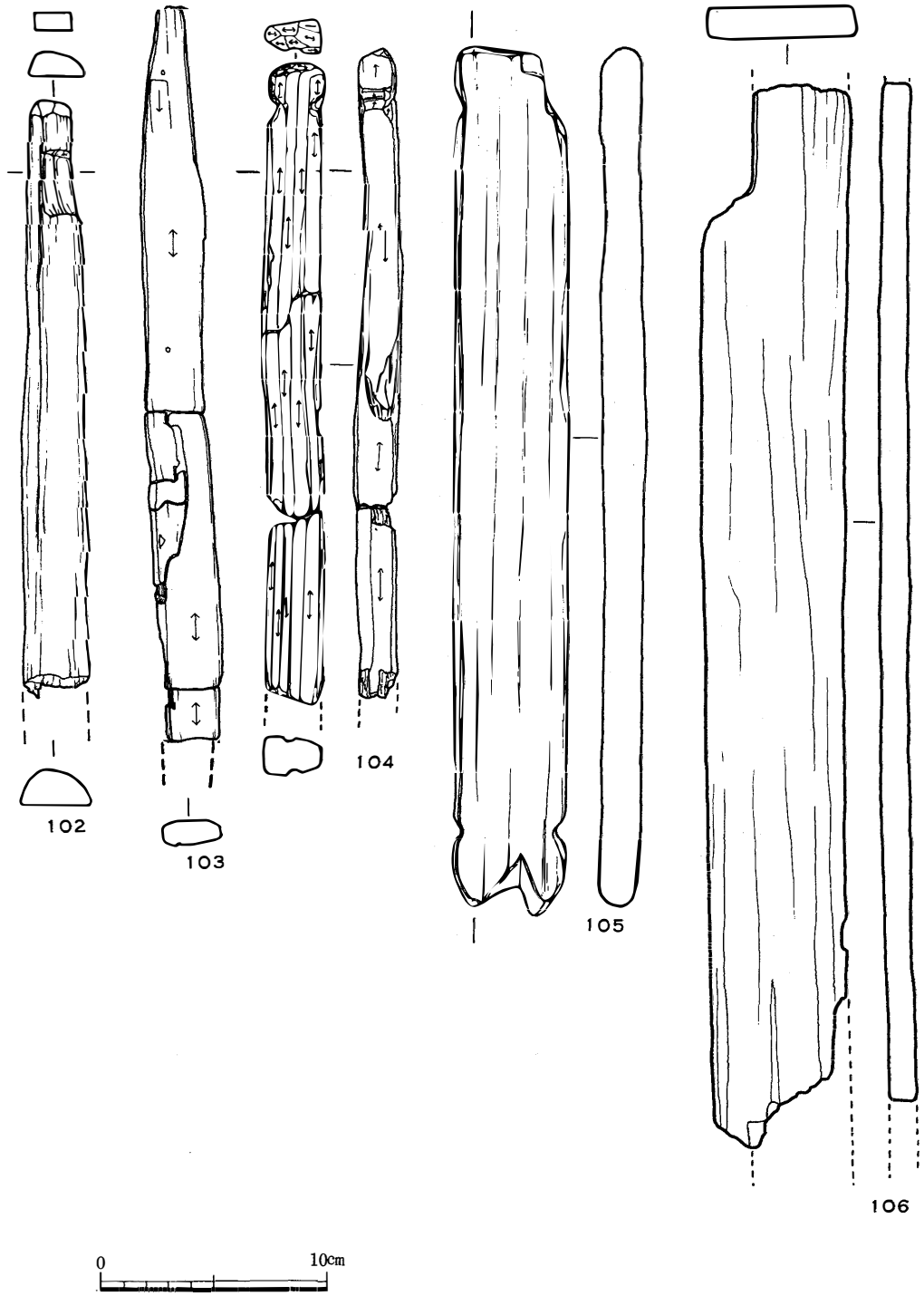
緯糸を打って絞める(弥生時代の遺物は刀杼と呼ぶ)。

これらが基本的に必要な道具である。これらの位置については第175図に示すが、機台が確立して居座機又は地機となる以前と以後では、少しずつ部品用語が異なるが、原理は同じである。

102・103・104は3点共棒状の片端部が欠損している。102は残った先端に一方から袂りを入れ柄のように作り、末端は面取りされている。中央部分は丸棒を縦に半割りした形の半月形で、片側面にわずかな平坦面がある。先端の方の横断面形は、うすい長方形である。103は先端に向けて細めに削られた板状のもので、横断面形はうすい長方形である。全面に平坦な削りの痕跡が見られる。104は先端部を二方向から「く」の字状に切込まれている。106は片側面から肩をおとすような加工がされており、中央部は幅広で両先端はそれより幅が狭くなっている。これらのことから、機織具部品を推定するなら、102と103は布巻具、104は中央の溝に棒状のものを嵌め込んで、間に挟まれたものを固定する開口具であろう。105と106は経糸を巻いておく経巻具が考えられる。しかし、機台と思われる部品の抽出もできておらず、部品にも糸を掛けた痕跡を示す擦痕の観察などできない状態であるため、機織具部品の一部の可能性を示すに留めておく。



第175図 機織具の復元



第176図 湿地性遺物包含層出土木製品

雑器

1. 履物

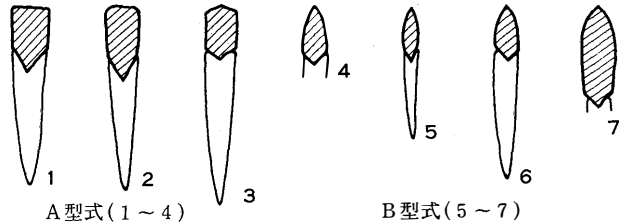
下駄(第178図90, 第80図版90)

1点のみで井戸跡ℓ-3から出土している。板目板を使用した長円形の台に厚歯を造り出している。歯は連歯で、縦断面形が下方に狭い台形を呈し、横断面形では、残存部からの推定ではあるが、あまり下方に広がってはいないようである。前歯巾は後歯巾よりわずかに広い。鼻緒孔は完存するものは右横穴の1個のみであるが、左横穴と前壺はその一部を残している。右横穴の径は1×0.7cmを測るため、左横穴も同じ位の径を持ち、前壺は下駄の特徴として横穴より小さめが常である。前壺の位置は中心線よりわずかに左に片寄っているため、右足用の下駄である。

2. 装身具

櫛(第178図91, 第80図版91)

1点のみで、井戸跡ℓ-3から出土している。全体の大きさは不明であるが、柁目を使用し細い歯を引き出している横櫛である。ムネ部は高くなく、肩部は丸味を帯びている。



残存部からの推定では上縁はわずかに  
に弯曲していると思われ、引き通し

第177図 櫛の断面形

「平城宮発掘調査報告」Ⅶより

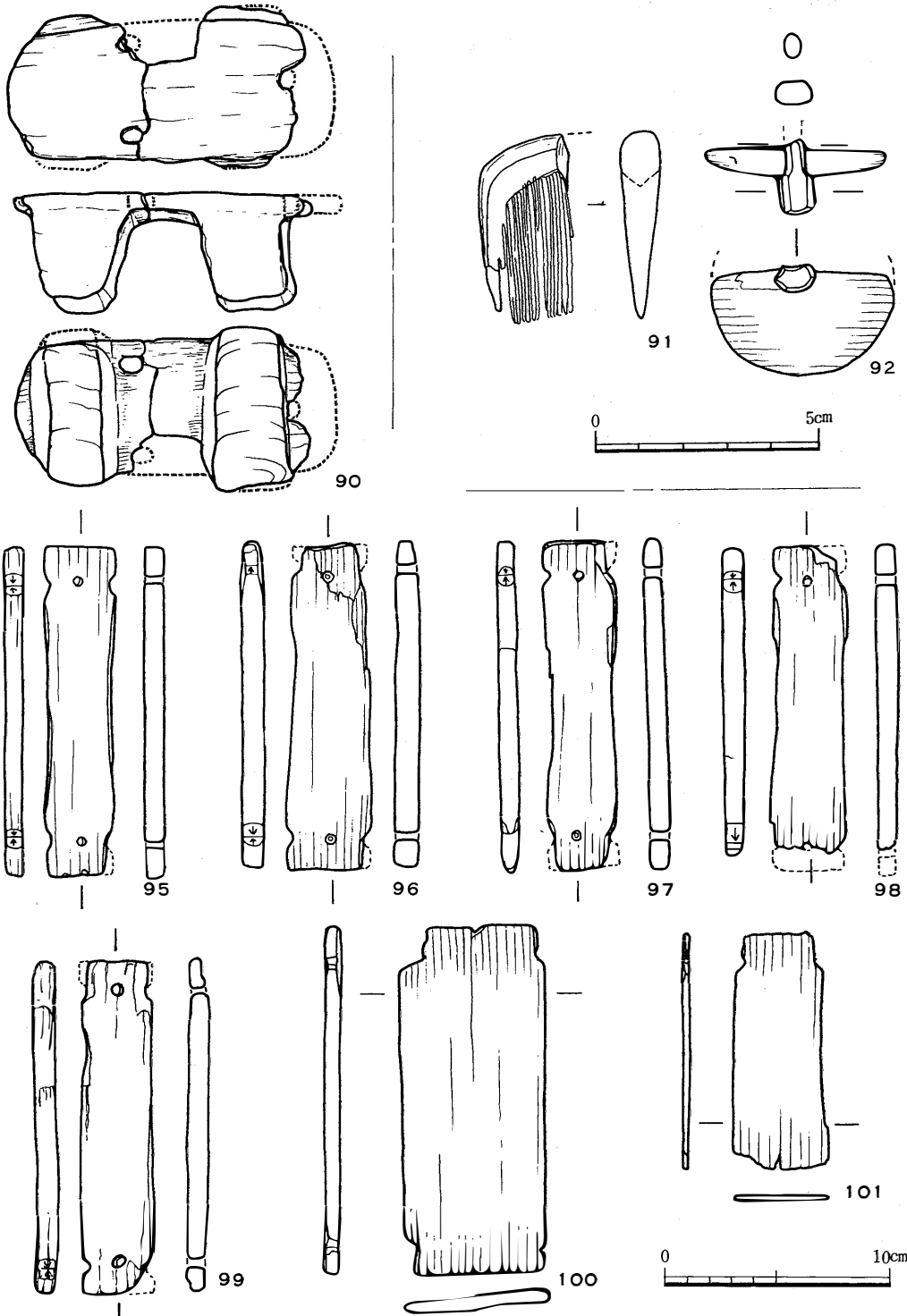
線もそれに沿って弯曲している。ムネ部の断面形は上縁がやや偏平な「U」字形をしている。

平城宮発掘調査報告<sup>註41</sup>Ⅶでは、平面形によって長方形のものをA型式、半円形のものをB型式に分類し、B型はムネの断面形が柳葉形を呈しており精製品と判断しているようである。それらに比べて、御山千軒遺跡出土の1点の櫛はA型式で肩部の丸くなるもので、ムネの断面形は平城宮分類A型式とB型式の中間型式の「U」字形である。これは平城宮出土の櫛が8~9Cにおかれているが、御山千軒出土の木器は10C以降の遺物と思われる、年代の相違からきているのかもしれない。

3. その他(第154・156図, 第70・80図版)

角脚(第156図93, 第80図版93)

Ⅱ区F-29グリッド, 出土層位不明の脚である。丸太材の芯を利用し、四面を削り、断面形が長方形になっている。長さの約1/2程を小さく削り出して柄穴に嵌め込む様な形にしているが、他に横に食い込む様な柄孔は見られない。伊場遺跡で厚板に嵌め込まれた状態で出土している組の角脚例があり、93も柄孔を持つ厚板に嵌め込まれて使用された角脚と思われるが、組かどうかは不明である。



第178図 湿地性遺物包含層出土木製品

## 第7節 湿地性遺物包含層

### 筥状木製品(第156図94, 第80図版94)

板目を使用した板物で、全面に削り痕が明瞭である。中央の側面に削り調整で括れを作り、下半分を細く調整し柄状にし、また頭部上端も細く削り込んでいるため、筥状になっている。しかし、中央の断面形は凸レンズ状に膨らんでおり、筥には不<sup>註42</sup>適当と思われる。

### すりこ木棒状木製品(第154図26~28, 第70図版26~28)

26はⅡ区D-28第Ⅷ層、27は井戸跡出土の遺物である。3点共細い丸太の芯を利用し両端を切断されたものであるが、共に35cm前後で片端部が折れて欠損している。残存する片端部は切断痕の調整のためか、頭部が面取りされている。棒の外周に樹皮は残らず、なめらかに加工されている。太さと長さがすり鉢に使用されるすりこ木棒に似た形態をしているが、すりこ木棒であれば未製品及び未使用品でない限り、頭部に面取りを残すことはないものと考えられるが、欠損した一方の状態が不明な事から3点共すりこ木棒状木製品とした。

## 祭 祀 具

### 1. 形 代(第179図, 第82・83図版)

#### 馬 形(第179図107・108, 第83図版107・108)

2点出土している。107はⅢ区G-1, L-Vから、108は湿地性遺物包含層内L-Ⅷからの出土である。

107は小型で板目の長方形板の上下3ヶ所に切り込みを入れて馬を表現している。頭部は下辺から端部方向へ斜めの切込みを入れ下部を削ぎ落として表現し、上辺2ヶ所から中央へ向けての「く」の字の切込みは背部を、下辺から頭部と逆側の木口へ向けての切込みは臀部をそれぞれ表現している。ただし、臀部の一部を欠損しているため、下辺から木口へ向けての一直線の切込みとなるか、途中で屈曲する切込みかは判然としない。両面は入念な削りが施され、頭部木口はていねいに面取りされている。側面全体にも若干の面取りが施されている。図に示した左の面には1点の墨描によって目が表され、右の面では楕円を描いてこれを表現している。

108は107よりやや大型で柾目のていねいに削りを施した長方形板の数ヶ所を粗く削り落としている。左端部は上・下辺および裏面の3方向から木口に向かって削り落とされ、先端は楔状を呈する。上辺および裏面からの削りは直線的であるが、下辺からのものは抉ったように曲線的である。また、下辺中央には5.2cmにわたる弧状の抉りが施され、更に抉りの端部より板の右端にかけては、上辺に至る直線的で緩やかな斜めの削りによって切り落とされている。これらの無造作だが多分に意図的な加工は長方形の板で何かを表現しようとしたものと思われ、左端の加工は頭部、下辺の加工は脚部を表わしたようにも考えられる。また107の例もあることからこれを馬形と分類したが、なお検討を要する。両面ともに墨痕は認められない。



刀 形(第179図109～111, 第82図版109～111)

刃物を模したと思われる遺物を刀形と総称してまとめた。109～111の3点がこれに属す。109はC-28, L-VII, 110はF-28, L-VIII, 111はD-28, L-VIIIから出土している。

109はモミを使用した楕円形の折敷底板の一部を切断して再利用したもので、周縁の削り込みと側板を綴じた桜皮が残存する。上辺ほぼ中央から1.2cmの切込みを入れ、左端から木理にそって割り取っている。さらに上辺の切込みと対称をなす下辺にも1.7cmの切込みを入れて、同様に木理にそって左端から割り取っている。整形した後に改めて全面に削りを施し、切口および割口には面取りが施されて丸味を帯びている。厚さは中央上部で最も厚く0.9cmを測り、左端では0.8cm、右端では0.7cmと薄くなる。右側の幅広の部分は下方に至るほど薄く削られ、下端では厚さ0.4cmとなり周縁の削り込みの段も削平されている。中央よりやや右下方には径0.3cmの小孔が穿たれている。

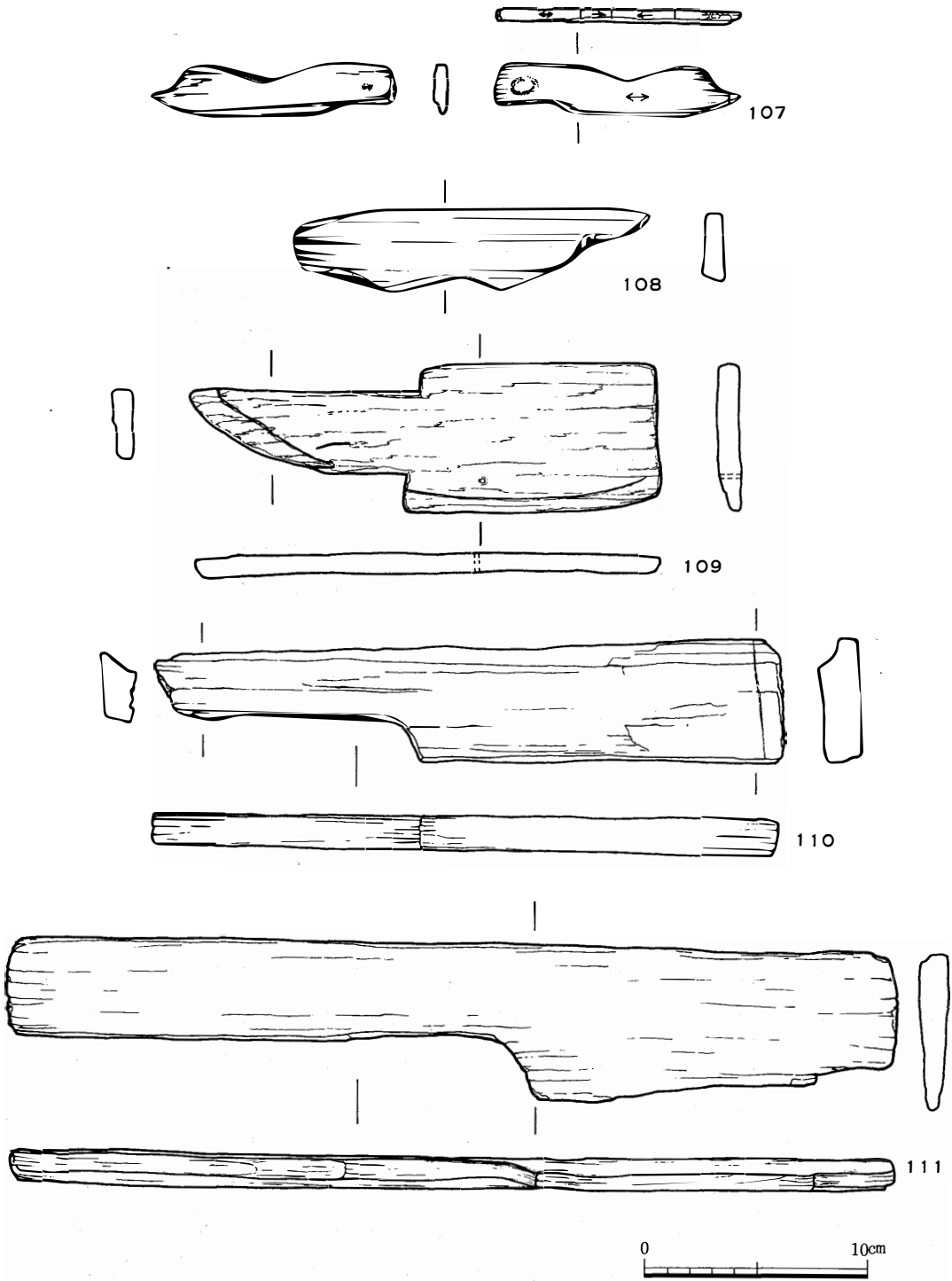
中央より左半を身、右半を装着後の把として刀子を表現したものともみれるが、把の幅が広すぎることや、右半の削りがよりていねいで下部に至るほど薄く削られていることなどを考え合わせると、むしろ左半は茎、上下の切込みを区、右半を身とみるのが妥当と思われる。右半下部の削りは刃の表現と考えられよう。しかし刃部が極端に短く、右端が直線的に切断され切先が表現されていない点などが腐に落ちない。小孔は何か吊り下げるための紐を通した孔であろうか。

110は左端を折損しているが、ほぼ原形をとどめているものと思われる。右端が最も幅広で左方に至るに従い徐々に狭くなる四角形の細長い板の下辺やや左よりの位置から深さ2.3cmの弧状の抉りを入れ、左木口に向かって割り取っている。厚さは右端で1.7cm、左端で1.4cmと左方に至るほど薄くなる。抉り取った部分以外の割り口、切り口の削りはさほどていねいとはいえない。右端には鋸状の工具による深さ0.1cmほどの直線的な傷が表面のみに残る。

111は完存しており、110とほぼ同じ形状を呈する。下辺からの抉りおよび割り取りは110と同様な加工が施されている。しかし抉りの位置がやや右よりであること、右半の幅広の部分が右端へ向けて下辺から斜めに削り取られていることなど細部に異なる点がある。全面の削りはむしろ、109に類似しており、切り口、割口に若干の面取りが施されている。厚さは左端で1.2cmと最も厚く、右端で1.0cmと徐々に薄くなる。右半の幅広の部分は109同様下方に至るほど薄く削られ、下端では0.4cmを測る。

110・111は刀形というより、菜切包丁のような形状を呈している。しかし、古代における包丁は刀子であり、正倉院宝物や絵巻物にみる包丁は皆細身で鋭利な切先を持つものである。広島<sup>註43</sup>県草戸千軒町遺跡や、福島県三貫地遺跡<sup>註44</sup>では身幅の広い包丁が出土しているが、いずれも中世のものようであり、先端はやはり鋭利に加工されている。先端を平らにした包丁の出現は、より時代が下がってからのことであろうと思われる。従ってこの2点は包丁を模したとは考え難い。

第 7 節 湿地性遺物包含層

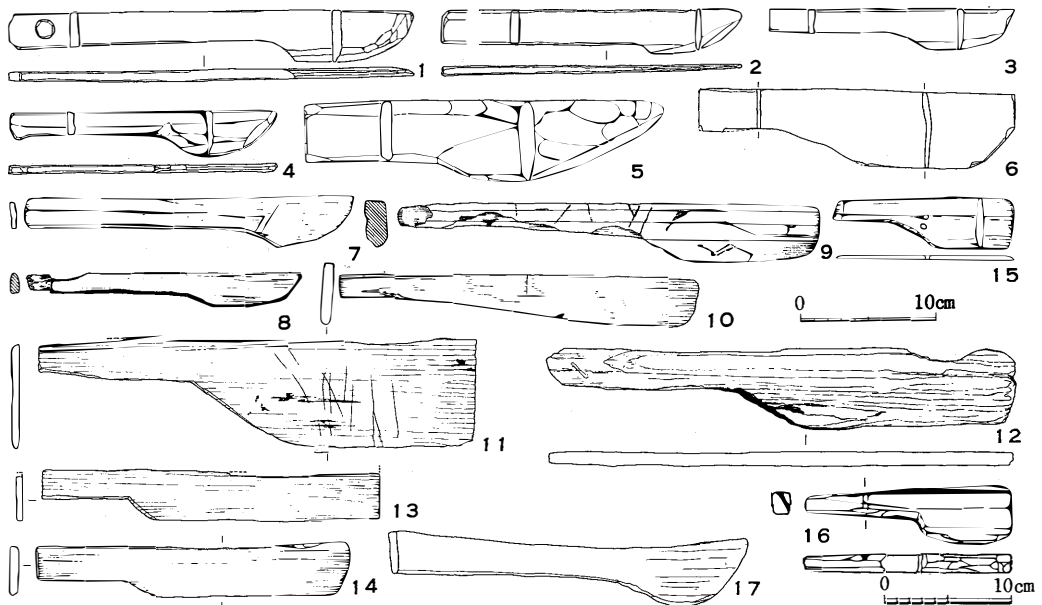


第 179 圖 湿地性遺物包含層出土木製品

一方、110, 111に相似した遺物が他遺跡からも出土しており、これを第180図に示した。<sup>註45</sup>各遺跡によって名称は異なり、切出形木製品、ヘラ、ヘラ状木製品、小刀状木製品などと呼ばれている。いずれも一辺を平坦—いわゆる平棟—にし、他辺に弧状あるいは鈍角の挟りを入れて柄部を作出して刃部と区別する点が共通する。しかし、刃部の作り方には相異があり、刃部を弧状に作って先端を尖がらせるもの(仮にA類とする)と、刃部を平坦にし先端もほぼ垂直に切り落とすもの(同B類とする)がある。1~5, 7, 8がA類に属し、9~16がB類、御山千軒遺跡例もB類に属する。6はABの中間的形狀を呈する。大宰府史跡では図示した1~4を含め計8点の同種遺物が出土しているが、すべてA類であり、逆に後城遺跡では5点すべてB類である。A類の多くはていねいな作りで刃を削って作出するが、B類は刃を作らないものが多く折敷底板を再利用しているものもある。

類例を掲げA類, B類としたものの、A類とB類が同一目的で作製され、しかもこれらが祭祀に関わった形代として使用されたかどうか、尚検討の必要がある。

一般に木製品のなかで写実的な模造品は別としても、刃物を模したものと“ヘラ”あるいは“コテ”などを区別するのは困難といえる。A類としたものは、民俗例にみるせっかい<sup>註46</sup>という摺った味噌を播鉢からこそげ落とす道具で杓子を半分に割ったような形のヘラ(第180図17)にたいへん似ている。よって110・111をここでは刃物に似た形状であることから形代に分類したが、ヘラとして機能した可能性も十分にあるといえよう。



第180図 他遺跡出土刃形類似木製品

- 1~4 大宰府史跡出土切出形木製品 5・6 草戸千軒遺跡出土ヘラ状木製品  
 7~10 堀越城跡出土小刀状木製品 11~14 後城遺跡出土ヘラ状木製品  
 16 青戸・葛西城址出土木製品(用途不明) 15 脇本埋没家屋出土木製品(用途不明)  
 17 民具例 せっかい

その他の木製品

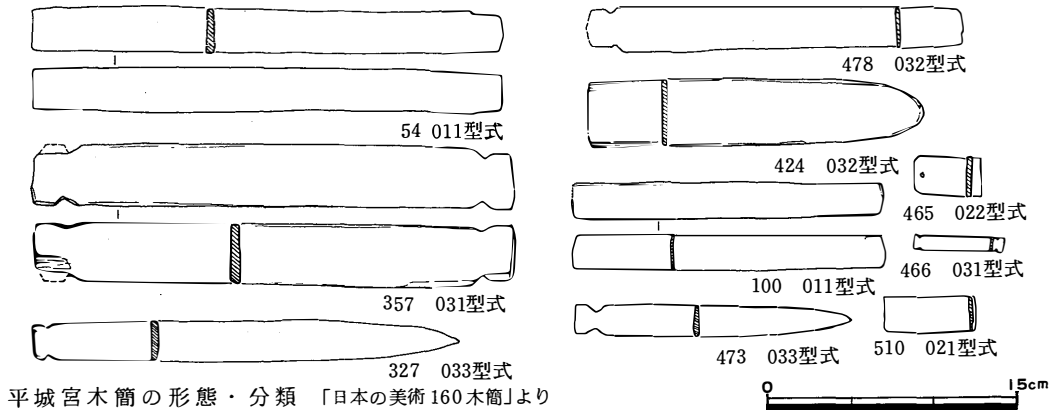
1. 木札状木製品(第 178 図, 第 81 図版)

長方形板の上端及び下端の両側面に「く」の字の切込みが施された用途不明の木製品が 7 点出土している。これらは、中央上下に小孔を有するものと孔を有さないものに分けられる。

有孔木札状木製品(第 178 図 95~99, 第 81 図版 95~99)

95~98 は B-27, L-VII において 4 点が重なった状態で出土し、すぐ近くには 11 の盤も伴出している(第 43 図版 5 参照)。99 のみ単独で隣の B-28 井戸跡近くの L-VII から出土した。5 点のうち 98 は下部の切込み以下を折損している。また、他の 4 点もわずかに欠損部があるがすべて原形は同様の形状であったと思われる。5 点共、木目が緻密で 4 面に柁目のできるいわゆる四方柁の板材が用いられている。両側面の両端部に計 4 個の切込みを有し、左右の切込みを結ぶ線上には上下 2 個の小円孔が穿たれている。表裏面の削りはあまりていねいとは言えない。切込み部及び小孔付近には顕著な当たりや擦痕は認められない。また第 61 表に示したように若干のばらつきはあるにせよ法量にも共通性が多い。長さは 14.7~14.8 cm (98 は推定長)、幅 3.2 cm、厚さ 0.9 cm、孔間距離 11.8 cm、孔径 0.4 cm あたりにほぼまとまっている。これらの数値は作製時においてある程度の規格があったことを窺わせる。

このように両側面の両端部に切込みを有する形状は木簡あるいは付札、荷札などにみられる。しかし、95~99 の 5 点いずれにも赤外線テレビ撮影の結果墨痕は全く認められなかった。また、墨書する場合は書き入れられる面がていねいに削られるのが普通だが、95~99 においてはいずれもさほどていねいな削りは施されていない。更に奈良国立文化財研究所における平城宮木簡の形態分類ではこのような形状のものを「031 型式—長方形の材の両端の左右に切込みを入れたもの。方頭、圭頭など種々の作り方がある。」<sup>註 47</sup>としているが、平城宮木簡の中には 031 型式の形状であり併せて上下に 2 孔を穿った例はない。また、他遺跡での木簡の報告例にも見当たらない。木



平城宮木簡の形態・分類 「日本の美術 160 木簡」より

筒に孔が穿たれる場合「同一内容の木筒を一括するためにあけたもののようで」あり、また「下方に<sup>註48</sup>あけるものが多いのは、檜扇形に綴って検索に便利ならしめるための処置と考えられる」と、あるように事後の整理のために穿たれたものが多く、95～99の如き2孔が整然と縦列するものはない。従って、95～99はたとえ未使用のものとしても木筒あるいは付札、荷札とは認め難いと言えよう。とはいえ、上下の切込みはおそらく紐などを掛け結ぶための加工であろうし、小孔は吊るすため、あるいは複数のものを綴るために穿たれたと考えられる。出土状況から判断すると、95～98は埋没時には編綴されていたようでもあり、99も隣りのグリッドからの出土であることより、もとは一緒に綴られていたものが流離したとも思われる。しかし綴るだけなら孔のみで足るものであろう。小孔が左右の切込みを結ぶ線上にあるということは、切込み部に紐を掛け結んだ場合孔が塞がれ、小孔の機能が失われてしまうであろう。掛け結ぶ時に小孔を通して、より堅固に結んだのであろうか、あるいは綴る場合に小孔を利用し、掛け結ぶ場合に切込みを利用するというように別々に機能したのであろうか。いずれにせよ、使用時の状態が出土状態から窺えない以上、用途不明と言わざるを得ない。

第61表 有孔木札状木製品計測値  
(単位：cm)

番号	長さ	幅	厚さ	孔間距離	孔径
95	14.8	3.2	0.8	11.7	0.4
96	14.7	3.8	1.0	11.9	0.4
97	14.8	3.2	0.9	11.8	0.4
98	14.8	3.2	0.9	11.7	0.4
99	14.7	3.2	0.8	12.6	0.4

無孔木札状木製品(第178図100・101, 第81図版100・101)

100・101共に湿地性遺物包含層出土である。有孔の木札状木製品が画一的であるのに対して、無孔のものは法量の上でもかなり相異なる。

100は柾目のスギ材を用いている。上部を若干欠くもののほぼ完形で有孔のものより長く、幅も広いが厚さはやや薄い。両側面、両端部の切欠きは左右対称ではなく、右側の2つは幅狭く浅いが左側の2つはやや幅が広くて深く切込まれている。表面及び側面はていねいに削られているが、裏面はやや荒い。切込み部分に当たり及び擦痕は観察されない。

101は、柾目のモミ材を用いている。原料の外縁近くを利用したらしく、左半は木目がつんでいるが、右半は木目が粗い。両側面上端に2つの切込みがあるが、下部を欠損しているため、下端に切込みがあったかどうか定かではない。小型で厚さ0.2cmと極端に薄く、曲物の側板程度である。削りはていねいであったようだが、木目間の軟質な部分が窪み、木目が浮き出ているため面は凹凸が著しい。

これら孔のない2点も形状は付札、荷札に似ているが、両者共に墨痕は認められず、これらの用途もまた不明である。

101の如き薄くて切込みのある木札状の木製品は県内では矢吹町古館遺跡の井戸跡より3点出土している。そのうち2点は、頭部が圭頭を呈する同形のもので重なって出土していることから

## 第7節 湿地性遺物包含層

「2枚1組で製作され使用された可能性が大である<sup>註49</sup>」と報告されている。また、この井戸内からはこれらと共に6点の祭祀遺物が出土しており、これらの木札状の木製品と祭祀遺物を関連づけて検討することも必要であるかもしれない。

### 2. 建築部材(第181～188図, 第84～89図版)

#### 楔状木製品(第181図112～115, 第84図版112～115)

楔と思われる木製品が4点出土している。

112は、上半が断面隅丸方形、下半はこれより丸味を帯び、先端をていねいな削りによって尖がらせ、ほぼ逆円錐状を呈する。上の木口は周囲数ヶ所から逆方向に削りを加えている。これは上部に圧力がかかった場合に上端が潰れ外縁が捲れて、上部径以上にはみ出すことを防ぐための加工であろう。ていねいな削り、上端の加工などから大型の木釘とも考えられる。

113は、丸木を楔形に全面でていねいに削り出したものである。平面は矩形、側面は三角形を呈し、上部の断面は隅丸方形、下部は角のはっきりしたやや胴張りの矩形を呈す。頂部及び先端が欠損しているが、上下から強い圧力が加わったためのものとも思われる。裏面に多く圧痕を残している。

114は、右側面が割れ、完形ではないが、形状や加工において115と類似点が多いため、楔状木製品として扱った。木口の一方は斜めに削られ、割面以外の3面から下方に向けて斜めに削り、先端を細くしている。左側面の削りは平滑でなく波状を呈するが、意識的なものかどうかは不明である。下端には潰れた痕がうかがえる。

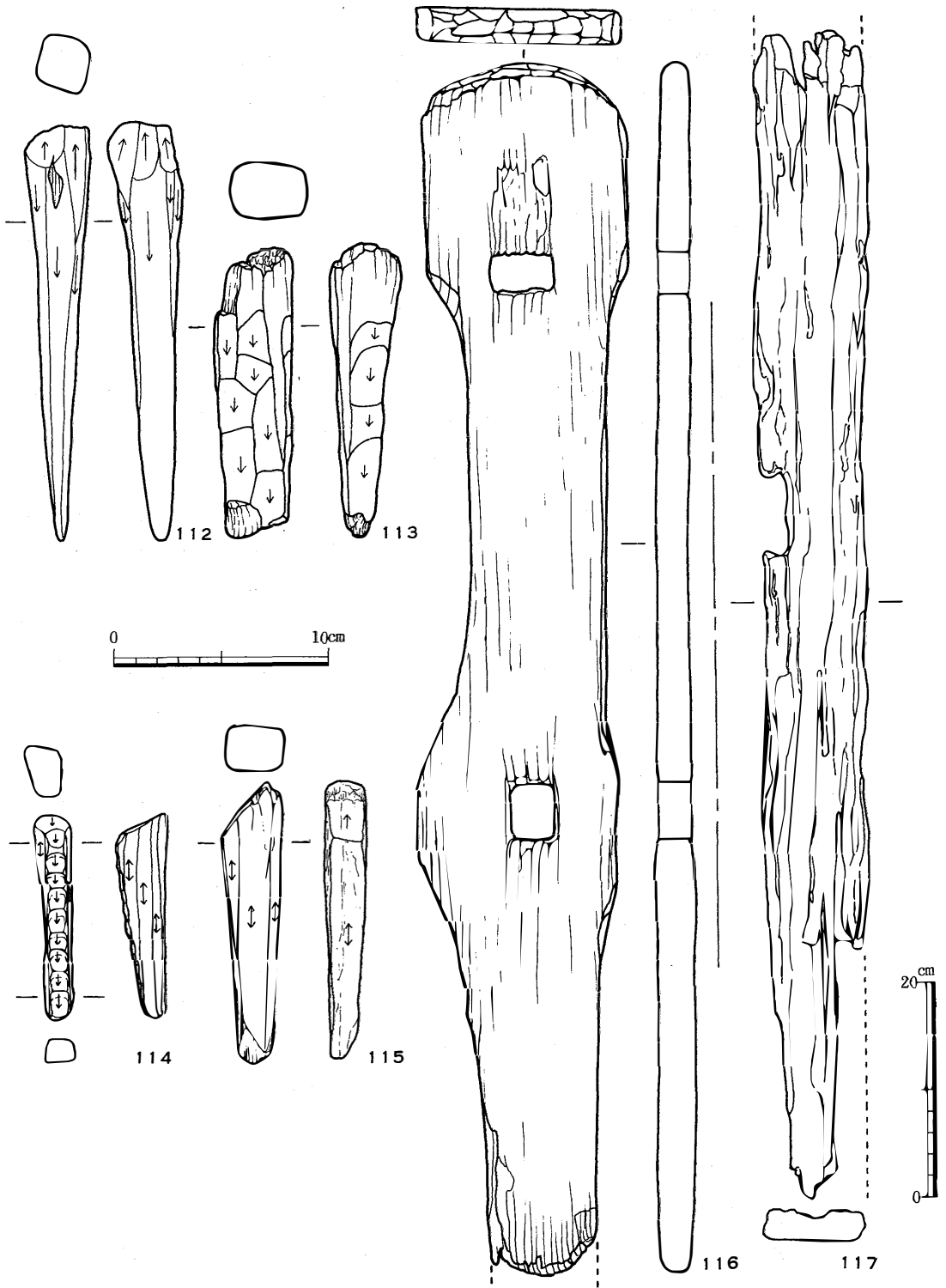
115は、細長の小型の角材を削り出して整形している。木口の一方を斜めに切り落とし、一方の側面は真直ぐに、他方と表裏の3面は下方に向けて斜めに削りを施して先端を細く作り出し、下端は半円形にきれいに整形されている。頂部は腐食し、ややくずれている。裏面にわずかに圧痕がみられる。

#### 板材(第181～185図116～130, 第84～86図版116～129)

建築物の一部として用を供したであろう板状の木製品、又は用途・機能を明確にし得ないやや大型の板状木製品をまとめた。腐食がはげしく完形に復し得ないものが多いため、部分的な観察記載とならざるを得ないが、大きく、柄穴・切込み・くりかた等の加工を有し、他材との組み合わせが考えられる材と、このような顕著な加工を有しないものに分けられる。

116～120, 122, 124, 125は側面等に加工があり、他材との組み合わせが考えられる。

116は、79の横槌と共に井戸跡内から出土している。下部を欠損しているが全面に削りが施され、ていねいに仕上げられた木製品である。細長矩形の柁目板の一方の木口をていねいに面取りして弧状の頭を作り出し、中位に両側辺から長さ24.0cmにわたる切込みが施される。下位にも同様の切込みがあり、長さは20cm以上である。切込みの深さは、左側下のものが最も深くほぼ3.0



第181図 湿地性遺物包含層出土木製品

## 第 7 節 湿地性遺物包含層

cm, 左側上のものが 2.2cm, 右側の 2ヶ所は 1.0cmを測り, 左右対称ではない。板の中心線上, 上下 2ヶ所に矩形の柄穴があり, 上位のものは 1.8cm×3.0cmと横長で両側辺の切込みの上端を結ぶ線上に位置し, 下位のものは 2.6cm×2.0cmの縦長で下部の最大幅を有する位置に穿たれている。用途は不明である。

117～120は, いずれも 100cm以上の大型板材で矩形の切込みを有している。

117は上下を欠いており, 板面の腐食も著しい。ほぼ中央の左側面に 5.0cm×1.8cmの矩形の切込みが施されている。118は腐食著しく表面の一部以外ほとんど板面を残していないが, 左側面上部の矩形の切込みは明瞭に残存し, 長さ 9.4cm, 深さ 1.7cmである。119も欠損部がかなりあるが, やや厚手で左側面中程に 19.0cm×2.7cmの矩形と思われる細長の切込みが施されている。120は完形であったが, 中央下部の切込みの部分が保存中に欠損した。上端部は木口と側面から切込んで 5.0cm×4.5cmの柄を作り出し, 中央部左側面には 2.0cm×1.5cmの小さな矩形の切込みを施している。また, 下端部は複雑に切込まれ, 大小 2つの柄が作り出されている。数ヶ所に小孔があるが, 上部に集中する 4個と右隅の 1個, また中央と下部左隅の比較的大きいものそれぞれ 1個の計 7個は, 釘孔と思われる。これら切込みを有する大型の板材はその形状が B-27で検出された井戸枳板に近似しており, あるいはかつて井戸枳に使用された板材であったのかもしれない。

122は, 全面ていねいな削りが施され, 上部右側面には 3.8cm×0.9cmの矩形の切込みがある。下端部は木口と右側面から 0.9cm×2.5cm切込まれ, 板の厚さに相当する長さの柄が作り出されている。表面に 6ヶ所小孔があるが, いずれも貫通していない。切込みを有する側面には切込みのすぐ下に 2ヶ所, 下方に 3ヶ所計 5個の釘穴がある。これは, 同種の厚さの板を釘を見せずに側面同志を接合するための相釘孔と思われる。

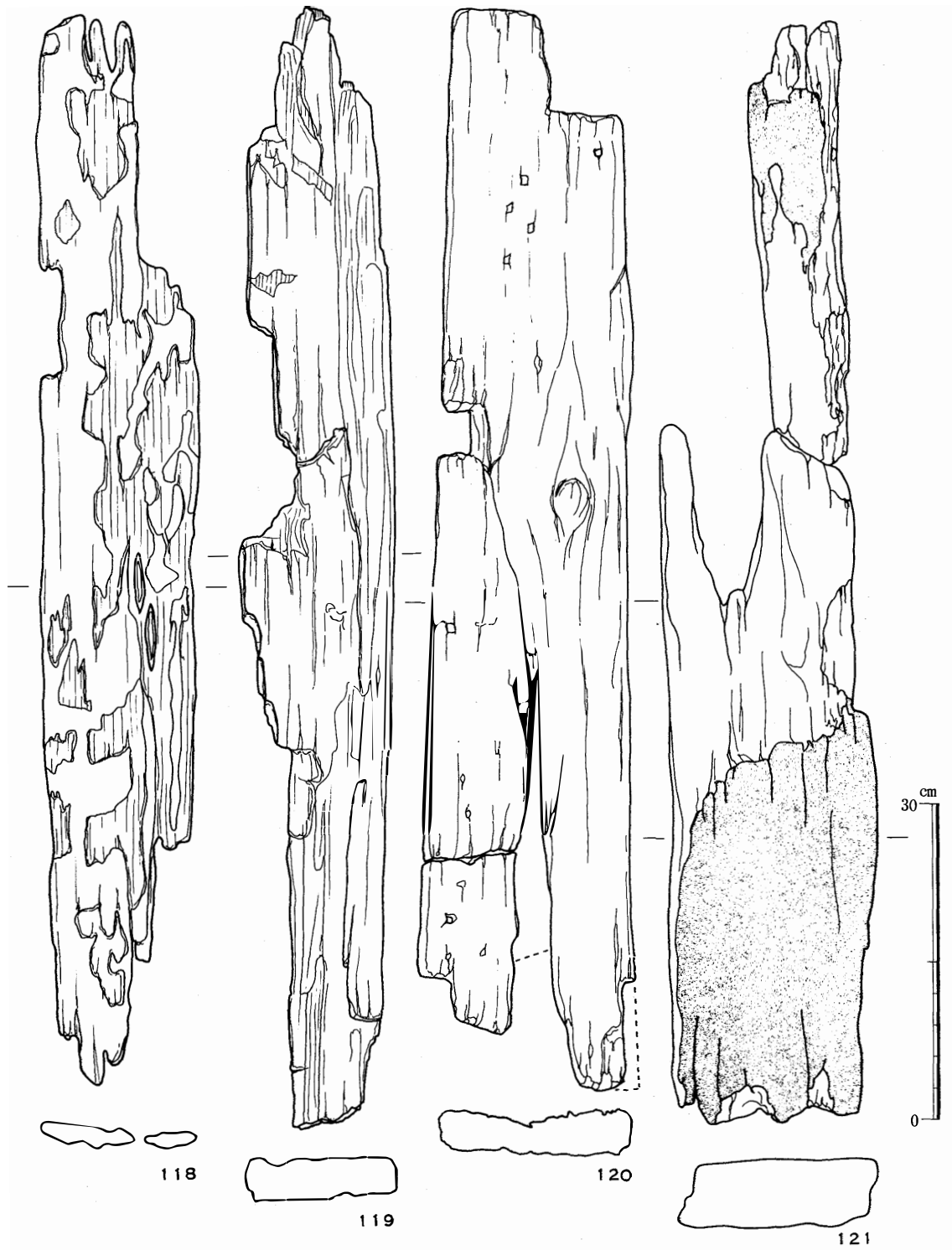
124・125は, 共に上下木口が折損しているが, 同一樹種で木質が似通っており, 同一材かと思われる。124は右上端に深さ 2.8cmの矩形の切込みらしきものがあるが, あるいは折損部かも知れない。125は右側面下部に長さ 16cm以上, 深さ 2.5cmの切込みがあり, その上部には丸太がはめ込まれたと思われる長さ 6.5cm, 深さ 2.3cmのくり込みがある。小孔が多く存在するが, 釘孔とは認め難く, ほとんどが植物痕などによるものかと思われる。

121, 123, 126～130は側面等に顕著な加工がないもので形状もさまざまである。

121は, 厚手の大型板材で上部の腐食が著しく両木口も折損している。板面を残す部分は表裏両面共ことごとく焼痕を有す。

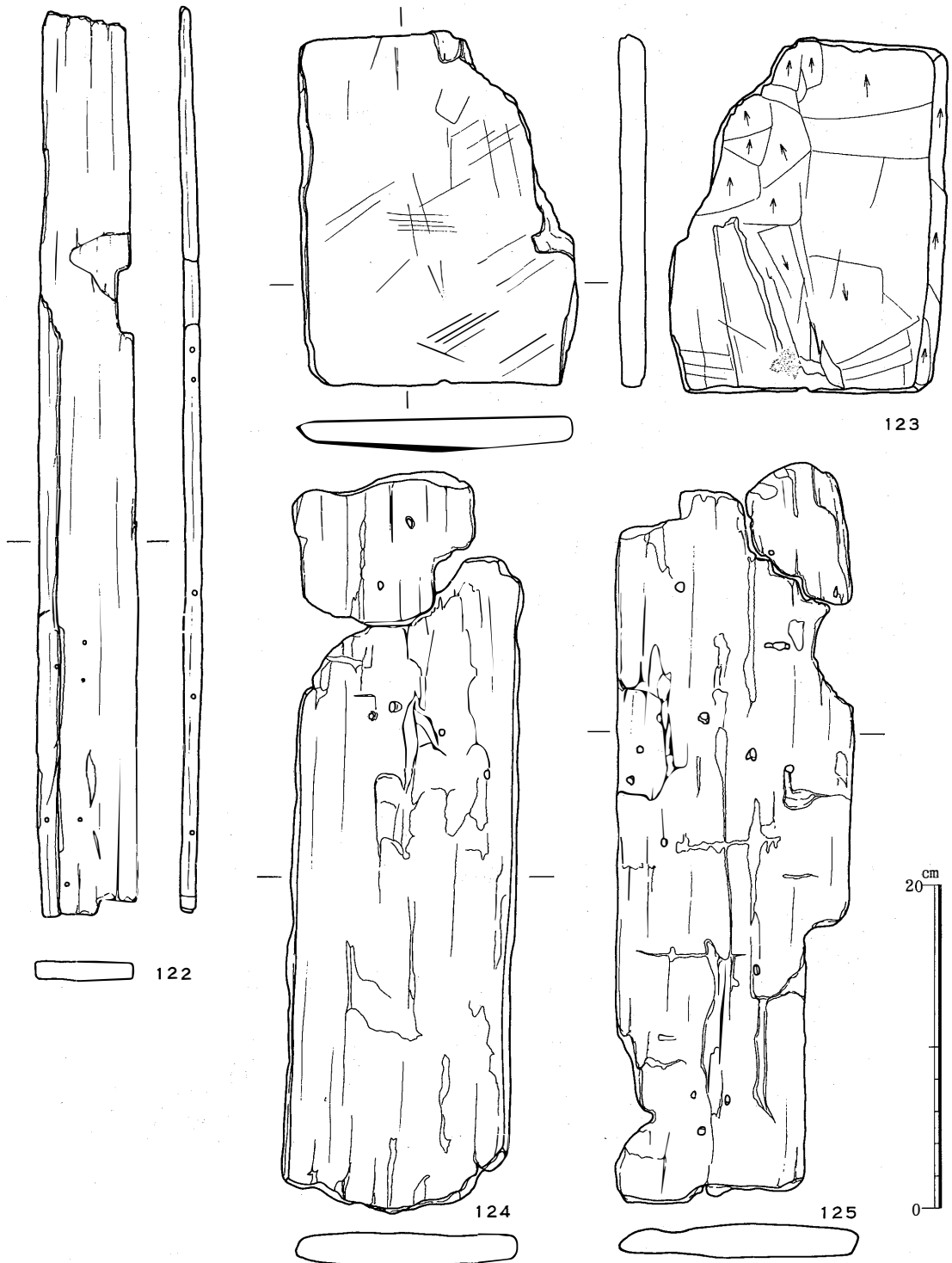
123は, 一部欠損しているが, 全面ていねいに削られた矩形の板である。表裏両面に工具による削り痕が観察され, 表面は幅の狭い工具, 裏面は幅広の工具と使い分けがなされている。また, 表裏共鋭利な工具による直線的な傷が多く認められる。裏面中央下部に部分的に焼痕を残す。



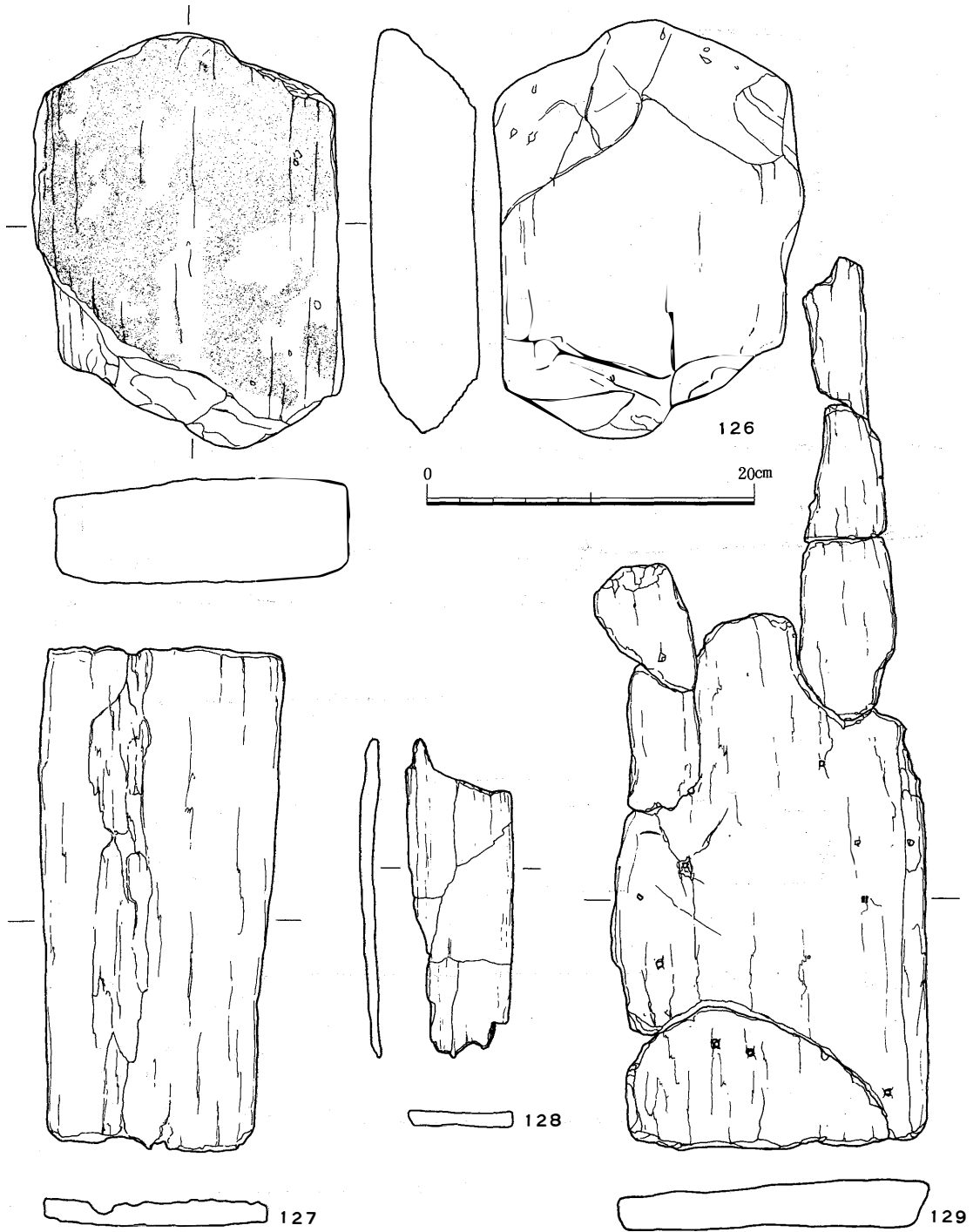


第182図 湿地性遺物包含層出土木製品

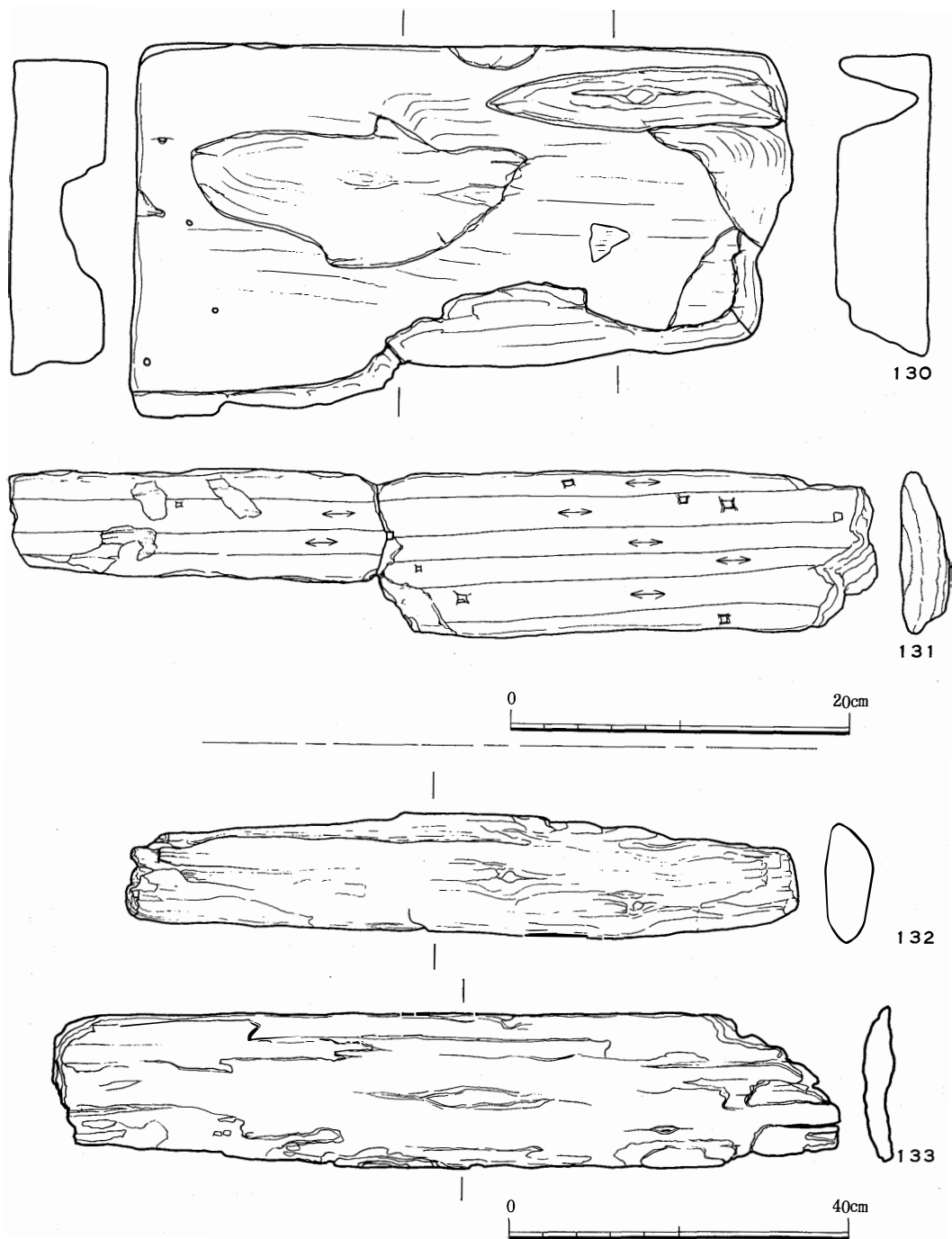
第 7 節 湿地性遺物包含層



第183圖 湿地性遺物包含層出土木製品



第184図 湿地性遺物包含層出土木製品



第185圖 湿地性遺物包含層出土木製品

126は、厚手の不整形の板で両側面は真直ぐに削られ、横断面は矩形を呈する。上の木口は鉋状の工具によって裏面から表面へ向けて、2方向から数度打ち欠いて切断している。下の木口の切断面はこれよりも乱雑で任意の方向から打ち欠いている。全面に焼痕が認められ、裏面にはわずかに工具による傷が観察される。

127は、ほぼ矩形の薄板で削りをほとんど施さず割載面をそのまま残している。木口面、側面の削りもやや荒さが目立つ。上部がやや厚く、下部に至るに従い薄くなっている。

128は、両木口を欠損しているが、表裏及び側面共削りがていねいである。表面はやや内弯する。

129は、一方の木口は完存するものの欠損が著しい。多数の小孔があるが、大きさも大小さまざままで貫通しないものもあり、また貫通孔もほとんどが斜方向であるため、釘穴とは認め難く、植物痕などが貫通したものとしておきたい。

130は、厚手の矩形の板でていねいに整形されているが、片側面と一方の木口を欠損している。節のある板目材であるため、節部が腐朽し表面が部分的に抉られたようになっている。

#### 割 載 材 (第185図 131～133, 第86～87図版 131～133)

丸太の脇を断ち割りしたものを割載材とした。131～133が相当するが、これらはすべて一方向からのみ裁断され板状に材を得ているが、図示せず表のみに掲載したものの中には芯方向に向かって二方向から断ち割られ、断面がほぼ三角形を呈するものも含まれる。

131は、やや小型で割載面に削りを加えている。7ヶ所に方形の小孔を有する。配列に規則性はないが釘穴と思われる。

132・133は、大型で割載した後の調整加工は行なわれていない。梁のような部分に使用されたものかもしれない。

#### 角 材 (第186・188図 134～142, 第87～89図版 134～142)

角材は大きさもさまざまで、断面は三角形のものと四角形・隅丸方形・多角形のものなどがある。

134～137は、いずれも断面三角形を呈し、切込みや柄穴を有する組合せ部材である。

134は、両木口を折損し全長は不明であるが、右辺の中央付近に2.0cm×1.3cmの矩形の切込みが施されている。左半面と裏面は割載面をそのまま残すが、切込みのある右半面はていねいに削られている。

135は、上の木口のみ折損している。3面共、割載面を残す粗雑な作りであるが、右辺の下部には丸太を嵌め込むためのものと思われる、長さ7.7cm、深さ2.3cmの弧状の切込みがていねいに施されている。図に表わした面以外の2面、特に左側面にあたる部分は焼痕が著しく、下の木口まで及び、木口は焼き切れたようでもある。しかし、焼痕が全く見られない面があることから、あるいは加工時に意識的に焼かれたのかもしれない。

## 第7節 湿地性遺物包含層

136は、134と同様に割截面2面とていねいに削られた1面とで構成される。上の木口は折れたものと思われるが、下の木口は2方向から斧状の工具で打ち切られ、最後は中央部で折り取られている。右辺の上部に長さ6.0cm、深さ0.8cmの不整形の浅い切込みが施されている。

137は、上下を折損し、腐朽も著しいが、残存する板面にはていねいに削られた痕が窺える。大型の部材で断面は不整三角形を呈し、上下2ヶ所に矩形の柄穴を有している。上位のものは、7.5cm×4.2cm、下位のもののはほぼ8.5cm×3.5cmと思われる。柄穴間の距離は12.0cmを測る。

138は、丸木を削って4面を作り出した大型の材で、若干の面取りが施され、断面は隅丸方形で、数ヶ所枝を切り落とした痕が見られる。上の木口は折損しているが、下の木口は工具によって一方向から打ち切られている。太さから柱材とも思われるが、上部がやや屈曲していることより断定しかねる。

139～142は、小型の角材で142以外は断面四角形を呈する。

139は、腐食によって両木口が折損し2面が失われているが、他の2面は残りが良く、ていねいな削り痕が観察される。図示した表面と左側面がなす角はほぼ105°で全体の断面形は台形を呈すと思われる。

140は、4面に柁目を有する堅緻な原材を用い、ていねいな削りを施し3面を仕上げているが右側面のみ整形が荒い。

141は、上下木口を折損するが、堅緻な柁目材を用いた細い棒状の角材で、4面がていねいに削られている。上部中央には径0.4cmの小孔が穿たれている。

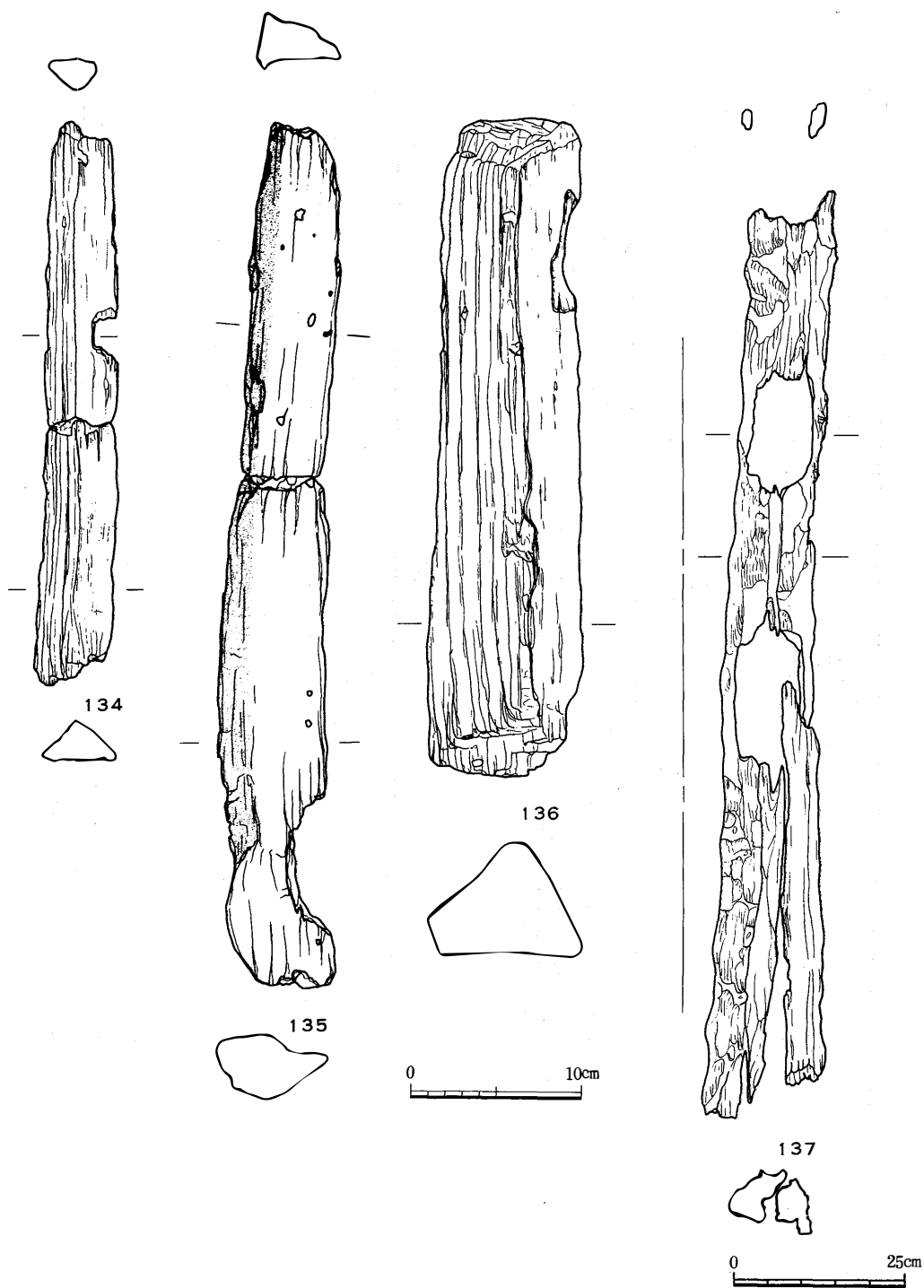
142は、丸木をていねいに削り、断面はほぼ五角形に仕上げられているが、下部は円形に近く面取りされている。上部に向かうに従い、細くなっており、焼痕が認められる。両木口に焼痕はなく折損している。

### 丸材(第187図143～146、第88図版143～146)

丸木の枝を切り落として削り、一部に加工を施し、他の材を組み合わせたと思われるものが、4点出土している。

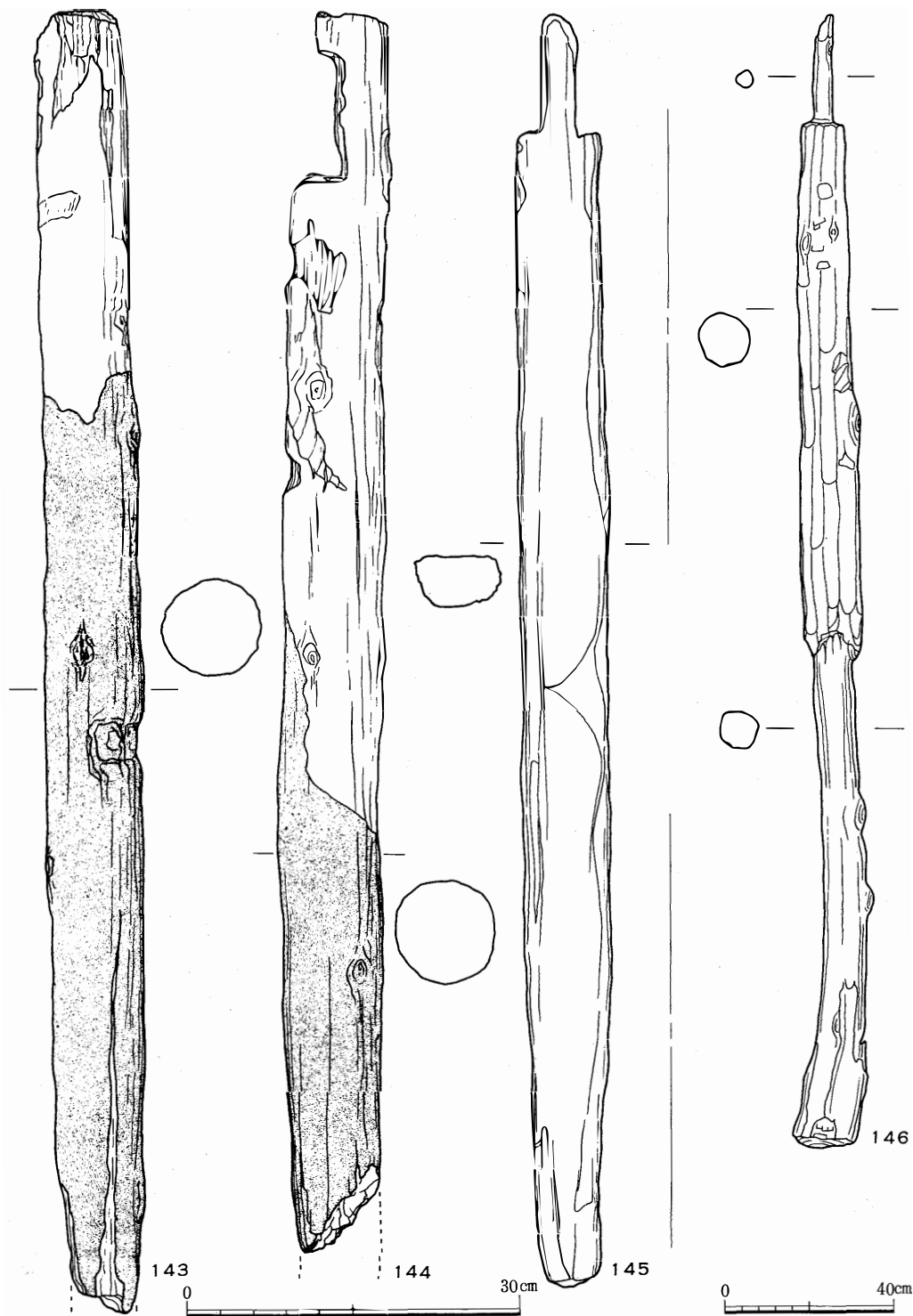
143は、上下を折損している。中央部付近に長さ3.2cm、幅2.6cmの隣り合う2つの矩形の切欠きが凹状に施されているが、これは一般に「アグ」と称されるもので、組み合わせられる材にはこれに対応する凸状の加工がなされていたと思われる。2つの材をより強固に組み合わせ固定させる方法である。下部には焼痕が残る。

144は、下の木口を折損している。上部に長さ11.2cmの切込みが施され、深さは4.7cmで芯部まで到達している。ちょうど丸木の半分を切り取った状態である。切込み上端から木口までの距離は3.0cmと薄くなっているため、木口の半分は欠損している。端部の弱さから推して横架材とは考えられず、垂直方向に利用され、これに横架材が組まれたものと思われる。下部には焼痕が残る。



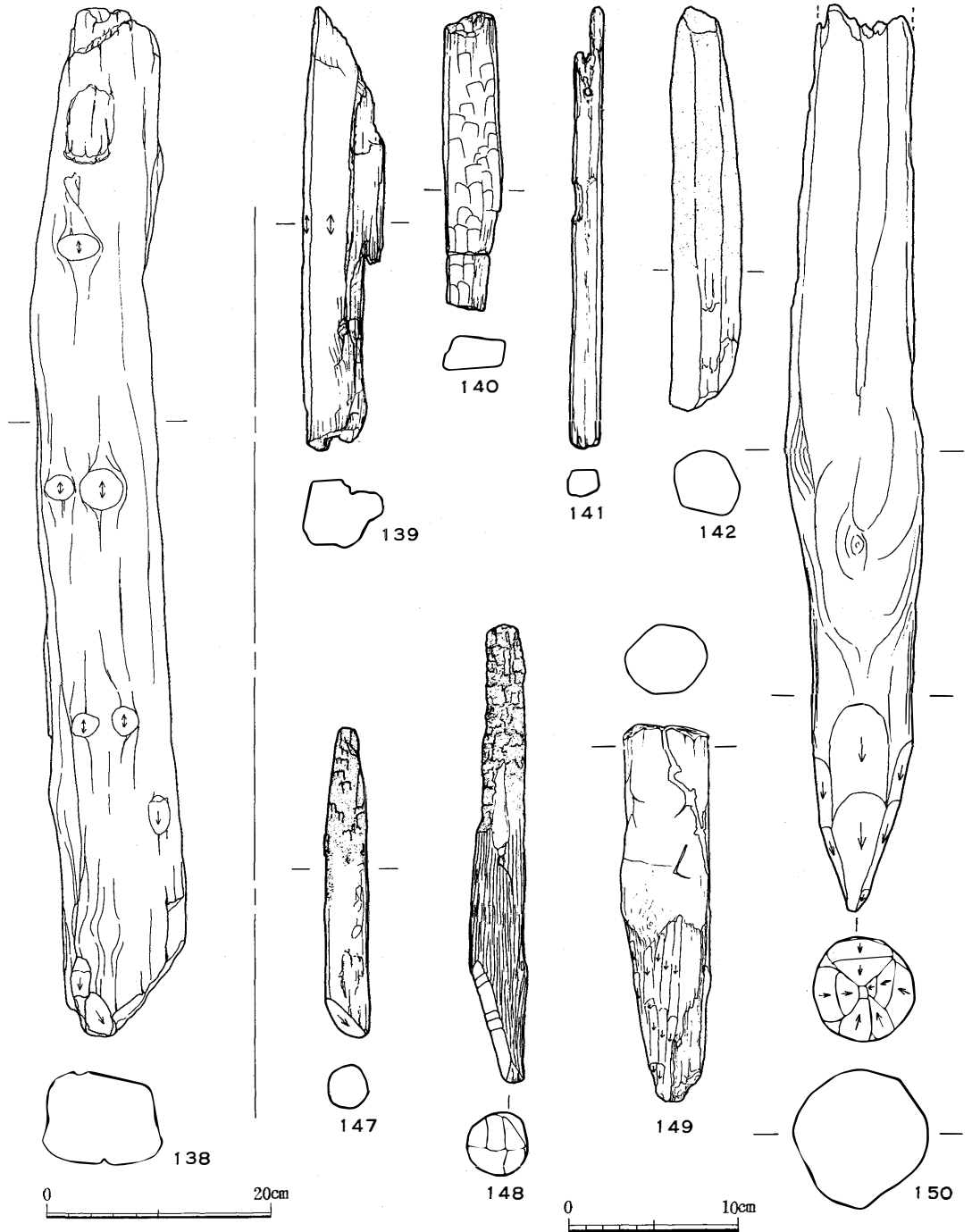
第186図 湿地性遺物包含層出土木製品

第 7 節 湿地性遺物包含層



第187圖 湿地性遺物包含層出土木製品





第188図 湿地性遺物包含層出土木製品

## 第7節 湿地性遺物包含層

145は、扁平長楕円形の断面を有する大型材である。下部はやや腐食して細くなっており、木口はやや内弯するように削られている。全面でいねいに削り上げられ、上端は両側から切込んで長さ11.0cmの柄が作り出されている。柄の断面は矩形を呈す。

146は、丸木をていねいに削り上げた270cmに及ぶ大型の材で本遺跡出土木製品中最大のものである。上半には工具痕が明瞭に残存するが、下半は腐食によって外面が剥落し、内部の堅緻な部分のみが遺存しており加工痕は見られない。木口は鋸状の工具で切断されている。上端は周囲からの削り出しによって円柱状に柄を作出し、柄の先端は鋭利に尖がらせてある。柄の長さは、25.6cmを測る。145・146共にL-Xから出土しており、7世紀中葉のものと思われる。柱材と考えられるが、145は長さ114.0cmと短く、断定できない。

### 杭状木製品(第188図147～150, 第89図版147～150)

147～150は、丸木を利用し、先端を尖らせており杭と思われる形態を有する。4点いずれも上部を欠損している。

147は、小型で先端は一方向からやや鈍い角度で切断されている。

148の先端は、一方向から鋭い角度で数度にわたって打ち切られている。147・148共に上半に焼痕が残っており、欠損した上部は焼失したものと思われる。

149は、下端を多方向からていねいに削って尖がらせており、削られた部分の断面もほぼ円形を呈す。上部は折損している。

150は、やや大型で下端は鉋状の工具で尖鋭に作出されている。工具痕は明瞭で図示したように5方向からそれぞれ1～3回打ち欠かされている。上部は欠損している。(鈴鹿八重子・森 幸彦)

## 4. 動物遺体

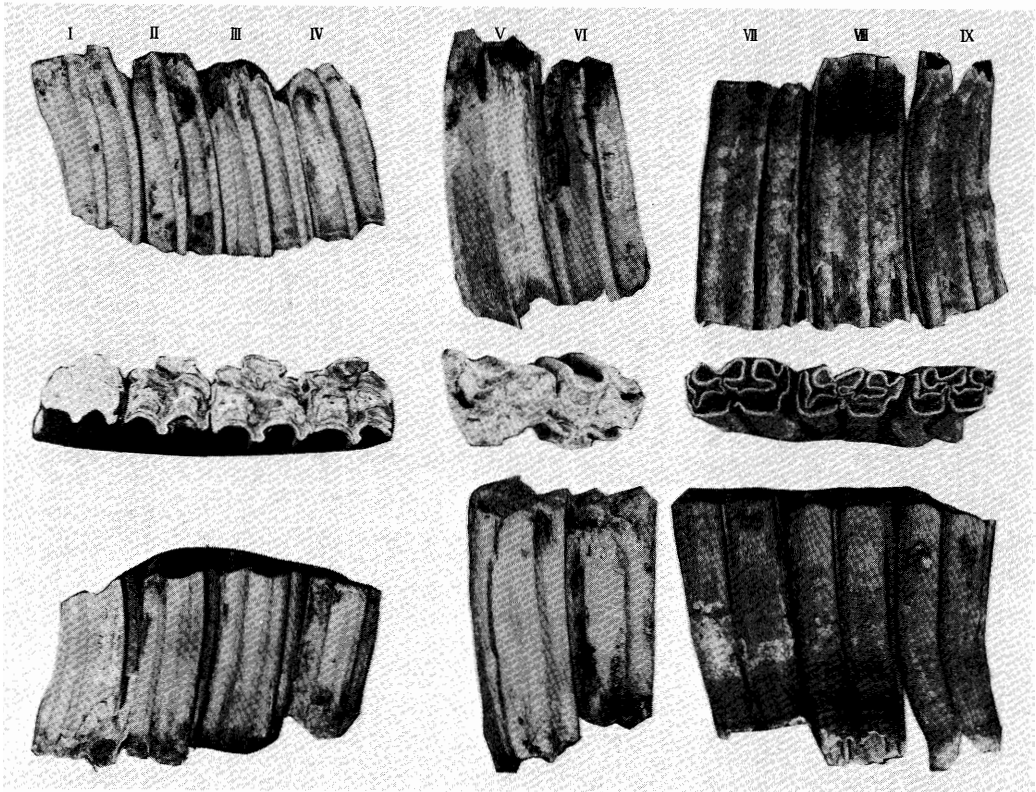
湿地性遺物包含層内G-27, L-Ⅲ, G-27・28, L-Ⅷ, E-27, L-Ⅷ, E-28, L-ⅧおよびE-30, L-Xの5ヶ所から馬歯が出土している。いずれも上顎臼歯および下顎臼歯と思われるが、破損が著しく判然としないものもある。

このうちG-27, L-Ⅲ出土のものが最も遺存が良く、出土状態も明確である。第44図版に示したように地山が湿地性遺物包含層に向かって落ち込む肩部付近の斜面から出土している。L-Ⅲ内出土ではあるが地山に密着しており、一概にL-V～IXの遺物より時代が下るとは言えないようである。左上顎臼歯6本の上に、右上顎臼歯6本が重なった状態で出土し、咬合面は斜面上方に向いている。更に斜面沿い7cmほど下方には右下顎臼歯と続いて下顎骨と思われる骨片が出土している。一頭分の上顎の臼歯が揃っており、中型の馬に属するようである。<sup>註50</sup>

取り上げ時に破損したものもあり、これらのうち写真撮影可能なものを第189図に示し、歯冠長

及び歯冠幅を第62表に記した。臼歯及び一部の顎骨のみの出土であるが、故意に折損したような痕跡は認められず、出土状態からみてももとは少なくとも頭蓋骨とともにあったものと思われる。遺存部分以外はおそらく埋没中に腐食したと考えられる。湿地性遺物包含層出土の動物遺体は、これら5ヶ所から検出された馬歯に限られる。馬歯は硬質で遺存し易いこともあり、偶然に自然<sup>註51</sup>遺物としてこの地点に残ったと考えられないこともない。しかし、京都市大藪遺跡における川神<sup>註52</sup>への馬の奉獻例や、埼玉県六反田遺跡、井戸内出土の馬歯出土例など水と馬との関係を示す資料は多く、また水神に限らずとも馬を神に供獻する例は広く知られている。更に湿地性遺物包含層から馬形木製品が出土していることを考慮すれば、これらの馬歯が何らかの祭祀的意味をこめて人為的に湿地(あるいは当時水をたたえていたかも知れない)に投げ込まれたとも考えられよう。

(森 幸彦)



第189図 G-27, L-III出土馬歯

第62表 歯冠計測値

(単位: mm)

	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX
歯冠長	26.2	25.5	30.0	26.5	26.3	26.1 <sup>+</sup>	29.2	30.9	26.8
歯冠幅	22.6	24.2	26.8	26.2	20.2 <sup>+</sup>	26.2 <sup>+</sup>	16.0	14.5	13.3

+は欠損しており、実際の値はこれより大きい

第 7 節 湿地性遺物包含層

第 63 表 湿地性遺物包含出土木製品(1)

番号	挿図	図版	遺物 番号	名称 遺存(%)	位置	層位	樹種	木取法	手法	法量 (cm)	特徴
1	152	-	143	碗 (30%)	II 区 D-30	L-VIII	ケヤキ	証目	挽物	口径 13.9 高さ 5.8 底径 (4.0)	平底風丸底 体部~口縁部にか けてロクロ 顯著 口縁外傾。内面漆塗
②	152	65	1	碗 (70%)	-	-	ケヤキ	証目	挽物	口径 (17.1) 高さ 4.8 底径 8.5	平底風丸底 外面に多数の擦痕 底部外面に焼痕 内面漆塗
3	152	65	224	碗 (40%)	II 区 C-28	L-VIII	ケヤキ	証目	挽物	口径 (16.2) 高さ 4.1 底径 (8.6)	底部は削り出し 底部ロクロ爪痕 内面底部に焼痕 口縁若干外反
4	152	65	257	碗 (30%)	II 区 C-28	L-VIII	ケヤキ	証目	挽物	口径 - 高さ 0.2 底径 (8.8)	底部は削り出し 底部ロクロし字 爪痕 内外共に漆塗
5	152	-	232	碗 (5%)	II 区 C-28	L-VII	ケヤキ	証目	挽物	口径 28.0 高さ 3.3 底径 -	口縁部に 1 個の穴 内外共に漆塗 大型 口唇部平坦
⑥	152	65	19	碗 (完形)	II 区 E-28	L-IX	ハンノキ	証目	挽物	口径 15.2 高さ 5.9 底径 10.9	内外面に手斧痕が 顯著である 器厚 1.7cm と厚い 木地碗アラガタカ
7	152	65	3	碗 (40%)	-	-	ケヤキ (収縮変形)	証目	挽物	口径 - 高さ 4.0 底径 8.3	底部は削り出し 底部外面中央爪痕 底部外角張り出し
			71	碗 (-)	II 区 B-28	L-VII	-	証目	挽物	-	碗の一部 内外面共漆塗 8 個の小片からな るが原形に復せず
			438	碗 (-)	II 区 B-29	L-VIII	ケヤキ	証目	挽物	-	碗の一部 内外面に漆塗 小片のため原形に 復せず
8	153	66	269	盤 (25%)	-	-	ケヤキ	証目	挽物	口径 13.0 高さ 1.2 底径 11.0	底部は削り出し 漆塗。内面平坦 底部ロクロ爪痕 内面に工具痕
9	153	66	287	盤 (85%)	II 区 B-27	L-VII	ケヤキ	証目	挽物	口径 13.4 高さ 1.2 底径 9.3	底部は削り出し 内面に工具痕 体部に軽有段 内面平坦
10	153	66	6	盤 (85%)	II 区 D-28	L-IX	ケヤキ	証目	挽物	口径 14.8 高さ 1.1 底径 11.6	底部は削り出し 底部ロクロ爪痕 内面平坦
⑪	153	66	8	盤 (90%)	II 区 B-27	L-VII	ケヤキ	証目	挽物	口径 15.3 高さ 1.7 底径 10.4	底部は削り出し 内面に工具痕 内面平坦
12	153	67	2	盤 (80%)	II 区 C-28	L-VIII	ケヤキ	証目	挽物	口径 13.1 高さ 1.3 底径 10.0	底部は削り出し 内周を軽く削り 削り高台風 体部若干立ち上り
13	153	67	304	盤 (40%)	II 区 A-28	L-VIII	ケヤキ	証目	挽物	口径 15.0 高さ 1.4 底径 10.7	底部は削り出し 体部若干立ち上り
14	153	67	7	盤 (85%)	-	-	ケヤキ	証目	挽物	口径 15.5 高さ 1.7 底径 11.8	底部は削り出し 内周を軽く削り 削り高台風 体部若干立ち上り

第63表 湿地性遺物包含出土木製品(2)

番号	挿図	図版	遺物番号	名称 遺存度(%)	位置	層位	樹種	木取法	手法	法量 (cm)	特徴
15	153	67	130	盤 (70%)	Ⅱ区 A-28	L-VII	ケヤキ	証目	挽物	口径 23.4 高さ3.3 底径 12.7	底部は削り出し 内周を軽く削り 削り高 底台 内外 漆塗。内面に円磨
16	153	68	4	盤 (90%)	Ⅱ区 F-27	-	ケヤキ	証目	挽物	口径 14.3 高さ1.0 底径 (9.0)	底部と体部の境 不明瞭。内面平坦 底部ロクロ爪痕
17	153	68	273	盤 (45%)	Ⅱ区 F-29	L-IX	ケヤキ	証目	挽物	口径 19.0 高さ1.1 底径 13.9	底部と体部の境 不明瞭 体部若干立ち上り
18	153	68	274	盤 (40%)	Ⅱ区 F-29	L-IX	ケヤキ	証目	挽物	口径 (21.2) 高さ1.3 底径 (14.9)	底部と体部の境 不明瞭だが若干段有 体部やや立ち上り
19	153	68	314	盤 (40%)	Ⅱ区 E-27	L-VII	ケヤキ	証目	挽物	口径 25.9 高さ1.6 底径 24.2	内外面漆塗。底部 平坦。体部明瞭な 立ち上り。底部と 体部の器厚差大
20	153	68	270	盤 (35%)	Ⅱ区 B-27	L-VIII	ケヤキ	証目	挽物	口径 - 高さ(1.6) 底径 (10.0)	内外面漆塗。ちぢ み有。丸底風平底 器厚が薄い
21	153	69	138	盤 (65%)	Ⅱ区 D-28	L-IX	-	証目	挽物	口径 - 高さ(1.6) 底径 16.5	底部平坦 体部明瞭な立ち 上り
22	153	69	261	盤 (95%)	Ⅱ区 C-28	L-VII	ケヤキ	証目	挽物	口径 - 高さ(1) 底径 10.6	底部は削り出し 内周を軽く削り 削り高台層 底部ロクロ爪痕
23	153	69	154	盤 (90%)	Ⅱ区 C-28	L-VIII	ケヤキ	証目	挽物	口径 - 高さ(1) 底径 9.2	底部は削り出し 底部にロクロ爪痕 明瞭
24	153	69	5	盤 (90%)	Ⅱ区 C-28	L-VIII	ケヤキ	証目	挽物	口径 15.0 高さ2.7 底径 9.9	底部若干削り出し 底部にロクロ痕 明瞭 体部外傾し杯型
			244	盤 (60%)	Ⅱ区 C-28	L-VII	ケヤキ	証目	挽物	長さ(2.9) 厚み 0.9	不整楕円形 底部は削り出し 内面平坦
25	154	70	54	鉢 (60%)	Ⅱ区 A-28	L-VII	マツ類	板目	剝物	口径 45.7 高さ4.6 底径 25.0	内外面共削り明瞭 口縁上端に取手状 のつまみ出し部有
26	154	70	21	すりこ木棒 状木製品 (完形)	Ⅱ区 D-28	L-VIII	コナラ	芯特	丸物	長さ 38.0 直径 3.5	片端部に面取り有 一方が折れている
27	154	70	387	すりこ木棒 状木製品 (95%)	Ⅱ区 井戸跡	-	トチノキ?	芯特	丸物	長さ 35.6 直径 4.8	片端部に面取り有 一方が折れている
28	154	70	402	すりこ木棒 状木製品 (90%)	-	-	サンショウ?	芯特	丸物	長さ 33.8 直径 3.1	片端部に面取り有 一方が折れている
			90	棒 木製品	-	-	ニレ類	芯特	丸物	長さ 30.0 直径 3.2	3ヶ所に方形孔有 自然遺物の可能性 もある

第 7 節 湿地性遺物包含層

第 63 表 湿地性遺物包含出土木製品(3)

番号	挿図	図版	遺物 番号	名 称 遺存度(%)	位 置	層位	樹 種	木取法	手 法	法 量 (cm)	特 徴
			91	棒状木製品	-	-	ケヤキ	芯持	丸物	長さ 62.0 径 3.2	両端に切断痕有
			93	棒状木製品	-	-	ケヤキ	芯持	丸物	長さ 24.0 径 2.2	片端部に切断痕有 他端部に折損
			190	棒状木製品	-	-	ガマズミ?	芯持	丸物	-	小片のため計測 不可能
			275	棒状木製品	II 区 井戸跡北	L-VII	カヤノキ	芯持	丸物	長さ 21.1 径 5.7	両端に削り痕有
29	155	71	40	槽 (50%)	II 区 H-28	L-VII L-VIII	ケヤキ	板目	剝物	長さ 84.0 幅 (15.4) 高さ 8.4	内外面削り痕明瞭 長軸方向の口唇部 に一对の削り有。 立ち上り急な矩形
30	155	-	83	槽 (40%)	II 区 C-29	L-VIII	ケヤキ (収縮材)	板目	剝物	長さ (83.4) 幅 (22.0) 高さ 8.0	内面の削り痕明瞭 体部立ち上り緩い 長円形。長軸中央 口縁を造り出ししか
31	156	71	398	槽 (30%)	II 区 B-28	L-VIII	ホオノキ	板目	剝物	長さ (73.4) 幅 (13.0) 高さ 9.4	全体の遺存が悪い 体部立ち上り急な 矩形で長辺の体部 が短辺より薄い
32	156	71	110	槽 (50%)	II 区 H-28	-	ホオノキ	板目	剝物	長さ (58.0) 幅 (9.1) 高さ 4.8	体部立ち上り緩い 長円形。口縁部の 遺存が悪い。体部 立ち上り緩い長円形
33	156	71	45	槽 (60%)	II 区 I-28	L-V	ク リ	板目	剝物	長さ 44.6 幅 (14.5) 高さ 9.0	内面の削り痕明瞭 外面が荒れている 体部立ち上り急な 矩形
			16	槽 (10%)	II 区 B-28	L-VII	ケヤキ	板目	剝物	長さ (21.9) 幅 (22.6) 高さ (5.5)	全体の大きさと不明 底部は体部より厚 体部立ち上り急な 矩形
34	158	72	260	曲物蓋板 (50%)	II 区 B-28	L-IX	ヒノキ	板目	板物	内径 16.0 厚さ 0.9 円周 (56.5)	内面内周に段有 丸い綴じ孔1ヶ所 (1個)残存
35	158	72	317	曲物蓋板 (70%)	II 区 E-29	L-IX	スギ	板目	板物	内径 15.8 厚さ 1.0 円周 (60.9)	内面内周に段有 丸い綴じ孔2ヶ所 (4個)残存 中央に傷多数
36	158	72	208	曲物蓋板 (60%)	II 区 F-28	L-IX	スギ	板目	板物	内径 19.4 厚さ 0.9 円周 (68.1)	内面内周に段有 丸い綴じ孔2ヶ所 (4個)残存 中央に傷多数
37	158	72	230	曲物蓋板 (50%)	II 区 G-30	L-IX	スギ	板目	板物	内径 16.4 厚さ 1.1 円周 (62.8)	内面内周に段有 丸い綴じ孔2ヶ所 (3個)残存 中央に円孔有
38	158	72	320	曲物蓋板 (完形)	-	-	アスナロ?	板目	板物	内径 14.6 厚さ 0.8 円周 51.2	内面内周に段有 椋皮綴じ孔4ヶ所 (4個)残存 中央に円孔有
39	158	72	202	曲物蓋板 (85%)	II 区 E-28	L-V	ヒノキ	板目	板物	内径 12.6 厚さ 0.5 円周 (44.6)	内面内周に段有 椋皮綴じ孔3ヶ所 (4個)残存

第63表 湿地性遺物包含出土木製品(4)

番号	挿図	図版	遺物 番号	名称 遺存度(%)	位置	層位	樹種	木取法	手法	法量 (cm)	特徴
40	159	72	300	曲物蓋板 (95%)	Ⅱ区 C-29	L-VII	ヒノキ	証目	板物	内径 12.8 厚さ 0.7 円周 (44.0)	内面内周に刻み目 が一周し、その両 側に桜皮綴じ孔4 ヶ所(8個)残存
41	159	72	284	曲物蓋板 (90%)	Ⅱ区 D-28・29	L-IX	スギ	板目	板物	内径 13.8 厚さ 0.8 円周 (46.1)	内面内周に刻み目 が一周し、その両 側に桜皮綴じ孔3 ヶ所(6個)。傷有
42	159	73	256	曲物蓋板 (50%)	Ⅱ区 B-28	L-VII	アスナロ	証目	板物	内径 12.6 厚さ 0.7 円周 (48.0)	内面内周に刻み目 が一周し、その両 側に桜皮綴じ孔2 ヶ所(4個)残存
43	159	73	199	曲物蓋板 (50%)	Ⅱ区 F-28	L-VII	モミ	証目	板物	内径 11.6 厚さ 0.6 円周 46.5	内面内周に刻み目 が一周し、その両 側に桜皮2ヶ所残 存
44	159	73	243	曲物蓋板 (40%)	Ⅱ区 E-27	L-VII	モミ	証目	板物	内径 12.6 厚さ 0.8 円周 (46.2)	内面内周に刻み目 が一周し、その両 側に桜皮2ヶ所残 存
45	159	73	240	曲物蓋板 (20%)	Ⅱ区 C-27	L-VII	モミ	証目	板物	内径 13.6 厚さ (1.4) 円周 (62.8)	内側内周に段有 外周が高い 丸い綴じ孔1個 残存
46	159	73	286	曲物蓋板 (30%)	Ⅱ区 E-29	L-VII	ヒノキ	板目	板物	径 17.5 厚さ 1.3 円周 (55.0)	内側内周に刻み目 一周 塗装 綴じ孔無
47	159	73	233	曲物蓋板 (完形)	Ⅱ区 C-28	L-VII	アスナロ	証目	板物	径 17.6 厚さ 1.0 円周 55.3	内側内周に刻み目 一周 塗装 綴じ孔無
48	160	73	234	曲物蓋板 (30%)	Ⅱ区 B-28 井戸西側	L-VII	モミ	板目	板物	径 27.0 厚さ 1.1 円周 (84.8)	内面に傷多数有 綴じ孔、木釘孔無
49	160	73	172	曲物蓋板 (50%)	Ⅱ区 E-30	L-IX	スギ	証目	板物	径 19.6 厚さ 0.9 円周 (61.5)	内面に傷多数有 綴じ孔、木釘孔無
50	160	73	169	曲物蓋板 (80%)	Ⅱ区 I-28	L-V	スギ	証目	板物	径 12.2 厚さ 0.7 円周 38.3	円板の側面に木釘 2ヶ所(2個)残存 桜皮による補修孔 1ヶ所残存
51	160	73	155	曲物蓋板 (70%)	Ⅱ区 F-27	L-VII	ヒノキ?	証目	板物	径 10.9 厚さ 0.6 円周 34.2	円板の側面に木釘 1ヶ所(1個)残存
52	160	73	322	曲物蓋板 (完形)	Ⅱ区 G-29	L-VII	ケヤキ	証目	板物	径 12.4 厚さ 0.8 円周 38.9	円板の側面に木釘 5ヶ所(5個)残存 第160図52の残存 第160図53abの 底板
53a	160	73	323a	曲物側板 (30%)	Ⅱ区 G-29	L-VII	ヒノキ	証目	曲物	長 (24.0) 厚さ 0.2 高さ 6.8	桜皮綴じ痕残存 第160図52の側板 内面に縦の刻み目 数条有
53b	160	73	323b	曲物側板 (5%)	-	L-VII	-	証目	曲物	長 (27.9) 厚さ 0.2 高さ (20.5)	桜皮綴じ痕残存 底板と接合する 木釘孔3ヶ所残存 53aの下端部
54	161	-	48	曲物蓋板 (50%)	-	-	-	板目	板物	径 32.6 厚さ 0.6 円周 (114.6)	遺存が悪い 内周にそって円孔 14個残存綴じ孔か

第7節 湿地性遺物包含層

第63表 湿地性遺物包含出土木製品(5)

番号	挿図	図版	遺物番号	名称 遺存	位置	層位	樹種	木取法	手法	法量 (cm)	特徴
55	161	74	68	折敷底板 (30%)	II区 B-29	L-VII	ヒノキ	証目	板物	長さ(37) 厚さ(0.5) 円周 -	内面に段有。 円周の曲線から楕 円形の底板か
56	162	74	332	折敷底板 (50%)	II区 B-28	L-VII	スギ	板目	板物	長さ(43) 厚さ1.0 円周 -	2物面に段有。中央 に小円孔(補修孔) 段に沿って桜皮と 綴じ孔3ヶ所残存
57	162	74	414	折敷底板 (40%)	II区 I-28	L-V	スギ	板目	板物	長さ(40) 厚さ(1.2) 円周 -	内面に段有。 段に沿って角孔4 ヶ所(10個)円孔 4ヶ所(4個)有
58	163	74	37	折敷底板 (完形)	II区 D-28	L-VIII	モミ	板目	板物	長さ88.0 厚さ0.8 円周144.0	段無 桜皮10ヶ所残存 隅丸方形 内外面に傷多数
			69	曲物蓋板 (10%)	II区 B-28	L-VII	スギ	証目	板物	内径24.8 厚さ1.2 円周(100.5)	内面内周に段有 段に沿って桜皮 1ヶ所残存 70と接合
			147	曲物蓋板 (10%)	II区 E-28	L-VIII	ヒノキ?	証目	板物	内径11.4 厚さ0.4 円周(46.5)	内面内周に段有
			197	曲物蓋板 (10%)	II区 C-28	L-VII	モミ	証目	板物	内径14.6 厚さ0.6 円周(57.8)	内面内周に段有 段に沿って桜皮 1ヶ所残存
			228	曲物蓋板 (30%)	II区 E-27	L-VII	ヒノキ?	証目	板物	内径12.2 厚さ0.7 円周(43.9)	内面内周に刻み目 線に沿って桜皮一 ヶ所残存
			259	曲物蓋板 (15%)	II区 C-28	L-VIII	アスナロ?	板目	板物	内径15.4 厚さ0.2 円周(54.0)	内面内周に刻み目 線に沿って桜皮一 ヶ所残存
			298	曲物蓋板 (35%)	II区 F-28	L-VII	モミ	板目	板物	内径13.2 厚さ0.4 円周(54.6)	内面内周に刻み目 線に沿って桜皮一 ヶ所残存
			167	曲物蓋板 (15%)	II区 I-29	L-V	モミ	板目	板物	内径12.0 厚さ(0.6) 円周(42.7)	内面内周に刻み目無 桜皮一ヶ所残存 外面に傷有 円板側面が内傾
			70	曲物底板 (-)	II区 B-28	L-VII	ヒノキ	証目	板物	径 - 厚さ1.0 円周 -	漆塗
			74	曲物底板 (5%)	II区 H-28	L-VII	スギ	証目	板物	径14.6 厚さ0.4 円周(47.2)	円板側面が内傾
			242	曲物底板 (15%)	II区 F-28	L-VII	モミ	板目	板物	径9.4 厚さ0.9 円周(29.5)	内面漆塗 円板側面が内傾
			249	曲物底板 (5%)	-	-	モミ	証目	板物	径9.6 厚さ0.4 円周(30.1)	遺存が少ない
			295	曲物底板 (70%)	II区 F-30	L-VIII	-	板目	板物	径18.3 厚さ0.5 円周57.5	遺存状態が悪く 細片に分かれてる 接合すると大型底



第63表 湿地性遺物包含出土木製品(6)

番号	挿図	図版	遺物番号	物名 遺存度(%)	位置	層位	樹種	木取法	手法	法量 (cm)	特徴
			313	曲物底板 (25%)	Ⅱ区 E-28	L-VII	ケヤキ	証目	板物	径 11.4 厚さ 0.5 円周 (35.8)	遺存部が少ない
			342	曲物底板 (10%)	-	-	モミ	証目	板物	径 (15.2) 厚さ 1.0 円周 (43.0)	内面塗装で所々に「ちぢみ」がある 円板側面が内傾
			349	曲物底板 (30%)	-	-	ケヤキ	証目	板物	径 9.2 厚さ 0.8 円周 (28.9)	遺存部が少ない
			437	曲物底板 (10%)	-	-	アスナロ	証目	板物	径 12.6 厚さ 0.6 円周 (39.6)	遺存部が少ない
59a	164	75	38b	折敷側板 (40%)	Ⅱ区 D-28	L-VIII	モミ	証目	曲物	長さ (38.8) 幅 2.4 厚さ 0.5	上下が残存し幅が狭い。随所に桜皮が残存 接合部平坦 第163図58の側板
59b	164	75	38c	折敷側板 (20%)	Ⅱ区 D-28	L-VIII	モミ	証目	曲物	長さ (35.6) 幅 2.1 厚さ 0.4	第163図58の側板 他に遺物番号38aがあるが微小片
60	164	-	268	曲物側板 (10%)	Ⅱ区 D-28	L-VIII	アスナロ	証目	曲物	長さ (7.4) 幅 (2.5) 厚さ (0.4)	内面に塗装 底板の「当たり」残存。 接合部平坦 容器側板か
61	164	75	227	曲物側板 (20%)	Ⅱ区 F-29	L-VIII	モミ	証目	曲物	長さ (17.3) 幅 (5.3) 厚さ 0.3	内面に塗装 底板の「当たり」残存。 接合部平坦 容器側板か
62	164	75	168	曲物側板 (30%)	Ⅱ区 F-28	L-IX	アスナロ?	証目	曲物	長さ (25.8) 幅 2.9 厚さ 0.2	上下が残存し幅が狭い。桜皮残存 釘孔3ヶ所残存 折敷側板か
63	164	75	445	曲物側板 (40%)	Ⅱ区 F-28	L-VII	-	証目	曲物	長さ (35.8) 幅 5.2 厚さ 0.3	上下が残存し幅が狭く 内面刻み目有 底部との接合部内削ぎ。 釘孔7ヶ所
64	165	76	200	曲物側板 (40%)	Ⅱ区 C-28	L-VIII	アスナロ	証目	曲物	長さ (35.3) 幅 (8.8) 厚さ 0.3	内面塗装。底板の「当たり」残存 接合部平坦。釘孔4個残。容器側板
65	165	76	321	曲物側板 (30%)	Ⅱ区 F-28	L-VII	アスナロ	証目	曲物	長さ (23.5) 幅 (5.1) 厚さ 0.3	外面に墨書「田」 内面に刻み目有 釘孔7個残。底との接合部内削ぎ
66	165	76	245	曲物側板 (40%)	Ⅱ区 F-28	L-VII	マツ類	証目	曲物	長さ (44.7) 幅 8.3 厚さ 0.4	内面塗装と刻み目 底板の「当たり」有 桜皮・釘孔有 容器側板
67	166	77	201	曲物側板 (15%)	Ⅱ区 F-28	L-VII	モミ	証目	曲物	長さ (13.7) 幅 (9.9) 厚さ 0.3	内面塗装と刻み目 底板の「当たり」有 容器側板
68	166	77	235	曲物側板 (30%)	Ⅱ区 B-28 井戸西側	L-VIII	モミ	証目	曲物	長さ (23.4) 幅 3.3 厚さ 0.5	内面に刻み目 底板の「当たり」有 底との接合部内削ぎ。 蓋か容器側板
69	166	77	121	曲物側板 (25%)	Ⅱ区 C-28	L-VII	ヒノキ	証目	曲物	長さ (20.6) 幅 3.8 厚さ 0.5	内面に刻み目 底板の「当たり」有 底との接合部内削ぎ。 蓋か容器側板

第 7 節 湿地性遺物包含層

第 63 表 湿地性遺物包含出土木製品(7)

番号	挿図	図版	遺物 番号	名称 遺存度(%)	位置	層位	樹種	木取法	手法	法量 (cm)	特徴
70	166	77	446	曲物側板 (45%)	II 区 C-28	L-VII	-	証目	曲物	長幅 厚さ (3.1.5) 3.2 0.4	内面に刻み目 底板の「当たり」有 底との接合部内削 ぎ。蓋か容器側板
71	166	77	294	曲物側板 (10%)	II 区 C-28	L-VIII	アスナロ (収縮材)	証目	曲物	長幅 厚さ (3.2.5) 4.1 0.7	内面に刻み目 底板の「当たり」有 底との接合部内削 ぎ。桜皮残存
72	166	77	288	曲物側板 (10%)	-	-	アスナロ	証目	曲物	長幅 厚さ (3.1.2) 3.8 0.4	内面に刻み目 底板の「当たり」有 底との接合部内削 ぎ。桜皮残存
73	166	-	266	曲物側板 (10%)	-	-	スギ	証目	曲物	長幅 厚さ (3.7.5) 2.5 0.4	内面に刻み目 底板の「当たり」有 底との接合部内削 ぎ。桜皮残存
74	166	77	250b	曲物側板 (30%)	-	-	ヒノキ	証目	曲物	長幅 厚さ (3.1.6) 3.0 0.2	他に 250a・c・d があ るが接合できず 微小片 桜皮残存
			148	折敷側板 (5%)	II 区 I-28	L-V	ヒノキ	証目	曲物	長幅 厚さ (3.9.2) 1.5 0.4	口縁部残存し幅が 狭い。折敷側板か 底板との接合部は 内削ぎ。円釘孔有
			262	折敷側板 (10%)	-	-	サクラ類	証目	曲物	長幅 厚さ (3.3.2) 3.3 0.3	口縁部残存し幅が 狭い。折敷側板か 底板との接合部は 平坦。角の釘孔有
			272	折敷側板 (40%)	II 区 C-29	L-VII	ヒノキ?	証目	曲物	長幅 厚さ (3.1.4) 2.9 0.3	口縁部残存し幅が 狭い。折敷側板か 底板との接合部 平坦。円釘孔有
			298	折敷側板 (20%)	-	-	スギ?	証目	曲物	長幅 厚さ (3.1.4) 2.8 0.5	口縁部残存し幅が 狭い。折敷側板か 底板との接合部は 平坦。木釘残存
			67	曲物側板 (30%)	II 区 H-28	L-VII	モミ	証目	曲物	長幅 厚さ (3.7.0) 3.9 0.4	口縁部残存し幅が 狭い。折敷側板か 底部との接合部は 平坦。桜皮残存
			75	曲物側板 (5%)	II 区 B-28	L-VII	スギ	証目	曲物	-	遺存部が少ない
			150	曲物側板 (5%)	II 区 I-28	L-V	ヒノキ	証目	曲物	長幅 厚さ (3.4.9) 1.7 0.1	口縁部残存し幅が 狭い。折敷側板か 底部との接合部は 平坦
			203	曲物側板 (10%)	II 区 I-28	L-V	ヒノキ?	証目	曲物	長幅 厚さ (3.1.9) 2.8 0.1	口縁部残存し幅が 狭い。折敷側板か 底部との接合部は 平坦。桜皮残存
			442	曲物側板 (-)	-	-	-	証目	曲物	-	口縁部残存し幅が 狭い。折敷側板か 底部との接合部は 平坦。桜皮残存
			204	曲物側板 (10%)	II 区 C-28	L-VIII	スギ?	証目	曲物	長幅 厚さ (3.0.8) 1.8 0.5	遺存部が少ない 刻み目内面に有 桜皮残存
			309	曲物側板 (10%)	II 区 I-29	L-VII	アスナロ?	証目	曲物	長幅 厚さ (3.3.9) 4.3 0.5	口縁部残存し幅が 狭い。折敷側板か 底部との接合部は 平坦。内面塗装

第63表 湿地性遺物包含出土木製品(8)

番号	挿図	図版	遺物名称 遺存度(%)	位置	層位	樹種	木取法	手法	法量 (cm)	特徴
			246 曲物側板 (15%)	Ⅱ区 E-28	L-VIII	モミ	証目	曲物	長幅 (5.6) 4.0 厚さ 0.3	口縁部残存し幅が狭い。蓋か折敷側板底部との接合部は細身。内面塗装
			308 曲物側板 (15%)	Ⅱ区 I-28	L-V	ヒノキ	証目	曲物	長幅 (11.2) 5.7 厚さ 0.1	口縁部残存し幅が狭い。蓋か折敷側板底部との接合部は細身。内面塗装
			310 曲物側板 (25%)	Ⅱ区 C-28-29	L-VIII	アスナロ	証目	曲物	長幅 (11.9) 3.7 厚さ 0.3	口縁部残存し幅が狭い。蓋か折敷側板外面に漆が少量残存
			166 曲物側板 (5%)	Ⅱ区 E-28	L-VI	ケヤキ?	証目	曲物	長幅 (6.6) 3.0 厚さ 0.2	口縁部残存し幅が狭い。蓋か折敷側板内外面とも塗装
			117 曲物側板 (5%)	-	-	スギ	証目	曲物	長幅 (6.7) 3.6 厚さ 0.3	上下が残存し幅が狭い。蓋か折敷側板底部との接合部は平坦
			142 曲物側板 (5%)	-	-	-	証目	曲物	長幅 (6.9) 2.9 厚さ 0.2	上下が残存し幅が狭い。蓋か折敷側板底部との接合部は平坦
			219 曲物側板 (5%)	Ⅱ区 B-27	L-VII	ヒノキ (収縮材)	証目	曲物	長幅 (6.6) 2.0 厚さ 0.2	上下が残存し幅が狭い。蓋か折敷側板底部との接合部は平坦
			312 曲物側板 (50%)	Ⅱ区 E-28	L-VII	ヒノキ	証目	曲物	長幅 (11.4) 1.6 厚さ 0.2	上下が残存し幅が狭い。蓋か折敷側板底部との接合部は平坦
			319 曲物側板 (20%)	Ⅱ区 F-28	L-VII	モミ	証目	曲物	長幅 (20.7) 3.8 厚さ 0.2	上下が残存し幅が狭い。蓋か折敷側板底部との接合部は平坦
			339 曲物側板 (15%)	-	-	スギ	証目	曲物	長幅 (20.3) 3.0 厚さ 0.4	上下が残存し幅が狭い。蓋か折敷側板底部との接合部は平坦
			301 曲物側板 (10%)	-	L-VIII	ヒノキ	証目	曲物	長幅 (17.4) (2.2) 厚さ 0.1	側板と思われるが全体の遺存が悪く天地も不明
			153 曲物側板 (5%)	Ⅱ区 I-28	L-V	ヒノキ	証目	曲物	長幅 (7.2) (3.7) 厚さ 0.1	全体に薄手で幅がある。身の側板上下の遺存が悪い。内面刻み目
			170 曲物側板 (5%)	Ⅱ区 I-28	L-V	ヒノキ	証目	曲物	長幅 (11.3) (11.1) 厚さ 0.2	全体に薄手で幅がある。身の側板上下の遺存が悪い。内面刻み目
			206 曲物側板 (10%)	Ⅱ区 C-28	L-VIII	ヒノキ?	板目	曲物	長幅 (2.4) (4.3) 厚さ 0.5	全体に厚手で幅がある。身の側板上下が明瞭で鏝孔残存。内面刻み目
			271 曲物側板 (35%)	Ⅱ区 B-28	L-VIII	ヒノキ?	板目	曲物	長幅 (20.0) (9.3) 厚さ 0.7	全体に厚手で幅がある。身の側板上下が明瞭で鏝孔残存。内面刻み目
			315 曲物側板 (5%)	Ⅱ区 B-29	L-VIII	スギ? (収縮材)	証目	曲物	長幅 (8.8) (8.2) 厚さ 0.6	全体に厚手で幅がある。身の側板上下が明瞭で鏝孔残存。内面刻み目

第 7 節 湿地性遺物包含層

第 63 表 湿地性遺物包含出土木製品(9)

番号	挿図	図版	遺物番号	物名 遺存度(%)	位置	層位	樹種	木取法	手法	法量 (cm)	特徴
			171	曲物削板 (10%)	II 区 C-28	L-VII	ヒノキ	榎目	曲物	長さ 34.0 幅 3.3 厚さ 0.4	上下が残存し幅が狭い。蓋か折敷側板底部との接合部は平坦。内面刻み目
			198	曲物削板 (5%)	II 区 C-28	L-VII	スギ	榎目	曲物	長さ 38.0 幅 2.6 厚さ 0.6	上下が残存し幅が狭い。蓋か折敷側板底部との接合部は平坦。内面刻み目
			207	曲物削板 (5%)	II 区 C-28	L-VII	モミ	榎目	曲物	長さ 37.6 幅 1.9 厚さ 0.3	上下が残存し幅が狭い。蓋か折敷側板底部との接合部は平坦。内面刻み目
			258	曲物削板 (10%)	II 区 C-28	L-VII	アスナロ	板目	曲物	長さ 32.0 幅 1.7 厚さ 0.7	上下が残存し幅が狭い。蓋か折敷側板底部との接合部は平坦。内面刻み目
			276	曲物削板 (5%)	II 区 C-28	L-VII	スギ? (収縮材)	榎目	曲物	長さ 30.0 幅 3.7 厚さ 0.6	上下が残存し幅が狭い。蓋か折敷側板底部との接合部は平坦。内面刻み目
			444	曲物削板 (10%)	-	-	-	榎目	曲物	長さ 37.6 幅 2.5 厚さ 0.4	上下が残存し幅が狭い。蓋か折敷側板底部との接合部は平坦。内面刻み目
			149	曲物削板 (5%)	II 区 I-28	L-V	ヒノキ	榎目	曲物	長さ 35.0 幅 1.3 厚さ 0.3	上下が残存し幅が狭い。蓋か折敷側板底部との接合部は内削ぎ
			225	曲物削板 (10%)	II 区 C-28	L-VII	アスナロ	榎目	曲物	長さ 36.3 幅 2.1 厚さ 0.4	上下が残存し幅が狭い。蓋か折敷側板底部との接合部は内削ぎ
			305	曲物削板 (10%)	-	L-V	アスナロ	榎目	曲物	長さ 38.0 幅 4.3 厚さ 0.4	上下が残存し幅が狭い。蓋か折敷側板底部との接合部がやや内削ぎ
			156	曲物削板 (5%)	II 区 F-28	L-VII	ヒノキ	榎目	曲物	長さ 35.0 幅 2.8 厚さ 0.6	上下が残存し幅が狭い。蓋か折敷側板底部との接合部に段有
			239	曲物削板 (10%)	II 区 C-27	L-VII	スギ	榎目	曲物	長さ 35.3 幅 1.5 厚さ 0.3	上下が残存し幅が狭い。蓋か折敷側板底部との接合部に段有
75	169	78	119	ツチノコ (完形)	II 区 G-29	-	トチノキ?	芯持	削物	長さ 38.1 最大径 5.45 括れ径 3.0	中央を削り込み、両側に面取り 断面円形 体積 272cm <sup>3</sup>
76	169	78	291	ツチノコ (完形)	II 区 F-29	L-IX	カキノキ	芯持	削物	長さ 37.8 最大径 5.0 括れ径 2.7	中央を削り込み、両側に面取り 断面円形 体積 193cm <sup>3</sup>
77	169	78	22	ヨコツチ (90%)	II 区 E-28	L-VII	- (環孔材) (収縮材)	芯持	削物	長さ 32.0 身部径 5.2 柄径 3.0	槌部に樹種残存柄が一部欠損
78	169	78	13	ヨコツチ (ほぼ完形)	II 区 H-29	L-VII	サクラ類	芯持	削物	長さ 36.2 身部径 6.0 柄径 4.0	頭部が半分縦に割れている 柄と頭部の長さ比 1:1
79	169	78	14	ヨコツチ (完形)	II 区 井戸跡	層-3	ザイフリボク?	芯持	削物	長さ 34.4 身部径 7.2 柄径 5.9	頭部に使用痕多数柄が折れている 柄と頭部の長さ比 1:1.5

第63表 湿地性遺物包含出土木製品(10)

番号	挿図	図版	遺物番号	名称 遺残(%)	位置	層位	樹種	木取法	手法	法量 (cm)	特徴	
80	169	78	9	ヨコヅチ (完形)	II区 C-28	L-IX	オニグルミ (収縮材)	芯持	削物	長さ 43.1 身部径 4.1 柄径 2.5	柄と頭部共に細身 柄と頭部の長さ比 1:2	
81	171	79	430	柄 (50%)	-	-	ク	リ	芯持	削物	長さ(40.7) 幅 3.5	四面に長い削り痕 断面扁平な矩形 土端に挟み込み部 と思われる縦割口
82	171	79	429	柄 (30%)	-	-	トネリコ類		芯持	削物	長さ(22.0) 幅 3.2	四面に長い削り痕 断面角丸矩形 81に類似
83	171	79	20	斧柄 (完形)	II区 F-28	L-VIII	カヤノキ		芯持	削物	長さ 43.5 柄径 1.8 斧幅 4.7	台部は幹、握部は 枝を使用の縦斧柄 台頭部は切断面 固定部は削り整
84	171	79	15	鎌柄 (完形)	II区 C-28	L-VII	コナラ		芯持	削物	長さ 58.6 径 3.2	柄部にL字形の突 出部 全体に入念な削り 横断面は楕円形
85	173	79	10	丸木弓 (70%)	II区 F-30	-	カヤノキ		芯持	丸物	長さ(36.1) 径 1.7	全面でいねいな削 り。下半折損。一 方向から削り出し て弦を作出
86 87	173	79	229	丸木弓 (20%)	II区 H-28	L-VII	ク	リ	芯持	丸物	長さ(14.5) 径 0.9	部分的に桜櫛が巻 いてある。上下折 損。No.87はNo.86の 弦か?
88	173	79	401	たも (60%)	II区 F-28	L-IX	カヤノキ		芯持	丸物	長さ(120.0) 輪部径 1.4 柄部径 2.2	全面でいねいな削 り。枝を利用し網 枠作出。枠の%欠 損
89	173	79	351	たも (60%)	III区 E-1	L-IX	カヤノキ		芯持	丸物	長さ(69.6) 輪部径 1.2 柄部径 2.8	全面でいねいな削 り。枝を利用し網 枠作出。枠の%欠 損
90	178	80	285	下駄 (70%)	II区 井戸跡	β-3	ケヤキ		証目	板物	長さ(13.4) 幅(6.4) 高さ 4.9	横穴径 1.0×0.7cm 削り出し連歯 右足用
91	178	80	267	櫛 (30%)	II区 井戸跡	β-3	イスノキ		証目	板物	幅(2.0) 高さ 4.0 厚さ 0.9	歯長 3.2cm 1cm当りの歯数11
92	178	80	253	紡錘 (70%)	II区 C-27	L-V	紡輪ヒノキ 紡茎 ウコギ類		証目	板物	径 4.2 厚さ 0.6 中心孔径 0.5	紡茎長 1.7cm 紡茎頭部径 0.8cm 紡茎径 0.5cm 含水状態重量 3.4g
93	156	80	290	角脚 (完形)	II区 F-29	-	モミ		芯持	面取り	長さ 20.2 幅 4.2 厚さ 3.1	片先端が一段小さ く削り出されている 嵌め込み式組の 脚か
94	156	80	57	籠状 木製品 (完形)	II区 G-29	-	オニグルミ?		板目	板物	長さ 28.2 最大幅 4.4 最小幅 1.3	全面に削り痕明瞭 括れ部に削り調整 痕有るか断面形で は籠に不適當
95	178	81	222	木札状 木製品 (98%)	II区 B-27	L-VII	ヒノキ?		証目	板物	長さ 14.8 幅 3.2 厚さ 0.8	両側面上下に「く」 の字の切込み有。 有孔2ヶ
96	178	81	221	木札状 木製品 (90%)	II区 B-27	L-VII	アスナロ		証目	板物	長さ 14.7 幅 3.8 厚さ 1.0	両側面上下に「く」 の字の切込み有。 有孔2ヶ

調

第 7 節 湿地性遺物包含層

第 63 表 湿地性遺物包含出土木製品(11)

番号	挿図	図 版	遺物 番号	名 称 遺存 (癩)	位 置	層位	樹 種	木取法	手 法	法 量 (cm)	特 徴
97	178	81	220	木札状 木製品 (95%)	Ⅱ 区 B - 27	L-VII	アスナロ	板目	板物	長さ 14.8 幅 3.2 厚さ 0.9	両側面上下に「く」 の字の切込み有。 有孔 2ヶ
98	178	81	223	木札状 木製品 (80%)	Ⅱ 区 B - 27	L-VII	ヒノキ?	板目	板物	長さ (13.8) 幅 3.2 厚さ 0.9	両側面上下に「く」 の字の切込み有。 有孔 2ヶ 下部欠損
99	178	81	299	木札状 木製品 (95%)	Ⅱ 区 B - 28 井戸西側	L-VIII	スギ	板目	板物	長さ 14.8 幅 3.2 厚さ 0.8	両側面上下に「く」 の字の切込み有。 有孔 2ヶ
100	178	81	292	木札状 木製品 (90%)	-	-	スギ	板目	板物	長さ 15.4 幅 6.5 厚さ 0.6	両側面上下に「く」 の字の切込み有
101	178	81	306	木札状 木製品 (90%)	-	-	モミ	板目	板物	長さ 10.4 幅 4.2 厚さ 0.2	両側面に「く」の字 の切込み有 下部欠損
			165	小型板状 木製品 (10%)	Ⅱ 区 H - 29	L-VII	スギ	証目	板物	長さ (7.7) 幅 (3.4) 厚さ 1.7	ていねいな削り。 両側面割れ。両木 口は弧状になめら かに整形
			174 175	小型板状 木製品 (20%)	-	L-VII	ケヤキ (収縮材)	証目	板物	長さ (14.0) 幅 3.8 厚さ 0.7	両木口接損。片側 面は斜めに削られ 他方には不整の浅 い切込み有
			296	小型板状 木製品 (40%)	Ⅲ 区 C - 1	L-V	スギ	板目	板物	長さ (9.4) 幅 3.7 厚さ 0.4	全面ていねいな削 り。片側面にくり こみ。中央上部に 円孔有。下部欠損
			297	小型板状 木製品 (90%)	Ⅱ 区 E - 29	L-VIII	スギ?	証目	板物	長さ 10.1 幅 3.5 厚さ 0.7	全面ていねいな削 り平面断面共矩形 両木口は工具によ り切断
			307	小型板状 木製品 (80%)	Ⅱ 区 井戸跡	2-4	スギ	証目	板物	長さ (13.7) 幅 (2.8) 厚さ 1.4	片側面は真直に木 口の一方は弧状に ていねいな削り有 他は欠損
102	176	82	107	機織具 部 (60%)	-	-	スギ	芯持	面取り	長さ (26.0) 幅 3.0	片端に挟りを有し 末端部は面取り。 片端部は欠損
103	176	82	318	機織具 部 (70%)	Ⅲ 区 E - 1	L-X	ケンボナシ	芯持	面取り	長さ (33.2) 幅 2.9 厚さ 1.0	片端の側面が細く なっている。 片端部は欠損 削り痕若干残存
104	176	82	311	機織具 部 (70%)	Ⅱ 区 H - 30	L-VII	アスナロ	芯持	面取り	長さ (28.5) 幅 2.5 厚さ 2.0	片端に二方から切 り込みをして頭を 作り出している。 全体に削り痕明瞭
105	176	82	115	機織具 部 (95%)	Ⅱ 区 E - 28	L-VII	ヒノキ	板目	板物	長さ 38.5 幅 5.2 厚さ 1.9	片端に三方から切 り込みをし、もう 一方を欠損するが 左右対称か
106	176	82	333	機織具 部 (80%)	Ⅱ 区 E - 28	L-VII	モミ	板目	板物	長さ (44.6) 幅 6.5 厚さ 1.2	中央が幅広く両端 に傾斜があり、細 くなる左右対称の 板材か
107	179	83	289	馬形 (80%)	Ⅲ 区 G - 1	L-V	モミ	板目	板物	長さ (11.0) 幅 2.4 厚さ 0.5	臀部欠損。3ヶ所 を切込んで頭、首、 背、臀を表現。両 面に目を墨描

第63表 湿地性遺物包含出土木製品(12)

番号	挿図	図版	遺物 番号	名称 遺存度(%)	位置	層位	樹種	木取法	手法	法量 (cm)	特徴
108	179	83	173	馬形 (80%)	Ⅱ区 C-29	L-VII	ケヤキ	征目	板物	長(86.1) 幅 3.7 厚さ 0.8	臀部欠損。頭部を 上下から切込んで 表現。腹部にも切 込み有
109	179	82	120	刀形 (完形)	Ⅱ区 C-28	L-VII	モミ	板目	板物	長 28.2 幅 6.7 厚さ 0.9	両側。著しく刃部 が短い。円孔1個 有。カバ付折敷底 板の再利用
110	179	82	328	刀形 (95%)	Ⅱ区 F-28	L-VIII	モミ	板目	板物	長 28.4 幅 5.7 厚さ 1.4	片側。側面をくり 欠いて柄を作出。 刃部短い
111	179	82	329	刀形 (完形)	Ⅱ区 D-28	L-VIII	モミ	板目	板物	長 40.2 幅 7.0 厚さ 1.4	片側。側面をくり 欠いて柄を作出。 刃部短い。刃に向 けて薄くなる
112	181	84	316	楔状 木製品 (完形)	Ⅱ区 C-29	L-IX	ケヤキ	板目	面取り	長 29.4 幅 2.5 厚さ 2.5	全面ていねいな削 り。頂部欠損上部 の削りは逆方向。 木釘か?
113	181	84	185	楔状 木製品 (90%)	-	-	ガマズミ?	芯持	面取り	長 28.5 幅 3.7 厚さ 2.9	全面ていねいな削 り。頂部及び先端 部欠損。裏面に多 く擦痕有
114	181	84	226	楔状 木製品 (完形)	Ⅱ区 F-28	L-VII	オニグルミ	征目	面取り	長 29.5 幅 2.3 厚さ 1.7	全面ていねいな削 り。右側欠損。左 側面は破状の凹凸 先端部潰滅痕
115	181	84	181	楔状 木製品 (90%)	-	-	ヤマグワ?	征目	面取り	長 28.1 幅 2.6 厚さ 2.1	全面ていねいな削 り。頂部欠損。先 端は半円形に成形 されている
116	181	84	63	板材	Ⅱ区 井戸跡	ℓ-3	スギ	征目	板物	長 26.4 幅 9.5 厚さ 1.6	下部欠損。矩形の 納穴2個有。両側 面から上下4ヶ所 に切込み有
117	181	85	393	板材	Ⅱ区 井戸跡	-	クリ	板目	板物	長 108.8 幅 10.0 厚さ 2.8	切込み1ヶ所有
118	182	85	375	板材	Ⅲ区 G-1	L-V	クリ	板目	板物	長(104.4) 幅 14.7 厚さ 2.2	側面に矩形の切込 み有。腐食顕著
119	182	85	412	板材	Ⅱ区 C-29	L-VII	マツ類	板目	板物	長(105.8) 幅 14.7 厚さ 4.0	側面に矩形の切込 み有。腐食顕著
120	182	85	411	板材	-	-	マツ類	板目	板物	長 108.8 幅 10.0 厚さ 2.8	側面に矩形の切込 み有。上端に1ヶ 所下端に2ヶ所納 を作出
121	182	85	367	板材	Ⅱ区 F-27	L-VI	ケヤキ (収縮材)	板目	板物	長(88.4) 幅 18.5 厚さ 6.0	厚手。焼痕有。腐 食顕著
122	183	85	439	板材	-	-	クリ	板目	板物	長(85.9) 幅 6.1 厚さ 1.2	下端に納。側面に 矩形の切込み有。 同側面に5個の相 釘孔有
123	183	85	433	板材	-	-	マツ類	板目	板物	長 21.9 幅 16.6 厚さ 1.9	ていねいな削り 一部欠損。擦痕有

第 7 節 湿地性遺物包含層

第 63 表 湿地性遺物包含出土木製品(13)

番号	挿図	図版	遺物 番号	名 称 遺存度(%)	位 置	層位	樹 種	木取法	手 法	法 量 (cm)	特 徴
124	183	85	109	板 材	-	-	ケ ヤ キ	板 目	板 物	長 (45.7) 幅 13.5 厚さ 2.0	上部側面に矩形の切込み有。No 123 と同材か
125	183	85	46	板 材	-	-	ケ ヤ キ	板 目	板 物	長 (45.0) 幅 14.6 厚さ 2.0	上部側面に弧状のくり込み有。その下に矩形の切込み有
126	184	86	53	板 材	II 区 D - 28	L-IX	-	板 目	板 物	長 (29.5) 幅 17.8 厚さ 6.2	厚手。側面は直角に木口は斜めに切断。焼痕有
127	184	86	56	板 材	-	-	モ ミ	板 目	板 物	長 (29.0) 幅 13.5 厚さ (1.4)	削りが荒い
128	184	86	146	板 材	II 区 G - 30	L-VIII	-	板 目	板 物	長 (29.5) 幅 6.3 厚さ 0.8	小型。全面でいねいな削り
129	184	86	24	板 材	II 区 C - 28	L-IX	トチノキ	板 目	板 物	長 (29.0) 幅 18.7 厚さ 2.5	小孔多数有
130	185	-	105	板 材	II 区 E - 29	L-X	ケ ヤ キ	板 目	板 物	長 (48.4) 幅 18.4 厚さ 5.4	厚手。芯部の腐食顕著。一部破片は F-29 L-IX 出土
			49	板 材	II 区 D - 28	L-VIII	モ ミ	板 目	板 物	長 (46.6) 幅 11.6 厚さ 3.5	厚手。平面矩形。木口の一方は工具で切断。他方は折損
			50	板 材	II 区 F - 28	L-VIII	ス ギ	板 目	板 物	長 (28.8) 幅 (4.3) 厚さ 1.9	側面割れ。両木口折損
			51	板 材	II 区 D - 28	L-VIII	モ ミ	板 目	板 物	長 (26.7) 幅 (6.5) 厚さ 1.6	側面割れ。両木口折損。腐食顕著
			52	板 材	II 区 D - 28	L-VIII	ス ギ	板 目	板 物	長 28.6) 幅 (8.7) 厚さ 3.3	遺物番号 50 と同材。腐食顕著
			55	板 材	-	-	モ ミ	板 目	板 物	長 (46.7) 幅 15.0 厚さ 2.5	多数の擦痕有腐食顕著
			58	板 材	-	-	オニグル ミ? (収縮材)	証 目	板 物	長 22.4) 幅 (4.5) 厚さ 0.7	板状。腐食顕著小片
			73	板 材	II 区 H - 28	L-VII	ス ギ	板 目	板 物	長 25.8) 幅 (4.1) 厚さ 0.9	小片
			76	板 材	II 区 B - 28 沼	L-VII	ケ ヤ キ	板 目	板 物	a(長5.2厚0.3 巾1.6) b(長7.1厚0.4 巾1.8) c(長6.4厚0.4 巾2.0)	焼痕あり。四面に ていねいな削りが 施されている 小片
			77	板 材	II 区 F - 28	L-VII	モ ミ	板 目	板 物	長 28.6) 幅 (6.0) 厚さ 2.5	腐食顕著



第63表 湿地性遺物包含出土木製品(14)

番号	挿図	図版	遺物 番号	名称 遺存 (%)	位置	層位	樹種	木取法	手法	法量 (cm)	特徴
			81	板材	-	-	モミ	柱目	板物	長さ(5.3) 幅(3.7) 厚さ0.4	小片
			123	板材	-	-	トネリコ類	板目	板物	長さ(0.6) 幅(7.0) 厚さ1.0	腐食顕著 小片
			132	板材	-	-	カエデ類	柱目	板物	長さ(20.8) 幅(4.9) 厚さ1.4	
			133	板材	-	-	カエデ類	板目	板物	長さ(13.7) 幅(10.4) 厚さ3.0	小片
			134	板材	Ⅱ区 F-28	L-VIII	カエデ類	板目	板物	長さ(14.2) 幅(5.1) 厚さ1.0	小片
			137	板材	Ⅱ区 F-28	L-VIII	クリ? (収縮材)	板目	板物	長さ(8.4) 幅(6.4) 厚さ1.0	小片
			157	板材	Ⅱ区 F-28	L-VIII	カエデ類	板目	板物	長さ(11.9) 幅(4.3) 厚さ1.2	小片
			158	板材	Ⅱ区 F-28	L-VIII	ケヤキ	柱目	板物	長さ(5.2) 幅(3.6) 厚さ0.6	小片
			163	板材	-	-	カエデ類	板目	板物	長さ(6.9) 幅(3.2) 厚さ1.1	小片
			176	板材	Ⅱ区 I-28	L-VII	クリ? (乾硬材)	板目	板物	長さ(11.6) 幅10.6 厚さ3.7	厚手。平面矩形 両木口折損
			183	板材	-	-	ケヤキ (砕け材)	板目	板物	長さ(11.1) 幅(8.2) 厚さ5.6	腐食顕著 小片
			187	板材	-	-	ケヤキ	柱目	板物	長さ(16.4) 幅(6.2) 厚さ2.0	腐食顕著
			188	板材	-	-	クリ	柱目	板物	長さ(22.8) 幅(3.9) 厚さ1.9	
			191	板材	-	-	ケヤキ	板目	板物	長さ(9.3) 幅5.6 厚さ1.2	小型。表裏でいね いな削り。側面割 れ、木口の一方折 損
			217	板材	-	-	モミ	柱目	板物	長さ(5.2) 幅(1.3) 厚さ0.4	曲物側板か? 裏面に刻線あり 小片
			238	板材	Ⅱ区 B-28 井戸西側	L-VIII	ケヤキ	板目	板物	長さ(13.3) 幅(7.9) 厚さ1.4	小型。側面割れ、 木口の一方折損

第 7 節 湿地性遺物包含層

第 63 表 湿地性遺物包含出土木製品(15)

番号	挿図	図版	遺物 番号	名 称 (類)	位 置	層位	樹 種	木取法	手 法	法 量 (cm)	特 徴
			248	板 材	-	-	モ ミ	板 目	板 物	長さ (11.3) 幅 ( 3.5) 厚さ 1.2	端部に斜方向の切 断痕あり 小片
			251	板 材	-	-	ス ギ	証 目	板 物	長さ (11.3) 幅 ( 5.2) 厚さ 0.3	薄板,曲 側板か? 小片
			264	板 材	-	-	ヒ ノ キ	証 目	板 物	長さ ( 6.2) 幅 ( 2.2) 厚さ 0.3	薄板,曲物側板か? 小片
			281	板 材	Ⅱ 区 E - 30	L-VI	サ ク ラ 類	板 目	板 物	長さ (20.0) 幅 ( 3.8) 厚さ 1.6	断面楕円形 側面にけずり痕あ り,
			326	板 材	-	-	トチノキ?	証 目	板 物	長さ (23.7) 幅 ( 9.4) 厚さ 2.4	腐食顕著
			331	板 材	-	-	ク リ?	証 目	板 物	長さ (30.5) 幅 4.0 厚さ 0.4	薄板 腐食顕著 曲物側板か?
			338	板 材	Ⅱ 区 井戸跡	ℓ-5	ケ ヤ キ (収縮材)	板 目	板 物	長さ (24.3) 幅 ( 5.4) 厚さ ( 1.3)	側面割れ, 両木口 折損。腐食顕著
			417	板 材	-	-	モ ミ?	板 目	板 物	長さ (23.9) 幅 ( 6.9) 厚さ ( 3.2)	側面割れ, 両木口 折損。腐食顕著
			434	板 材	-	-	マ ツ 類	板 目	板 物	長さ (17.7) 幅 ( 5.6) 厚さ 0.8	表裏共ていねいな 削り痕。破損によ り原形を留めず
131	185	86	380	割 截 材	-	-	トネリコ類	板 目	-	長さ (50.4) 幅 ( 9.8) 厚さ 2.8	丸太の外面を残し 截断。板状。方形 小孔 7 個有
132	185	87	443	割 截 材	-	-	-	板 目	-	長さ (79.1) 幅 14.1 厚さ 5.4	丸太の外面を残し 截断。板状。 梁か?
133	185	87	368	割 截 材	Ⅱ 区 H - 28	L-VI	ケ ヤ キ (収縮材)	板 目	-	長さ (92.0) 幅 18.0 厚さ ( 3.6)	丸太の外面を残し 截断。板状。 梁か?
			61	割 截 材	Ⅱ 区 井戸跡	ℓ-3	ク リ	証 目	-	長さ (48.8) 幅 ( 6.7) 厚さ ( 3.6)	断面略々三角形だ が, 一面は丸太の 外面を残し丸味を もつ。両木口折損
			108	割 截 材	-	-	トネリコ類	証 目	-	長さ (44.6) 幅 ( 8.7) 厚さ ( 5.5)	断面略々 角形だ が, 一面は丸太の 外面を残し丸味を もつ
			336	割 截 材	-	-	ケ ヤ キ	証 目	-	長さ (33.1) 幅 ( 4.1) 厚さ ( 3.5)	丸太の 1/4 を割截 割截面及び両木口 に削り有
134	186	87	96	角 材	-	-	トネリコ類	板 目	-	長さ (33.2) 幅 4.4 厚さ 2.1	断面三角形。側辺 に矩形の切込み有

第63表 湿地性遺物包含出土木製品(16)

番号	挿図	図版	遺物 番号	名称 遺存度(%)	位置	層位	樹種	木取法	手法	法量 (cm)	特徴
135	186	87	337	角材	II区 井戸跡	ℓ-5	ニレ?	板目	-	長さ(55.7) 幅 6.6 厚さ 3.8	断面三角形。側辺に弧状のくり込み有
136	186	87	95	角材	-	-	トネリコ類	板目	-	長さ(38.8) 幅 9.0 厚さ 6.5	断面三角形。側辺に不整形の切込み有
137	186	87	397	角材	II区 D-27 E	L-VII	クリ (収縮材)	板目	-	長さ137.0 幅 12.2 厚さ 8.0	断面三角形。矩形の納穴2ヶ所有
138	188	88	377	角材	III区 H-1	L-IX	-	芯持	-	長さ(92.0) 幅 10.8 厚さ 11.4	断面四角形。大型、柱材か?
139	188	89	400	角材	II区 B-28	L-VII	マツ類	板目	-	長さ(26.8) 幅 4.0 厚さ 4.8	断面四角形。一部腐食顕著
140	188	89	42	角材	-	-	オニグルミ	板目	-	長さ17.6 幅 2.1 厚さ 3.5	断面四角形。三面でいねいな削り
141	188	89	43	角材	-	-	アスナロ	芯持	-	長さ(26.2) 幅 1.5 厚さ 1.8	断面四角形。細くていねいな削り。円形の小孔1個有
142	188	89	113	角材	II区 E-30	L-IX	マユミ?	芯持	-	長さ(25.0) 径 4.0	表は面取りがなされ、裏は丸味をおびる
			11	角材	II区 I-28	-	オニグルミ	柱目	-	長さ(23.8) 幅 3.7 厚さ 3.6	断面四角形。二面でいねいな削り。木口の一方折損。腐食顕著
			112	角材	-	-	ケヤキ	板目	-	長さ(21.0) 幅 5.0 厚さ 2.3	断面四角形。一側面のみていねいな削り。両木口折損
			151	角材	II区 I-28	L-V	ヒノキ? (砕け材)	芯持	-	長さ(13.4) 幅 1.2 厚さ 1.1	断面四角形。細くていねいな削り。両木口折損
			255	角材	II区 H-28	L-VII	クヌギ	芯持	-	長さ(16.1) 幅 5.0 厚さ 4.8	断面丸味をおびる四角形。先端斧頭形に削り出す。一方の木口折損
			330	角材	II区 C-28	L-VIII	モミ	板目	-	長さ(26.3) 幅 2.0 厚さ 2.0	断面隅丸方形。細くていねいな削り。木口の一方折損
			354	角材	II区 F-28	L-IX	クリ	芯持	-	長さ(100.2) 幅 13.1 厚さ 14.4	断面四角形。大型。両木口折損。腐食顕著。柱材か?
143	187	88	371	丸材	II区 I-28	L-V	モミ	芯持	丸物	長さ(115.4) 径 8.6	中央付近に2方向からの矩形の「アグ」有。下部に焼痕有
144	187	88	372	丸材	II区 I-29	L-V	モミ	芯持	丸物	長さ(107.6) 径 9.0	上部に矩形の切込み有。下部に焼痕有

第 7 節 湿地性遺物包含層

第 63 表 湿地性遺物包含出土木製品(17)

番号	挿図	図 版	遺物 番号	名 称 遺存度(%)	位 置	層位	樹 種	木取法	手 法	法 量 (cm)	特 徴
145	187	88	374	丸 材	-	-	ク リ	芯 持	丸 物	長さ 114.0 幅 7.4 厚さ 4.8	先端に2方向から 切出した柄(長 10.5 cm)有
146	187	88	396	丸 材	-	-	カ ヤ	芯 持	丸 物	長さ 268.0 最大径 30.0 最小径 10.0	ていねいな削り 先端に周囲から削 り出した柄(長 27.5 cm)有
147	188	89	189	杭状木製品	-	-	ク リ?	芯 持	丸 物	長さ (18.2) 径 2.5	先端は一方から 尖らせる 上部焼失
148	188	89	60	杭状木製品	Ⅱ 区 H - 29	L-VII	サクラ類	芯 持	丸 物	長さ (27.4) 径 3.6	先端は一方から 尖らせる 上部焼失
149	188	89	334	杭状木製品	-	-	ヤマグワ?	芯 持	丸 物	長さ (22.3) 径 4.8	先端を多方向から 削って作出 上部折損
150	188	89	416	杭状木製品	-	-	ク リ	芯 持	丸 物	長さ (53.4) 径 7.8	先端を多方向から 削って作出 上部折損
			39	不明木製品	-	-	ヤマグワ?	芯 持	丸 物	長さ 34.2 幅 20.8 厚さ 10.8	平面不整形 部分的に加工痕あり
			41	不明木製品	-	-	ヤマグワ?			長さ 38.4 幅 31.3 厚さ 13.6	平面不整形 全面に工具痕あり
			122	不明木製品	Ⅱ 区 F - 28	L-VIII	コ ナ ラ	-	-	長さ 8.8 幅 5.6 厚さ 3.29	
			180	不明木製品	-	-	トネリコ類			長さ 13.2 幅 7.9 厚さ 2.1	平面不整形 断面楕円形 部分的に加工痕あり
			186	不明木製品	-	-	ケ ヤ キ			長さ 10.4 幅 2.9 厚さ 1.6	片端部に切断痕 側面は全面削り 板状
			192	不明木製品	-	-	トネリコ類			長さ 13.0 幅 4.6 厚さ 2.5	平面不整形三角形 部分的に工具によ る加工痕あり
			196	不明木製品	-	-	トネリコ類?			長さ 5.8 幅 4.8 厚さ 1.9	平面はば円形 板状 荒い削りが全面に 見られる
			205	不明木製品	Ⅱ 区 C - 28	L-VIII	ケ ヤ キ (収 縮 材)			長さ 7.8 幅 4.8 厚さ 0.4	薄い板状であるが 加熱により変形 片面にのみ焼痕あり
			279	不明木製品	Ⅱ 区 Ⅲ 区 E - 1	L-VII	サクラ類			長さ 8.2 幅 3.4 厚さ 0.9	板状で、全面にて いねいな削りが施 され両端部は切断 されている
			282	不明木製品	Ⅱ 区 E - 28	L-VIII	サクラ類			長さ 12.4 幅 2.0 厚さ 1.7	棒状で先端に斜方 向の切断痕有 部分的に削り痕有

第63表 湿地性遺物包含出土木製品(18)

番号	挿図	図版	遺物番号	名称 遺存度(%)	位置	層位	樹種	木取法	手法	法量 (cm)	特徴
			283	不明木製品	Ⅱ区 E-28	L-VIII	-			長さ 20.4 幅 6.5 厚さ 3.4	棒状で部分的に削り痕有
			335	不明木製品	Ⅱ区 井戸跡	ℓ-5	ケヤキ			長さ 10.2 幅 4.2 最大厚 4.5 最小厚 2.4	平面不整形 断面四角形 全面に削り痕有
			343	不明木製品			ケヤキ			長さ 24.1 幅 44 厚さ 3.0	端部に切断痕あり 側面に削りあり
			348	不明木製品			ケヤキ			長さ 9.4 最大幅 2.5 厚さ 1.2	板状で全面に削りが施され、端部は切断されている
			363	不明木製品			トネリコ類			長さ 46.0 幅 17.0 厚さ 4.9	平面不整形 側面に加工痕多し 端部に切断痕あり
			379	不明木製品			トネリコ類			長さ 43.7 幅 10.9 厚さ 6.7	両端に削り痕あり 平面台形 両端に削り痕有

以上が湿地性遺物包含層出土の木製品一覧表である。これら以外に木質の自然遺物が多数出土しているが、これを自然木としてその樹種、法量を第64表に掲げた。

自然木としたものの中には、棒状の木の端部に鋭利な工具による1方向あるいは2方向からの切断痕を有するものや焼痕を有するものも含まれる。これらの痕跡が製品の作製を意識した加工痕ではなく、樹枝の切り落としや刈り払いなどの結果として生じた痕跡と判断したため、敢えて木製品から除外し、自然木にグルーピングした次第である。また木片としたものは微小片であるため製品か自然遺物か判じ得なかったものである。竹が2点あり、遺物番号419には工具痕が1ヶ所認められたが両者とも製品とは言い難いものである。

このほか、総数4,505点にのぼる種子が出土しており、その内訳はモモが最も多く3,348点、トチ669点、クルミ242点、カヤ86点、カン12点、小型木の実122点、球根3点、不明23点である。これらの種子については特に別冊において名古屋大学の渡辺誠氏の論文を掲載し、検討していただいた。

更にひょうたんの果皮が3点あり、これについての考察は大阪府立大学の藤下典之氏に依頼し同じく別冊に掲載した。

第 7 節 湿地性遺物包含層

第 64 表 湿地性遺物包含層出土自然遺物

遺物 番号	名 称	層位	樹 種	法 量 (cm)	特 徴
12	自 然 木		サクラ類	長さ 11.9 幅 8.8 厚さ 3.1	
23	自 然 木	L-IX	ニレ類	長さ 41.3 径 7.6	又 木
25	自 然 木		— (収縮変形)	長さ 36.8 径 2.0	同一個体 6点有り
26	自 然 木		ウツギ	長さ 47.3 径 5.4	端部に切 断痕有
27	自 然 木		カヤノキ	長さ 58.8 幅 5.2 厚さ 4.4	
28	自 然 木		ウコギ類	長さ 38.0 径 2.6	端部に切 断痕有
30	自 然 木		ク リ	長さ 20.6 幅 6.9 厚さ 6.0	
31	自 然 木		ケヤキ	長さ 34.2 径 3.9	端部に切 断痕有
32	自 然 木		コナラ	長さ 30.2 径 4.6	又 木
33	自 然 木		—	長さ 42.6 径 4.8	
34	自 然 木		トネリコ類?	長さ 29.7 径 9.5	端部に切 断痕有
35	自 然 木		トネリコ類?	長さ 52.4 幅 11.9 厚さ 6.2	
44	自 然 木		ク リ	長さ 16.7 幅 4.9 厚さ 4.6	
47	自 然 木		ケヤキ	長さ 48.5 幅 13.5 厚さ 7.5	
59	自 然 木		マツ類	長さ 21.8 径 4.6	
62	自 然 木		ク リ	長さ 32.2 幅 7.8 厚さ 2.8	板 状
64	自 然 木		—	長さ 30.0 最大径 18.5	
65	自 然 木		カエデ類	長さ 42.5 最大径 17.0	
66	自 然 木		—	長さ 26.5 径 9.0	
72	自 然 木		マツ類	長さ 19.6 幅 2.75 厚さ 1.7	
78	自 然 木		— (散孔材)	長さ 17.0 幅 5.0 厚さ 3.95	
79	自 然 木		ニレ類? (収縮材)	長さ 14.9 幅 2.25 厚さ 1.4	
82	自 然 木		ケヤキ (収縮材)	長さ 37.5 幅 28.5 厚さ 15.0	
88	自 然 木		トネリコ類	長さ 99.4 径 10.0	
89	自 然 木		ケヤキ	長さ 56.0 径 12.5	又 木
94	自 然 木		ウコギ類	長さ 37.5 径 4.4	又 木 端部に切 断痕有
99	自 然 木		コクサギ	長さ 26.8 径 8.7	
106	自 然 木	L-IX	トネリコ類	長さ 47.2 径 15.5	両端部に 切断痕有
111	自 然 木		ケヤキ	長さ 27.0 厚さ 8.7	
116	自 然 木		コナラ? (収縮材)	長さ 47.0 径 9.0	板 状 腐食顕著
118	自 然 木	L-Ⅷ	ケヤキ (収縮材)	長さ 12.4 幅 4.5 厚さ 1.3	板 状 端部に切 断痕有
124	自 然 木		イボタノキ	長さ 24.0 径 5.15	

第3章 遺構と遺物

遺物番号	名称	層位	樹種	法量 (cm)	特徴
125	自然木		トチノキ	長さ 36.5 径 3.1	
126	自然木		サクラ類	長さ 23.5 径 3.4	
127	自然木		サクラ類	長さ 17.0 幅 8.5 厚さ 6.2	
128	自然木		トネリコ類	長さ 14.4 幅 6.0 厚さ 4.1	端部に切断痕有
129	自然木		マツ類	長さ 12.6 幅 2.0 厚さ 1.9	焼痕有
131	自然木	L-VII	スギ	長さ 17.8 幅 4.1 厚さ 2.1	
135	自然木	L-VIII	カエデ類	長さ 8.9 幅 4.1 厚さ 1.1	板状
136	自然木	L-VIII	-	長さ 9.7 幅 2.5 厚さ 1.6	
139	自然木		- (収縮材)	長さ 13.1 径 2.2	焼痕有
140	自然木		-	長さ 10.2 幅 3.8 厚さ 0.8	板状
141	自然木		マツ類	長さ 9.9 幅 1.8 厚さ 1.0	焼痕有
144	自然木		-	長さ 10.7 幅 2.8 厚さ 1.6	
145	自然木	L-VIII	-	長さ 9.85 幅 4.5 厚さ 2.3	板状 焼痕有
152	自然木	L-V	マツ類	長さ 11.2 幅 1.7 厚さ 0.8	焼痕有
159	自然木	L-VIII	サクラ類	長さ 13.4 幅 2.9 厚さ 1.3	
160	自然木		ヤナギ類	長さ 7.0 径 2.0	

遺物番号	名称	層位	樹種	法量 (cm)	特徴
161	自然木		マユミ?	長さ 12.0 径 1.9	
162	自然木		-	長さ 4.0 幅 3.3 厚さ 0.9	小片
164	自然木	L-VIII	マツ類	長さ 9.8 幅 1.2 厚さ 0.9	焼痕有
177	自然木	L-VII	サクラ類	長さ 16.4 幅 4.8 厚さ 2.4	端部に切断痕有
178	自然木	L-VII	サクラ類	長さ 19.4 幅 2.3 厚さ 2.3	焼痕有
179	自然木	L-VII	サクラ類	長さ 19.4 幅 5.5 厚さ 1.9	板状
182	自然木		-	長さ 14.7 幅 4.5 厚さ 1.8	
184	自然木		ウツギ	長さ 25.0 径 2.0	端部に切断痕有
193	自然木		マツ類	長さ 11.9 幅 1.7 厚さ 1.3	焼痕有
194	自然木		コクサギ	長さ 10.3 幅 2.3 厚さ 1.8	
195	自然木		コクサギ	長さ 12.0 幅 3.2 厚さ 2.8	両端部に切断痕有
209	自然木		カエデ類? (収縮材)	長さ 7.5 幅 3.2 厚さ 1.2	小片
210	自然木		ニレ類	長さ 12.3 幅 4.4 厚さ 2.8	
211	自然木		モミ	長さ 9.4 幅 2.1 厚さ 0.9	
212	自然木		マツ類	長さ 8.3 幅 1.8 厚さ 0.6	焼痕有
213	自然木		ヤマグワ	長さ 7.4 幅 1.8 厚さ 1.0	

第 7 節 湿地性遺物包含層

遺物番号	名 称	層位	樹 種	法 量 (cm)	特 徴
214	自然木		マツ類	長さ 5.6 幅 1.7 厚さ 0.9	焼痕有
215	自然木		(散孔材)	長さ 12.5 幅 2.4	
216	自然木		ケンボナン	長さ 9.4 幅 2.6 厚さ 0.8	
218	自然木		ニレ類	長さ 4.6 幅 2.3 厚さ 0.4	
236	自然木	L-VII	コナラ	長さ 13.0 径 2.4	側面に部分的工具痕有
237	自然木	L-VII	コクサギ	長さ 8.8 径 3.0	側面に部分的工具痕有
247	自然木		モミ	長さ 8.0 幅 2.6 厚さ 0.8	焼痕有
252	自然木		アスナロ	長さ 13.5 幅 3.8 厚さ 0.8	腐食顕著状
263	自然木		ケヤキ	長さ 12.5 幅 7.4 厚さ 3.4	端部に切断痕有
265	自然木		ヒノキ	長さ 11.3 幅 4.4 厚さ 1.0	板状
277	自然木	L-VII	カエデ類	長さ 17.3 径 1.4	端部に切断痕有
278	自然木	L-VII	ヌルデ	長さ 13.0 幅 2.0 厚さ 0.9	断面楕円形
286	自然木	L-VII	カヤノキ	長さ 11.1 径 1.4	端部に加工痕有
324	自然木		ヌルデ (広葉樹材)	長さ 28.8 幅 5.8 厚さ 4.2	
325	自然木		クリ?	長さ 24.1 幅 2.6 厚さ 1.0	
340	自然木		ヤマグワ	最小原 2.4 長さ 6.7 幅 3.9	焼痕有 端部に切断痕有
341	自然木		-	長さ 6.6 幅 1.65	先端に削り痕有 その2cm上方に穿孔有。 片側面に扁平な削り、焼痕有。
344	自然木		クリ	長さ 13.5 幅 3.65 厚さ 2.4	焼痕有
347	自然木		トネリコ類	長さ 11.2 径 1.2	両端に穿孔有。 貫通はしていない。 欠損が著しい。
350	自然木	井戸跡 $\phi$ -5	クリ	長さ 13.7 幅 2.4 厚さ 1.1	片側に削り有
358	自然木		クリ	長さ 10.5 径 4.6	先端に削り痕。 中央部に樹皮残存。 一部に穿孔有。
360	自然木	L-IX	クリ	長さ 89.0 径 18.5	先端に孔有
361	自然木	L-IX	クリ	長さ 110.0 径 12.4	
362	自然木		サクラ類	長さ 90.4 幅 18.2 厚さ 3.6	割截材の可能性有状
376	自然木		トネリコ類?	長さ 68.8 幅 16.0 厚さ 7.2	部分的に工具痕有
381	自然木		トネリコ類	長さ 15.1 幅 9.8 厚さ 6.6	
382	自然木		- (環孔材)	長さ 20.4 幅 9.3 厚さ 5.3	377と接合
383	自然木		- (環孔材)	長さ 20.4 幅 6.5 厚さ 3.4	
384	自然木		シデ類	長さ 37.8 径 3.5	樹皮有
385	自然木		クリ	a)長さ23.9 径3.7 b)長さ14.2 径3.5	同一個体と思われるが接合面が摩滅。工具による切り込み痕有。
386	自然木		クリ	長さ 25.4 径 2.8 厚さ 2.9	端部に切断痕有
388	自然木		シデ類	長さ 40.8 径 2.0	同一個体3点有



第3章 遺構と遺物

遺物番号	名称	層位	樹種	法量 (cm)	特徴
391	自然木		ヤマグワ	長さ 58.5 幅 12.5 厚さ 6.8	
392	自然木	L-VII	ニスリハ?	長さ 228.8 径 27.6	398と接合
395	自然木	L-VII	ク リ (収縮材)	長さ 290.8 幅 21.5 A(厚 10.0 幅 17.2 B(厚 6.1	
404	自然木		コクサギ	長さ 47.0 径 3.0	
407	自然木		トネリコ類	長さ 14.0 径 4.4	
409	自然木	L-IX	カヤノキ	長さ 95.2 径 10.0	両端部に 切断痕有
410	自然木		カヤノキ	長さ 79.0 幅 4.0	
413	自然木		ク リ	長さ 108.2 幅 13.2 厚さ 10.2	
418	自然木		ク リ	長さ 49.1 幅 9.5 厚さ 5.2	
421	自然木		ク リ	長さ 28.2 径 4.3	又 木
422	自然木		ク リ	長さ 71.0 径 8.2	
423	自然木		ク リ	長さ 42.0 径 5.3	
424	自然木		ウコギ類 (収縮材)	長さ 54.4 幅 4.9 厚さ 2.7	
425	自然木		ク リ	長さ 54.9 幅 7.6 厚さ 5.5	
426	自然木		マツ類	長さ 16.5 径 3.6	
427	自然木		マツ類	長さ 27.6 径 1.5	

遺物番号	名称	層位	樹種	法量 (cm)	特徴
428	自然木		トネリコ類	長さ 31.4 径 3.4	
431	自然木		マツ類	長さ 17.5 径 2.5	一部削り 痕有
432	自然木		カキノキ	長さ 21.3 径 2.5	
436	自然木		カヤノキ	長さ 39.7 径 2.7	
29	木片		カヤノキ		
92	木片		ウコギ類		
98	木片		コクサギ		
327	木片		ク リ		
346	木片		モ ミ		
415	木片		モ ミ		
440	木片		ク リ?		
231	ひょうたん				
254	ひょうたん				
345	ひょうたん				
419	竹				端部に切 断痕有
441	竹				

## 第 8 節 遺構外出土遺物

### 弥生式土器(第 50 図版 10～12)

弥生式土器 1～3は堆積土中西側の地山上面より出土している体部破片である。胎土は少量の砂礫を含み焼成は良好であるが、土器表面は摩滅している。色調は灰褐色を呈しているが、器面研磨部分に赤色塗彩が施されている。文様は 1・3に 2 本 1 組の間隔の広い平行沈線と、1・2に 櫛描きの波状文が観察される。

### 土師器(第 190～192 図 4～26, 39～45・50 図版 13～15, 51 図版 1～10, 52 図版 1～5, 8 第 64 表)

杯(4～25) 4～7は製作にロクロを使用していないものである。4・6・7は口縁部から体部にかけて 20%程度残存する破片で、5はほぼ完形であり底部には「+」の線刻が観察できる。4・5・7は丸底を呈し 6の底部は欠損している。5の口縁部は外傾するが、6は直立気味でわずかに内弯し 4・5・6 共内外面中位に段がある。7は底部からそのままゆるやかに内弯し、口縁端部に至る無段の杯である。5・6には粘土紐痕が顕著に観察できる。4は I-2c-C<sub>2</sub>-(ac-b)類, 5は I-3c-C<sub>2</sub>-(ac-b)類, 6は I-2c-A<sub>2</sub>-(ac-b)類, 7は I a-4-E<sub>1</sub>-(ac-b)類である。

8～25は製作にロクロを使用したものである。8は体部下半に回転ヘラケズリによる再調整が施されている 1 類で、全体の約 20%程度を残す破片である。器形は底部から丸味を持って立ち上がりそのまま口縁部に至る。9～12は体部下半に手持ヘラケズリによる再調整が施されている 4 類である。12は体部下半にわずかに手持ヘラケズリによる再調整痕が観察できるが、器面の摩滅が著しく図面上に記入することができなかった。遺存度は 9が全体の約 30%, 10・11は約 70% 12は底部から体部下半までを残す破片である。器形は 9～12が底部から直線的に外傾しそのまま口縁部に至るものである。11は底部下半にわずかに丸味を持っており、12は口縁形態は不明である。13～18は回転糸切りによる底部の切り離し痕が観察でき、体部下半から底部周辺にかけて手持ヘラケズリが施されている 4b 類である。遺存度は 13・16が全体の約 30%, 14は約 60% 17・18は底部から体部下半までを残す破片である。器形は 13～16は底部から体部にかけてゆるやかに内弯し、口縁部がわずかに外反する。17・18は底部から体部にかけて外傾し口縁部は欠損している。19は静止糸切りによる底部の切り離し痕が観察でき、体部下半に手持ヘラケズリによる再調整が施されている 4c 類である。遺存度は全体の約 30%程度を残す破片である。器形は底部から体部にかけて内弯し口縁部がわずかに外反している。8～25の 12点は共に内面が黒色処理されている。

20～25は底部に回転糸切りによる切り離し痕が観察できるが、再調整について摩滅が著しく、4b類か、5b類かは不明なものである。遺存度は20・22は全体の約20％、23・24は約50％、25は全体の60％程度を残す破片である。器形は20・21・22・25は底部から体部にかけてゆるやかに内弯する。20・21は口縁部を欠損し、22は口縁部がわずかに外反する。23・24は底部より直線的に立ち上がった後体部下半よりゆるやかに内弯し口縁部が外反する。

高台付杯(26) 26は全体の約50％程度を残す破片である。器形は全体的に丸味を持つ深い杯部を有し、ハの字型を呈する高台を持つ。杯部の底部は回転糸切りの後底部下半に回転ヘラケズリによる再調整が施され、高台は再調整後に貼り付けたものである。体部外面に「𠄎」(則天文字の「天」)の墨書が認められる。内・外面共に器面は荒れているが、調整は内面に黒色処理が施されている。胎土は密であり焼成は良好である。

高坏(41・42) 41はⅡ区地山上面より出土したもので脚部全体の約10％程度の破片である。器形は中空の背の低い円筒形の脚で、裾は「ハ」の字形に開き内面には盲孔が見られる。調整は裾内面が黒色処理が施され、裾部外面は、ケズリ、ヨコナデ、脚天井部はナデが施されている。42はⅠ区西側の地山上面より出土したもので、脚部全体の約40％程度の破片である。器形は中空の背の高い円筒形の脚で、裾外面にわずかな段を有する。調整は裾外面がヘラナデ、裾内面がミガキ、脚天井部はナデが施されている。

甕(44・45) 44は非ロクロ、45はロクロ成形の甕である。2点共口縁部のみを約20％程度を残す破片である。44・45はⅡ区L-Ia・Ic層より出土したものである。44の器形は体部から頸部にかけて内弯し、口縁部はゆるやかに外傾しながら口縁端部に至る。口唇部は丸味を持っている。調整は内外両面共に口縁部がヨコナデ、体部にハケメが施されている。※-2a-A<sub>1</sub>-(ad-ad)類である。45は器形が体部から頸部にかけて直立気味に立ち上がり口縁部は著しく外反し、口唇部上端がつまみ上げられている。最大径が口縁部にあるもので、※-1a-A<sub>3</sub>-(h-h)類である。

小形甕(43) 43はⅡ区地山上面より出土したもので、全体の約50％程度の破片である。器形は底部から体部下半にかけて直立気味に立ち上がり、体部中位をへて口縁部に至り口唇部は短く外傾する。製作にロクロを使用していないもので調整は外面がハケメとナデ、内面はヘラナデが施され、底部外面には木葉痕の痕跡が観察できる。Ic-1a-C<sub>1</sub>-(da-a)類である。

壺(36) 36は地山上面より出土した底部で約30％を残す破片である。器形は底部からいったん立ち上がった後体部が外傾している。製作にロクロを使用したもので、底部は回転糸切りの痕跡がわずかに観察できる。粘土貼り付けによる背の低い付け高台を持つ。

蓋(40) 40はⅡ区D-27・28グリッドより出土した土師器蓋である。器形は偏平気味なつまみの側面にわずかな膨みを有する。外面の摩滅が著しいために原形をとどめず調整は不明であり、内面はわずかに光沢があるミガキが施されている。類例としては「<sup>註53</sup>仙台市蒸沢善応寺横穴古墳」

## 第 8 節 遺構外出土遺物

註 54  
「宮城県涌谷町追戸 A 地区横穴群」より出土している蓋のつまみがあげられるが、つまみの器高がない点など一致しない点があるものの内黒の土師器蓋として取り扱うことにした。この遺物は足付土器の足、あるいは耳皿の台ではないかとも考えられるが、底部と推定した場合耳皿としては不安定であり脚部とした場合、器面のカーブがあまりない点から蓋の蓋然性が強い。

手捏ね土器(39) 39は I 区地山より出土した完形品である。器形は筒形で平底を呈し底部外周部にわずかな凸凹面があり口縁部も多少ゆがんでいる。調整は外面に指ナデ痕の跡が鮮明に観察でき、内面には指頭痕がかすかに見られるが器面の摩滅が著しい。

### 須 恵 器(第 191・192 図 27-34, 第 51 図版 11~14, 第 64 表)

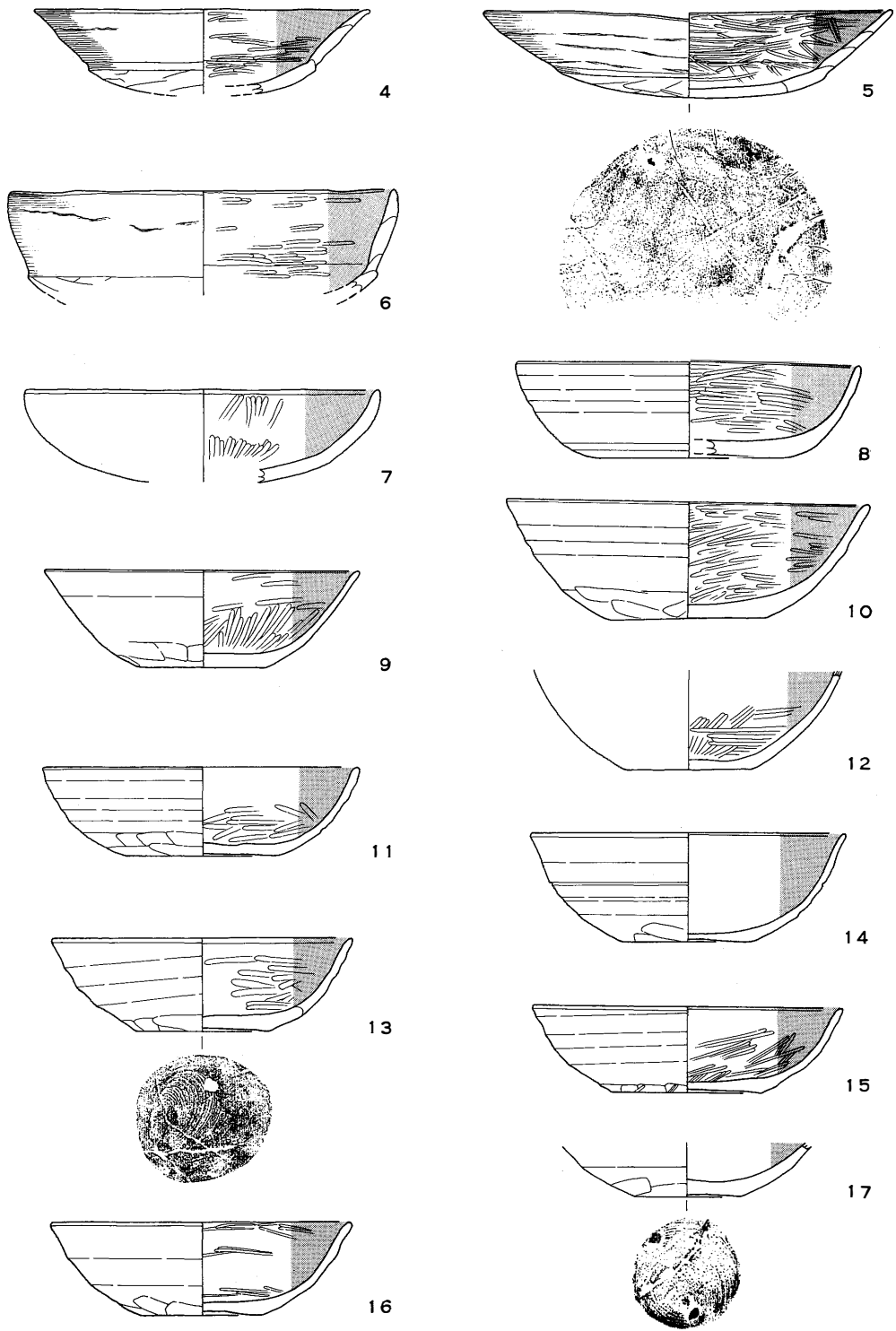
杯(27~34) 27は全体の約 25%程度を残す破片である。器形は平底風丸底の杯で、底部から口縁部にかけて直立気味に立ち上がる。器高の中位にはロクロ目が顕著に観察できる。調整は剝離が著しいため不明である。28はほぼ完形で器高は底部から直線的に口縁部に至っている。底部の切り離しは体部下半に回転ヘラケズリが施されている 5a 類である。29はほぼ完形で器形は底部から口縁部にかけて内弯気味に立ち上がっている。底部の切り離しは回転糸切りで、体部下半に手持ヘラケズリによる再調整が施されている 4b 類で、外面には炭化物が付着している。30は全体の約 25%程度の破片で底部から体部にかけて外傾し、口縁部は外反する器形を呈す。底部の切り離し法は回転糸切りの後、底部と体部下半に手持ヘラケズリの再調整が施されている 2b 類である。31はほぼ完形であり、体部はゆるやかに内弯し口縁部はわずかに外傾している。底部の切り離しは回転糸切りで再調整は施されていない 5b 類である。32~34 は全体の約 10%程度の口縁のみを残す破片である。

高台付杯(35) 35は全体の約 20%程度を残す破片である。器形は底部下半から体部にかけて強く屈曲し口縁部が開く杯部を有し、ハの字型を呈する高台を持つ。底部の切り離しは底部欠損のため不明であるが、高台は再調整後に貼り付けたものである。体部表面は凸凹がほとんど見られない滑らかな器面を呈している。胎土は密でやや砂粒を含み、焼成は良好である。

蓋(37) 37は II 区 B-9 グリッド L-I 層より出土した須恵器の蓋である。器形はつまみ部と天井の一部を残す破片である。つまみの器形は外周から滑らかにへこみ中央部がわずかに突起する扁平な宝珠形を呈している。蓋部はロクロ調整の後につまみを付けたものであり、外面下半には回転ヘラケズリが施されている。胎土は密で焼成は良好であり色調は青灰色を呈している。

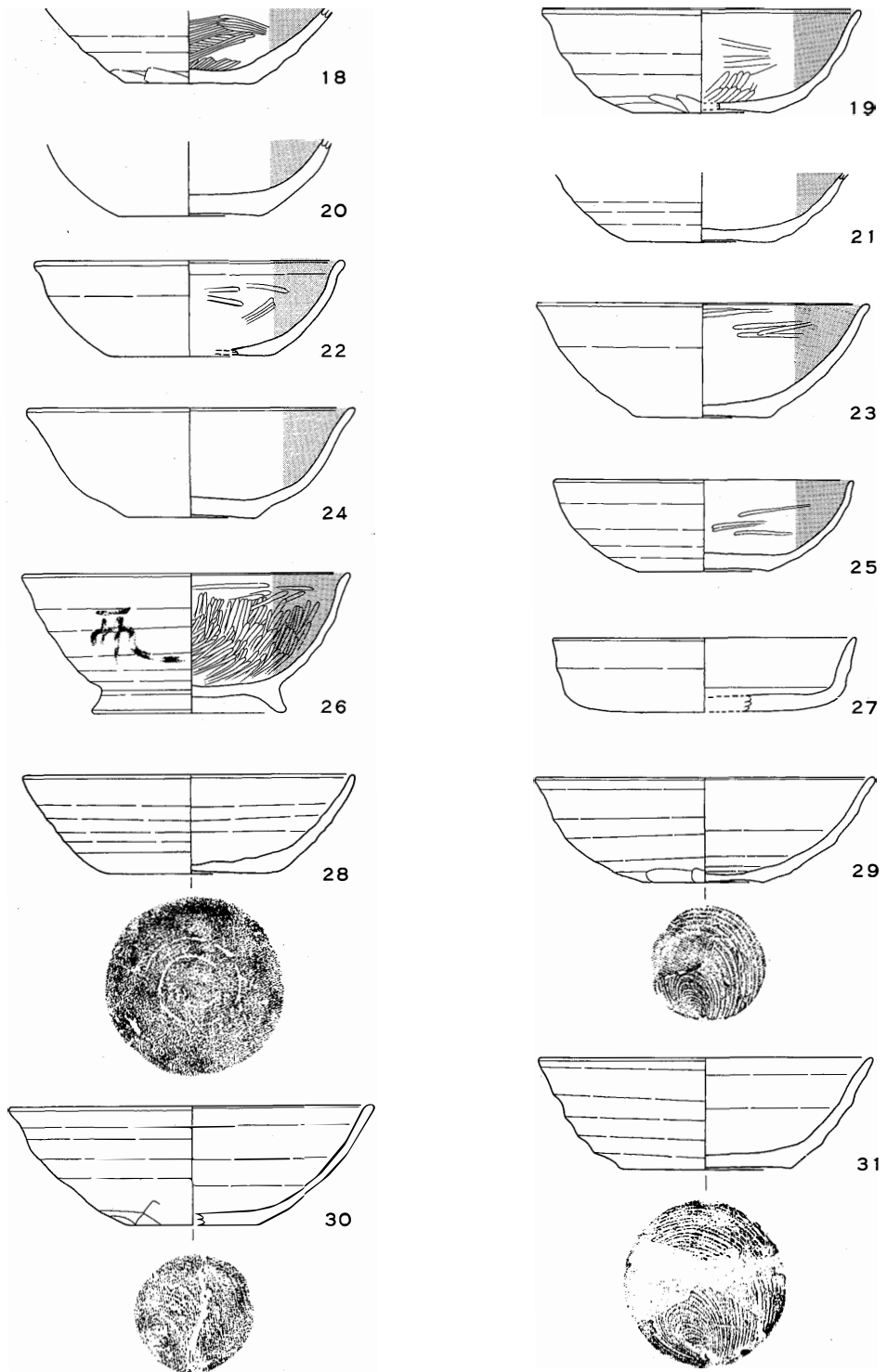
### 陶 器(第 192 図 38, 第 52 図版 1, 第 64 表)

灰 釉 陶 器(38) 38は II 区 L-I 層 D-23 グリッドより出土したもので、高台部から体部にかけて全体の約 60%程度の破片である。器形はゆるやかに内弯しながら口縁部に至る皿状を呈している。

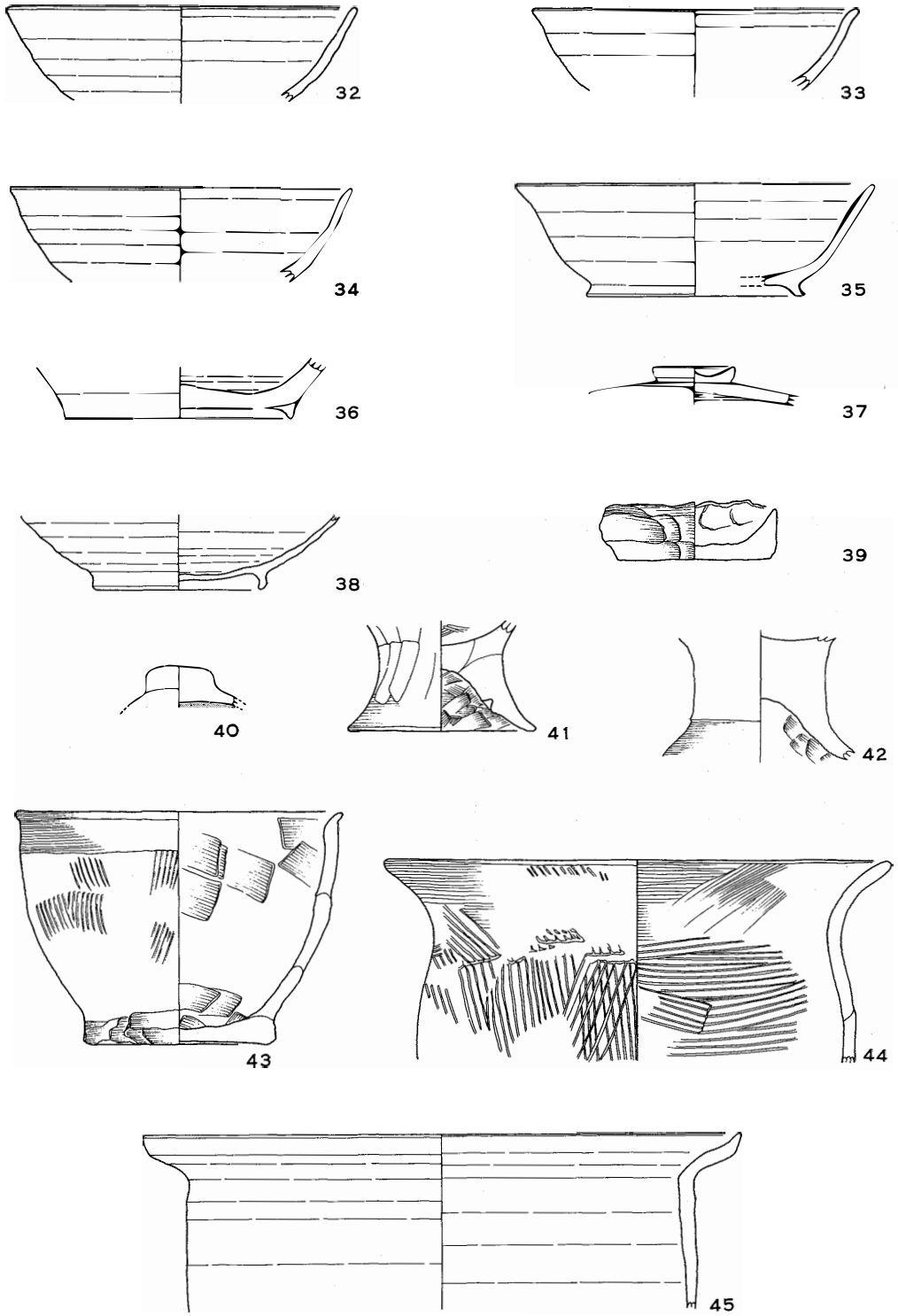


第190図 遺構外出土遺物 (1/3)

第 8 節 遺構外出土遺物



第191圖 遺構外出土遺物 (1/3)



第192図 遺構外出土遺物 (1/3)

第 8 節 遺構外出土遺物

高台は付け高台で体部内外面の周辺に淡緑色の灰釉がかけられており、外面にわずかな貫入の跡が観察できる。胎土は密で小白粒を微量に含む灰褐色の精良なもので焼成は固くしまっている。

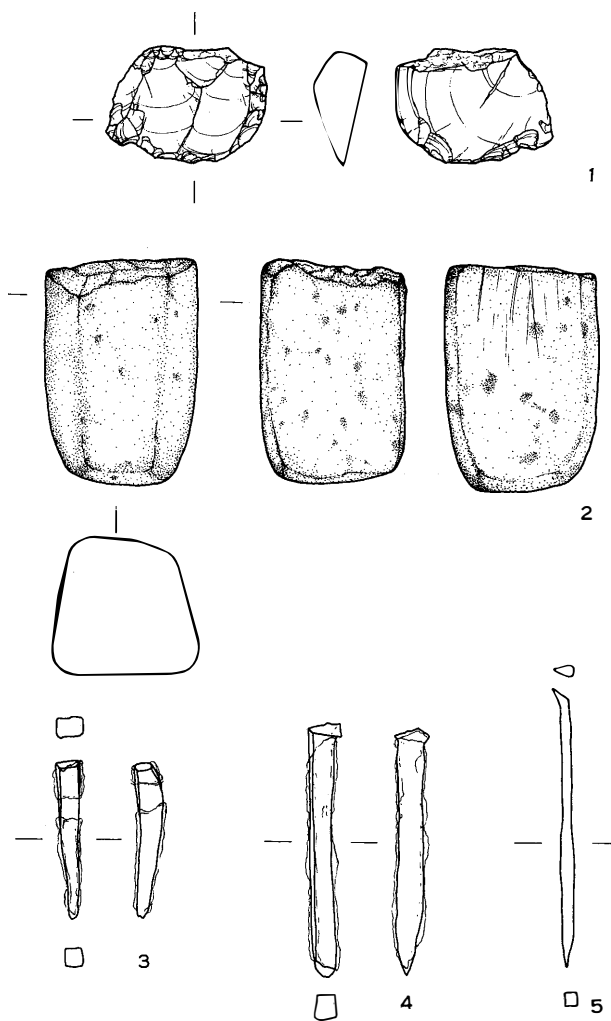
**石 器**(第 193 図 1・2, 第 52 図版 6・7)  
スクレイパー(1) 2は, II 区 L-Ic 層より出土している剥片石器である。刃部調整は表面の一边に細かい剥離が連続的に施してあり, 表面には主要剥離面を大きく残すのみで連続的な調整は施されていない。断面は縁辺部が片刃状を呈するサイドスクレイパーである。裏面上端部付近には, バルブの痕跡が観察できる。石質はチャート質である。長さ 4.2cm, 最大幅 3.0cm, 厚さ 1.4cm を測る。

**磨 石**(2) 1は, II 区 C-30 グリッドより出土している楕円形の自然礫である。礫の平坦部上面下面には磨面があり特に, 下面の磨面には浅い直線的な擦痕が観察でき, 礫の両側面には微量な磨面が認められる。石質は砂岩である。径は長さ 5.9cm, 幅 3.6cm, 重さ 158g である。

**鉄 製 品**(第 193, 194 図 3~7, 第 52 図版 9~13)

**釘**(3) 1は II 区より出土したものでほぼ完形品である。器形は頭部から四角形の体部をへて先端に至るもので, 等しい四角形の面が観察できる。

**鍔**(4・5) 2は II 区より出土したものでほぼ完形品である。器形は等しい四角形の面から先端部に至るものである。鍔上部には力が付えられた痕跡が観察できる。3は II 区 L-I 層より出土し



第 193 図 遺構外出土遺物 (1/2)

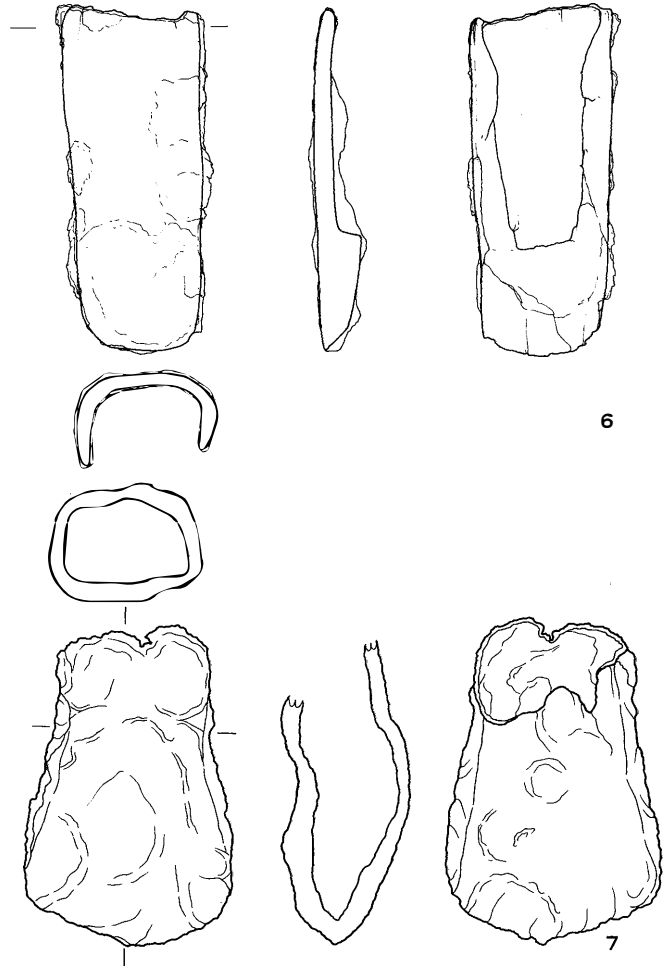


たものではほぼ完形品である。器形は等しい四角形の面を呈している。この鍔は長さが比較的長く刃の形状が明瞭に観察できる。

鉄製鉄斧(6) 1は地山上面より出土した長さ13.8cm、厚さ1.5cmの完形品である。最大幅は柄部付近にあり5.3cmを測る。柄部は約1.0cmの鉄板を曲げての折り返し、柄の押入部は約3.8cmの長さがあり刃先は片平刃で断面は楕円形を呈している。

袋状鉄製品(7) 2は出土位置が不明であり不完全な器形である。器形は先端部に向かって幅が広がる両刃状の形を呈し、体部内は空洞である。最大幅は先端部付近にあり、横断面は楕円形を呈している。

長さ12.4cm、幅7.9cm、厚さ9.7cmを測る。



第194図 遺構外出土遺物 (1/2)

(佐藤 友之)

第65表 湿地性遺物包含層出土自然遺物

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)						備 考		
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高	
	1	50-10	弥土生器	体部	Ⅱ区	地上	山面								
	2	50-11	弥土生器	体部	Ⅱ区	地上	山面								
	3	50-12	弥土生器	体部	Ⅱ区	地上	山面								

第 8 節 遺構外出土遺物

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)							備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径	高台高		
190	4	50-14	土師器	杯	Ⅱ区	L-I	14.8								内黒
190	5	50-13	土師器	杯	Ⅱ区	L-II	18.0				3.9				内黒
190	6		土師器	杯	Ⅱ区	L-I・II	17.0								内黒
190	7	50-15	土師器	杯	Ⅱ区		15.6								内黒
190	8		土師器	杯	Ⅱ区	L-I	15.1			8.3	4.25				内黒
190	9	51-1	土師器	杯	Ⅱ区	L-I	13.8			5.6	4.3				内黒
190	10	51-2	土師器	杯	Ⅱ区	L-II	15.9			6.9	5.3				内黒
190	11	51-3	土師器	杯	Ⅱ区	L-I	13.9			6.6	3.9				内黒
190	12		土師器	杯						5.7	4.4				内黒
190	13	51-4	土師器	杯	Ⅱ区		13.3			6.0	4.1				内黒
190	14	51-5	土師器	杯	Ⅱ区		14.0			5.8	4.9				内黒
190	15		土師器	杯	Ⅱ区		12.4			5.0	3.7				内黒
190	16	51-6	土師器	杯	Ⅱ区	L-II	13.1			5.2	4.1				内黒
190	17		土師器	杯	Ⅱ区					4.8					内黒
191	18		土師器	杯	Ⅱ区					5.6	3.1				内黒
191	19		土師器	杯	Ⅱ区		13.6			6.1	4.5				内黒
191	20		土師器	杯	Ⅱ区	地上 山面				6.0	3.1				内黒
191	21		土師器	杯	Ⅱ区	地上 山面				6.0					内黒
191	22		土師器	杯	Ⅱ区		13.1			6.8	4.1				内黒
191	23	51-7	土師器	杯			14.0			5.8	4.8				内黒
191	24	51-8	土師器	杯	Ⅱ区		14.2			5.6	4.7				内黒
191	25	51-9	土師器	杯	Ⅱ区	L-II	12.8			5.6	3.9				内黒
191	26	51-10	土師器	高台付杯	Ⅱ区		14.2			6.0	8.4	1.0			墨書
191	27		須恵器	杯	I区		12.8			3.2					内黒
191	28	51-11	須恵器	杯	Ⅱ区	L-I	14.2			7.2	4.2				内黒
191	29	51-12	須恵器	杯	Ⅱ区	地上 山面	14.4			5.1	4.5				内黒
191	30	51-13	須恵器	杯	Ⅱ区	地上 山面	15.5			5.7	5.1				内黒
191	31	51-14	須恵器	杯	Ⅱ区	地上 山面	14.2			7.3	4.8				内黒
192	32		須恵器	杯	Ⅱ区	L-I	15.5								内黒

図	番号	写真	名称	器形	位置	層位	法 量 (単位 cm)						備 考	
							口径	頸部径	胴径	底径	高さ	高台径		高台高
192	33		須恵器	杯	Ⅱ 区	L-I	14.4							内 黒
192	34		須恵器	杯	Ⅱ 区	L-I	15.2							内 黒
192	35		須恵器	高台付杯	Ⅰ 区		16.0			5.1	9.5	0.5		内 黒
192	36		須恵器	壺	Ⅱ 区	地上 山面			10.2					内 黒
192	37		須恵器	蓋	Ⅱ 区	L-I					3.6			内 黒
192	38	51-1	灰 釉 陶 器	高台付杯	Ⅱ 区	L-II					7.8	0.7		内 黒
192	39	52-3	土師器	手捏ね 土 器	Ⅱ 区	L-I	7.0		6.8	2.5				指 頭 痕
192	40	52-4	土師器	土師器蓋	Ⅱ 区						つまみ 径 3.05	つまみ 高 0.8		
192	41	52-5	土師器	高 坏	Ⅱ 区	地上 山面					8.4	3.7		内 黒
192	42	52-8	土師器	高 坏	Ⅰ 区									内 黒
192	43	52-2	土師器	鉢	Ⅱ 区		14.5		8.0	10.4				木 葉 痕
192	44		土師器	甕	Ⅱ 区	L-I-II	22.3							内 黒
192	45		土師器	甕			26.6		22.7		残存 7.8			内 黒

第66表 御山千軒遺跡出土遺物総数

No.	種 類	覆 土	床 面	床 直	掘り方 埋 土	焼土内	カマド	煙 道	Pit	周 溝	貯蔵穴	不 明	計	
1 住	土 師 器	145	11	14	30	1			147				348	
	須 恵 器	21	1	7	4	1			7				41	
	実測 済	土師器		1					1					2
		須恵器			1				1					2
2 a 住	土 師 器	333	78	8	106		23	10	169	9			756	
	須 恵 器	14			1		1		5				21	
	実測 済	土師器	6	2		2		3		4				17
		須恵器		1										1
		石製品				1								1
土製品					1								1	
2 b 住	土 師 器							4		9	1		14	
	実測 済	土師器						2					2	
3 住	土 師 器	20	50						110			16	196	
	須 恵 器	4	3										7	
	実測 済	須恵器	1	1								1	3	

第 8 節 遺構外出土遺物

No.	種 類	覆 土	床 面	床 直	掘り方 埋 土	焼土内	カマド	煙 道	Pit	周 溝	貯蔵穴	不 明	計
4 住	土 師 器	27											27
	須 恵 器	1											1
5 住	土 師 器	28											42
	須 恵 器	2	8	2	3				1				2
	実測済 土師器	2	1										3
8 住	土 師 器	89				55	19		1				164
	須 恵 器	9				1	1						11
	実測済 土師器	1					1						2
	実測済 須恵器						1						1
9 住	土 師 器	28		6	23								57
	須 恵 器	2											2
	実測済 土師器	1											1
	実測済 土製品	4											4
10 住	土 師 器	99		29			71						199
	須 恵 器	4		1			3						8
	実測済 土師器			7			1						8
	実測済 須恵器						1						1
11 住	土 師 器	55	20	56	8		2		3				144
	須 恵 器	1											1
	実測済 土師器	2		7									9
	実測済 石製品	1											1
13 件	土 師 器	118	3									3	124
	須 恵 器	9											9
	実測済 土師器	3											3
	実測済 鉄製品	1											1
14 住	土 師 器	110		32	19		3	2	137				303
	須 恵 器	2		5	2		2		7				18
	実測済 土師器	2		2			2		10				16
	実測済 須恵器			1									1
15 住	土 師 器	72			11				129		6		218
	須 恵 器	5							2				7
	実測済 土師器	1					1						2
16 住	土 師 器	19											19
	実測済 土師器	1											1
	実測済 須恵器	1											1
17 住	土 師 器	176	64	2	34				351				627
	須 恵 器	2	3	1	1				4				11
	実測済 土師器			1					5				6
	実測済 鉄製品								1				1

第3節 遺構と遺物

No	種類	覆土	床面	床直	掘り方土	焼土内	カマド	煙道	Pit	周溝	貯蔵穴	不明	計
18 住	土師器	19	1	4	19				60				103
	須恵器			1					1				2
	実測済	土師器	1	1		2			1				5
		須恵器	1										
19 住	土師器	4	2	2					1				9
	須恵器	3		1									4
	実測済	土師器	1	2	3							1	
土師器		41	2				4		12				59
21 住	土師器		1	1							1		3
	須恵器		1										1
22 住	土師器	64		14									78
	実測済	土師器	1		4								
24 住		土師器	56										
	須恵器	4											4
	実測済	土師器	1										
土師器		102											102
26 住	須恵器	1											1
	土師器	19					1						20
27 住	須恵器	1											1
	土師器	2	5				3						10
28 住	須恵器	1											1
	土師器	1											1
29 住	土師器	6	1										7
30 住	土師器		1										1
	実測済												
破片計		1,719	272	185	261	58	133	16	1,147	18	7	19	3,835
実測済計		26	12	27	4	—	10	2	22	—	1	2	106

第 8 節 遺構外出土遺物

第 67 表 御山千軒遺跡掘立柱建物跡出土遺物総数

No.	種 類	掘り方
1 号 建 物	土 師 器	58
	須 恵 器	4
2 号 建 物	土 師 器	8
3 号 建 物	土 師 器	1
5 号 建 物	土 師 器	2
6 号 建 物	土 師 器	5
	須 恵 器	3
破 片 計		81

第 69 表 御山千軒遺跡溝跡出土遺物総数

No.	種 類	覆 土	実測済
1 号 溝	土 師 器	19	
2 号 溝	土 師 器		1
	須 恵 器	2	
4 号 溝	須 恵 器	1	
5 号 溝	土 師 器	6	
6 号 溝	土 師 器	5	
8 号 溝	土 師 器	27	
9 号 溝	土 師 器	9	
破 片 計		69	
実 測 済 計		1	

第 70 表 御山千軒遺跡不明遺構出土遺物総数

No.	種 類	覆 土	木炭層	計
1 号 遺 構	土 師 器	62	16	78
	須 恵 器	3	1	4
	実測図 須恵器	1		1
3 号 遺 構	土 師 器	10		10
4 号 遺 構	土 師 器	2		2
5 号 遺 構	土 師 器	49		49
	須 恵 器	5		5
6 号 遺 構	土 師 器	1		1
破 片 数		132	17	149
実 測 済 計		1		1

第 68 表 御山千軒遺跡ピット出土遺物総数

No.	種 類	覆 土	実測済
P <sub>1</sub>	土 師 器	2	1
P <sub>4</sub>	土 師 器	10	
	須 恵 器	1	
P <sub>6</sub>	土 師 器	29	5
P <sub>15</sub>	土 師 器	1	
P <sub>16</sub>	土 師 器	8	
P <sub>27</sub>	土 師 器	37	
	須 恵 器	2	
P <sub>28</sub>	土 師 器	2	
P <sub>29</sub>	土 師 器	45	
	須 恵 器	1	
P <sub>31</sub>	土 師 器	15	1
	須 恵 器	2	
P <sub>32</sub>	土 師 器	2	
P <sub>34</sub>	土 師 器	17	
P <sub>35</sub>	土 師 器	4	1
P <sub>36</sub>	土 師 器	15	
P <sub>38</sub>	土 師 器	8	
P <sub>39</sub>	土 師 器	187	1
P <sub>43</sub>	土 師 器	1	
P <sub>45</sub>	土 師 器	26	
P <sub>47</sub>	土 師 器	28	
破 片 計		443	
実 測 済 計		9	

第 71 表 御山千軒遺跡井戸跡出土遺物総数

種 類	ℓ-1	ℓ-2	ℓ-3	ℓ-4	不明	計
土 師 器	32	80	74	13		199
須 恵 器		1	10			11
実測済	土師器		2		2	4
	須恵器		1			1
破 片 計	32	81	84	13		211
実 測 済 計			3		2	5

第72表 御山千軒遺跡湿地性遺物包含層出土遺物総数

No	種類	L-IV	L-V	L-VI	L-VII	L-VIII	L-IX	L-X	L-XI	不明	計	
II 区	土師器	302	381	252	2,211	1,775	353	21	2	—	5,297	
	須恵器	18	80	41	136	188	35	—	—	—	498	
	実測済	土師器	—	13	1	36	64	28	5	1	3	151
		須恵器	—	8	4	24	17	6	3	—	2	64
破片計		320	461	293	2,347	1,963	388	21	2	—	5,795	
実測済計		—	21	5	60	81	34	8	1	5	215	

第73表 御山千軒遺跡遺構外出土遺物総数出土土器

No	種類	L-1a	L-1b	地上面	不明	計	No	種類	L-1a	L-1b	地上面	不明	計		
I 区	土師器	733		89		822	実測済	磨石				1	1		
	須恵器	93				93		石器		1				1	
	弥生式土器			3		3		釘					1	1	
	実測済	土師器			4	1		5	楔		2				2
		須恵器	1	1	1	2		5	鉄斧				1		1
II 区	土師器	2,561	449	427	95	3,532	袋状不明鉄製品					1	1		
	須恵器	406	102	83	3	594	III 区	須恵器	24				24		
	近世陶器	24				24	陶器	8					8		
	実測済	土師器	5	7	8	19	39	区不明	須恵器	30				30	
		須恵器		2	4	2	8	破片計	3,879	551	602	98	5,130		
	灰釉陶器		1			1	実測済計	6	14	18	27	65			

第74表 遺構外出土土器一覽表

種類	土師器片	須恵器片	弥生片	—	—	—	陶器片	総計
	実測済土師器	実測済須恵器	—	実測済石製品	実測済鉄製品	実測済土製品	実測済陶器	
計	14,251	1,427	3	—	—	—	32	15,713
	303	91	—	4	7	7	1	412

## 第4章 考 察

### 第1節 土 器

#### 遺構に伴う土器

遺構に伴う土器は大きく非ロクロの土師器杯を有するもの、ロクロ調整土師器杯を有するもの、その両者を伴うものに分けることができる。今、仮に最初のをⅠ群、次のものをⅢ群、最後のものはその中間的様相が考えられるのでⅡ群としておく。

Ⅰ群は18・26号住居跡、Ⅱ群は2a号住居跡、Ⅲ群は1・3・4・14・15・17・21号住居跡出土のものがそれである。Ⅰ群土器のうち18号住居跡の土師器杯は床面出土のものがⅠ-2b-C<sub>2</sub>-(ac-b)類、掘り方出土のものはⅠ-3c-D<sub>4</sub>-(ca-b)類で、共に内外両面に段を有する丸底の杯である。但し、後者のものは必ずしも住居跡に伴うかは問題がある。それに対し、26号住居跡出土の土師器杯は1点であるがⅢa-4-A<sub>1</sub>-(※-b)類、つまり非ロクロの平底杯である。Ⅰ群でもこのように土師器杯の形態が異なるので、前者をⅠa群、後者をⅠb群としておく。

Ⅱ群土器である2a号住居跡出土のものは非ロクロで平底風のⅡa-4-C<sub>1</sub>-(※-b)類1点、無段丸底のもの3点とロクロ調整土師器杯3b類1点が伴っている。また、内外面共に黒色処理の土師器蓋も伴う。なお、Ⅰb群の杯はⅡ群に見られる非ロクロ平底風杯との類似性も考えられ、Ⅰb群としたものがⅡ群のセットの一部をなす可能性は否定できない。

Ⅲ群土器では土師器杯の技法が判るものは1・14・17・21号住居跡より出土している。1・14号住居跡は5b類、17号住居跡は2b類、21号住居跡は4b類を出土しており、各住居跡とも土師器杯の切り離しは回転糸切りによるものである。また、1号住居跡では5b類の須恵器杯を伴っているが、これらは後述する湿地性遺物包含層Ⅰ-V~Ⅸ出土のものに相当すると考えられる。3号住居跡は5b類の須恵器杯、4号住居跡は掘り方よりロクロ調整の土師器杯破片、5号住居跡はロクロ調整甕、15号住居跡はロクロ調整土師器杯が伴っており、Ⅲ群と考えられるものである。

また、2b・19・22号住居跡出土土器は非ロクロの土師器甕のみであるが、2a号住居跡を拡張したもので、2b号住居跡はⅡ群の時期かその直前と考えられる。19・22号住居跡は頸部がくびれ、口縁が外反し、外面にハケメのある甕が出土している。その他に19号住居跡では床面直上層より有段丸底杯のⅠ-3c-C<sub>2</sub>-(ca-b)類が出土しており、このことからⅠa群の可能性が考えられる。



第75表 御山千軒遺跡出土土器一覧表

器形 住居跡	杯								甕								小形甕				塊				鉢				備 考					
	非 □ ク □				□ ク □				非 □ ク □				□ ク □				床 面		床 直		覆 土		掘り方		床 面		床 直			覆 土		掘り方		
	床 面	床 直	覆 土	掘り方	床 面	床 直	覆 土	掘り方	床 面	床 直	覆 土	掘り方	床 面	床 直	覆 土	掘り方	床 面	床 直	覆 土	掘り方	床 面	床 直	覆 土	掘り方	床 面	床 直	覆 土	掘り方		床 面	床 直	覆 土	掘り方	
1号住					5b類 (須)5b類								Ie-※-※- (h-h)																				床直 (須)有段丸底杯	
2a号住	IIa-4-C1- (※-b) ※-3f-D4- (※-b) ※-4-B1- (※-b) ※-4-B- (※-b)		I-3f-D2- (ca-b) IIa-3c-D2- (ac-b) IIIb-4-C1- (ac-b) ※a-4-C1- (ac-b)		3b類				Id-※-※- (da-d) ※-5a-C2- (a-ad)	Id-※-※- (da-d)	Id-※-※- (d-a)									※-3c-C1- (a-a)												P8, 土師器蓋 床面 (須)高台付杯 床下 甕I-※-※-(c-b)		
2b号住									※-5a-A1- (da-ad)											※-1a-A1- (a-a)														
3号住					(須)5b類																											覆土 (須)蓋		
5号住											※-7a-B1- (ad-ad)									※-2a-C3- (f-f)														
8号住					(須) 2か4類										※-1a-A3- (g-a)																			
9号住																												I-3-※- (c-b)				覆土 甕I-2-B1-(cda-ab)		
10号住					4b類 2類				Id-※-※- (d-※)	※-5a-B1- (dca-da)																		II-1-F1- (ac-b)				カマド (須)高台付杯		
11号住		I-4-E1- (ac-b)								Ib-※-※- (b-a) ※-5a-C1- (da-ad) ※-1c-C2- (da-a)										IIb-※-※- (dc-a)	IIIc-1a-C2- (da-a)										I-1-C1- (da-b)			覆土 甕II-1-C1-(c-d) 床直 甕※-5a-F1-(a-a)
13号住						5b類 5類																												
14号住					5b類 5b類 5b類		5b類 5類									(須)Ib-※- ※-(c-df)	※-1a-B3- (h-b)															床直 高台付杯2点 カマド 甕		
15号住															※-※-※- (h-h)																	カマド ロクロ杯		
16号住			IIa-4-A1- (※-b)																													覆土 (須)蓋		
17号住					2b類										※-1a-C3- (h-h)							※-3a-B1- (a-a)												
18号住	I-2b-C2- (ac-b)			I-3c-D4- (ca-b)		(須)5b類					Ic-※-※- (a-a)																							
19号住		I-3c-C2- (ca-b)							※-7a-B2- (ad-a)	※-2※-D2- (da-a)												I-1b-E1- (c-※)							※-2-D2- (da-a)					
21号住					4b類 (須)4c類																											床直 ロクロ甕 破片		
22号住											※-5a-C1- (da-a)											Ia-※-※- (da-a)									床直 壺 覆土 壺形ミニチュア土器			
26号住			IIa-4-A1- (※-b)																															
30号住									Id-※-※- (a-a)																									



湿地性遺物包含層出土土器

土器のあり方を見るとロクロ調整の杯が主体として出土しているL-V~IXと、ロクロ調整のものをまったく含まないL-Xとに大きく分けることができる。L-V~IXでもL-Vに2点、L-VIIに4点、L-VIIIに5点、L-IXに5点と少量づつ非ロクロの杯を含んではいるが、これらの層の主体となるロクロ調整杯とは後述するように年代的には離れたもので、共存するとは考えられない。従って、L-Xよりの混入と考えることにする。

土 師 器 杯

L-V~IXのロクロ土師器杯を技法別に分類すると第77表のようになる。全体として見ると、1類が9点と少なく3.6%にすぎない。また、各層別に見るとL-V 8.6%、L-VI 0%、L-VII 3.2%、L-VIII 2.6%、L-IX 4.5%と他の技法を有するものに比べ少なく

第77表 ロクロ土師器杯類形別個体数一覧表

	1類	2(2b)類	4b類	5b類	計	2・4b・5b類 $\chi^2$ 検定
L-V	3	12(3)	8	12	35	$\chi^2(2, 0.05)=5.99 > \chi^2=0.89$
L-VI		8	6	7	21	5.99 > 0.29
L-VII	3	27(13)	24	39	93	5.99 > 4.2
L-VIII	2	24(6)	24	28	78	5.99 > 0.52
L-IX	1	6(2)	6	9	22	5.99 > 0.85
計	9	77(24)	68	95	249	$\chi^2(2, 0.05)=5.99 > \chi^2=4.76$

(破片を含む)

この時期の技法のセットを表わすものかどうかには問題がある。混入と考えられる非ロクロの杯には国分寺下層式と考えられるものもあるが、それを主体とする層位はまったく見られない。ただ、前の章で述べたごとくL-IXとL-Xの間には堆積の断絶があり、L-Xの一部も侵食を受けているので、その時点で国分寺下層式・1類を主体とするロクロ土師器杯の層が消失してしまった可能性も考えられる。さらに1類のロクロ土師器杯を主体とするものは、4b・5b類を主体とするものより先行<sup>註55</sup>すると考えられるものなので、各層に見られる少量の1類は混入の可能性が強いものである。

次に、混入と考えられるものを除いた2・4b・5b類の出現数について各層ごとに調べてみることにする。仮説 $H_0$ :「これらの杯は等しい数の2・4b・5b類から構成される。」とした場合、この土師器杯母集団は $k=3$ 個体のグループより成立していることになる。この場合2・4b・5b類の理論出現率は1:1:1となる。このようにして $\chi^2 = \sum_{i=1}^k \frac{(f_i - F_i)^2}{F_i}$ の公式で危険率5%の適合度検定を行うとL-V  $\chi^2(2, 0.05)=5.99 > \chi^2=0.89$ , L-VI  $\chi^2(2, 0.05)=5.99 > \chi^2=0.29$ , L-VII  $\chi^2(2, 0.05)=5.99 > \chi^2=4.2$ , L-VIII  $\chi^2(2, 0.05)=5.99 > \chi^2=0.52$ , L-IX  $\chi^2(2, 0.05)=5.99 > \chi^2=0.85$ となる。この結果からL-V~IXにおけるロクロ土師器杯の技法別出現傾向は、仮説 $H_0$ の分布に従う母集団からの任意標本であると認められる。また、L-V~IXの2・4b・5b類全体についても $\chi^2(2, 0.05)=5.99 > \chi^2=4.8$ と同様な結果が得られている。

第 1 節 土 器

第 78 表 独立性検定理論度数

	2 類	4 b 類	5 b 類
L-V	10.3	9.1	12.7
L-VI	6.7	6.0	8.3
L-VII	28.9	25.5	35.6
L-VIII	24.4	21.5	30.1
L-IX	6.7	6.0	8.7

$$\text{理論度数 } F_{ij} = \frac{a_i b_j}{n}$$

第 79 表 ロクロ土師器杯層別口径関連数値

	n	$\bar{x}$	$\sum x^2$	$\delta = \sqrt{\frac{\sum x^2}{n} - \bar{x}^2}$
L-V	8	13.7	1510.17	0.859
L-VII	27	14.1	5406.17	1.000
L-VIII	36	14.5	7614.46	1.193
L-IX	17	15.4	4012.61	0.864

層位と 2・4b・5b 類の出現率の関係を探るため、層位と類別の独立性の検定を危険率 5%で行うことにする。今仮に、層位と類別の出現率を独立であるとして(仮説 $H_0$ )理論度数  $F_{ij} = \frac{a_i b_j}{n}$  を計算してみると第 78 表のようになる。また、各観察度数・理論度数とも 5 以上であり  $\chi^2$  は  $(k-1)(l-1)$  の分布をすると考えられるので  $\chi^2(8, 0.05) = 15.51$  となる。今、この理論度数・観察度数を基に  $\chi^2 = \sum_{ij} \frac{(f_{ij} - F_{ij})^2}{F_{ij}}$  を計算すると  $\chi^2 = 1.46 < \chi^2(8, 0.05) = 15.51$  となり、仮説  $H_0$  は成立し、層位によって 2・4b・5b 類の出現の変化は認められないといえる。

以上 2 つの検定の結果 L-V~IX における 2・4b・5b 類の出現率は変化が見られず、各層共に 2・4b・5b 類を同じ割合で含んでいるといえる。従って L-V~IX の土師器杯は切り離し・再調整技法的には同じものと考えられる。

器形について見ると、まず各層位ごとの口径の変化が目玉に留まる(第 195 図)。各層ごとに  $n$  (資料数)、 $\bar{x}$  (平均値)、 $\sum x^2$  (口径<sup>2</sup>の和)、 $\delta$  (標準偏差)についてまとめると第 79 表

のようになる。このことを基に、L-V・VII、L-VII・VIII、L-VIII・IX、L-V・IX について自由度  $F(n_1 - 1, n_2 - 1, \alpha = 0.05)$  として  $F = \frac{\frac{n_1 s_1^2}{(n_1 - 1)}}{\frac{n_2 s_2^2}{(n_2 - 1)}}$  ( $S$  は各層の  $\delta$ ) の検定を行うと、それぞれ  $F(7, 26, 0.05) = 2.82 > F = 0.814$ ,  $F(26, 35, 0.05) = 2.14 > F = 0.712$ ,  $F(35, 16, 0.05) = 2.57 > F = 1.854$ ,  $F(7, 16, 0.05) = 3.34 > F = 1.075$  となり分散に有意が認められない。

そこで、 $t = \frac{|\bar{x}_1 - \bar{x}_2|}{\sqrt{\frac{(n_1 s_1^2 + n_2 s_2^2)(n_1 + n_2)}{n_1 n_2 (n_1 + n_2 - 2)}}}$ 、自由度  $(n_1 + n_2 - 2)$  として危険率 5% の検定を行う。その結果 L-V と L-VII では  $t(33, 0.05) = 2.042 > |t| = 0.995$ , L-VII と L-VIII では  $t(61, 0.05) = 2.00 < |t| = 2.302$ , L-VIII と L-IX では  $t(51, 0.05) = 2.021 < |t| = 2.739$ , L-V と L-IX では  $t(23, 0.05) = 2.069 < |t| = 4.422$  となり、L-V と L-VII の間には有意差が認められないが、他はすべて有意差が認められる。(なお、この場合 L-VII は数が少なく、L-VII の最大径のもの 1 点は飛離れており例外と考えられるので除外してある。)従って、御山千軒遺跡湿地性遺物包含層のロクロ土師器杯は下層から上層に行くに従い、口径が小さくなる傾向が認められる。

また、口径を 1 とした場合の底径を表わす  $b/a$  について各層ごとに  $\bar{x}$ ,  $\sum x^2$ ,  $\delta$  をまとめると第 80 表のようになる。このことを基に L-V・VII, L-VII・VIII, L-VIII・IX, L-V・IX について自由度  $F(n_1 - 1, n_2 - 1, 0.05)$  として  $F$  検定を行うと、それぞれ  $F(7, 24, 0.05) = 2.87 > F = 0.64$ ,  $F(24, 29, 0.05) = 2.15 > F = 1.01$ ,  $F(29, 10, 0.05) = 3.39 > F = 0.74$ ,  $F(7,$

10, 0.05) = 3.95 > F = 0.523 となり、分散に差が認められない。

そこで自由度 ( $n_1 + n_2 - 2$ ) として危険率 5% の t 検定を行うと、L-V・VII,  $t(31, 0.05) = 2.042 > t = 0.12$ , L-VII・VIII,  $t(53, 0.05) = 2.021 > t = 0$ , L-VIII・IX,  $t(39, 0.05) = 2.042 > t = 0.26$ , L-V・IX,  $t(17, 0.05) = 2.110 > t = 0.5$  となり、各層の  $b_a$  の分布には有意差は認められない。

さらに、口径を 1 とした場合の高さを表わす  $b_a$  について各層ごとに  $\bar{x}$ ,  $\Sigma x^2$ ,  $\delta$  をまとめると第 81 表のようになる。 $b_a$  と同様に検定を行うと L-V・VII,  $F(7, 24, 0.05) > F = 1.25$ , L-VII・VIII,  $F(24, 29, 0.05) > F = 2.15$ , L-VIII・IX,  $F(29, 10, 0.05) > F = 1.13$ , L-V・IX,  $F(7, 10, 0.05) > F = 1.25$  となり分散に有意差は認められない。そこで  $b_a$  と同様にして t 検定を行うと、おのおの  $t(31, 0.05) > t = 0.001$ ,  $t(53, 0.05) > t = 0.0007$ ,  $t(39, 0.05) > t = 0.0017$ ,  $t(17, 0.05) > t = 0.003$  となり、各層の  $b_a$  の分布には有意差は認められない。

また、 $b_a = x$ ,  $b_a = y$  として第 85~89 の数値を用い  $r = \frac{1}{n} \sum_{i=1}^n \left( \frac{x_i - \bar{x}}{S_x} \right) \left( \frac{y_i - \bar{y}}{S_y} \right)$  の式により  $b_a$  と  $b_a$  の相関係数を求めてみる。(公式は  $r = \frac{n \Sigma xy - \Sigma x \cdot \Sigma y}{\sqrt{n \Sigma x^2 - (\Sigma x)^2} \sqrt{n \Sigma y^2 - (\Sigma y)^2}}$  と変形して用いる。)

L-V ( $n=8$ )  $r = -0.46$ , L-VII ( $n=25$ )  $r = -0.24$ , L-VIII ( $n=30$ )  $r = 0.17$ , L-IX ( $n=11$ )  $r = -0.74$  となる。このことから、L-V: 負の相関あり, L-VII: 弱い負の相関あり, L-VIII: 相関なし, L-IX: 弱い負の相関が認められる。しかし、相関関係が認められるのは資料の少ない層で、多くなるに従い相関が弱くなり、資料数の一番多い L-VIII では相関が認められない。これらのことを考慮すると、各層とも必ずしも相関があるとはいえない。

$b_a \cdot b_a$  とも各層位の分布傾向が変わらず、相関も認められないとすれば、 $b_a \cdot b_a$  により規定される杯のプロポーションも各層とも変化がなく、口径等により器形の変化もしめしていないといえよう。杯体部の丸味を示す  $b_a$  について見ると、各層ごとの階級別出現度数は第 83 表のようになる。これについて理論度数  $F_{ij} = \frac{a_i \cdot b_j}{n}$  を計算すると第 84 表のようになる。

第 80 表 ロクロ土師器杯層位別  $b_a$  関連数値

	n	$\bar{x}$	$\Sigma x^2$	$\delta = \sqrt{\frac{\Sigma x^2}{n} - \bar{x}^2}$
L-V	8	0.44	2.380	0.32
L-VII	25	0.42	4.522	0.42
L-VIII	30	0.42	5.474	0.42
L-IX	11	0.46	2.304	0.46

第 81 表 ロクロ土師器杯層位別  $b_a$  関連数値

	n	$\bar{x}$	$\Sigma x^2$	$\delta = \sqrt{\frac{\Sigma x^2}{n} - \bar{x}^2}$
L-V	8	0.34	0.935	0.34
L-VII	25	0.32	2.639	0.32
L-VIII	30	0.34	3.428	0.34
L-IX	11	0.31	1.082	0.31

第 82 表 ロクロ土師器杯  $b_a \cdot b_a$  相関関係数値

	$\Sigma x$	$\Sigma x^2$	$\Sigma y$	$\Sigma y^2$	$\Sigma xy$
L-V	3.48	2.389	2.73	0.935	1.189
L-VII	10.56	4.522	8.11	2.639	3.420
L-VIII	12.73	5.474	10.11	3.428	4.295
L-IX	5.01	2.304	3.44	1.0824	1.564

第83表 ロクロ土師器杯層位別  
 $\beta/\alpha$ 関連数値

階級 層位	0.05~	0.075~	0.1~	0.125~	0.15~ 0.175	計
L-V	0	2	4	2	0	8
L-VII	0	7	12	4	2	25
L-VIII	1	6	15	8	0	30
L-IX	0	1	8	2	0	11
計	0	16	39	16	2	74

第84表 独立性検定理論度数

階級 層位	0.05~	0.075~	0.1~	0.125~	0.15~ 0.175
L-V	0.1	1.7	4.2	1.7	0.2
L-VII	0.3	5.4	13.2	5.4	0.7
L-VIII	0.4	6.5	15.8	6.5	0.8
L-IX	0.1	2.4	5.8	2.4	0.3

$$(F_{ij} = \frac{a_i \cdot b_j}{n})$$

ものと考えられる。器形について見た場合は、その形態が各層位間でほとんど変化が見られず、口径のみが下層から上層に向かって小形化して行く傾向を示している。

L-Xは非ロクロ丸底のみで構成される。その内有段のもの5点、無段のもの1点である。有段のものは段が中位~低位にあり、口縁は外反または外傾するI-2c-C<sub>2</sub>-(ac-b)類、I-3c-C<sub>2</sub>-(ac-b)類で、内外両面に段を有する内黒のもので、栗罎式に相当する杯である。また、無段のものについては、二本松市矢ノ戸遺跡より口縁が外反しないもの有段の杯と伴って出土しており、このL-Xに見られるIb-4-D<sub>1</sub>-(ac-b)類も有段の杯と共伴すると考えられる。

### 土 師 器 甕

L-V・VIからはロクロ調整で、頸部が「く」形に外反するもの1点づつが出土している。L-VIのものは体部下半の内・外面にナデが加えられている。L-VIIのものは体部下半~底部のみで、内外面共にナデが見られる非ロクロと考えられるI-5c-※-(a-a)類である。L-VIIIではロクロ調整で口唇部が立ち上がるもの、非ロクロで底部が大きく、頸部に段のないId-5a-C<sub>1</sub>-(ad-a)類、体部が球形を呈するIVa-1c-C<sub>1</sub>-(ad-a)類、小形で頸部が大きく段状にくびれるId-8a-B<sub>2</sub>-(ac-a)類が出土している。L-IXでは長胴形の体部~底部のIIIc-5-※-(a-a)類、体部~口縁部のもので頸部が軽く外反する※-5a-B<sub>1</sub>-(ad-ad)類と底部~体部下半の外面にケズリが見られるものが出土している。L-Xは非ロクロで頸部に段を有し、体部外面にハケメのある※-5a-B<sub>2</sub>-(ad-a)類がある。

ここでは自由度(4-1)・(5-1)=12となり、 $\chi^2(12, 0.05)=21.0$ となる。このデータを  $\chi^2 = \sum \frac{(f_{ij} - F_{ij})^2}{F_{ij}}$  の式を用いて検定すると  $\chi^2 = 8.4 < \chi^2(12, 0.05) = 21.0$  となり、層位と出現度数は無関係である。つまり、層位により出現度に差は見られないということが知られる。

以上の結果から湿地性遺物包含層出土ロクロ土師器杯はL-V~IXとも切り離し・再調整技法的には、ほぼ同じ量の2・4b・5b類により構成されており、内面はミガキ・内黒のものであることが知られる。また、切り離し技法について見れば、理論的には4b類と5b類とで全体の%が回転系切りということになるが、2類には2b類もあり、再調整により切り離し技法が不明なものにも回転系切りが含まれていると考えられるので、切り離し技法は、ほとんどが回転系切りによる

これらの甕は、数が少ないので形態組成についてうんぬんすることはできないが、技法別に見るとL-V・VIはロクロ調整の甕のみ、L-VII・IX・Xは非ロクロの甕のみ、L-VIIIはロクロ調整と非ロクロの甕が共伴している。このうちL-Vの杯はロクロ調整のものであり、L-VIも層の位置、須恵器杯からして同様のことが言える。L-Xの杯は有段丸底を主体とし、ロクロ調整のものを含まない。従って、L-V・VI・Xの共伴関係は技法的に見て問題はないと考えられる。L-VIIIの場合は、ロクロ調整と非ロクロのものが共伴しているが、杯はロクロ調整のものでロクロ調整の53(第182図)は問題がない。非ロクロのものではId-5a-C<sub>1</sub>-(ad-a)類の48(第182図)と類似のものが、宮城県白石市青木遺跡<sup>註56</sup>でロクロ調整の杯と伴っており、ロクロ調整の杯と共伴する可能性がある。IVd-1c-C<sub>1</sub>-(ad-a)類の49(第182図)、Id-8a-B<sub>2</sub>-(ac-a)類の50(第182図)は、ロクロ調整の杯と共伴した例は見られない。これらに類似したものは、栗囲式に伴う例があり、L-Xのものが混入したものと考えられる。L-IXの長胴形のものもロクロ調整に伴った例はなく、栗囲式の甕の形態をとっており、L-Xからの混入と考えられる。その他のものの共伴関係は不明である。

#### 須 恵 器 杯

須恵器杯は切り離し・再調整技法的に見ると、2・4b・5b類があるが、L-V~IXの出現度は第85~88表のようになる。各層ごとの資料数が少ないため統計処理は行わないが、各層とも5b類が主体となっていることが知られる。また、2b・4b類も加えた回転糸切りによるものが大部分を占め、残りの少数の杯も2類であり、切り離しは回転糸切りによる可能性が高い。このことから、L-V~IXの須恵器杯の切り離し技法は、回転糸切りによるものと考えられる。

須恵器杯の場合、各層位別の資料数が少ないので、各層間についての統計処理は行わず、全体の器形について、L-V~IX出土のロクロ土師器杯と比較してみたい。

口径について見ると須恵器杯は、 $n$ (資料数)=51、 $\Sigma x$ (口径の和)=726、 $\bar{x}$ (平均値)=14.24、 $\delta$ (標準偏差)=0.75、土師器杯は $n=71$ 、 $\Sigma x=999.7$ 、 $\bar{x}=14.08$ 、 $\delta=0.87$ となる。 $F = \frac{\frac{n_1 s_1^2}{n_1 - 1}}{\frac{n_2 s_2^2}{n_2 - 1}}$  (Sは各層の $\delta$ )式で検定を行うと $F = 0.75 < F(50, 70, 0.05) = 1.74$ となり母集団がともに正規分布に従うと考えられる。そこで、 $t = \frac{|\bar{x}_1 - \bar{x}_2|}{\sqrt{\frac{n_1 s_1^2 + n_2 s_2^2}{n_1 + n_2 - 2} \cdot \frac{n_1 + n_2}{n_1 n_2}}}$ の式で検定を行うと $t = 0.03 < t(120, 0.05) = 1.98$ となる。この結果からL-V~IX出土の須恵器杯とロクロ土師器杯の口径は、母平均に差はないと考えられる。

$b_a$ については、須恵器杯が $n=46$ 、 $\Sigma x=19.95$ 、 $\bar{x}=0.43$ 、 $\delta=0.039$ 、ロクロ土師器杯は $n=72$ 、 $\Sigma x=30.97$ 、 $\bar{x}=0.43$ 、 $\delta=0.048$ となる。口径と同様に $F \cdot t$ 検定を行うと、 $F = 0.67 < F(45, 72, 0.05) = 1.47$ 、 $t = 0 < t(116, 0.05) = 2.00$ となる。 $b_a$ は須恵器杯が $n=46$ 、 $\Sigma x=14.86$ 、 $\bar{x}=0.32$ 、 $\delta=0.028$ 、ロクロ土師器杯は $n=72$ 、 $\Sigma x=23.9$ 、 $\bar{x}=0.33$ 、 $\delta=0.026$ となる。そして、 $F = 1.17 < F(45, 71, 0.05) = 1.47$ 、 $t = 0.07 < t(116, 0.05) =$

第 1 節 土 器

第 85 表 L - V 出土杯形態数值一覽表

図	番号	名称	分類	$b/a$	$h/a$	$\alpha$	$\beta$	$\beta/\alpha$
117	1	土師器	1 類	0.44	0.35	5.85	0.80	0.14
117	2	土師器	1 類	0.47	0.35	6.55	0.75	0.11
117	3	土師器	2 類	0.46	0.37	5.30	0.75	0.14
117	4	土師器	2 類	0.41	0.33	6.20	0.70	0.11
117	5	土師器	2b 類	0.44	0.30	6.05	0.65	0.11
117	6	土師器	5b 類	0.45	0.36	5.90	0.60	0.10
117	7	土師器	——	0.43	0.32	5.50	0.50	0.09
117	9	土師器	——	0.38	0.35	6.50	0.60	0.09

図	番号	名称	分類	$b/a$	$h/a$	$\alpha$	$\beta$	$\beta/\alpha$
118	13	須惠器	2b 類	0.38	0.35	6.25	0.70	0.11
118	14	須惠器	4b 類	0.43	0.35	6.10	0.75	0.12
118	15	須惠器	5b 類	0.39	0.31	5.80	0.75	0.13
118	16	須惠器	5b 類	0.46	0.29	5.80	0.60	0.10
118	17	須惠器	5b 類	0.50	0.28	5.95	0.60	0.10
118	18	須惠器	5b 類	0.42	0.35	6.70	0.70	0.10
118	19	須惠器	5b 類	0.42	0.31	6.05	0.70	0.12
118	20	須惠器	5b 類	0.41	0.36	6.20	0.65	0.10
118	21	須惠器	5b 類	0.42	0.31	5.85	0.75	0.13

第 86 表 L - VI 出土杯形態数值一覽表

図	番号	名称	分類	$b/a$	$h/a$	$\alpha$	$\beta$	$\beta/\alpha$
119	2	須惠器	2 類	0.38	0.25	6.55	0.85	0.13
119	3	須惠器	5b 類	0.43	0.33	6.10	0.65	0.11
119	4	須惠器	5b 類	0.42	0.33	6.60	0.75	0.11

第 87 表 L - VII 出土杯形態数值一覽表

図	番号	名称	分類	$b/a$	$h/a$	$\alpha$	$\beta$	$\beta/\alpha$
120	2	土師器	2 類	0.48	0.35	5.70	0.50	0.09
120	3	土師器	2 類	0.39	0.36	6.90	0.85	0.13
120	4	土師器	2 類	0.44	0.35	5.90	0.80	0.14
120	5	土師器	2b 類	0.39	0.34	6.50	0.60	0.09
120	6	土師器	2b 類	0.45	0.30	5.70	0.65	0.11
120	8	土師器	4b 類	0.37	0.33	7.00	1.20	0.17
120	9	土師器	4b 類	0.46	0.33	5.80	0.70	0.12
120	10	土師器	4b 類	0.41	0.32	5.80	0.75	0.13
121	12	土師器	4b 類	0.41	0.31	5.90	0.70	0.12
121	13	土師器	4b 類	0.32	0.33	6.80	0.70	0.10
121	14	土師器	2or 4b 類	0.43	0.29	5.70	0.70	0.12
121	15	土師器	5b 類	0.51	0.30	5.15	0.40	0.08
121	16	土師器	5b 類	0.31	0.33	7.05	1.10	0.16
121	17	土師器	5b 類?	0.49	0.33	6.10	0.70	0.11
121	18	土師器	5b 類	0.43	0.32	5.75	0.50	0.09
121	19	土師器	5b 類	0.39	0.33	6.15	0.75	0.12
121	20	土師器	5b 類	0.47	0.30	5.55	0.65	0.12
121	21	土師器	5b 類	0.46	0.33	5.95	0.45	0.08
121	22	土師器	5b 類	0.46	0.31	5.60	0.50	0.09
121	23	土師器	5b 類	0.40	0.32	6.40	0.50	0.08

図	番号	名称	分類	$b/a$	$h/a$	$\alpha$	$\beta$	$\beta/\alpha$
121	24	土師器	5b 類?	0.39	0.34	6.45	0.75	0.12
122	25	土師器	5b 類	0.39	0.35	6.20	0.65	0.10
122	26	土師器	5b 類	0.41	0.30	5.85	0.80	0.14
122	27	土師器	5b 類	0.50	0.33	5.55	0.65	0.12
122	28	土師器	5b 類	0.40	0.31	6.00	0.70	0.12
123	33	須惠器	2 類	0.39	0.32	6.35	0.75	0.12
123	34	須惠器	2b 類	0.38	0.28	6.60	0.80	0.12
123	35	須惠器	4b 類	0.36	0.35	6.55	0.70	0.11
123	36	須惠器	4b 類	0.38	0.31	6.55	0.90	0.14
123	37	須惠器	5b 類	0.47	0.31	6.45	0.55	0.09
123	38	須惠器	5b 類	0.44	0.31	6.00	0.80	0.13
123	39	須惠器	5b 類	0.41	0.30	5.95	0.50	0.08
123	40	須惠器	5b 類	0.41	0.29	5.80	0.85	0.15
123	41	須惠器	5b 類	0.39	0.34	6.40	0.65	0.10
123	42	須惠器	5b 類	0.45	0.35	5.55	0.60	0.11
123	43	須惠器	5b 類	0.47	0.38	6.15	0.70	0.11
123	44	須惠器	5b 類	0.45	0.29	5.35	0.50	0.09
124	45	須惠器	5b 類	0.50	0.32	5.50	0.65	0.12
124	46	須惠器	5b 類	0.48	0.30	5.40	0.60	0.11
124	47	須惠器	5b 類	0.49	0.28	5.30	0.80	0.15



第 88 表 L - VIII 出土杯形態数值一覽表

図	番号	名称	分類	$b/a$	$h/a$	$\alpha$	$\beta$	$\beta/\alpha$
125	8	土師器	2 類	0.39	0.35	7.40	0.90	0.12
125	9	土師器	2 類	0.41	0.33	5.95	0.75	0.13
125	10	土師器	2 類	0.53	0.35	5.40	0.65	0.12
125	11	土師器	2 類	0.48	0.38	5.85	0.70	0.12
125	13	土師器	2b 類	0.42	0.32	6.10	0.70	0.11
125	14	土師器	2b 類	0.38	0.32	5.60	0.60	0.11
125	15	土師器	2b 類	0.42	0.31	6.05	0.75	0.12
126	16	土師器	2b 類	0.41	0.33	6.10	0.70	0.11
126	17	土師器	4b 類	0.48	0.31	5.85	0.60	0.10
126	18	土師器	4b 類	0.42	0.37	6.10	0.80	0.13
126	19	土師器	4b 類	0.38	0.35	6.45	0.60	0.09
126	20	土師器	4b 類	0.51	0.34	5.70	0.70	0.12
126	21	土師器	4b 類	0.33	0.34	7.55	0.65	0.09
126	22	土師器	4b 類?	0.41	0.37	6.95	0.90	0.13
126	23	土師器	4b 類	0.37	0.30	6.05	0.50	0.08
126	24	土師器	4b 類	0.36	0.28	5.80	0.50	0.07
126	25	土師器	4b 類	0.40	0.35	5.95	0.85	0.14
126	26	土師器	4b 類	0.43	0.31	5.75	0.70	0.12
126	28	土師器	4b 類	0.37	0.32	5.95	0.75	0.13
127	29	土師器	4b 類	0.41	0.31	6.95	0.70	0.10
127	32	土師器	5b 類	0.48	0.34	6.40	0.85	0.13
127	33	土師器	5b 類	0.39	0.39	7.20	1.00	0.14

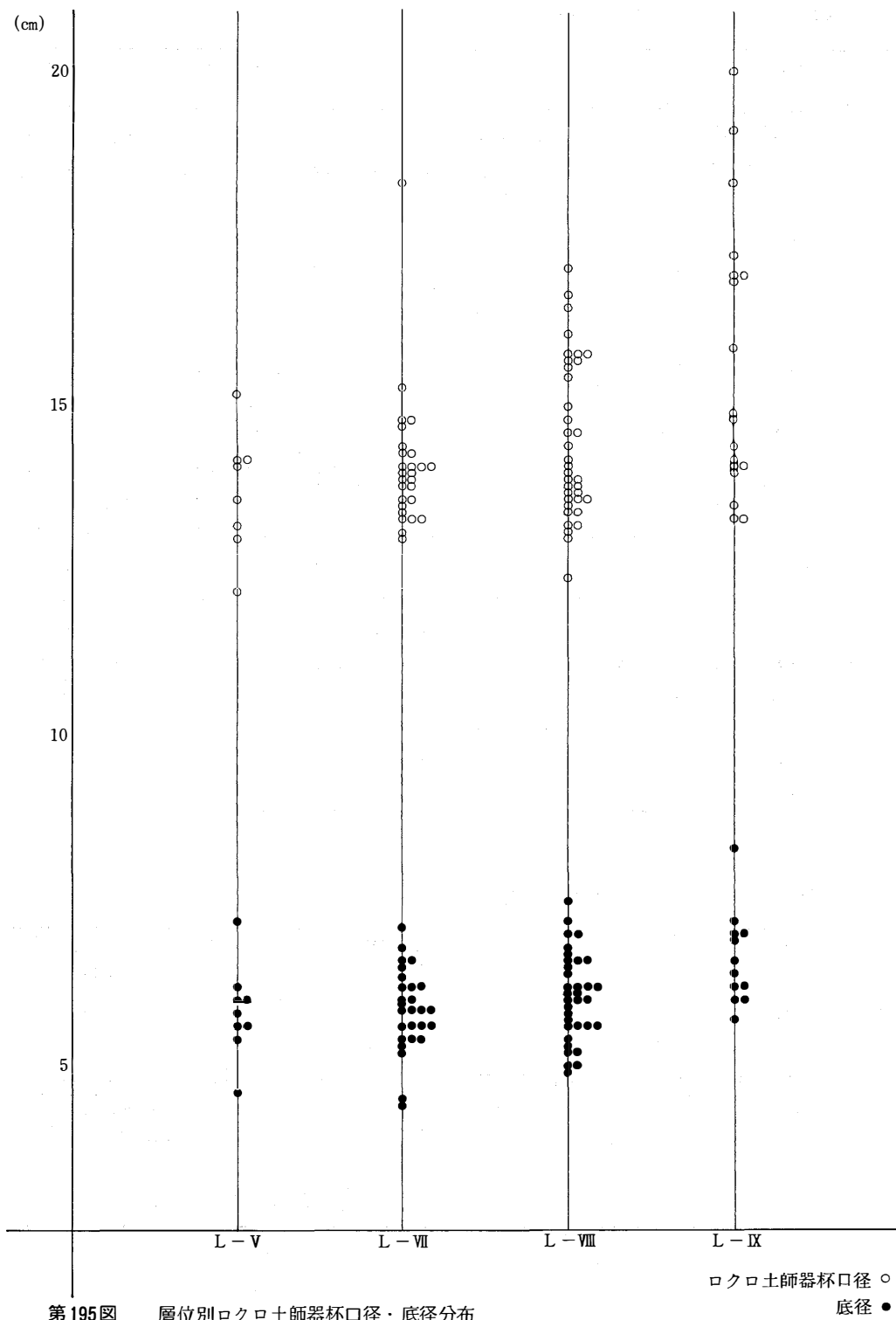
図	番号	名称	分類	$b/a$	$h/a$	$\alpha$	$\beta$	$\beta/\alpha$
127	34	土師器	5b 類	0.48	0.32	6.55	0.70	0.11
127	35	土師器	5b 類	0.49	0.32	6.60	0.50	0.08
127	36	土師器	5b 類	0.39	0.36	7.25	0.80	0.11
127	37	土師器	5b 類	0.38	0.37	7.35	0.65	0.09
127	38	土師器	5b 類	0.50	0.37	5.60	0.50	0.09
127	40	土師器	5b 類	0.42	0.32	6.00	0.80	0.13
127	41	土師器	5b 類	0.44	0.32	5.75	0.60	0.10
128	42	土師器	5b 類	0.45	0.36	5.65	0.60	0.11
129	55	須惠器	2 類	0.37	0.34	6.85	0.95	0.14
129	57	須惠器	4b 類	0.43	0.36	6.15	0.45	0.07
129	58	須惠器	5b 類	0.42	0.29	6.25	0.65	0.10
129	59	須惠器	5b 類	0.44	0.34	6.05	0.80	0.13
129	60	須惠器	5b 類	0.43	0.32	6.10	0.85	0.14
129	61	須惠器	5b 類	0.40	0.31	5.70	0.80	0.14
129	62	須惠器	5b 類	0.49	0.36	5.75	0.55	0.10
129	63	須惠器	5b 類	0.53	0.34	5.80	0.55	0.09
129	64	須惠器	5b 類	0.47	0.37	6.55	0.90	0.14
129	65	須惠器	5b 類	0.50	0.32	5.80	0.70	0.12
129	66	須惠器	5b 類	0.42	0.33	5.60	0.70	0.13
130	67	須惠器	5b 類	0.40	0.34	6.40	0.70	0.11
130	68	須惠器	5b 類	0.45	0.33	5.75	0.70	0.12
130	69	須惠器	5b 類	0.43	0.28	5.80	0.60	0.10

第 89 表 L - IX 出土杯形態数值一覽表

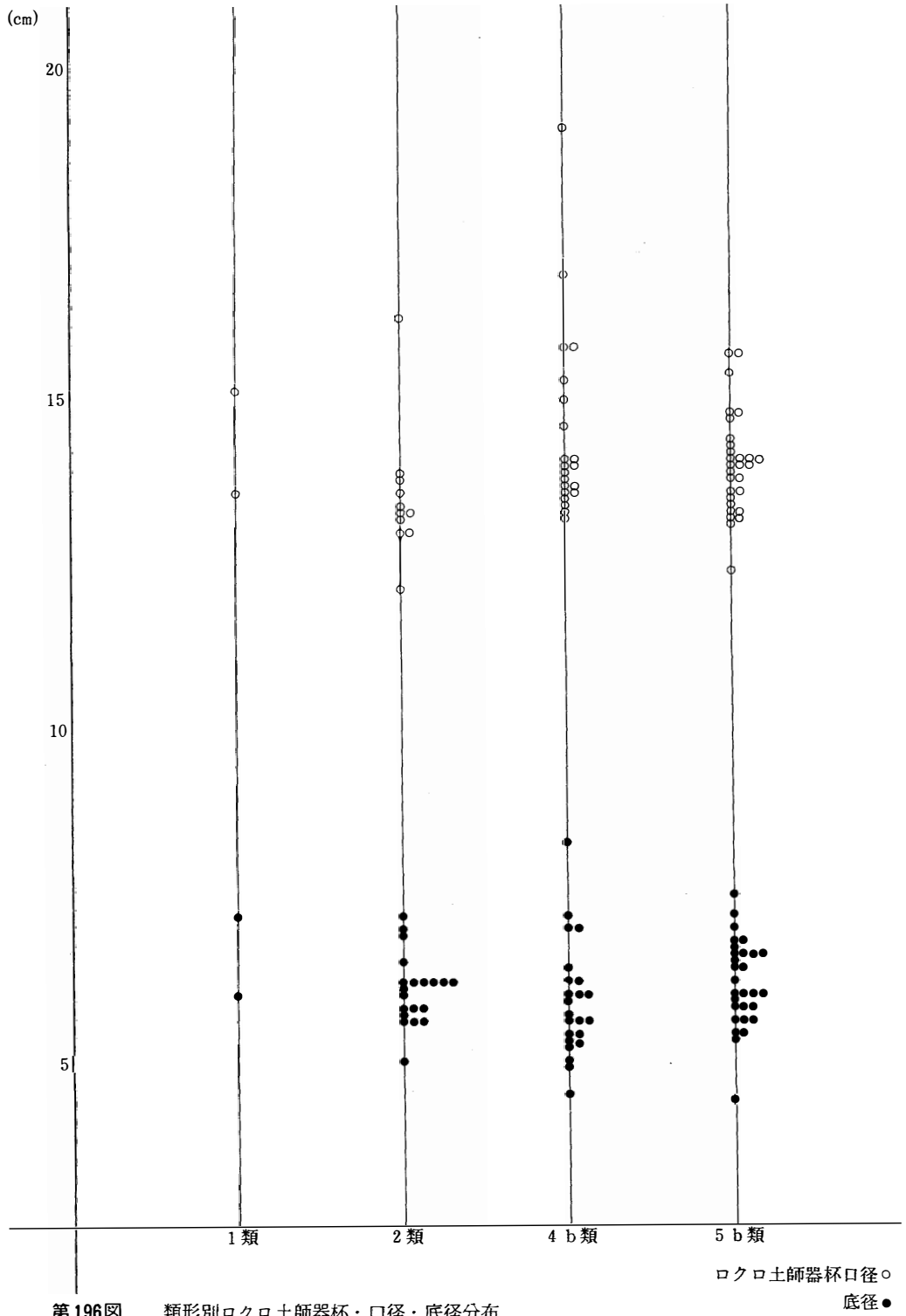
図	番号	名称	分類	$b/a$	$h/a$	$\alpha$	$\beta$	$\beta/\alpha$
131	8	土師器	2 類	0.46	0.34	6.05	0.80	0.13
131	9	土師器	2 類	0.42	0.32	6.00	0.65	0.11
131	10	土師器	2b 類	0.43	0.29	5.80	0.50	0.09
131	11	土師器	2b 類	0.53	0.28	4.65	0.50	0.11
131	12	土師器	4b 類	0.49	0.28	6.40	0.70	0.11
131	13	土師器	4b 類	0.43	0.30	5.80	0.70	0.12
131	15	土師器	4b 類	0.38	0.35	8.95	1.10	0.12
132	16	土師器	5b 類	0.45	0.30	5.80	0.70	0.12

図	番号	名称	分類	$b/a$	$h/a$	$\alpha$	$\beta$	$\beta/\alpha$
132	17	土師器	5b 類	0.53	0.35	5.60	0.65	0.12
132	18	土師器	5b 類	0.42	0.32	6.75	0.95	0.14
132	19	土師器	5b 類	0.47	0.31	5.70	0.70	0.12
133	29	須惠器	5b 類	0.46	0.34	6.00	0.55	0.09
133	30	須惠器	5b 類	0.43	0.30	6.00	0.85	0.14
133	31	須惠器	5b 類	0.43	0.33	6.60	0.70	0.11
133	32	須惠器	5b 類	0.44	0.36	6.25	0.50	0.08
133	33	須惠器	5b 類	0.48	0.35	6.20	0.60	0.10

第1節 土 器

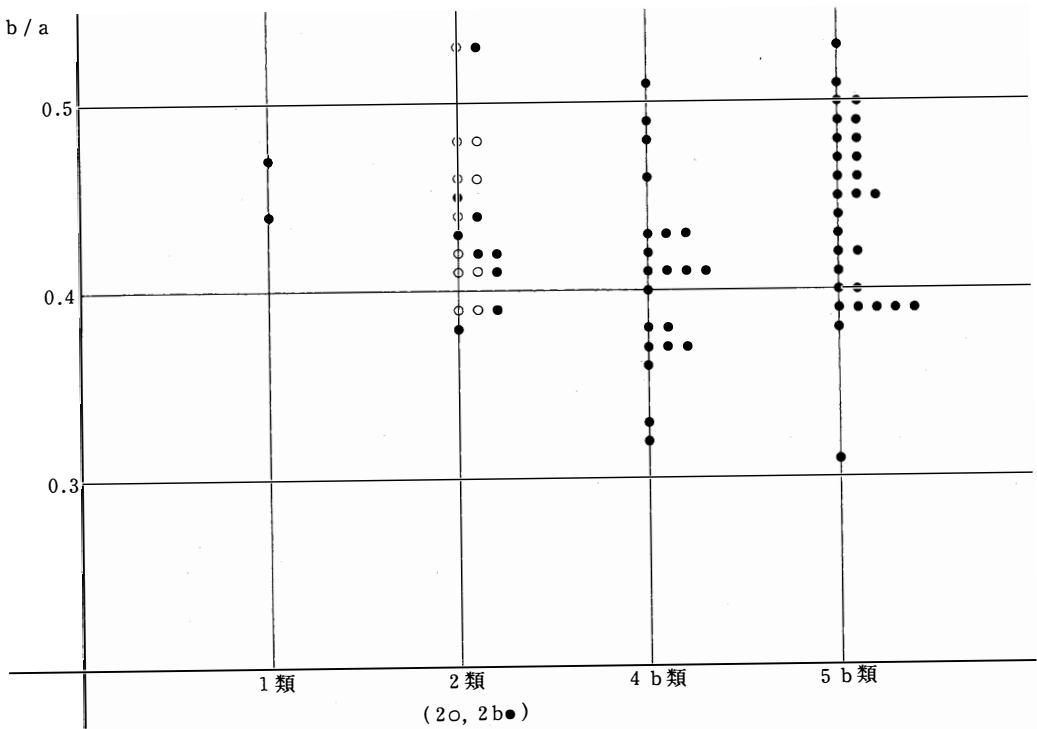


第195図 層位別ロクロ土師器杯口径・底径分布

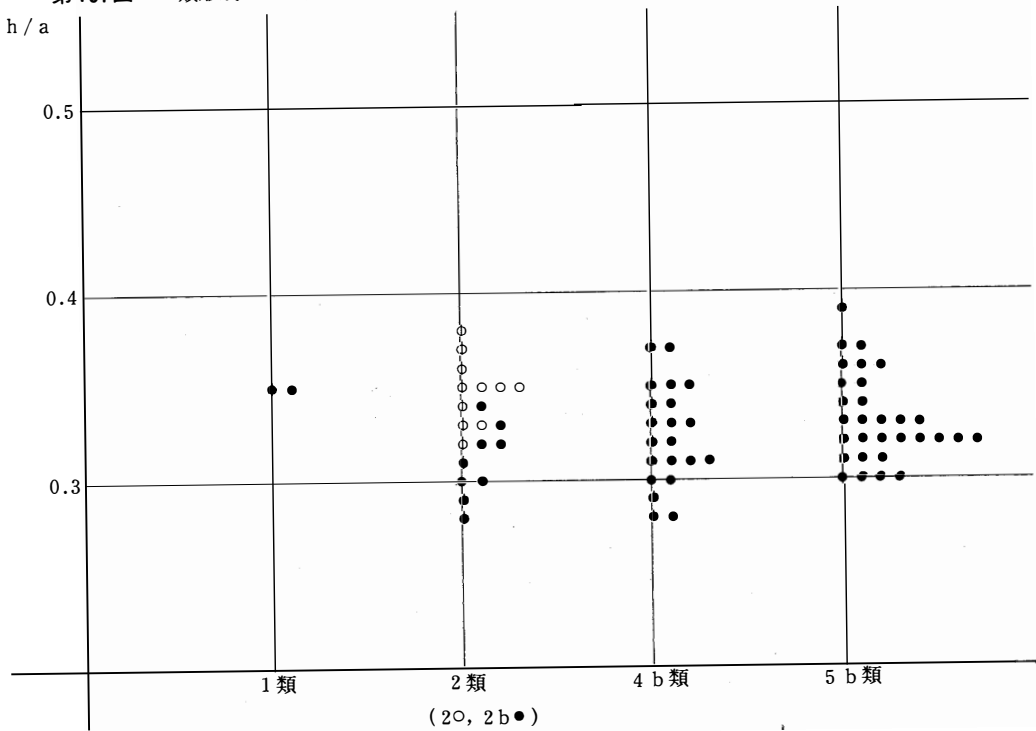


第 196 図 類形別ロクロ土師器杯・口径・底径分布

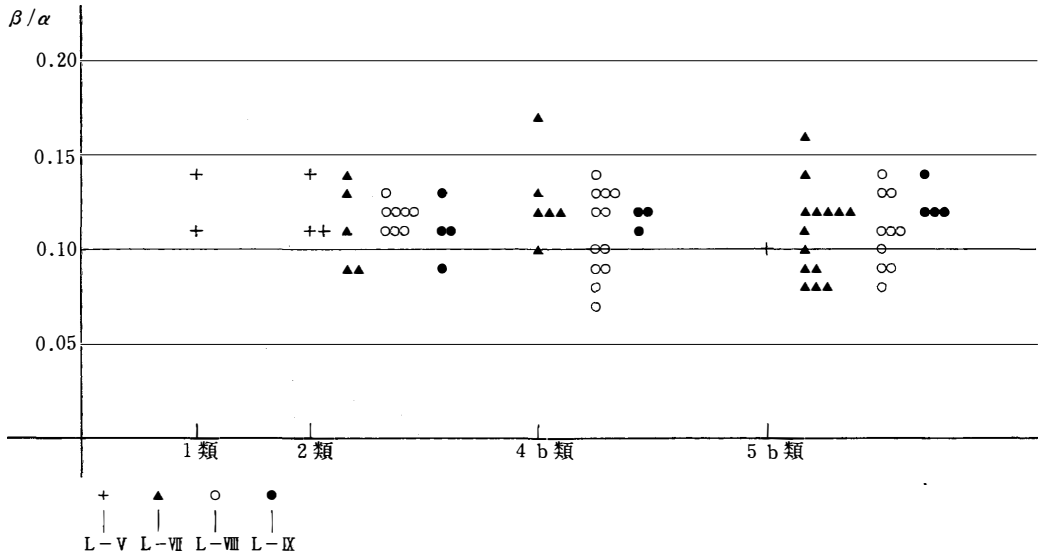
第 1 節 土 器



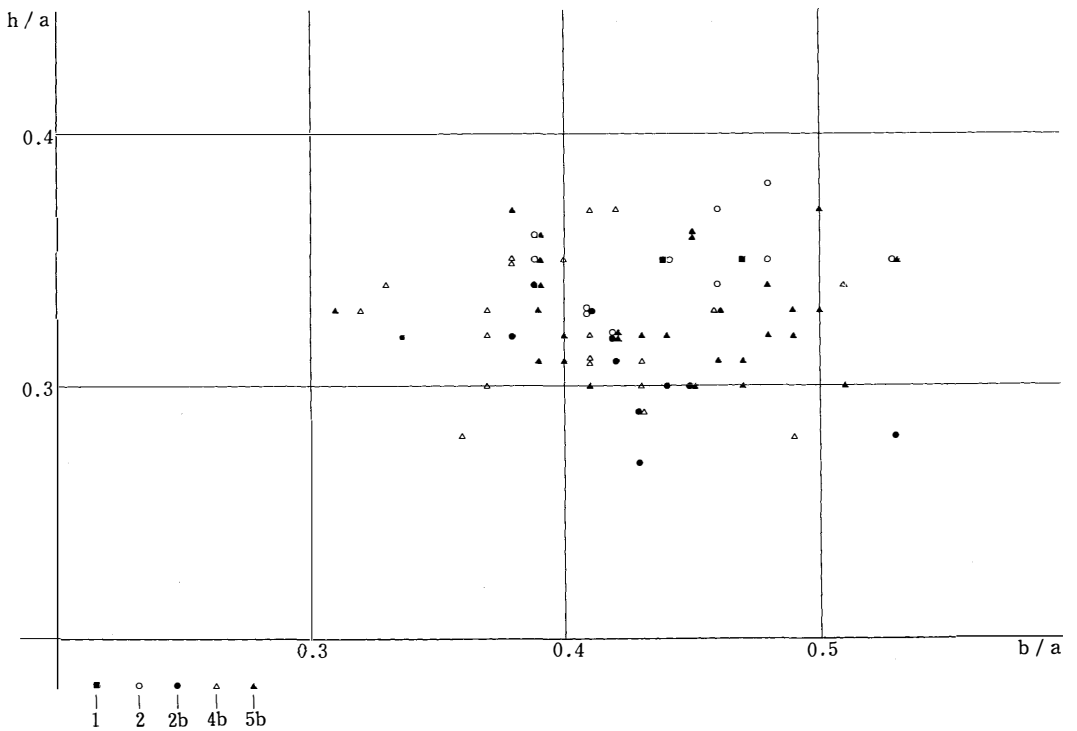
第 197 図 類形別ロクロ土師器杯  $b/a$  分布



第 198 図 類形別ロクロ土師器杯  $h/a$  分布

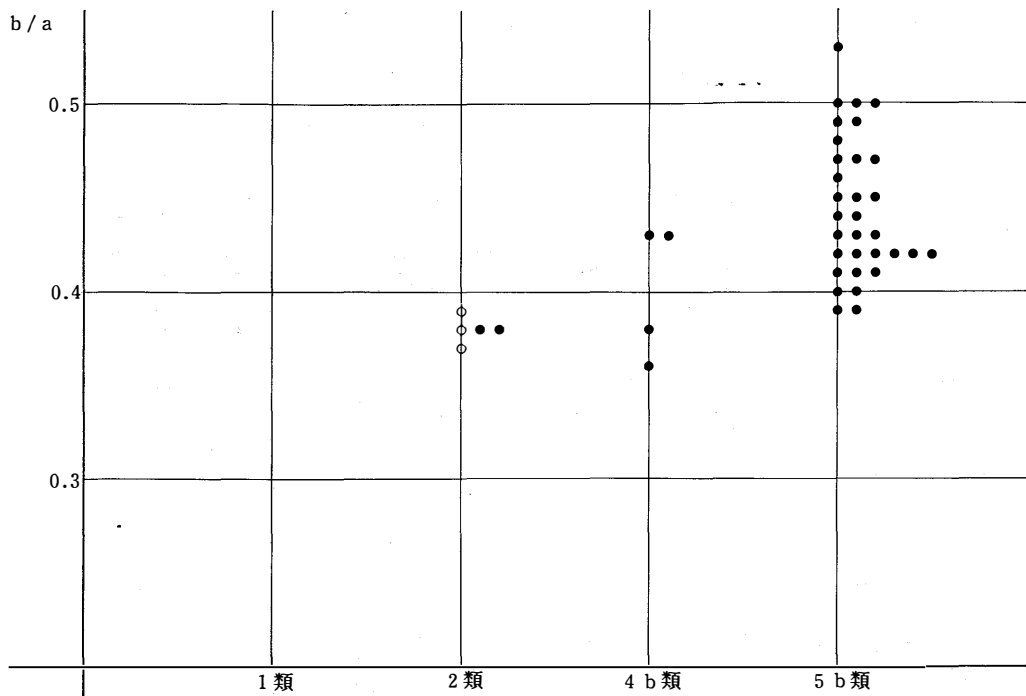


第 199 図 ロクロ土師器杯  $\beta/\alpha$  分布

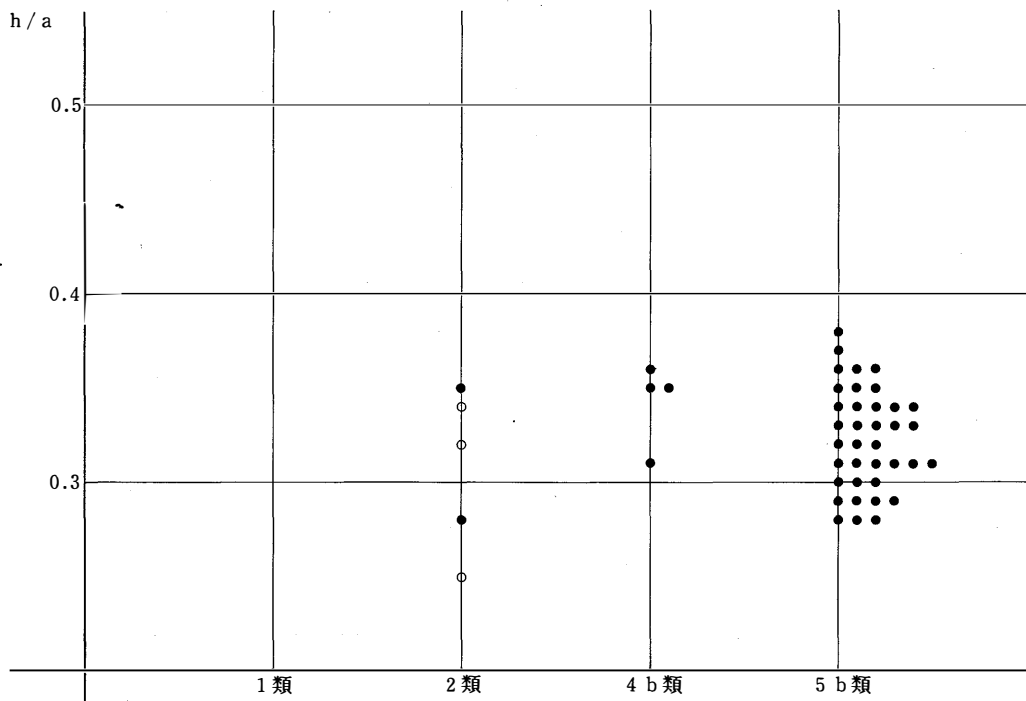


第 200 図 ロクロ土師器杯  $b/a \cdot h/a$  類形分布

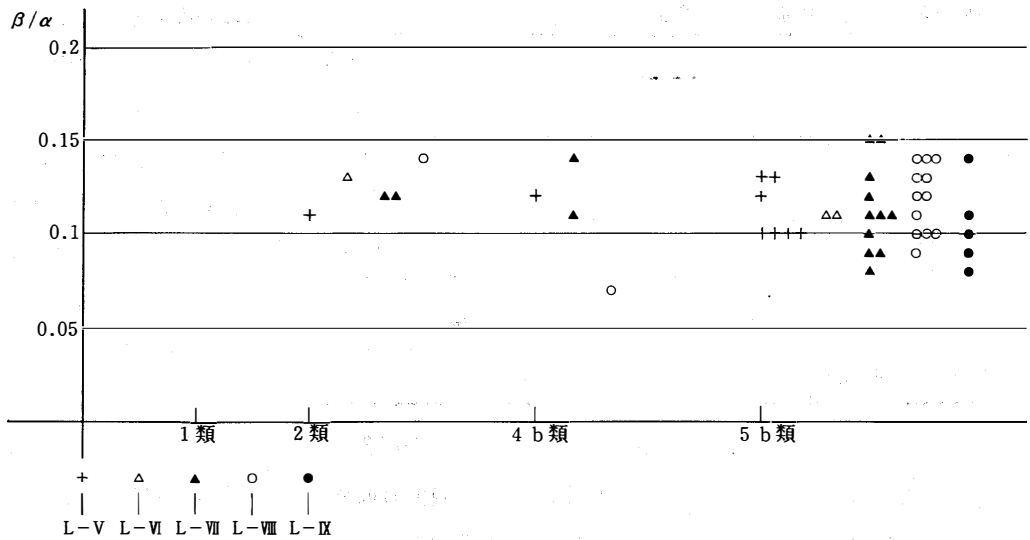
第 1 節 土 器



第201圖 類形別須惠器杯  $b/a$  分布 (2○, 2b●)



第202圖 類形別須惠器杯  $h/a$  分布 (2○, 2b●)



第203図 須恵器杯  $\beta/\alpha$  分布

2.00となる。従って、 $\frac{1}{2} \cdot \frac{1}{2}$ についても須恵器杯、ロクロ土師器杯の母平均に差はないと考えられる。

以上のことから、L-V~IX全体について見ると、須恵器杯とロクロ土師器杯はほとんど同じ形態の傾向をとっていたと考えられる。

### 墨書土器について

判別できたものは第90表の通りであり、これらは大部分が杯に書かれており、確実に杯以外と判明したのはL-VII(第124図50)、2a号住居跡(第19図8)、遺構外(第191図26)出土の高台付杯のみである。また、墨書土器は時代的に見るとIV群、表杉ノ入式のものに見られ、本遺跡ではそれ以前の時期にはまったく見られない。これらの内でも、土師器・須恵器とも湿地性遺物包含層であるL-V~IXに多く見られるが、これは土器の出土量の差と考えることができるものである。

土師器と須恵器別では、まとまった量のある湿地性遺物包含層をL-V~IX全体として見ると土師器では出現率15.4%(個体総数240)、須恵器では36%(総個体数50)と須恵器が多くなっている。各層位別では個体数が少なく詳しい分析はできないが、土師器杯の個体数が多いL-VII・VIIIについて見ると、L-VII 18.9%(個体数90)、L-VIII 15.8%(個体数76)で、湿地性遺物包含層のロクロ土師器杯中の出現率と近い数値を示している。

墨書の内容ではまず、数字関係の多い点が注目される。「秀」9点、「岡」4点、「干」2点、「秀」1点である。「兵」か「六」か不明なものを除くと、これらはすべて4桁以上の数字で、区切りの良い

第90表 判読可能墨書一覧表

	土 師 器	須 恵 器
住居跡		余(2a号住居跡)
L-V	千 芳 全	千 芳 太 刀
L-VII	千(5) 四(2) 兵か六 甲 豪 罌 瓦(2)	田 人 罌
L-VIII	千 罌 罌 福 井 具 太	千 四 (2) 人
L-XI	千? 丈 真 勢	千 金 罌?
その他	罌(遺構外)	

もののみである。しかもほとんどが桁単位の数字である点などから、これらの文字は、具体的数字を表わすものとは考えることはできない。他の平安時代の集落遺跡からも数字の墨書のある土器が多く出土しているが、ほ

とんが「千」、「万」など4桁か5桁の桁の数字である場合が多い。

「千」の例は西白河郡東村谷地前C遺跡、「万」は同板倉前B遺跡、郡山市鳴神・柿内戸遺跡、「千」は石川郡石川町達中久保遺跡に見られる。これらの遺跡で、他の数字の墨書を見ると鳴神・柿内戸遺跡に「千」の例があるが、これは「千」か「九十」かは不明である。これらの例も、他の具体的数字を表したと考えられる墨書を伴わないことから、何か象徴的意味を持ったものと考えられよう。

他の文字では「福」、「西福」、「福来」の吉祥文が含まれている点に注意したい。その意味では「罌」は則天文字で「天」であり、やはり吉祥文または呪術的性格も考えることができよう。

他の墨書の文字は何を意味するものかは不明であるが、同じ湿地性遺物包含層中から木製の形代・馬の歯が出土している点などから考えて、これらの墨書も広義の呪術的性格を持ったものが含まれていることは疑いないであろう。

### 土器の年代について

住居跡出土土器と湿地性遺物包含層出土土器について比較すると、住居跡出土のIa群は、土師器杯の内外面共に段の見られる丸底杯を有する点ではL-Xと共通性がある。しかし、18号住居跡の土師器杯は、口縁が内弯するものを含むのに対し、L-Xの杯は、外傾または外反のもののみで、無段で口縁部にナデが施された杯を含む点などの相異が見られる。ただ、両者とも資料数が少なく、全体の杯のセットについて記述することはできないので、一応内外面に段を有する土師器丸底杯を有するものとしてL-XのものもIa群としておく。

Ib・II群に関しては、湿地性遺物包含層中にこれらの土師器を主体とする層は見られない。

III群土器はロクロ調整・回転糸切りによる2b・4b・5b類の土師器杯が見られる土器群であるがその量は少なく、セット関係は不明と言わなければならない。但し、2b・4b・5b類が見られる点では、湿地性遺物包含層L-V~IXに近いものと考えられる。



Ia群及びL-X出土の土師器は有段丸底杯を有し、それらは口縁部外面がヨコナデ、底部にケズリが施されている点から、東北土師器編年の栗囲式の範疇<sup>註57</sup>に入るものであることは疑いない。L-X出土の土師器杯に類似したものは、二本松市矢ノ戸遺跡3号住居跡、宮城県名取市清水遺跡IV群土器等があり、7世紀中頃の年代が与えられている。従って、本遺跡でもL-Xの土器については、同様の年代が考えられる。

Ib・II群は、Ia群とIII群の間、湿地性遺物包含層ではL-IXとL-Xの間の時期に位置するものである。Ib群の土師器杯に類似したものが宮城県新田町対島遺跡<sup>註58</sup>の土師器に見られる。その土器は、調整技法等から国分寺下層式に含まれるものと考えられている。県内では西白河郡大信村下原遺跡7号ピット<sup>註59</sup>の土器に同じようなものが見られるが、ここではII群同様に、ロクロ調整土師器と共伴しており、国分寺下層から表杉ノ入式へ移行する段階のものとして、8世紀末頃の年代が考えられている。従って、Ib群は国分寺下層式の終わり頃から下原7号ピット出土土器の段階、II群土器は<sup>註</sup>下原7号ピット出土土器の段階と考えられ、8世紀後半～末頃のものと考えられる。

III群土器は数が少なく、かつ湿地性遺物包含層L-V～IXに近いものと考えられるので、L-V～IX出土土器で代表させ記述を進める。

L-V～IXの土器は前にも述べた通り、杯はすべてロクロ調整でL-VIII・IXからL-Vに向けて土師器杯が小形化する以外は器形・切り離し・再調整技法的には土師器・須恵器の杯とも変化は見られない。また、その層位も連続的に堆積したものと考えられており、これらは比較的短い年代幅を持つものと考えられよう。そして、その特徴は土師器杯がほぼ同量の2・4b・5b類により構成され、切り離し技法は大部分が回転糸切りによるものであり、須恵器杯は5b類が大部分を占めることである。

まず、土師器杯について見ると、国分寺下層式から表杉ノ入式への移行期と考えられる8世紀末頃の年代が与えられている下原7号ピット出土土器、伊治城系の土師器<sup>註60</sup>は、前述のように非ロクロとロクロ調整の杯が共伴している。また、これらに続く表杉ノ入式の古い段階の土師器は、体部下半から底部にかけ再調整の加えられた1・2類から構成されており、回転糸切り痕を残す例はほとんど見られない。<sup>註61</sup>これらが9世紀前半頃までの土師器であり、L-V～IXの土師器とは明らかに異なった様相を呈している。従って、L-V～IXの土師器はそれよりは新しいと考えることができる。

須恵器杯は5b類を主体とするもので、それに若干の2・4b類を含むものである。多賀城周辺では9世紀後半と考えられる安養寺中窯跡の須恵器杯は、<sup>註62</sup>回転糸切り・無調整のものからなっている。また、二本松市赤井沢窯跡の須恵器杯は<sup>註63</sup>4b類と5a類がかなりの数ずつ伴っている。この年代について考えると、表杉ノ入式の古い部分と考えられる1・2類の杯を主体とする土師器に

## 第2節 鉄斧について

は4b類が伴うもの<sup>註64</sup>と、5a類を伴うもの<sup>註65</sup>がある。もし、これらの資料が同一時期、または、極めて近い時期のものとするれば、赤井沢窯跡の須恵器はこれらの時期、つまり9世紀前半頃と考えられる。

これらと比較するとL-V~IX出土の須恵器杯は、赤井沢窯跡のものよりは、安養寺中窯跡のものに近いと考えられる。従って、9世紀前半までは遡らないと考えられる。また、L-VII・VIIIより出土している頸部にリング状の凸帯のある長頸壺の年代も、9世紀後半以降と考えられるもので、須恵器杯のあり方は矛盾しない。

また、5b類の土師器杯を伴う住居跡では一緒に、いわゆる須恵系土器を出土する例が県内でも何例か知られている<sup>註66</sup>。いわゆる須恵系土器は多賀城跡においては10世紀前半~11世紀と考えられており、福島県内の堅穴住居跡出土例もこの年代のものとするれば、L-V~Xにはいわゆる須恵系土器はまったく見られないことから、これよりも古いものと考えられる。

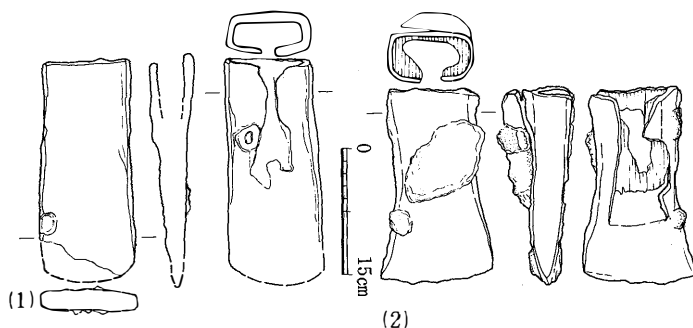
以上の結果から、L-V~IXの遺物の年代は9世紀後半頃と考えるのが妥当と思われる。但し、現在の研究段階ではこの遺物についてさらに細かい年代的位置付けや、各層の具体的な年代の推定を行うことは不可能である。従って、L-VIII・IXからL-Vに向けて土師器杯が小形化する現象などは、この年代幅の中で見られる微細な変化であり、実年代的にこれを追究できるまでには至っていない。  
(木本 元治)

## 第2節 鉄斧について

ほぼ完形の鉄斧は、遺構外と2号不明遺構より出土した2点がある。遺構外より出土した鉄斧は、長さ13.8cm、幅5.3cm、厚さ1.5cmを測るやや大型の鉄斧である。2号不明遺構出土の鉄斧は、長さ11.0cm、幅6.1cm、厚さ3.1cmを測る標準的な短冊形を呈する。器形的特徴を観察してみるならば、木柄の装着方法は両方とも袋状の斧身をおさめるためのソケットを有するものであり、これらの鉄斧は有袋鉄斧と言われるものである。刃部形態についても両方とも片刃状を呈している。このように大きさの大小の他は特記すべき差異はみられない。県内での出土例は(1)治部池横穴群中の第6号横穴墓より出土した鉄斧がある<sup>註68</sup>。長さ9.6cm、幅4.0cm、厚さ0.9cmを測るものであり、形態は、先端部を欠損した短冊形を呈する片刃状の有袋鉄斧である。この鉄斧は本遺跡の鉄斧と形態的差異は認められない。県外での出土例は(2)宮城県上新田遺跡3号住居跡より出土した鉄斧がある<sup>註69</sup>。長さ8.2cm、幅4.7cm、厚さ0.9cmを測り、形態は、柄着装部に木質部を残存する片刃状を呈する有装鉄斧である。

(1)・(2)これらの鉄斧の形態的特徴をまとめてみると、まず刃部形態は片刃状を呈していることと、装着部は袋状のソケットを有する有袋鉄斧であるということである。

使用目的について考えるならば小形の<sup>註70</sup>鉄斧は、両刃をそなえたまさかり状の斧のように「伐る」「割る」を機能するものではなく、片刃の手斧のように柄をつけたもので、「削る」機能に重点をおいたものと思われ、木材伐採後の面を削る手斧の機能を果たしたり、木



第204図 鉄斧参考例

材の細部加工や仕上げに用いられたと考えられる。これらの出土遺物について総括すると、「削る」機能に重点をおいた手斧であり、木材の加工などに用いられたものであると考えられる。時期的な問題については、奈良時代から平安時代にかけての遺物であると思われる。

最後に袋状不明鉄製品が遺構外より出土しているが他の類例を求めることができず、今後の出土例の増加を待ちたい。

(佐藤 友之)

### 第3節 住居跡

御山千軒遺跡においては発掘調査の結果、合計25軒の住居跡が検出された。今回発掘調査が行われた場所は本遺跡のなかではきわめて限られた部分である。この成果より本遺跡の集落としての規則性、規格性を考察することは難しいが、今回発掘調査が行われた部分において確認された特徴等について検討を加えたいと思う。

今回発掘された25軒の住居跡については、第1節・土器で規定したⅠ～Ⅲ群の土器分類に従って、住居跡の時期を下記のようなⅠ～Ⅲ期に規定し、分類した。また住居跡に関しては、プラン・規模・軸線方向、床面、カマド、住居跡に伴うピットの小項目ごとに分けて考察をすすめる。

第Ⅰ期：Ⅰ群土器(栗園式期相当)を伴う住居跡

第Ⅱ期：Ⅱ群土器(国分寺下層式期相当)を伴う住居跡

第Ⅲ期：Ⅲ群土器(表杉ノ入式期相当)を伴う住居跡

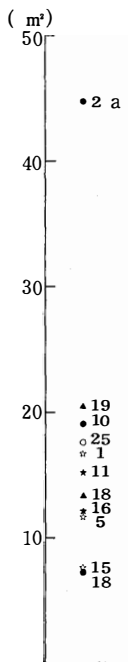
#### プラン・規模・軸線方向

本遺跡からは総数25軒の住居跡が検出されている。そのうち全体の規模や平面形の明らかな住居跡は11軒のみである。そのほか、調査区外のため規模・平面形の不明な住居跡は5軒、部分的に破壊されている住居跡は10軒を数える。

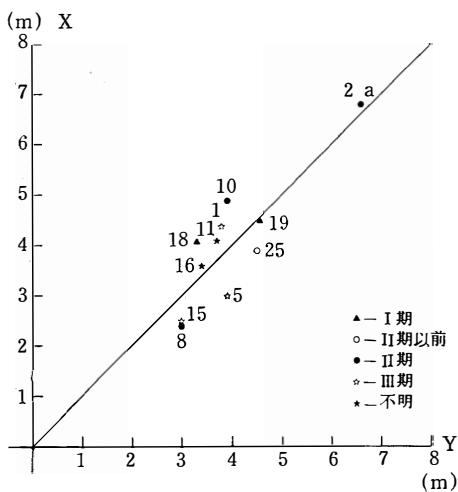
### 第3節 住居跡

住居跡の平面形態は方形を基本としている。その中でも、正方形を呈する住居跡が2a号住居跡、19号住居跡の2軒で、他の住居跡は南北軸か東西軸かが長くなる長方形の形態を有している。またコーナーの型はほとんどが隅丸形であり、方形のコーナーを持つものは2a・10・25号住居跡の3軒である。

面積について見ると第205図よりほとんどが30m<sup>2</sup>以下の大きさである。



第205図 住居跡の床面積比較



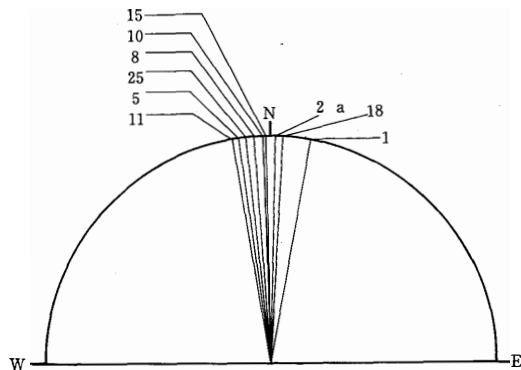
第206図 住居跡プラン規模の比較

その中でも10m<sup>2</sup>以下と、10m<sup>2</sup>以上の2つに分けることができる。前者に属するものは8号住居跡、5号住居跡、後者は1・10・11・15・16・18・25号住居跡の各住居跡である。その他、本遺跡の中で規模の明らかなものうち2a号住居跡は最大級のものである。

以上のことから、Ⅲ期に属する住居跡1・5・15号

住居跡の3軒は、すべて平面形が隅丸方形を呈す。面積はⅡ期の8号住居跡のように本遺跡の中でも最も小規模なものも含まれるが、Ⅰ、Ⅱ期の住居跡と比較すると小規模なものとなる。

ここで言う軸線方向はカマドが構築された壁とは関係なく南壁と北壁の中点を結んだ線を主軸とし、真北から主軸が東西に振れている方向を示している。四壁の不明な住居跡は、原則として東西壁をその基準として軸線方向を出すこととした。

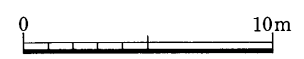
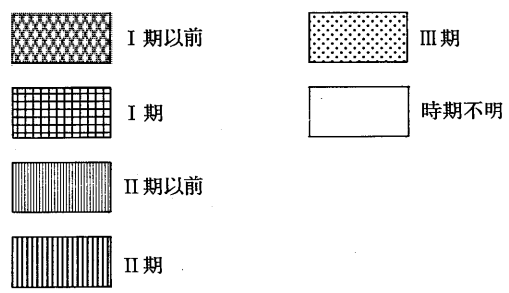
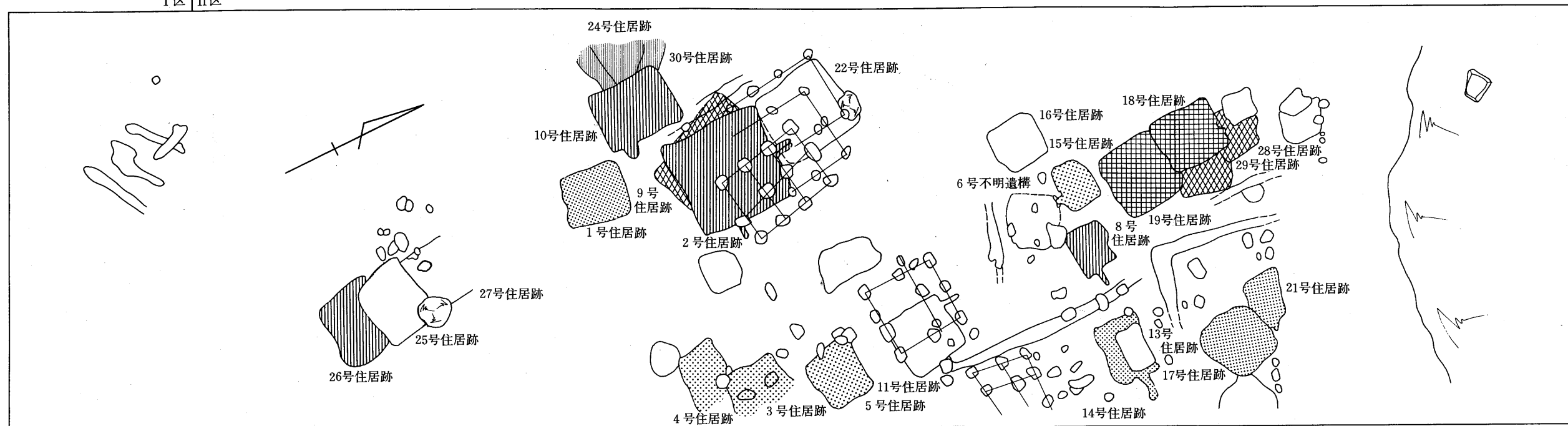


第207図 住居跡軸線方向

として軸線方向を出すこととした。

本遺跡における軸線方向は、時期別には目立った特徴を示していない。第207図のように軸線方向はほぼ北北東から北北西の間に集中しており、極端に方向を異にする住居は見られない。平面形の明らかな住居跡の軸線方向は真北から西に9.5°、東に10.5°の幅で振れ、そのほか不明な住居跡をも含めるとその幅は真北から西に18°、東に16°と広がる。

I区 II区



第208图 时期别住居迹分布



このように時期に係わりなく軸線が北方向を向くということは、何らかの意識が働いたものか否は不明である。そして一般集落の構成において軸線の方向性を考慮するとするなら自然的要因の影響によるものかもしれない。

## 床 面

本遺跡における住居跡の床面構造を見ると、A類、地山面を床面としているもの、B類、貼り床を施して床面としているものの2種類に分類される。検出された25軒の住居跡のうち、A類は12軒、B類は13軒あり、若干B類が多くなっている。さらに、このB類は(i)、掘り方を持たず、直接地山上層の全体に貼り床したもの(ii)、掘り方を持ち、掘り方に何層かの埋め土を入れその上層全体に貼り床したものの2種類に細分できる。B類の13軒の住居跡のうち、B i類は8軒(2a・5, 13, 14, 18, 26, 27, 28号住居跡)、B ii類は5軒(1, 11, 15, 17, 21号住居跡)検出されており、掘り方を持つ住居跡の方が、貼り床のみよりもやや検出例が少ない。なお、2a住居跡は北側と南側の一部に溝状の落ち込みがあり、その埋め土上層とこの部分を除いた部分全体に貼り床が見られるためB i類に含むこととした。B ii類の住居跡は1・11号住居跡のように、方形の掘り方より一回り貼り床面が大きくなるものと、15・21号住居跡のように掘り方とほぼ同じ大きさの貼り床をもつものに分けられる。17号住居跡については上層から著しく削平されており、壁の立ち上がりが破壊されており、前者の形態を呈するか、後者なのかは不明である。また、11・15・28号住居跡はカマド燃焼部下層に貼り床が見られる。

・ 時期的に床面構造を考えると、I期以前には貼り床を持つ住居跡は見られない。I期及びII期以前になって始めて貼り床を持つ18・27号住居跡のB i類に属する住居跡が見られる。II期においてもB類は少なく、B i類の26・2a号住居跡の2軒のみである。III期になると、A類の住居跡が3・4号住居跡の2軒に対し、掘り方を持つB ii類の住居跡が1・15・17・21号住居跡の4軒、持たないもののB i類が14号住居跡であり、B類の数が他の2つの時期に比較して多く見られる。このことは、台ノ山遺跡<sup>註71</sup>や矢ノ戸遺跡<sup>註72</sup>など本遺跡と同時期の遺跡で報告されている結果をみても、III期にB類が多い傾向は今回も同様であった。

また、貼り床の機能については、本遺跡のように湿気の多い地域においては防湿効果をもったものとも考えられる。

## カ マ ド

本遺跡において検出された25軒の住居跡のなかで、カマド、もしくはカマドの痕跡が検出された住居跡は11軒であった。この11軒を時期ごとに分けると、I期以前が1軒、I期が1軒、II期が2軒、III期が4軒、時期不明のものが3軒となる。

### 第3節 住居跡

住居跡内におけるカマドの位置は東壁にとりつけられているもの6基、北壁にとりつけられているもの5基、西、南壁にとりつけられているもの各1基ずつである。これらを時期ごとに分けるとⅠ期以前では東カマドが1基、Ⅰ期では北カマドが1基、Ⅱ期では東カマドが1基、北カマドが3基、Ⅲ期では東カマドが3基、南カマドが1基、時期が不明の住居跡では東カマド、西カマド、北カマドがそれぞれ1基ずつとなっている。カマドが取り付けられている壁については、Ⅰ～Ⅲ期の時期による著しい変遷は認められなかったが、Ⅱ期では北カマド、Ⅲ期では東カマドに集中する傾向がみられる。検出された13基のカマドのうち、11基が東壁か北壁に構築されている。これは秋から春にかけては西北西の風、夏には南風が多いという自然的要因によるものと推定される。<sup>註73</sup>

カマドの取り付け壁の長さが明確なものは少ないが、その長さを推定できるものを含めて、カマドの位置が取り付け壁の左右どちら側に偏っているかを考えたい。東壁に構築されているカマドは全て壁の中心より右側に偏り、東壁以外の三壁に構築されているカマドの大部分は、それぞれの壁の中心より左側に偏っている。この規則性が何の要因によるものかは不明である。

カマドと貯蔵穴の位置関係については、カマドが左側に偏る場合は貯蔵穴はその右脇にあり、カマドが右側に偏る場合は貯蔵穴はその左脇に設けられているという傾向にある。しかし、15号住居跡のようにカマドの両脇に貯蔵穴をもっている例もある。しかし、15号住居跡はカマドが左側に偏っており、カマドの左脇にある貯蔵穴は上面に貼り床状のかたい埋土が施されており、最後に使用されていたのは右脇の貯蔵穴である。カマドと貯蔵穴の位置関係が明確な6軒の住居跡のうち、15号住居跡も含め5軒がこの規則性に合致している。しかし、住居跡内の全体的な位置から検討すれば、カマドが取り付け壁の中心よりも右に偏った場合は貯蔵穴も取り付け壁の中心よりも右側にあり、カマドが取り付け壁の中心より左に偏った場合は貯蔵穴もとりつけ壁の中心よりも左側にある。これは下田・訪諏遺跡<sup>註74</sup>、矢ノ戸遺跡<sup>註75</sup>においてすでに指摘されており、やはりカマドと貯蔵穴を近接させて設けようとする意識がはたらいていたものと推定される。

これらのことから本遺跡におけるカマドの位置は、各時期ごとの著しい特徴・変化もなく、Ⅰ～Ⅲ期を通して共通の形態をもつものであり、風向など自然的要因に強く規制されていたものと推定される。

#### 住居跡に伴うピット

住居跡に付属する施設としてのピットには、柱穴・貯蔵穴・それ以外の用途不明なもの3つの種類に分類される。

規模が明確な住居跡の柱穴については10・18・19号住居跡では4本、2号住居跡では5本が検出されている。18・19号住居跡はⅠ期、2・10号住居跡はⅡ期に相当している。18・19号住



居跡は覆土がほとんど削平された状態であり、明確な柱痕等は検出されていないが、住居跡の対角線上にピットがあることから位置的に柱穴であろうと推測しているものである。また、この他の住居跡ではプラン・規模が不明であったり、プランまた規模が明確であっても柱穴と推定されるピットが1～2個検出されたのみで柱穴の位置については不明である。よって住居跡の上屋構造が判明するような状態の柱穴が検出されたものは25軒中で2・10号住居跡の2軒である。2号住居跡は5本の主柱穴が検出されている。これは対角線上に4個とカマドの向いに1個の計5個である。10号住居跡は対角線上に4個で、柱穴は掘り方をもつ。他の住居跡の柱穴も検出されている1～2個の柱穴の位置から推測して、ほとんどが4本か5本であろうと推定される。

柱穴の形状は大部分が円形を呈するが、方形を呈するものもある。

貯蔵穴については25軒中9軒の住居跡から検出された。形状は楕円形が基調であるが、不整形を呈するものもある。大きさは最小規模が41×36cm、最小規模が129×98cmである。平均は60×40cm前後である。貯蔵穴の数は1軒につき1個であるが、15号住居跡はカマドが1基であるが3個の貯蔵穴が検出されている。ほとんどの貯蔵穴より少量の土器片が検出されているが、多量の土器が出土した貯蔵穴、または完形品が多量に出土した貯蔵穴はない。住居跡内における貯蔵穴の位置は、カマドの項で述べたように取りつけ壁中央よりもカマドの片寄った側でない方に取りつけられている例が多い。

用途が不明のピットについては、Ⅲ期の15号住居跡の床面より住居跡の面積の $\frac{1}{3}$ 以上の大きさをもつピットが検出されている。このピットは、掘り方埋め土を切って構築され、人為的に埋めたピット上面に貼り床状のかたい暗灰褐色土が施されている。このように大きなピットは他に類例が認められず、その性格、および使用目的は不明である。

## ま と め

これらの結果をふまえて本遺跡の集落構造を考えたい。Ⅰ期とⅡ期の住居跡の重複関係は認められる。しかし、Ⅲ期においては同じⅢ期の住居跡との重複関係をもつが、それ以前の住居跡との重複関係は持たない。またⅢ期になると住居跡の軒数も増加し、掘立柱建物跡の共存も認められるようになる。

Ⅱ期の国分寺下層式期の土器を伴う住居跡は湿地性遺物包含層より離れた場所に営まれ、Ⅰ期の栗圀式期の土器を伴う住居跡、およびⅢ期の表杉ノ入式期の土器を伴う住居跡は湿地性遺物包含層に近接して営まれている。これと対応するように湿地性遺物包含層からの国分寺下層式期の土器の出土数は極端に少なく、層位的なまとまりも認められない。

発掘調査が行われた範囲についてはこのような傾向が認められたが、本遺跡全体としての集落構造、及び性格については明らかにできなかった。

(氏家 浩子・宍戸美智子)

## 第4節 掘立柱建物跡

御山千軒遺跡の発掘調査の結果の調査区内から検出された掘立柱建物跡は5棟で、5軒ともⅡ区の遺構群の南半部に位置している。その内、規模の明らかなものは、1・2・6号掘立柱建物跡の3棟である。

1・6号掘立柱建物跡は2間×3間で南北棟の建物跡である。1号掘立柱建物跡は総柱、6号掘立柱建物跡は側柱のみの構造をもち、間尺が6～7尺を測る。2号掘立柱建物跡は2間×2間のやや南北に長い側柱のみの建物跡であるが、南側柱列が3間で南妻に出入口をもつ可能性も考えられるものである。この構造をもつ掘立柱建物跡は、本遺跡の様に一般集落では、谷地前C<sup>註76</sup>跡SB01（南北2間、東西北妻が2間、南妻が3間）、SB03（東西2間、南北西妻2間、東妻3間）に見られ、その他、郡山台<sup>註77</sup>SB13（東西4間、南北西妻2間、東妻3間）、多賀城跡<sup>註78</sup>SB1198（東西4間、南北西妻2間、東妻3間）など官衙にもみられる。また、これらの掘立柱建物跡は、本遺跡2号掘立柱建物跡を含め妻の柱列は2間、3間ではほぼ4～5尺の間尺を測り、3間を持つ妻の柱列は、5棟とも東側か西側にかざられる。

3号掘立柱建物跡を除き、4軒は南北棟である。東側柱列の方向は、1・5・6号掘立柱建物跡が真北から7°～14°を向き、3棟ともほぼ同一の方向を示す。また、2号掘立柱建物跡も東側柱列の方向は真北から1°だけ西に向く。

掘り方の規模は、1・2・3号掘立柱建物跡が径50～100cmの方形を呈している。5・6号掘立柱建物跡は上層から削平されているが、径40～60cmの掘り方を持ち、1・2・3号掘立柱建物跡の掘り方より小規模であり、柱痕もやや小形となる。

時期決定については、わずかに遺物の出土が見られるが、小片で時期決定の決め手とは言いがたい。そこで切り合い関係から見ていくと、1・5・6号掘立柱建物跡は北東部分で重複しており、柱穴の切り合いがなく新旧関係については不明であるが、同時期に建っていたものではないことは明らかである。この3棟は2・9・22号住居跡を切っている。2号住居跡床面から非ロクロ丸底杯と3b類のロクロ杯が出土しておりⅡ期に位置づけられ、これら3棟の時期は2号住居跡より遡り得ないためⅢ期以降の時期と考えられる。

2号掘立柱建物跡は、床面直上層より非ロクロ無段丸底杯が出土した11号住居跡を切っているため、時期はⅡ期以降あるいは、Ⅲ期またそれ以降に位置づけられると思う。

また、3号掘立柱建物跡の時期については、他の住居跡と切り合いが無いため時期は不明である。

本遺跡における建物跡の性格について考えてみると、1・3号掘立柱建物跡は大きな掘り方を有

する総柱の建物で倉庫であろうと考えられる。また、5・6号掘立柱建物跡は側柱のみで柱穴の掘り方が他の3棟に比べ小さく、住居として使用されたものかもしれない。また、時期の明らかな3軒の掘立柱建物跡はⅢ期に属す。このことは、湿地性遺物包含層や遺構外より赤焼き土器や陶磁器類の遺物の出土も見られないため、中世以後の掘立柱建物跡となる可能性薄いことから、Ⅲ期の時期に存在した前述したような性格を有する掘立柱建物であろう。そして、Ⅲ期の竪穴式住居跡1・3・4・5・14・15・17・21・25の9軒と共存したものと思われる。(氏家 浩)

第92表 御山千軒遺跡掘立柱建物跡一覧表

名称	時期	柱列構造	柱間構造(間)		全体規模			軸線方向 (南北)	掘り方	柱痕直径 (cm)	備考
			梁行	桁行	梁行(m)	桁行(m)	面積(m <sup>2</sup> )				
1号建物	Ⅲ期以降	総柱	2	3	4.3	5.85	25.2	N-14°-W	方形	17~28	2・9・22号住を切る
2号建物		側柱	2	2	4.7	4.8	20.2	N-1°-W	方形	17~27	11号住を切る 南側柱列のみ3間
3号建物		総柱	2	(2)	1.4	1.88	—	N-2°-W	方形		
5号建物	Ⅲ期以降	側柱	2	(2)	4.8	—	—	N-7°-W	方形	15~20	2・9・22号住を切る
6号建物	Ⅲ期以降	側柱	2	3	4.4	6.0	26.4	N-90°-W	方形	15	

## 第5節 ピット

御山千軒遺跡では、総数69個のピットが確認されている。中でもⅡ区12~26グリッド内に集中して検出されている。Ⅱ区内のピットはほぼ住居跡・溝に近接して点在する傾向があるが、住居跡、溝との重複関係は住居跡を切っているピットが11基、溝を切っているピットが5基確認されている。建物跡との関係が不明なピットの中では、長軸50~60cm、短軸40~49cm、深さ26~39cmの範囲内で集中する特徴がある。ピットの配置に関してはほとんど一貫した規則性が認められない。出土遺物はほとんど覆土より出土しており、第6号ピット出土の杯は栗罎式の範疇に含まれる可能性が大きく、第47号ピット出土の杯は表杉ノ入式に含まれるものである。他に非ロクロ製の小形甕の底部、甕、鉢などが出土している。

これらの遺物から時期を想定してみるならば、栗罎式期から表杉ノ入式期までの範囲内におさまるものであり、御山千軒遺跡の住居跡とピット群はほぼ同一の時期に使用されていたと考えられる。最後に、これらのピット群の性格についてはまったく不明である。(佐藤 友之)

## 第6節 溝 跡

本遺跡においては溝跡は9条検出されている。このうち4条はI区北端より検出されており、残りの5条は他の遺構が集中しているII区中央部において検出されている。

溝跡の全長は耕地整備事業及び長年の耕作による攪乱によって、溝跡の両端が削平されているため不明である。溝跡の延びる方向は1・5・9号溝跡が南北に延び、2～4号溝跡は東西に延びる。7号溝跡はグリット線に沿って北西～南東に延びる。また6・8号溝跡は途中でほぼ直角に曲って南北に延びる。

溝跡と他の遺構との重複関係については、5号溝跡が9号住居跡を、9号溝跡が49号ピットを切っており、6号溝跡が11号住居跡と3号掘立柱建物跡に切られている。また1号溝跡が2号溝跡を切っている。残りの4条の溝跡は他の遺構との重複関係をもたない。なお、「水」に関係のある井戸跡、および湿地性遺物包含層に近接するII区の5条の溝跡は7号溝跡を除いた5・6・8・9号溝跡が南北に延びて、井戸跡、および湿地性遺物包含層の方向を向いている。

本遺跡の現地形は平坦で、ほとんど高低の差がない。また、それぞれの溝跡の両端にも歴然とした高低の差がなく、なかに7号溝跡のように両端部よりも中央部が低くなっている溝跡もあり、水が流れていた可能性は薄い。また溝跡の堆積状態より水が流れた痕跡を示す水成の堆積状態が認められたのは比較的深い6号溝跡のみであった。

溝跡からの出土遺物は非常に少なく、土師器、須恵器が少量出土しているが、いずれも磨滅の激しい細片のみであった。なお1号溝跡からは図示できる大きさの土師器杯片が1点出土している。時期は国分寺下層式期に相当すると推定される。

これらのことから本遺跡で検出された9条の溝跡の性格を推測すると、まずほとんどの溝跡の両端部に高低の差が認められないこと、および水の流れた痕跡を示す水成の堆積状態が認められないことから、水が流れることを前提とした排水路、用水路としての施設ではないと推測される。これ以外の使用目的としては区画のための施設、もしくは除水・除湿のための施設が想定される。とくに5～9号溝跡は住居跡、もしくは建物跡に隣接していることから住居跡内の除湿を目的とした住居跡外の施設である可能性が高い。しかし1～4号溝跡に関してはその使用目的は不明である。

本遺跡より検出された9条の溝跡の時期を決定できるような遺構の重複関係は確認できなかった。しかし、溝跡の覆土内より土師器・須恵器の破片のみが検出されたこと、及び住居跡の除湿を目的とした施設の一つと考えられることから、本遺跡が営まれていた平安時代には溝跡は開口していたと考えられる。

(穴戸美智子)

## 第7節 井戸跡

本遺跡調査部分からは井戸は一基しか検出されなかったが、この井戸の意義・形態等について考えてみたい。そのために県内における古代・中世の井戸について管見に触れたものを集成してみた(第94表)。井戸はその性格上井戸自体で使用年代を明確にし得るものが少なかったので、報告書に従って時期を示しておいた。本集成にもれたものもあろうし、調査の精度差がかなり異なっており、必要なデータを示すことができない資料もあったが、県内の井戸の概要を知ることによって、本遺跡の井戸の持つ位置もおのずから明らかになるであろう。

形態分類(第93表)を行ったので、それによって県内にみられる井戸の諸形態を説明することとする。

第93表 県内古代・中世井戸分類表

分類	形態		下部の組み合わせ	備考
I	円形	素掘り	—	—
II	円形	粘土張り	—	—
III	円形	丸太割り抜き枠	—	2分割後割り抜き
IV	円形	曲物	—	外に木杭
V	a	円形	桶側板	—
	b	方形	縦側板	円形曲物 横棧付 隅柱付
	c	方形	横側板	円形曲物 横棧付 隅柱付

第I類としたものは、円形素掘りの井戸で、径は0.8mから3.5mまでである。しかし、最小径の0.8mの井戸と最大径である3.5mの井戸は、報告書によっても井戸状のものであって、必ずしも井戸であるとは言えないようである。もっとも一般的なものは、径が1mから1.5mの井戸

第7節 井戸跡

で、深さは1 mから3 m程度である。断面形をみると円筒形のものと同漏斗状のものがある。意外に浅い井戸が多いことに気づく。県内の井戸でもっとも普遍的で数の多いタイプと言えよう。

第Ⅱ類としたものは、井戸枠の部分にあたる所に粘土を張りつけたものである。寡聞にしてこのような形態の井戸を知らないが、大久内遺跡より一基のみ検出されているだけである。深さも0.6 mときわめて浅いのが気になるが、報告を尊重して井戸として分類した。

第Ⅲ類は、金山遺跡よりの出土例が知られているのみである。太い丸太材を2分割した後、それぞれ内部を削り抜いて再び一緒にしたものである。

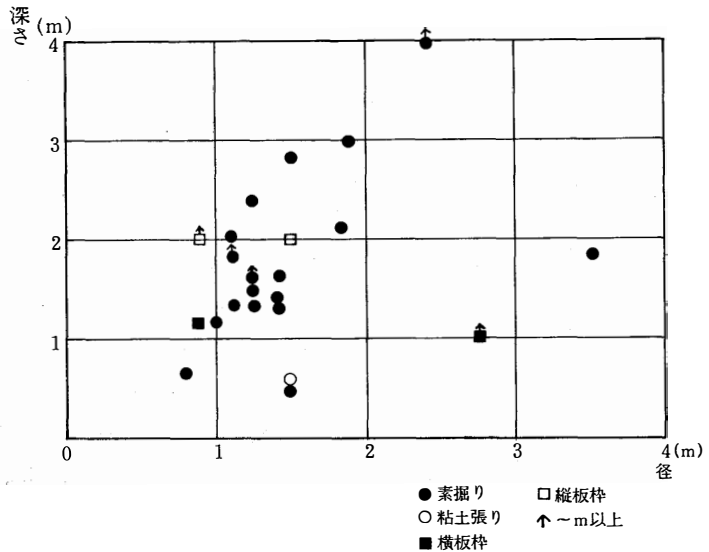
第Ⅵ類は、大きな曲物を井戸枠として作成したものである。径は0.5 mから0.6 m位のものである。1重のものもあるが、多くは2重・3重と巻いてあるものが多く、その中には細長い縦板を補強のためにはさんでいるものが通有である。曲物の内側は1~2 cm毎に縦に刻み目をつけて曲げやすくしてある点は、当時の一般的技法である。曲物の外側には、上や下に1個所ないし数个所にタガ状にさらにまわしてあるものが多い。現在までの所は会津盆地内のみ出土であって、現在も会津盆地で多く曲物を製作していることを考えると興味深いものがある。

このような曲物枠の井戸は単独に使用されるほか、方形板材の井戸枠の下層に据えつけて、重層的に使用されることもある。それを次に述べてみよう。

第Ⅴ類は長い板材を井戸枠として使用したものを一括してある。V-aは風呂桶のように板材を縦に円形に並べたものである。おそらくタガ状のものが外側にあったと思われるが確かめられていない。古館遺跡では板材

は腐食して全く現存してはいなかったが、壁面に板材の痕跡が明確に残存していた。ここでは内側に丸い小竹のようなものを縦にたくさん打ち込んであるように見えた。

V-bは井戸枠として板材を縦に並べたものである。板材を並べてその接合部の外側にはもう1枚の板材を押えて2重にしたものがある。4隅には柱がたててあったり、補強のための横棧を内側につけ



第209図 県内古代・中世井戸の大きさ一覧

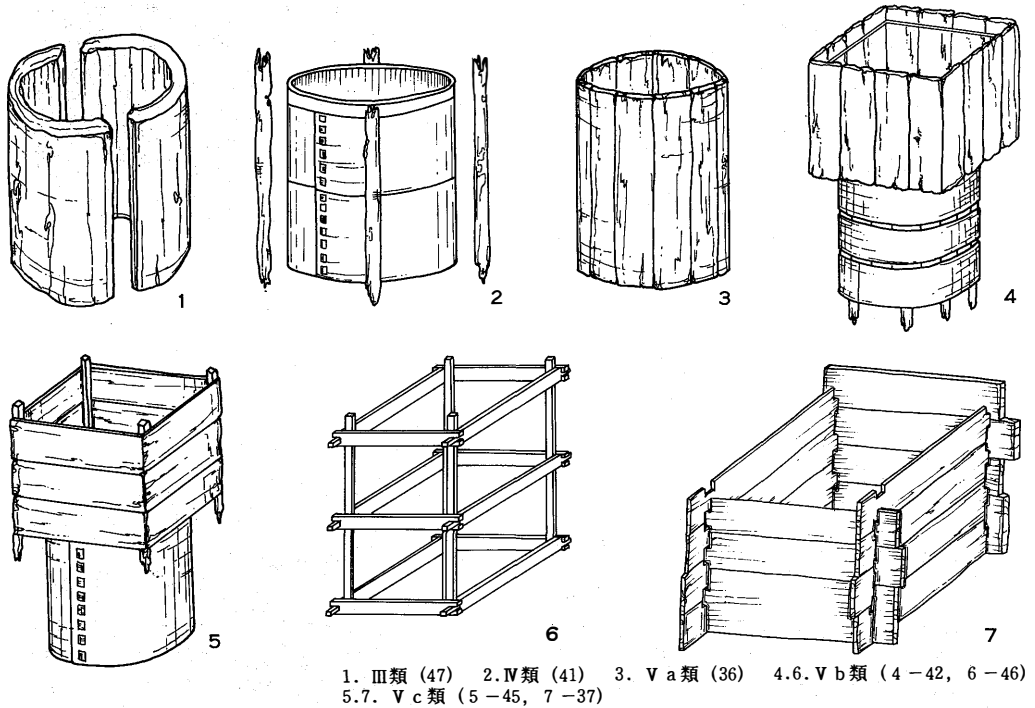
たものなどがある。下には円形の曲物を置いた形が普通である。

第94表 県内古代・中世井戸集成

・空欄は不詳またはないもの  
 ・径・深さともに現存部

No.	遺跡名	所在地	形状			出土遺物	時期	註	備考
			径(m)	深さ(m)	形態				
1	三貫地(田町場A地点)遺跡	相馬郡新地町	1.2	2.4	円形・素掘り	木材・漆塗碗・銅製装飾品・庖丁	古代~中世	79	
2	真壁城跡	双葉郡富岡町	0.95	3.47	円形・素掘り		中世	80	
3	八幡台遺跡	いわき市	1.2	1.6以上	円形・素掘り	多数の礎	中世?	81	
4	金谷館跡(1号)	伊達郡国見町	2.3	4.0以上	円形・素掘り	灰釉碗・片口摺鉢・注口小形壺 赤漆塗碗・石臼・硯・銅製しゃもじ	中世以降	82	
5	金谷館跡(2号)	伊達郡国見町	1.1	1.3	円形・素掘り	曲物底板・骨片	中世以降	82	
6	金谷館跡(3号)	伊達郡国見町	1.4	1.4	円形・素掘り	わら状植物繊維	中世以降	82	
7	大枝城跡	伊達郡梁川町					中世		昭和57年10月現在調査中
8	上岡館跡	福島市			円形・素掘り	曲物・挽物製漆塗碗・編物	中世?	83	
9	油王田遺跡(Q45-1号)	安達郡安達町	1.8	2.1	円形・素掘り		中世?	84	油王田館跡
10	油王田遺跡(Q45-2号)	安達郡安達町	1.4	1.3	円形・素掘り		中世?	84	
11	油王田遺跡(I-1号)	安達郡安達町	1.2	1.3	円形・素掘り		中世?	84	
12	油王田遺跡(I-3号)	安達郡安達町	1.9	3.0	卵形・縦側板		中世?	84	
13	中村館(1号)	郡山市	2.0前後		円形・素掘り		中世	85	
14	中村館(2号)	郡山市	2.0前後		円形・素掘り		中世	85	
15	中村館(3号)	郡山市	2.0前後		円形・素掘り		中世	85	
16	中村館(4号)	郡山市	2.0前後		円形・素掘り	わら状植物繊維	中世	85	
17	中村館(5号)	郡山市	2.0前後		円形・素掘り		中世	85	
18	中村館(6号)	郡山市	2.0前後		円形・素掘り		中世	85	
19	中村館(7号)	郡山市	2.0前後		円形・素掘り	漆塗碗	中世	85	
20	穴沢館(2基)	郡山市			円形・素掘り		古代・中世	86	57年度9月現在調査中
21	黒田遺跡(10基)	郡山市			円形・素掘り9基 方形隅柱横棧型			86	57年度9月現在調査中
22	清水台遺跡	郡山市						86	
23	鳴神遺跡	郡山市			円形・素掘り	土師器片・須恵器片・木片・竹片他	古代	86	
24	城の内遺跡	郡山市						86	57年度発掘調査
25	薊の内B遺跡	岩瀬郡長沼町	1.5	0.5	円形・素掘り		古代?	87	
26	門無遺跡(1号)	岩瀬郡長沼町	1.5	2.8	楕円形・素掘り	板片・種子	古代?	87	
27	門無遺跡(2号)	岩瀬郡長沼町	1.0	1.2	円形・素掘り		古代?	87	
28	門無遺跡(3号)	岩瀬郡長沼町	0.8	0.7	円形・素掘り		古代?	87	
29	大久内遺跡(1号)	岩瀬郡長沼町	3.5	1.8	円形・素掘り		古代?	88	
30	大久内遺跡(2号)	岩瀬郡長沼町	1.4	1.6	円形・素掘り		古代?	88	
31	大久内遺跡(3号)	岩瀬郡長沼町	1.5	0.6	円形・粘土張り枠		古代?	88	
32	大久内遺跡(4号)	岩瀬郡長沼町					古代?	88	
33	大久内遺跡(5号)	岩瀬郡長沼町	1.2	1.5	円形・素掘り		古代?	88	
34	大久内遺跡(6号)	岩瀬郡長沼町					古代?	88	
35	大久内遺跡(7号)	岩瀬郡長沼町					古代?	88	
36	古館遺跡	西白河郡矢吹町	1.5	2.0	円形・桶側板	斎串・土師質土器	中世	89	
37	佐平林遺跡(VI区)(1号)	西白河郡東村	1.1	2.0	円形・素掘り	曲物	古代	90	
38	佐平林遺跡(VI区)(2号)	西白河郡東村	2.7	1.0以上	方形・横側板	曲物・木製容器類・土師器・須恵器	古代	90	
39	関和久遺跡	西白河郡泉崎村	1.1	1.9以上	円形・素掘り		古代?	91	白河郡衙跡
40	金山遺跡(4基)	耶麻郡会津坂下町	2.0~3.0前後	2.0以上	円形・素掘り	わら状植物繊維・木の葉・木片 漆塗碗・弓・土師器	古代	92	57年度9月現在調査中
41	金山遺跡(1号)	耶麻郡会津坂下町			円形曲物枠 外側に木杭		古代	93	昭和12年発見
42	金山遺跡(2号)	耶麻郡会津坂下町	方1.0 円0.6		方形縦側板横棧型 +円形曲物枠		古代	93	昭和12年発見
43	金山遺跡(3号)	耶麻郡会津坂下町	0.6		円形曲物枠		古代	93	昭和12年発見
44	金山遺跡(4号)	耶麻郡会津坂下町	0.5		円形曲物枠		古代	93	昭和12年発見
45	金山遺跡(5号)	耶麻郡会津坂下町	方0.9 円0.5	1.1	方形横側板+枠 円形曲物	土師器・底面木炭敷	古代	93	昭和13年発見
46	金山遺跡(6号)	耶麻郡会津坂下町	0.9	2.0以上	方形縦側板 隅柱横棧型		古代	93	昭和12年発見
47	金山遺跡(7号)	耶麻郡会津坂下町			円形丸太刳り抜き枠		古代	93	昭和12年発見
48	金山遺跡(8号)	耶麻郡会津坂下町					古代	93	昭和12年発見・詳細不明
49	金山遺跡(9号)	耶麻郡会津坂下町					古代	93	昭和12年発見・詳細不明
50	細工名西遺跡(1号)	耶麻郡会津坂下町			円形曲物枠		古代?	93	
51	細工名西遺跡(2号)	耶麻郡会津坂下町			円形曲物枠		古代?	93	
52	細工名西遺跡(3号)	耶麻郡会津坂下町			円形曲物枠		古代?	93	
53	北田城跡	河沼郡湯川村	0.6	0.66	円形曲物枠	籾?	中世	94	昭和57年工事中発見
54	新宮城跡(3基以上)	喜多方市	方 円0.6		方形縦側板 隅柱横棧型+ 円形曲物枠	箸状木製品・木片・銅銭・陶器片	中世	95	他の2基は円形素掘り?

V-cは板材を横に組み合わせたもので、4つの角は凸凹の柄を端部で組み合わせたものや、切り込みをつけて井桁状に組み合わせたものがある。前者は金山遺跡6号井戸にみられるし、後者は佐平林遺跡にみられる。御山千軒遺跡の井戸はこの後者の形態に属するものである。やはり、横桟をつけたり、隅柱を立てたりしたものがあり、下に円形曲物の井戸枠を置いた形が通有である。



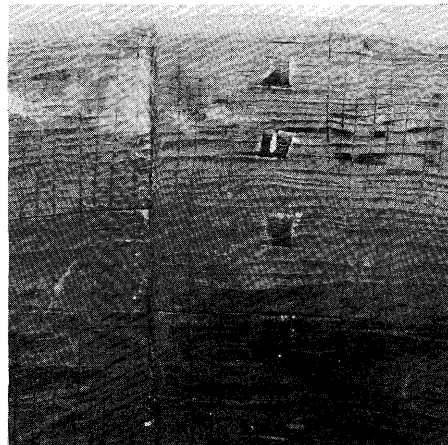
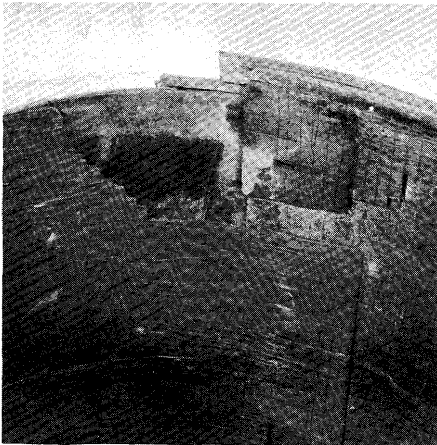
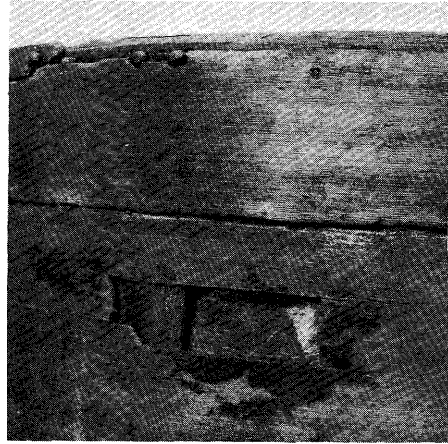
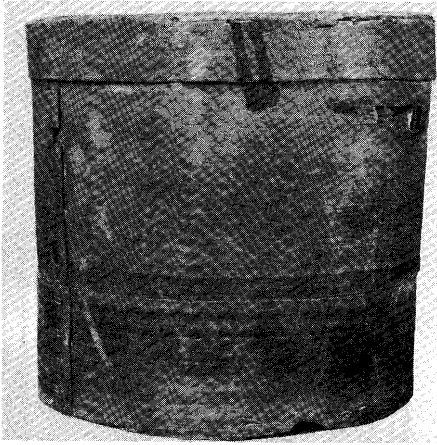
第210図 木材井戸枠模式図

県内の現在までの資料について概観したが、他県にはまだまだ多くの類型があるようであり、今後県内の調査が進むことによって種類は増加するものと思われる。今年度もすでに郡山市・会津坂下町・湯川村などから井戸が検出されており、良好な資料が倍加すると思われる。そういう意味では今回の分類は基礎的段階にとどまるものである。

ところで、御山千軒遺跡の井戸は、この分類によると第Ⅲ類cに属するものである。県内では佐平林遺跡(VI区)2号井戸がある。板材を井桁に組み合わせるため、端部に近い所を加工して切り込みをつけたもので、その形態は他県における同類のものと通有である。御子ヶ谷遺跡SE01井戸(静岡県)・榎原遺跡第15号井戸(奈良県)・西隆寺(奈良県)などが同類である。黒田遺跡(郡山市)の井戸群の中にもこの種のものがあるようであるが、現在調査中であり実見していないので詳しいことは不明である。



## 第7節 井戸跡



第211図 北田城跡出土曲物井戸

本遺跡の井戸枠板の形態は、両端に柄孔をもつものが大部分であり、柄の板材と思われるものは湿地帯出土の1点にすぎない。金山遺跡6号井戸や檀原遺跡第9号・第18号などにみられる形態は、きちんと組み合わせようになっている。そういう点で本遺跡の井戸は、前述のごとく第2次的使用と考えた方が都合がよいようである。柄をその板材のもつ形態に合わせてきちんと組み合わせている部分は少なく、便宜的に利用しているように思われること、板材の1個所ないし3個所に井戸枠として利用するには不必要な加工部があること、形や大きさなどが種々異なった板材を寄せ集めている点などを指摘できる。

また、下部には曲物もみられない点もやや特色あると言えようか。井戸の存在する所は、湿地の端に近い所であり、L-VII面で井戸枠を確認しているが、それより上部にも井戸枠は当初組み

合わさってあったのではなからうか。補強のため木杭が現在残る井戸枠より高い位置にあることを先にあげておいた。

井戸内の土師器や須恵器も、井戸L-IVの破片では細片のみのため時期を明らかにし得ず、L-IIIの土師器ではすべて回転糸切り痕を残す杯であったこれらを総合的に考えてみると、井戸の使用年代は明確に決定することは不可能であるが、ここではおおよそ10世紀前後に比定しておきたい。(渡邊 一雄)

## 第8節 木 製 品 (曲物・紡織具・祭祀具)

### 曲物について

曲物は厚板と側板の接合方法と厚板の形態から、円形曲物の蓋と身、折敷にわけて記述した(第3章第7節Ⅲ、曲物、第157図)。これは飛鳥・藤原宮と平城宮の発掘調査報告書を参考にしたが、<sup>註96</sup>御山千軒遺跡で蓋板と底板の区別に用いた基準は、前記報告書中で、側板をたてるために厚板の周縁に凹線を刻む方法(蓋板A)<sup>註97</sup>とはわずかに異なり、L字形の切りかきを周縁にめぐらしている状態のもので、両者は本質的に異なるものかもしれない。

現在行われている曲物作りは、福島県松枝岐村例や青森県上津軽郡金木町例などでは側板を彎曲させるためには熱湯で柔らかくした板をゴロと呼ばれる円筒形に巻きつけ、キバサミでとめて乾燥させ、円形に切った底板または蓋板を側板の中にはめこみ木釘でとめる方法がとられている。<sup>註100</sup>この方法は飛鳥、藤原宮や平城宮の報告書の中で唯一の身のとりつけ方とする方法(第157図2)であり、伊場遺跡では「クレゾコ」としているもの<sup>註101</sup>である。御山千軒遺跡出土の曲物は出土時点ですでに完形のもものが3点(第43図版2・3・4)と少なく、長期保管中に出土時の形に復することもできなくなったため、側板の本来の長さや幅を計測することは不可能で、厚板との組み合わせを検討することはできなかった。しかし、厚板の形状や、残された桜皮の位置、木釘の存在などから、円形曲物蓋と身、折敷の三種にわけた。

「平城宮発掘調査報告Ⅵ」によれば、曲物容器は円形のものにかぎられ、折敷はふくまれず、厚板の形状により蓋と身にわけられる。この蓋と身の直径によって分類している。その結果、13.5cm～16.5cm前後の曲物容器が最も多く全体の70%に近く、蓋は身の15%程度である。このことは曲物容器の大多数が蓋をせずに用いたことによるのであろうと考察しているが、特に20～24cm前後の身にあう蓋は出土しないようであり、小型の物と大型の物には蓋の存在がわずかながら考えられるとしている。

御山千軒遺跡出土の蓋板と底板の直径を第95表にしめした。(蓋板は内周、底板は外周を計測)こ

第8節 木製品

第95表 曲物蓋・底板の数と割合

寸法		蓋		底板		合計	
		数	%	数	%	数	%
I	12 cm前後	11	31	9	25	20	56
II	15 cm前後	4	11	3	8	7	19
III	17 cm前後	2	5	2	5	4	10
IV	20 cm前後	1	3	1	3	2	6
V	25 cm前後	1	3	1	3	2	6
VI	30 cm以上	—	—	1	3	1	3
合計		19	53	17	47	36	100

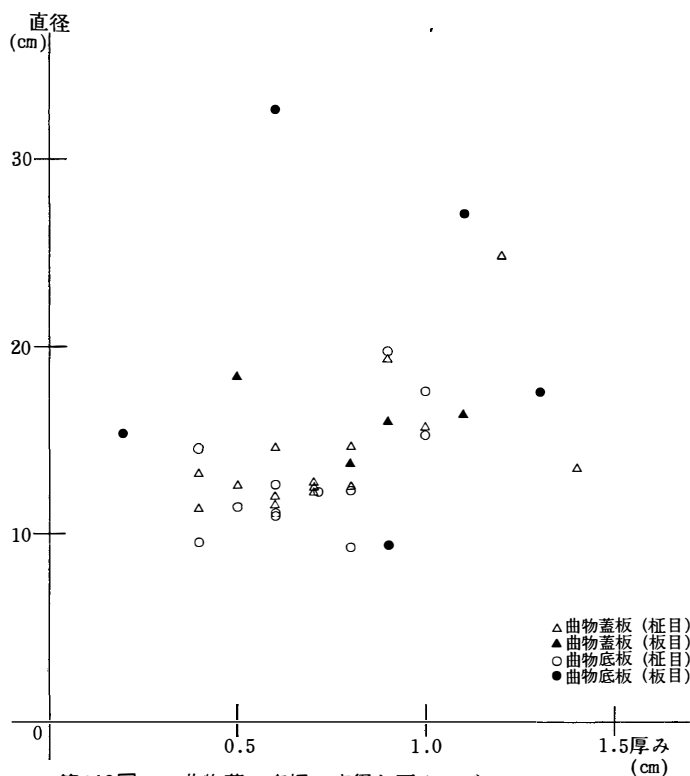
第96表 曲物蓋・底板の木取法

木取法	蓋		底板		合計	
	数	%	数	%	数	%
柾目	15	42	12	33	27	75
板目	4	11	5	14	9	25
合計	19	53	17	47	36	100

れによると、Iは12cm前後、IIは15cm前後、IIIは17cm前後、IVは20cm前後、Vは25cm前後、VIは30cm以上であり、Iの12cm前後が全体の半数をしめる。「平城宮VI」でいう13.5～16.5cmの大きさにふくまれる御山千軒遺跡のI～IIIの合計は全体の85%にあたり、「平城宮VI」と同じ傾向にある。また蓋と身の割合は53：47とわずかに蓋の数が多い(第96表)。各大きさ毎にその数は対応しているが(第212図)、30cm以上の大型のものには蓋がみられない。しかし、蓋の定義が註97で述べたように確実でない当遺跡においては形状

の比較にとどめたい。

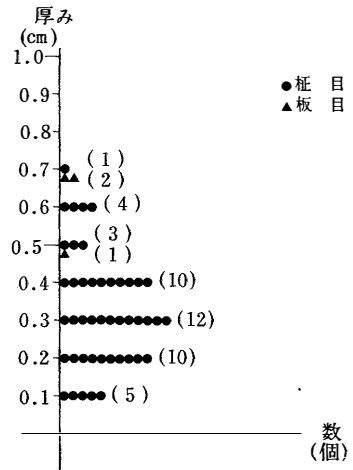
また、各大きさによる木取り法は、「平城宮VI」でI～IVの大型容器は板目材を用いる例が多く、中型のVでは柾目と板目が半々で、小型は柾目を基本としている。御山千軒遺跡では、第212図にみるように15cm以下のものは蓋も身も柾目が多い。また厚みは直径の大小には影響されないが、蓋板と底板の直径が一致するものは厚みも同じ傾向にある。厚板全体の中で蓋板と底板に対する木取り法も両者に共通して柾目板が75%と多数をしめている(第96表)。



これは、柾目板をつかう小型のI～IIIが全体の85%にあたることからもうかがえる。

次に側板であるが、平城宮でも「側板の多くは遊離して破損しており、直径と高さとの関係について分類することはできなかつた。」<sup>註102</sup>というように、御山千軒遺跡においても同様であり、多数

の側板が同一個体かどうかの確認作業も不完全であった。平城宮では何のための刻み目(けびき)が小型の曲物には無く、中型以上のものに施される傾向にあると述べられているが、御山千軒遺跡において側板の本来の長さが不明な現在、小型か大型かも不明でその傾向を検討することはできなかった。しかし、厚みについては綴じ合わせ部が二重になるために側板の両端を薄く削ぐ工夫がされていることを除けば、本来の側板の厚さが計測できた(第213図)。これによると側板にも柱目板と板目板があり、柱目板は全体の93%をしめる。また、板目の側板が厚さ0.5cm以上にみられるのにならば、柱目の側板が0.4cm以下に多くみられる。

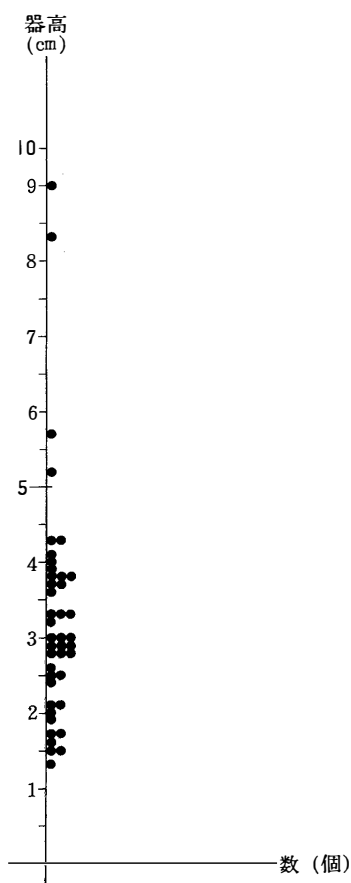


第213図 曲物側板の厚みのグラフ

このことは柱目板の方が薄い側板を作ることができ、加えて側板は薄いものを多く必要としていたことを裏付けるものである。側板の製法は、屋根を葺く木羽作りと同様に木理にそって打撃を加えて薄く削ぐ方法がとられていたのであろう。

刻み目(けびき)については本文中でも述べたが(第167図)、側板の厚さと関係があるように思える。すなわち薄い側板には使われないということではないが、厚さ0.4cmを境に厚い側板に刻み目(けびき)が増加する傾向にある(第167図2a)。また、折敷の側板は刻み目のあるものが厚さ0.2cmと0.3cmのみに限られるが(第167図2b)、刻み目の位置が強く曲る所に限られるようである(第164図63, 第165図65)。

底板または蓋板となる厚板のまわりに側板がとりつく時に、側板の内側に生ずる厚板の痕跡を「当たり」として本文ではあつかった。この「当たり」が生ずる接合方法は第157図に従えば円形曲物の蓋側板と折敷側板に限られ、「当たり」のないものは円形曲物の身側板になる。しかし御山千軒遺跡出土の折敷の底板と側板の接合方法(第163図58, 第164図59ab)からみれば、「当たり」のない折敷の例がある。第167図1a・1bは円形曲物(蓋と身)側板と折敷側板の「当たり」のある割合である。円形曲物に関して「当たり」のあるものは厚さ0.3cm~0.4cmに多くみられ0.2cm以下と0.5cm以上には「当たり」のないものが多い。また、「当たり」のあるものの数はわずかではあるが「当たり」のないものより多い。このことは、円形曲物の蓋板が身の底板よりわずかに出土量が多いとしたことと同じ傾向になり「当たり」のあるものが円形曲物の蓋側板と考えられる。折敷側板としたものについては、第157図に従う折敷の接合方法とは異なり「当たり」のあるものが少ない傾向がみられる。これは第163図58, 第164図59abのような接合方法が多いことになろう。飛鳥・藤原宮発掘調査報告では折敷の3種の変化について「藤原宮出土の折敷もAである。Bが主に作られるようになるのは奈良時代からである。Cは奈良時代にもあるが平安時代後半以



第214図 曲物側板の器高

降に主に製作されており、その形態は三方の形をとっていることは絵巻物によってわかる。このような折敷製作技法の変化も、曲物容器と同じく量産化と関連するものであろう<sup>註103</sup>としているが、御山千軒遺跡の折敷製作方法は先述の要素に加えて、地域的なものと、年代なども加わった結果であろう。

側板の高さ(上下の幅)は柁目板の場合特に横折れがしやすく、かつ、折れ口がきれいな為本来の高さかどうかは推定の域を出ない。しかし、観察によって側板の上下が残存していると思われるものの高さについて第214図にあらわした。これによると側板は円形曲物身と蓋、折敷の3種をまとめて約1.5cmから4cmまでの高さが多く、まれに5～6cm、8～9cmのものもある。この中でも特に3～4cmの高さの側板が多い傾向がみられる。容器の中でも3～4cmの側板をもつものは、円形曲物の蓋の側板や折敷の側板のように浅いものが想定される。このことは接合方法から判断した蓋の厚板が多い傾向と、「当たり」が生ずる蓋の側板または折敷の側板が多い傾向と一致する。

以上のように曲物容器について厚板の直径と木取り法、側板の厚み、刻み目(けびき)、「当たり」、高さ(上下の幅)の

6項目については、第157図に示す平城宮跡及び飛鳥・藤原宮跡の分類基準にそって検討を加えてきた。しかし、蓋と身の区別については、厚板の形状がわずかに異なる点があり、また、折敷についても底板と側板の接合方法が折敷3種としたものと異なるものがある。それに伴って側板の「当たり」の有無や側板の高さについても蓋板と身の底板の区別が異なれば、その傾向も生かされた方が異なるのかもしれない。しかし、蓋と身の逆転はあってもその傾向を示す数値については第167・212～214図のようにあらわれていることに変化はない。地域的にも年代的にも御山千軒遺跡と比較できる資料の増加をまって今後の曲物容器研究に加えたいと思う。

### 木製紡錘について

御山千軒遺跡出土の紡錘は、中央に小孔をもつ紡輪と紡茎の一部が出土している。紡輪は、第78図、第63表にみるようにヒノキ材を使用した径4.2cmのものである。

紡輪の役割は、糸を撚るための回転軸を一定の速度で回転させるハズミ車と、撚った糸を巻き

第 97 表 県内の土製・石製・鉄製紡錘の出土例

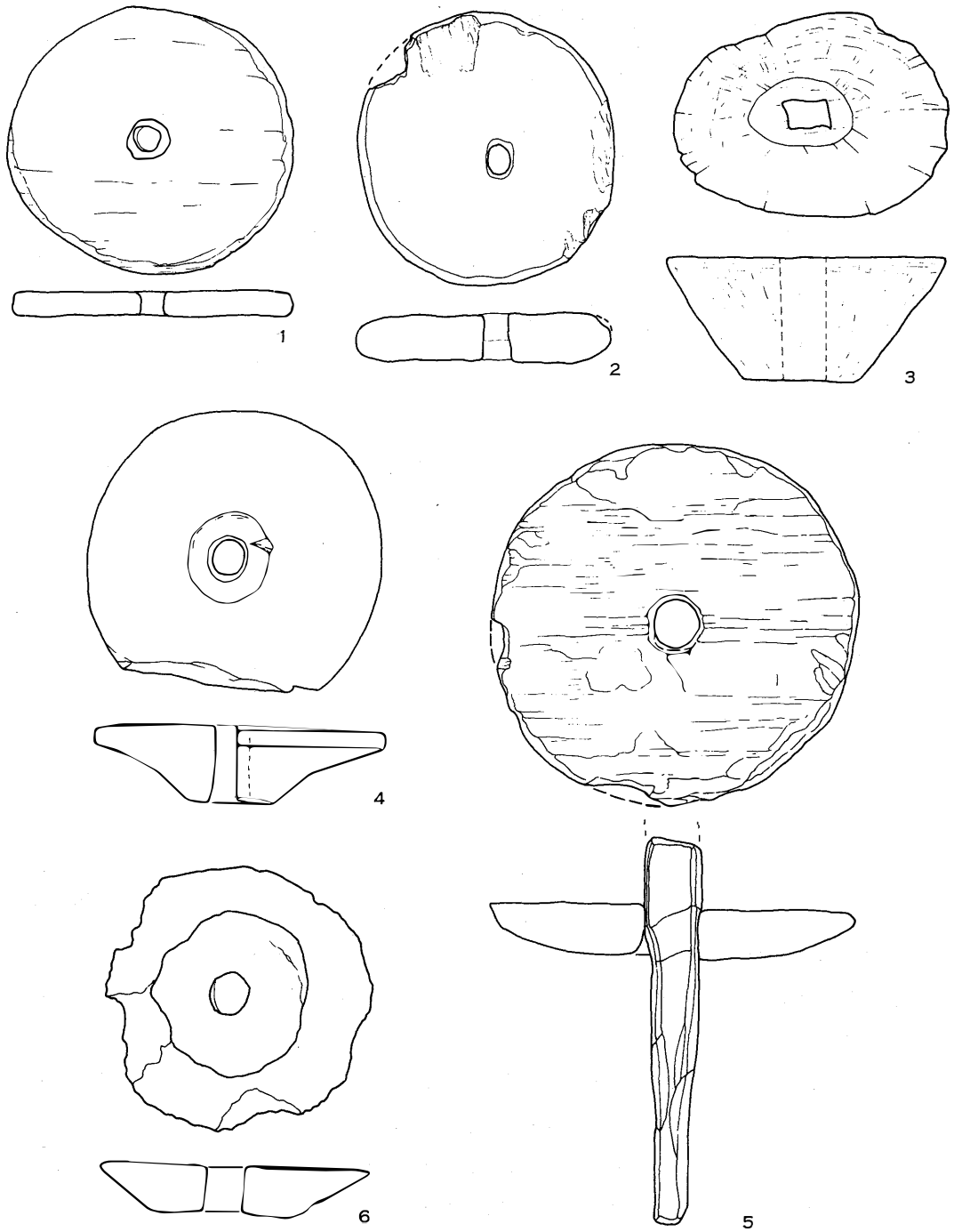
遺 跡	土 製						石 製						鉄 製				
	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	基長 (cm)	重さ (g)	長径 (cm)	短径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	基長 (cm)	重さ (g)	径 (cm)	厚さ (cm)	孔径 (cm)	基長 (cm)	重さ (g)
八 幡 台	4.2		max2.4 min1.1	0.7		39.8											
	4.7		max1.9 min1.1	0.7		42.7											
	4.8		max2.3 min0.6	0.6		46.5											
徳 定 B	2.35	1.9	3.3	0.8		29.8<	4.3	3.0	1.3	0.8		34.4					42.3
						59.6<	3.9<	3.2<	1.2<	max0.6 min0.5	21.4						
						97.1<						41.4					
												42.7					
徳 定 A												49.9					
柿 内 戸												5.0	0.4	0.4	19.0	軸 込 41.3	
矢 ノ 戸						104.6						4.4	0.5	0.4	2.8	42.2	
						57.7<											
七 斗 蒔	4.6	3.0	2.5	0.6								4.5	0.4	0.5	3.5		
下 原							4.0	2.9	1.8	0.8							
板 倉 前 B							5.4	4.5	2.6	0.6							
芥 内							3.9	2.3	2.1	0.8		36.0					
三 合 谷 地												5.4<	0.6<	-	10.2<	-	
谷 地 前 C							3.9	3.0	1.8	0.6		4.0	4.8	0.2	0.4	12.0<	19.0< 軸 込 22.0<
佐 平 林 V												5.0	0.2	0.7			
西 原							3.9	2.5	1.6	0.6		4.0					
佐 平 林 VI												4.5	0.5		18.5<		
郭内横穴墓群							3.8	2.2	2.5	0.7		57.0					

とる際の受け止め具である。紡輪の重さは、その材質と大きさで異なるが、そのことは撚る糸の種類と、撚りの強弱に影響を与える。

ふつつ遺跡から出土する紡輪は土器のようなまとまった数ではないが、各遺跡ごと1・2点の出土をみる。県内の遺跡から出土している紡錘のいくつかを第97表に示してみた。材質は、土製・石製・鉄製が多く、木製は御山千軒遺跡のみである。これは鉄製と木製の遺存が悪いということも重なっていると思われるが、特に木製紡錘の出土例は県外に求めてもあまり多くはなく(第215・216図, 第98表), 報告書中でも紡錘の存在さえあまり考察されていないようである。しかし、現在も使用されている紡錘は、木製のものが多いという民俗例からみて木製紡錘の存在は古くから考えられる。

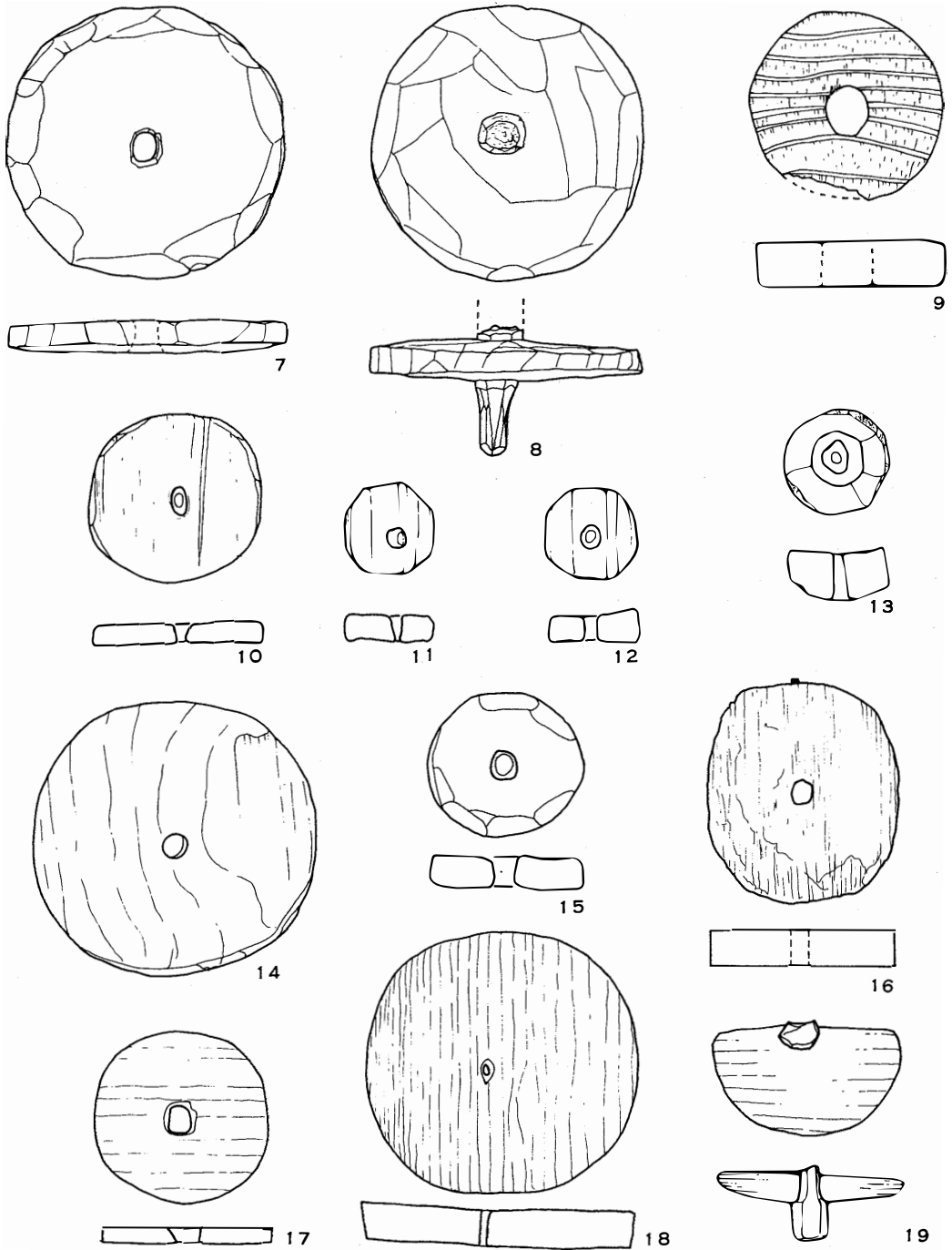
形態は4種の材質に共通して、うすい円盤形と厚みのある台形の2種類である。中でも厚みのある台形は土製と石製に多く、うすい円盤形は鉄製のほとんどと木製に多い。長径は、木製を除

第8節 木製品



唐古遺跡出土 1 池上遺跡出土 2 古殿遺跡出土 3  
 原深町遺跡出土 4 服部遺跡出土 5 吉身南遺跡出土 6

第215図 各遺跡出土木製紡錘



平城宮遺跡Ⅶ出土 7・8 蒲沼遺跡出土 9 草戸千軒遺跡出土 10~14 落合遺跡Ⅱ出土 15  
 堀越城跡出土 16 葛西城跡出土 17・18 御山千軒遺跡出土 19

第216図 各遺跡出土木製紡錘



第 8 節 木 製 品

く 3 種の材質では 4 cm 前後が多く、木製は 6 cm 前後のものが多い。厚みは土製と石製が 1.5 ～ 3 cm 前後、鉄製は 0.5 cm 前後、木製は 1 cm 前後である。重さは土製と石製については遺存がよい  
ため計測可能で 30 ～ 40 g 前後のものが多い。しかし、鉄製は錆が付着しているため、その重さは  
本来のものではなく、また、木製も出土状況ですでに含水状態にあり、保管中も水づけの状態  
で木器処理後は薬品等の重さが加わり、重さの計測はできなかったものも多く、比較が困難である。

このように現在使用されている例が一番多い木製紡錘については、遺物の記録が不完全であり  
使用されている樹種の同定結果さえないものが多い。

現在使用されている木製紡錘は、長径も厚さもある円盤形と台形の 2 種であるが、<sup>註104</sup> 神奈川県例

第 98 表 各遺跡出土木製紡錘一覧

( ) は残存長

遺 跡 名		法 量					材 質	時 期
		径 (cm)	厚み (cm)	孔径 (cm)	重さ (g)	棒茎長 (cm)		
唐 古	1	約 6.4	0.6	0.6			—	弥 生
池 上	2	6.0	1.0	0.7			—	弥 生
古 殿	3	1.5 × 2.7 6.4 × 4.3	2.7	1.1			針 葉 樹	弥生～古墳
原 深 町	4	6.6	1.7	1.0			—	古 墳 前 期
服 郡	5	8.15 × 8.0	1.15	1.5			—	古 墳 前 期
吉 身 南	6	6.0	1.1	0.9			—	古 墳 前 期
平 城 宮 VII	7	6.0	0.6	0.8	含水状態 17.6		—	平 安
平 城 宮 VI	8	6.0	0.8	0.6～1.0	21.15	(3)	—	平 安
蒲 沼	9	4.4	1.0	1.2～1.0			—	平 安
草戸千軒 1970	10	3.5	0.4	0.2			—	中 世
草戸千軒 1973	11	1.8	0.5	0.4			—	中 世
草戸千軒 1973	12	2.0	0.5	0.4 × 0.5			—	中 世
草戸千軒 1973	13	2.3	1.0	0.2			—	中 世
草戸千軒 1979	14	5.9	—	0.5			—	中 世
落 合 II	15	3.1	0.65	0.5			—	平 安
堀 越 城	16	4.2 × 4.7	0.8	0.4				中 世
葛 西 城	17	3.6 × 3.8	0.3	0.7				中 世
葛 西 城	18	5.7	0.75	0.2			サ ク ラ	中 世
御 山 千 軒	19	4.2	0.6	0.5	3.4	1.7	ヒ ノ キ	平 安

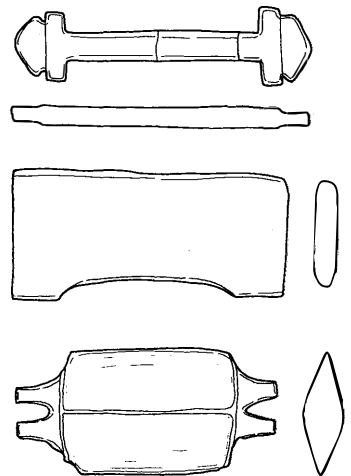
では50～270g、長径6～10cm、厚み2.5～5.5cmである。これらと第198・199図、第77表に示した遺物の計測値とは大きく異なる。

表の結果から土製・石製・鉄製の3種が厚みの大きさが異なりながらも、ほぼ同じ重量をもつことから、撚る糸の種類や撚りの強弱で重さが<sup>註105</sup>変化することはあっても、紡錘がハズミ車という一つの性格をもつことから、回転するための一定重量が必要とされるであろう。当遺跡出土の木製紡錘が径4.2cm、厚み0.6cm前後の木質の重さで実際の使用にたえられるかどうか不明である。

実用の紡織具が馬形などの形態を伴って、祭祀に使われたという例がある。『延喜式』の「神祀式」の祭料に紡織具がみられることや祭祀関係の<sup>註106</sup>遺跡から石製・金銅製の模造品で出土する例があることを考えあわせると、御山千軒遺跡出土の紡錘は後述する「形代」の<sup>註107</sup>可能性が強いように思われる。

### 機織具について

遺跡出土の機織具の抽出は、1919年に高橋健自氏によって上野国勢多郡南橋村大字上細井（現在の群馬県上細井遺跡）<sup>註108</sup>稲荷山古墳出土の石製模造品からおこなわれている。それらのうち腰掛を除く3点は第217図にみられるような形態をしており、それぞれ1、<sup>ちまり</sup>藤・2、<sup>おほ</sup>箴・3、<sup>ひ</sup>梭と命名されている。その後、機織具の研究は太田英蔵氏が1937年に発掘された唐古遺跡出土の木製品の中に、『原始機の「杼」を確認』<sup>註109</sup>し、1948年には、「登呂遺跡出土の織具」<sup>註110</sup>の中で高橋氏のおこなった石製模造品中の機織具の名称を再検討し、この「箴」は「中筒」<sup>なかづつ</sup>ではないかとの見解を述べている。また、太田氏は唐古遺跡や登呂遺跡のような弥生時代の遺跡出土の木製品にも機織具を見出ししている。他に、その存在を示す例として、文化庁保管の伝香川県出土の銅



第217図 上野国勢多郡南橋村大字上細井稲荷山古墳出土の石製模造品

鐸に整糸の図といわれる絵画が見られ、弥生時代以降古墳時代から奈良・平安時代の機織具の存在が認められる。前記の上細井稲荷山古墳出土の石製模造品や『延喜式』の「神祀式」に記載された祭料の記録や伊勢太神宮内神宝の中にも「<sup>たたり</sup>杼」「<sup>かせ</sup>棹」などが、<sup>註111</sup>沖の島遺跡出土の金銅製模造品の中にも「杼」「<sup>註112</sup>棹」「刀杼」などがみられる。

太田氏によれば、弥生時代の機織具は無機台機法で、唐古遺跡及び登呂遺跡出土の木製品をあてると第218図1のように復元される。また、第218図2は横機の基本的構造とその部位名称であるが、これは有機台機法になった<sup>いざ</sup>居座り機・<sup>ばた</sup>地機じばたの中であまり変化せずに踏襲されている。太田氏は上細井遺跡出土の遺物から、古墳時代には有機台機法が行われていたと考察している。

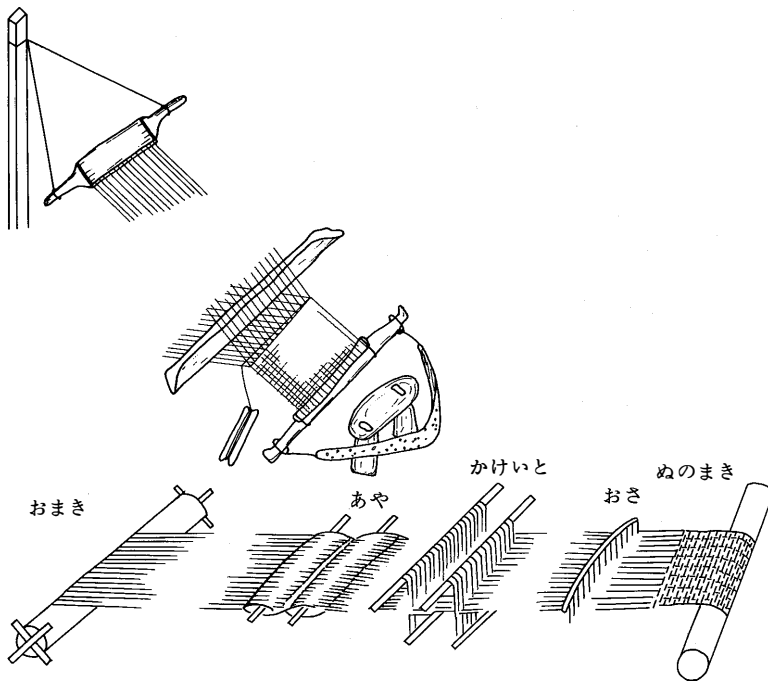
第8節 木 製 品

機織具の基本的構造は第3章Ⅲの機織具の中ですでに述べた。機織の技術は、平織りでは『経巻具』と『布巻具』によって張られた経糸に緯糸が一段おきに交差するように打ち込まなければならぬ。そのために、経巻具と布巻具の間には、経糸を上下にわける『開口具』と緯糸を左右に渡す『緯越具』、それを打ち込む『緯打具』がある。これらの用途から部品の形態がきまってくるものであり、その形態の変化は、能率をあげるための結果であろう。

『経巻具』は布幅の分だけ糸を並べて巻きつける役目と、緯糸の打ち込み中は奥で糸をささえなければならず、また、布を織り進むに従って経糸を送り出す機能を持つものであり、「藤」<sup>ちかり</sup>「緒巻」<sup>おまき</sup>という名称で呼ばれている。

『布巻具』は織りあがった布を巻きとる役目をしながら、同時に経巻具に一方をささえられた経糸を手元にひきつけ張っておくもので、「複」<sup>ちまき</sup>・「干巻」<sup>ちまき</sup>・「布巻」<sup>ぬのまき</sup>の名称で呼ばれている。

『開口具』は、緯糸を左右に通すために経糸を上下に分ける「中筒」と、二段に分けられた経糸と緯糸を交差させるために下の経糸を一回おきに上方に引き上げる「綾棒」<sup>あやぼう</sup>とも「綜棒」<sup>よこぼう</sup>とも呼ばれる用具からなる。「中筒」は『経巻具』から送り出された経糸を一本おきに上下に分け、それからまらぬように保つ。経糸の間に単に置かれているものと、機台の左右で固定するものがある。「綾棒」または「綜棒」は、原始機では下糸を結え、手でつり上げ上糸を交差させるものであったが、地機になって「まねき」と「足縄」の連動で開口が可能になった。また、高機になると「綜棒」は2枚1組の「綜統」になり、「踏木」



を踏んで「綜統」を上下させるようになった。「綜統」の発達には「綜統」と「踏木」の数を増加して平織り以外の布を織ることが可能になった。

『緯越具』は経糸に緯糸を通す道具で「杼」<sup>ひ</sup>・「梭」<sup>ひ</sup>とも呼ばれている。太田氏によれば、緯糸を杼に巻きつけておき、布幅の長さの糸を引き

第218図 機織具の復元

出しながら織るという能率の悪い作業が推定される弥生時代の遺物で、「貫」と呼ばれるものから、中央に回転軸を入れて布幅位の長さの糸を自然に引き出せるようになった「管大杼かんたいじよ」になり、後に「杼」・「梭」に発達したという。「管大杼」は「緯打具」と役割を兼ねる。

『緯打具』は、『緯越具』によって通された緯糸を打ちつけて布目を作るものであり、弥生時代の遺物ではその形から「刀杼」と呼ばれ、「管大杼」を経て「箴」と呼ばれるものに変化している。登呂遺跡出土の『緯打具』には経糸のすじあとが見られる。

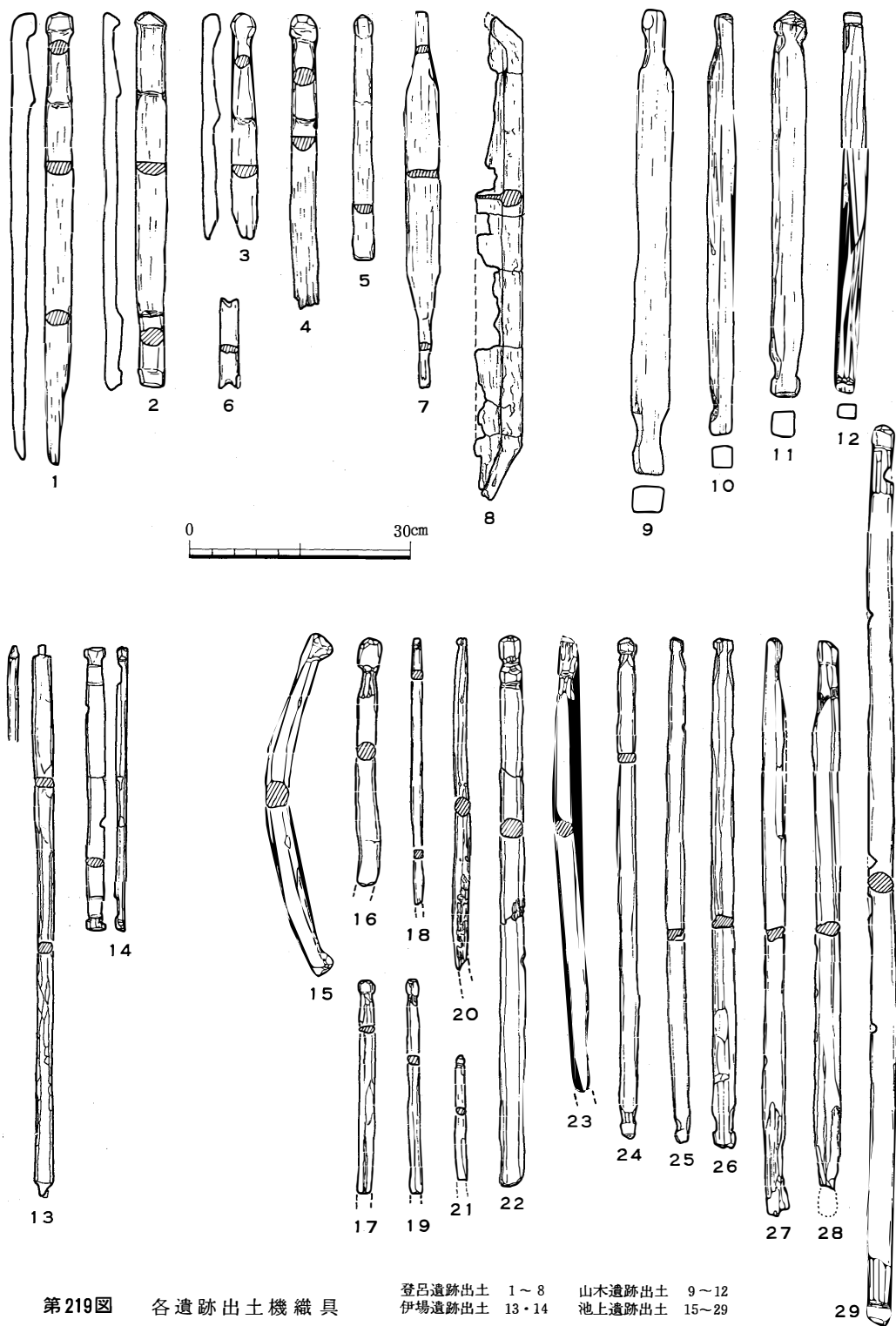
このように機織の技術は弥生時代からすでに行われたことが想定され、木製品が出土する遺跡では機台部品の抽出こそ行われていないが、機織具部品の特徴的形態を示すものが数点ずつ報告されている。主なる遺跡出土の機織具部品の形態と法量は第219・220図、第99表にまとめた。

これらは機織具部品として報告されているものの例で、名称はすべて報告書に従って記載した。1～5, 9～12, 14, 31, 34, 35, 45は『布巻具』, 7, 16～29は『布巻具』か『経巻具』となっている。7を除く28点は細長い棒状の片端部、又は両端部を削り、乳頭状の突起を作り出している。これらは弥生時代の遺物から奈良・平安時代までの遺物を含む。各時代の遺物に共通して遺物の形態からその機能が推定され、同じ名称が与えられている。これによると『緯越具』や『緯打具』は形態が特徴的であるが、註113『経巻具』と『布巻具』は似た形態をしており区別はつけにくい。

御山千軒遺跡出土の遺物(第176図102～106)は、104が一方を欠損するが片端部に切り込みを二方向から入れて突起を作り、その部分を面取りする様子は第218・219図、第99表の『布巻具』や『経巻具』と同じ形態のものである。しかし、この104は両面の中央部に長く浅い凹みをもっている。この特徴は嶋遺跡にも一例みられる。一側面に浅い溝を刻みこみ、この溝に細い棒を副木として押し込み、この2本の棒に挟んで多くの糸を固着させることができるとされているもので、これを『布巻具』または『経巻具』から分離させて『開口具』としての「綜棒」としている。このことを参考にすれば『開口具』は「綜統」出現以前には、竹や棒でその機能を果たせたためにその抽出は困難であったが、104を嶋遺跡という理由で「綜棒」と考えることが可能であろう。102は一方を欠損するが片方の端部に抉りを有し、末端は面取りされている。103も一方を欠損するが片方の端部に向って側面が削られて細くなっている。この2点の特徴は両端を固定させるための工夫と思われ、第220図にまとめた『布巻具』と『経巻具』にみられる。しかし、本文中では、105と106の板状のものが現在に残る『経巻具』としての「藤」または「緒巻」と呼ばれる形状に似ており、この2点は経糸を布幅の分だけ並べて巻きつけて緯糸を打ち込む間固定する役目に適すると判断し『経巻具』とした。従って102と103は『布巻具』と思われる。

以上のことは有機台機法の場合を考えて論を進めたものであるが、明確な機台の出土をみない現在、推定の域を出ない。しかし、木製品を出土する遺跡の増加をみる此頃、機織具部品の報告が多くなっている。これらは共通の形状を持っており、この形状のまとまりが機能を明確にしよう。(鈴鹿八重子)

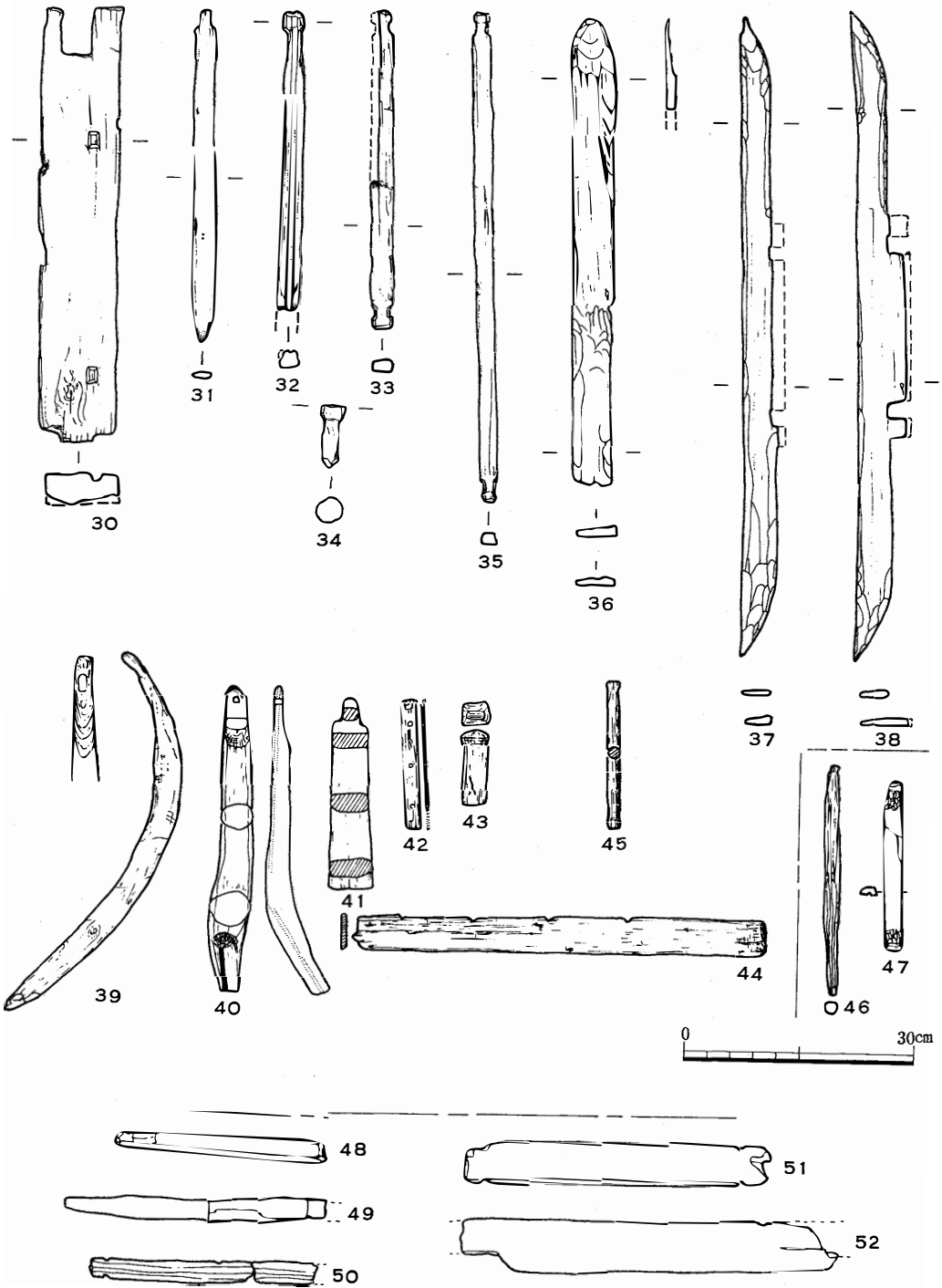
第8節 木製品



第219図 各遺跡出土機織具

登呂遺跡出土 1~8  
伊場遺跡出土 13・14

山木遺跡出土 9~12  
池上遺跡出土 15~29



第220図 各遺跡出土の機織具

鳴遺跡出土 30~38 脇本埋没家屋 39~44  
 古殿遺跡出土 45 蒲沼遺跡 46  
 城輪橋跡出土 47 御山千軒遺跡 48~52

第8節 木 製 品

第99表 各遺跡出土機織具一覧

( )は残存長

遺跡名	名 称	法 量 (cm)			材 質	
		長さ	幅	厚さ		
登	1 布 卷 具	61.5	3.0	2.0	—	布巻部(現存長 46.0cm)
	2 布 卷 具	70.0	3.5	2.0	—	布巻部 28cm
	3 布 卷 具	30.0	3.5	1.8	—	
	4 布 卷 具	40.0	3.5	2.5	—	
	5 布 卷 具	33.0	2.3	1.5	—	
呂	6 梭	12.0	2.2	1.0	—	
	7 布巻具又は経糸巻具	51.3	4.4	1.3	—	両端の幅約 1.4cm
山	8 オサの一種	65.0	6.0	2.0	—	太田氏による刀杼
	9 布 卷 具	59.0	4.0	3.6	杉	
	10 布 卷 具	54.0	3.2	2.4	杉	
	11 布 卷 具	49.0	4.0	3.6	杉	
木	12 布 卷 具	48.1	2.4	1.9	杉	
	13 織機部品?	75.0	2.3	1.6		
伊場	14 布 卷 具	38.6	2.5	1.3		
	15 腰 当	47.5			ユズリハ	中央最大径 3.3cm
池	16 布巻具・経巻具	34.5	2.5	2.5	ヒノキか?	
	17 布巻具・経巻具	29.5	2.2	1.0	ヒノキか?	
	18 布巻具・経巻具	36.5	1.6	1.3	ヒノキか?	
	19 布巻具・経巻具	29.5	1.5	1.3	ヒノキか?	
	20 布巻具・経巻具	45.5	1.7	2.5	ヒノキか?	
	21 布巻具・経巻具	17.0	1.2	1.0	ヒノキか?	
	22 布巻具・経巻具	(78.5)	3.5	2.0	ヒノキか?	
	23 布巻具・経巻具	(63.5)	2.6	2.6	ヒノキか?	突起径 2.7×(2.2)
	24 布巻具・経巻具	69.4	2.2	1.2	ヒノキか?	
	25 布巻具・経巻具	70.7	2.3	1.4	ヒノキか?	
上	26 布巻具・経巻具	71.7	2.9	1.7	ヒノキか?	
	27 布巻具・経巻具	82.5	3.7	2.0	ヒノキか?	
	28 布巻具・経巻具	74.5	3.5	2.0	ヒノキか?	
	29 布巻具・経巻具	123.0	3.3	2.9	ヒノキか?	
嶋	30 機台部分らしきもの	57.5	10.5	6.0	—	一端に抉り, 幅 4.5 cm, 奥行 6.0 cm 柄穴 1.3×2.0×0.5 cm
	31 布 卷 具	42.0	2.9	1.4	ヒバ	中心部の長さ 36.0 cm
	32 開口具(綜棒)	(40.0)	3.8	2.0	ヒバ	布巻具とも見える
	33 開口具(綜棒)	41.5	2.3	0.8	—	布巻具とも見える
	34 布 卷 具	( 7.8)	—	—	—	棒の太さ 2.2 cm, 頭の径 3.6cm, 猪足
	35 布 卷 具	64.0	—	—	—	中心主要部 59.0 cm, 径 2.4cmの丸棒を縦に半割りした形
	36 緯越具・緯打具	61.5	( 5.5)	1.6	ヒバ	把の部の長さ 2.3cm, 主要部の長さ 34.0 cm, 管大杼に該当
	37 緯越具・緯打具	83.0	4.3	1.0	—	管大杼に該当
脇本(埋没家屋)	38 緯越具・緯打具	86.5	( 6.5)	1.1	ヒバ	管大杼に該当
	39 織機の一部?	80.0				(腰当か?)
	40 織機の一部	38.2	4.4	2.5	—	
	41 織機の一部	28.0	6.0	2.5	—	突起部約 4.0 cm
	42 織機の一部	36.0	5.0	0.5	—	円形の穴 3個, 両端に四角の穴
	43 織機の一部	12.0	3.0	2.4	—	先端に握り
	44 織機の一部	65.0	5.0	1.0	—	
古殿 蒲沼 城輪柵	45 ちまき	19.5	1.6	1.4	杉	形代か? 布巻具
	46 不 明	30.0	18.0	16.0	—	巻きつけられた痕跡
	47 不 明	22.0	2.5	1.3	—	中央に径 6mmの細溝

## 馬形について

多数出土した木製品の中に木製馬形がある。馬形の出土は全国でも類例が少なく、これについて若干の考察を加えたい。

尚、便宜上ここでは木製の馬形を「馬形」とのみ記述する。

馬形は小型長方形の板材の数ヶ所に切り込みを入れるという簡単な加工によって製作される。中には目やたてがみを墨・丹などで表現したものや鞍などの馬具を作り出して表現したものもある。これらは容易に馬形と判断できるが、多くは写実性に欠け、その認定に躊躇するものもある。本遺跡出土の馬形<sup>註116</sup>の他、集め得たものを第221図に示した。これらのうち1・2・3・5・8・23・24・25は、報文では塔婆形木製品、不明木製品等として扱われており、馬形とは報告されていない。以下、これらをもとに、その形状、形態や時期などについて検討していく。尚、脇本埋没家屋例(2・3・4)は中世以降の遺物である可能性が強く、ここでいう馬形の範疇に入れ難いが、特に4は「木製の馬」と報告されているため参考までに図示した。

### 形状について

これらの小型長方形板の数ヶ所を切り込んで作られた馬形は基本的には上辺からの切り込みによって背が表現され、下辺からの2ヶ所の切り込みにより頭部、胴部、臀部が表現される。しかし、これらに加え背部に2つの山型の突起を付することにより鞍を表現したと思われるものが2例(8・19)ある。つまり、前者は裸馬を、後者は飾馬を表現しており、大きくこの2種に分類される。

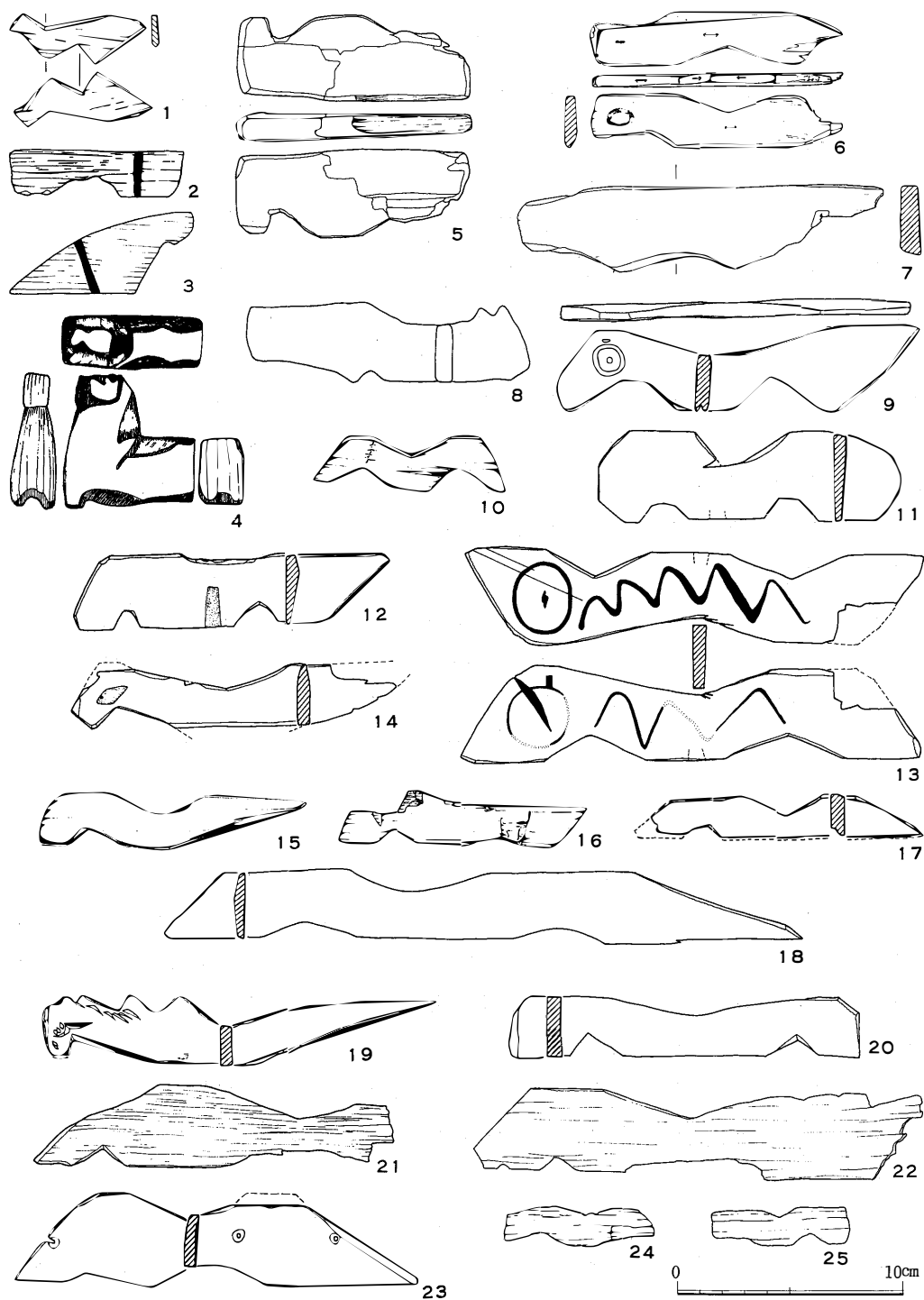
更に臀部の形状に注目すると、その作り方に差異が認められる。伊場遺跡例に顕著であるが、10・11・13・17・18などは上辺から斜下方あるいは垂直に端部が切り落とされ、あたかも尾の下がったような状態が表現されている。8・20・23・24・25も同様である。これに対し9・12・14・15・16などは下辺から斜上方に端部が切り落とされ、逆に尾の上がった如き状態が表現されている。19や本遺跡例7もこれに類する。残念ながら本遺跡例6のほか5・21・22は臀部が欠損し、不明であるが、おおよそ馬形は臀部が上向きのタイプと下向きのタイプの2種に分類できるといえよう。

これらの形状差には時期のおよび地域的な偏向性は認め難い。すなわち馬形には裸馬と飾馬の2種があり、その中でも臀部が上向きのものと下向きのものの計4種があると考えられ、これは併存していたのではないと思われる。

続日本紀の天平宝字7年には雨乞いのために黒毛馬を奉ったという記事があり、宝龜6年には霖雨のために白毛馬を奉じ日乞いをする記事<sup>註118</sup>がある。このほか同様の記事は続日本紀をはじめとする六国史に散見される。また続日本紀宝龜元年には日蝕の際に伊勢大神宮に赤毛馬・若狭彦神、八幡神宮に鹿毛馬が奉じられている<sup>註119</sup>。このように馬の奉献にあっては祈念する目的によって



第8節 木製品



第221図 馬形参考例  
 1 胡桃館埋没建物遺跡出土 2~4 脇本埋没家屋出土 5 落合II遺跡出土  
 6・7 御山千軒遺跡出土 8 箕輪遺跡出土 9~18 伊場遺跡出土 19 じょうべのま遺跡出土  
 20 飛鳥・藤原宮遺跡出土 21・22 稗田遺跡出土 23 大敷遺跡出土 24・25 下市瀬遺跡出土

色が選択されている。奉獻馬の色の選択と馬形の形状差を同一視するには無理があるかもしれないが、ひとつの可能性として裸馬と飾馬、更に臀部の上下の差といった違いは祈念目的の違いが反映されたものと考えられないだろうか。

次に使用時の状態を窺わせる加工や痕跡に注意してみる。伊場遺跡例(9・11・12・13)、大藪遺跡例(23)に顕著にその痕跡があるが、9・11・13は腹部に小さな切り込みがあることから、ここに棒を挿して使用されたと思われる。12は腹部にアタリのような変色部があり、先を2つに割いた棒状のもので挟み縛りつけたのではなかろうか。23の場合は3つの小孔があるが紐を通して吊り下げたとも考えられる。報告者のように何かに打ちつけた釘穴だとすれば、絵馬との相互関係も想起され興味深いものである。これらの他、特に痕跡を有さないものは切り込み部分に紐をかけて吊り下げたかそのまま供献したかであろうが、おそらく後者が最も多かったであろう。

#### 時期について

これら馬形の時期をみると最も古いものは7世紀中葉とされる伊場遺跡例9で、続いて7世紀後半の同例10、藤原宮跡例20があり、確実に7世紀に遡るものが3点ある。奈良時代のものが半数以上を占めるが、箕輪遺跡例8、じょうべのま遺跡例19はこれらよりやや時期が下り、御山千軒遺跡例6・7は更に降って9世紀後半、落合Ⅱ遺跡例5は9世紀後半～10世紀初頭に位置づけられている。

古代の木製模造品の時期については金子裕之氏の詳細な論文がある。<sup>註120</sup>金子氏は馬形を3種に分類した上で、上辺1ヶ所、下辺2ヶ所を切り欠いた形の馬形が7世紀後半の天武・持統朝に出現し、以降8世紀を通じて作られ、鞍を作る飾馬は9世紀に近い頃出現して、これらは併存したとしている。更に金子氏は綿密な時期検討を行い、律令的祭祀がはじめられる天武、持統朝に律令政策に関係して複数の新種の木製模造品が出現し、以降これが増え続けて9世紀に最も多くなると述べ、律令祭祀の主要な祭祀具として木製模造品を位置づけている。卓見であり、賛同するところである。しかし、馬形についてのみみると7世紀後半に出現し9世紀に至る点では同様であるが、地域的な問題も加味するとやや変わった傾向を示すようである。藤原宮跡や伊場遺跡に7世紀代の例があることは中央や地方官庁的場所で早い時期から馬を奉獻する祭祀に木製馬形を取り入れていることを示している。初期の律令政策に関係して行われた祭祀を仮に律令的祭祀と呼ぶとすれば、馬形の出現にもこの律令的祭祀の影響が多分に及んだと考えられる。8世紀にはいった数を増すのは官衙及びその周辺地域への律令的祭祀の浸透を窺わせる。しかし、今の所御山千軒遺跡や落合Ⅱ遺跡等、東北地方の集落遺跡出土のものは、馬形の出現からは2世紀も遅れており、9世紀後半まで下る馬形は中央及び地方官衙では発見されていない。

これは律令的祭祀形態の地方拡散の速度に加えて、新しい祭祀形態が安易に受容されなかった結果とも考えられる。しかもこれらの遺跡から出土した祭祀遺物はいずれも僅少であることから、

## 第 8 節 木 製 品

律令的祭祀形態すべてが移入されたのではなく、部分的にのみ取り入れられたのではないだろうか。

### 馬形奉獻祭祀について

馬の模造品には木製のほか土製・滑石製、金属製のものが知られている。土製のいわゆる土馬は古くからその存在が知られ、現在の出土例は 200 ケ所以上にもものぼる。これに比して滑石製・金属製のものの出土例は小数の祭祀遺跡に限られ、その特殊性を窺わせる。木製馬形も出土例は少ないが、その遺存し難い性質を考慮すると滑石製・金属製のものよりは一般的であったと思われる。このほか古代の遺跡(特に湿地性の遺跡)では、馬の骨や歯の出土が多く報じられている。これらの馬歯骨および馬の模造品は他の祭祀遺物に伴って出土する例が多く、そこで行われた祭祀の中で馬が重要な供献物のひとつであったことを物語っている。また福島県三貫地遺跡や佐平林遺跡・赤根久保遺跡などから「午」の墨書土器が出土しており、馬の模造品との関係が注視されている。<sup>註123</sup>

馬の奉獻祭祀は先学により漢神信仰に関わったものであることが指摘されている。すなわち、水霊が馬を好むという思想から祈雨神事における川神、水神への奉獻や航海安全祈願においての海神への奉獻等に馬が供された。しかし、これらの神事に用いられた馬及び馬の形代の素材は一定ではなく、あるいは木製でありあるいは土製・滑石製であった。また峠神や山神に供されることもあり、日光二荒山頂例の金属製のものは山神への奉獻であったと解される。

木製馬形の場合、その性質上、低湿地遺跡から出土することが多いが、殆どが旧河川や溝内からの出土であり、不思議なことに井戸跡からの出土例はない。本遺跡では残念なことに調査区域が狭隘なため湿地性遺物包含層の具体的性格を究明できなかったが、例にもれず井戸からの出土ではなかった。これに対し、井戸跡からの土馬の出土例は多く、木製の祭祀遺物としては斎串や陽物が多い。ここに井戸祭祀において木製の馬形を用いず、土馬を用いるというような規制があったのであろうか。翻って、祭祀の内容により馬形の素材の選択が行われた可能性も考えねばならないだろう。

馬を奉獻する祭祀に本来生馬が供されたであろうことは文献及び遺跡における馬歯骨の出土状態<sup>註124</sup>などから認められる。しかし、これが形代に代替されていく過程は容易に把握できない。本遺跡においても馬形より時期的に遡るⅩ層や馬形とほぼ同時期のⅧ層から馬歯が出土しているが、両者の関係を捉えることはできなかった。馬歯自体祭祀に関与した遺物なのかどうかも判然とし得なかった。今後、律令祭祀の内容や馬の奉獻祭祀の内容のより具体的な究明の中で素材、形状の異なる馬形の位置付けが課題となろう。(森 幸彦)

第100表 各遺跡出土木製馬形一覽

県名	遺跡名	番号	出土地点	伴出祭祀遺物	時期	法量(縦×横×厚)	備考
秋田県	胡桃館埋没建物遺跡	1	遺物包含層内	斎串 ?	平安中期	6.8×2.5×0.2	
		2	"		鎌倉～室町	5.5×5.5×2.0	
	脇本埋没家屋	3	"	刀形・鏃形 人形	"	3.7×3.7×0.4	
		4	"		"	7.7×2.0×0.4	
岩手県	落合Ⅱ遺跡	5	旧河道		9世紀後半～10世紀初頭	11.1×4.1×1.1	刻線有
福島県	御山千軒遺跡	6	湿地性遺物包含層	刀形	9世紀後半	(11.1)×2.4×0.5	両面に目を墨描
		7	"		"	16.1×3.7×0.8	
長野県	箕輪遺跡	8	遺物包含層内	斎串・人形	平安時代	11.0×2.0(?)	
静岡県	伊場遺跡	9	大溝内	斎串・人形 舟形・絵馬	7世紀中葉	15.9×3.7×0.7	目を墨描, 腹部に切り込み
		10	"		7世紀後半	9.3×2.3(?)	
		11	"		7世紀末～8世紀前半	13.7×4.1×0.6	腹部に切り込み
		12	"		8世紀中葉～後半	14.1×3.3×0.6	
		13	"		8世紀後半～9世紀初頭	20.2×4.1×0.6	目を墨書, 胴に朱の波文, 刻線有 腹部に切り込み
		14	"		8世紀～9世紀初頭	12.7×2.6(?)	
		15	"		"	(14.7)×(2.8)×0.6	目を墨描
		16	"		"	11.5×2.5(?)	
		17	"		"	28.4×2.95×0.35	
		18	"		"	(11.9)×(1.9)×0.58	
富山県	じょうべのま遺跡	19	庄所跡	墨書土器	平安時代前期	17.0×3.0×1.0(?)	飾馬, 顔面・手綱を墨描, 鞍を表現
奈良県	藤原宮跡	20	大溝SD1901A	斎串・刀形・人形・舟形	7世紀後半	16.4×2.9×0.7	
	稗田遺跡	21	川跡	墨書人面土器 斎串・人形・絵馬	奈良時代	15.7(?)×4.2(?)	
22		"	ミニチュアカマド・土馬	"	19.7(?)×4.8(?)	飾馬	
京都府	大藪遺跡	23	"	人形・鳥形	奈良時代 (天平期～長岡京期)	17.7×3.9×0.5	3ヶ所に孔有り
岡山県	下市瀬遺跡	24	遺物包含層内	斎串・人形	平安時代	6.8×1.4×0.3	
		25	"		"	6.2×1.6×0.4	

木製品の材質について

御山千軒遺跡からは278点の木製品と121点の自然木、7点の木片が出土している。これらの樹種は第63・64表に詳しく揭示したが樹種ごとのまとまりを第104表に示した。表中の気乾比重は木の体積に乗ずればその重さが算出されるもので、比重の大きいものは材が緻密で重いものである。以下各器種ごとに針葉樹材と広葉樹材の使用割合や気乾比重との関係について検討を加え

第101表 御山千軒遺跡出土自然木樹種割合

針葉樹					
樹種	数	%	樹種	数	%
マツ類	12	11.7	スギ	1	1.0
カヤ	6	5.8	アスナロ	1	1.0
モミ	2	1.9	ヒノキ	1	1.0
			計	23	22.4
広葉樹					
樹種	数	%	樹種	数	%
クリ	17	16.5	ヌルデ	2	1.9
トネリコ類	10	9.7	シダ類	2	1.9
サクラ類	8	7.8	イボタノキ	1	1.0
ケヤキ	7	6.8	トチノキ	1	1.0
コクサギ	5	4.9	ユズリハ	1	1.0
カエデ類	4	3.9	マユミ	1	1.0
ニレ類	4	3.9	ヤナギ類	1	1.0
ウコギ類	3	2.9	ケンボナシ	1	1.0
ヤマグワ	3	2.9	環孔材	2	1.9
コナラ	3	2.9	散孔材	2	1.9
ウツギ	2	1.9	計	80	77.7

第102表 御山千軒遺跡出土木製品樹種割合

針葉樹					
樹種	数	%	樹種	数	%
モミ	40	15.2	アスナロ	20	7.6
ヒノキ	33	12.5	マツ類	6	2.3
スギ	32	12.2	カヤ	6	2.3
			計	137	52.1
広葉樹					
樹種	数	%	樹種	数	%
ケヤキ	56	21.3	ニレ類	2	0.8
クリ	16	6.1	サンショウ	2	0.8
トネリコ類	11	4.2	イスノキ	1	0.4
サクラ類	6	2.3	ハンノキ	1	0.4
オニグルミ	6	2.3	ザイフリボク	1	0.4
カエデ類	5	1.9	カシノキ	1	0.4
トチノキ	4	1.5	ケンボナシ	1	0.4
ヤマグワ	4	1.5	クヌギ	1	0.4
コナラ	3	1.1	環孔材	1	0.4
ホウノキ	2	0.9			
ガマズミ	2	0.8	計	126	48.2

たい。

自然木については、第101表にしめしたように針葉樹材：広葉樹材は22：78と圧倒的に広葉樹材が多い。このことは木製品及び自然木が多く出土している第Ⅶ～Ⅸ層の花粉分析結果(付編)に示す落葉広葉樹が良く繁茂していた所と一致する。また、古環境が温帯であるという花粉分析結果は、広義の温帯の森林は広葉樹材が優先していることから裏付けられる。

広葉樹材と針葉樹材の特徴は、広葉樹材が材質が緻密で切削加工がしやすく、針葉樹材が導管をもたないため、材質が均一で木目がよくつまっており、木目によって割裂しやすく曲げやすい性質がある。木材は製品の製作方法か、使用方法の一方から選択されることが多い。

木製品の針・広葉樹材の出土割合は第102表に示した。これによると、木製品は全体として針葉樹材の数がわずかに上回っている。しかし、この針葉樹材の数の中には同一個体になる可能性がある曲物側板が多数含まれており、全体の傾向を考察することはできない。

次に器種別によるその傾向を検討してみる。

容器全体では、針葉樹材：広葉樹材が

## 第 8 節 木 製 品

69 : 31 と針葉樹材が多い傾向を示すが、前述のように曲物側板がその多くの数を占めることを考慮しなければならない。しかし、容器を挽物・刳物・曲物に類別して検討を加えると次のような傾向が示される。

挽物と刳物については、唯一鉢のみが針葉樹材のマツを使用している他は、全て広葉樹材を使用している。これに対して曲物は大型の底板 3 点と両面に漆塗がされている遺物番号 166 の 1 点を除き、全て針葉樹材である。このことから、製作方法で木材を選ぶ時には、挽物・刳物については切削加工がしやすい広葉樹材が選ばれ、曲物については割裂しやすい針葉樹材が多く使用されたものと思われる。

樹種を個別にみると、挽物と刳物の広葉樹材はケヤキが圧倒的に多い。ケヤキは木目は荒いが材質は丈夫で狂いが少なく切削加工がしやすい材質である。木目の荒さは、木目のきれいさになってあらわれる。他に使用されているホウノキは緻密でやわらかい。まれに切削加工はあまり容易でないクリノキが遺物番号 45、報告書中番号 29 の槽に使用されている。クリノキは木目が正しく割裂しやすく、耐湿性がある木材であるから、細長く加工が施され使用に際して湿気とかかわるものに適している。曲物は針葉樹材のヒノキ・スギ・モミ・アスナロが多く使用されているが、樹種別には片寄りは見られない。ただ、底板にケヤキが使用される例が 3 点(遺物番号 322・報告書中番号 52, 遺物番号 313, 349)がある。側板はケヤキとサクラが 1 点ずつある他は全て針葉樹材で側板を薄く長く削り曲げるという製作方法に適していると思われる。

気乾比重は挽物・刳物の平均が 0.52～0.69、曲物蓋板・底板の平均が 0.43～0.48 (第 103 表) で、わずかに挽物・刳物が重い傾向がみられる。容器全体については、その傾向の集中度からすると、特に耐水性を要するものにクリ材を使う以外は、容器の場合暫時使用方法で材木を選択したのではなく、その製作方法から材木の選択をしたものと思われる。

次に、労働用具では、針葉樹材：広葉樹材が 54 : 46 で、容器のように片寄ることはない。しかし、農工具・狩猟・漁撈具のように物に対して直接的な働きをするものは、斧柄を除き広葉樹材が使用されており、紡織具のように部分的な働きをするものは針葉樹材が使用されている。気乾比重についてみれば、農工具・狩猟・漁撈具に選ばれているものは比重が大きいものである。斧柄も本遺跡から出土している広葉樹材の中で気乾比重の大きいものであり、その平均は第 103 表に示すように 0.6 を超えるものである。重りの役目をするツチノコ、敲打するために重さが必要なヨコヅチ・柄などは、使用方法で重量が考慮されたものであろう。また、部分的な働きをする紡織具は平均して 0.47 と比重の小さいものが使用されている。このように針葉樹と広葉樹の間には、使用目的による差異はないが、気乾比重に注目すれば、労働用具については加工方法で材質を選んだのではなく、使用方法で材質を選択したものと思われる。また、弓とたもに使用されているカヤノキやクリノキは緻密で固く耐湿性があるものである。

第103表 木製品分類別樹種気乾比重表(気乾比重は岡本省吾他「原色木材大図鑑」保育社より)

分類	樹種	数	気乾比重	平均
椀	ケヤキ	7	0.69	0.67
	ハンノキ類	1	0.53	
盤	ケヤキ	17	0.69	0.69
鉢	マツ類	1	0.52	0.52
槽	ケヤキ	3	0.69	0.61
	ホウノキ	2	0.49	
	ク	1	0.60	
曲物蓋板	ヒノキ	5	0.44	0.43
	モミ	6	0.44	
	アスナロ	3	0.47	
	スギ	5	0.38	
曲物底板	ヒノキ	3	0.44	0.48
	モミ	4	0.44	
	アスナロ	2	0.47	
	スギ	3	0.38	
曲物側板	ケヤキ	3	0.69	0.44
	ヒノキ	18	0.44	
	モミ	10	0.44	
	アスナロ	11	0.47	
	スギ	10	0.38	
折敷側板	ケヤキ	1	0.69	0.42
	サクラ類	1	0.62	
	ヒノキ	1	0.44	
	モミ	1	0.44	
ツチノコ	スギ	2	0.38	0.58
	トチノキ	1	0.52	
	カキノキ	1	0.61	
ヨコヅチ	サクラ類	1	0.62	0.61
	ザイフリボク	1	0.68	
	オニグルミ	1	0.53	
柄	ク	1	0.60	0.66
	トネリコ類	1	0.76	
	カヤ	1	0.53	
	コナラ	1	0.76	
紡織具	ヒノキ	2	0.44	0.47
	モミ	1	0.44	
	アスナロ	1	0.47	
	スギ	1	0.38	
	ケンボナシ	1	0.64	
狩猟・漁撈具	カヤ	3	0.53	0.55
	ク	1	0.60	
履物	ケヤキ	1	0.69	0.69

分類	樹種	数	気乾比重	平均
雑器	イスノキ	1	0.90	0.90
	カヤ	1	0.53	
	モミ	1	0.44	
	ケヤキ	2	0.69	
	コナラ	1	0.76	
	オニグルミ	1	0.53	
	トチノキ	1	0.52	
	ニレ類	1	0.63	
	ガマズミ	1	-	
	サンショウ	1	0.46	
	木札製品	ヒノキ	2	
モミ		1	0.44	
アスナロ		2	0.47	
スギ		2	0.38	
小型板製品	スギ	4	0.38	0.44
	ケヤキ	1	0.69	
祭祀具	モミ	4	0.44	0.49
	ケヤキ	1	0.69	
建築部材	マツ類	5	0.52	0.57
	カヤ	1	0.53	
	ヒノキ	2	0.44	
	モミ	12	0.44	
	アスナロ	1	0.47	
	スギ	5	0.38	
	ケヤキ	15	0.69	
	ク	13	0.60	
	サクラ類	2	0.62	
	オニグルミ	4	0.53	
	トチノキ	2	0.52	
	ニレ類	1	0.63	
	トネリコ類	5	0.76	
	ヤマグワ	2	0.62	
	カエデ類	5	0.65	
	クヌギ	1	0.85	
	ガマズミ	1	-	
サンショウ	1	0.46		
不明木製品	ケヤキ	5	0.69	0.70
	サクラ類	2	0.62	
	コナラ	1	0.76	
	トネリコ類	5	0.76	
	ヤマグワ	2	0.62	

## 第 8 節 木 製 品

雑器については出土している数が少なく、樹種についてもまとまりがみられない。しかし櫛に使用されているイスノキは暖地性の樹木で、現在福島県にはない木とされている。イスノキは、日本産材中最も重いものに属する材質で、気乾比重 0.90 を示す。俗にいう櫛の適材としてのツゲも気乾比重 0.75 で重い。このように比重の大きい材質は粘り気が強く緻密で固いため、狂いが少ないので細工を必要とするものには適している。そのために比重の大きいイスノキを使用した櫛は適材であったのであろう。他に多数の樹木が存在しながら櫛の木だけが他地方それも南の遠方からもとめて加工されたのか、製品として移入されたものかは不明である。

すりこ木棒状木製品としたものは、形態がすりこ木棒に似ているものの、使用されれば端部の面取りがなくなるものであるにもかかわらず、すべて面取りが残存していたためにすりこ木棒ではないと判断したものである。加えてこれら 8 点は針葉樹材のマツが 1 点、広葉樹材のケヤキが 2 点、コナラ 1 点、トチノキ 1 点、ガマズミ 1 点、ニレ 1 点、不明 1 点とその選択樹種に片寄りはない。気乾比重の平均は 0.65 でわずかに重い傾向の木を使用している。

木札状木製品・小型板状木製品は、針葉樹材にまとまりがみられる。これは樹木を薄い板材にする製作方法から針葉樹材が選ばれたと思われる。針葉樹材は木目に添った割裂がし易いため、板材の製作に適する。

祭祀具の馬形・刀形にみられる材はヒノキに限られている。これら形代は曲物の底板を転用する例が多く、御山千軒遺跡出土の遺物番号 120、報告書中番号 109 も折敷底板の再利用の痕跡を残している。よって形代の多くの樹種は、曲物底板の傾向と一致するものであり、御山千軒遺跡においても例外ではない。

建築部材については、針葉樹材：広葉樹材が 33：67 と広葉樹材が多い。しかし、建築部材においては使用方法によって選択する。材質が異なるため一様にその傾向を判断することはできない。たとえば、同じ板材としても幅が広く必要なものはケヤキなど樹木の径が大きな広葉樹材を使用するか、巾よりも長さを必要とするものにはスギなどの針葉樹材を使用するものと思われる。御山千軒遺跡出土の建築部材は樹種が 18 種を数えるが樹種についてのまとまりはみられない。

以上のように当遺跡出土の木製品について、器種毎の樹種と個別器種内での傾向、広葉樹材と針葉樹材の特徴と樹種を選択等について若干の考察を加えてきた。この中では御山千軒遺跡周辺に自生する樹が大半を占めるものの、他地域から運ばれたと思われる材質が含まれており、空間的な広がりも垣間みることができた。しかし、対比できる同一時期の資料や、環境が類似する遺跡の資料はなく、また、すべてについての樹種同定が済んでいる遺跡は少ない。しかし、最近報告された岩手県江刺市落合Ⅱ遺跡<sup>註125</sup>が時期的にも地形的にも類似の遺跡と思われる。(鈴鹿八重子)





## 第9節 ま と め

御山千軒遺跡は現在までのところ、福島盆地内における大規模な発掘調査の行われた唯一の奈良・平安時代の集落遺跡である。

遺跡は東西300m以上、南北120mに及ぶ大規模な遺跡で、今回はその東半部を幅23mで南北に切るように調査を行った。その結果、竪穴住居跡、掘立柱建物跡と同時に7世紀中頃～9世紀後半と考えられる土器・木器が多く出土している。土器はこの時期以外のものは若干の弥生式土器片が見られるのみであり、この集落の存続時期は7世紀～9世紀と考えてほぼさしつかえないのではないかと考えられる。この遺跡の位置は信夫山と現在の松川(阿武隈川の支流)に挟まれた部分にあり、また遺跡の北の部分は湿地性遺物包含層となっており、その下層のⅧ～Ⅹ層の形成された時期、この部分は常時湛水していた可能性が強く、松川沿に形成された小支流や小湖沼が遺跡近くにも存在していたと考えられる。遺跡の周辺に見られるこのような湿潤な平地を利用した水田経営がこの集落の経済的基盤となっていたものであろう。

今回の調査成果の特色は、前にも述べた通り集落を構成する竪穴住居跡、掘立柱建物跡と同時に、その時期の多くの土器、木器が層位的に出土している点である。

土師器はL-Ⅹが栗罎式の前半に相当するものと考えられ、7世紀中葉頃であろう。L-Ⅹ～Vは表杉入式で、杯はほぼ同数の2・4b・5b類で構成されており9世紀後半と考えられる。包含層はその間は断絶しているが、この時期に相当する遺構はあり、集落の機能は続いていたと考えられる。木器はL-Ⅹ～Vより出土しており、時代的には9世紀後半のものといえる。これらの遺物の構成を見ると包含層の表杉入式の土師器の杯と甕の比はL-V 35:1, L-VI 21:1, L-VII 93:2, L-VIII 78:12, L-IX 22:3, 全体で249:19である。杯の土師器対須恵器ではL-V 35:9, L-VI 21:4, L-VII 93:23, L-VIII 78:18, L-IX 22:5, 全体で249:59となる。須恵器は、この他に若干の大甕、高台付杯があるのみなので、土器の器種としては圧倒的に杯が多いことになる。木器では容器類、特に盤・曲物が多く131点、横槌、たも、織機等20点、下駄等の雑器12点、建築部材などがあるが特に馬形、刀形の形代が注目を引く。土器の墨書も吉祥文的なものも多い点、馬形の他に馬の齒なども出土している点などから考え、この包含層が単に生活用品が投げ込まれたために成立したものではなく、何らかの祭祀的性格もそなえていたものと考えられる。このような視点からすると、土器の組成比で杯のみが多い点なども説明できるかも知れないが、他の比較資料が少ないので、今後の良好な比較資料の出現を持って考えなければならない。

(木本 元治)

註

- 註 1 吉田 義・伊藤七郎・鈴木敬治 「編年と2・3の問題」№.15 P.99～125 『東北地方南部の阿武隈川流域の第四紀』1969
- 註 2 福島市教育委員会 「中町屋敷軒数名前銘々記之」『福島市史』1193
- 註 3 福島県教育委員会 「徳定遺跡」『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告』Ⅲ(福島県文化財調査報告書第92集) 1981
- 註 4 玉川一郎 「舞台遺跡発掘調査報告書」『舞台』福島県岩瀬郡天栄村教育委員会 1981
- 註 5 福島県教育委員会 「矢ノ戸遺跡・小屋館跡」『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告』Ⅳ(福島県文化財調査報告書第99集) 1971
- 註 6 宮城県教育委員会 「青木遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告』Ⅳ(宮城県文化財調査報告書第71集) 1979
- 註 7 奈良国立文化財研究所 「官衙地域の調査」2『平城宮発掘調査報告』Ⅳ(奈良国立文化財研究所学報第17冊) 1976
- 註 8 奈良国立文化財研究所 「平城京左京一条三坊の調査」『平城宮発掘調査報告』Ⅵ(奈良国立文化財研究所学報第23冊) 1975
- 註 9 奈良国立文化財研究所 「内裏北外郭の調査」『平城宮発掘調査報告』Ⅶ(奈良国立文化財研究所学報第26冊) 1976
- 註 10 奈良国立文化財研究所 「宮城門・大垣の調査」『平城宮発掘調査報告』Ⅸ(奈良国立文化財研究所学報第34冊) 1978
- 註 11 田島町民具研究会 「第二章 椀木地」P.30 「第三章 挽物」P.42 『奥会津地方の山村生産用具』I 奥会津地方歴史民俗資料館シリーズ 1975
- 註 12 成田 敏 「木鉢の形態と名称・素材」青森県の場合『民具研究』24 日本常民文化研究所 内日本民具会 1979 木鉢の形は大別して底の浅いタイプと底の深いタイプがある。また持ちやすいように手掛けをつけたものがあり、手掛けは削り込んでつける場合と削り残した形でつけるものがある。
- 註 13 槽は調査時には田舟と報告されているが、登呂遺跡にもみるように田舟はかなり大型のものである。また朝鮮半島にも共通してみられる牛馬の飼料箱(キッツ)も大型である。60 cm前後の小型のものを槽として前記のものと区別したが、これは会津地方などで台所道具の中に鉢の役目をもって多数存在している刳物と同じであろう。
- 註 14 奈良国立文化財研究所 「藤原宮西方官衙地域の調査」『飛鳥・藤原宮発掘調査報告』Ⅱ(奈良国立文化財研究所学報第31冊) 1978
- 註 15 佐和隆研他 「信貴山縁起」『日本絵巻大成』4巻 中央公論 1976  
小松茂美他 「粉河寺縁起」『日本絵巻大成』5巻 中央公論 1978  
「彦火々出身尊絵巻」「浦島明神縁起」『日本絵巻大成』22巻 中央公論 1978  
「病草子」「地獄草子」「餓鬼草子」『日本絵巻大成』7巻 中央公論 1977
- 註 16 註 14 に同じ P.74 18～20

- 註 17 註10に同じ P66 ㊦18
- 註 18 註14に同じ P74 ㊦28～32
- 註 19 浜松市教育委員会 「容器」P21 ㊦26～29『伊場遺跡遺物編』1 別冊図版(伊場遺跡発掘調査報告書第3冊 別冊) 1978 P21 ㊦26～29 『側板の取り付け方に、上板もしくは底板が側板の内側にすっぽり詰め込まれてしまう「クレゾコ」の作りと、外側にはみ出す「カキイレゾコ」の作りの2通りが知られ、前者では側板の外側から木釘を打ち込んで固定するのに対して、後者は樺皮で綴じて固定する。』ものである。
- 註 20 註19に同じ P22 ㊦12～16
- 註 21 註8 P86 ㊦13～14では、『このような穿孔のある底板に対しては、さきに想定した甔としての使用だけでは解決できない問題である。』と報告されている。筆者も一応蓋の甔への転用を考えている。
- 註 22 註8に同じ P86 ㊦4  
註14のP74 ㊦23～27にあるように側板を置く位置に目印となる円刻線を描き、これに沿って側板を置く蓋板Bの方法であるということも考えられるが、木釘の残存や漆塗りが施されている部分から判断する接合法から底板とし、内面の円刻線は註8のP86 ㊦4に従った。
- 註 23 註18に同じ
- 註 24 註9に同じ P122 ㊦19～21 他に側板位置に断面がV字状の溝をめぐらしているものがあり、これはA・B・C型より形式的に古いと推定しているが、当遺跡の折敷はこれとも異なる。
- 註 25 註9に同じ P122 ㊦22～23 「折敷の側板と考えられるものには高さ約5cm以上の高いものと、高さ3cm以下の低いものがある。いずれも……方形ないしは長方形の底板にとりつけるものである。」としているが、御山千軒遺跡の側板については遺存が悪いため、その平均を出すことはできなかった。
- 註 26 渡辺 誠 「もじり編み用木製錘の考古資料について」『考古学雑誌』第66巻4号 1981
- 註 27 渡辺誠氏の御教示による。
- 註 28 佐原 真 「石斧論—横斧から縦斧へ—」『考古論集』(慶祝松崎寿和先生六十三歳論文集別冊) 1977
- 註 29 福井県教育委員会・鳥浜貝塚研究グループ 「(1)石斧柄」P103『鳥浜貝塚』 1979
- 註 30 弓には弓材を反対に強く押し曲げて弦をかける彎弓と、反対に弦をかけることのない直弓との2型式がある。(日本考古学協会編『日本考古学辞典』P554左 ㊦26～28 1981)
- 註 31 上端の弮が末弮であり、下端が本弮である。
- 註 32 大阪文化財センター 「木器編」P30 ㊦16～18『池上遺跡・四ツ池遺跡発掘調査報告書』第4分冊の2 1978
- 註 33 角山幸洋 「古代紡織技術の歴史」『歴史公論』第6巻5号 1980
- 註 34 註9のP118にも同様の紡錘が出土している。欄外8)には次のような記述がある。『太田英蔵の教示によると、本例は「紡錘の軋下」が異常に短少であった絵巻物や民俗例にみられるテツリツム、タシロギ用というよりも、むしろ紬糸用の可能性があるという。富山弘基・大野 力『沖縄の伝統織物』P39 徳間書店 1971』
- 註 35 日本考古学協会編『登呂』前編・本編 1978
- 註 36 後藤守一 「弥生時代木製品の研究」『伊豆 山木遺跡』 1962

- 註 37 註 19 に同じ 「機織具」P 19
- 註 38 山形市市史編纂委員会, 山形市市史編集委員会 「嶋遺跡」『山形市史』別巻 1 1968
- 註 39 秋田県教育委員会 『胡桃館埋没建物遺跡第 3 次発掘調査報告書』(秋田県文化財調査報告書第 22 集) 1970
- 註 40 太田英蔵 「登呂遺跡出土の織具」『学芸 考古民俗特輯 No.36 3月号』秋田屋 1948
- 註 41 註 9 に同じ 「櫛」P 113 ㊦23~37
- 註 42 註 19 に同じ P 21 杓文字? では身部断面を薄いレンズ状に削り出したものを杓文字?としているが 94 は凸レンズ状の膨らみを窺には不適当と判断した。
- 註 43 広島県教育委員会 『草戸千軒町遺跡 1971 年度-発掘調査概報-』 1972
- 註 44 新地町教育委員会 『三貫地-田丁場 A 地点調査報告・田丁場 B 地点調査概報-』 1978
- 註 45 第 180 図引用文献  
九州歴史資料館 『大宰府史跡-昭和 53 年度発掘調査概報-』 1979  
広島県教育委員会・広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 『草戸千軒遺跡-第 15~17 次発掘調査概要-』 1975  
秋田市教育委員会・有限会社秋田地所 『後城遺跡発掘調査報告書』 1978  
東京都教育委員会 『青戸・葛西城址調査報告』II 1974  
広島県草戸千軒遺跡調査研究所 『草戸千軒遺跡第 27 次発掘調査概要』 1979  
建設省・弘前市・弘前市教育委員会・堀越城跡発掘調査委員会 『堀越城跡』国道 7 号線石川バイパス・遺跡発掘調査報告書 1978  
秋田県教育委員会 『脇本埋没家屋第三次調査概報』(秋田県文化財調査報告書第 11 集) 1967
- 註 46 山口昌伴・G K 研究所 『主役の道具たち 図説 台所道具の歴史』柴田書店 1978
- 註 47 狩野 久・文化庁・東京国立博物館・京都国立博物館・奈良国立博物館 「木簡の形」P 25 上段 ㊦10~12『日本の美術』9 No.160 木簡 至文堂 1979
- 註 48 註 47 に同じ P 27 上段 ㊦1~4
- 註 49 矢吹町教育委員会 『古館遺跡調査報告』(矢吹町文化財調査報告書第 5 集)P 8 右 ㊦22・23
- 註 50 長谷川善和氏(横浜国立大学)の御教示による。
- 註 51 六勝寺研究会 『大藪遺跡 1972 年-発掘調査報告-』 1973
- 註 52 岡部町六反田遺跡調査会・岡部町教育委員会 『六反田』 1981
- 註 53 加藤 孝・小野 力・氏家和典 「仙台市燕沢善応寺横穴古墳群」『考古学雑誌』48 巻 1 号 1960
- 註 54 氏家和典 「宮城県涌谷町追戸 A 地区横穴群」『仙台湾周辺の考古学的研究』(宮城県の地理と歴史第 3 集) 宮城教育大学歴史研究会編 1968
- 註 55 木本元治 「轆轤土師器について」『福島県における土師器編年試論』福島県考古学会 1976
- 註 56 註 6 に同じ
- 註 57 氏家和典 「東北土師器の型式分類とその編年」『歴史』第 14 集 東北史学会 1957
- 註 58 小井川和夫・高橋守克 「宮城県対馬遺跡出土の土器」『宮城史学』第 5 号 1977
- 註 59 木本元治 「下原遺跡 7 号ピット出土の土器」『しのぶ考古』7 しのぶ考古学会 1978

- 註 60 白鳥良一 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要』Ⅶ 宮城県多賀城跡調査研究所 1980
- 註 61 註 55 に同じ
- 註 62 岡田茂弘・桑原滋郎 「多賀城周辺における古代杯形土器」『研究紀要』Ⅰ 宮城県多賀城跡調査研究所 1975
- 註 63 二本松市教育委員会 『二本松市史』3 資料編 1 原始・古代・中世 1981
- 註 64 福島県教育委員会 「勝利ヶ岡遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告』本文編(福島県文化財調査報告書第 47 集) 1975
- 註 65 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター 「西原遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告』Ⅴ(福島県文化財調査報告書第 85 集) 1980  
 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター 「沼平遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告』Ⅶ(福島県文化財調査報告書第 96 集) 1981
- 註 66 福島県教育委員会 「金重谷地遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告』本文編(福島県文化財調査報告書第 47 集) 1975  
 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター 「佐平林遺跡(Ⅳ区)」『母畑地区遺跡発掘調査報告』Ⅲ(福島県文化財調査報告書第 74 集) 1979
- 註 67 宮城県多賀城跡調査研究所 『多賀城跡』(宮城県多賀城跡調査研究所年報-1980-) 1981
- 註 68 福島県教育委員会 「治部池横穴群」『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告』Ⅰ(福島県文化財調査報告書第 80 集) 1980
- 註 69 宮城県教育委員会 『長者原貝塚・上新田遺跡』(宮城県文化財調査報告書第 78 集) 1981
- 註 70 川越哲志 『弥生時代鉄製工具の研究(Ⅰ)-板状鉄斧について-』(広島大学文学部紀要第 33 号) 0000
- 註 71 宮城県教育委員会 「台ノ山遺跡」『東北新幹線関連遺跡調査報告書』Ⅱ(宮城県文化財調査報告書第 62 集) 1980
- 註 72 註 3 に同じ
- 註 73 岡崎信夫氏(福島気象台防災業務課)の御教示による。
- 註 74 埼玉県教育委員会 「下田・訪諏遺跡」『上越新幹線埋蔵文化財発掘調査報告』Ⅲ(埼玉県遺跡発掘調査報告書第 21 集) 1979
- 註 75 註 3 に同じ
- 註 76 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター 「谷地前 C 遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告』Ⅱ(福島県文化財調査報告書第 67 集) 1973  
 福島県教育委員会・財団法人福島県文化センター 「谷地前 C 遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告』Ⅳ(福島県文化財調査報告書第 85 集) 1980
- 註 77 二本松市教育委員会 『郡山台』Ⅳ(二本松市文化財調査報告書第 6 集) 1980
- 註 78 註 67 に同じ
- 註 79 註 44 に同じ
- 註 80 富岡町教育委員会 『真壁城蹟の概要』 1982
- 註 81 いわき市教育委員会 『八幡台遺跡』(いわき市埋蔵文化財調査報告書第 5 集) 1980

- 註 82 福島県教育委員会 『伊達西部地区遺跡発掘調査報告』（福島県文化財調査報告書第 82 集）
- 註 83 福島県教育委員会 『東北自動車道遺跡調査報告』（福島県文化財調査報告書第 47 集） 1975
- 註 84 戸田有二 『油王田遺跡発掘調査報告書—先土器時代終末期～中世城郭跡までの発掘調査—』 安達町教育委員会 1981
- 註 85 郡山市教育委員会・福島県郡山農地事務所 「中村館」『中世館跡調査報告書』（郡山市文化財調査報告書第 22 集） 1975
- 註 86 吉田幸一氏の御教示による。
- 註 87 長沼町教育委員会 「薊之内 B 遺跡・門無遺跡」『長沼町遺跡群発掘調査概報』 1979
- 註 88 長沼町教育委員会 「大久内遺跡」『長沼町遺跡群発掘調査概報』 1980
- 註 89 渡辺一雄・星圭之助 『古館遺跡調査報告』（矢吹町文化財調査報告書第 5 集） 矢吹町教育委員会 1982
- 註 90 註 66「佐平林遺跡(W区)」に同じ
- 註 91 福島県教育委員会 『閑和久遺跡』Ⅲ（福島県文化財調査報告書第 49 集） 1975
- 註 92 古川利意氏の御教示による。
- 註 93 会津坂下町教育委員会 『坂下町史』Ⅲ 歴史編 1979
- 註 94 筆者実見
- 註 95 喜多方市教育委員会 『新宮城跡』 1974
- 註 96 註 14 に同じ
- 註 97 蓋板 B は凹線を刻まず、直接側板を樺皮で綴じるものであり、蓋形 A は 7 C 末～8 C 前半に、蓋形 B は 8 C 後半～9 C の遺物が多い。御山千軒遺跡は土器の年代から 9 C 以後のものと思われ、L 字形の切りかきをもった厚板を蓋板としたことについては、今後再検討しなければならないであろう。
- 註 98 福島県松枝岐村在住の平野高三郎氏宅にて筆者実見
- 註 99 成田 敏 「ワッパ(曲物)の製作」青森県北津軽郡金木町『北海道・東北民具研究会報』Vo1.1 No2 北海道・東北民具研究会報 1979
- 註 100 心棒を中心にして刃のついた一方を回転させ板を円形に切りぬくブンギリまたはキリダシともいう工具を使用する。板の厚さにもよるが一般的に板の両面から切りぬく。心棒をつきさしてできた中心の穴は小さな木片をうめこむ。
- 註 101 註 19 に同じ 伊場では曲物を平面形から I 類(楕円形)、II 類(長方形・方形)、III 類(円形)カキイレゾコ、IV 類(円形)クレゾコと分類している。カキイレゾコは厚板の上に側板をのせ樺皮でとめるもの、クレゾコは厚板の周縁に側板をまき、木釘でとめるものをいう。
- 註 102 註 8 に同じ P 152 ㊦33～34
- 註 103 註 14 に同じ P 75 ㊦4～7
- 註 104 加賀ひろ子 「漁村における麻糸撚りの技術」『神奈川県立博物館研究報告』第 1 巻 第 2 号—考古・歴史・美術・民俗— 神奈川県立博物館 1969
- 註 105 註 38 に同じ P 122 ㊦1～2 に「52g～14g に至る軽重があることは紡がれる糸に太・細の差があったことを物語る。」とあるが、撚る糸の種類も加えられよう。
- 註 106 奈良県立橿原考古学研究所・附属考古博物館 『古代人のいのり』土偶から墨書人面土器まで 1977

- 註 107 小田富士雄 「沖の島祭祀遺跡の時代とその祭祀形態」『宗像沖ノ島』I
- 註 108 高橋健自 『古墳発見石製品模造器具の研究』(帝室博物館学報第1冊) 1919
- 註 109 註 40 に同じ P21 下 10
- 註 110 註 40 に同じ
- 註 111 金子裕之 「古代の木製模造品」『研究論集』VI(奈良国立文化財研究所学報第38冊) P21 第2表 木製模造品と延喜式の祭料より 奈良国立文化財研究所 1980
- 註 112 註 107 に同じ
- 註 113 愛知県教育委員会 『朝日遺跡』II 1982 においても両方使用している。
- 註 114 註 45 『脇本埋没家屋第三次調査概報』に同じ
- 註 115 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所 『草戸千軒』河底に埋れた中世の町 1979
- 註 116 第221 図引用文献  
註 39 に同じ  
秋田県教育委員会 『脇本埋没家屋第二次調査概報』(秋田県文化財調査報告書第6集) 1966  
岩手県教育委員会 「落合Ⅱ遺跡」『東北新幹線関連埋蔵文化財調査報告書Ⅵ集』(岩手県文化財調査報告書第50集) 1980  
藤沢宗平 「長野県上伊那郡箕輪遺跡について」『信濃』第7巻2号  
浜松市教育委員会 『伊場遺跡遺物編』2 (伊場遺跡発掘調査報告書第4冊) 1980  
註 111 に同じ P15 第3 図5 入善町教育委員会 『入善町じょうべのま遺跡発掘調査概要(3)』  
1975  
奈良国立文化財研究所 『飛鳥・藤原宮発掘調査概報』8 1978  
奈良県立橿原考古学研究所 「稗田遺跡」『奈良県遺跡調査概報 1976 年度』 1977  
六勝寺研究会 『大藪遺跡 1972 年発掘調査報告』 1973  
岡山県教育委員会 「下市瀬遺跡」『中国縦貫自動車道建設に伴う発掘調査』I(岡山県埋蔵文化財調査報告3) 1973
- 註 117 淳仁天皇 「續日本紀 卷二十四」天平宝字七年五月庚午(吉川弘文館 『國史大系』續日本紀 後篇 1975 より)
- 註 118 光仁天皇 「續日本紀 卷三十三」宝龜六年九月辛亥(註 117 に同じ)
- 註 119 称徳天皇 「續日本紀 卷三十」宝龜元年八月庚寅朔(註 117 に同じ)
- 註 120 金子裕之 「古代の木製模造品」『研究論集』VI(奈良国立文化財研究所学報第38冊) 奈良国立文化財研究所 1980
- 註 121 福島県郡山市古亀田遺跡(梅宮 茂「第3編 古代」『郡山市史』第1巻 原始・古代・中世 郡山市 1975 )  
出土の土馬は東北地方唯一の報告例である。
- 註 122 小田富士雄・真野和夫 「土馬」『神道考古学講座第3巻 原始神道期二』雄山閣 1981 によれば、滑石製馬形は福岡県沖ノ島遺跡や埼玉県湯殿神社裏など6遺跡、金属製のものは栃木県日光男体山山頂遺跡のみから出土している。
- 註 123 大竹憲治 「三貫地遺跡出土の墨書土器考一特にF地点出土墨書土器をめぐる祭儀・呪儀について一」



- 『三貫地遺跡』 三貫地遺跡発掘調査団 1981
- 註124 京都市大藪遺跡や大阪府藤井寺市国府遺跡などでは、馬歯骨の出土状態から祭祀との関係が指摘されている。
- 註125 註116 「落合Ⅱ遺跡」に同じ

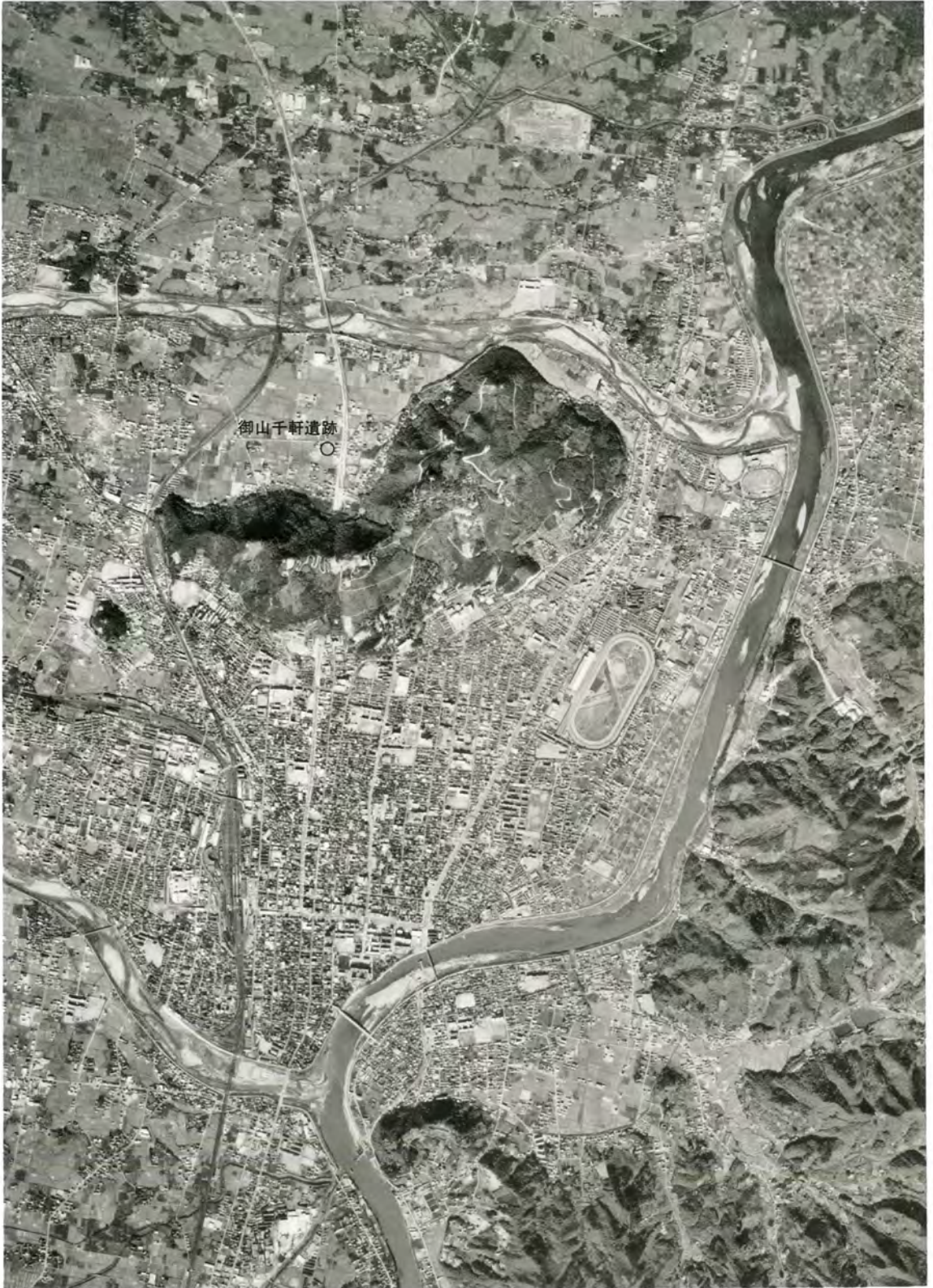
## 参 考 文 献

- 1961 末永雅雄 『榎原』 奈良県教育委員会
- 1962 岡本省吾他 『原色木材大図鑑』 保育社
- 1962 『平城宮発掘調査報告』Ⅱ 奈良国立文化財研究所 10 周年記念学報(学報第15) 奈良国立文化財研究所
- 1966 大場磐雄 「上代馬形遺物再考」『国学院雑誌 67 - 1』
- 1967 西村兵部 「No.12 織物」『日本の美術』4
- 1969 『山形県史』 資料11 編 考古資料 山形県教育委員会
- 1969 『胡桃館埋没建物遺跡第2次発掘調査概報』(秋田県文化財調査報告書第19集) 秋田県教育委員会
- 1969 「山木遺跡」『第二次調査概報』 韭山町山木遺跡発掘調査団
- 1969 川鱈実英 『日本服飾史辞典』 東京堂出版
- 1969 芝田清吾 『日本古代家畜史の研究』 学術書出版会
- 1970 石田英一郎 「新版河童駒引考」『石田英一郎全集』第5巻 筑摩書房
- 1970 大場磐雄 『祭祀遺跡』 角川書店
- 1970 『福島市史』原始・古代・中世1 福島市教育委員会
- 1971 『伊場遺跡第3次発掘調査概報』 浜松市遺跡調査会
- 1971 『福島県の寺院跡・城館跡』-文化調査報告書- 福島県教育委員会
- 1971 田原 久 「No.58 民具」『日本の美術』3
- 1971 『紡織習俗』Ⅱ 島根県・鹿児島県(無形の民俗文化財 記録 第26集) 文化庁・文化財保護部
- 1971 「木製品の調査と研究」月刊『文化財』 文化庁・文化財保護部
- 1971 小田富士雄 「古代形代馬考」『史淵』105・106 合輯号
- 1972 「伊場」『第4次発掘調査月報合本(1~6調査成果要旨)』 浜松市遺跡調査会
- 1972 『青梅市の民俗』1 青梅市教育委員会
- 1972 下出積與 『日本古代の神祇と道教』 吉川弘文館
- 1973 『伊場遺跡第5次発掘調査概報』 浜松市遺跡調査会
- 1973 「草戸千軒町遺跡-第9・10次発掘調査概要-」『草戸千軒町遺跡調査所年報 1973』 広島県教育委員会
- 1973 直良信夫 『古代遺跡発掘の家畜遺体』 校倉書房
- 1973 森 浩一 「考古学と馬」『馬』 社会思想社
- 1974 水野正好 「祭祀と儀礼」『古代史発掘 10-都とむらの暮らし』 講談社

- 1974 『全国遺跡地図－福島県－』 文化庁
- 1975 「平城京左京三条二坊」『奈良市庁舎建設地発掘調査報告』 奈良国立文化財研究所
- 1975 「上岡・堰下遺跡」『東北自動車道遺跡調査報告』（福島県文化財調査報告書第47集） 福島県教育委員会
- 1975 『伊場遺跡第6・7次発掘調査概報』 浜松市遺跡調査会
- 1975 「南郷文の文化財」（2）『南郷村史資料』<15> 南会津郡南郷村教育委員会
- 1975 『紡織習俗』I 新潟県・徳島県（無形の民俗資料 記録 第20集） 文化庁文化財保護部
- 1975 小笠原好彦 「土馬考」『物質文化』25号
- 1976 『伊場木簡』 図版（伊場遺跡発掘調査報告書第一冊 別冊） 浜松市教育委員会
- 1976 黒崎 直 「斎串考」『古代研究』10（冬の号） 財団法人元興寺仏教民俗資料研究所考古学研究室
- 1977 『ホビーラホビーレニュース』第5号 株式会社ダイヤクラフト
- 1977 『伊場遺跡遺構編』 別冊図版（伊場遺跡発掘調査報告書第二冊 別冊） 浜松市教育委員会
- 1978 『東北新幹線関連遺跡発掘調査概報』V（福島県文化財調査報告書第63集） 福島県教育委員会
- 1978 『川崎遺跡（第3次）・長宮遺跡発掘調査報告書』 上福岡市教育委員会
- 1978 『草戸千軒町遺跡－第24～26次発掘調査概要』 広島県草戸千軒町遺跡調査研究所
- 1978 水野正好 「まじない事始」『どるめん』18号
- 1979 「南郷村の文化財」（6）『南郷村史資料』<19> 南会津郡南郷村教育委員会
- 1979 『タテチョウ遺跡発掘調査報告』I 島根県教育委員会
- 1979 『服部遺跡発掘調査概報』 滋賀県教育委員会・守山市教育委員会・財団法人滋賀県文化財保護協会
- 1979 『下田野遺跡』 秋田市教育委員会・秋田市都市開発部
- 1979 秋山高志・北見俊夫・前村松夫・若尾俊平 図録『農民生活史事典』 柏書房
- 1980 町田 洋 「古代における製材技術の展開」『歴史公論』第6巻5号
- 1980 『教師のための統計入門』 福島県教育センター
- 1981、「養蚕秘録・蚕当計秘訣・蚕飼絹篩大師」『日本農業全集』35 農文協
- 1981 『群馬県立歴史博物館常設展示解説』 群馬県立歴史博物館
- 1981 『日本住宅公団藤枝地区埋蔵文化財発掘調査報告書』Ⅲ－奈良・平安時代編－ 藤枝市教育委員会・藤枝市埋蔵文化財調査事務所・藤枝市土地開発公社
- 1981 『伊場遺跡第8～13次発掘調査概報』 浜松市遺跡調査会
- 1981 『原深町遺跡』（福岡市埋蔵文化財調査報告書第71集） 福岡市教育委員会
- 1981 庄司吉之助 「福島県の民俗」1 『福島市史』別巻Ⅲ 福島市教育委員会
- 1981 村川友彦 「会津地方の近世における麻と苧麻の生産」『研究紀要』第3号 福島県歴史資料館
- 1981 金子裕之 「木製模造品」『神道考古学講座』第三巻
- 1981 「南郷村の文化財」（7）『南郷村史資料』<21> 南会津郡南郷村教育委員会
- 1981 『東北新幹線（白河～桑折間）地質図』 日本国有鉄道・仙台新幹線工務局・福島工事事務所・基礎地盤コンサルタント
- 1981 『伊皿子貝塚遺跡』本文編 港区伊皿子貝塚遺跡調査団
- 1981 志田諄一 「馬と神霊」『歴史公論』第7巻第7号 雄山閣

- 1981 R. S. パーリントン・D. C. メイ著, 林己知夫・脇本和昌訳 『確率・統計・ハンドブック』 森北出版
- 1982 『水入遺跡発掘調査報告書』(宮城県文化財調査報告書第84集) 宮城県教育委員会
- 1982 『浪岡城跡』IV 浪岡町教育委員会
- 1982 佐々木長生他 『民俗調査報告書』(町方編)(会津若松市文化財調査報告書第8号)
- 1982 『蒲沼遺跡発掘調査報告書』(秋田県文化財調査報告書第96集) 秋田県教育委員会
- 1982 『権現堂遺跡・金山遺跡分布調査報告書』 会津坂下町教育委員会  
渡辺三省 『越後縮布の歴史と技術』 小宮山出版

# 版 圖



第1図版 御山千軒遺跡航空写真



第2図版 御山千軒遺跡航空写真



第 3 図版 1. 御山千軒遺跡遠景(信夫山北側より) 2. 御山千軒遺跡近景(南側より)



第4図版 第1号住居跡

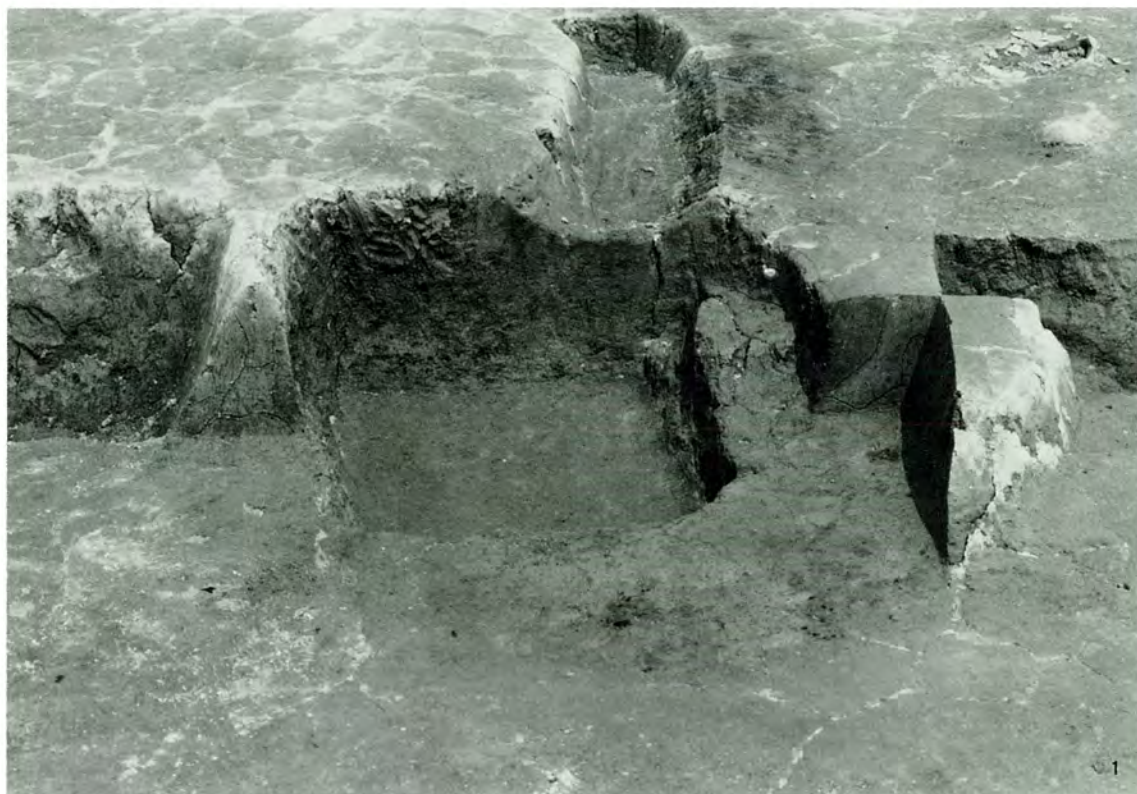
1. 全 景 2. 掘り方 3. 遺物出土状態 4. 1号ピット内遺物  
出土状態 5. 18号ピット内遺物出土状態





第 5 図版 第 2a・2b・9 号住居跡

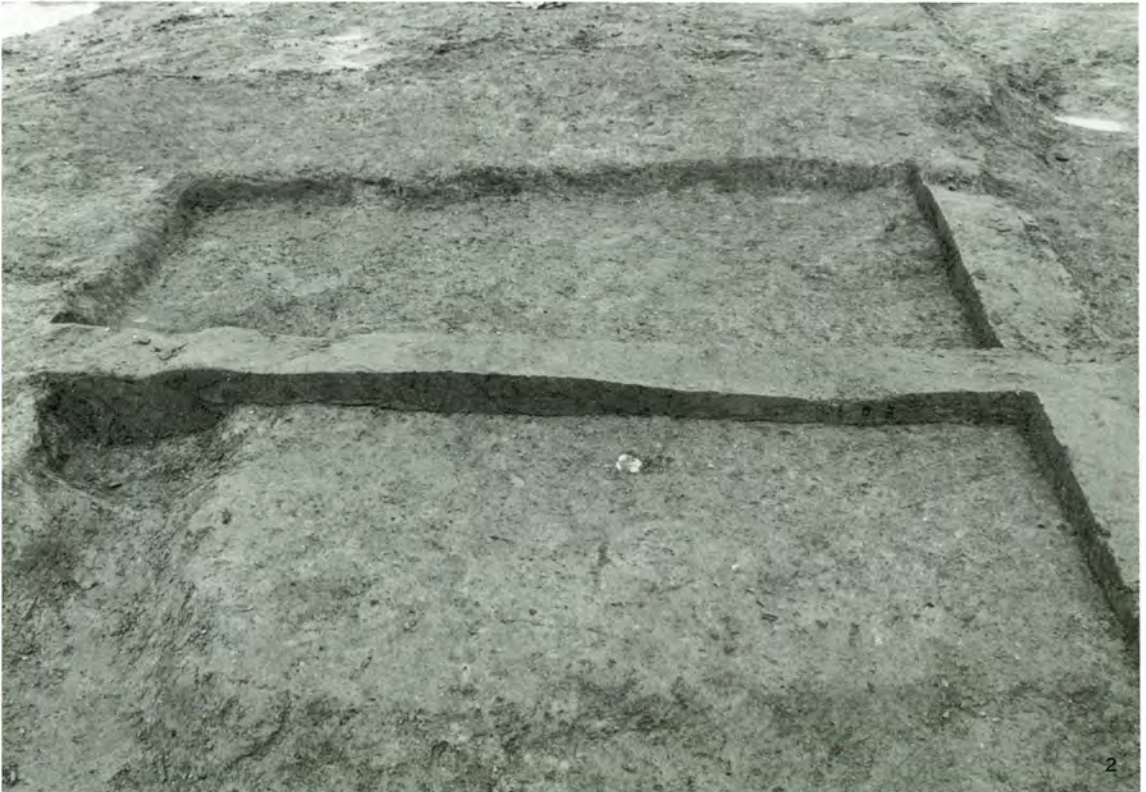
1. 2a・2b 号住居跡全景 2. 2b 号住居跡掘り方・9 号住居跡



第 6 図版 第 2a・2b 号住居跡 1. 第 2 号カマド(第 2a 号住) 2. 掘り方内遺物出土状態(第 2a 号住)  
3. 2 号ピット遺物出土状態(第 2a 号住) 4. 煙 道(第 2b 号住)



第7図版 第3号住居跡 1. 全 景 2. 1号ピットセクション



第8図版 第4号住居跡 1. 全 景 2. 西側セクション

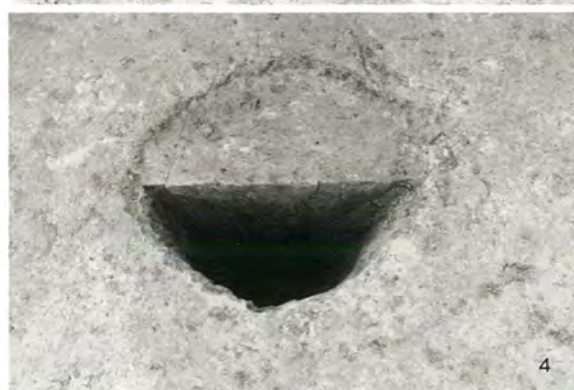


第 9 図版 第 5 号住居跡

1. 全 景 2. 5号ピット 3. 6号ピット 4. 遺物出土状態  
5. 掘り方

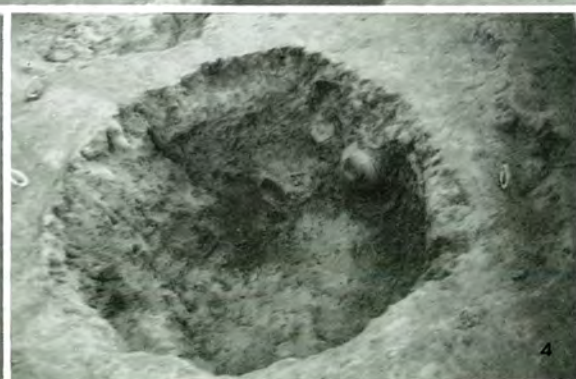
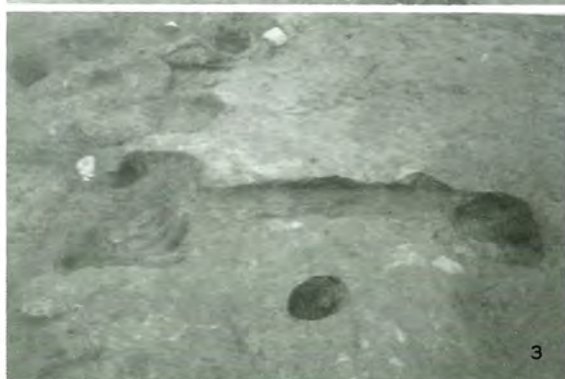
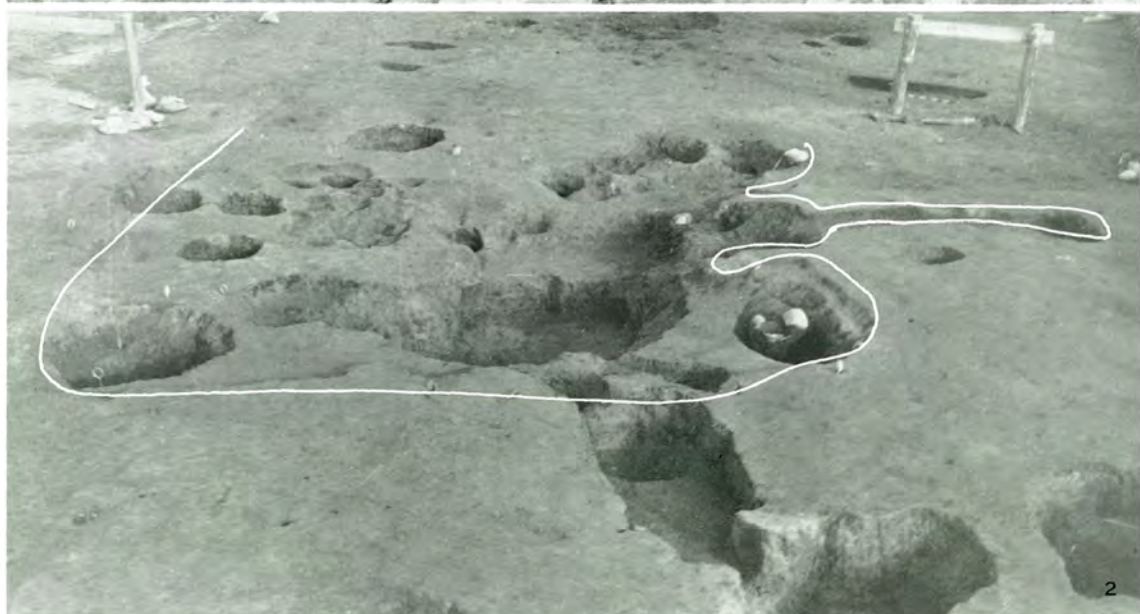


第 10 図版 第 8 号住居跡 1. 全 景 2. カマド 3. 支柱出土状態 4. 3号ピット



第11図版 第10号住居跡

1. 全 景 2. 1号ピット 3. 2号ピット 4. 3号ピット  
5. 4号ピット



第 14 図版 第 13・14 号住居跡

1. 全 景(第13号住)    2. 全 景(第14号住)  
3. カ マ ド(第14号住)    4. 3号ピット(第14号住)



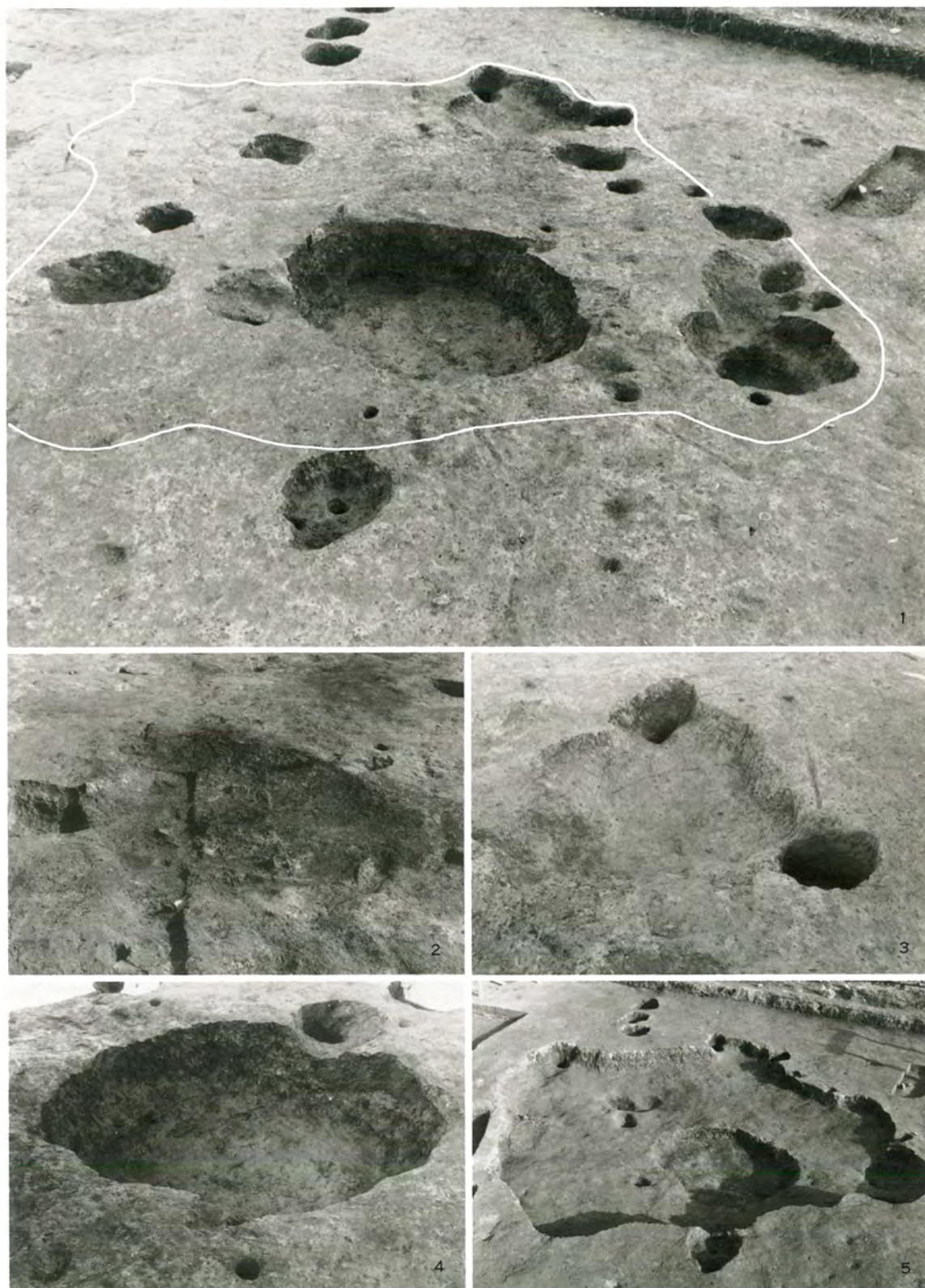


第 15 図版 第 15 号住居跡

1. 全 景 2. カマド 3. 支柱・遺物出土状態  
4. 3号ピット 5. 掘り方

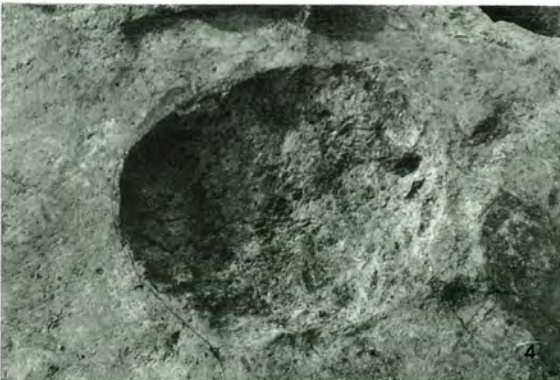
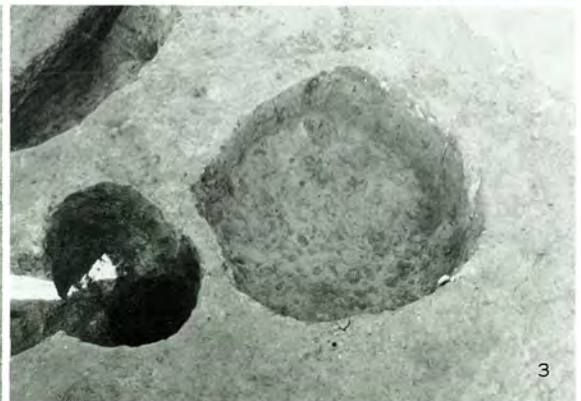
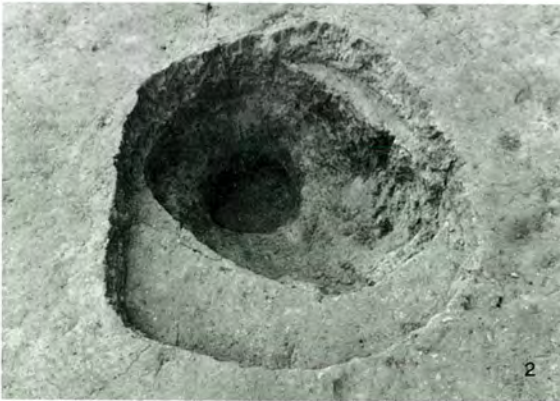


第 16 図版 第 16 号住居跡 1. 全 景 2. 東西セクション



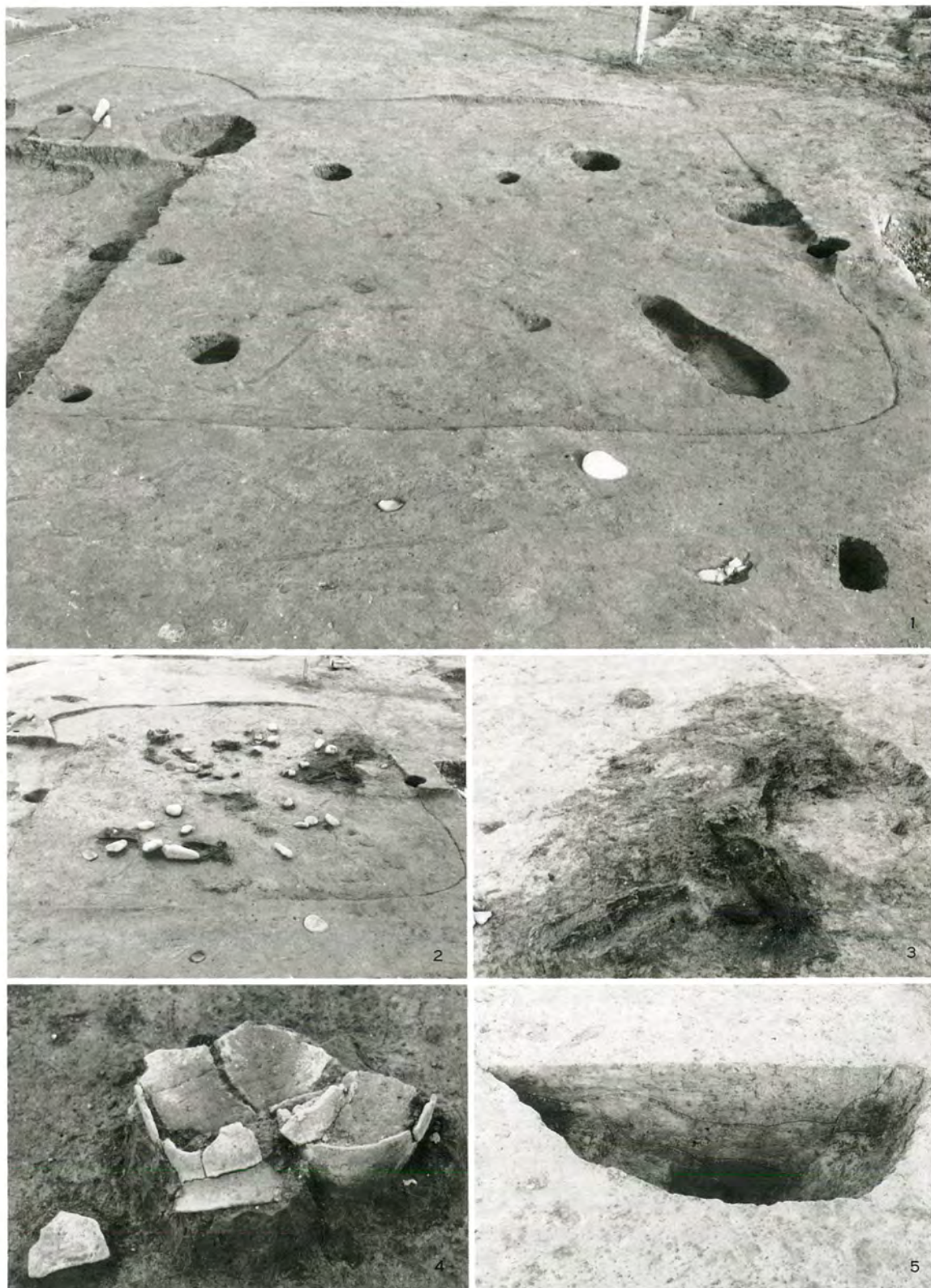
第 17 図版 第 17 号住居跡

1. 全 景 2. 木炭出土状態 3. 5号ピット 4. 9号ピット  
5. 掘り方



第 18 図版 第 18 号住居跡

1. 全 景 2. 1号ピット 3. 5号ピット 4. 7号ピット  
5. 掘り方セクション



第 19 図版 第 19 号住居跡

1. 全 景
2. 遺物出土状態
3. 木炭出土状態
4. 土器出土状態
5. 1号ピットセクション



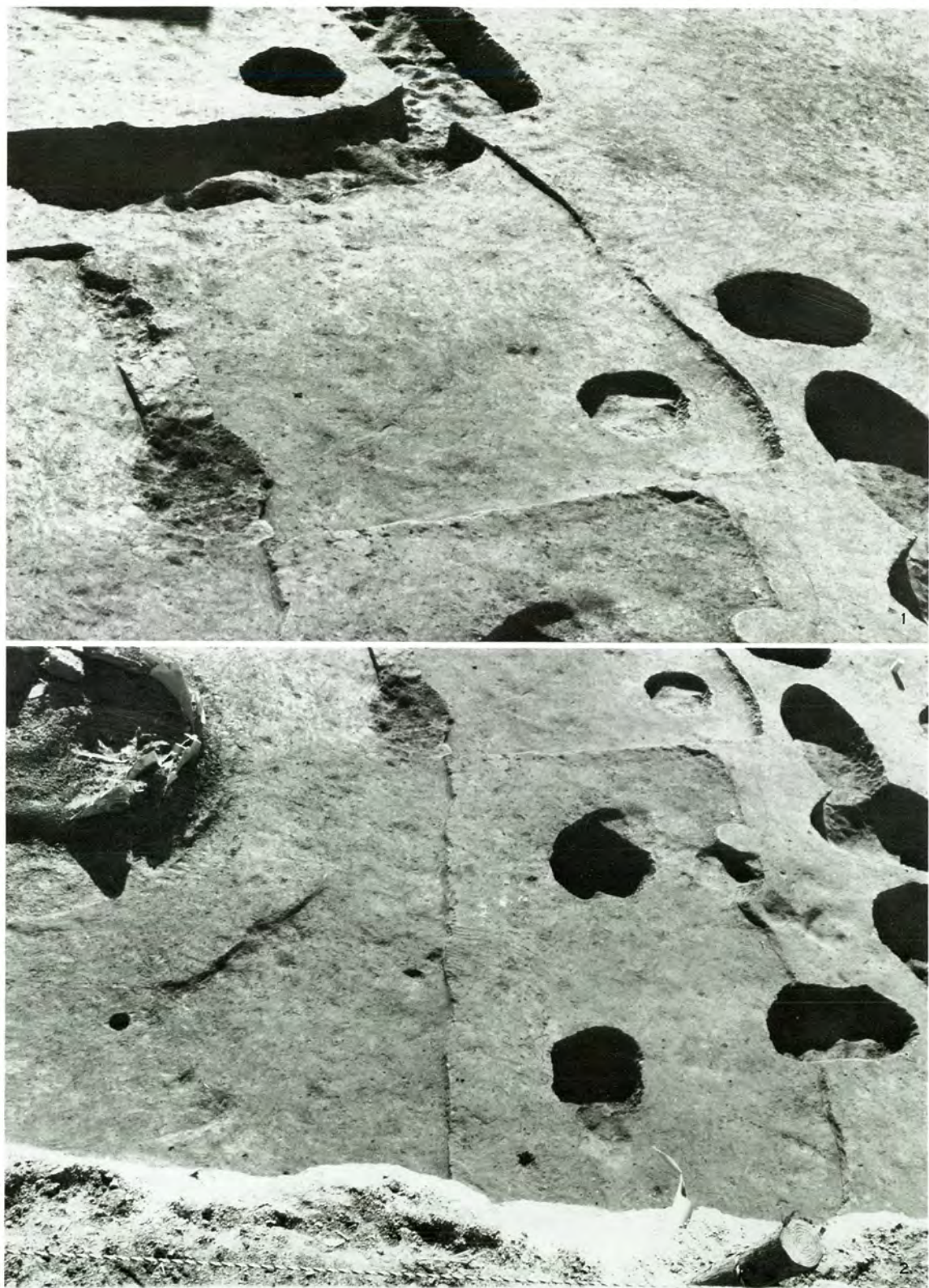
第 22 図版 第 24・25・26・27・30 号住居跡

1. 第 24 号住居跡全景
2. 第 25・26・27 号住居跡全景



第 23 图版 第 25·26 号住居跡

1. 第 25 号住居跡全景 2. 第 26 号住居跡全景



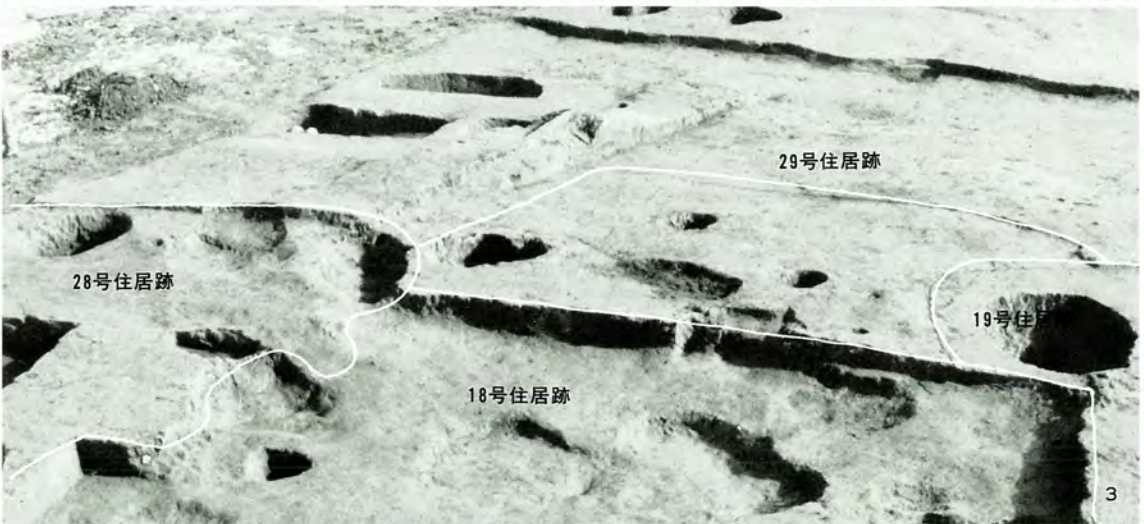
第 24 図版 第 26・27 号住居跡

1. 第 26 号住居跡全景 2. 第 27 号住居跡全景



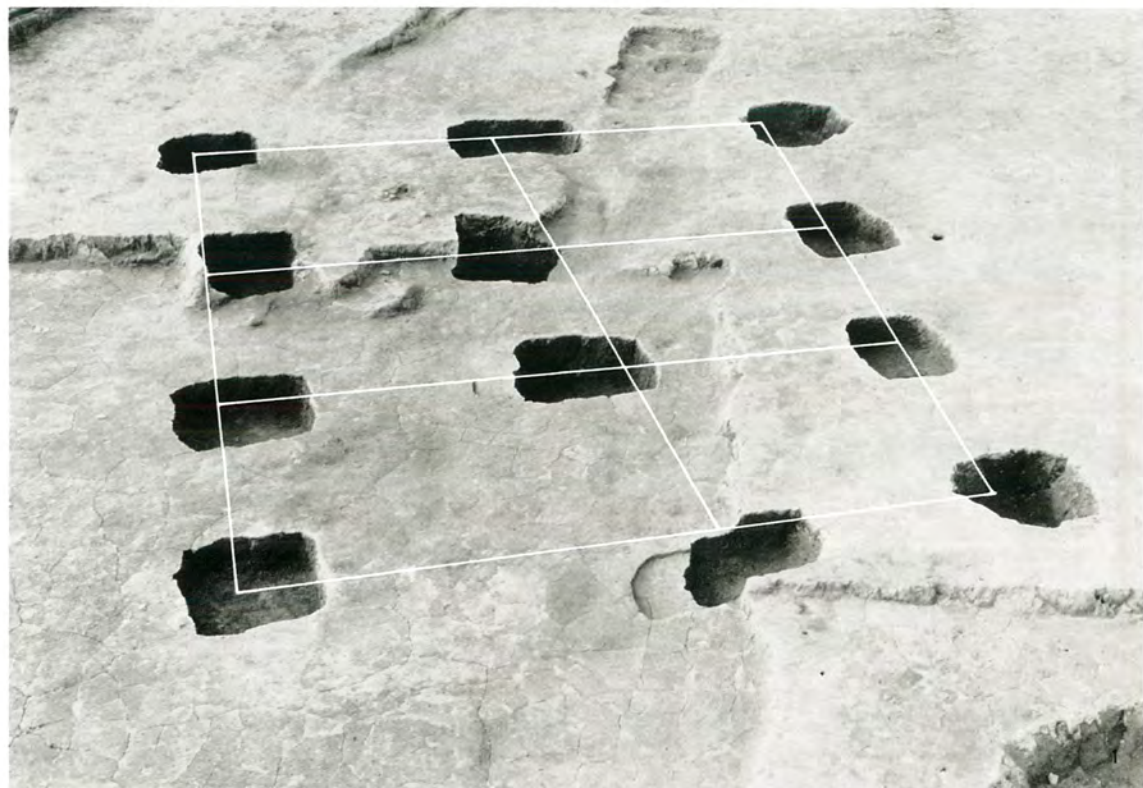


第 25 図版 第 27 号住居跡 1. カマド全景 2. カマドセクション



第 26 図版 第 28・29 号住居跡

1. 全 景(第28号住)
2. カ マ ド(第28号住)
3. 全 景(第29号住)



第 27 图版 第 1・2 号掘立柱建物跡

1. 第 1 号掘立柱建物跡 2. 第 2 号掘立柱建物跡

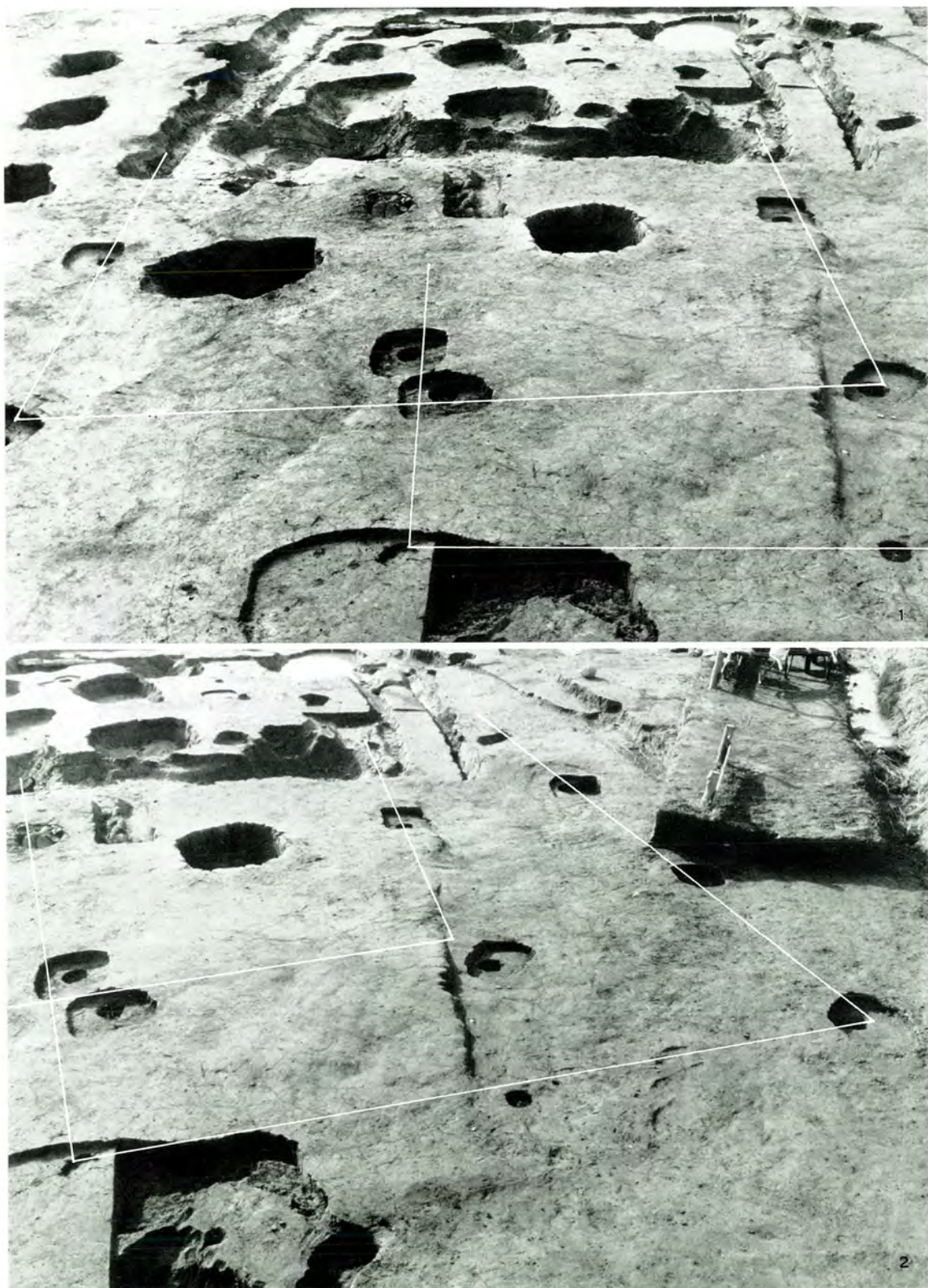


第 28 図版 第 3 号掘立柱建物跡 1. 全 景 2. 完掘状態



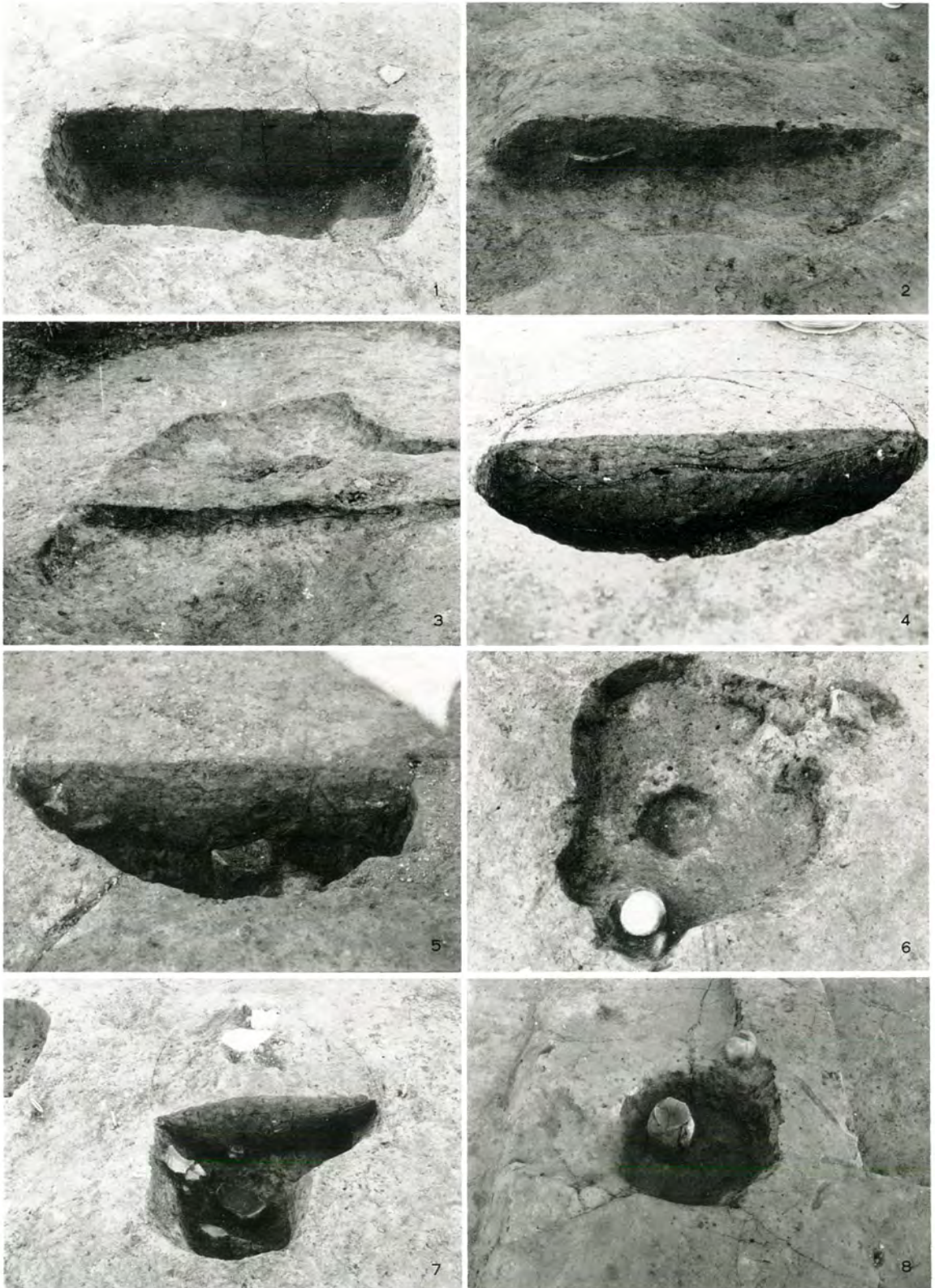
第 29 图版 第 3 号掘立柱建物跡

1. 2号柱穴 2. 4号柱穴



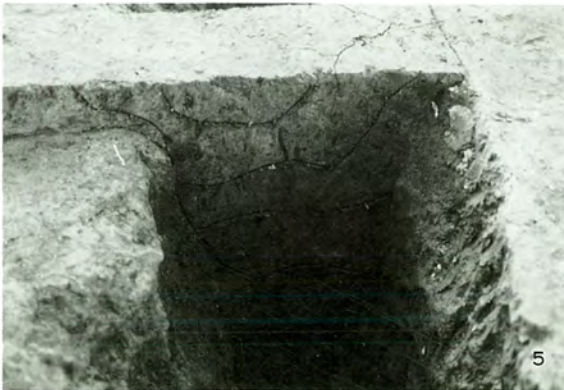
第 30 図版 第 5・6 号掘立柱建物跡

1. 第 5 号掘立柱建物跡 2. 第 6 号掘立柱建物跡



第 31 図版 ピ ッ ト

1. 第1号ピット 2. 第6号ピット 3. 第27号ピット 4. 第29号ピット  
5. 第31号ピット 6. 第35号ピット 7. 第39号ピット 8. 第47号ピット



第 32 図版 第 5・6・7・9 号溝跡

1. 第 6 号溝跡全景
2. 第 7 号溝跡全景
3. 第 5 号溝跡セクション
4. 第 6 号溝跡セクション
5. 第 7 号溝跡セクション
6. 第 9 号溝跡セクション





第 33 图版 第 8・9 号 沟 迹

1. 第 8 号 沟 迹 全 景 2. 第 9 号 沟 迹 全 景



第 34 図版 井 戸 跡      1. 井 戸 枠(南より)    2. 井 戸 枠(西より)



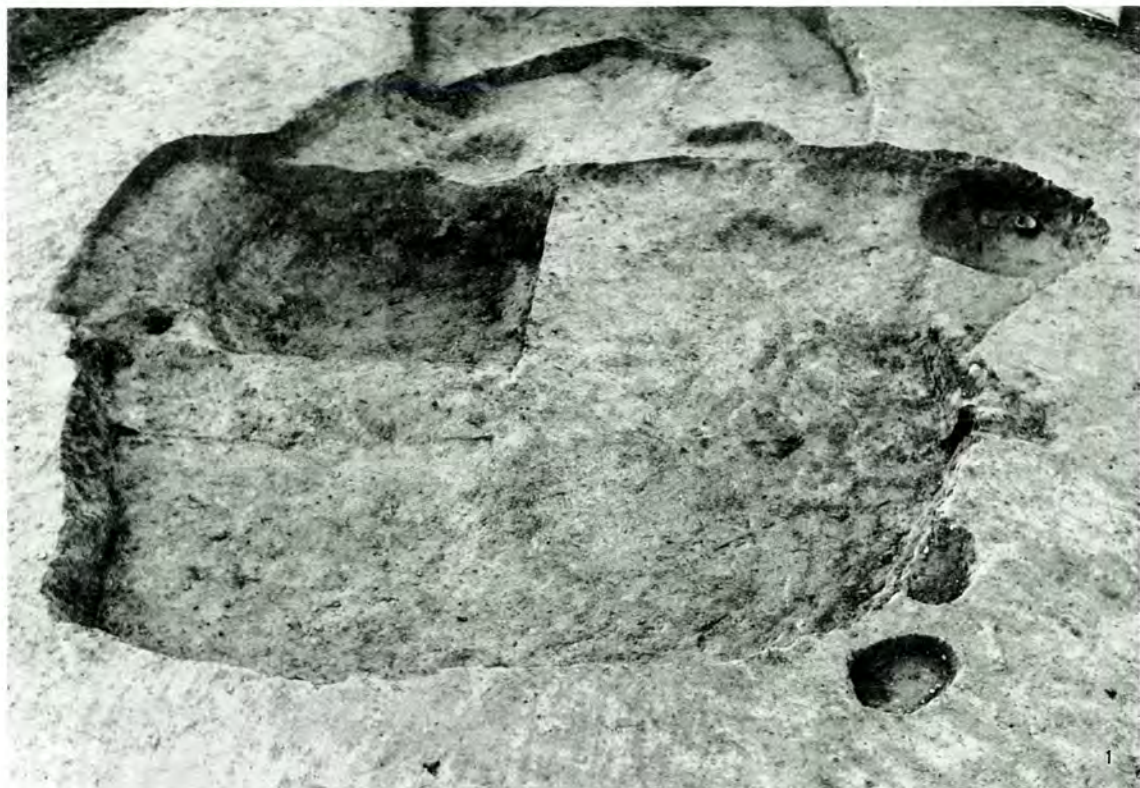
第 35 図版 井 戸 跡      1. 全 景(東より)    2. 井戸枠板外側



第 36 図版 井 戸 跡 1.2. 遺物出土状態



第 37 図版 第 1 号不明遺構 1. 全 景 2. セクション



第 38 図版 第 3・4 号不明遺構 1. 第 3 号不明遺構全景 2. 第 4 号不明遺構全景



第 39 図版 第 5・6 号不明遺構 1. 第 5 号不明遺構全景 2. 第 6 号不明遺構全景



第 40 図版 湿地性遺物包含層

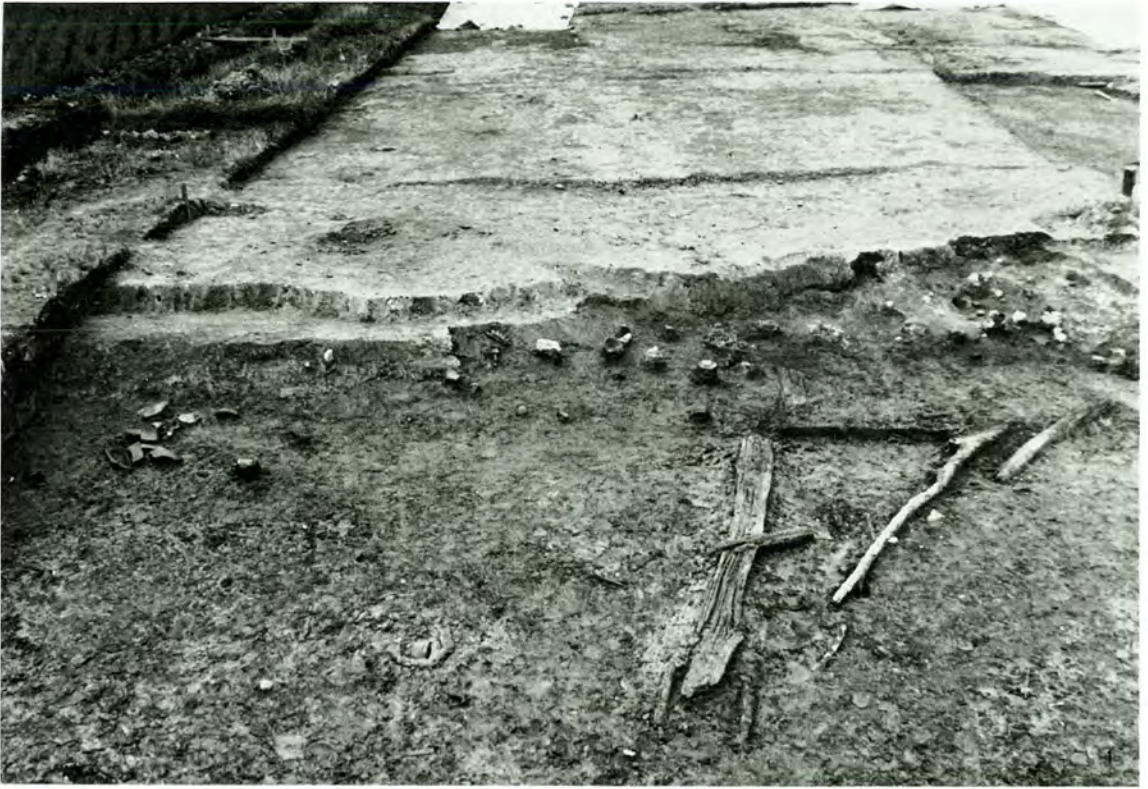
1. 2. 遺物出土状態





第 41 図版 湿地性遺物包含層

1.2. 遺物出土状態



第 42 図版 湿地性遺物包含層 木製品出土状態 1. 北より 2. 東より



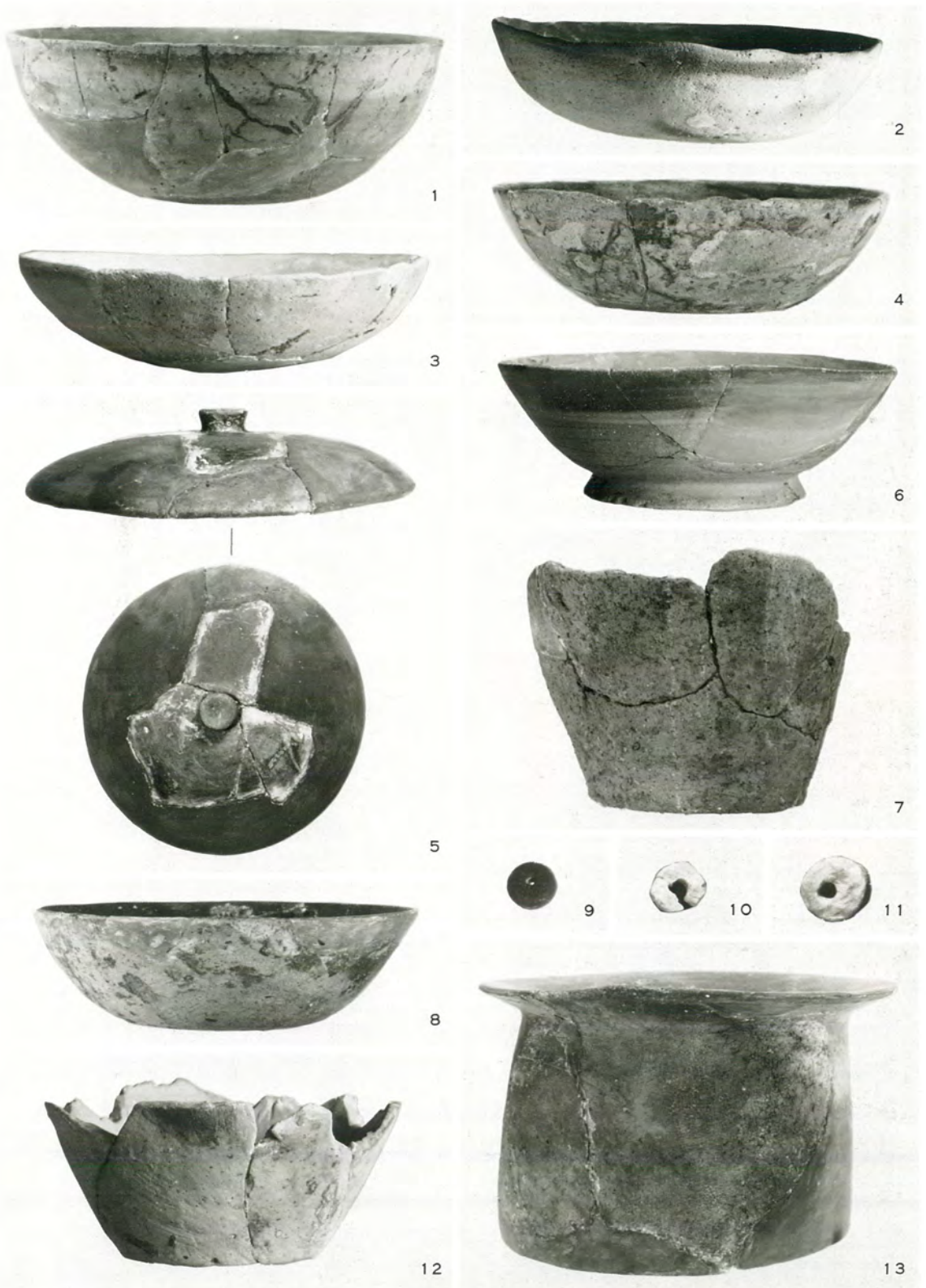
第 43 図版 湿地性遺物包含層 木製品出土状態

1. 全 景(東より) 2~4 曲 物  
5. 盤と木札状木製品

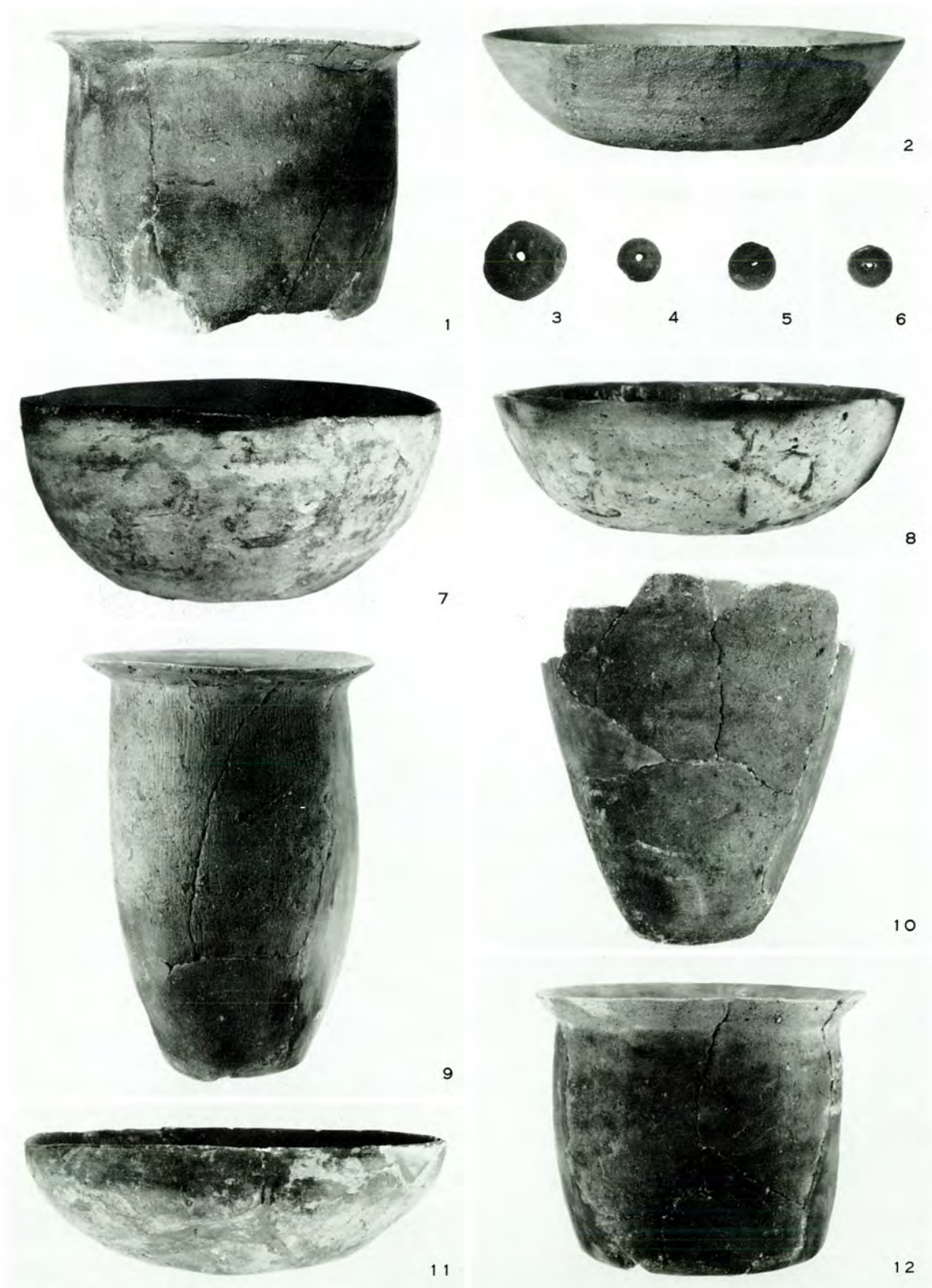


第 44 図版 湿地性遺物包含層 馬歯出土状態

1. 遠 景(北より)



第 45 図版 第 1・2 号住居跡出土遺物



第46图版 第5・8・9・10・11号住居跡出土遺物



1



2



3

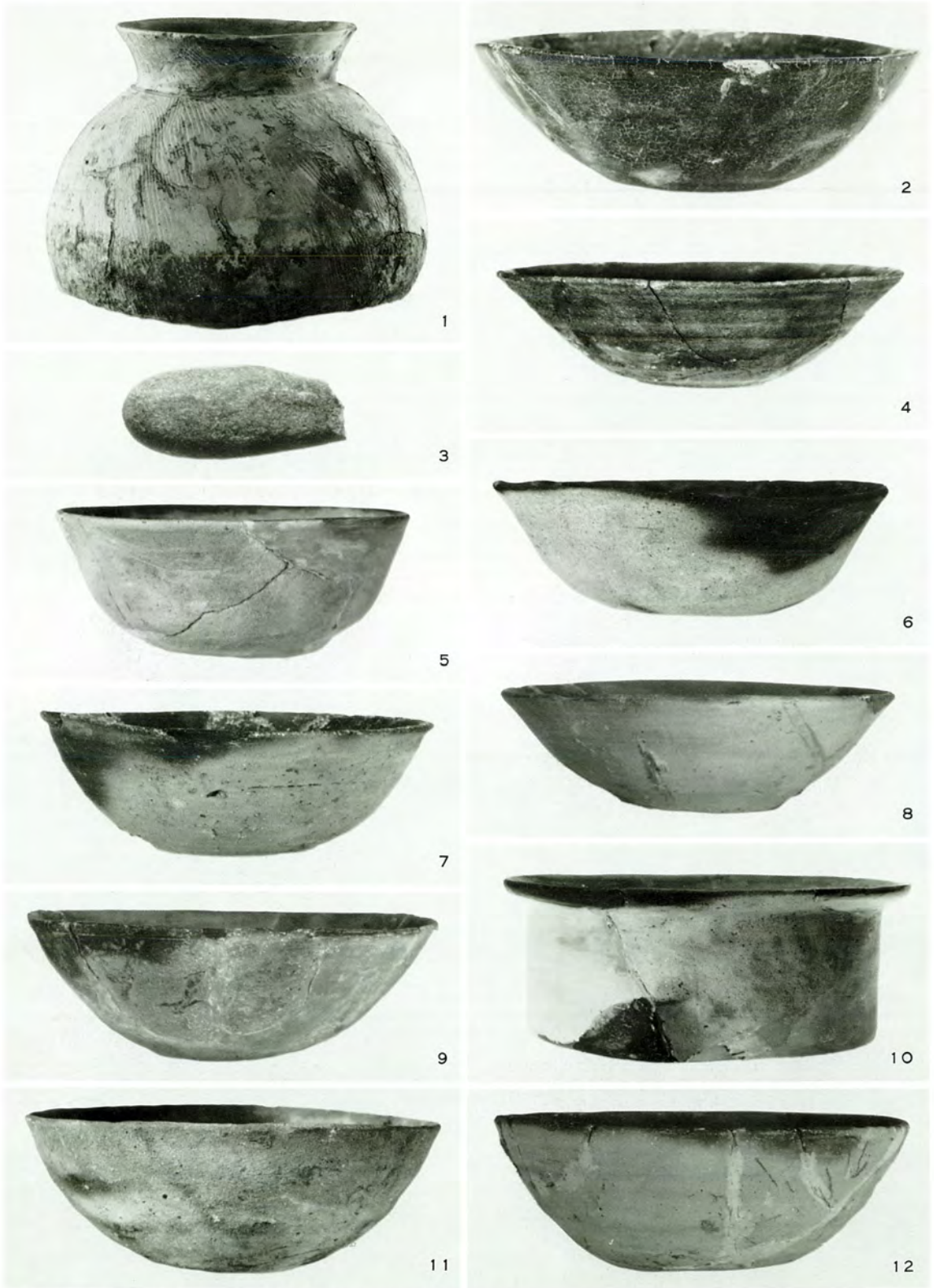


4



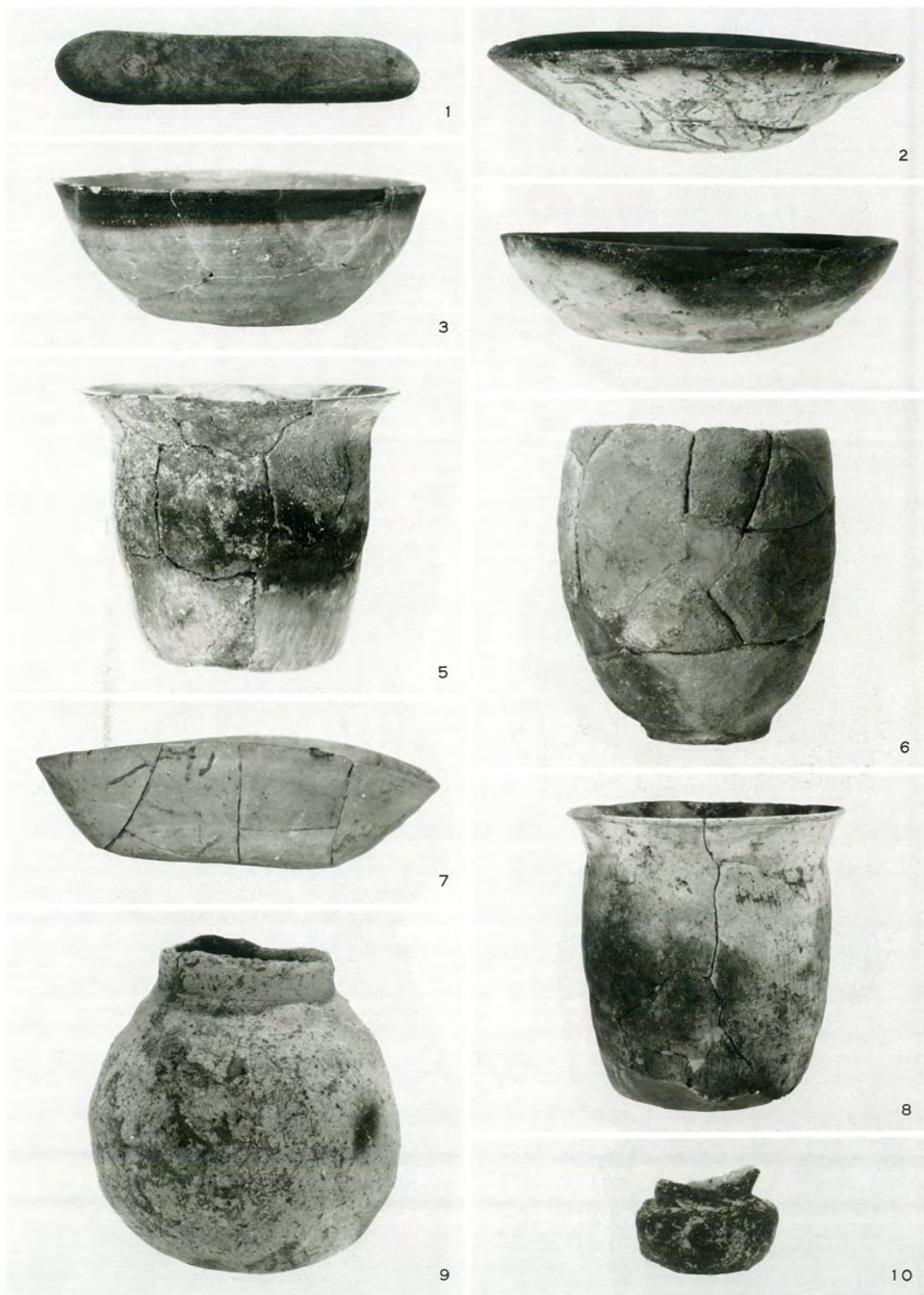
5

第 47 图版 第 11 号住居跡出土遺物

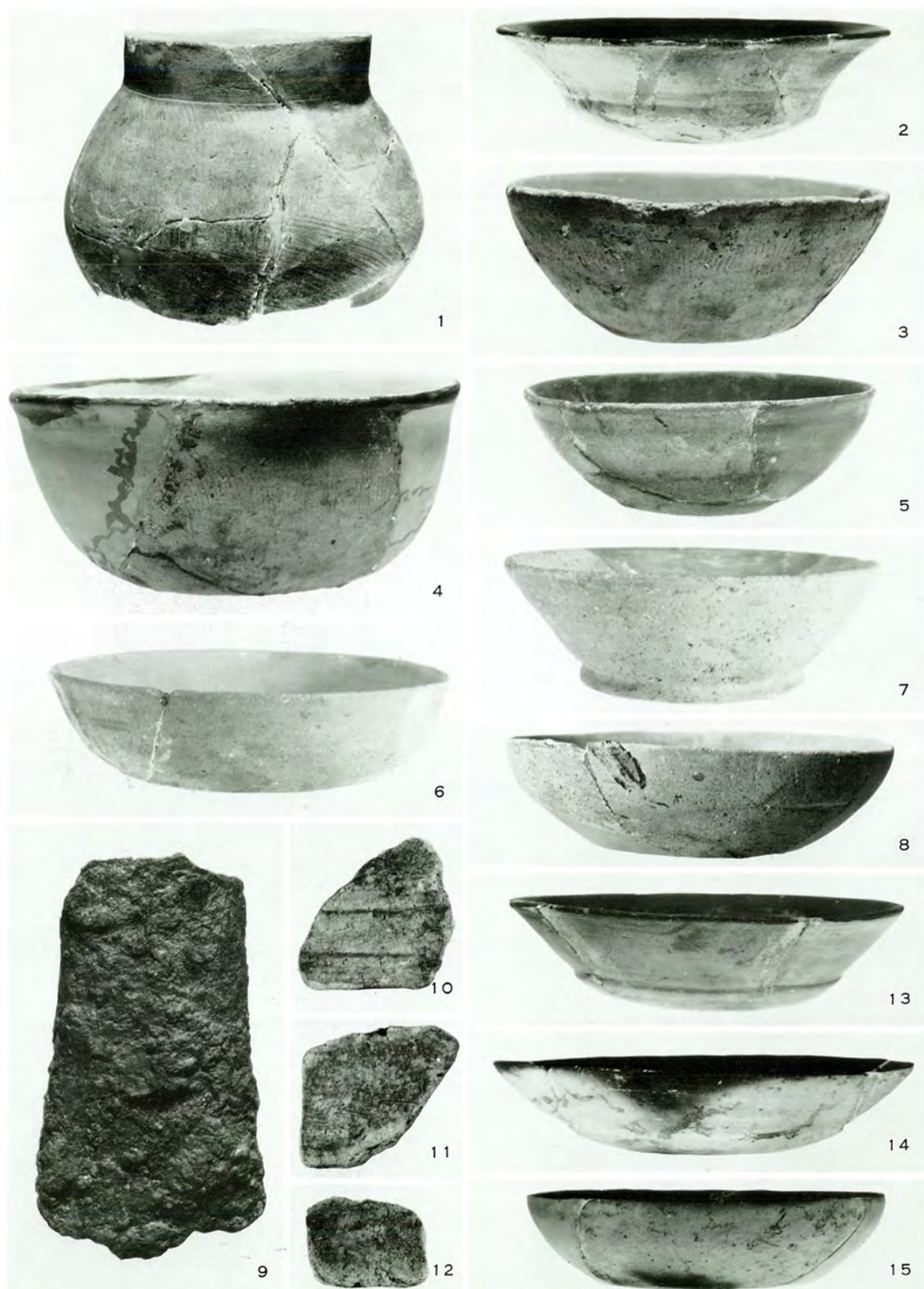


第 48 图版 第 11・13・14・15・17 号住居跡出土遺物

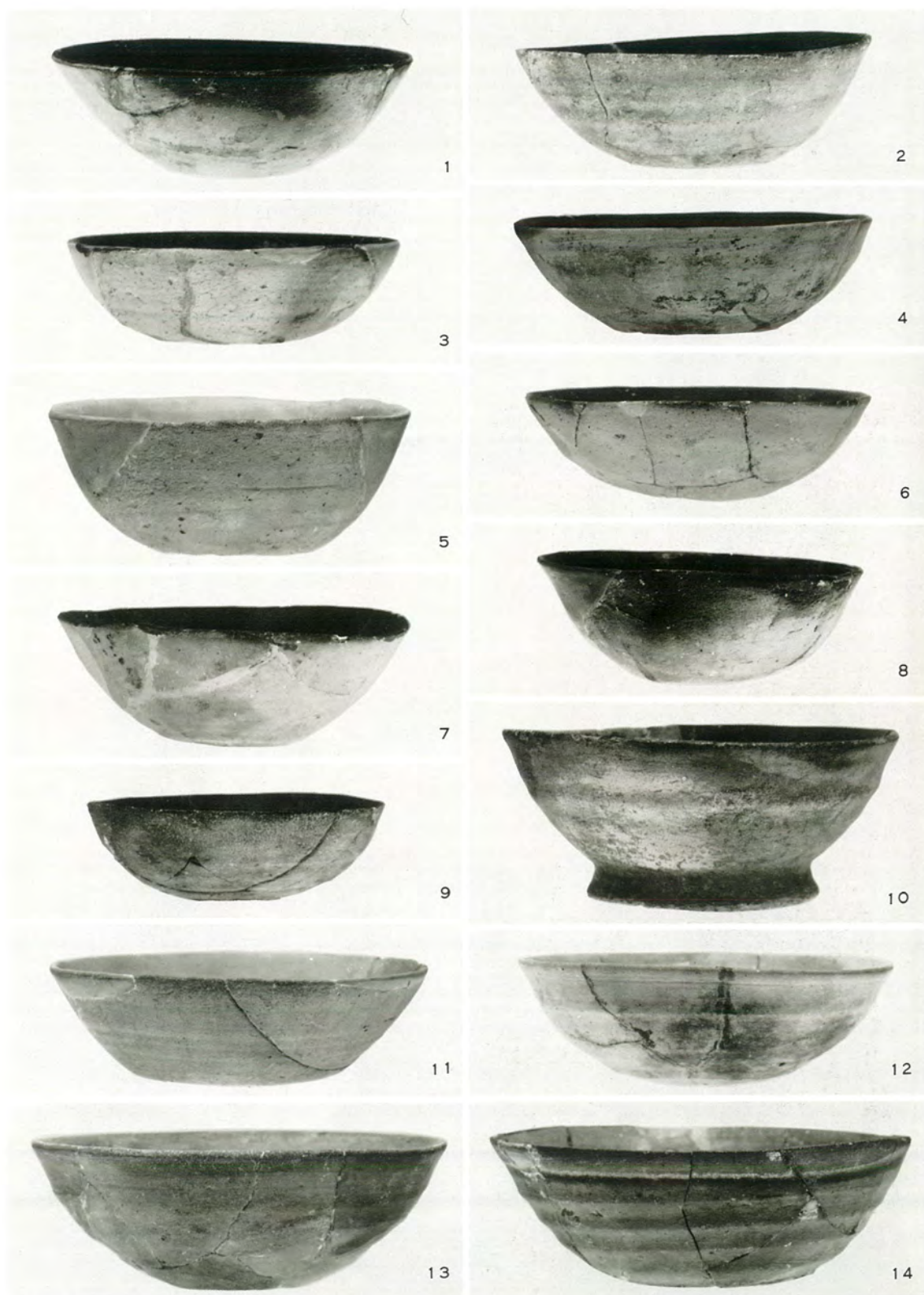




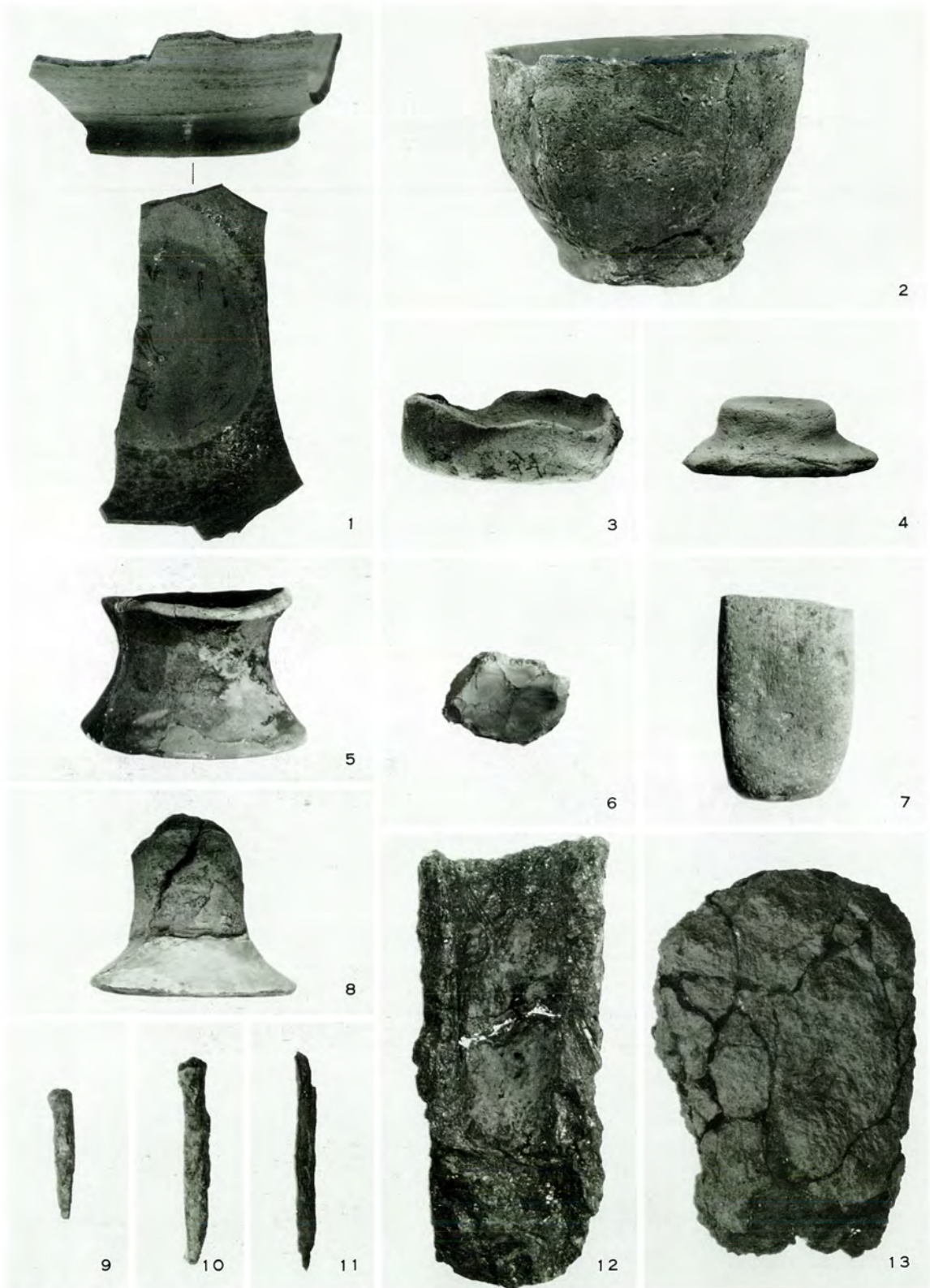
第 49 図版 第 17・18・19・21・22 号住居跡出土遺物



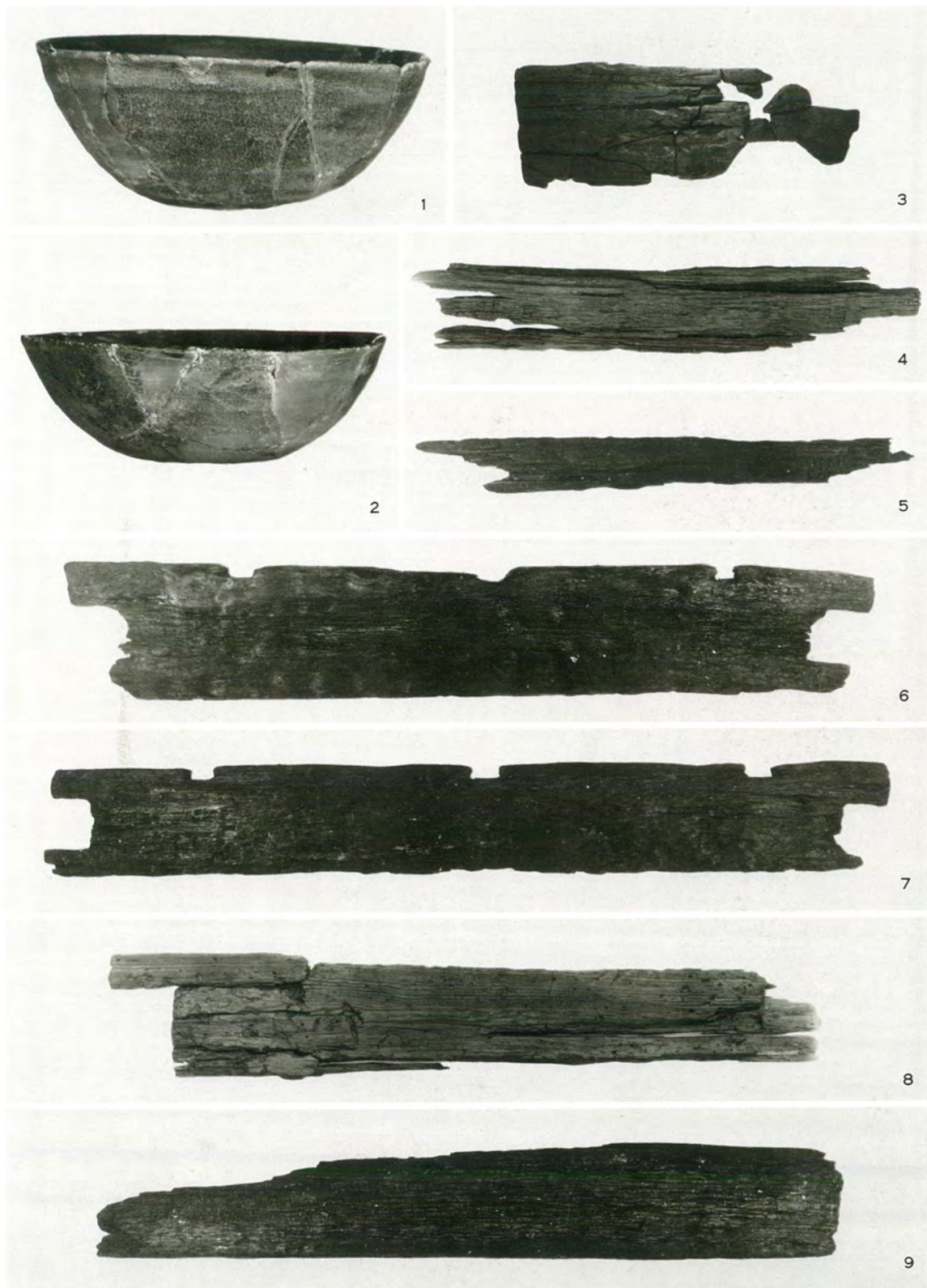
第 50 図版 第 1・6・47 号ピット 2・3 号遺構 遺構外出土遺物



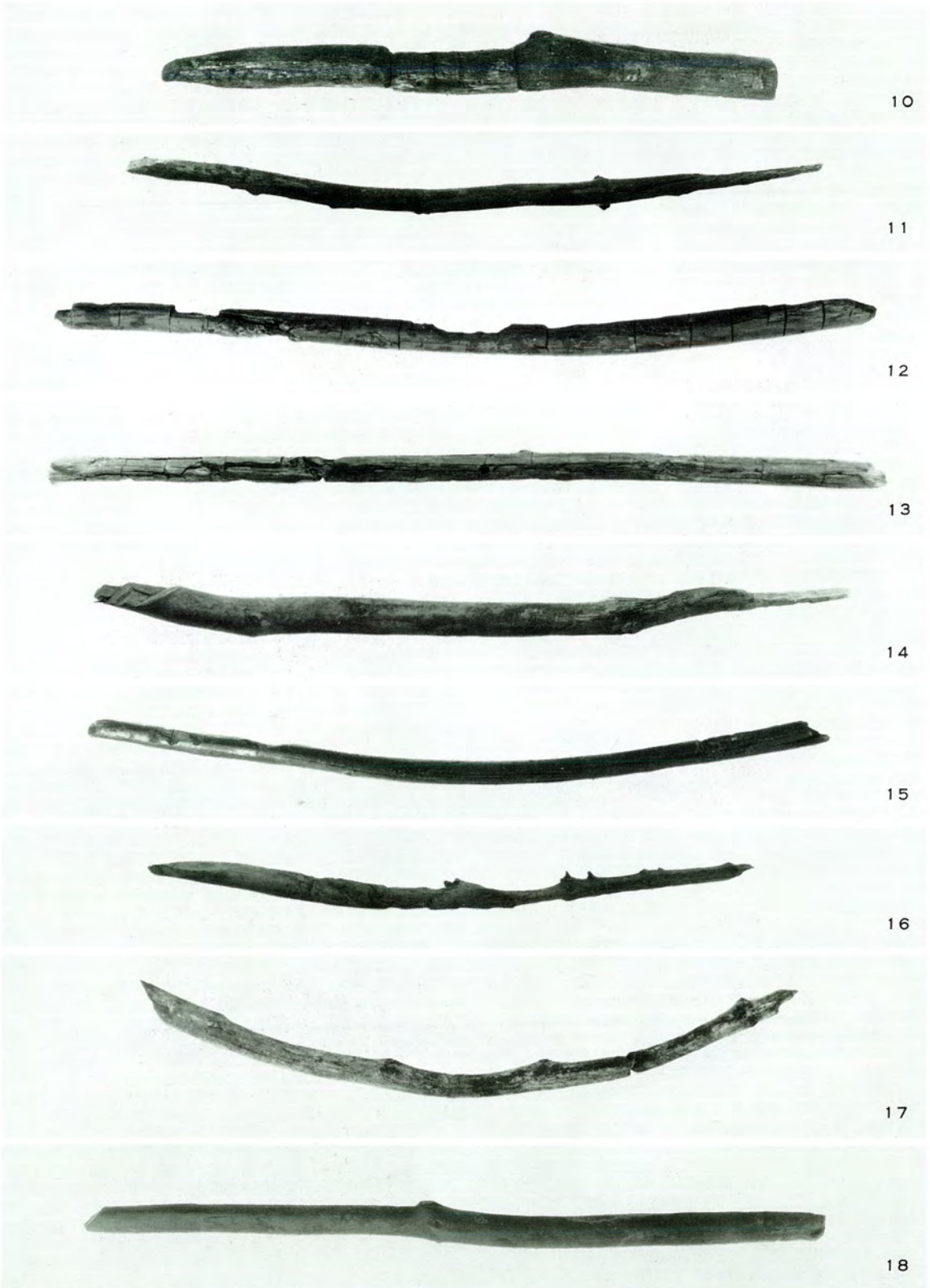
第 51 図版 遺構外出土遺物



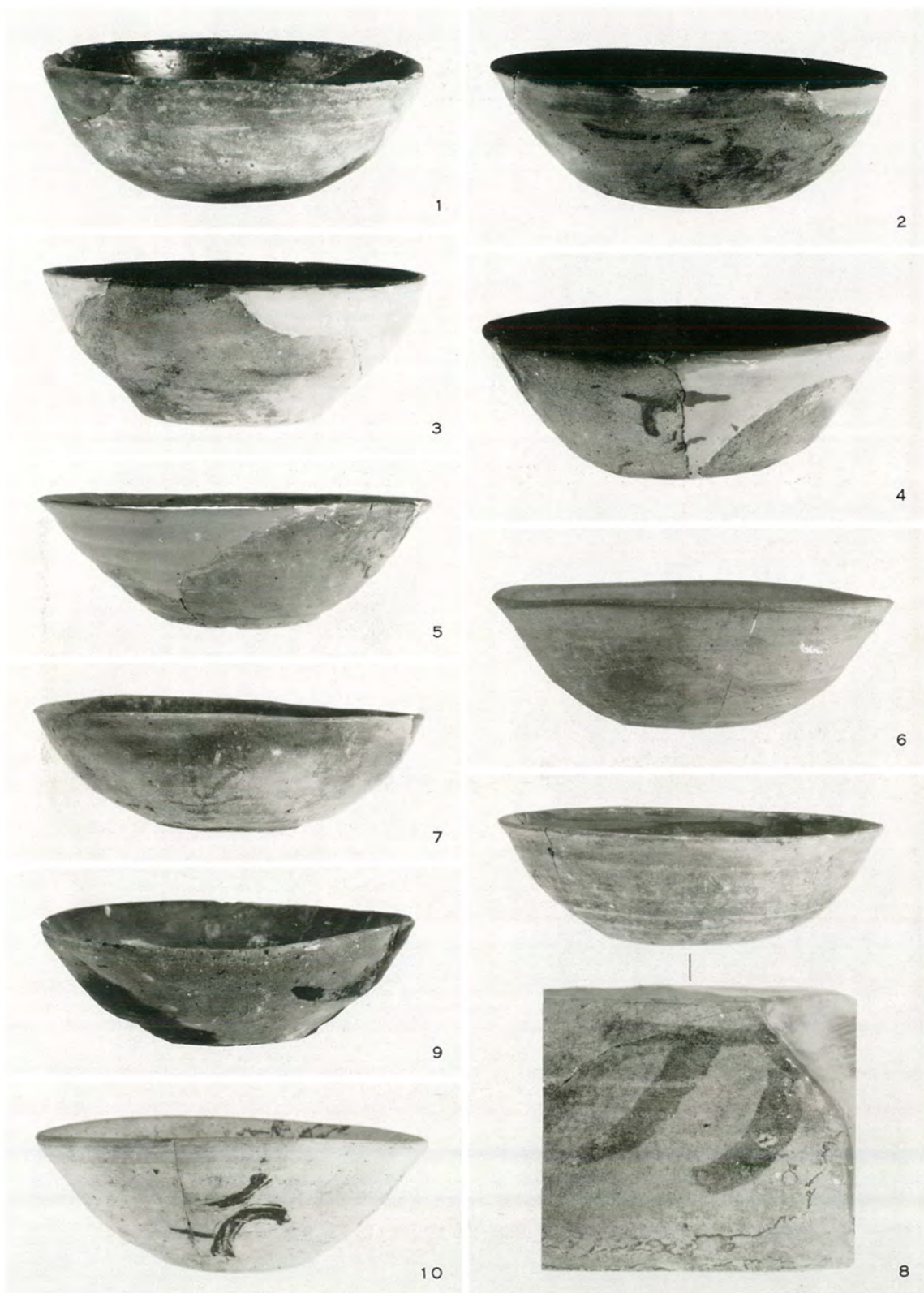
第 52 図版 遺構外出土遺物



第 53 図版 井戸跡出土遺物 1.2 杯 3~9 井戸枳板

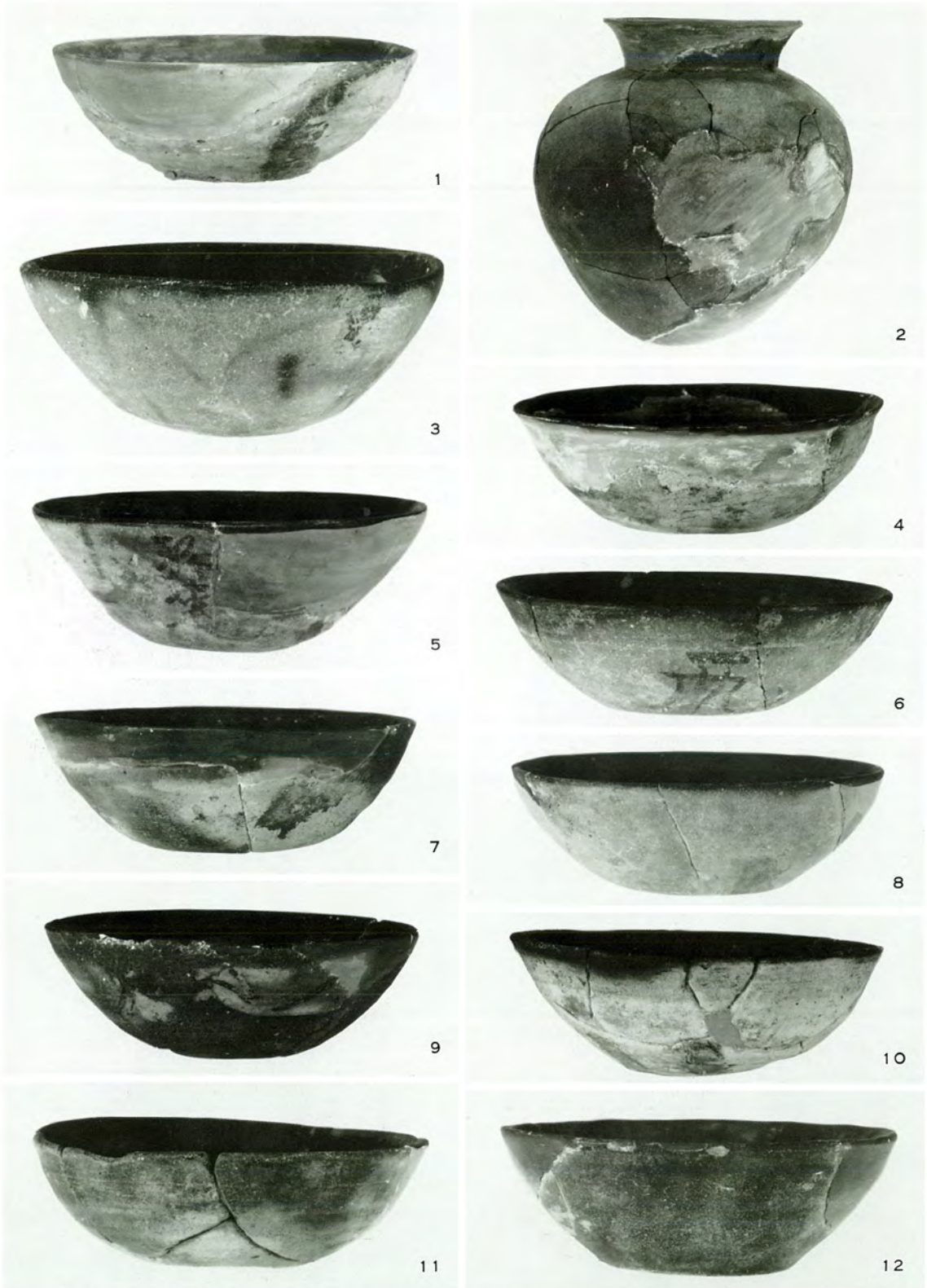


第 54 図版 井戸跡出土遺物 10～18 井戸杵杭



第 55 図版 湿地性遺物包含層出土土器

L-V出土(1~10)



第 56 図版 湿地性遺物包含層出土土器

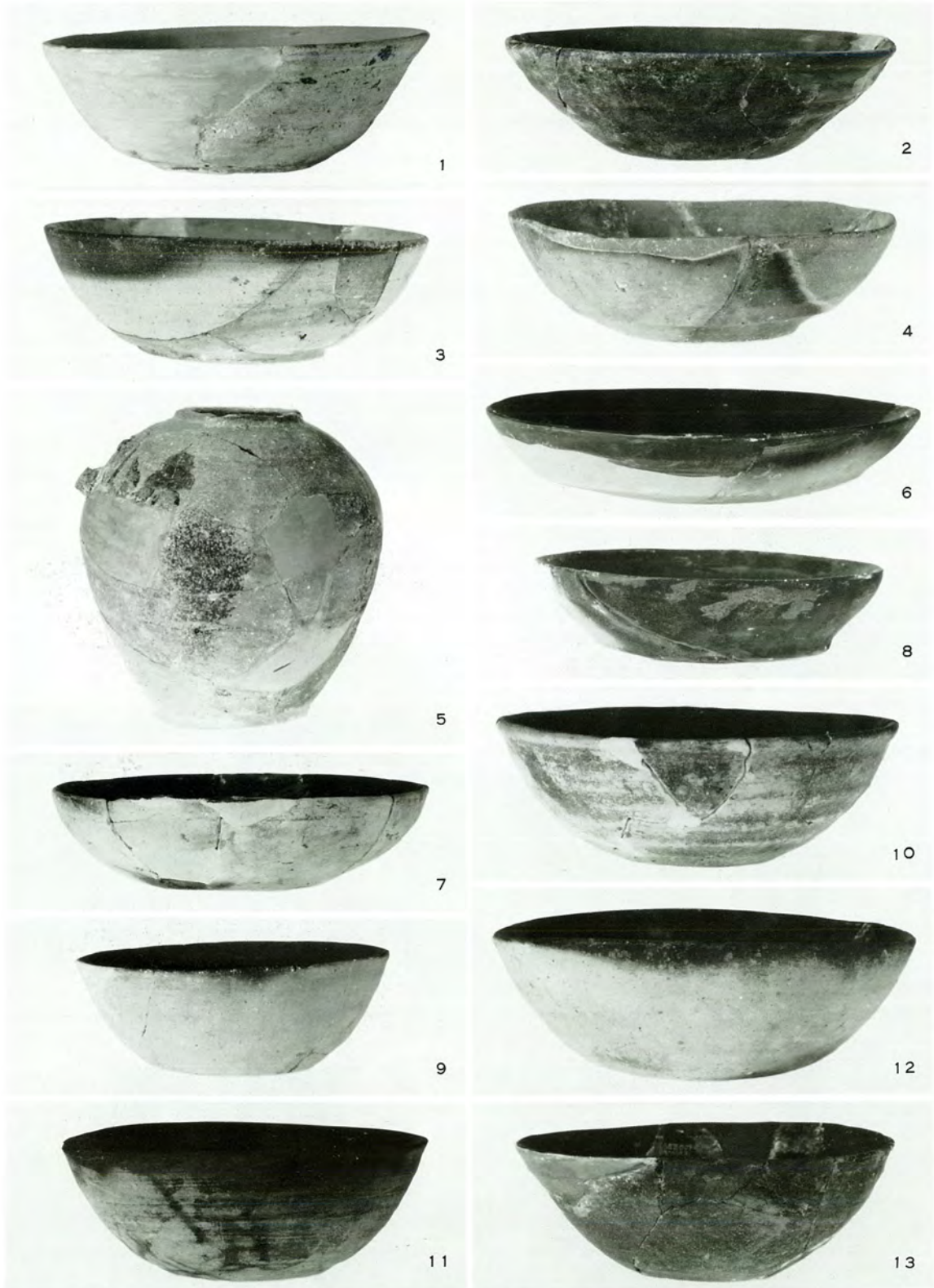
L-VI出土(1~2) L-VII出土(3~12)





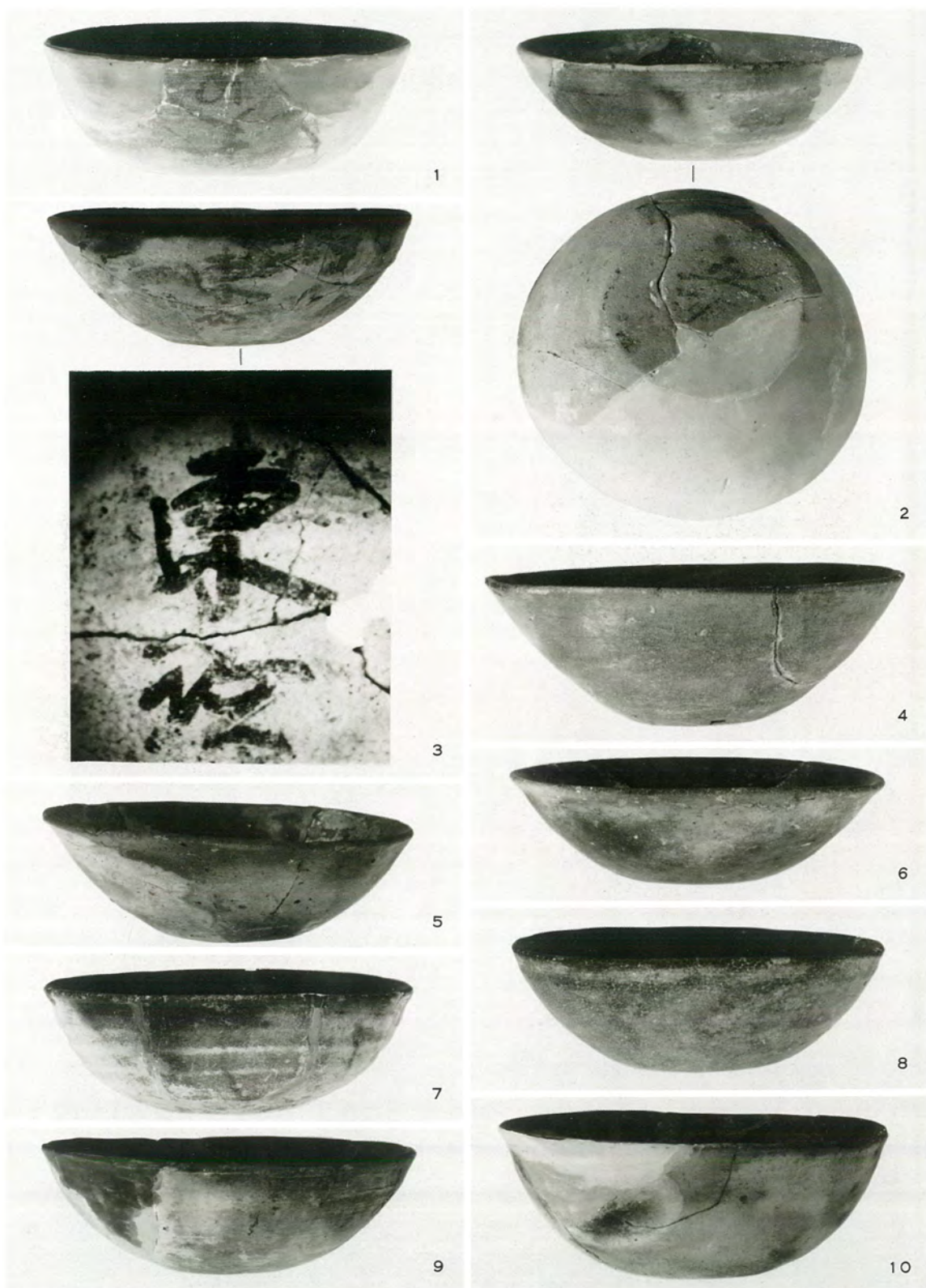
第 57 図版 湿地性遺物包含層出土土器

L-VII出土(1~14) 13-赤外線テレビによる撮影



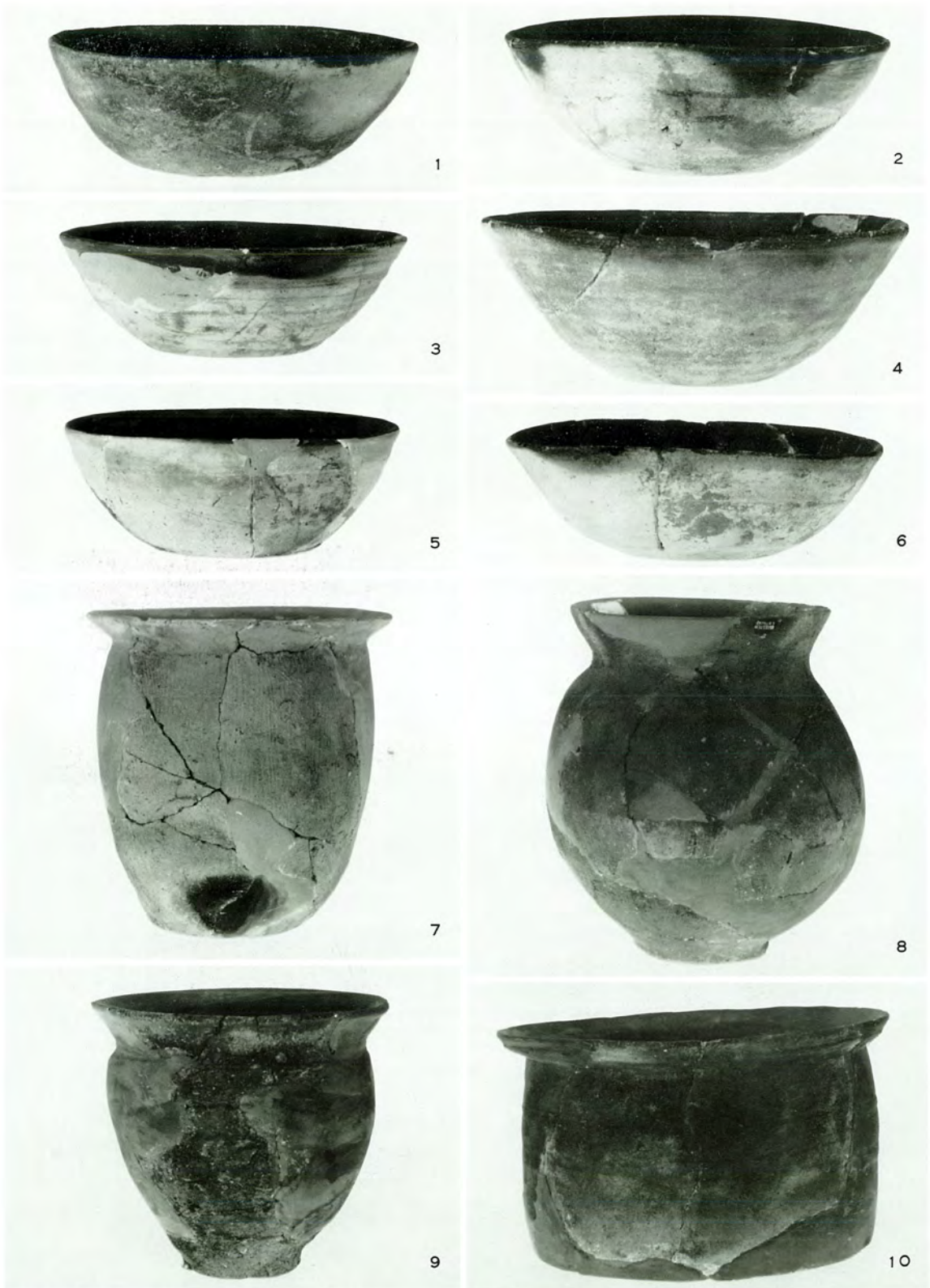
第 58 図版 湿地性遺物包含層出土土器

L-VII出土(1~5) L-VIII出土(6~13)



第 59 図版 湿地性遺物包含層出土土器

L-VIII 出土(1~10) 3-赤外線テレビによる撮影



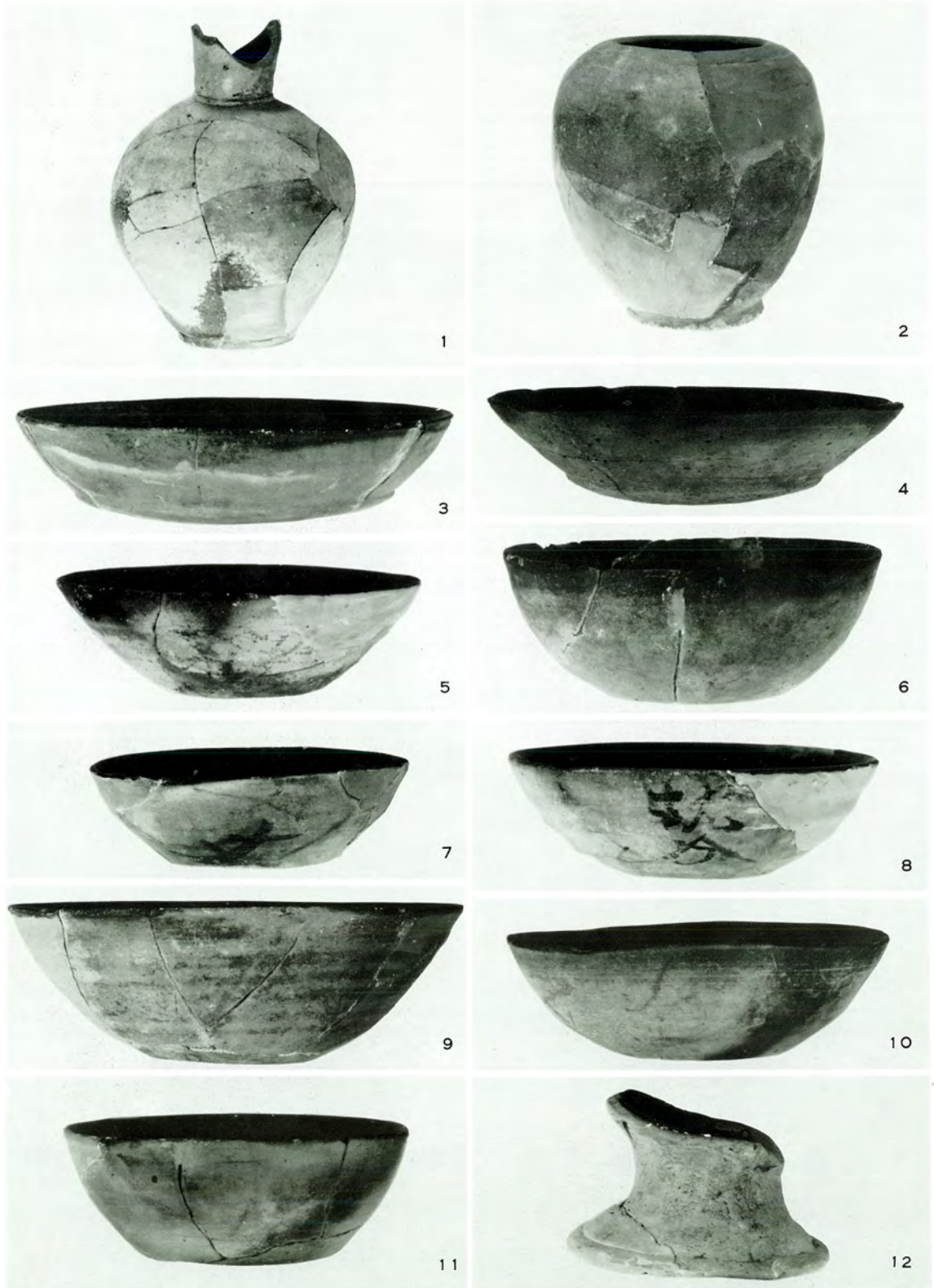
第 60 図版 湿地性遺物包含層出土土器

L-VIII出土(1~10)



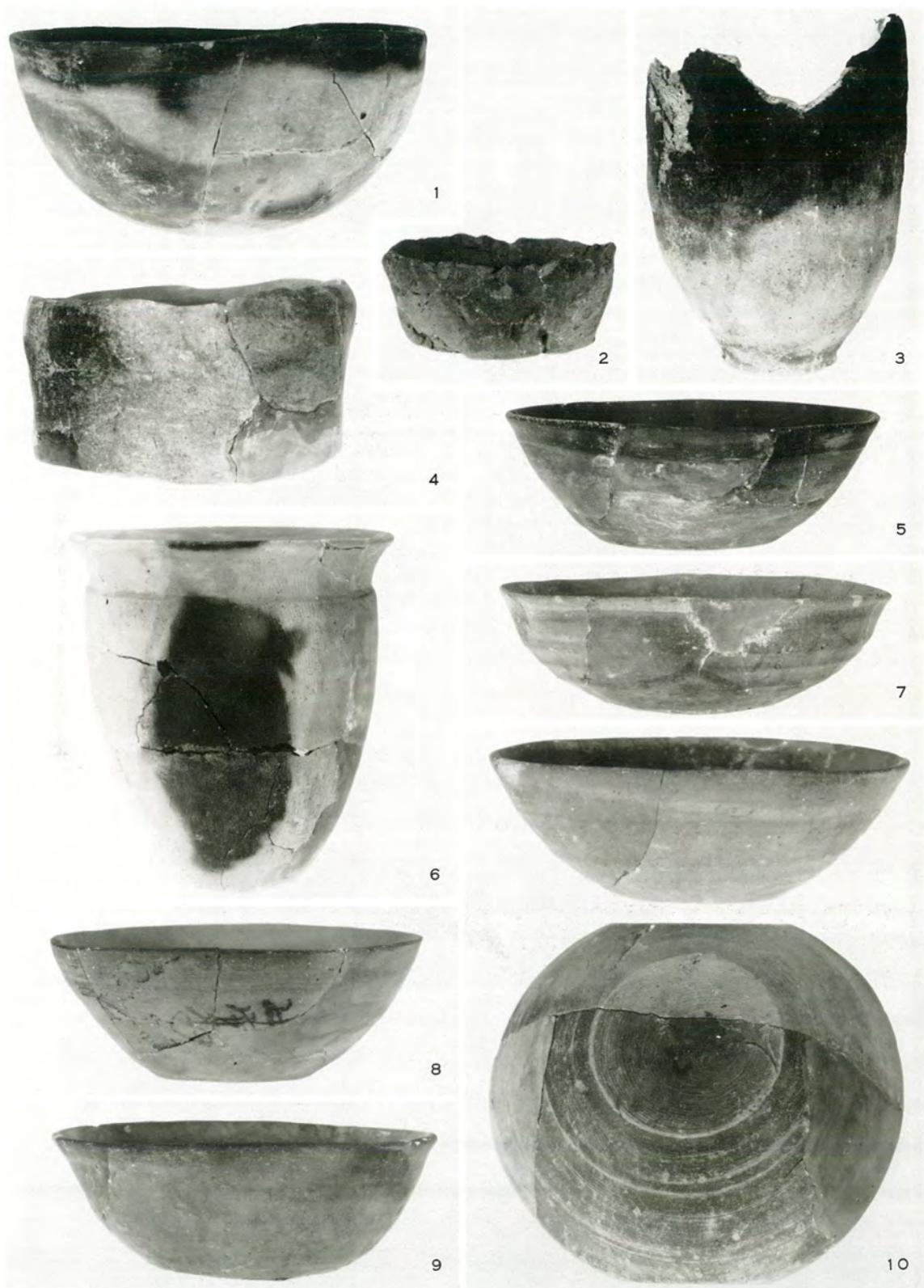
第 61 図版 湿地性遺物包含層出土土器

L-VIII出土(1~13)



第 62 図版 湿地性遺物包含層出土土器

L-VIII出土(1・2) L-IX出土(3~12)



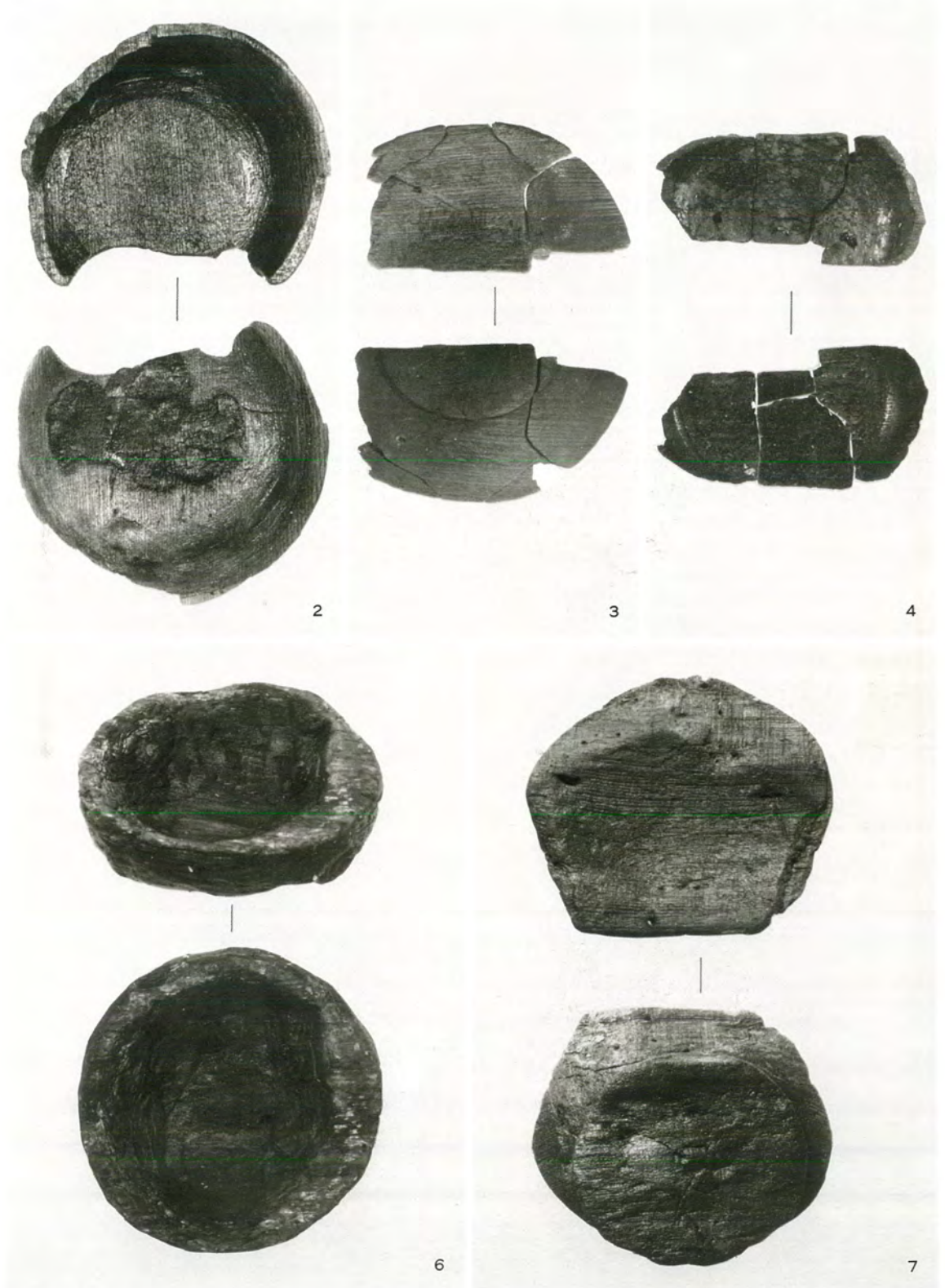
第 63 図版 湿地性遺物包含層出土土器

L - IX 出土 (1 ~ 10)



第 64 图版 湿地性遺物包含層出土土器 L-IX出土





第 65 図版 湿地性遺物包含層 出土木製品



8



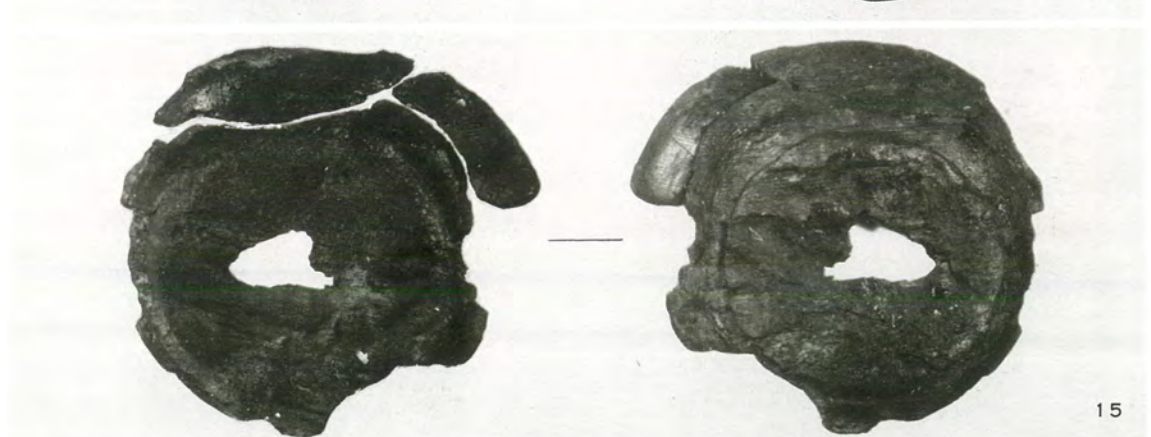
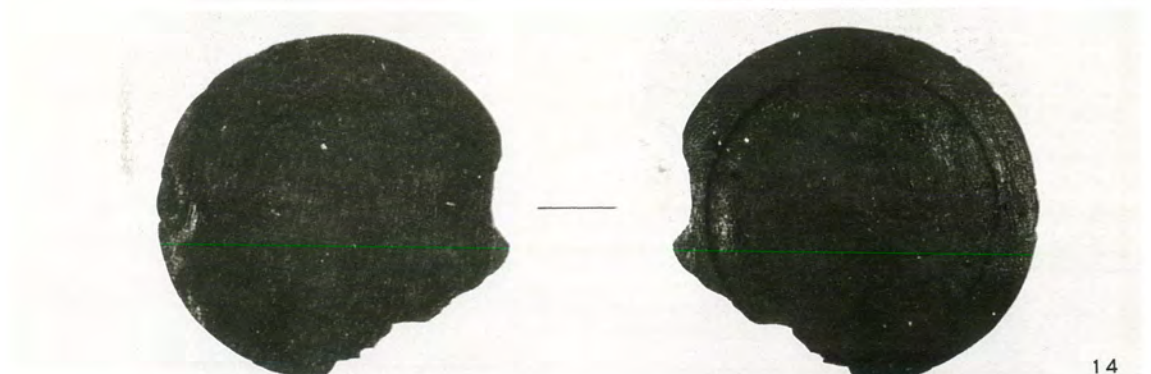
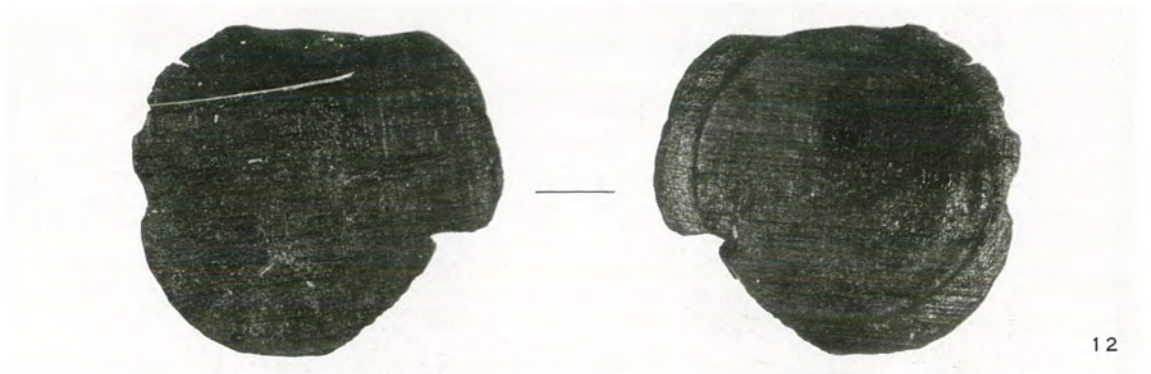
9



10



11



第 67 図版 湿地性遺物包含層 出土木製品



16



17



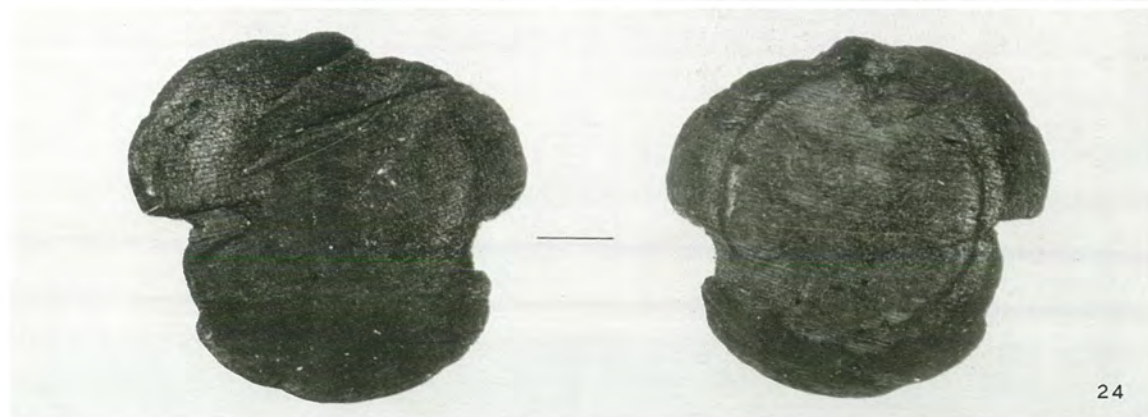
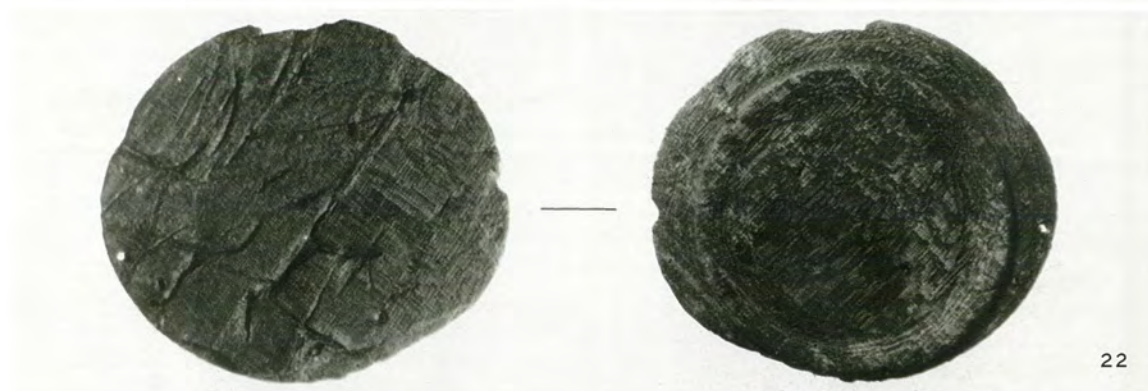
18



19



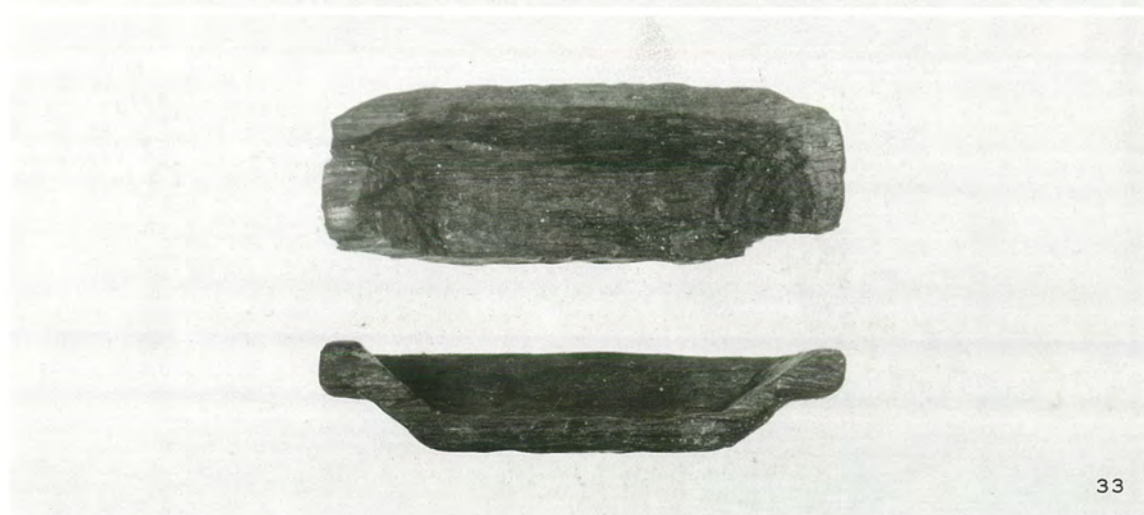
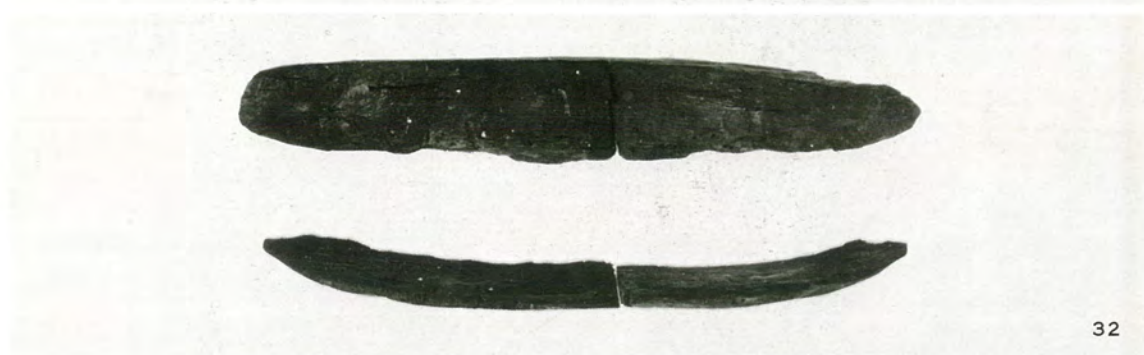
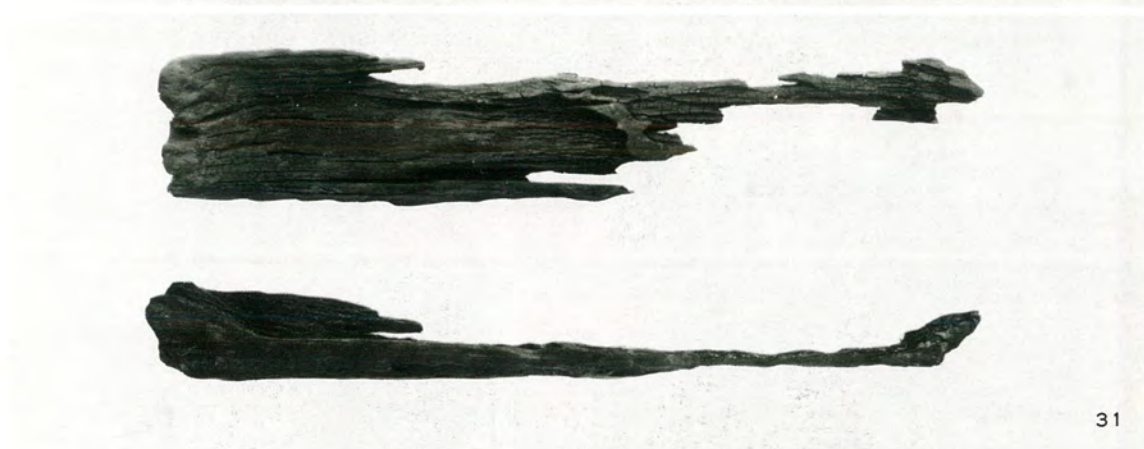
20



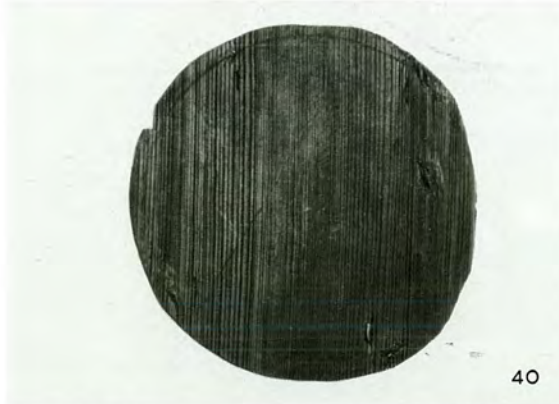
第 69 図版 湿地性遺物包含層 出土木製品



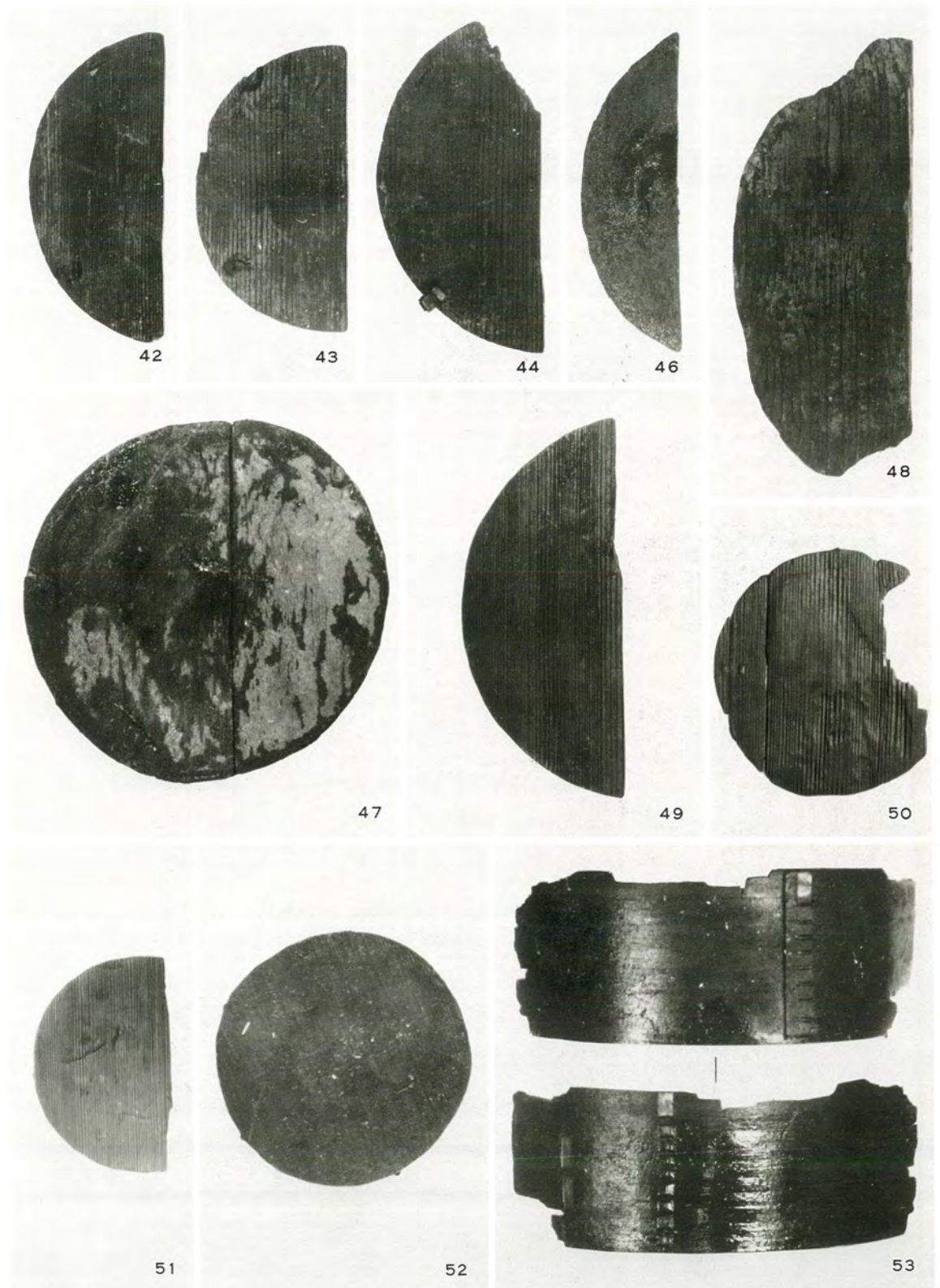
第 70 図版 湿地性遺物包含層 出土木製品



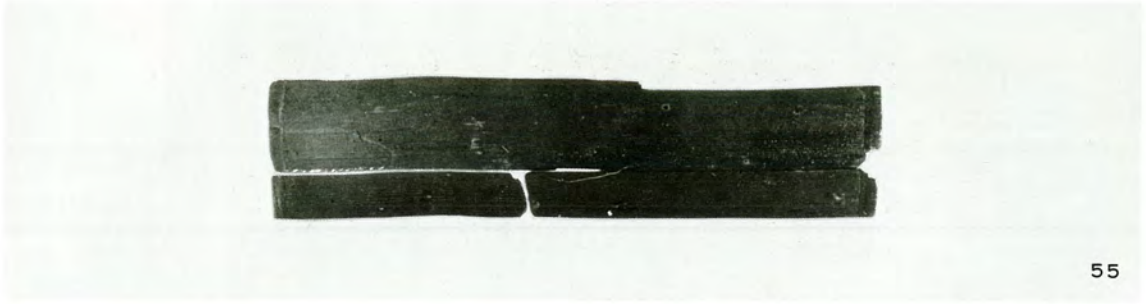
第 71 図版 湿地性遺物包含層 出土木製品

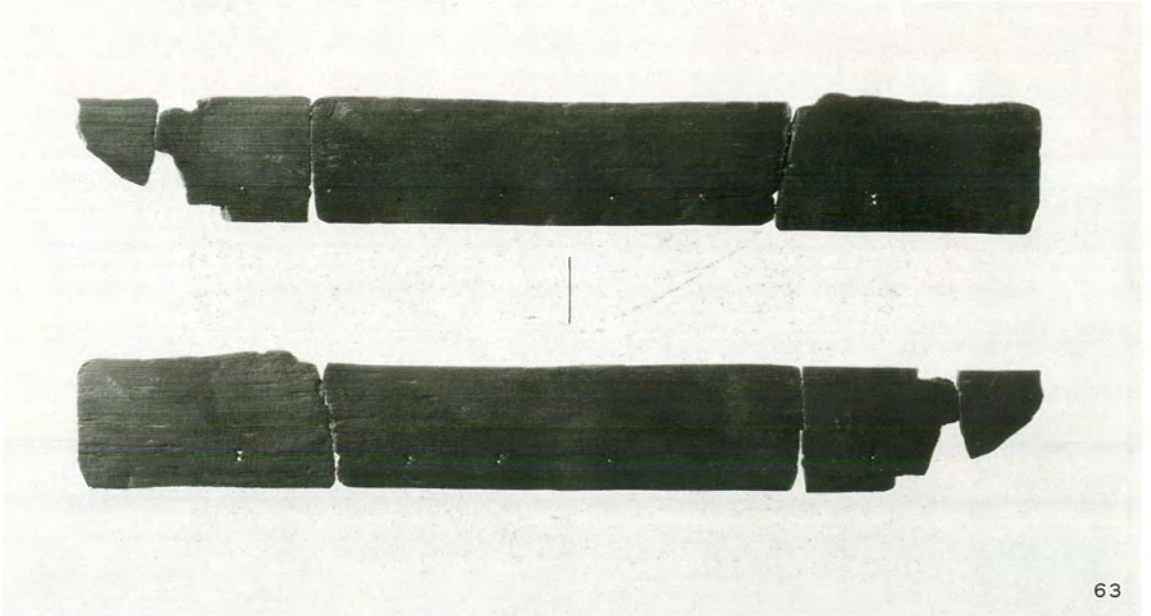
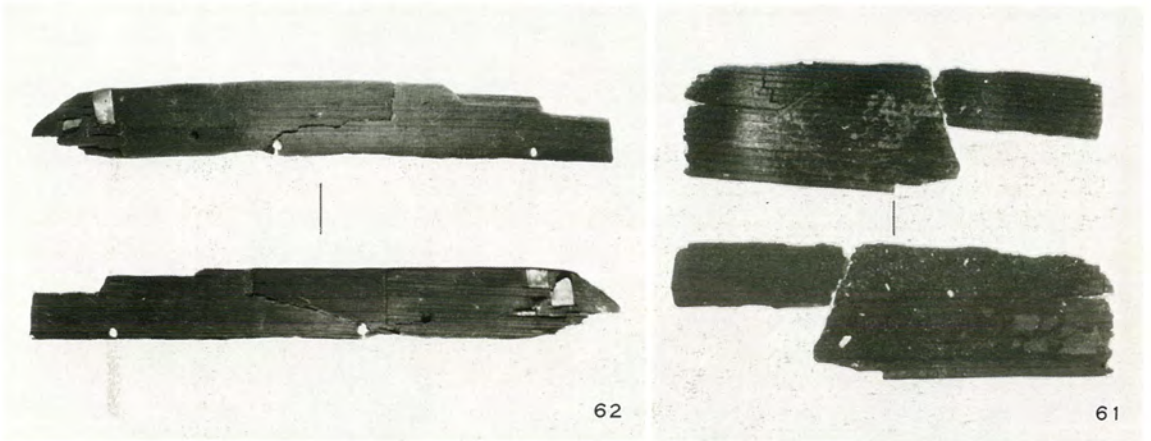
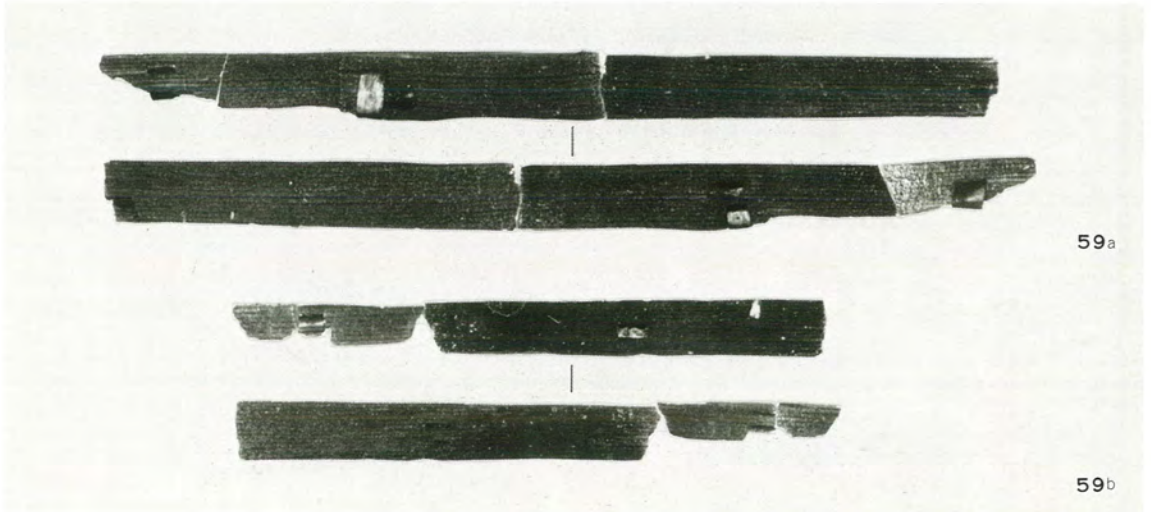




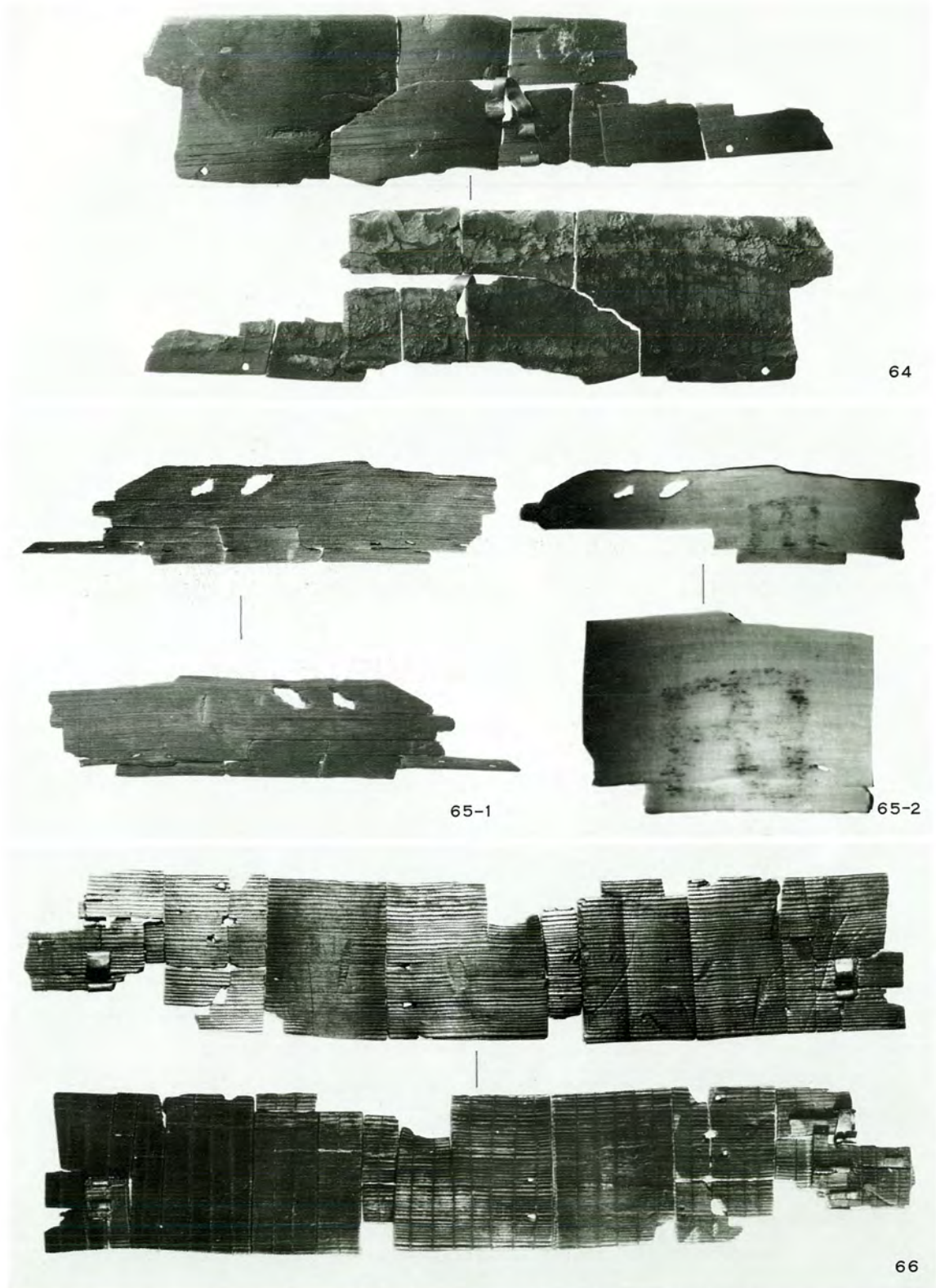


第 73 図版 湿地性遺物包含層 出土木製品



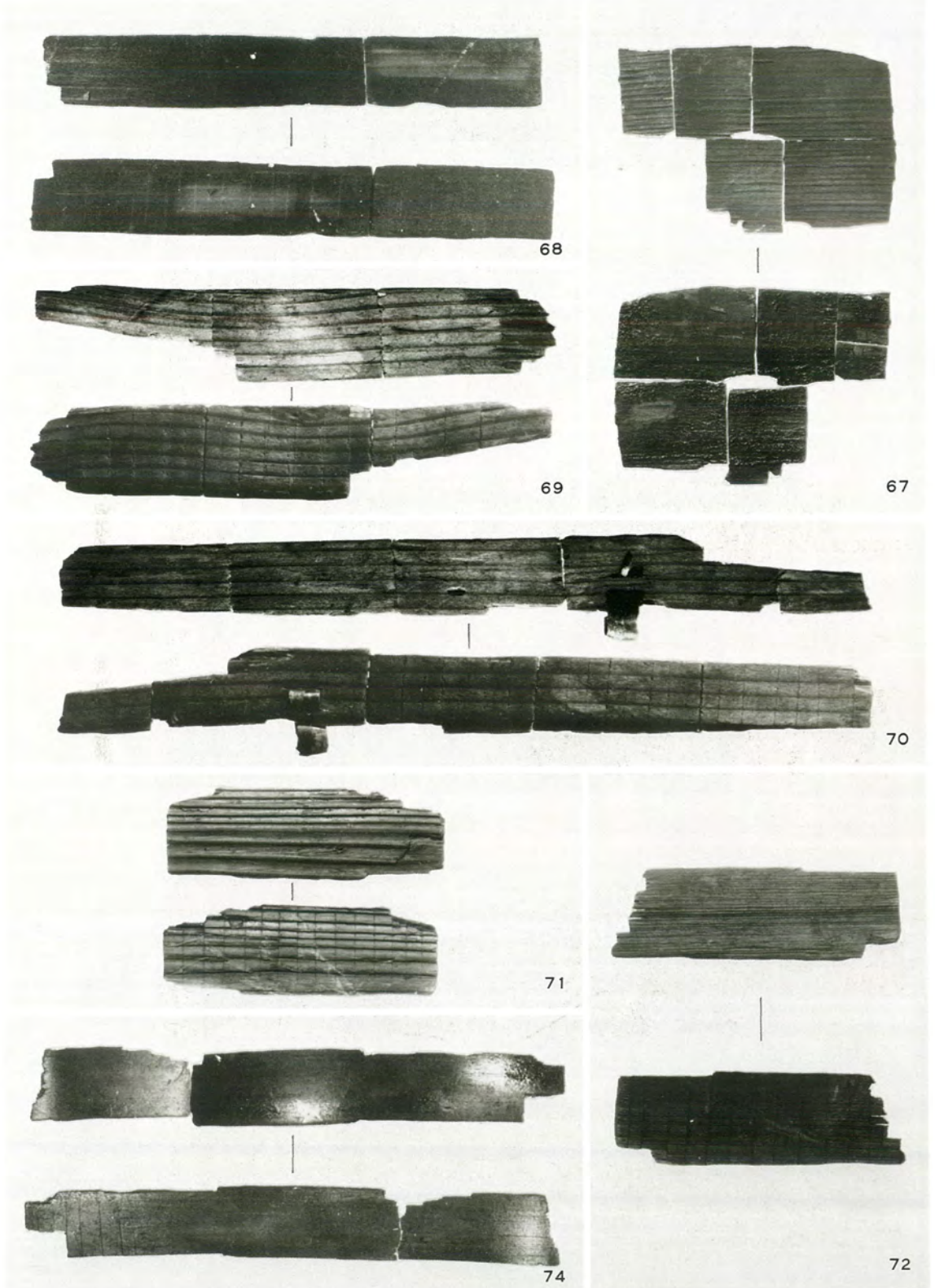


第 75 図版 湿地性遺物包含層 出土木製品



第 76 図版 湿地性遺物包含層 出土木製品

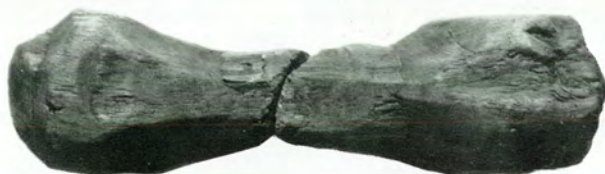
65 - 2 は赤外線テレビからの撮影



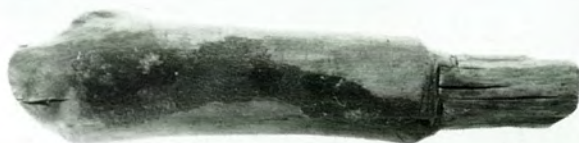
第 77 図版 湿地性遺物包含層 出土木製品



75



76



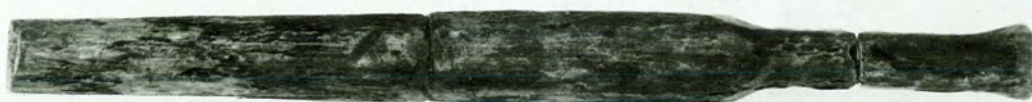
77



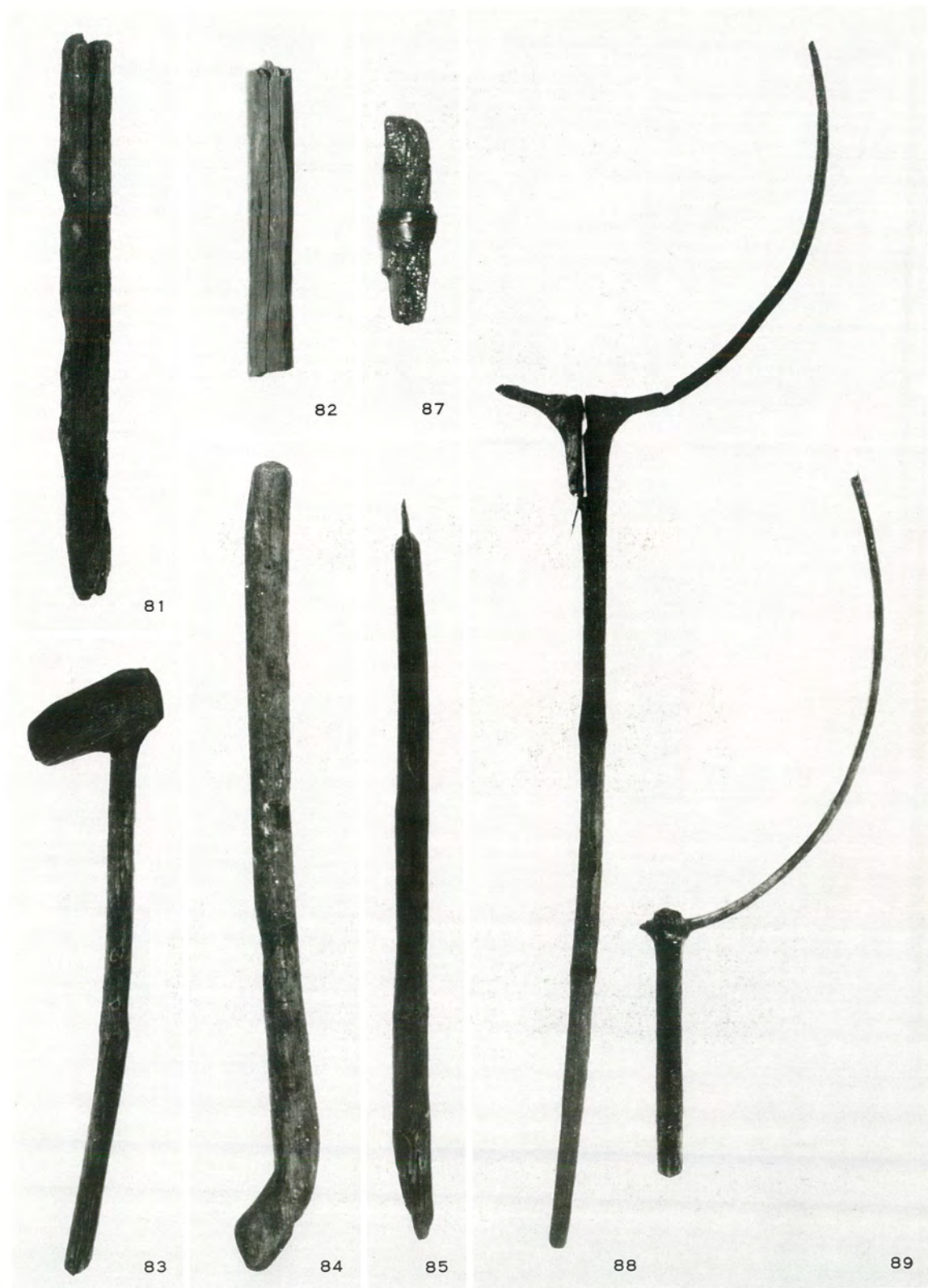
78



79



80



第 79 図版 湿地性遺物包含層 出土木製品



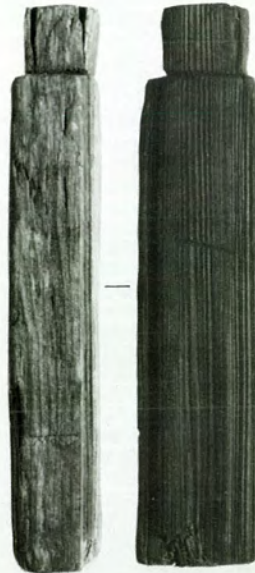
90



91



92

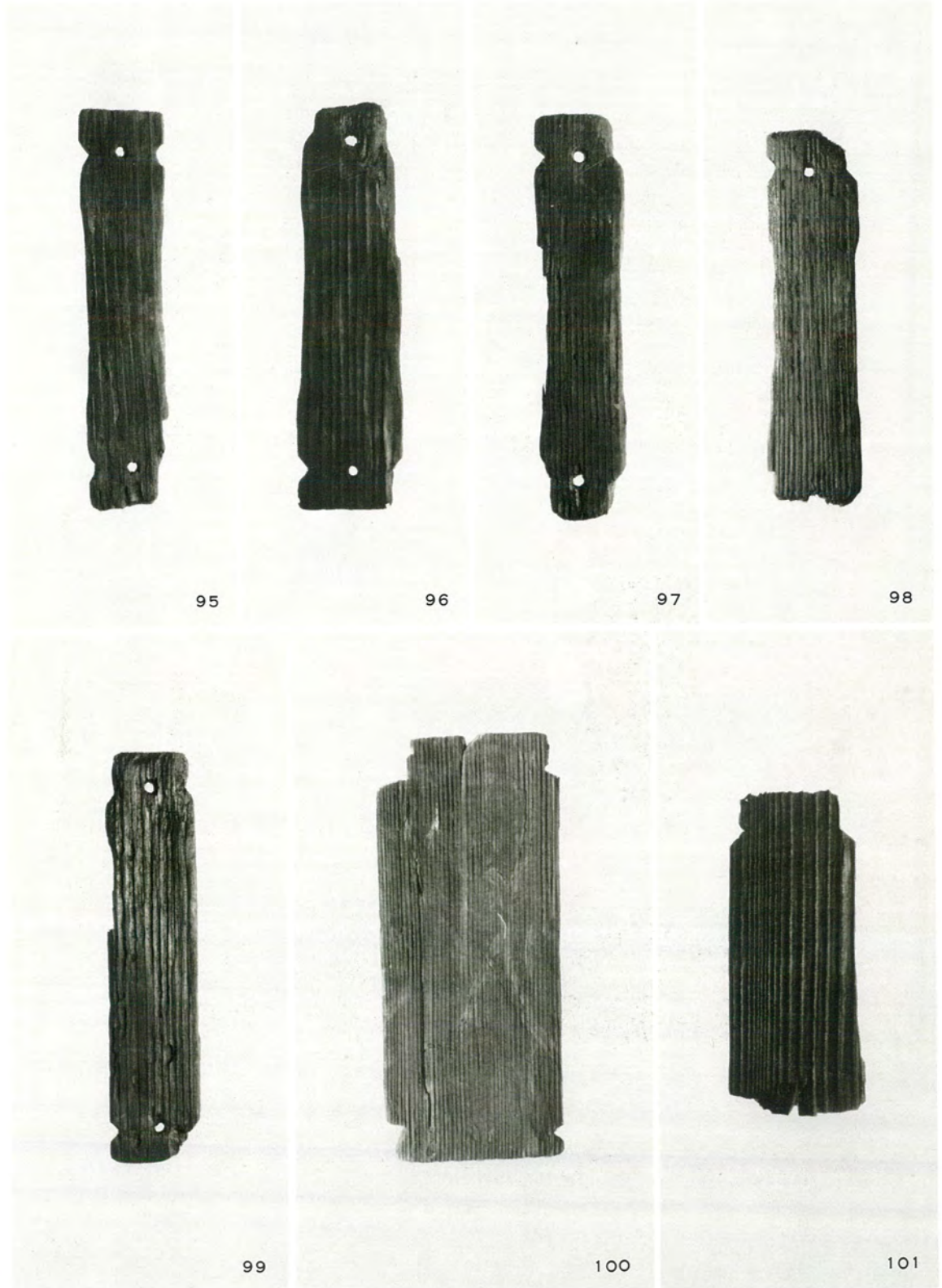


93

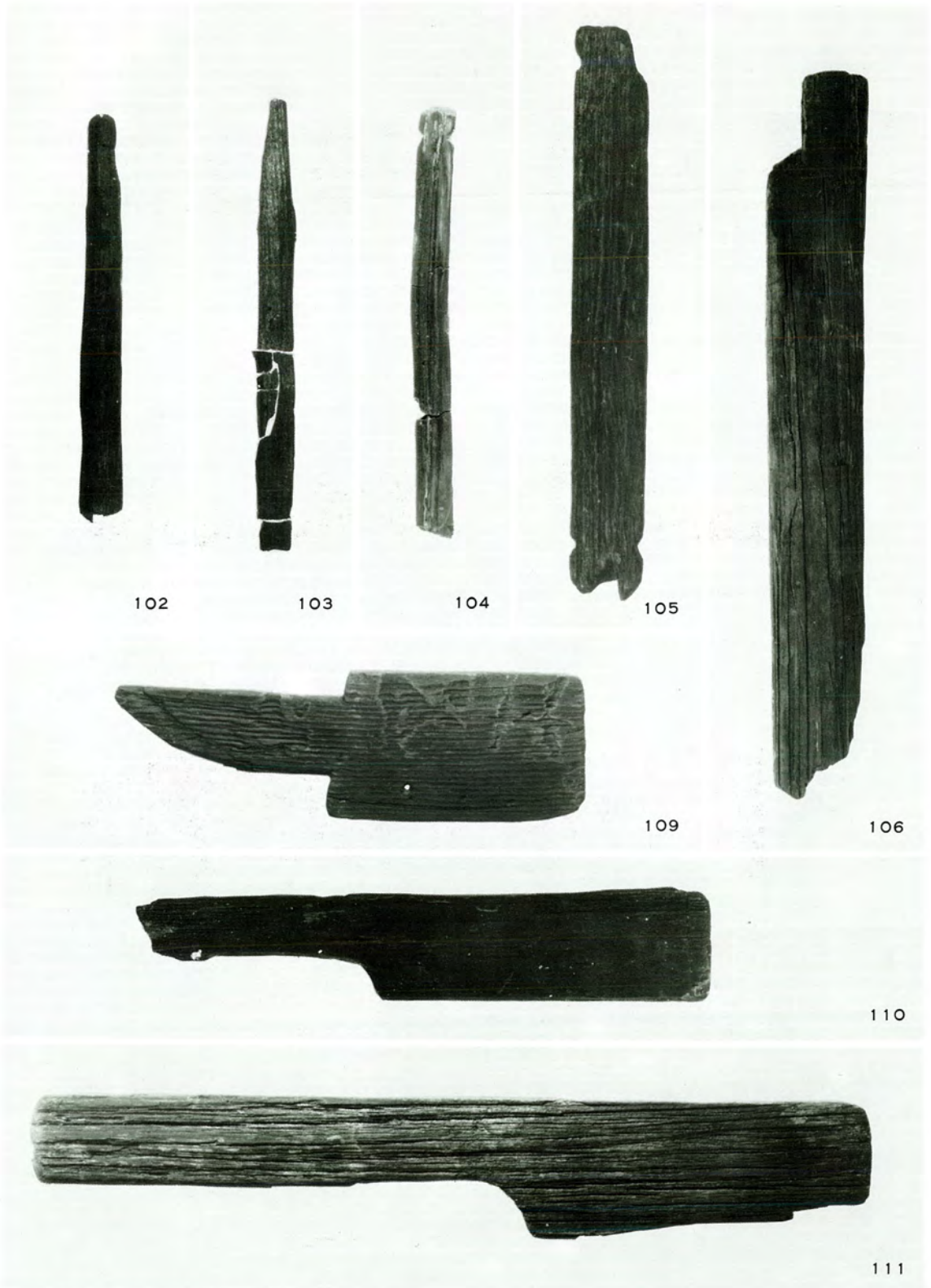


94





第 81 図版 湿地性遺物包含層 出土木製品



第 82 図版 湿地性遺物包含層 出土木製品



107-1



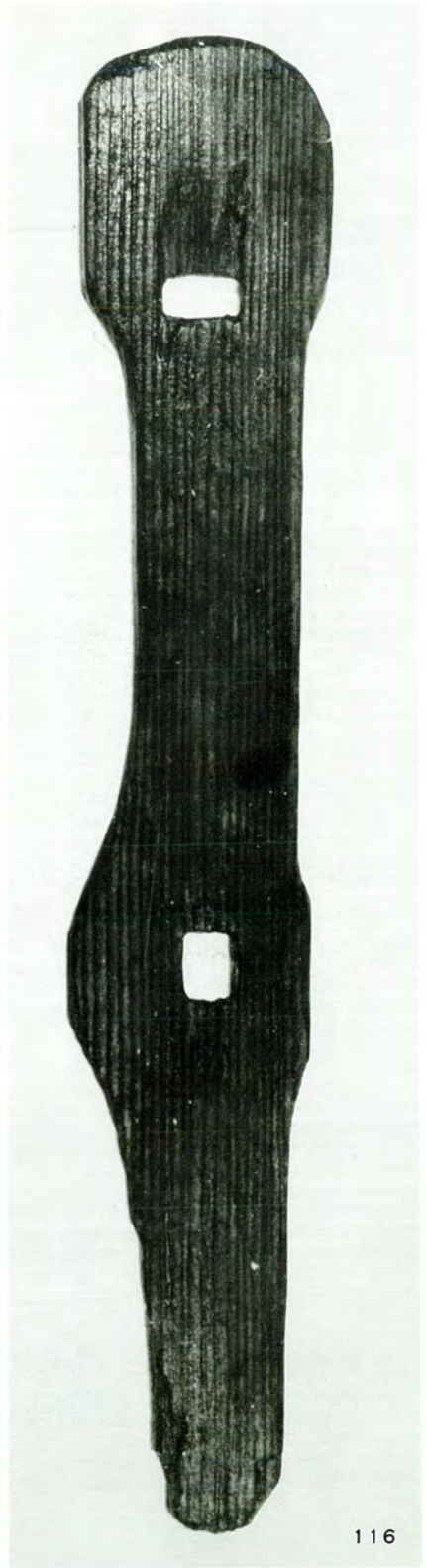
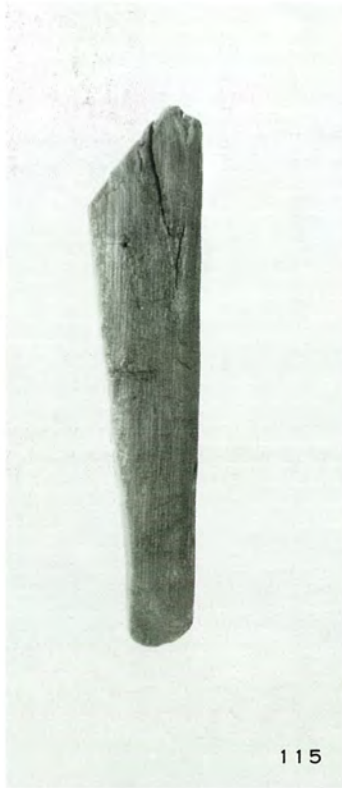
107-2



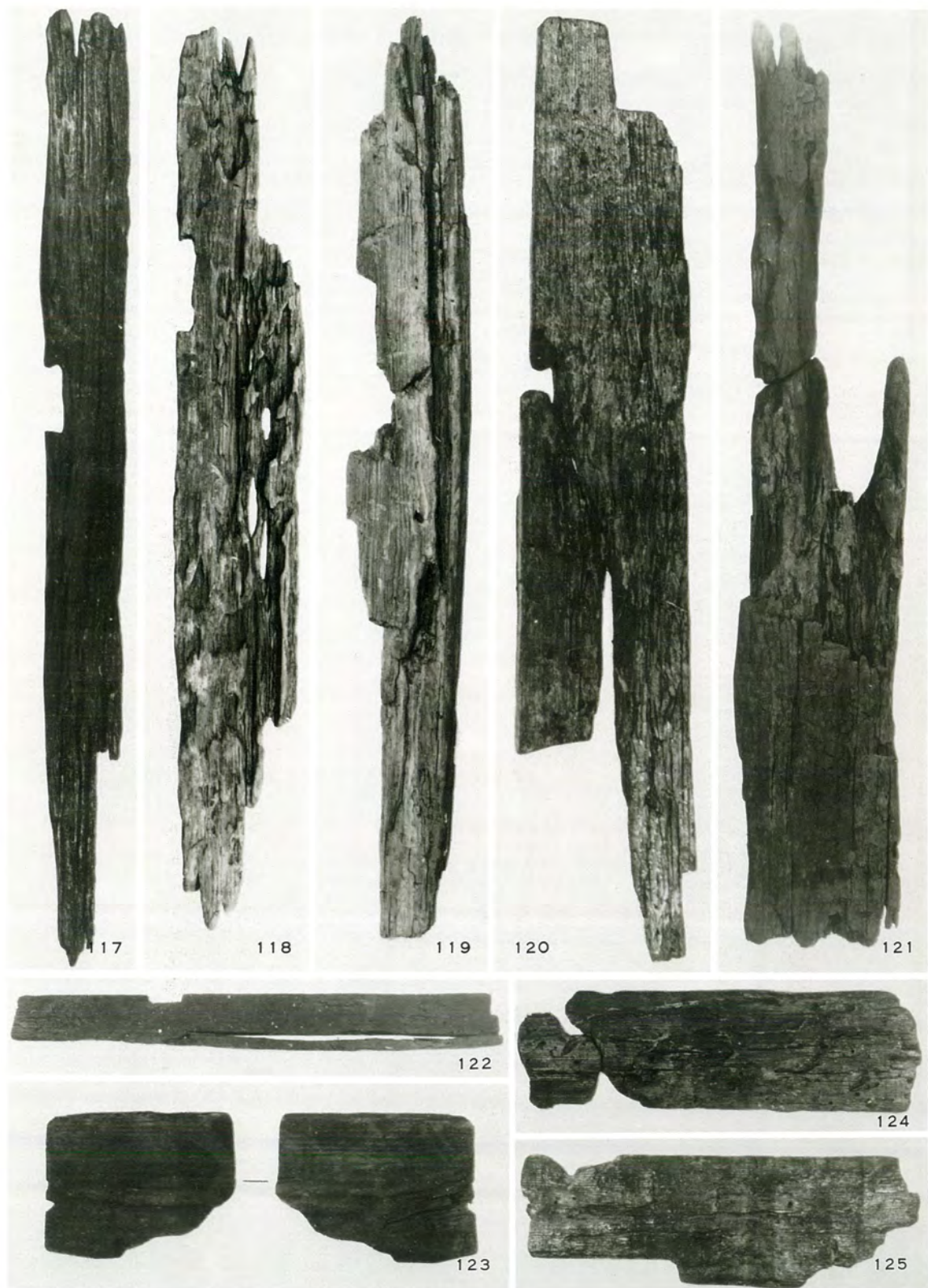
107-3



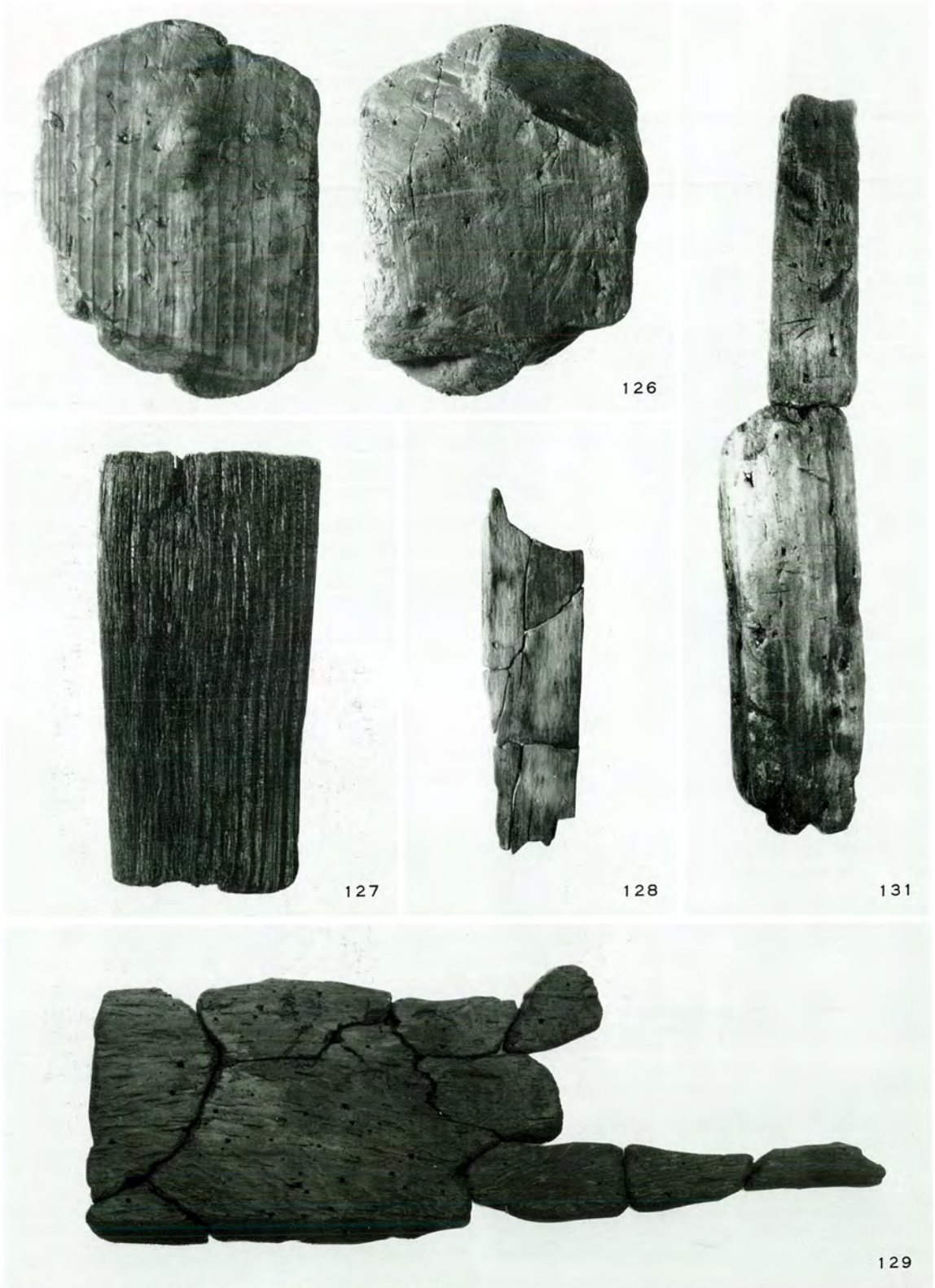
108



第 84 図版 湿地性遺物包含層 出土木製品



第 85 図版 湿地性遺物包含層 出土木製品



第 86 図版 湿地性遺物包含層 出土木製品



132



133



134



135



136



137



138



143



144



145



146





139



140



141



142



147



148



149



150

昭和58年 3月31日 発行

福島県文化財調査報告書第109集

## 東北新幹線関連遺跡発掘調査報告VI

発行 福島県教育委員会

編集 福島県教育庁文化課

(福島市杉妻町2番16号)

印刷所 (有)平電子印刷所 美術写真印刷研究室  
(〒970) 福島県いわき市平北白土字西ノ内13